山岳



Vol.89/1994

Ct 4t





23年間、山岳テントをリードしてきたエスパース。

1970年、カモシカスポーツがオリジナルテントとして開発したエスパース。 吟味された素材を使用し国内での丁寧な縫製で仕上げる製品作りは、 登山家や冒険家をはじめとして各界から高い評価を受け、ベストセラーを続けています。

カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。

カモシカスポーツ

山の店・本店 本03(3371)4333 〒169 東京都新宿区高田馬場3-3-3

山の店・横浜店 ☎045(212)2044 〒231 横浜市中区桜木町3-11





- ●AMI0:30~PM8:00(月~金)/AMI0:30~PM7:00(土·日·祝)
- ●定休日/日曜日(4月・7月・8月・12月は定休日なし。他の月は最初と最後の日曜日は営業します)

Щ

岳

一九九四年

もう一つの登山史―地図作りの登山―	・タシの初登頂 日印合同・広島山岳会ヒマラヤ登山隊一九九三の記録	チョモコンブ条 - 中国測からり別登頂の記録	データからみたマッキンリーの気象 JAC第四次・第五次気象観測の記録 大 蔵近代アルピニズムの山岳美観―その成立の一側面― 中	ラスに囲まれた山村が生まれるか大 森上名 7 条 8 0 9 5 1	旅家山―折身真公月登山器こよせて――――――――――――――――――――――――――――――――――――	山 岳 一九九四年 目 次
孝勉	青	和圀	喜 純	弘	信	
代 — 訳 : : : : 167 143 124 109	實 : : : 100 92	男 明 : : 77 68	福 : : 56 41	郎 : : 32 2	〕彦	
代 — 訳 :: : : : : : 167 143 124 109	100 92	男 : : 77 68	56 41	郎 : 32 2	〕 彦 : 3 7	

英文梗概·	本山岳	支部だより		追悼		図書紹介
英文梗概日本山岳会青年登山懇談会… A21大学山岳部へのアンケート調査集計報告(抜粋)日本山岳会青年登山懇談会… 32山岳図書目録日本山岳会	- 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	会務報告(一九九三年六月~一九九四年五月)28支部だより	*	正倫氏(小笠原岩維)、会報「山」計報・追悼文一覧と出、、という、という、という、という、という、という、という、という、という、とい	*	ワグマ』(北原正宣)、『東ヒマラヤ探検史』(重廣恒夫)、会報「山」追悼文一覧年の歴史と現在』(松本徭夫)、『滅びゆく森の王者 ツキノワグマ』『SOSツキノから近代登山の事始めまで―』(湯口康雄)、『屋入島の山岳 近代スポーツ登山65

也寿、佐藤知恵子)アルバイン・スケッチクラブ(田中邦彦、塔田表紙挿画・本文中カット

206 5 207



ところが、

昭和五十一年(一九七六)国土地理院発行の二万五千分の地図をみると、

上高地に牧場があった頃

上高

地の範

織内信彦

明神 九・五景で現在と殆ど変わらない。以上の経過からすると当時は槍の方が穂高の最高峰より若干というか、かなりと 高 ル りも下流の現在の温泉ホテルのところにも上高地温泉と表記されています。この地図は今日では歴史的なレア・オー 発行で、それには河童橋のあたり、 私がはじめて上高地へ行った昭和二年(一九二七)に買った陸地測量部五万分の一の地図は大正四年(一九一五) <u>ا</u> うか高いことになっていたようであります。 連 Ŀ 峰 岳は無名峰になっています。 高 の最高峰になっているが、 マップではないだろうか。たとえば西穂高のピークに前穂高と記され、 [地に牧場があった頃というと、上高地とはいったいどこからどのあたりまでを指すのかと言うことになります。 それから涸沢岳と思われる地点に奥穂高嶽と記されており、高さが三一〇三片で穂 本当の最高峰である奥穂高岳はこの地図には明記されていません。槍ヶ岳は三一七 いわゆる小梨平の地点に上高地と小さい字が記入されています。それと河童橋よ 今の前穂高は穂高嶽(三〇九〇㍍)、 0

大正池の付近、

小梨平はもと

ません。 白付近にある上高地の記入は史跡・名勝の記号がついているので必ずしも地名を表示しているのではないのかもしれ たように、大正池から徳沢を経て奥又白までをひっくるめたかなり広い地域を上高地と表示しているのです。但し又 感触からすると、上高地といえば河童橋、 明神池からさきの地域は徳沢であり、またそのさきは横尾ということになるのですが、最近の 徳沢の上流の奥又白、 中又白のガレの末端あたりまで大きな活字で上高地との記入がみられます。 小梨平を中心として下流は大正池の付近まで、上流は明神池までを呼びた 地図では 私の ま言 期

めて私が上高地に入ったのは昭和二年の夏だったから六十六年前になりますが、 いわゆる小梨平とかそのまた下流域の大正池付近には牧場らしいものはありませんでした。 その時には徳沢に

上高地入りの昔話

路が続き、その途中の左手に「秀綱奥方遭難の場」という札の立っているところがありました。 ***。 したのは更に後のたしか昭和八年だったと思います。島々谷を登って行くとしばらくの間木材を運び出すための木 てなんともよかったですね。バスが通るようになったのはそれから三年くらいたってからのことで、 .飯田町でした。早朝松本から島々へ電車で、それから徳本峠登山口まで二頭立ての馬車に乗る。これが風情 昔話ばかりになって恐縮ですが、 その頃の上高地入りについて少しふれてみたいと思います。 当時中央線の始 上高地まで開通

だのが三木一族で、それで姉小路を名乗ったといわれています。ところが豊臣秀吉輩下の軍勢に攻めたてられ秀綱 ナ) のことで、飛驒高山の松倉城主 姉小路秀綱ともいう。どうして姉小路というお公卿さんみたいな名なのかというと、三木一族が高山一円を支配する 小路という公卿が、国司つまり京都から派遣された地方官として宰領していたんですね。 (五万分の地図「三日町」の高山市外松倉観音の東方高地に記念碑の記号がある)。 その後を受け継

話が横道にそれるが秀綱奥方遭難の件について触れておきたい。秀綱は三木秀綱

(安曇村誌によるとサンギヒデツ

家は 徳本を越え島々に出る途中で山麓島々の杣人、 うも目立ってい れています。 あと長 の露と消えてしまうという物語、 て徳本峠を越え島々に出る。こんな約束で別行動をとることになるのですが、奥方はさぞ大変だったろうと思います。 現 城 在は梓湖 気を明け V 間奥方の祟りを受けて、 渡し けないと秀綱は白骨を廻って梓川ぞいに島々で奥方を待つ。奥方は上高地を通り、たぶん白沢を登っ へ出る途中の祠峠の付近で土民に討たれてしまう。奥方の着衣などをはぎとった島々の杣人は、 信 濃の縁者を頼って逃亡する。 ほんとうかどうか知りませんがいろいろと奇妙な出来事が後を絶たなかったと言 伝説といってよいかも知れません。 山仕事の荒くれ男に見つかったのが不運というか、彼等の手で島々谷 秀綱と奥方、侍女など小人数で中尾峠を越えようとした。 秀綱も大根川(大野川) から野麦街 道 0

誌 縫いとりをした打掛けや小袖、 社に奉納し懇ろにその霊を祭ったとあります。 飛州軍 展示されているものも見るからに厚ぼっ 高地誌の研究者横山篤美氏によると、島々では奥方の後遺症から逃れるため、はぎ取った奥方の着衣類を島 更に古いものでは第七代飛驒国代官長谷川忠崇が将軍吉宗の命で著した『飛州志』(文政十二年) 語 のあらましは以上のようなことですけれども更にくわしいことに興味をもたれる方は 乱 記」をみられるとよい。 懐剣、 幸いその両資料とも図書室の山崎安治文庫に収蔵されています。 鏡類が展示されています。 たい 私はその遺 もので、 夏の終わり頃にあれを着て中尾峠を、 品類を安曇村資料館の展示室で観てきました。 しかし打掛けは武家時代の礼服のようなものである 昭 更に徳本峠を越えて 和 + およびその附 Ŧi. 刊 0 安曇村

昭和初期の上高地

島々谷の難路を歩けたものだろうかという疑問も残ります。

橋のたもとに丸西、少し行ったところに西糸屋があり、 昭 和 一年の七月に徳本峠を越えて入った上高地は、 旅館といえば五千尺、 丸西は屋台店のような小さな小屋がけの店で、 清水屋だけ、 そのほかに売店として河 草鞋を軒先か

堂を開業し、 称で呼んでいたものです。小梨平の天幕で大雨に降られたりすると、食堂の裏にあった囲炉裏端へ逃げこんで泊った 水屋で調理人をやっていたことがあり、松本では魚屋の店を持っていました。学生たちはみんな「いわな」という愛 小梨平で天幕生活をしていた学生たちに喜ばれた。ここの親爺さんは鳥居松次郎という人で若いころ清 ラムネ、 キャラメルや穂高餅というおはぎみたいな餅を売っており、二、三年して売店の横に小さな食

ものです。

きコーヒーなど淹れてもらいながら話しこんできます。 親爺さん夫婦や娘さんや息子もよく知っていたので、最近でも山岳会の山研に泊るときなど必ず白樺荘の売店をのぞ そしていまの大きな旅館に発展し白樺荘となるわけです。私はその発展過程をよくこの目でみていましたし、 してきたことがありました。声をかけた学生は早大の部員でした。小さな売店だった丸西がやがて白樺食堂となり、 るときに声をかけられ、その学生とふたりして夜通し歩いて槍へ向かい、 この囲炉裏端でいろんな大学の山岳部の連中と知り合いになり、時には晩飯に食堂のカレーライスか何か食べてい 肩の小屋へ着いて朝を迎え小槍を登ったり

中島政 間違いがなければ 話をすることをこの西糸屋がやっていました。西糸屋は焼岳の肩のところにも小さな小屋を出していて、私の記憶に した。片脚がないけれども松葉杖を使って焼の往復はもちろん、話によると常さん(内野常次郎) て前穂高の頂上まで行ったことがあったそうです。 西糸屋はやはり売店でしたが丸西よりは大きくて、店先には上高地案内人組合の看板が掛けてありました。 太郎、 今田由勝 何かの事故で隻脚となった当時のご主人・奥原さんの弟さんになる人がその小屋番をやって 有明の大和由松、それから地元島々の上條孫人、村上守などの名うての案内者を登山客に に同行してもらっ 飛驒の ま

た。前穂高の下又白谷でパイオニア的実績を残しまた登山医学でも先鞭をつけた篠井金吾氏らの活躍の拠点です。 川というせせらぎ、 小梨平にテントを張っていると、初夏のころは小梨の花が散ってきて、それはいいところでした。すぐそばに清水 六百山の下を流れている川で、 水車が廻っておりそのまた少しわきに東京医専の診療小

術のエキスパ になった)、山 キャンプや旅館に無料で配っていましたね 梨平には、 上高 ート小秋元隆邦というような記者たちと親しくなりました。 本照 徳富蘇峰 のニュースは (のちにNHKのアナウンサーでベルリン・オリンピックの放送で活躍した)、アールベ 主筆の国民新聞が上高地支局という天幕を設けていました。 もつ ぱら国民新聞が独占していたように思う。支局に詰めていた楠瀬 国民新聞はがり版で上高地ニ 朝日や東日などはいなか 正澄 1 1 ルグスキー のちに スを発行 0 たよ

結果い です。 ので、上高地へ行くとよく招かれて湯を浴びたり、りっぱな晩飯をご馳走になったりしたことが 高 治三十八年 (一九〇五) 土地案内所の看板があったように思います。 話がやや前後しますが、 まの 温泉ホテルと清水屋に分かれた。 に創立された上高地温泉株式会社の創業者の一人であり初代社長についた青柳尭次郎 五千尺もはじめは五千尺養老館という看板を掲げており、 上高地温泉株式会社が後に清水屋となり、それがまた関 私と東京農大で同期生だった青柳競君が戦後温泉ホテルの社長になっ また松本の駅前に あります 係 者 も養老館と上 が、 間 0 彼 紛 争 は た 明

何もしないでおいたものを終戦後営業をはじめ、 やっていたのでしょう。 梨平)へあと一里 また、徳本峠から降りて来たところに茶店があった。吉城屋です。大福もちのようなものを売っていた。 (四*。)という格好のところなのでよく利用されていた。吉城屋というのだからたぶん 隣り合っている明神館は徳沢園の上條喜藤次さんの長女の一家が昭和五年ごろ小屋だけ建て 現在はそのまた娘さん (喜藤次さんの孫) の一家が経営してい 上高地 0)

最近吉城屋を合併したようですね。 昭 和 二年は秩父宮殿下が槙さん、

登られた。 L れ Vi た年であります。 建物を建てて殿下をお泊めする手筈を整えていました。 常さんなどもお 私はその年の七月下旬に前穂高から槍へ縦走したのですが、 供をしてい 早川さん、 る。 私 0 方が 岡部さんらの案内で天狗沢からジャンダル 足先に、 縦走したことになりますが、 殿下はたしか八月の末になってから ムを経て槍、 穂高· 小 屋 生は向

初めて徳沢の放牧場へ

呼んだことがあるのです。 ドイツ人がそう名付けた。たしかフリッツ・ベヒトールトの書いた本に出ています。それを真似して徳沢を私はそう り書いたりしたことがあります。メルヘンウィーゼというのは、ナンガパルバットの北面ラキオトの谷の下の います。ずっとあとのことになりますが、徳沢を日本のメルヘンウィーゼといってもいいのではないかと私は言った なかったが、下から見ていると日本ばなれのしたすばらしい風景だったことが年少の私の心を凄く動かしたのだと思 明神の岩稜が見えるし、その頃は知識がなかったから、エギーユとかルンゼなどというようなハイカラな言葉は知ら があっただけです。徳沢の中心まで来ると、青々とした草が生え、楡の木や、白樺の大木が繁り、 馬が放牧されている。いまの徳沢園のような大きな建物はなかったが、牛番小屋と呼ばれる堀立て小屋のようなもの 槍沢から徳沢に下ってきて実ははじめてそこに牧場があることを知ったわけです。古びた木柵が点々とあり、 見上げると前穂高

いる 神合地 地名表記では 七万石戸田藩の公文書に、 神河内誌」や島々の横山篤美氏の本で知りました。したがって上高地という字は近代になって俄かに使われだした。 (『山岳』第二十九年一 善光寺名所図絵等の諸資料を検討された上「神河内」こそこの地に最もふさわしい地名であると力説されて 神降地その他いろいろあるようだが、幕藩体制文化文政の時代に松本から上高地の山々までを領有していた 現在は上高地と書いているが、小島烏水さんは上河内と書いています。更に烏水さんは信府統記 ないらしい のであります。しかし土地の人は昔から上口などと言っていたようでもあります。 上高地という字が既に使われていたということを、 号、第三十五年一号)。辻村伊助さんも神河内をつかっている。なおこのほかに、神高地 私は 『山岳』第三十六年中島正文氏の 信濃

前

出 Vi

だから、そういうものがなくなってしまうことを大変惜しいと思い、あのあたりのことを書きとめておかなければと になったのでしょう。牧場をやっていた上條喜藤次さんが営業旅宿としての徳沢園を開設することになります。 ても惜しいことでありました。 れがあるとか、 馬が放牧されていたというきわめて特異な、 徳沢牧場に親しみ、また小屋で働く人達や、 「上高地と牧場の四季」を書き朋文堂の雑誌にのせてもらったことがあります。 ことだと思いました。 あるいは国立公園の指定地域に含まれるとか、おそらくそのような理由からだと思うが、いずれにし 理由はよく知りませんが、 牧場は閉鎖されるが、その反対給付として登山客を泊める施設を許可するということ 何よりも木柵が連なるのどかな牧歌的風景がたまらなく好きだったもの 牧歌的景観がわれわれの前からその姿を消してしまう。ほんとうに惜し あの辺が観光地化し、 不用意な観光客に牛馬が危害を与えるおそ

地 にも牧場はあったらしい

梨平周辺を意味します。

次に、上高地に牧場があったのかどうかということにふれてみたいと思います。 上高地は狭義の上高地、

許可になり、 それには、「本年度出産の牝牡も多く、 反別八十町歩、 上高地に牧場が設けられたのは、 記反別八十町歩というのも細かく書いてあって、それを見ると横尾尾根から上堀に至るとあります。 十八年 拝借願御聞届なし下されたく、 から牧場開設の運びとなった (出願文の概要は横山篤美氏の著書から引用した)。 明治十七年(一八八四)に安曇村の有志数名の連名で出願され 増すます繁殖国家の公益必然と想像仕り候間、 此段奉願候也 明治十七年四月二十三日」とあり、 何卒特別の御詮議を以 H たことに始まる。 願 は 横 同 年暮 尾

相当します。 願している。 岳川より下湯沢までとも指定している。下湯沢は割谷山から出ている沢です。 八十 ・町歩という単位は、 若い人にはわかりにくいかも知れない が、 八十ヘクター V まの山 ル 約 研のあたりも当 四

うのは徳沢のさきの横尾谷に入るところだと思うから、そして上堀と言えば大正池の西側、

つまり大変広い

面 積を

紀行文に現われる放牧

る。 この地点は前後の文脈からして明神池の付近、嘉門次小屋か、その手前の徳吾小屋か、林道整備の人夫小屋の付近で ぶん鮨であろう)を釣っている年取った猟師からそれを買ったと書いているから嘉門次のことではないかと想像され ある。ウェストンがどの小屋に泊ったのか、彼の文章(岡村精一訳による)からは必ずしも明らかではないが、 検』には、第一回目の槍ヶ岳行 で牛を見たという記事が私には見当りません。たとえば、代表的なものとしてウェストンの『日本アルプス登山と探 ころとみてまず間違いないでしょう。しかし、どういうわけか、小梨平から温泉付近、それから対岸の中 跡だということを聞いています。また対岸の帝国ホテルのある中 水屋の近くに、常さんと並ぶ有名な猟師大井庄吉の住んでいた小屋が今でもありますが、そこが古い牛番 (明治二十四年)で徳本峠から一時間半駆け下り、梓川左岸の牧草地に達したとあり、 ノ瀬あたりも平坦なところですから牛や ノ瀬 あたり 小 たと

神池 はじめて上高地温泉に泊っています。 ストンは明治二十六年 てまた徳本峠を経て島々へ戻っているので、小梨平方面へは足を入れていないし、 全く同じコースで往復しており小梨平の方へは行っていないのみならず、放牧の牛馬についての記述も見えない。ウェ 地にはふれているが、 彼はこの へ出 てい の放牧をみてい 山行では小梨平まで足をのばさず往復とも明神池、 る。 その紀行にも牛馬は出てこない。 牛馬についての (一八九三) 三たび徳本峠を越えて今度は前穂高へ登るが、 ない。 翌明治二十七年に中 私の言ういわゆる上高地で、大正二年のときは一高生の大木操さん 所見は ない。 第二 明治四十五年八月、 尾峠を越して蒲田から上高地へ 回の槍ヶ岳行 徳本峠のコースを歩いている。そして徳沢周 (明治二十五年、この時登頂した) 続いて大正二年と三年の八月、 この時も明神池近くの小屋に泊 出たウェストンは温泉場を通 したがって当然のこととして上高 ウェ (後年貴 スト 第 辺の牧草 回と n 明

院議 員 や神戸二中 の辻荘一さん (後年立教大学名誉教授) との出合いがあり、 大木さんや辻さんが当時

に追懐しているのも記憶に新しいところです。

ストンと河童橋の上で会った話をうかがったことがありました。 昭 和五十一年(一九七六)の六月、私は六十余年ぶりという大木操さんを嘉門次小屋から徳沢へ案内しなが ウ

I

のそば(右岸)で屡々出合う。 屋は対岸 L 地と河童橋の間 遊歩場』 に思われるのであります。 頭の牡牛に暴れられた模様を細々と説明 難を逃れた、 の第八章・北アルプス再訪の一節で、「上高地には牧草の茂った牧草地がある。こうした牧場は梓 清水屋の近くにある大井庄吉の小屋は牛番小屋の跡だと言われていることと平仄が合わないことになるよう (と言えばいまの帝国ホテルや、 ウェストンの書いたもののなかにただ一つ放牧の牛馬について書かれている部分があるの ただちょっとおか とあります。これからみると河童橋の周辺にも放牧地があったと考えてよいように思われるのであり .にある細い径をぶらぶら散歩しながら宿に戻っていた時」(岡村精一訳による) という書き出しから、 家畜の牧人たちはどうやら対岸の小屋に閉じ篭っているらしく しいのは、 15 L スターミナルのあるあたりになる)にあったという点で、前にも言った 牧場は梓 更に一緒に居たと思われる嘉門次が梓川へ飛びこみ水に潜って姿を隠 川の右岸、 温泉のそばにありというのはよいとして、 (中略) 妻と私が は 牧人の小 Ш の温泉 0

近、 わゆる私の言う上高地で放牧を見たと書かれたものがなかなか見当りません。 ぽう明治末期から大正初期にかけて上高地に入った著名な登山者や文人の紀行文に、 河童 橋 0 周 辺や 付

か の奥で放牧の牛 チして、いかに上高地 不思議なことに小梨平を中心とする上高地についてはそれらしいことが殆ど書かれていないのはどういうわけ 化粧柳 や 出合ったとしたら、 落葉松の樹間に牛や馬が点々と遊んでいる牧歌的風景は、 の風景を引き立たせていたかしれません。しかも都会から訪れた登山者が車道などなかった山 それは思いもかけなかったことであろうし絶好の材料にもなりましょう。 穂高連峰 0 アル 1 ン的な景観とマッ

なのだろうか。

小屋のどっちかで、小梨平方面へは行っていない筈です。 の牛を放飼せりといふ」と書きとめているが、この時鳥水が泊ったのは明神池に近い嘉門次小屋か、 略)熟視するに牛なり」と記し、 嵐に胴震ひを堪へながら、 小島鳥水の『鎗ヶ嶽探検記』は明治三十五年(一九〇二)八月の霞沢越え槍ヶ岳の登山記です。「顔洗はむとて山 戸外に立出でたるに、何物とも知れず背後よりのさりのさりと覗ひ寄るものこそあれ 更に烏水は「聞くところに據れば横一里縦七里のこの神河内の牧野に、 その手前 約百 五十頭

町ばかりで宮川の小屋に着……」とあり、鳥水が見ているのとほぼ同じ地域です。また、「槍の帰途横尾を過ぎる約 りて平地を下ること約二○町で徳五の小屋に達した。主人はこの牧場の取締りをするものなりといふ。 頂より約三〇分道漸く緩となり牛馬この間を走り、杖以て牛の群を追ひ、手を拍ちて馬の群れを招き 里半一〇数匹の牛の一群に逢った」とあるのは紛れもなく徳沢地域にあたります。 翌明治三十六年八月丸山注連三郎が槍へ登っています。丸山の著『槍ヶ嶽乃美観 -明治三十九年刊』 (中略) 川原に出 0)

クサザワ=徳沢)まで行ってそこではじめて牧馬をみているのです。 て幾百 道を行って一軒屋に着き、湯の中で足を伸ばし(中略) 頭の牧馬がいた」と述べている。湯に入ったところをみると温泉まで行ったように思えるが、翌日木賊沢(ト 第一年三号 (明治三十九年) に河邨白水が「徳本峠と槍ヶ岳」で「梓川の木橋を渡り笹の一杯生えている 翌日上流へ向って行き木賊沢の平地に来ると牧場になってい

常念山脈」にくわしく上高地の紹介をのせているけれどもやはり放牧についてはふれていない。文人として著名な吉 述が不明 しかしそれにも河童橋や温泉付近で牛を見たという記述はなく、 比地に約二十日間滞在し、 。確で地域の特定ができない。 大正八年 (一九一九) Ш 压 第 一年三号に林並木が 温泉宿を中心とした、 『放養せる牛馬のいと楽しげに遊ぶを見ながら」と述べている部分があ 植物、 田部重治は有名な氏の著書『日本アルプスと秩父巡礼』 鳥類、 動物等の観察記を文人らしくせん細に書いてい 辻村伊助も『山岳』第七年三号の るが記

小

高地 や宣伝につとめた人であることを知っている会員も、 雄氏は 穏やかな、 くはないが柔らかい草原になっていて、斑らな牛が数頭臥そべり、あるものは物憂げに私等を眺めている。 された岡茂雄氏の「かみぐち行回想小記」だと思います。 現実のものとして記述された数少ない一つが、 に劣らないアルプの美景がほうふつとしてくるからであります。そして、その夢のような風景を想像するだけでなく だとすれば、 るが為ということは に出でざるが為の柵である」とあるのは私には大変興味のある一文です。どうしてかというと、これより下に出でざ 手前に太い ただ日本 に入ったときのことを 岳川谷の 郎 H 本山岳会の「山日記」を松方三郎さんや角田吉夫さんらに相談し、創刊からしばらくの間発行所として編 0 長閑な、 丸 岳会創立発起人の一人高野鷹蔵の 上高地でいちばんバランスのとれた構造的にもすぐれた風景を備えている小梨平や、その奥の中 太が二本横に二の字を引い 高地 残雪を背景に 遊記』にも徳沢の牛馬のことは書い なんともいえない美し 河童橋より下流域 昭和四十三年 牛馬が散策していた、 て、 V つまり温泉宿のある方へ家畜たちは行けなかったことになり、 (一九六八) になって雑誌 眺めであった」と回想の糸をたぐらせています。 かまへてる 山岳 名著の刊行に少なからぬ業績を残し、ノンフィクション賞なども受賞 そういう絵のような景観を想像することができるし、 今日では少なくなったのではないだろうか 第四年一号に、 てあるけれども河童橋周辺でのそれについては 中 岡さんは明治四十三年 (一九一〇) 七月下旬徳本峠 略 上高地東西三里の 「徳本峠を降りて河童橋を渡らうとすると橋 『アルプ』九十二号に 間に放牧せる牛 「河童橋 ついでに言うと、 馬 0 袂は 正にスイス 此 から上 のあ

屋が くと IF $\overline{\mathcal{H}}$ 年刊) 「丸太の組 いでながらもう一つ文人の書いたものとして、 つ立って居た」とあります。 から少し引用させてもらいます。 んだも ので路の横切られている前に立ち止った、 大正 一年に探訪した「上高地の谿谷」 のちに芸術院会員になった歌人窪田空穂の『日本アル 馬や牛の出ない為のませ棒だ の章に徳本峠 中 の急な路を降 プス 沿

屋は牛番小屋だと思うが、 空穂は馬小屋と言っている。 そして子馬三匹に出 合ったと述べてい ます。

は異説もあって、上條武氏は著書『孤高の道しるべ』の中で、鳥水が泊った小屋は温泉場ではないかと考証しており、 ヶ嶽探検記』の中で、梓川へ降りて泊った小屋を、神河内の孤屋(ひとつや)と書いているからです。しかしこれに 次小屋か徳吾小屋で詠まれたのではないかと想像できる。というのは、小島烏水も嘉門次小屋を形容するのに例の その中に三例ばかり牛馬を詠みこんだものがあり、前後して「一つ家」という歌があるところをみると、これは嘉門 文章は間もなく温泉の話に移ってしまうので現地を特定しにくい。この本の終章に空穂の歌が何頁かのっています。

鳥山 取り扱いについて協議する常務役員会が昭和十七年十一月二十一日虎ノ門のルームで開かれ、木暮会長、槙、 をひそかに取り外した。I氏はそのときの茨木さんです。ちなみに、安曇村翼賛壮年団名で申し入れのあった書面の ん、Tは高村光太郎であることは間違いない。昭和十七(一九四二)年十一月、ウェストンのレリーフを撤去せよと しかった」と記していることです。1は私なんかも虎ノ門のルームでよくお目にかかった会員で画家の茨木猪之吉さ 集まって高声で話している時隣室にいたウェストンから、眠れないから遠慮してくれ、と要求された。夫人が病気ら ですが、上高地の温泉宿で、たまたま来宿していた旧知のI、T、Mの三人と一緒になり、「みんなでランプの下に 今日はそういう見方もあるということだけを紹介しておきましょう。 つあるといってもよいでしょう。例えば、さきの大木操、辻荘一、そしてこの窪田空穂です(いずれも大正二年)。 なってしまっている。従ってあの強硬な書面を見た私はたった一人の生き証人みたいなものになったわけです。 の安曇村有志の強硬な文書を受けた日本山岳会はやむなく茨木猪之吉、交野武一両氏を現地に派遣、十二月八日これ 空穂の本のなかでもう一つ見落せないものがあります。それは、空穂と、舅、谷君という友人、この二人が同行者 ウェストンに叱られる青年たち ウェストンが日本の若い青年たちを叱った話はいろいろのものに出ていますし、いまや上高地伝説の一つになりつ 高頭、 中司、 茨木、 交野、 田辺、 塚本、織内の十一名が出席しているが、そのうち私を除く十名は既に故人に

いるからです。伝説というものはおおかたそのような具合につくられて広がっていくものなのかも知れ るようだとも述べている。 泉場で叱られた記憶は定かでないということを会報三九八号に述べ、どうもそのことが既成事実として普遍化 大木さんは嘉門次を伴 辻さんはやは り昭 和九年の会報 ったウェストン夫妻と河童橋の上で会って写真を撮らしてもらったりしているが、 というのはそのことがいろんな人によって、いろんな誌面でさぞ見てきたように語 三七号に、 ウェストンに叱られたのは明治四十二年の夏、 ません。 ご自 身は温 5 7

かれ、 上高地に行った大正二年から三年しか経っていない たように在場人物がまるで違っています。いまとなってはどれがほんとうかわかりませんが、空穂の本 行の中学生は中学生だけ別室でワイワイはしゃいでいたのだろうか。 う日本にい 辻さんは朝 昭和 ない。 五十三年の会報三九四号には大正四年と誤記しておりどっちも史実と違う。大正四年だとウェストンはも 五時ごろ叱られたとあり、 中 -学四年 生の辻さん一行が空穂 大木さん一行の一高登山隊は 一行の大人たちの部屋に一緒にいたとは考えにくいから、 大正五年で記憶も生々しい筈である。 一最 後の 夜のコンパ」とあり、 したがってこれ 中 学三、 空穂は ЛŲ が 年 出 が 生 最 0 頃と書 ま は

福沂牧場の生活

中学生

0

が高

いように私には思われます。或いはもしかすると、ウェストンは、

空穂や茨木さんのいた部屋と、

辻さんたち

それぞれ違う日

違う時

刻

いた部屋と、そしてまた大木さんら一高生が騒いだといわれる部屋とに、

か

けたのかもしれません。いやはやどうも御迷惑をかけました、と一言つけ加えておきたいように思います。

を開拓して新しい村を創ろうじゃないかという運動が起こったとしてもおかしくありません。 はじめました。 て発生した失業武士の 場と前後して、 そういう社会情勢の影響もあっ Ŀ 扱 高地 いに苦慮した新 開墾計画というのが出されたことがあります。 政 府 が、 たの 北海道の開拓とか、 か、 国の政策ではないが、 青森県は下北半島の開拓などを国策としてやり 明 治 安曇野にいる人達のなかから 維 新で幕藩体制 が解体 それ E 高 地 0

あ うです。そして、そのあいまに林檎もやってはどうかとその台木としての小梨(ズミ、いばら科リンゴ属)を植えた だったとみるべきでしょう。やがて計画は繭をとるための養蚕、上高地一円に桑畑を開こうという計画に変わっ ンターのところにも説明板があったように思いました。今日だったらエコロジーを乱すからとその筋は目くじらをた のがいまの小梨平として残ったらしい。六月中旬ごろに行くと白い花が咲き、秋になると小豆くらいの実をつける。 てるところでしょうね。 な寒冷地では生物の生育に密接な関係のある積算温度などの点からみても、当時の稲作技術で米をつくることは無理 いれは実は上高地に自生していたものではなくて、そういう経過で移植されたものだと、たしか環境庁のビジターセ 上高地で米や大豆や馬鈴薯などをつくろうという、考えようによっては壮大とも言える発想ですが、 ついでながら、河童橋の下流の中ノ瀬の落葉松は大正元年だったか農商務省の山 上高地のよう 林局が植林

からいつも親切にしてくれ、鰡釣りやきのこ採りに誘ってくれた人です。 明治十七年に牧場開設の認可を受け、三十九年に株式会社になっていますが、初代社長になったのが上條百次良と 後の徳沢園を開設した上條喜藤次さんのお父さんです。喜藤次さんは私が徳沢園を利用するようになって

なったのでしょう。私がはじめて徳本峠を越したとき、 て初めてああそうかと思ったわけです。 ルファなどの採草地が必要ですから、とても安曇村ではやれない。そこで上高地に牧場を開かせてくれという出願に してそれが峠の上の方まで続いていた。あんな山の奥に牧場があるとは知らなかったですからね。あとで徳沢に行っ 畜産奨励で安曇村で牛を飼うとしても飼料がない。牛一頭について一ヘクタールくらいのクローバーとかアル おやっと思ったのは牛の糞らしいものがところどころに、そ ファ

署の規制があったのでしょう、追いつめられた徳沢もとうとう昭和九年(一九三四)には廃止せざるを得ないことに 前にも言いましたが、登山者、観光客が増えるに従って、上堀はいけない、上湯沢もいけない、小梨平もと、

ゲを決めこんでいると、徳沢の牛の啼き声が聞こえてくることがある。北尾根の岩場で他のパーティーと会うような 涸沢へ入って岩小屋生活をやり前穂高の北尾根での岩登り、三峰の上でザイルを外して日向ぼっこ、 Vi わゆるトカ

揚を攫う。たしかそういう話だったと思います。 けてパッと降りて来て攫っていく。どうしてそんな芸当ができるんだろうか、それを寺田さん流にいろいろと推理さ かいつまんで言うと、 ところで有名な物理学者寺田寅彦さんの文章の中に、鳶が油揚をさらう話というのがあります。 あれはその場に発生した上昇気流に油揚の匂いが乗って上がってくる。鳶は気流のラインに沿って急降下し油 高いところを飛んでいる鳶、ことに鳥は眼がよくないのに、はるか下にある小さな油

くるのはちょっと意外です と、私なりに思いました。北尾根の上部と徳沢との高度差は約千五百ぱぐらいあるでしょう。牛の啼き声が聞こえて それを私は思い出しましてね、北尾根で聞こえる牛の啼き声はあの辺に起こる上昇気流に乗ってくるのでは

Va 徳沢園開設当時は上條喜藤次さん、その息子さんが上條進さん、その進さんも今は隠居して息子の敏昭君が跡を継

いると思いますが、源兵とか、茂平を知っている人はもう余りいないでしょう。 したが茂平という爺さん、それから通称西山隠居、 ていたのが上條源兵という人、源兵さんは元営林署の巡視で、 私が初めて冬の槍や穂高へ登るためにスキーで徳沢へ入るのは昭和六年(一九三一)からですが、冬の番人をやっ 西山隠居は長く働いていましたから知っている人は今でもかなり 高山植物採取監視人をやった人です。次が姓は忘れま

ち帰り、塩焼きにしたり、味噌汁に入れたりして食べた。徳沢牧場にはまた川上君という牧夫がいました。彼は私に う名のきのこでした。小屋で、雨も降っていないのに番傘を借りて行き、開いた傘の中に片っぱしから放りこんで持 徳沢で遊んでいると、さきほどの喜藤次が茸採りにつれていってくれましてね、たしかユキノシタとい

はいけません」と注意されました。国立公園内では蟋蟀一匹蜻蛉一匹とってはいけない、では蚊や蚤はどうなのかと ころ、席にいた環境庁のレインジャーの人から、私の話が終わるや否や「皆さん国立公園内でああいうことはやって 五十周年という催しがあり、古い関係者を招待してくれたことがありました。そこでいまのような昔話をしましたと 率がいい。一石二鳥とはこのことですよ、と言うんです。悪いやつですよ。昭和五十八年(一九八三)に徳沢園開園 します。その蛙を捕りに行ってる時に、私の後輩が、一匹ずつ捕っていては面倒だから交尾しているのを押えれば きれいなささ身がとれる。これを炉端で焼いて、塩や醬油をつけて食べるんですが、ちょうど鶏の肉に似て乙な味が 蛙を捕って喰べることを教えてくれた。捕った蛙をパッと叩きつけ、のびちゃったところを皮を剝ぎ、清流で洗うと

氏が原稿を作成し、それを織内信彦氏に加筆・削除など手直しをいただいたものである。) 本稿は一九九三年五月十七日、三水会例会で「上高地に牧場があった頃」と題して行われた講演から高田 眞

いうことになりますがね。時間になりましたのでこの辺で終わりにしたいと思います。

として、 定公園 を抜

V 後

越

洗ってい

H 本山岳会と縁深い弥彦山

県松な 明登山祭によせて

筑

木

力

女や酒呑童子などの伝説や史跡にも富む。 の中心 て噴出 平 万葉の る。 野 0 的 H 南 L 本海 昔から歌にも詠まれ人々に崇敬されてきた。 北に延びるこの連嶺の佇まい た火山である。 な景観を形成 沿岸に、 越 している。こ 佐 背丈こそ低 海峡を挟んで佐渡の 0 13 Ш は、 が 塊 西 の盟主弥彦山 Ш 一浦原 裾 は Ш 一々と相 平 日 野 本 また山 0 海に沈 はは、 対する国上 角に伏す龍の姿にも似てい 潜 麓 越 L 後 帯は越後文化発祥の地でもあって、 宮の 断 . 弥彦 崖絶壁を随 「おやひこさま」 角 田 所に Ш 塊 かけ、 て、 は、 から 佐渡 第 鎮 奇岩怪 灰座まし 紀 弥彦 層の 石 妙多 ます Fr. * 波 陵 羅 神 浪 Ш 地 天 Ш 帯 玉 から

れ、 0 IlI 弄 さらに つに至ったと伝えられる。 像が L 昭 和 1弥彦山 高 干 昭 和二十 頭 Ŧi. が自身は は、 (一九六〇) 日本山 Ħ. $\widehat{}$ 九五 一歳のときはじめ 岳会の この 年に現在の 0 事は後で詳 諸先達との 年に 大平 越後支部 7 弥 由 述する。 高原に移され 彦 縁 山に 0 \$ 藤島源 深い。 登 n たが、 太郎、 新潟県 頂 E 高 花井馨ら地 か 出身で日 頭との 5 眺 80 た景観 本山 関 係で日 元関係者の手によって弥彦 岳 に感動 会の 本山 第二代会長を勤 [岳会の著名な登山 L て、 Ш 野 で助 D た高 涉 Ш す 家が次々 頂 る E 頭 趣 建 味 寸 兵 Ł 3 衛

安治、 田久弥、三田幸夫、 弥彦山塊が佐渡弥彦国定公園の一環として決定される前に、その調査・視察のために訪れたのは、田部重 板倉勝正、 村井米子であった。それから後に来訪した主要な顔触れ 金坂一 折井健一、西堀栄三郎、 郎、 坂倉登喜子、成瀬岩雄、 冠松次郎、 渡辺公平、 佐々保雄 (順序不同) 浜野正男である。 中村謙、 は、 吉沢一 槙有恒、 郎 加藤泰安、 日高信六郎、 沼倉寛二郎 松方三郎 Ш

神話から習俗に伝承される火祭りとつながる弥彦燈籠神事と新潟県松明登山祭

拝するゾロアスター教は有名である。これは紀元前六世紀にペルシャの預言者ゾロアスターが創始したとされる宗教 である。またギリシャ、 スの盗火神話が生まれたことはよく知られている。 火は古代から世界のいろんな民族の間で尊崇の対象とされ、 ローマでは、火がなぜどのようにして天界から人界にもたらされたかについて、プロメテウ 数多くの神話を生んだ。中でも火を神の化身として崇

まざまな信仰や神話伝承を伴わせて宗教儀礼としたものである。 わが国における火の儀礼では、まず「鑚火の儀礼」をあげる。これは火きり杵臼や燧石などによる発火作法に、

穢れを清めるための儀礼や、宮廷で北辰(北斗七星)に灯明を捧げる御燈祭もこの系統に入る は雷火を刺激して雨を降らせようとする試みと考えられる。さらに邪霊や害獣や悪疾などを国土や村落から追放して ために、山の上で大きな焚火をしたり、この焚火の周りで松明を持ち、歌い舞って雨乞いをする儀礼もあった。これ 火を結びつけて考えるこうした信仰習俗は、盗火神話の重要なモチーフでもあった。また雷神や鬼神に祈りを捧げる 物をし犠牲を捧げて焼くのが農耕祭儀であった。この行事は太陽の光熱を回復・更新するのが原義とされる。太陽と 次に「火祭りの儀礼」をあげる。冬至・夏至・春分・秋分などの季節の替わり目に行われた。大きな火を焚き、

な通過儀礼の際に火を跨いだり、火で炙り、燻して、本人の心身を浄化・更新しようとするもので、産屋での火焚き、 三番目に 「通過儀礼における火の儀礼」がある。人の誕生・成人・婚姻・特定団体への入団・葬式など人生の様

田

嫁の火跨ぎ、修験者の火渡り、葬礼での火焚き、火葬などがその例である

か やアメリカインディアンのように、 れ るが、 った。これ 炉 自然の火に対する直接の儀礼行為である。 インドネシアやメラネシアのように、 は は民族性によるものと思わ 体とし 火 0 神の崇拝儀 て、 これに供物を捧げ、 礼」である。 噴火口を覗き込んで宗教的な懺 れる 鑚火具 祈禱 噴 わが 、火口に生けにえを投げ込むような慣習は して呪 国では、 術儀礼を行う。 鼎など火に関わる道具 阿蘇・ 悔を行い 伊 豆・薩摩などの火山 特に火山 滅罪を図る儀礼も、 か、 の噴火口 またはこれらを象徴 なかっ などに 地帯にご 供 わが国では発達しな 物 神 またイ P 火信仰 犠 する 牲 ・タリ を がみ 石 リザ 5 3 溶

七日の これらの行 る 九七八)年 では弥彦の これは神社と神領民とが一体となって行う伝統神事であって、 五日を 神み 興祭、 事の細 五月二十二日に国 燈 「燈 籠神事と松明登山祭は、こうした火の儀礼の中でどんな位置を占めるの 素講」、 籠神事」 部 については、 同十一日の と定めて行うことにしてい 0 重要無形文化財に指定されたが、 明治になってから幾つかの変更が加えられたが、 「お慣し、 花 揃 Vi る 同 十四四 H その始まりは寛徳年中 0) その日程は、 燈 龍巡行 旧曆六月一 同 昭和三十六 十五 か。 (十一世紀) H 燈 0 **総神事** H 一神 (一九六二) 0 賟 御 (渡御) 祭り始め」、 と続

界 を迎えた。 は三十年八月一日、 要人たちが ぼう弥 it 当初は 年代まで続い 願 る。 彦山における新潟県松明登山祭は、 V 研 から 究協 このイベント 弥彦山 叶 第二 って雨が降 議して始めたものである。 た П 岳会の主催行事であっ 以降は七月二十五日 にヒントを得たという。これは先に述べた「火祭の儀礼」の中の は、 n ば宿泊した仮設小屋を焼き払 前に述べ た燈籠神事 たが、 その (弥彦神社の祭日) 昭 和二十 昔人々が雨乞い その後新潟県山 の活性化を図るため、 九 (一九五四) 13 と定められ 夜中であれば松明を点じて山を下っ のため弥彦山に登り、 岳協会等との共催になり、 年七月十三日に第一 当 7 時の弥彦神 平成 Ŧi. 社 Ш カ 回が挙行され、 頂で大焚火を燃や 0) 雨乞い 日本山 九 関係者と新潟県 岳会越 の儀礼」にあ 第 後 DU 支部 Ш +

てはまる。

ちが掲げる百本余りの炬火が一斉に火を吹く一瞬は、 ずるものがあった」と、そのときの感想を述べている。 は神山の冒瀆ではないかとの恐れもあったが、いやいや、 き花井馨 日本山岳会会報 ちなみに吉沢一郎日本山岳会元副会長は、昭和四十六(一九七一)年にこの松明登山祭に参加したときの様子を、 (後に詳述) は、その編著『青雲の弥彦山』の中で、「太古より静寂を保ってきた弥彦山頂の夜に、 Ш の三〇二号に「弥彦松明登山祭」と題して寄稿している。またこの行事の生みの親ともいうべ やはり大きな感激であった。私の心に、 岳人たちが神の山へ捧げ奉る誠心の松明であると、 聖域 の静謐を破っ 岳人た 固く信 たの

弥彦大神が導いた大平晟と高頭仁兵衛の出会いと交流

験する契機をもたらした意義は大きい。 大平晟と高頭仁兵衛は、日本山岳会の歴史に輝く二巨星である。弥彦山が新潟県出身のこの両者に、***だいまからなど、*** 登山趣味を体

陶に専念した教育者であった。明治十九(一八八六)年に新潟師範学校を首席で卒業して、 とき家の外で遊んでいる最中に誤って信濃川に転落し、母に助けられたという秘話がある。 彼は明治十三(一八八〇)年の片貝小学校授業生(代用教員)から通算して四十余年間、 大平晟(一八六五―一九四三)は、新潟県三島郡高梨村字五辺(現在の小千谷市高梨町五辺) 高梨小学校に奉職し、 郷里の片貝村で子弟の薫 に生まれた。 四歳の

年四月郡立片貝高等小学校に首席訓導として着任した。 明治二十一(一八八八)年、 十二歳の高頭式太郎(幼名)が、与板高等小学校から片貝高等小学校に転校してきて

大平と出会った。大平は地理・歴史を担当していたが、ここで二人は生涯に亘る師弟関係を結ぶのである。 (ただし令孫の寿久氏が著した「高頭仁兵衛余録」には、「ニヘイ」と仮名がふってある)。彼は生まれつき虚弱であっ 高頭仁兵衛(一八七七―一九五八)は、新潟県三島郡深才村深沢(現在の長岡市深沢町) の豪農の家に生まれた。

が生涯 たまたまあるとき史書を読み、 を通して畏敬してやまなかっ 盲 た恩師 人の 塙保己一 大平晟先生と、この学校で出会ったのであ から 徒歩を励 行して身体を強健にしたことを知 徒歩通学を決意し実行に移したところ、

高等科を併置するものとされた。そして明治四十 0 百 四年課程と三年課程とを設置し、 小学校簡易科がおかれてい 一る小学校制 大平が師範学校を卒業した前後の時代は、 義務教育年限は六年と改められて、漸く小学校制度はほぼ安定するようになった。 しかし明治三十三(一九〇〇)年に、尋常小学校は四年に統一し、 度の変遷に つい たが、 てみると、 また中学校進学希望者向けに、 明治二十三(一八九〇)年、小学校令の改正により簡易科を廃止し、尋常小学校 明治十九 わが国の学校教育制度が一大改革期を迎えてい (一九〇七) (一八八六) 年に、 年に四年 八年 尋常小学校は六年 尋常高等小学校は進学用ではなく、 間の教育内容を一 制尋常小学校、 二年 制 貫させた尋常小学校を設 に高等小学校は た。 制 高等小学校、 その中で約 一年 年 度

亦 而シテ其間 ル んだ高頭少年も、 自ら監督 学校の寮制度は、 寄宿生 ノ設ナシ故ニ毎 大平訓導は、 タリ勤 ・世話人 不平ヲ見ズ深沢 番 孔子・スマイルズ・フランクリンを信奉 大平がその教育信念を実践する場として当時知られていた。 三ハ やがてこの寄宿舎生活を体験する。このことについて大平の自叙伝には、「此ノ多数寄宿 日放課後各所控所教室等二畳ヲ敷キ以テ其寝室ニ充テ毎週輪番各室転換ヲ為セリ ・料理人を兼ねて、 善ク芋洗炊事給仕等 ノ豪農高頭仁兵衛氏 寮生の心身の鍛練・修養を目ざして集団主義教育を行っ ノ労ニ服セリ」と書かれ (式太郎ノ父、八代仁兵衛義宗) Ĺ 厳格な鍛練 てい るが、 主義に立脚した教育を実践 少年 彼は寄宿舎の創設と充実に力を入れ、 ノ嗣子 一時代の (式太郎 高 頭が偲ば 九代目 実二野 彼と師 した。 れて大へん興味 ノ仁兵 営ノ観 弟の縁を結 生ヲ入ル H 、高等 1/

きかせた。 大平 は H 大平自身が山と関わった始めについて、『山 曜 休 H には必ず近郊 0 低 山を歩き、 金倉 Щ 岳 弥彦山、 第二十三年第三号 米山 などの 昭 登山体験を子どもたちに教室で語 和四年九月)に載せた「台湾の Ш

すると、洋々たる流れの左手遙かに、 をもった。それは宅地が近く信濃川を隔てて、東方直距離約一里の天に、金倉山を仰ぎ得るのと、河岸に立って北望 の中で、「予が山岳趣味の起り」と題して、次のように述べている。「予が幼少の時代から少なからず山に対する興味 に登られた経験談話をされたのが、更に大いなる動機となったのである」。 端麗な弥彦山を望み得るのが、一つの原因でもあるようだが、 父が終始自ら山

佐渡の島影を頂上から眺め、 大平の最初の登山は米山で、 国境をめぐる高山群峰を望んで大いに感激し、 明治十二年六月彼が十四歳のときであった。 その翌年弥彦山に登り、 山岳趣味を感得したという。 日本海 か 5

が、 Ш の中間鞍部の大平高原に、 るの始なり……」と刻まれている。 越三島郡深才村深沢に生まる 久吉博士の撰文になる寿像名の一部には、 の伝を読みて悟り 岳会越後支部が建立したもので、 昭和三十五(一九六〇)年に国警無線中継所と山頂社務所の改築に伴って現在の場所に移されたのである。 高頭は十三歳のときはじめて弥彦山に登り、 以来努めて山川に親しみ 高頭仁兵衛の寿像碑がたっている。これは昭和二十五(一九五〇) 家は累代の豪農にして 弥彦神社拝殿で除幕式を行い、 「高頭翁名は式 健康を自得す これが登山趣味の発端となった。 世々学を好み 字は義明 十三歳初めて弥彦山 七月二十日に弥彦山の頂上で完成式典を挙行 仁兵衛と称し海峰と号す 郷党に望あり に登る 弥彦山 翁生まれて虚弱 年五月二十日に、 Ш (神剣峰) 岳登躋 明治 0) 十年五月 と多宝山 趣味を解す 日塙保己 日本 北

を卒業したが、大平はその四年後に三十三歳で片貝校の校長となった。 して式太郎は次第に強健となり、 級の低山であるが、その山頂からは守門岳、 「頭式太郎は十五歳のとき、 大平晟先生に引率されて舟形山、 それと同時に山岳に対する興味が増大していった。 八海山 妙高山、 苗場山など越後の名山を望見することができた。こう 荻城山に登った。 いずれも三島郡にある標高三百世 高頭は十七歳で片貝高等小学校

を明治三十九(一九〇六)年に博文館から刊行した。大平は本書のために、「登山の心得」や妙高山・金倉山の紀行 それから高頭は東京に出て、やがて小島久太や志賀重昂と知り合いになり、 二人の助言を受けながら 日本山

本書はわ 営」「落石」「氷雪上の滑 などを寄せて出 志 が国 は わ の近代登山 から 版 国 0 Ш 助した。 岳に 落・ 「史上に確固たる地位を占め、 関する百科事典とも 踏み抜き」「道迷い」「自然観察」「周到な事前準備」 登 の心得」 は全部 11 えて、 で二十項 登山者の座右の書となったのは当然であったといえよう。 高頭が若き日の情熱を傾注して著したライフワークであ 目に及ぶが、 その 中で「歩き方」「装備」 がおもな内容である。 「食事 水 H

清津 名誉会員に推挙された。これは当時会長であった高頭の尽力によるところが大きかった。 Ш 強 で結成式を挙げた。発起人は高野鷹藏、 のために、 に登った。 高頭 峡 勧めもあって日 一日本 昭和三 (一九二八) 年の新高 は会員番号四を受け、 強力な財政的援助を惜しまなかったと伝えられる。 その後における大平・高頭の師弟共同山行には、大正十三(一九二四) Ш 嶽 志 本山 が 岳会に入会し、 刊 行され 後に昭和八 る 年 Ш 会員番号三十一を受けた。そしてこの年の八月に、 武田久吉、 前の (台湾) (一九三三) 明治三十八 の登山がある。 梅沢親光、 年第二代会長に就任して二年 一九〇 方、 河田默、 五. 大平は昭和八 (一九三三) 大平は明治三十九 (一九〇六) 年十月に、 小島久太、 日本山岳会が東京 城数馬、 年の開聞 間勤めた。 大平は高 高 岳 年 頭 彼 仁兵 翌十四年の金城 は 飯 年三月、 頭 H 衛 H IJ 橋の 本 0 H か Ш 本 岳 Ш

時代は、 少年 大平 時 は山岳人としての高頭を形成する端緒をつくり、 代の高頭にとって、 先生としての大平と弟子としての高頭とが、 わが国の近代登山史における、大平と高頭との師弟交流の意義について考えてみる。 大平は自己の生命を蘇生させてくれた起死回生の恩人であ 長 日本山岳会創立の前史を生み出したといえる。 Vi 深い交遊の基 盤を築い た 時期として重要である。 前に 言及したとお 片貝高等小学校

を苗 h 行う基因となっ 高 高 頭 頭 か Ш は 頂に 恩師大平を日本山岳会名誉会員に推挙し、 発起人となって苗 建立した。 たのは明らかである。 また五年 場山神楽峰 後の に設置 昭 和 十五年には、 した。 少しでも師の恩に報いたいと願う高 さらに昭和十 鈴木牧之遺跡 追 九三五 頌、 大平晟書 年に自ら音頭をとっ 「天下之霊観」 頭 の心情 が、 0 大平 れ 石碑を、 5 0 晟 事 0 子業を やは 寿 像

であろう。大平も高頭もその少年時代に弥彦山に登り、 弥彦大神の御心が二人の出会いと交流を導く機縁をもたらしたといえよう。 大平なければ高頭なく、また高頭なければ大平は山が好きな一介の田舎教師として、 頂上から眺めた大観に感動し、 登山の魅力に目覚めた。 終わって た

の大先輩たちの息差しが全山至るところに感じられる。そんな意味で日本山岳会とは縁が深い山である。 高 三頭の影響と、 地元岳人たちの熱意によって、弥彦山には日本山岳会累代の要人たちが足繁く来訪している。

地元岳人たちの業績

したい。 平成六年二月歿)、山崎幸和 本山岳会名誉会員 弥彦山に関係する地元岳人たちの業績は数多いが、その中では、藤島源太郎 会員番号一〇三三、昭和六十三年九月歿)、花井馨 (日本山岳会越後支部、会員番号五四〇三) の三人が、それぞれ成し遂げた仕事を特筆 (日本山岳会越後支部 (日本山岳会越後支部初代支部長、 会員番号二三六四 日

卓越した指導力を発揮して、飯豊連峰の開拓・紹介その他多くの業績を残した。弥彦山にも早くから目を向 せた。その著 ある毎に県外の岳人たちに紹介の労をとった。地元の花井らと協力して、松明登山祭、高頭祭の行事を創始し定着さ 藤島は昭和二十一(一九四六)年十二月の越後支部結成発足以来、支部長として三十有余年に亘り精力的に活躍 『越後の山旅』で弥彦山について詳しく世に紹介している。

たが万葉集の造詣も深く、篤学・温厚の士で弥彦山岳会をも育成した。筆者はその晩年に面識を得て指導を受けた。 面に及ぶ弥彦山関係の論考等が収められている。 花井は弥彦山の麓で生まれ、育ち、生涯を過ごした、文字通り弥彦山を象徴する岳人であった。本業は 『青雲の弥彦山』には、光栄にも拙稿も一編を載せていただいた。この本には花井が長年かけて書き綴った多方 弥彦山においての、 高頭仁兵衛に関する事業・行事の創始と発展に 郵政職であっ

尽力した中心人物であった。

した山 したイラストと、 Ш 临 は 岳 展望 本 業の 义 銀 「弥彦山 それを作 行 ロマン 0) 頂から見える越後の 仕 成した苦心談が 事のかたわ 5 『越後山 Ш 新 々 潟県内各地 は、 压 第八号 驚嘆すべき労作である。 域のの Ш (日本山岳会越後支部 岳に登り、 精 通して 百七十 編 Vi るが、 座の山名・ 平 成 彼が 元年 + 山容を克明に + JЦ 月 年 FI か it 行 揭 成

載されている。

0 0 重 は 次に、その主要な件を幾 五十 なり 日ほど。 具合がわかる。 明に見える日は、 日に出会って、三百六十度の展望図を作ってみようと決心した」。「最大の それも一 東側の山は日の出前、 度に全部 5 年でも数えるくらい。 か引用する。 の山が見えたのは 昭 佐渡は日没時がよく見える」。「山頂に立ち、 和 四十一 稜線がくっきりするのは初冬が最 年十一 日もなく、 月半ばの せいぜいほぼ のこと、 弥彦山 八割くらいだった」。 難問 高 頂からの展望がとてつ は天気であった。 奥の高 眺望が利 V Ш から て観察できた 冠 Ш 雪すると山 日々がほ もなく素 h

とめたものである。 記 見える越後 压 育委員会)、 筆者は平成五年七月二十五日夕刻に、 17. 念講演をする機会を与えていただい 第八号 、『日本山嶽志』解題」(覆刻 成 Ŧi. 弥彦山 0 九 Ш H 本山 九三 々」(『越後山岳』 岳会·新潟県山岳協会編 執筆に際しては、 岳会越後支部編に掲載)、 年で松明登山 第八号に掲載) H 一祭は四 本の山岳名著解題 藤島玄著『越後の山旅』(富士波出版)、花井馨編著 た。 弥彦山頂の神廟わきの広場で、「大平晟と高頭仁兵衛との師弟交流」と題して、 本稿はその話を中心にして、 + 『弥彦山松明登山祭の栞』、 回 松前健著 の各著作に、 高 頭祭は三十六回を迎えた。 『古代信仰と神話文学』(弘文堂)、 日本山岳会編に掲載)、久保田全著「大平晟 お世話になったことを心からお礼申しあげる。 弥彦神社編 弥彦山にちなむ他の話題も付け加えながらま ともに伝統行事として定着してい 『弥彦神領史話』、 『青雲の弥彦山』 Ш 崎幸和著 ノート」(『越 久保田全著 一弥彦山 (弥彦村教 頂 後 か 高 Ш

ラリグラスに囲まれた山村が生まれるか

大 森 弘一郎

ておくことをお許し下さい。 書かせていただくことにした。なおこの作業が軌道に乗るまでのしばらく、ポカラの近くにあるこの村の名前を伏せ これをご報告するには未だ早いきらいがあるが、今後の継続を公約する意味と、協力者の出現を期待する目的とで、

≪行動の背景≫

験を肥やしにして、自らの自然保護活動を活発に行ってもらおうというものである。 などのかかわり、それへの人間の関与を知ることで、今ある山の自然の大切さを知ってもらう。そしてその知識と体 昨年の十月より「山の自然学現地講座」というのをやっている。山の自然の成り立ちや、気象、 地質、 地形、 植生

環境基金の助成を得て、活動は順調に進んでいる。 座学と現地を交えた講座は、この十二カ月で十九回、参加者は現在約百四十名(内JAC会員は約一○㍍)。 地球

知識を学ぶだけでなく、この講座の中で、何かいくつかのモデルとなる活動をしてみたい。北アと木曽駒で山の破壊 悩みはある。知識をどう活動に結び付けるか、である。「実践なきもの自然保護を論ずるなかれ」とならないために、

のウオッチと回復の作業も計画して、一部は始めているが、対象をもっと広げたいと思った。 た、と嘆く声も聞く。シャクナゲはヒマラヤの構成要素、 ヒマラヤに行く者は、 その道中に出会ったシャクナゲ林の印象を鮮明に残している。それが次に行くと伐採されて ヒマラヤの一部である。そう考えて来ると、

こは我々のテーマではないか。

た。要するにこれは私の勘であったが。 ルの国花、 林は今でも誰も考えた事が無い、と判ってくると、保存への意味も大きくなって来るし、 には二百種類ぐらいのシャクナゲ(ラリグラス)があって、これが世界のシャクナゲの原種であり、ラリグラスの 住民にとってシャクナゲは利用 ネパール人の誇りであることを考えると、我々の活動者養成の目的の中での体験にうってつけに思えてき 価値の低い木、 成長が遅く、 植林にも難しい。 しかし美しいだけでなく、 さらにラリグラスが

して、 パイロットの判断で偶然決まったようなものだった。 る所があるということで、三月末に調べに行った。まずゴラパニ(二八〇〇㍍) やるならラリグラスだな。こう思って宮原魏氏にヒマラヤが美しく見える適地はないか相談した。二、 帰りに降ろされた所は、始めに予想していた所とは違う尾根の上、一九○○≒のカルカだった。 に飛ぶ。 短い時間に地 天候とヘリの 質を調

に日暮れも近く、 を調べて下る途中、 H 本酒を調査する、 お巡りさんが、 、周辺には木は多いがラリグラスは少ない。地質もラリグラスの適地と思えるゴラパニとはずい 時間以上の回り道をしながらの道案内をしてくれた。その道々ホタルが群舞していた。疲れてやっと着い 山した。楽しげに村に上って来る若い女性の一団に道を聞きながら夜道を下るうちに、どこからか現れ あまりここが我々のフィールドとしての適地とも思えなかったので、 と言いわけをしながらの巡査と日本酒を酌み交わしたり、 かなり離れた家までタクシーを呼ぶ電話に行ってくれ、 一つの村 (一五〇〇)に入った。この尾根はこの村の 車を待つ間の交番では 「いりあい」ではないかと思えたが、 する内に次第にこの地域を見直してい 子供達と少し付き合って、 勤 ぶん違う。 務中だけ 周 た男 既 辺

▲二回目の訪問/その後の考えの変化≫

林の伐採が減り、 こと)。その結果、今はこの村を、人々の生活のあるラリグラス園にし、それにより村が物心両面で豊かになり、森 休に、日本から六名、カトマンズ在住の四名(後にこの講座の正式メンバーとなる)とトレッキングパーティーを組 んで出掛けた。それから出会ったことと、自分の考えの変化を簡単に纏めると以下のようになる 帰国後調べて、 あのカルカが景観の良いところであることを再確認。とりあえずの対象をこの尾根とし、 自然環境が守られる。そのことが、村の自立心、自発的行動で行われるよう促し誘導する。こうい (カッコ内は考えた 一月の連

きくある。 いる、シャム・バハドゥール・ドングル氏とその仲間の四名の存在、及び池田明彦氏を初めとする専門家の助力が大 なお、これが出来ると考えた事には、上記のカトマンズ在住の日本語学院の校長、私の考えを良く理解してくれて う自然保護活動が出来ないかな、というものになっている。

そ利用出来る資源ではないかの着想)。→マチャプチャリを身近に見るカルカに降りて試植 (ここにラリグラスの咲 同行してくれた池田氏が、湧き水のある伐採跡地に実生を多数発見(途中に考えた苗床が天然の姿で有った、これこ 道のわきに実生を発見 教えてほしいとの反応 ねるのは嬉しいとの回答 の遅いラリグラスだが、やりたいがどうかと念を押したのに対し、村のリーダーより、美しくなる山と村を思って死 キャンプ、鯉のほりを立てて大騒ぎ。→村人の学校、ロッジなどの援助期待がでる(期待してほしくないと自助を促 五月の連休に、了解と協力を得て山の植林を研究する目的で再訪。 →木の伐採は自家使用の目的だけでなく現金収入の手段でもあった(山林保護には他の収入が必要だ)。 (霧が水分を補給してくれる湿潤な成育の適地を知り、ここの活用を考える)。→さらに登り、 (担当者に一日同行してもらい教える、熱心)。→登る内に二○○○≦周辺で巨木林を見、 (目先の自分の利益でなく考える姿勢を見る)。→山の調査のみでなく、村に植えたい →この山をいりあいとしていると思えた日村に の村と山は自分たちの力で良くしてほしいと話す)。→村の中なら自分たちの余力で出来ると言う

カルカに植えると管理費が必要だと暗に援助を期

(村の 中

→七月に のみの 待 (苗を渡し、

好ましい動きだと感じる)。

→村に降りると庭

(自分 植

→モンスーン前の植林に適した時期に自力で百五十本植えると言う (自力でやる考えを喜ぶ)。

や畑の隅に大切に植えられていた。→下山前に村で集会、 くときを夢見る)。→村人はこれを村にも植えたいと言う

林に賛成)。

は

カトマンズよりシャム氏達、

十月には日本よりの再訪を約す、 →下山すると初めての降雨

から離れられなくなったと知る)。

帰国後、

石楠花園、

シャクナゲ協会の研究会などで調査とにわか勉強。

(植えた苗への恵みの雨、

次回からは村の家に泊まってくれと(この村がこれ

ラリグラスの生育状況の調査





村に植えられた苗木

ネパール全土に分布している百種以上の原

これでうまくいく)。

種の保存の重要性と、 交配により新種が続々と作られていること。交雑が簡単に行われることを知る

原種を壊すことに成りかねない)。

の他に家畜よけの石垣を積んだとのこと。ラリグラス育成の委員会を作ったこと(今後彼らの姿勢を大いに生かして 使える)。現地の植林はカルカ、村、共に七割が活着している。村の人達で二百七十四本を植え、 七月にカトマンズメンバーより報告が来た。カトマンズ近郊にラリグラスの実生の有る所を発見したこと 山の植林を考えていたが、村に植えることが山の保護になる)。 学校前の空き地そ

≪今後に考える方向

さな村なら、我々に援助が途切れた場合でも、たとえ私一人の力でも、期待を裏切らない必要最低の継続は可能だ。 十年かかるこの作業は つまり始めたことの責任は取れる。 村民たちが(リーダーが)、多少の思惑が有るにせよ、我々の希望を越える形で取り組んでくれている。数年、 「継続」が必要で、努力する村の期待を裏切る事は出来ない。ポカラからそう遠くないこの小

ちの向上を図ることを誘導すること。このような、援助がやれそうであるし、 このような、 物を与える援助でなく、役に立つと気づいていなかった自分達の資源を生かして、 このように自然保護教育での、 自助の力で自分た 悩みの

うである。 自然保護において必然的にからんでくる「保護か活用か」「援助か自立か」 の問題にも、 矛盾のない行動 が 取 体験をする場としても生かせる。

原生自然の保存と自然の活用、 それを考える体験もできる。 自然の回復と改造という問題。 これらの難しい選択はその場所場所での最 適

た。この二つがこれからの作業を進める上での「鍵」だと考えた。 今まで誰も役立つと思わなかった天然の苗床が有った。村人のラリグラスに対する誇りと希望が有っ ンに村の花粉は届かないとの仮定による)。

《対応策の選択》

これに対し、その後色々な方策を考え、 の考えに、まだずれは有るが。百五十年かかるといってみたものの、やはり早く実を結ぶことをやってみたくなる。 ことは始まってしまった。村の向上心と可能性への夢に火をつけてしまったといって良いだろう。彼らの期 教わり、その一部から始めている。

対してはどう考えるか。 Ш 一の中に様々な種類を植えた場合、樹種の交雑が起きる。これを防ぐことは重要だが、人の生活圏である村 日本の桜を持って来てほしいなどという希望に対してどう考えるか。

には村を豊かにすること、それを植林で行う。これらの背景の中で、今は以下のような歯止めと内容で進めたい ている。 ポカラに近いという立地条件。天然の苗床の存在。村人の熱意。カトマンズ在住メンバーの関心。 自 然保 0 ため

- 村は生活圏だから、 自分の周囲を自分たちの気に入るように手に入れるのは、 自由だと考える
- の木にその出所を明らかにする手段 他地 桜や他の樹種を植えるならネパール産のものに限る。これらにより花の有るシーズンを広げる。 域 のラリグラスも持ち込む。ただしネパール国内からに限る(ここの価値を下げないため)。そして全て (地図と識別票)を施す。交雑をふせぐため、村の種子からは次代を増やさない。
- この尾根のも 上部はコアゾーンと考え、上部のラリグラスへの撹乱を防ぐために、H村周辺より上に植えるラリグラスは、 のに限る。一九〇〇だのカルカあたりが、自生しにくいちょうど良いバッファーゾーンになる (コアゾ
- 発芽または発根をさせ、 ネパ ール各地から積極的に、 村に植える。 種子、 この過程で産地と、素性がはっきり残るシステムを組み上げてお 挿し木の枝、 実生の苗を採取して集める。 種子と枝は 天然の 苗 床を活
- 供は受ける。このように対等の関係を崩さないように気をつける。 動は全てお互いにボランティアであるとする。 Н 村に無い 機材や薬品は日本から提供するが、 宿泊などの

提

- つよう勧める。わずかな雇用の代償にごみと人心の荒廃を残す観光設備などを作るなど考えさせないよう注意する。 第三者に対する民宿やボーターの価格設定を薦める。ゲストに対する誇りのあるサービスにより村の
- ネパール各地のラリグラスを集めたラリグラス公園」が出来、そこに程々の人が訪れ、 村が次第

▼ラリグラスの分布状況≫

に豊かになる方向に誘導してみたい。

立していた時の位置を考えて計測。高さは高いときは目測である。これを見ると高地ほど生育に適するが、村での育 成も可能だと推測できる 高度はTHOMMEN気圧高度計六〇〇〇㍍による。太さは胸高の幹廻りだが、斜面に倒れているときはだいたい直 村から始まる尾根をたどり、山道沿いに観察した結果をまとめてみた。約五○は幅ぐらいをとらえて調べたもので、

子一本。(一七三〇m) 東斜面の道端に高さ九〇㎝ (五~六年物) 一本。(一七九〇m) 東斜面高さ一六m数本。(一 のスペースある。 高さ四m周長三○㎝、高さ一五m周長八五㎝、他。(一九○○m)キャンプ地にしたカルカ、北面の緩傾斜地に 八一〇m)二本、高さ一〇m周長九〇と八〇㎝。(一八二〇m) 東斜面高さ一三m周長一二〇㎝、高さ八m周長九〇㎝、)m) 斜面の東高さ八m周長六〇㎝、土壌H6。(一六五〇m) 高さ七m周長八〇㎝、高さ五mあと二本、 (一五○○m) H村、鯉のぼりを立てたキャンプ地。(一六○○m) 初めて北西面に高さ六m周長四五㎝。(一六三 五 cm

天高く大きいの一本、根曲がり一本、普通の一本。 (二○六○m) 北面にいっぱい一○数本。(二○九○m) 北西面に巨木周長三五○㎝、枝周長一五○㎝。(二一○○m) 南斜面周長二八八㎝、着生多い、霧のかかる地域、土壌硬度一三~一八、m6、九時三○分の温湿度は二一℃、六八%。 (二〇○○m) 南面高さ一○m周長一○五㎝、一五〇㎝四本。(二○五○m) 南面高さ一二m周長三m。(二〇七○m)

(二一三○m) 約一○本の大樹。(二一七○m) 一時ラリグラスなくなる。(二一九○m) 再びラリグラスが現れる。

(二二〇○m) 北斜面にラリグラスの大樹

入る所、 (1 | | | | O m) 思いがけず実生発見 初めて実生を発見。 (二二七〇m) 周り全部がラリグラス、実生発見。(二二三〇m) トラバースに

られた大木と、水流の周りに伐採後がある、ここに一〇〇以上の実生が有った。 (二二〇〇m) 分岐のコル、周辺に木ある、二〇以上の実生を発見。(二一七〇m) 上のカルカ、 数 m 降りた所に切

(二二○○mから上の東斜面) 二○~三○m樹高の木が密生。(二六二○m) 花の咲かなかった木が多い。

≪現地の協力者≫

ジャガンナート・アチャルヤ氏 (村の実力者)、トヤナート・アチャルヤ氏 (村の植林と苗床の責任者)、クリシュ

▲ゴラパニへの対応♡

ナ・プロシャード・バストラ氏

(村長)。

出 があるが、 て密に成長し、巨大なモヤシとなっているのを見た経験からすると、 処方箋は異なるが、ここの保護の作業を連動させたいと考えている。日村上部の尾根に樹齢二百年ぐらいの大木が競 「来るとすれば、保護と活用を両立できることになる。 ラリグラスを考えるとき、気になるのはゴラパニである。この広大なラリグラスの森も破壊が進んでいる。 計画している詳しい調査を待たないと結論は出せない。 もしこの仮設が正しく、 密生の均質なコントロールに回答のある可能性 長期的に、 上手な指導が Н

≪今後の進め方≫

進展は現地の反応と作業の成否で柔軟に対応する必要があるが、 いま考えられる行動内容を列記すると以下のよう

一木。ここが破壊されないための指導。 種子の採取 (現地及びネパール各地、 植林の根づき状態の調 遠征隊にも協力してもらう)、天然の苗床への位置を定めた種蒔きと挿

- ゴラパニの調査 (地図作り、樹種の同定、 分布、生育密度の測定など)。
- 日村での挿し木と実生の採取と植林を雨季に行う。発芽した苗を適地に植える(上部にはこの尾根のラリグ 各地との樹種の比較調査。天然の苗床の発芽状況と挿し木の発根調査。取り木の試み。ゴラパニの調査。

くなり、 これらを、現地の反応と作業の成否に柔軟に対応しつつ毎年繰り返す。数年から十数年後、 心は豊かで、人は訪れて村民の家に泊まり、 村人は自ら作った美しい村を誇りとし、 村の産物とラリグラス H村そのものは、

ラスの種類と同じものに限り、異なるものは村の中に限る)。

の花の首飾りで人をもてなし、上のカルカの環境を使った苗床を整備し、木の採取が減り、山の緑が増える。そして ヒマラヤは美しい。このように展開してくれると嬉しい。

これが出来れば、 自主行動による「持続的自然保護」となってくれる。

40

近代アルピニズムの山岳美観

―その成立の一側面―

田中純夫

て行っているのだから。 になってしまう。山に登ることはあたり前になっているのだし、そうした問い以上に事実(登攀史)はすでに先行し という意見はあるにしても、登山、 山岳に挑もう、登ろうとする行為に対しては何も疑念の差し挟まれることはない。何もあんな苦労をしてまでも…… 従ってそうした時代においては、人は何故に山に登るのかというような問いを提出してみたところで、それは愚問 アルピニズムという人間の行為は社会的に全く是認された行為となっている。

こんにち山岳は何ぴとにとっても美しいものであり、雄大なものであり、崇高なものでさえある。従ってそうした

社会的に発生してきた現場にまで立ちもどる必要があるだろう。つまり一種の判断中止を行って、山岳美学の、そし 岳は美しい、崇高である、登山は人間にとってすばらしい行為だ、等々)を一旦中止して、そうした観念が歴史的 てアルピニズムの観念史を溯ってみる必要がある。 そこで人は何故に山に登るのかを真剣に考えてみるのなら、この現在あたり前のこととして通用してい 山

そこで、そうした山岳の観念史をたどってみると、今日通用している山の観念はそんなに古いものではない、

しているが、 の中にたどらなければならない。すると今日的な山岳観はルネサンス以降、むしろ「近代」といわれ うことが分かってくる。アルピニズム発祥の地はヨーロッパであるから、それを支える山岳観もヨーロッパの観念史 比較的新しい観念だということが分かってくる。近代以降の世界観、 実はそれはそれほどあたり前のことではないということ、このことをここでしっかりと確認しておく必 自然観、それを今日の我々は当然のことと ている時

以下、 現代に通ずる近代的な山岳観、そしてアルピニズムの観念が、 いつ、どのように発生してきたのか、

溯って検討する

1

要がある

想像力をかき立てられて純粋に知的、審美的な動機からこの登山を思い立ったのである。 山のみを目的とした登山であったという意味で、最初の近代的登山と言われている。ペトラルカは山頂からの眺望に 山の頂きを見てみたいという願望にかられて」のものだったのであり、それは何ら実用的目的をもたない、 ヴィニョンの北東にそびえる海抜二〇〇〇旨に近い山である。この登山はペトラルカ自身によれば「ただ、有名な高 人であると言われている。その彼が一三三六年四月二十六日に登山を行なっている。登った山はヴァントゥウ山でア トラルカ(一三〇四―一三七四)はイタリア文学の巨人の一人で、ルネサンス運動の首唱者であり、 最初の近代

て彼は持参してきていたアウグスティヌスの「告白」に目を通そうとそのページを開くと、偶然開いたそこにはこう 書かれていた。 して立ちつくした。自分が見ようとしてやってきたさまざまな眺望に感嘆し、あるいは地上のものを嘆賞した。そし 苦労して山頂に立ったペトラルカは「ただならぬさわやかな大気、ひろびろと打ちひらけた眺望に感動し」茫然と

自己自身のことはなおざりにしている。」(『告白』第十巻第八章十五節 人びとは外に出て、 山の高 配い頂、 海の巨大な波浪、 河川 の広大な流れ、 広漠たる海原、 星辰の運行などに讃嘆し、

まなお地上のものに感嘆している、そういう自分自身にペトラルカは腹立たしくなった。 のも偉大ではないということ、このことを彼は異教の哲学者たちからさえもとっくに学んでおくべきだったのに、 トラルカは愕然として書物をとじた。魂のほかにはなんら感嘆すべきものはなく、魂の偉大さにくらべれば何も

がった欲望をこそ足下に踏みつけることではないのか!…… ……われわれが懸命に努力すべきは、 沈みこんでしまうようなことがないならば、その瞑想の高さにくらべるとあの を忘れては、 は愚かにも、 まや彼は山を見ることには飽きてしまって、内なる眼を自分自身へとふりむけ、沈黙の内省にふ 内部にこそ見いだせるはずのものを外に求めている。……人間の瞑想がもし地上の みずからのもっとも高貴な部分をなおざりにして、さまざまなことに気を散らし、 地上の高所を足下にすることではなく、 地上的なものにかきたてられて膨れあ 山の高さなど腕の長さにも足りない。 醜い汚泥 むなしい けった。 のなかに

この最初の近代人の目に映った山岳美の景観は むなしくも否定し去られてしまったのである。 ほんの一瞬にして、 キリスト教の神の $|\mathbb{R}|$ 0 聖なる天上の 111: 界 0 前

その高さを詳しく叙述して、セヴェンヌ山脈に熱を上げてい またペトラルカ以前にもヴァントゥウ山へはパリの学校教師ジャン・ビュリダンが一三一六年と三四年 が自然美、 を用いていたのである。自然美への開眼はべつにペトラルカが最初という訳ではない。アウグスティヌスにしてから スチアゴの山の表情を描写している。しかし全体としてアウグスティヌスは、ただ道徳を語るために山のイメジ と言われているが、事実アウグスティヌスは山をよく知っており、 聖アウグスティヌスの著作を数多く読んだ者は誰でも、自然界への言及の豊富さに感心せずにいられ 山岳美への感性はすでに持ってい た。 中世の文学においても自然への共感は随所に示され る 光と色にも敏感であり、 しばしば立ち止まってカ 0

晩年になってますます頻繁に好きな登山を行なうようになったという。 またドイツにおいては十世紀頃からさまざまな登山や山の描写があったと言われており、 ケルンのアンノ大主教は

ン・ヴァントゥウの上でほんの一瞬、ペトラルカは『栄光の山』を見たのだった。しかしその一瞬は過ぎ去り、ロー 巨人にしてからが、その山岳美観に対する率直な感情を伝統的観念によって征服されてしまっているのである。「モ を全体として支配していた世界観はやはりキリスト教のそれだったのである。従ってペトラルカという近代的知性 マの詩人とキリスト教説教師から受け継いだ『暗い山』が、彼の目を翳らせてしまったのである」(ニコルソン)と しかしそうした自然への接近、感性というのは連綿としてあったにしても、このルネサンスの時代までヨーロッパ

言

われるゆえんである。

代の一つの共通認識にまでなるには相当の時間が必要であった。中世的世界観が近代的世界観に変るためには、 とを次に辿ってみようと思う。 の」であるという認識が、山々は か。どのような時代的背景があってこのように世界観、 一山々は「自然の恥と病」であり、それさえなければ美しいはずの自然の表面にできた「疣、 のように個人の意識性のレベルにおいては率直な感情として山岳美観は受け入れられていたにしても、それが時 「自然の聖堂、自然の祭壇」であるという認識に変るためには何が必要であったの 宇宙観、そして山岳美観の変様が可能となったのか、このこ 瘤、 火ぶくれ、腫

2

地表に生じたものであるということになる。人間の罪を表わすものであり、 る。これが地球上における山岳の起原である。伝統的にヨーロッパ・キリスト教文化圏においてはこのように考えら 間 の堕落に対する神の裁きとしてノアの洪水が出現する。この洪水によって地球の表面はえぐられ地表に凹 神による天地創造直後の地球は完全体であった。完全な球であり、地球の表面は完全に滑らかであった。しかし人 教えられてきた。とすると地球上の山岳というのは人間の堕落の結果生じたものであり、 聖なるものを目指すべき人間にとっては 神の裁きの結果として

いわしきもの、 人間にとって美しいもの、好ましいものとは、神の意志に適うものであり、神の知性に基づくものである。 嫌悪すべきものということになる。 従って

こうした認識

を人間

から

持

つようになると、

地表の

凹凸である山

出岳を単

下に神の罰の

L

るしとみるの

では

その

中

形態というのは不完全なも 地上 0 \$ のすべては聖なるものにもとるものであり、 0 神に背くもの、 嫌悪すべきも またその規則性 のということになる や調 和 0 何ら 認めることの 出 出来な 地

上

0

0 0 0 知 意図に適うものなのである。 美しい 何 性の完全性、 0 ものとは神の知性に適うものであるから数理的 でも その 調 和を示すものである。 地上の Щ 岳の示す不規則な形態は美しい 従ってピタゴラス的 な調和の中に 調 和 あるものでなけれ 0 ものではなく、 中にあるものが美しいものなので その不完全性 ばならな 数 罪 理 0 的 あ しるし 世: 界 は 以 神 神

\$

n 5 ル かい 神を第一 Vi 1 因果 自身に内在する自然原理によって、 ない。」そしてデカルトは天地創造、 \$ ところが科学的、 のとなった今、 は次のように言う。 原因とする機械 基づき機械論 我々はこれらの 合理 的宇宙論 「理性の光から導き出される……物質的事物のいくつかの原 的に説明することが可能となってくる。 的な思考様式が確立してくると、 つまり物質はその性質と、 諸 宇宙を形成するという宇宙論を展開 原理 洪水および大火に関する諸説と、 0 みから自然現 元象の一 宇宙における地球の生 それが混沌の中 ガ 切を説明 リレオやケプラー 六日間天地創造説の長い した。 し得るものかどうかを、 0 物 成、 理法 理を確証し、 による天体 そして地球 則に従 って示す 0 0 伝統に背を向け 検討しな その真 法 構 則 造その 性 を受け 理が 向とい 17 ń 疑 ば 61 ま な な 力

に作られた、 負 的]原理 0 その後近代物 111 であるという最 罪 思 0 慮深 理学の 111 界であ Vi 高 計 祖 るとい 0 画に基づく世界であるとい 証明を提供する。 1 1 1 う世界図 シは 『プリンキピア』の中で秩序、 一式に変って、 つまりこの時代になってくると地上の世 う世界認識 この地上 へと変って行く。 0 世界はそもそも神 均 整 規則性こそが 0) 界 意志によって合理 は 神 宇 宙 0 111 0 界 調 0 和 対立 を 形 的 成 合 Ħ 的 的 遍

にさえも神の 謂観念史学派 恩寵を見ることが 0 碩学、 M . Н 可能となってくる。 コ ル ソンは無限性 この 0 美学の 世界観 発生 0 転換、 展開 新しい 過程 宇宙 を読み取 ってい 自然学の誕 生 0 過 0 中に、

広大無辺性すなわち無限性 ものだからである。 おける自然の諸象は人間の作品よりもはるかに偉大である。というのもそれは空間と神との広大無辺性を反映する 一女史によれば無限性の美学とは「広大無辺性を神から宇宙空間へ、そして地上の山々へと移行させた美学」のこ 神の広大無辺性、 この無限性の美学においては、芸術は地上の雄大な自然を通り、さらに宇宙空間を通って、真の (sublime)」はこの大地の広い海と山々を讃え歌うために降りて来るのである。 (=神)に向って上昇して行くが、さらにまたその無限性から発して新天文学が発見した 偉大さ、 崇高さ (sublime) を山岳の中にも読みとろうとする美学のことである。

空間の領域

を通り、

崇高

うに、神を反映する影なのである。それらを眼前にし、あるいは想起しつつ、詩人たちは想像力の拡大、 広大無辺性も、 しめていた障壁をこの啓蒙の時代の哲学と科学は破壊したのである。そしてこの無限性の美学を受け継いだロマン派 た神の力と恩恵の表象として考える時、ことさら圧倒的な存在となった。」とニコルソンは言う。 力的精神』の伸張を、かつてない充実さをもって経験していた。山や海はそれ自体すばらしかったが、それらを作 た。自然は広大無辺であり、自然は不規則なのである。……山や海は、無限定の時の流れや広漠たる空間 詩人たちは「無限と永遠という偉大な伝統の、生まれながらの後継者であった。かつては人々を震撼させた自然の この美学において詩人の魂は宇宙の無限性に旅をする。人間を長い間、小屋の中、枠の中に閉じこめ、 今や正当化も非難もされる必要のなくなった不規則性の感覚と同様に、立派な遺産の一部となって の感覚のよ 中

あり、 は ニコルソンは無限性の美学とはつまり「崇高」の美学のことであり、この美学が成立し、 そこには広大無辺性が宿る永遠なるもの、神へと通ずるものとして、理解され、肯定され得るものとなったので 概念が確立し、 それさえなければ美しいはずの自然の表面にできた「疣、 自然の祭壇」となるには「崇高 (sublime)」概念が確立する必要があったのである。そうしてこそ始めて山 明確にされて行く必要があった、ということを述べているのである。つまり「自然の恥と病」で 瘤、 火ぶくれ、腫れもの」であった山岳が、「自然 発展して行くためには

ある。

概念は て実はこの「崇高」という言葉は、 さてこのように時 実は古典主義 代の世界認識、そして具体的には山岳美観を前述のとおり一変させたとされる「崇高 からロマン主義への文学思潮の 新プラトン学派の哲学者ロンギノス(二一三一二七三) 推 移の中で重要な役割を演ずるキイ・ の著作とされてきた ワ ードでもあった。

3

高論」に由来する文芸批評

上の重要概念なのである

世紀初頭からイギリスにお はアディスンであった。アディスンは くも文芸にたずさわる者の口に彼の名がのぼらぬことはなかったほどだと言われてい してくれるものとして、ここにいわば批評の基準を見い出したのである。かくして「スペクティター」を通して十八 このロンギノスの「崇高論」はドライデンやポープによって認められてはいたが、その名を広く世 ギリスの政治家、 美学者であるエドマンド・バーク (一七二九—九七) の「崇高と美との観 V てロンギノスの研究熱は非常に高まり、 「崇高論」 中の 「異常なもの」「偉大なもの」「美しいもの」こそ想像力を喜ば 一七三八年頃に彼の名声は絶 る 飲念の 頂に達 起源 間 1: 知らせ 0 V たの 7 0)

はべ フは という詩 を重ねた。 ち評判となり、 哲学的研究」(以下「崇高と美の起源」と略記)が現われたのはこのような時代である。この著作は現れるとたちま 者でもあったアルブレヒト・フォン・ハラーは一七三二年、彼のアルプス旅行の印象をまとめて「ディ・ 上界においても山 一彼の絵筆によってアルプスを絵画の世界に本格的に導入し、 ル 0 時代、 > 0 集を発表し、 出 詩人たちはアル 版者ワグナーの 美学の分野においてはもちろんのこと、広く文学にたずさわる者にとっても関 岳画というのが次々に描かれるようになってきていた。スイスのベルン生まれの哲学者で自然科学 文学の世界にアルプスを導入している。 求めに応じてアルプス地方を写生旅行し、 プスの山 々についてその雄大さ、 またスイスのカスパ 崇高さをうたうようになってきていたし、 山が絵になることを示した最初の画家と言 自然のありのままの姿を描 ル・ヴォルフ 心の的となり次々に版 (一七三五 てい また絵 アルペン」 る われてい ヴォル 九八)

る

恐怖の対象であったアルプスの山々も、今日でいうトレッキングの対象になり始めてきていた。 辺に点在する湖、絶壁にかかる滝などに惹きつけられたのであるが、その一方で、氷河や万年雪に囲まれ、かつては になった。もっともこの時代、一般的には人々はアルプス前衛の山々、山麓のみどりの谷、美しい絵のような村が岸 物学者、地質学者たちの調査旅行の場となり、また一般のツーリストも競ってアルプス山麓の景勝の地を訪ねるよう 声が湧き起こり、それとともに観光旅行という新しい社会現象が生まれ始めていた。スイスの山々は自然科学者 この時代、洗練された都市生活に倦怠を感じはじめている人たちのうちから、自然に親しみ、田園生活を欲求する 植

レクリューズ、一八四一年)といった具合である。 はまだ欠けていた。「アルプスは絵にならない。なぜかというと、アルプスは人間性の介入を許さないからである」(ド しかしそうした時代ではあっても、ヴォルフが卓越した筆で描いた荒々しい山岳風景に対する理解は当時の人々に

ための理論的な支えとなったのである。 こうした時代においてバークの「崇高と美の起源」はこの新しい山岳風景というものに対する詩人や画家の表現の

換言すれば崇高というまったく独立した別のカテゴリーを美学の分野に創り出すことにあったのである 観念がまったく無差別に濫用されているとしている。彼の「崇高と美の起源」の出発点は実はここにあったのであり、 ークはこの著作の中でロンギノスの「崇高論」を「無比の論文」と称しながらも、その中で崇高と美との二つの

せうる自然の諸法則を冷静かつ慎重に研究することによって、崇高の観念を検討、確立した。バークはこの著作にお 自身の胸の中にある諸感情を精しく検討し、経験にてらしてそれらの感情に影響を及ぼすと思われる諸事物の 、一クは美学上の重要概念「崇高 (sublime)」が「美 (beauty)」と混同され、そのため美学上の推論がすべて著 かつ要領を得ないものとなってしまったため、経験に照らした帰納的方法によって、つまりわ それ らの属性をして身体に影響を及ぼさせ、それによってわれわれの諸感情を引き起こすようにさ

からの 独自性が認められるようになった。 付けを与えたのである。これによって崇高美学はその概念上の受け皿を与えられ、また一つの美的 ようになってきていた山 て終始自分及び他の人々の経 幾多の実例と実験とによって巧みに自説を立証している。そしてこの論文によって、この時代広く表現される 岳風景や氷河の風景、 験を取り入れ、 哲学、 また崇高なものの文学的、 文学、 絵画、 彫刻、 芸術的表現に対する確固たる理論的な基礎 建築、 医学、 物理学等、広くあらゆる分野 価値として、

4

を持たなくてはならな 快適な感覚を引き起こすが、この方は朗らかでほほえましい。 き溢れた牧草地、 らしの叙述、またはミルトンの地獄の描写などは適意の感を喚び起こすが、戦慄をともなう。それに反して、 は快適であるが、非常に異なった仕方においてである。雪におおわれた頂上が雲の上に聳える山の眺 うよりも機知に溢れたエッセイとでも言うべきものであるが、この著作にはバークの影響が如実に認められる。 んがためには、 著作の中で美と崇高という二つの感情は道徳的な観点から考察されているわけだが、その中に次のような箇所がある。 そのカントが若いときに書いた「美と崇高の感情に関する考察」はその批判哲学期前の著作であり、 多く受けた一人と言われている。 さてカント(一七二四 われわれがこれから熟考しようとする高尚な感情は、 われわれは崇高の感情を持たなくてはならず、 小川 が曲がりくねり、草を食む畜群におおわれた谷などの展望、 八〇四 カントはその批判哲学及びドイツ観念論への影響によって有名な哲学者であるが、 はガルヴェ のドイツ語訳を通して、バ 特に崇高と美の感情という二種類である。両者による感動 また後者を正しく享受するためには、 われわれに対する前者の印象が適当な強さで起こり得 ークの「崇高と美の起 極楽の叙述、 るい 美に対する感情 め は…… 問 暴 的著作と言 n 花の咲

のと言われているが、そうした書物の中にバークと極めて類似したいまのような表現があるということは、 この著作は出版当初から評判もよく、「カントのあらゆる著書の中で恐らく最も広く読まれた」 (ボ U フスキー)

.関する以上のような認識はすでにその時代の共通認識にまで高まっていた、 あるいはそうなるまでに熟していたと

いうことを意味する

と呼ぶのか、つまり崇高の定義については縷々述べていない。崇高な対象の存在することは間違いないことであるし、 まり美学上の概念として「崇高」はすでに前提されている。 またどのような心情の状態が崇高と呼ばれるのかについて、カントはすでに明白であるとしているところがある。 の重要な著作「判断力批判」の中で行なわれることとなる。がしかしカントはそこではどのような事態をさして崇高 ついてのバークの見解以上のものを期待することは出来ない。しからばカントはこの「判断力批判」の中で何を行なっ カントはこの書物の中では、この二つの美学上の概念を厳密に検討してはいない。そうした作業は後の批 従ってわれわれはカントの著作の中に崇高概念の内実に

認識 明らかにした。ここではそうした判断が可能となる先天的な根拠が経験との関わりの中で解明されていく。 こに明らかになってくるのは人間の認識能力 たのか。 すでに時代の言葉で語られていた。そして崇高なものとして氷河をいただく山岳はあった。そうした時 何が崇高で、それはわれわれ人間にとってどのような意味を持つものなのか、こうしたことは混乱はしていたにせよ、 である。神ならぬ人間の、そして単なる感覚的存在でもない人間の、中間者としての存在の仕方である。 つまり人間 の時代が完成したのちに始めて語られる。つまりカントがその哲学を語る前に、事実として崇高概念は確立していた。 ミネルヴァのふくろうは黄昏がやってくると始めて飛び始めるというが、ミネルヴァのふくろうたる哲学は、 ークの崇高の分析は経験的であった。これに対してカントは崇高についての判断の超越論的な解明を行なった。 -のは の認識能力の分析との関わりの中で、崇高についての判断が可能となってくるゆえんの超越論的な根拠を っきりとした基礎付けを与え、また確実な表現を与えるところに哲学の使命があるのであり、 (感性、 構想力、 悟性、 理性)そのものの吟味からする人間の存在構造 代の混乱した 従ってこ

哲学もまたそうであった。

に感知させうる事 崇高と呼ばれるのは 秩序に 判定が なもの なくて「自然はわ 人間にとっての そこでカントを通して明らかになってくるのは、 (自然ではない 重畳 判断者のそうした心情状態を誘発するような自然客体に求められてはならない。 理 した醜 性 の未規 「崇高」 例 れ \$ Vi の 0 わ Ш 定的概念の表出として見られる。」 一に自然が構想力を高めて、心情が自己の本分のもつ、自然をも越えた固有の崇高性をみずから n 岳 をわ のもつ意味である。 表出にまでいたらせるゆえである。」 の美的判断において恐怖を起こすかぎり崇高と判定されるのではなく、 0 群 塊や、 n わ れ 暗鬱な狂い猛る海のようなものを何ぴとも崇高と呼ぶことは出来ない。そうでは の内 部に喚起するかぎり崇高と判定される」 カントによれば「美しいものは悟性の未規定的概念の表出として、 崇高概 真の崇高は判 念の 極めて人間 断者の心情にのみ求められねばならず、 的 な意義、 のである。「それゆえ自然がここに 先に述べた中間 氷の巨 山 かえってわれわ を抱いて荒々しく無 存在者としての それ 崇高 れ

なのであって、対象それ自身がそれだけで独立して崇高なわけではない 対象をそのように崇高と判定する人間の心情そのものの中にあるのである。 \$ 画家も表現しようとしていた。 時 代の崇高美学の展開の中で、 雄大さ、 高さを詩人はうたい、 しかしカントによればその崇高性の根拠は対象そのもの アルプスの高峰や巨大な氷河はまさに崇高な対象として捉えられてきてい 画家は カンヴァスに写し取っていた。 崇高さ、 対象その というの ものに潜むその崇高性を詩 の中にはなくて、 は 人間にとっての かえって

て解 えた自然の対象によって引き起こされる、 は崇高の感情、 高められることができ、そこでは神の問題、 通じうる能力である。 決可 ントによれば人間 能となってくる。こうした理性の理念が未規定のまま、対象の感性的表象に合致しようとするところに、 しかも理性に基づく感情が生じてくる。 人間 は感性的世界と叡 は感性的世界の中にとじ込められてはいるが、 知 自己の中に潜む永遠の能力としての実践的理念の想起の感情なのである。 的世界 世界の全体性、霊魂の不滅などの 0 中間者である。 つまり崇高とは そうしたとき理 中間存在者としての 理性の実践的使用によって叡 永遠な課題も 性とい うの 人間 理 性の は その から 実 通 践 叡 常 的 知 知 0 使 的 的 用 世 111 界 界 よ 実 0

さらにこの判断力の根底にある認識能力の遙かに進んだ陶冶が必要ということになる。 を落してくる。つまり人間が理念へと高まろうとするところに生じてくる心情である。 よって叡知的存在にまで高まらねばならない。そうしたとき実践的理性理念は対象そのものの中に崇高という形で影 が必要となってくる。 高性について判断を下しうるがためには、人間の心情がそうした実践的理性理念に対して充分に開化されていること 崇高といい、極めて人間に独自の感情と言ってもよい。感性にとらわれた人間はその理性 自然対象のそうした卓越性に関して判断を下しうるがためには、 とすると、 単に美的判断力だけでなく、 人間がそうした崇 の力に

5 ば健全な悟性と共にわれわれがあらゆる人に期待することが出来、あらゆる人から要求しうるところのもの、すなわ L に因襲によって社会へ導き入れられたというのではない。かえってそれはその根底を人間性のうちに、くわしく言え 開人にとっては単に畏怖を起こすものとして現れるであろう。……しかし自然の崇高なものに関する判断が陶冶を(美 いものに関する判断より以上に)必要とすればとて、この判断が陶冶によって初めて生み出され、そしていわば単 カントは言う。「実際、 (実践的) 理念に対する感情、つまり道徳的感情への素質のうちに持っているのである。」 道徳的理念の展開がなければ、 陶冶 (文化)を経ているわれわれが崇高と呼ぶものも、

能な感情ということになる。自然の崇高性を感得し得るためには世界認識に対して充分に陶冶されていなければなら カントによれば崇高の感情は道徳感情、 理性理念に対する教化の充分になされた文明人、文化人にとって始めて可

りに人間がそうしたものの手に委せられたとき人間を囲むであろう悲惨、 てられる自然の暴力や、それに比しては彼のもつ力が消えて無となるような自然の威力の巨大な尺度については、 いとする。アルプス山麓に住む農夫はアルプスを愛好するアルピニストや都会人に対して何ら理解を示さないとする、 ・ソーシュールのアルプス旅行記の記述にふれてカントは次のように言う。「未開人は、その破壊のうちに証拠立 従ってカントは未開人は氷河をいただく山岳を仰ぎ見ても、そこに何ら美的感情も、 危険、困窮だけをしか見ないであろう。 また崇高性の感情も持ち得な か

の善良で、 覚をみずから体得したばかりでなく、さらに彼の旅行記の読者にも与えたのである。 うるために企てたのであったとすれば、この農夫の言葉がまったく誤ったものかどうかを誰が知ろう。 うしているように 人を躊躇なく愚か者と呼んだのであった。この自然観察家が、 ル 氏の意図は人々を教えることにあったのであり、そして実際この優れた人は、 とにかく思慮もあるサヴォアの 単に道楽から企てたのか、 農夫は あるいはいつか彼の旅行についてスリルを覚えさせる記述を公表し (ソーシュー その身を曝した危険を ル氏 の物語っているように) 魂を崇高なものへと高める感 氷山 てい を愛好するすべての の旅 行家が普通そ しかしソー

その人自身の魂を崇高性へと高めるというわけである。 ることが必要なのであり、またアルプスの開拓者ソーシュールの語っているようにそうした山岳に挑むということは てくる。 である。そしてついにはカントによれば、アルピニズムは文明人、文化人の行為、しかも崇高な行為ということになっ H 岳重畳 たるアルプスの高峰群に崇高性の美学を読み取り得るためには、 山岳美学は崇高の美学であり、 道徳感情 それは文化人、 充分に開化された文明人であ 文明人の美学

は を 最 Ш 知識と広範な知的関心とを示している。この中では山 れたという。この 先端 四十 展開 カントは抽象的な思考、 雪崩などについても科学的に分析、探求のメスを入れている。つまりカントは当時のアルプスの科学的研 していたのである。 知っていた。そのうえで、 ·の知識を全て吸収していたのである。そして当然アルプスへの登山活動が行なわれるようになってきたという 年間にわたって「自然地理学」の講義を行なっている。 自 然地理学講義は天文学、地質学、 思索をのみ行なってきた哲学者ではない。ケーニヒスベルク大学の教授をしてい 今われわれの見てきたような山岳美学もその中に含むところの崇高性に関する美学 植物学、鉱物学、人文地理学など広範囲に及び、 岳についても様々に論じられ、 これはカントの人気講義で聴講者は毎 その生成、 地質構造 カントの広 一講義 氷河、 室にあ た間 究 高 彼

_.

この崇高性の概念は、

無限

関

カントの崇高性に関する美学は当時の美学理論をリードすることとなり、

5

た。つまり先に述べたように中世までの世界観とは違った世界観が確立してくる中で、美意識にも大きな転換が見ら の中でより深化され、近代人の意識形態として美意識の中に確固とした位置を占めるようになってきた過程を見てき さてこれまでイギリス、そしてドイツにおいて崇高 (sublime, erhaben) 概念が確立し、 近代合理主義思

化が見られるようになってくる。アルプスの氷河をいただく山岳を探検しようとする気持ちは、まず経済力の発展に るように思われる。崇高性の美学が確立し、時代によって承認されるようになっていたからこそ、当時の人々はアル とって美しいもの、雄大なもの、人間の精神を偉大なものへと高めるものとなっていなければならない。近代以降に らに劣らず大切なのは、これら今までは人間の生活にとって全く無関係、あるいは負の関係しか持たなかったものが、 よって生活に余裕が生じることが必要であり、また科学的探求の気運が高まってくることも必要である。しかしそれ プスの高峰へと何も妨げるものもなく進出して行くことが出来たのだと言える。 おけるこうした山岳美観の変遷を跡づけ、そして理解するためには、これまで述べてきた崇高概念が極めて有効であ 人間にとって肯定されるべきもの、正の関係を持つものに変様している必要があるということである。山岳が人間に 産業革命を経、 近代市民社会が成立して近代科学技術文明が発展してくると、そこに住む人間の意識にも大きな変

どによって確立した崇高性に関する近代的な美意識なのである。 して近代アルピニズムを推進してきた人々のアルプスの美学、山の美学に通底しているのは、バークそしてカントな し美学上の崇高概念なくしては近代アルピニズムはその発生の契機をもつことが出来なかったことは間違いない。そ 崇高概念の確立を唯一の原因として単純に近代アルピニズムが発生、成立したときめつけることは出 つまり近代的な山岳美観、 自然美観そして風景画観 来ない。しか

はこの崇高性の美学の中にその原型をもっているのである。

また登りたいとも思わないであろう。 ものでもなくなれば、 今日わ 山が崇高で美しいから人々はそれらに魅了され、そして登攀したいと思うのである。 れわれがアルプスを、 つまりもはや崇高性の美学が意味を持たなくなれば、 そしてヒマラヤを見るときの美意識 の根底にあるのもこの近代的 誰も山 岳にはひかれないであろうし、 山がもはや崇高でも美し

となってしまうと、山岳美観にも少なからず影響が出てくる。また山岳そのものも、最初は未知未踏であったものが はやそのように見えない 疑問となってくる。 ている。かのグレート・ヒマラヤが完全に登り尽くされるのはもはや時間の問題である。このようなことになってく 今日ではほとんど全て登り尽くされ、しかもあらゆるルートからあらゆる季節に登り尽くされるようになってしまっ 日のように山岳世界の科学的解明がほぼ終了し、またランドサットのような人工衛星を使って地理 かったし、 近代アルピニズムの 今日のアルピニズムにおいてかつての山岳美観、 山岳重畳たる世界の地理知識も不足していた。だからパイオニア的探検の要素も充分にあった。しかし今 地理知識の進歩、 開花期においては、 ものへと変えてしまうのである。 人間の経験領域の拡大などが、かつて美しく、雄大で、崇高と見えたものをも 山岳はまだまだ未知未踏の世界であった。 崇高性の美学を維持することが果して可能なのかははなはだ 科学的に解明 知識も完全なもの 出 来

末についてはここではまだ論ずることは出来ない。近代アルビニズム発生の現場に立ち合うことをもってこの小論を 崇高性の美学は近代から現代への時代の進展の中で、その使命を終えようとしているのであろうか。この美学の行

参考文献

然地理学

」(理想社)、

終わりたい

美の起源 ペトラルカ「ル 理 想社 ネサン 74 カント ス書簡集」(岩波文庫)、 「崇高と美の感情に関する考察」(理想社 ニコルソン 「暗い山と栄光の山 Ŧi カント 「判断力批判」(理想社)、 (国書刊行会)、 E 六 カント一自

データからみたマッキンリーの気象

JAC第四・五次マッキンリー気象観測登山隊の報告

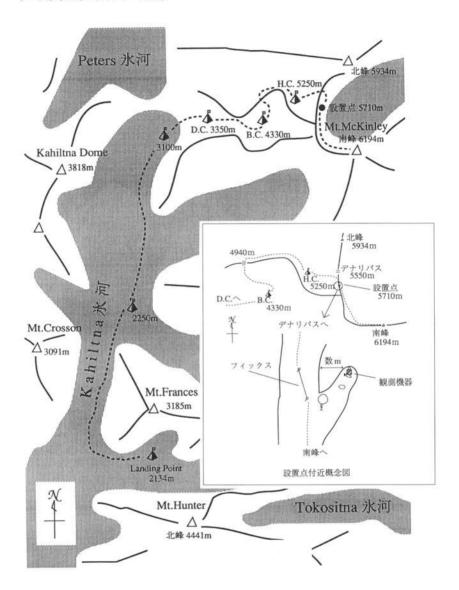
蔵喜福

大

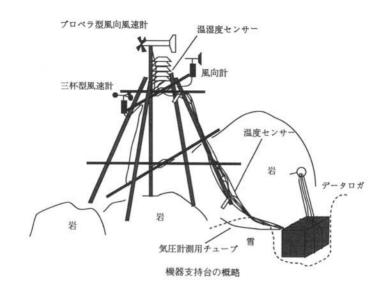
データをとらえることが第一の目的である。継続しないと意味がないので相応な資金が必要になる。 もう数年は続ける覚悟である。 にたえない。さらに会員諸氏や企業などから浄財もうけ、この援助を無駄にしないために、 を悩ましてはいるが、第三次隊から今回の第五次隊までは日本山岳会海外登山基金から助成金の援助をいただき感謝 おける風の実態解明調査」を、極北の巨峰マッキンリー山で行っているからだ。実態解明調査といっても年間 このところ五年間続けて、六月になるとアラスカ通いである。気象遭難防止と登山に役立てる為に なんとか資金が続く限り 費用の捻出に頭 「厳冬期 高 0 実測 山に

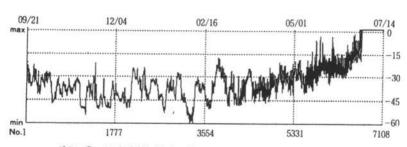
明のままだ。 を絶する風は誰も体験したことはなく、実測データもまったくない。いったいどこまで苛酷な状況が呈されるのか不 というマッキンリーの山田隊の遭難事件に関わったことにより、その解明への興味も大きな動機付けとなった。 に正確に予測するか、そのためにはどうしたらよいかという「登るため」の発想から始まった。その後、主因が「風」 このプロジェクトは、厳冬期ヒマラヤ登山の成否とアクシデントを左右する「風」という気象のファクターをいか 想像

それには高峰の実測データを得ることがまず必要という結論に達し、 適当な高峰を探すなかで、遭難の山でもある

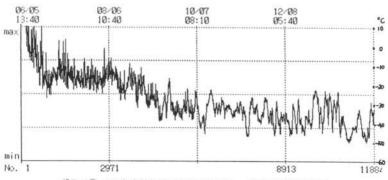


Mt.Mckinley 概念図

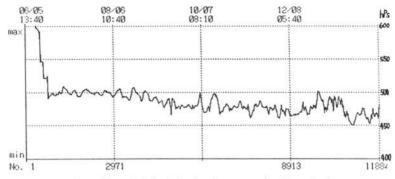




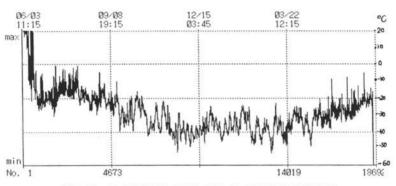
グラフ① '90 年度外気温 ('90 年 9 月 21 日~'91 年 6 月 26 日まで)



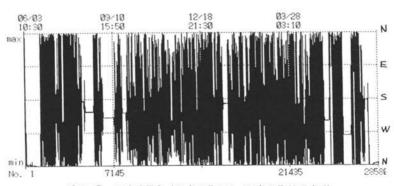
グラフ② '92 年度外気温 ('92 年 6 月 5 日~'93 年 2 月 8 日まで)



グラフ③ '92 年度気圧 ('92 年 6 月 5 日~'93 年 2 月 8 日まで)



グラフ④ '93 年度外気温 ('93 年 6 月 3 日~'93 年 6 月 23 日まで)



グラフ⑤ '93 年度風向 ('93 年 6 月 3 日~'94 年 6 月 23 日まで)

注) グラフ①~⑤上段の数字は日付/時間,下段の数字はデータナンバー

すると、毎年登頂が可能なマッキンリーが観測対象に最適と決定した。ヒマラヤに匹敵する厳し とは不可能に近く、手間や費用も莫大で賄い切れない規模になる。 ッキンリーが浮上してきた。登るだけでも困難なヒマラヤでの観測は難しい。また許可の上からも毎年登山 それより許可が得やすく、 設置回 い気象が捕らえられ 収

*

るという好条件も見逃せなかったからだ。

記録と回収したデータについては『山岳第八十七年』に第三次隊レポートとして報告したので、今号では初回 る。 概略と第四次および今年の第五次隊を核にして、回収データは少ないが、マッキンリーの気象をすこしでも浮き彫 七日全員登頂 その間、なんとしても実際の過酷な気象をとらえたい一心で、 、ッキンリー自動気象観測器機設置登山隊は、そんな苛酷な気象の実態を探るため、第一次隊が一九九〇年六月十 自 動気象観測装置を、 デナリパス上部の五七一〇ば地点に設置してから今年ではや五年目をかぞえ 観測を試みてきた。九二年までの第三次隊 から

気温度との差は約 集中し、ついで二月の十日 年六月中旬より九一 ンサー に外気温データと雪面下五〇tがに埋めた防水・保温処理をした記録装置(データ・ロガ) 一年目の九一年 滅状態で再建かなわず、三 マイナス五〇度C以下を記録した日がのベ二十八日間あった。そのうち五割の十四日間が十一月に 一〇度Cあり、 (第二次隊) 年六月中旬までの最低気温は九一年二月三日のマイナス五八・二度C つった。 間だった(グラフ①)。 は記録回収と装置補強・設置に登るが、残念ながらセンサー支柱が倒壊してお この温度で充分データ・ロガが動作することが証明でき、 隊員全員登頂と記録回収のみで終わってしまった。 内気温についての最低温度は二月七日 内気温のみであった。 のマイナス四 年間観 (補正するとマイナス六〇 このデータひとつとって 測できたのは 八度Cで、 す か

風についてはセンサー倒壊 + 月中 句) 以前の八月二十七日九時五分に、 最大瞬間風速六三六 五.

ものであ



'93 年度設置機器 '94 年 6 月 23 日回収時

山基金の助成金をいただけることになり、このプランの意図するところを理解してくれる多くの会員に恵まれ嬉 明し残念であった。 〇ぱ/秒近くの記録も十日ほどあったが、センサーとデータの設定に疑問が残り数字の信頼性に欠けることが後に判 その後、科学研究委員会のみならず学生部、青年部よりたくさんの協力者が得られ、九二年の第三次隊から海外登

九九三年・第四次隊

その後登攀四隊員は全員登頂。

た。しかし残念なことにセンサーがことごとく壊れており、惨憺たる状況だった。外部センサー風速計二、風向計二、 年の第四次隊は、 学生部、 青年部の強力なバックアップを得て、総勢十名で六月に設置とデータ回収に向

U かった。 くなり心棒だけが残り、 が、 すくなくとも数ヵ月はもつだろうと前向きな判断をくだし、 新規にセンサーを取り付けたが、 個のうち残っていたのは風向計が一つと温度計が二つだけだった。三杯式の風速計は二つとも風 風向計 は折れて跡形もない。 持参したのは同型のもので他の選択はない。また同じ目に遭う可 温度計はちぎれおちていた。 記録装置の回収と設置を行って帰国 自信があっただけに落胆は した。 杯 部 隠せ 分が は な 高

冬した経験を持つ装置だけが、 は特定できない うち三台が 帰 は録によると九月十二日午前九時ごろから翌十三日の午前 玉 測定開始から三ヵ月目の九月初旬から中旬にかけ何らかの事態により停止してしまっていたのだ。 動記録装置 が、 外部 ノイズや静電気によるものと推定された。 (データ・ロガ) メモリーが一杯になる二月八日まで動作しており、 のデータを読み取る段階になって衝撃的なことが起きた。 八時ごろまで、二十三時 目の 前が真っ暗になったが、 とりあえず胸をなでおろした。 間にわたり三〇分間 唯 記 録 次観 装置 平 均風 測 加 因

以 0 ンター 毎秒二〇以以上の風が吹き、 上の 後どんな烈風が 15 風を五 像以 0 Ŀ 関係と機器の構造上実際の最大値とはいえないので、さらに強い烈風が推測できる。 回記 0 吹い 風 録 から してい かあっ たか定かではない。 たことは る その間断続ではあるが十四時間のあいだ毎秒三〇以以上の強風を記録。 (インターバ 確かで、 ル 風が弱まった十三日の午前九時ごろセンサー は三〇分)。 瞬間最大風速は約四 五ばだっ た。 0 動きが 最大値 いずれにせよこの 止まっていた。 0 また毎秒四〇日 ホ 1 ル F. だが

場合も考 さらに湿度が少なく低温の雪は付着しづらいと判断し安心していたことを猛省した。 うな壊れ方は不自然といえた。 した場合は効果はない。 n 慮しなくてはなら か 原因と推 ナサー の性能 測 した。 は瞬間 ない さらに軽量を考慮したため金属素材の強度が弱かった点も問題とし、 氷雪の付着については、 風杯への氷雪の付着か、 L 最大風速六○≒/秒以上でも難なく測定可能なものである。 冬の時期はなおさら太陽熱は期待できないのだ。 太陽熱により溶解を促進できる特殊塗料を全体に施 あるいば軸受けに何らかのアクシデントが起きてバランスが 天候の回復が長期 たとえば団 風だけ 風速 子の の要素では 風向 間のぞめ セン このよ #1 が付 h

10 15 おけ 0 Us ては るセンサーの 属 素 改良は急務となっ 材と軸受けを全面 的に改良することに 取 n か かった。 そして湿 度計 測 0 必要も生 ま n Ŧī.

かなく、 と同じように約一〇 六月から九三年二月までのうち、 か L 几 地 いった。 ただが、 一度ほ E 年. 高 間 四 ど低くなり最 で記録 Ŀ. 前々年度に比べて非常に暖 五だ。に設置した温度計のもので九三年一月二十一日と二月二日にマイナス五 均外 部 カ できたの 気温 所 低温 度Cほど高 度は のデータはセンサーがちぎれとんだことと記録装置のアクシデントで九 は 度 九 月初旬 外気温度とデー マイナス五 Us 。までが約マイナス二〇度C、 値が記録された。 マイナス五〇度C以下を記録した日は前記 かい冬だったことがわかる Ŧī. 度
にほどと
思われ 4 . U ガ内気温、 る 気圧の三つだっ 温度計 その後冬にかけてはマイナス三五 (グラフ②)。 は 地 1 高四五 の日をい た。 デー 外気 4 れて、 • 八〇、 -最 口 低 ガ 温 内気温 九三年 月の中 度Cを記 度は 七〇などニカ 度Cほどだ。 デ ・旬までしかとれ 0 1 最 録 7 二月で数 0 低 補正 は 生 前 所 九二年 す 4 ると 年 H 度 た

が 月 ○○どになる勘定だ。 のことと思われ っていることがわかる 中 高度が変貌する高峰 旬 圧についてはい 0 四 五〇ヘクトパ る。 五七一〇ぱの観測地点の六月から八月末にかけての夏の最高気圧が五一〇ヘクト ままで年間通 気圧面からみるとマッキンリー は スカルが冬の最低気圧であった。真冬は一、二月が夏に比べ最大六〇ヘクト (グラフ③)。 稀で、 この山の怖さをまざまざと見せつけられ しで記録された例はなく、 この差は高度換算すると約七〇〇以あまりで、 この 0 最 大の た思 成果だ。 六月 五七一〇片 ~二月 初 0 旬までだが 観 15 スカ 測 ス 現 地 力 実にこれ 占 ルほ ル が で、 初 と下 六四 80 7

大蔵喜 富澤 Vi が継 福 続こそ力なりと今後も諦めずに続ける覚悟を決め に関してはその実測デー 23 42 記 会計 録 11 荒 11 并 絹 俊 JII 彦 祥 夫 22 ・タは、 47 装備 今回も失敗におわり 登攀 = 棚橋 11 宇 都宮 寛史 靖 た。 30 22 前々回 なお 機器製作= 倉島広一 第 0 四次隊の登山 記録 長谷川厚志 も含めてほとんどとれ 22 特別参加 隊メンバー 29 11 は以下 食料 野 健 11 のと 佐 な 19 お 輔 全員登 道 隊 は 24 長

7

し無事帰国した。

一九九四年・第五次隊

軸受本体とアームのみが残り、もう一台は風杯一つを残し、架台に発達したシュカブラに凍り付くといった例年にな 設置の風速センサー(三杯型) い状況となっていた。が、風向と温度センサーは無事一年を乗り切って外見上機能していた。またしても「厳冬期の 第五次隊の九四年度は学生部現役六名、 は二個とも同じような状況で破損していた。一台は風杯部分全部がちぎれて無くなり、 OB一名の参加を得、総勢八名の隊で六月にマッキンリーに向かう。

烈風」をとらえることはできなかった。

サー 風向は〇~三六〇度 速の瞬時データおよび最大瞬間風速を記録)と、全く別に新しいコーナシステム社のプロペラ型風向風速 ンサーをそれぞれ強固に改良したタイプ 風速とも瞬時データを記 今回はセンサーに関していままでの問題点を考慮し、前回と前々回使用した三杯型風速センサーと矢羽根型風向 (KDC―S4ヤング社製) (不感帯:五度)という仕様だ。 録 がする。 を新設した。 (牧野応用測器製。 風速は測定範囲が○一六○≒/秒で、 記録インターバル一〇分、 記録インターバル一五分、 記録時間は一四ヵ月と設定し、 瞬間最大耐 記録時間 風速一〇〇公 四 兀 0 H 体型セン 向 / 秒。 風向 風

フトに付いた永久磁 風速信号が非接触式の周波数出力で起動風速が低いという点である。簡単にいうと負荷のない発電方式(プロペラシャ 軟で丈夫な素材であ さらに温度湿度センサー このプロペラ型風向風速一体型センサーはABC樹脂製で耐腐食性にすぐれ、寒冷に強く、氷雪が付着しにくい柔 (PT100) 一台、 を新規に設置 る。 石が しかも小型軽量なので長期フィールド使用向き。従来のプロペラ型センサーと異なるのは し前回より多くのデ 転し、 (ヴァイサラ製。 自動記録装置データ・ロガの内温度センサー(PT100)一台、気圧センサー 固定されたコイルに周波数信号が発生する方式)で無理のない動きが特長といえる。 記録インターバル一〇分、 ータがとれるようにした。 以 記録時間は一四ヵ月、 上の 他に今回設置のセンサーは外気温度セ 湿度・気温の瞬時デー (ヴァ

の風速センサ

Í

は三月近くまで動いてはいるが

二個とも

出

力の

ない

日が相当多く十

一月中旬

まで

応

は

IF.

0

る イサラ製。 所 仕 様 を記 録 インタ 1 15 ル 五分で記 録 時 間 四 四 0 H 外 気温 内気温、 気圧の瞬時 デ タを記 す

かは、 前 しないよう時間をずらし風速、 電気などの外部 をそれぞれ 回と比較してより多くの要素が観測できるシステムになった。この装置がはたして一年間無事稼働してくれている 自 動記録 来期登ってみないことにはなんともいえないが、大きな期待感は持っている。 するデータ・ つ用い、 ノイズから守るために金属ケースかアルミ箔にてシールドを施した。すべてのセンサーは 残りのセンサーはすべて白山工業製のロガ二台で処理する三つのシステムを組んだ。 口がは 風向 プロペラ型風向風速 最大瞬時 風速、 一体型センサーと温度湿度センサ 湿度、 外気温、内気温、 気圧のデータが測定できるようにした。 前回 ĺは の器機とデータはすべて回 コーナシステム社製 記録 П が重 ガ 0 は \$ 複 静 0

風速センサー た (グラフ⑤)。 気との差は まったく同様に暖かい冬だったといえそうだ(グラフ④)。データ・ロガ内気温は最低がマイナス四二度C前 要素のみ。 ナス五六度Cほど)、マイナス五〇度C以下になった日が十一月と三月の数日のみ、昨年度と時期はずれているもの 海からの低気圧が 九三年六月中 マッキンリーでは気圧から推定すると夏の終わりは八月で、七月下旬から強風が段々と吹き荒れ、 月の下旬と九 外気温の最低は三月四日の十時十五分にマイナス五二・七度Cを記録 前回 の記 旬 推定だが風向が止まっている八月上旬と下旬、 前々回と同じ一〇度Cである。風向は夏は全方位的に風が回り、冬は南西と南 録 西 か 5 から からも 月の中 九四年までの一 0 風にのって大量の 同様に出力がない。 ・旬に強風が来て、 年間継続して計測できたのは、 湿っ その後風杯が破損していることは不思議に 風速センサーの た降雪をもたらすのではない 風杯の破損 九月下旬、 外気温とデータ・ロ に関しても、 一月下旬は大量の雪が降ったと思 かと思わ (補正すると四度ほど低くなりマイ ここらあたりに n る ガ内気温、 致する。 V 風が多いことが ままでの そして風 原 風 田 速 1 が ありそ 1) わ 向 0 れ か の 三 0

七一以一秒だった。気圧は設置して二〇日ほどでなんらかのアクシデントがあり出力がゼロになる。 た日が特定できず、 電 四〇・八\\
| / 秒、十一月十八日二時四十五分に四一・四七\\
| / 秒、下部センサーで七月二十二日七時四十分に三六・ 圧が出て動いてはいるが、その後、 記録の信頼性は薄い。ちなみに記録された瞬間最大風速は上部センサーで七月二十二日七時十二 負の電圧が出力されるという風杯の逆転現象?が起き、センサーに異常が 原因は不明だが 起き 分

登攀 = 柳沢義光 慎二 (22)、医療=加賀谷忠史 情があり現地に行けず、 なお第五次隊の行動記録は紙面の都合上省略する。いままで四回の登山隊を指揮してきた大蔵喜福 (24)、会計=宮城龍一郎 国内での渉外・資金の心配をする。登山隊メンバーはつぎのとおり。 (22)。全員登頂し無事帰国した。 (23)、食料=高橋繁樹 (23) · 互井健悟 (20)、装備=玉 隊長 一中 聡 (43) は今回は ·村真

電源関係の故障が考えられ

と思えば、費用が無駄になったわけではなく、これからの糧になっていくはずと確信しているところだ。 ジしたことがないのだと戒めている。だから失敗は当たり前と考える。 材質や構造が、 一年のスパンが必要で、早急な結果は望むべくもない。長い目での地道な努力が必要と思う。 前述したが、無人で年間のデータを捕らえてくれる自動気象観測装置のなかでも、風速センサーが一 今年、はたして念願の冬の風を記録することができるか、大変楽しみである。 開発と改良に非常に頭を悩ます。高所厳冬期での観測については、 苛酷な風に耐えられずに破損してしまっているのだ。今のところ既製品では対応できてい 使う器機すべて成功が確認できるまでは 前人未踏の登山と同じで誰もチャレン 結果は来年の夏にでる。 費やした多くが開 問 題が多い。 が

タをできるだけ蓄積し、 測が簡易にできるような方法を導きたいものだと考えている。現場のデータが年間を通して観測できれば、 測の最終目的としては、 用できるものと思う。 高所厳冬期山岳気象の幅広い研究に役立てたいと考えている。 また身近な問題として当初の発想、 マッキンリーのデータがすべての山岳に適用できるかどうかは別として、 登るためのタクティクスと遭 ひいては広範囲な規模の気象 難回 避のため 実測

礼

を申

上げたい。

タとの 相 関関係などから局地的な予測 が可能になるのではないかと推 測しているところだ。

ある。 0 0 報であることは言うまでもない。 登山者としても嬉しいことだ。 使用 映像など、 その情報が本当に必要なのは が制限される自然条件下であったり、多くの人材、 という見えないファクターを、 ハイテクを駆使して現地で予測できれば一番よいことだ。 高所登山のタクティクスや、 可能ならば気象ファックスで得られる高層気象のデータや衛星から送られてくる 冒険的な厳冬期の登山隊、 普段使う高度計や温度計などの簡易な計器で調べることが可能になれ 機材、 気象遭難を回避するため役立つのは 資金が必要な大仰なシステムは組みにくい難しさが あるいは個人レベ しかし、 現実はそう簡 ル 0 登山隊であるからだ。 単 より は Us Œ か な 確な気

5 U Vi 機 0 、データになるはずと夢見ている。いずれにしても継続された年間計測は、 研 の開発と設置をしたい希望もある。さらにこのような高所山 7 結論に 究素材になるはずである。 ッキンリーに限っていえば、 結びつけたい 調べ 実測データをリアルタイムに麓のレンジャーステーションにディスプレーできる器 あげたデータをどう料理するかは登山家と気象学者は異なるだろうが、 岳定点観測が広がってい 登山者のみならず専門家には けば、 地球規模での 願 価値 なにか ってもな 0 高

中 現 在 (第三次、 プ ロジェクトチームは科学研究委員の大蔵、 五次隊員 小林 (株白山工業)、大森弘一郎を中心に来年度に向 ハロ ルド・ ソロモン、 長谷川 け鋭意進行中である。 (第四次隊員)、 千葉 一次隊 員、

研 究 最 所牧 後に、 野 器機製作において多大なご支援、 章 沈氏、 牧 野 良誓氏、 器機の貸与を快くお引受けいただいたコーナシステム㈱寄崎氏に本誌上をかりてお ご協力をいただい た白山工業株吉田 枪氏、 小林正幸氏、 株牧野 応 用 測

サガルマータ南西壁冬期初登攀

八木原圀明

群馬岳連三つ目の世界初成功

マータ南西壁の冬期初登攀に成功した。さらに第二次、第三次と実一九九三年十二月十八日、午後三時二十分、世界最高峰・サガル

質登攀隊員七名中六名が登頂に成功した。

一年春以来二十三年間で岳連が独自に実行したヒマラヤ登山は三度八○○○\| 峰での「三つ目」の「世界初」の記録であった。一九七年冬のアンナブルナⅠ峰(八○九一景) 南壁の冬期初登攀に次いで、六七景) 南東稜初登攀(『山岳』第七十四年参照)、一九八七年~八荒馬県山岳連盟にとっては一九七八年秋のダウラギリⅠ峰(八一群馬県山岳連盟にとっては一九七八年秋のダウラギリⅠ峰(八一

状況であった。

十年先を見越して、今の中学生や高校生達が山登りを好きになり、はもちろん大切である。しかし目先のことばかりを考えることなく、はもちろん大切である。しかし目先のことばかりを考えることなく、けがルマータ南西壁登山はアンナブルナ南壁冬期登山を推進中のの偵察と七度の登山である。

おきたい」と提案したのが発端であった。それも冬期の南西壁登山エベレストを登れるように、今からネパール政府からの許可を得てヒマラヤ登山を志すようになる、そういった人達が気持さえあれば

状態であり、それ位先でなければ普通では許可取得もままならないを前提とすると、十年から十五年位先まですでにすごい順番待ちの登山申請が殺到し、一山、一シーズン、一ルートに一隊の許可発行を目標とした。

「バリエーションルートからの登頂」という、さらに困難な課題をまいぞ、と単なる冬期の八○○○は峰登山ではなく、上記二条件に期登山などが流れである。その世界のトップ達の潮流に群馬も遅れラヤの高峰において、少人数、無酸素、アルパイン・スタイル、冬ラヤの高峰において、少人数、無酸素、アルパイン・スタイル、冬アンナブルナ南壁冬期登攀計画は、世界の登山界の最先端はヒマアンナブルナ南壁冬期登攀計画は、世界の登山界の最先端はヒマ

加えての計画であった。

売りのキャラバンの切日、ミャグディ・コーラを下りながら寻恵リ・ペアールート登山については『山岳』第七十八年参照)。リ・ペアールート登山については『山岳』第七十八年参照)。大量壁ペアー・ルート隊に十八名中十名の群馬岳連会員が参加し、大量壁ペアー・ルート隊に十八名中十名の群馬岳連会員が参加し、大量

ば、 を初登攀したばかりである。 ウラギリのペアー・ルートという過去九隊もが失敗してきたルート とアンナプルナ南壁と超大物ぞろいである。 レスト ターゲットとした。 次の群馬の冬のヒマラヤ」 より確実な山とルートを選びたかった。アンナプルナ南壁を次 0 南西壁、 キャラバンの初日、 ローツェ南壁、 計 しかし、 ミャグディ・コーラを下りながら早速 一画の目標の山選びに入る。 マカルー北西壁、 私自身が隊長でやるのであれ 鼻息は荒い。 ダウラギリ南壁 何しろダ 候補はエ

不足で五十日間の登山は失敗に終わった(『山岳』第八十年参照)。の登頂は冬期のエベレストを含む八座である。しかしあまり降らなの登頂は冬期のエベレストを含む八座である。しかしあまり降らないのでは?と考えていた雪が、大雪となって何度も我々に襲いかかいのでは?と考えていた雪が、大雪となって何度も我々に襲いかかいのでは?と考えていた雪が、大雪となっての登山のつもりであった。一九八四~五年の冬期は自信を持っての登山のつもりであった。

栄光と悲劇

ブルナ南壁の冬期登攀の雪辱を果たそう、という編成であった。連の海外登山研究会員とした撮影隊を組織した。あくまでもアンナき受けた私はプロのカメラマンを含む十一名の隊員中八名を群馬岳一九八五年秋の映画『植村直巳物語』のエベレスト撮影隊長を引

に、「十五日間登頂」を目指し、登山を開始した。回同様テント・ピークなどで念入りな高所順応トレーニングの後は、一九八七~八年の冬期にアンナプルナ南壁への再挑戦をし、前身を含む群馬岳連会員であった。その成功で自信を取り戻した我々身を終は七名がエベレストに登頂したが、そのうちの五名が私自振影隊は七名がエベレストに登頂したが、そのうちの五名が私自

十二月二十日に山田昇、

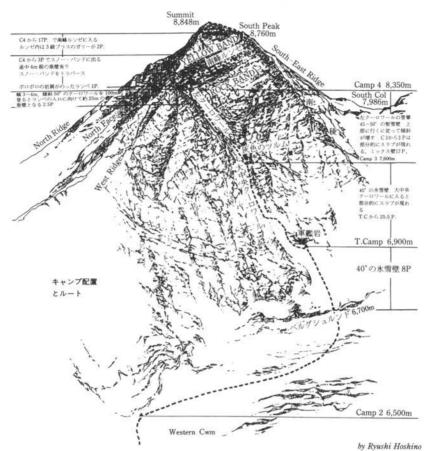
三枝照雄ら四名が冬期初登攀に成功

われる事故により二人共逝ってしまった。 座全山登頂計画実行中の合い間の冬期五大陸登頂ツアーの仕上げ中 ル三国合同チョモランマ・サガルマータ縦走隊に参加させて頂き、 明という悲劇も味わわされてしまった(『山岳』 が、下山中に小林俊之、斉藤安平の二隊員が相次いで転落、 して北側から登頂者となったのであるが、 山田は日本人隊員の中で唯一人の縦走者となり、 生き残った山田、三枝はご存知、日本山岳会の日本・中国 山田の登った八〇〇〇に峰は九座十二回、 翌八九年二月に厳寒・烈風のマッキンリーで 山田の八〇〇〇江峰 七〇〇〇公峰の 第八十三年参照)。 三枝はTV隊員と 風 かい 原因と ・ネパ 初 谷 頂

とにした。 を引くことまで考えたが思い直し、 ラヤ協会の尾形好雄らを補強隊員として迎えることにした。 は二座であった。 中核隊員の相次ぐ遭難死で、 唱えてきた「群馬モン しかし登攀要員が半減してしまっている。 U 主 義 時は私自身がヒマラヤ登山 の転換である。 サガルマー タ計画を実施するこ 私は日 本ヒマ 私自身 から身

日西壁冬期登攀成らず

そこへインドの「インド・チベット国境警察(ITBP)」からシッ



申 + 잠 までの経験で十分に通用すると考えて 攀 4 E 側 0 術的な面では全く心配していなか から れ 成 デ から 功 1 H 0 は 本ヒ カ あ な り得な F 登攀なくして、 マラヤ協会に I ンジ ことは 1 対 ガ 分 冬期 合 かっつ 同 入る。 南 登 0 7 西 Ш Vi 壁 0

登山を 隊員に 加 るためには千 年 B カ 一後の H カ 本 四 チ 年当 F ガ 1 度でも多くヒ ı ンド 九九 九九 J. ル 7 時 載 0 各 +} 1 2 中学 年 5 遇 4 ガ 二名 春に 南 ル 0 ガ 一年の冬に、 の合計 ガ 西 7 登 7 登山 壁冬期登攀を ラヤ登山を経 実 行 4 ンスである。 は 六名が 登山 校 高 0 生 所 冒 順 Vi 心応と若 7 から 頭 登 は 実 四 1 頂 名 書 位 0 せ

そこからのあと一 年. 0 月 成 短期 功 度と八三 1000X 時 日に登山を 0 間 C C 歩を踏み出すことができず Ŧi. ラ U 4 027 1 " 1 7 開 到 15 始 0 達 C 到 5 達 る わ 0 核 が る す 九 か 九 肝 部 を 0 後 突 H

-六年参

照

四



サガルマータ南西壁の登攀

では?」という気持にさせられていた(『山岳』第八十七年参照)。と言い張る私への手前、口には出せなかったのだろうが「もうダメした。隊員達は「あそこまで登っている。もう少しだ、必ず登れる」した。隊員達は「あそこまで登っている。もう少しだ、必ず登れる」した。隊員達は「あそこまで登っている。もう少しだ、必ず登れる」と言い張る私への手前、口には出せなかったのだろうが「もうダメに烈風に追い返されてしまう。七十一日間に及ぶ登山も失敗に終に烈風に追い返されてしまう。七十一日間に及ぶ登山も失敗に終

どへの「逃げ」は毫も考えず、南西壁一本に絞る。 そして超高々度の世界最高峰サガルマータの南西壁を自然条件が最 さの全てを有する、と言っても過言ではない。 山登りにおけるあらゆる種類のおもしろさと困難さを合わせもつ。 した。隊員達は「あそこまで登っている。もう少しだ、必ず登れる するならば、敢えて玉砕も辞さず、 も厳しい冬期にあえて登ろうというのである。 では?」という気持にさせられていた(『山岳』 それを群馬県山岳連盟という一地方組織で登ろうというのであ 言うまでもなくヒマラヤ登山は高度という絶対的なものを有し、 しかもどんなことがあっても、 意思統一しての登山であった。それが、 口には出せなかったのだろうが「もうダメ の覚悟で臨み、 ノーマルルートである南東稜な ヒマラヤ登山の困 粘りに粘った後にと 第八十七年参照)。 よしんば力負 目的意識を徹底

はなかった。何度となく事故も起こし、仲間も失った。そのたびにで実行して来たヒマラヤ登山もかならずしも順風満帆というわけでで実行して来たヒマラヤ登山もかならずしも順風満帆というわけででま行して来たヒマラヤ登山もかならずしも順風満帆というわけででま行して来たヒマラヤ登山もかならずしも順風満帆というわけであれた時の思いが強ければ強い程、意識が高ければ高い程それに敗れた時の思いが強ければ強い程、意識が高ければ高い程それに敗れた時の思いが強ければ強い程、意識が高ければ高い程それに敗れた時の思いが強ければ強い程、意識が高ければ高い程それに敗れた時の思いが強ければ強い程、

うとう断念させられてしまった。

かし資金のことを考えると気は重く、頭は痛い。「なにくそ、これで終りにしてどうする」と思って続けてきた。

1

なかった。群馬岳連創立五十周年を記念しての登山でもあった。た私自身のヒマラヤ登山の総決算、集大成と言えるような大計画でた私自身のヒマラヤ登山の総決算、集大成と言えるような大計画では察に始まった群馬のヒマラヤ登山二十二年の殆んどに関わって来は察に始まった群馬のヒマラヤ登山二十二年の殆んどに関わって来は変した。

使用等でファイナルキャンプを早期に確立し、手のつけられない烈を用等でファイナルキャンプを早期に確立し、手のつけられない烈が、落石は思ったよりはひどくなかった。寒気は現代の進んだ衣類が、落石は思ったよりはひどくなかった。寒気は現代の進んだ衣類が、落石は思ったよりはひどくなかった。寒気は現代の進んだ衣類が、落石は思ったよりはひどくなかった。としている。それらを解決すれば必ず登れるはずである。失敗は色々なことを教えてくれる。反省すべき点、改良すべき点失敗は色々なことを教えてくれる。反省すべき点、改良すべき点

志と力のある人間、この三つを解決さえすれば登れるはずである。風の吹き出す前に登ることが全てであった。資金と軽量化と強い意使用等でファイナルキャンプを早期に確立し、手のつけられない烈

再起への戦略・チョー・オユー登山

最大の問題である資金についてはスポーツニッポン新開東京本社最大の問題である資金についてはスポーツニッポン新開東京本社最大の問題である資金についてはスポーツニッポン新開東京本社最大の問題である資金についてはスポーツニッポン新開東京本社

南西壁登山の実行の方がより確実であろうことは分かっていた。登山」で高所順応を完璧に済ませて、本番である冬のサガルマータせなかった。しかし、この時も「春」ではなく「秋の八○○○≦峰て高所順応をしての登山であったが、事前高所順応を完全には生か

てしまうが、折角のチャンスだから、と利用したものであった。複雑さ、隊員の休暇等々を考えるとどうしても決断がつかずにいた複雑さ、隊員の休暇等々を考えるとどうしても決断がつかずにいたでが二つの八○○○≦峰の継続登山による資金や計画の巨大さ、南西壁登山の実行の方がより確実であろうことは分かっていた。

チョー・オユーの頂上は必ずしも唯一の目的とは考えなかった。ことでは酸素を使って行動し、短期間で登ることにする。しかした。というにした。しかし、トレーニング登山で力を出しきり、たを登ることにした。しかし、トレーニング登山で力を出しきり、たを登ることにした。しかし、トレーニング登山で力を出しきり、たを登ることにした。しかし、トレーニング登山で力を出しきり、たりでは、アレーニングでチョー・オユー(八二○一計)のノーマルルーえ、トレーニングでチョー・オユー(八二○一計)のノーマルルーえ、トレーニングでチョー・オユーの頂上は必ずしも唯一の目的とは考えなかった。ことでは、アレーニングである。

一九九三年秋から適用するとした。一名につき一万ドルの登山料を払え、という新登山規則を発表し、登山隊からの要望があれば二名までの増員を認める。その場合には登山隊からの要望があれば二名までの増員を認める。その場合には可力がある。

れで「冬の南西壁初登攀」への問題は全て解決がつく。

と観光省に交渉を重ね、一時は日本大使館を通して「特例として認そこまでの増員は無理としても、十名程度の隊員は認めて欲しい、我々は前回同様総隊長以下十五~六名で登る計画をたてていた。

から練り直さざるを得なかった(九四年春に規則は崩れた)。可でBCまで入る、という手段に出ざるを得なくなる。計画も根本るを得なくなった。そのために隊長と医師の二名はトレッキング許める」という回答を得たが、最終的にはダメとなり、七名で登らざ

自信を得られたことも大きな成 を達成した。若い隊員にとっては初めての八〇〇〇に峰登頂という 全くと言って良いほど感じず、これまでの数多いヒマラヤ登山の中 なるが、他の十名も十五日から十七日間で登山を終え、高所疲労は のうちにBCまで下り、 遅くBC入りした田辺、 頂した(シェルパは六名が登頂) 九月末 一九九三年秋のチョー・オユー登山はほぼモンスーンのあけきる 最も緊張感の無い八〇〇〇片峰登山として完璧に所期の目的 (これが肝心) から十二名により実行する。 冬でハット・トリックを成し遂げることに 江塚はBC入り後十日間で登頂し、 果であった。 が、夏にブロード・ピークを登り、 十二名全員が登 その日

完全休養を経て冬本番へ

ネパ が旅に同行しないことで、よりリラックスをさせたつもりでもある。 ところでの休養が大切では?と考えたからである。 かく高所登山後にできるだけ日本の普段の生活の場所の高さに近い 順応だけをうまく残して、 出て、登山を全く忘れての休養期間をもった。 標高二~三〇〇ぱのタライ平原を経ての西ネパ チョー・オユーのみでサガルマータに参加できない二隊員は、 カトマンズ帰着後の三週間少々は、 ールの旅を終えるとすぐに隊荷輸送のために空路ルクラへ飛 疲労だけをとれるかはわ サガルマータ登山の再梱包と ハールへ いく日間位の休養が そして隊長の私 からない。 のバスの旅に とに 西

らルクラへ空輸した。帰路も同じであった。である。荷物約一二点はLPGなどの危険物を除き、カトマンズかぶ。これも隊員を少しでも環境の良いところでゆっくりさせるため

二泊する順応トレーニングをして順次BCへ入る。ロブジェに六日間滞在し、その間にポカルデ・ピークの頂上直下でンボチェへ飛び、ナムチェ・バザールからキャラバンを開始する。ナムチェへ隊荷が集結する頃に隊員の殆どはチャーター機でシャ

らに関わることはなかった。ひたすらの休養と荷上げ準備のみであ二○試)までのルート工作が行われるが、七名の実登攀隊員はそれその間に隊荷はBCへ集められ、シェルパだけによるC1(六○

登山の開始は十二月一日

る。

ればこその行動である。

ればこその行動である。

ればこその行動である。

ればこその行動である。

ればこその行動である。

ればこその行動である。

窓二日には軍艦岩下の仮キャンプ(TC、六九○○\(\overline{A}\)。前回はC翌二日には軍艦岩下の仮キャンプ(TC、六九○\(\overline{A}\)。前回はC翌二日には軍艦岩下の仮キャンプ(TC、六九○\(\overline{A}\)。前回はC翌二日には軍艦岩下の仮キャンプ(TC、六九○\(\overline{A}\)。前回はC



サガルマータ南西壁の登攀

もかかわらず、

前回より五日早いペースである。

八三五〇片。

前回のC5) ランペへ登り、

へ到達する。

二日間の悪天があったに

十一日の十六時二十分にC4予定地

が残っていた。

壁を突破する。 バンドの左端に食い込むクーロワールへ入り、 を潰してその上に設営された。 イヤな気分に襲われるが、まだまだ時間はある。 れてしまう。前回より大分早い降雪と強風の来襲である。ちょっと 七日は悪天で停滞となり、 九日、C3(七六〇〇㍍) 垂壁には前回の我々のロープと春の韓国隊のロー が九三年春の韓国隊のボッ 八日は途中から強風のために追 南西壁上部に立ちはだかる大口 核心部の二五点の垂

クステント

えてくれる。リス捜しに苦労するが、 ち直さねばならなかった。前回全く無かった雪が薄いがルートを教 野により開始された。韓国隊のロープがあるが支点は全て新たに打 ンプ、C4が建設される。 が、十二日は悪天候で先端があいてしまう。十三日、 南西壁に雪を残してくれている。 破できそうだという。この夏ネパールに大洪水をもたらした悪天は C4から先の南峰ルンゼへのスラブ帯は雪が付いており、 四日、 我々にとっての未知のルート ますます初登攀への自信が深まる 支点は全て岩場にとる。 のルート工作が尾形、 待望の最終キャ 楽に突 日

間で五〇ピロープを九本、八本と張るが南峰ルンゼの入口に到達で

しかし見るかぎり南峰ルンゼは絶対的な困難さはない。

にい返さ

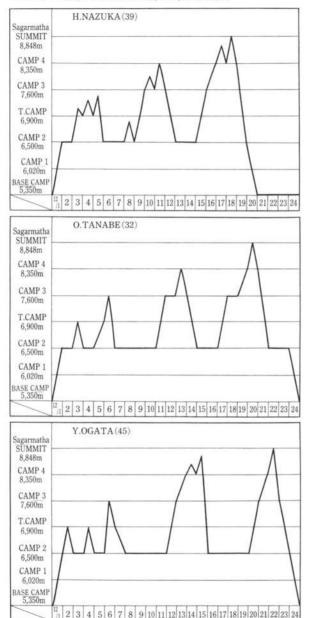
意をする

上げをしてしまい、

けておいた荷物の中からシェルパが勝手に肝心なテントを抜いて荷

キャンプ建設ができない。サーダーにきつく注

サミッターの行動グラフ(上から1次、2次、3次の各隊)



部 屬 雪 を 0 面 11 突破 段階 をでき得る限 体 力の H す 状 消 る 0 岩 塚、 耗 1: が などを 後 が 激 h 藤は 利 I 越 Vi 12 用 C まで するが す。 4 p 11 人 五ピッチでC4へ戻る 0 届 h と傾斜も落 急なロ か な 翌十 10 " 七日 八 クステ (X)(O) ち 南 峰) () () 前: 南 " ル 峰 プ p コ ノゼに ル 後 向 0 K 0 かう。 核 逆 心

> クを 11 先に放 分出 一月十八 発。 b Ŧī. H 011 ル 登 這 ると岩が F T V つくばって抜けると南東 作を か 33 さかり 届けば +15 アタッ " 7 が当る。 クとする。 稜までは 名塚 六時 は

ザ

" 几

線は 無 しで登る 耐 えが U 程 0 風 から 北 面 か 5 吹 3 K ラリ 1 ス テ 雪面 " 用 +15 0

稜

ピトン、

ス

1

1

を持ち、

あとは全てデポして登る。

い風の中、這いつくばるように一歩一歩頂上を目指す。十五時二十ラリーステップは五本程のローブがある。全部つかんで乗越す。凄

分、

ついに頂上へ着いた。

佐藤を除く六名が登頂し、十年かかった大きな夢を果たした。二日には尾形、星野が四時間半で登頂し、激しい咳で肋骨を折ったあとは押せ押せであった。二十日、田辺、江塚が六時間で、二十

△記録概要>

隊の構成 総隊長=星野光(61)、隊長=八木原圀明(47)、副隊長目 的 サガルマータ(八八四八㎞)南西壁の冬期初登攀活動期間 一九九三年十一月~十二月 隊の名称 群馬県冬期サガルマータ南西壁登山隊一九九三~九四

(31) (31) (32)、江塚進介(32)、佐藤光由(32)、後藤文明(28)、辺治(32)、江塚進介(32)、佐藤光由(32)、後藤文明(28)、 (31)

行動概要 十月八日六名がチョー・オユーに登頂。引き続き十一、十月十七日未明にカトマンズ帰着。十一月十日カトマンズからシャンボチェへ飛び、ナムチェ・バザール。十一月十三日BC建設。十二月一日登山開始と同時にC1を飛ばしてC2(六五〇〇14)建設。三日TC(六九〇〇飛ばしてC2(六五〇〇14)建設。三日TC(六九〇〇15)建設。カ日C3(七六〇〇14)建設。十三日C4(八三五〇14)建設。九日C3(七六〇〇14)建設。十三日C4(八三五〇14)建設。十八日第一次隊の名塚、後藤が登頂。

二十日第二次隊の田辺、江塚が登頂。二十二日第三次隊二十日第二次隊の田辺、江塚が登頂。二十二日第三次隊

『アメリカン・アルバイン・ジャーナル』94年号、の尾形、星野が登頂。

報

告

五号)、写真集『厳冬のサガルマータ―究極の挑戦・南溪谷』(七〇四号)、『岳人』(五六一号)、『岩と雪』(一六『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』94年号、『山と

西壁』(毎日新聞社)、ビデオ『世界初・雪煙に舞った男

たち』他。

登頂記

日本放送出版協会)。

界で初めてこの山を間近に訪れたのは、

イギリスの著名な探

皇帝の冠に立つ

クラウン峰初登頂の記録

との国境近くの中国カラコルムに位置(北緯三六度六分、東経七六クラウン峰(中国名・皇冠峰七二九五㍍) は、中国とパキスタン―プロローゲー

孤高として聳え立つ未踏峰であった。位の高峰K2(中国名・チョゴリ)のほぼ北西四〇*ートルのところに度一一分)する。カラコルム山脈の中央部奥深くに聳える世界第二

岳人の憧れである『幻の山』―クラウンがひときわ美しい」(『喬戈里・ウン峰についてこう述べている。「細い急峻な岩溝をやっとの思ラウン峰についてこう述べている。「細い急峻な岩溝をやっとの思ラウン峰についてこう述べている。「細い急峻な岩溝をやっとの思ー国側北稜ルートよりチョゴリ峰に初登頂した我国を代表する登中国側北稜ルートよりチョゴリ峰に初登頂した我国を代表する登

たして有名である。 として有名である。 として有名である。。 として有名である。。 として有名である。。 として有名である。。 として有名である。。

徳

和

男

にあるのか、探りだすのに強く興味をそそられ、もどかしさを感じうな鋭い壮麗な峰を見た。私は、それがどれほど高いか、またどこうな鋭い壮麗な峰を見た。私は、それがどれほど高いか、またどこにのべている。「再びクレヴァス氷河を上がって眺めた。ずいぶん国人として初めてクラウン峰を眺めた。そのときの印象を次のよう国人として初めてクラウン峰を眺めた。そのときの印象を次のよう国人として初めてクラウン峰を眺めた。そのときの印象を次のよう国人として初めてクラウン・ル峠の間シャクスガム河で境するサルボ・ラッゴ渓谷とシムシャル峠の間シャクスガム河で境するサルボ・ラッゴ渓谷とシムシャル峠の間シャクスガム河で境するサルボ・ラッゴ渓谷とシムシャル峠の間

た。もしわれわれのルートがこの方面にあったとしても実際問題と ら扇状におちて一つの氷流となり、氷塔を乱立して本流に合してい た時の印象を、「南方には、 して、これらの荒々しい氷瀑を登ることは不可能であろう。 た。私はすぐにもこのような魅惑的な土地に出発したかった。 彼がクラウン氷河と呼んだ氷河に入りクラウン峰を西面から眺め 巨大な氷瀑が主分水嶺の垂直の絶壁か 一・六 ::

キロほど上流で北方から一つの大きな支流がはいっていた。見たと

たが、このような広大な氷河作用が、この方面にあるとは思っても スガム渓谷からクレヴァス氷河をへだてている山なみから発してい 河と呼んだ。われわれはその大きさにびっくりした。それはシャク ころクラウンの方から流下しているようなので、これをクラウン氷

同年秋に英国登山隊、一九九〇年及び九二年に日本ヒマラヤ協会隊 年に日本ヒマラヤ協会隊、一九八七年夏に静岡大学西域学術登山隊、 が二次、三次と相次いでクラウン峰の登頂を試みたが五度の挑戦を いなかった。」と述べている。 一九八五年になって、ようやく中国がこの地域を開放し、一九八五 その後、登山家はもとより、この地域を訪れる人はいなかった。

した。

退け、その純白の頂に立つ登山家はなく、未踏を誇っていた。

十九日に着く。ここで、 自治区の首都ウルムチを経て、シルクロードの十字路カシュガルに 食糧等を購入。この街を日本製四輪駆動車とトラックで出発。シ 活動の打ち合わせ、 五月十七日に日本を出発した先発隊六名は、北京、 日本からの隊荷の受け取り、 カシュガル登山協会のスタッフと今後の登 また、 新彊ウイグル 現地調達

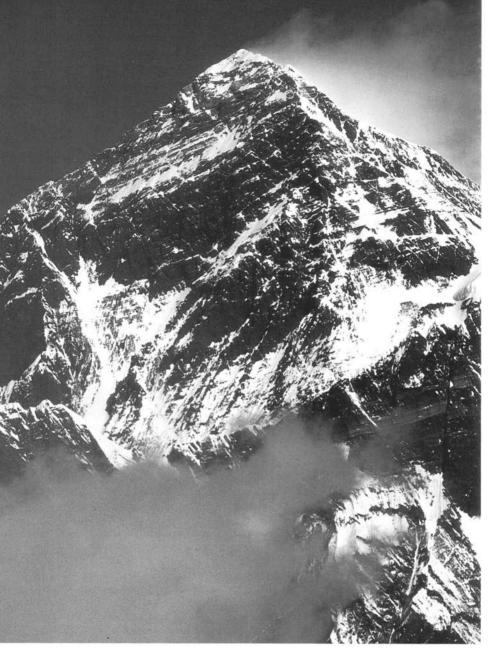
Ш

下し、 更に車でキャラバン開始のマザダーラまで行く。 ヤルカンド河に沿う解放軍の基地マザーに二十二日に着 ラクダ五十七頭、ラクダ工二十名が待機していた。 アカズ峠 (三三〇〇)、マザー峠 (四九〇〇) マザダーラには既 を越え、 翌日

氷河の舌端四○○○☆にクラウン峰登山隊のベースキャンプを建設 インホンタンに着く。中国側スタッフのベースキャンプである。 流点を南に折れ、チョゴリ(K2)が見え始めると紅柳の生い茂る るとシャクスガム河に着く。河原を西へ進みサルポラッゴ河との合 に沿ってアギール峠(四七八〇計)へ。峠を越え一気に八〇〇計下 開始する。中国カラコルムの大河、 に一日キャラバンを進め、五月二十九日、中国最大のインスガイティ 二十三日、ラクダ一頭に一〇〇*5近い荷物を乗せてキャラバ ヤルカンド河、スルクワット河 更

ゼの入り口に六月一日に建設。約二・五トンの隊荷の荷揚げは、十 サイドモレーンに荷揚げルートを決定した。中継キャンプ 六月十一日キャンプ1 (C1·五一〇〇點) を東南稜基部に ク(氷塔)帯の右岩壁に一ビッチ五○☆の固定ロープを二本張り、 九名の低所協力員の支援で、六月九日異例の早さで完了した。セラッ ○☆)を経て、登山活動の基地となるアドバンス・ベースキャンプ (ABC·园园OOM) 翌日から二日間、 アップダウンの激しい氷河上を偵察し、 をクラウン峰が眼前に聳え立つ、第四ルン 左岸の 建設

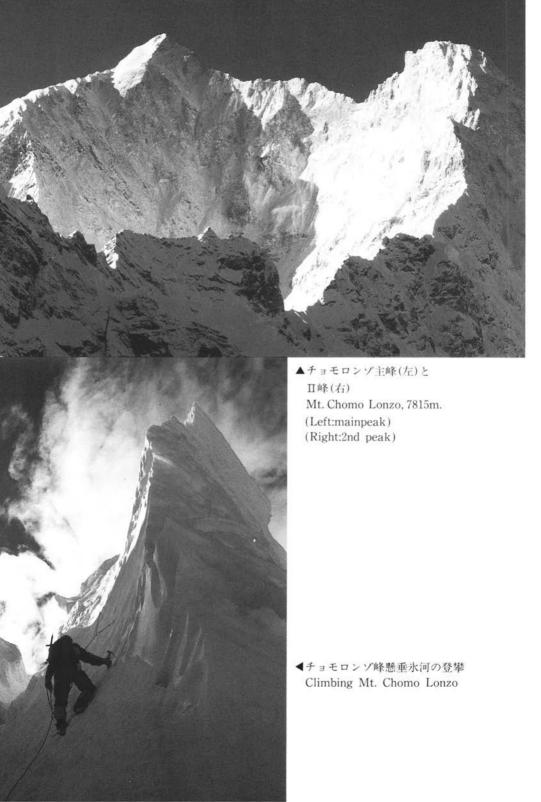
ルクロード南路の古い街並みの残るイエチェンを経て軍用道路を南



サガルマータ南西壁 South-west face of Sagarmatha



ABO(四四〇〇m)から見るクラウン峰

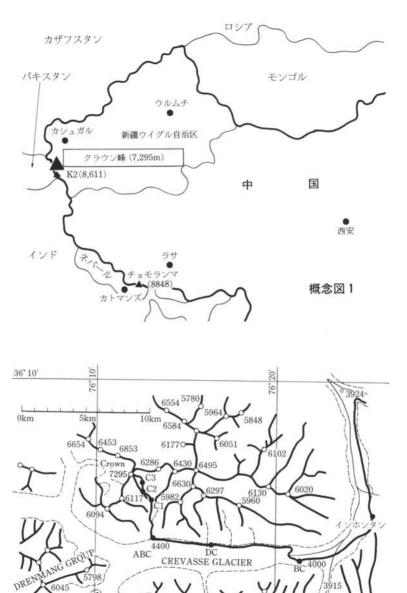




ヤンバー氷河の源流から望むアク・タシ (7016m) Mt. Aq・Tash, 7016m



アク・タシ項上岩壁の登攀 下方はヤンバー氷河 Climbing Mt. Aq・Tash



概念図2

を進め、予定より一日早く六月七日にクラウン峰BCに到着し、先チェンを経て、六月一日にマザダーラに到着。翌日からキャラバン会の方々と細部の打ち合わせを行い、ウルムチ、カシュガル、イエ

アイスフォール(氷瀑)帯はブロック雪崩の危険を避け、東南稜側ABCに到着し、全隊員が本格的な登山活動に入った。東壁下部の六月七日に日本を出発した後発隊の酒井登攀隊長も、十七日には

フェースの七○○○旨付近にファイナルキャンプを作る予定であっ当初六五○○旨付近の氷雪壁帯にキャンプ3を、ダイヤモンドンドフェース)の真下まで進み、東壁の直上ルートの登攀に移った。如した。東壁中央部の岩稜を巻きながら上部菱形氷雪壁(ダイヤモ設。そこから、雪稜を二○○旨程直上し、東壁側にトラバースを開設。そこから、雪稜を二○○旨程直上し、東壁側にトラバースを開設。

キャンプ2 (C2・五八〇〇)(三) を東南稜末端のコル (鞍部) に建

に回り込む。三本並んだルンゼの中央にルートをとり、凍ったガリー

(岩溝)、急な氷雪壁に固定ロープ二十三本を張り、六月二十一日、

た。が、急傾斜の堅い氷の下は直ぐスラブとなり適地がみつからな

固定ロープを張った。これより上部のキャンプサイトは望めず、位待望のC3建設。実にC2建設から二十五日目となった。二十本の出したキャンプ3(C3・六三○○㍍)を、七月十四日に建設した。出したキャンプ3(C3・六三○○㍍)を、七月十四日に建設した。かった。そのため、東壁の氷雪壁から下がり、東南稜から数えて五かった。そのため、東壁の氷雪壁から下がり、東南稜から数えて五

C3を夜半に出発し、東壁に四パーティーが全力でルート工作を

が低いがファイナルキャンプとなった。

した。更に七○○○旨を越すあたりまでルートを伸ばす。C3より斗状の垂直のガリーを突破して、ここに七≦のワイヤー梯子を設置

続け、七月十八日には、ダイヤモンドフェースに抜ける核心部

固定ロープを二十八本張り、登頂態勢を固めた。

度~六○度の未知なる氷雪壁に4ピッチ、ルートを伸ばし、午後二出発。固定ロープの終了点に午前七時に着く。そこから新たに五○七月二十二日午前二時三十分、徳島、山崎、有富の三名でC3を

四名が、二十九日に夏目、松岡、長谷川の三名が登頂し、全員が初阿部、鈴木、中川の四名が、二十八日に亀田、中島、宮坂、笹森の時五十六分に初登頂に成功。四日間の悪天候後、二十七日に酒井、

―初登頂の要因―

(A) 事前の準備活動とトレーニング山行が全隊員の真摯な取り要因を考察をする。

はずりでは、ますで、ころのほうではなった。なって、からないの登頂の成功直後から始まり、一九九二年七月に第一回の実行委員の東海支部のクラウン峰登山計画は、一九九○年の天山山脈雪蓮峰組みの中で行われた。

出発までの約一年間続く中で、強固なチーム・ワークが養われた。員会後には必ず合同山行、有志山行を行った。これらの取り組みが山隊の失敗原因の解明等がじっくり重ねられた。それと同時に、委峰山域の研究、キャラバン・登山活動上の問題点の検討、過去の登会が開かれた。その後、毎月一~二回の実行委員会では、クラウン

また、活動を通して、若い隊員のクラウン峰にかける思いが高まり



ラッポ河の渡河を無事に終え、クラウン峰BCまで約六トンの隊荷

四七八〇どのアギール峠を越え、

つはラクダ隊によるBC迄の約一週間の隊荷輸送である。途中、

増水したシャクスガム河、

サル

7

登山舌動が順周に進宁した。(B) 新彊登山協会の全面的な協力体制のなかで、キャラバン・意欲的となっていった。

活動を開始する前に、二つの大きな問題点があった。中国の西の果てのカラコルムに位置するクラウン峰登山では登山送った。私自身も今回のクラウン峰で新彊の登山が四回目となった。海支部は過去十年間程の間に五回の登山隊を新彊ウイグル自治区に海支部は過去十年間程の間に五回の登山隊を新彊ウイグル自治区に中国の人々は"老朋友(古くからの友だち)』を大切にする。東登山活動が順調に進行した。

からABCまでの一〇数またを一日三往復する強者もいた(六元) ますことができた。協力員の中には、デポ・キャンプ(四三〇〇人) でき一人の遭難者も出さずに済んだ。 を極力おさえた。このため、 十九名の低所協力員を使い十日間で二・六トンの隊荷の荷上げを済 殆ど隊員が行い、 また中央部に数本の川が流れている。過去の登山隊では、荷上げを の荷上げである。 登山活動の前進基地(ABC)までの約二五キュニに及ぶモレーン上 をラクダ六十九頭で運ぶ事ができた。 kgが相場)。この間、 もう一つは、 今年のカラコルムは天候が悪かったが、 インスガイティ氷河舌端のBC インスガイティ氷河はアップ・ダウンが激しく、 カ月近くの日数を要した隊も見られた。 隊員は個人装備のみで行動し、 ABC以上の登山活動に 余裕ある登山活動が (国〇〇〇江 一カ月間 体力の消 我々は がと

(C) 登山時期と登攀ルートの選定がうまくいった。

心をとった。 では、全員登頂を考え、氷雪壁中心の東壁に直登ルートをとった。 我々は、全員登頂を考え、氷雪壁中心の東壁に直登ルートを東南稜

東壁は平均斜度五〇度の急峻な氷雪壁、岩と氷のミックス壁が 下部はアイスフォール帯を含み、中間部はミックス壁、上部は氷雪壁で構成されている。秋に東南稜にルートをとった隊の話では、東壁で構成されている。秋に東南稜にルートをとった隊の話では、東壁においる。また、過去五隊のうち、唯一、夏期に東南稜に挑んだ隊の話では、また、過去五隊のうち、唯一、夏期に東南稜に挑んだ隊の話では、おそらく漏斗の口状のガリーは昼間は直射日光の熱で、上部氷雪壁が融解し、滝となり、夜間はツルツルの氷瀑と化すからルートにならないと言われた。

車で入る事ができた。

私達は西のヤルカンド河に沿って二〇キニを程進んだマザダーラまで

始し、ルートを伸ばす事にした。また、念のため、核心部には一一従って、降雪中はキャンプで停滞し、天候の回復を待って行動を開から、今夏の東壁は、降雪と同時に雪崩がでていることが分かった。観察した。そして、今夏の東壁には大きなデブリの跡がないこと、観察した。そして、今夏の東壁には大きなデブリの跡がないこと、観察した。そして、今夏の東壁には大きなデブリの跡がないこと、観察した。そして、今夏の東壁には大きなデブリの跡がないこと、観察した。

ーキャラバン―その(1)

~のテクノーラロープを固定した。

濁流逆巻く大河を渡りベースキャンプに辿り着くのである。クラウン峰への道は、荒涼とした砂漠を横切り、高い峠を越え、

た道路)。マザーからは、東のチベットへの交易路が作られている。まで進む(一九六○年代の中・印国境衝突の時、人民解放軍が作ったルカンド河に沿って作られた軍用道路をマザーの最前線軍事基地へルカンド河に沿って作られた軍用道路をマザーの最前線軍事基地を変した。日本製四市イエチェン(ウイグル語カルガリック)から始まった。日本製四市イエチェン(ウイグル語カルガリック)から始まった。日本製四市イビシルクロードの南路は、世界第二位のタクラマカン砂漠の南古代シルクロードの南路は、世界第二位のタクラマカン砂漠の南

谷間の広い草地には、二つ瘤の屈強そうなラクダがあちこちで草を食んでいる。ヤクシミシース(おはよう)の元気な挨拶から一日を食んでいる。ヤクシミシース(おはよう)の元気な挨拶から一日のキャラバンが始まる。ウイグル人やキルギス人のラクダ工達も。ヤクシマ』(おはよう、元気か)と人なつっこい笑顔を返してくれる。大発隊、本隊、後発隊合わせて六十九頭のラクダによる輸送隊は、大工チェンから南へ六〇****
「おびいる。ヤクシミシース(おはよう)の元気な挨拶から一日を食んでいる。ヤクシミシース(おはよう)の元気な挨拶から一日を食んでいる。ヤクシミシース(おはよう)の元気な挨拶から一日を食んでいる。ヤクシミシース(おはよう)の元気な挨拶からこちで草を食んでいる。



(東壁 6 000 m 付近)

ルジュ 古 をかけながら険しい崖道をゆっくりと進んで行った。 帯の 通過があった。 ラクダ工達も真剣な眼差しでラクダに大

は後足で盛んに蹴りあげるが、 達は左右のバランスを考えて荷物を選択してラクダの背に積む。そ やし涙を流す。 ロープで縛り引きずり倒すようにして座らせるのである。 ダのそばに連れて来て親ラクダの鞍に固定をする。そして、後足を いている。この細紐を下に下げながら"テゲ、テゲ"と小声をかけ まず後足を折り、 訓練のできていない子ラクダは暴れる。ラクダ工達は親ラク [のラクダは大変行儀がよい。親ラクダには鼻カンといって直 長さ十世程度の木の丸棒が通してあり、これに細い 荷物はラクダ一頭に八○銛が規定である。 そして前足を折りながらおとなしく座る。 ついには、 観念するのか、大粒のく ラクダエ 子ラクダ 紐が着

> ンゴ状にした"ポム"を作って食べさせていた。 出来ると直ぐ、同じ容器でラクダの好物であるトウモロコシ粉をダ た最高の料理 "ポーラ"をブリキ製のたらいで作っていた。

イグル人、キルギス人にとってラクダは人間と同じ位大切な動物で パン)の入った袋を乗せている。通訳の趙さんが話してくれる。

ウ

の上に、彼らの布団と主食のナン(小麦粉をこねてカマドで焼

ト』のとき、彼らは、羊・人参・タマネギ・米・干しブドウを入れ あると。六月一日から三日までのイスラムの祭典"クルバン・イエッ

背に揺られて旅する気分は、 た。 が少なく、過去の記録より随分少なかった。ラクダによる渡河も一 一二カ所を除いて、ラクダの腹を越す濁流に流される場面もなかっ 心配されたシャクスガム河の水量も今年は異常気象なのか晴天の日 居眠りばかり始める隊員もでてきたが、ラクダの背に乗って峠を越 キャラバンもアギール峠に近付くと高度障害で頭痛を訴えたり、 シャクスガム河のキャンプ地(三九五〇紀)に無事運ばれ 白銀の峰々を眺めながら、 遠い昔のシルクロードの旅人を想う 広大なカラコルムの河原をラクダの

キャラバンーその 2

晴らしい体験であった。

高さを誇るチョゴリ峰 にシャクスガム河に流れ込む角を曲がると、左手に突然驚くべき高 のように聳え立っている。 さのピラミダルな山姿が、 氷河の融水を集めて、北に向かって流れるサルポラッゴ河がT字型 K2氷河、サルポラッゴ氷河、そして、中国最大のインスガイティ (K2) 八六一一ばが他の山々を圧倒するか しばらくは、 目の前に飛び込んで来た。世界第二位 ラクダの背に揺られながら

に登攀ルートを探し求めた。

そこの小高い丘に大きなケルンが積まれてあった。一九八二年に日ンタン)は、チョゴリ峰登山隊の中国側ベースキャンプでもある。クラウン登山隊の中国側ベースキャンプとなった音柳灘(インホ

ある。中国側の北稜から初めてチョゴリ峰の頂に立った登山家の代会チョゴリ峰登山隊の柳沢幸弘隊員、坂野俊孝ドクターの遭難碑で中国交回復十周年を記念して、日本山岳協会が派遣した日本山岳協

クライマーであった。チョゴリ峰(K2)登山の後、森田氏はグラ場口)が刻まれていた。いずれも、当時の我が国を代表する屈指のつかった。白いプラスチック板に四名の氏名(森田、吉野、禿、馬償としては悲しいものだ。その近くに、もう一つ小さなケルンがみ

攀リーダーの遭難碑である。一瞬の内に雪崩に襲われた方々である。会が派遣したクラウン峰登山隊の舘野隊長、菅沼ドクター、二俣登ベースキャンプにも美しくケルンが積まれていた。日本ヒマラヤ協井登攀隊長の所属する碧稜山岳会の先輩であった。クラウン峰のも帰らぬ人となった。なお、馬場口氏は今回のクラウン登山隊の酒

後の下山中に、馬場口氏はガッシャブルム五峰の頂上直下でいずれンドジョラス北壁登攀中に、吉野、禿両氏はエベレスト無酸素登頂

の中に、九○年の初冬、白馬小蓮華岳で滑落して動けなくなった仲そんな、クラウン峰の頂の純白の雪をピッケルで少し掘った。そムの白銀の嶺々が眺められた。

クラウン峰東壁の登攀中は、いつも振り向けばチョゴリ峰、スキャ

けた。雄大なカラコルムの山々を心行くまでいつまでも眺めてくれ。間の救助中に、二十歳の若き命を失った甥の山姿写真を入れ雪をか

ーキャンフ生活ー

場の設定等、隊員の役割分担が自然に決まっていく。松岡隊員の弾んだ声。食堂用大テントの設営、水汲み場、ゴミ焼却ちも高揚し、清々しい気分だ。「そのでかい岩どかすぜ」。若い笹森、

六月十二日。登山の前進基地でのキャンプ開きだ。全隊員の気持

日章旗、JAC旗、中日新聞社旗が白銀の峰々と紺碧の空を背に翻輝く。鈴木先発隊長以下六名ご苦労さん。ラクダ工達に親しみを込輝く。鈴木先発隊長以下六名ご苦労さん。ラクダ工達に親しみを込輝く。鈴木先発隊長以下六名ご苦労さん。ラクダ工達に親しみを込輝く。鈴木先発隊長以下六名ご苦労さん。ラクダ工達に親しみを込輝く。鈴木先発隊長以下六名ご苦労さん。ラクダ工達に親しみを込輝く。鈴木先発隊長以下六名ご苦労さん。ラクダ工達に親しみを込輝く。鈴木先発隊長以下六名ご苦労さん。ラクラウン峰は目前に、北京時間の午後六時は、まだ、日が高い。「クラウン峰は目前に、北京時間の午後六時は、まだ、日が高い。「クラウン峰は目前に、

長は免除された。十三名のジャンケンで当番をきめた。熱い戦いにで、中島リーダーである。自らも大食漢である。乏しい材料で作っいた。中島リーダーである。自らも大食漢である。乏しい材料で作ったコロッケと誕生日のケーキの豪華さは、忘れられない。楽しい夕たコロッケと誕生日のケーキの豪華さは、忘れられない。楽しい夕たコロッケと誕生日のケーキの豪華さは、忘れられない。楽しい夕たコロッケと誕生日のケーキの豪華さは、忘れられない。楽しい夕たコロッケと誕生日のケーキの豪華さは、忘れられない。楽しい材料で作った。手の切れる様に冷たい水。吹雪の日には本当にいる。

敗れ、食器をもって駆け出すのは何故か、隊一番のダンディ、

阿部

日に持ち越さないことを心がけた。

リーダーと不言実行の酒井登攀隊長の二人が多かっ

になった。要注意人物とされた隊員との間に反目し合うこともあっ のキャップは、食欲旺盛、 ていかない。カロリー不足の為か慢性的な空腹状態となる。 活動も中盤にさしかかると、 挙動不審な隊員を自然とマークするよう 活動の激しさに食事内容がつい 食糧係

ゾフの兄弟』であった。 が並べてあった。人気ベストワンは、『未踏峰』。反対は『カラマー 空き箱をつなげて作った本棚だ。各隊員が持ち寄った二十数冊の本 れたクラウン文庫を覗く。自称ハウスドクターの夏目隊員が食糧の 日雪降りとなった。そんな停滞日には、 今夏のカラコルムの天候は悪かった。三日も晴れが続くと四、 隊員は、 食堂テントに作ら Ŧi.

夜空を眺め、大きく深呼吸を繰り返した。吐気と共に忘れ去り、 プに胃がキリキリと痛むことも多かった。 進めていった。隊員は、みな個性豊かだ。若い隊員との意識のギャッ だ。彼の案をリーダー会で検討し、 余念がない。綿密な計算が必要だ。銀行マンの亀田リーダー 動計画である。装備係の有富、 登攀ルートの難易、天候の周期、それに隊員の体調を考えて作る行 登山 の戦略はタクティクスと呼ばれる。各キャンプへの荷揚げ量 隊員からの意見、要望はどんどん吸い上げて 中川 夕食後のミーティングで隊長か 隊員は装備ノートでチェックに そんな時は、 は緻密 明

その(1)

/ ラウン登山隊の登攀メンバ ーは十四人である。 若い隊員が中心

> 以上の高所経験者は私を除いていなかった。 天山等の高所登山経験者は八名いたが、七〇〇〇以

完了してしまった。このことが上部の登山活動に余裕をもたせ、 なるまで、一日に三往復もやってくれる協力員も現れ、約十日間 間的な触れ合いをもった。そのため、苦しい荷揚げを早朝から暗く 語を少しでも覚えたり、彼らと歌合戦やダンスを踊ったりして、人 ウイグル人の低所協力員と荷揚げの苦労を共にする中で、 くの日数を使った隊もあった。鈴木先発隊長以下六名の若い隊員は、 プ・ダウンが激しく、過去の登山隊は、荷揚げに苦労し、 ○○だ、距離三○*・程ある。中国最大のインスガイティ氷河はアッ BC (四〇〇〇紀) からABC (四四〇〇紀) までは 一カ月近

ロープを張る。 コルムの峰々が一望できて、心を和ませてくれる。 でも、晴天時の登攀では、 崩が落ちていて、間一髪で大きな落石から逃れた隊員もいた。それ C2 (五八〇〇計) セラック(氷塔)帯の側壁に2ピッチ固定ロープを張る。Clから ABCからC1 (五一〇〇點) までのルートは第四ルンゼに沿 へのルートは、東南稜側壁から絶えず落 白銀に輝くチョゴリ (K2) を始めカラ 23ピッチの固

故も起きず、全隊員が初登頂に成功できた大きな要因となった。

稜を巻きながら急な雪壁にル C2からは東南稜に沿って二○○紅程登り、そこから東壁下部の岩 五日降雪が続くと三日間程晴天になるといった繰り返しであ 今年のカラコルムの天候は例年と違い、七月に入っても悪く、 急峻な東壁ルートは降雪直後から頻繁にチリ雪崩が発生した。 ト工作を進め20ピッチ固定ロー プを

る。標高は予定よりかなり低いが、ここが最終キャンプとなる。部の氷雪をピッケルで半日かけて削り○3(六三○○ユル)を設営すでとてもテントサイトを作ることが出来なかった。仕方なく岩稜基値斜で、しかも、表面の雪は薄く、その直ぐ下は堅い氷壁やスラブ張る。当初キャンプ地として予定していた東壁中央部は六○度近い張る。当初キャンプ地として予定していた東壁中央部は六○度近い

で得た。そんなことがあってからは、降雪中の行動は取りやめ、天 で得た。そんなことがあってからは、降雪中の行動は取りやめ、天 の水雪壁を登攀中、ドーンという音と共に東壁上部から雪崩が起き、 の水雪壁を登攀中、ドーンという音と共に東壁上部から雪崩が起き、 の水雪壁を登攀中、ドーンという音と共に東壁上部から雪崩が起き、 の水雪壁を登攀中、ドーンという音と共に東壁上部から雪崩が起き、 の水雪壁を登撃中、ドーンという音と共に東壁上部から雪崩が起き、 の水雪壁を登撃中、ドーンという音と共に東壁上部から雪崩が起き、

候の回復を待ってルート工作を進めた。

張る。ついに七月二十二日午後二時五十六分にルートはクラウンの全隊員が総力をあげてルート工作にあたる。32ピッチ固定ロープを保用の支点を作り、一ピッチ進むのに二~三時間かかってしまう。岩に擦れ悲鳴をあげる。五○≦のロープをいっぱいに伸ばして、確

―登攀―その(2)

山頂に到達した。

C3からの東壁へのルート工作は、晴天期間が短いのと、キャン

もう一ピッチ(五○ほ)頑張れ。祈るような気持ちだ。今日中にもう一ピッチ(五○ほ)頑張れ。祈るような気持ちだ。今日中にと岩盤だ。氷はピッケルをはね返す。空しい努力。今日もテント地と岩盤だ。氷はピッケルをはね返す。空しい努力。今日もテント地と岩盤だ。氷はピッケルをはね返す。空しい努力。今日中には見付からない。

七月に入っても天気は不安定だ。隊員の間に焦りが生じ始める。 曇りを拭い、目を凝らして眺める。 月四日、 れやっと辿り着く。 け大きく息を吐く。 で東壁に向かう。小さな雪稜のくぼみ。岩尾根の基部。 ガスが東壁を這い始める。再び悪天期に入ったのか雪がちらつく。 五日ぶりに晴天が訪れる。 C2への足取りは重く、ふらつく足に気合を入 再度、 疲れが襲う。 徳島、 中島、 ザイルに体重をか ゴーグルの 山崎の三名

C1の仲間と交信。東壁にテント地なし。ルート変更も含めてタケティクスを検討しようと提案する。交信が続く。トランシーバークティクスを検討しようと提案する。交信が続く。トランシーバークティクスを検討しようと

固く雪洞も掘れない。 中でビバーク C2より二〇〇ぱも上がると、吹き飛ばされそうになる。 一の危険性を説く。C2から一五〇〇二の壁。 (不時露営)となる。 独立峰で風が強い 頂上アタッ 強風の日 クは、 氷が

H を過ぎる。登れないかもしれない C2からの頂上アタックには、 変更は納得できない。 登れなくても、東壁に挑 やる気十分だ。だが、 ザイルにぶら下がっても寝れる」。 むだけでよい」「テント地がない これまでの行動を思うと不安になる。 体 力が不足している。 遭難事故が頭 為の 若い隊 ル 1

る。

1 能性が大きく膨らんだ。 ばすと何と無く不安を感じる。 ルを振るう。 Vi 意思統一ができ、 と。全力で立ち向かい、 みにかけよう。 五日が過ぎてい たキャンプ3ができた。 キャンプサイトを探す。 一人一人の意見を聞く。東壁にかける熱い 翌々日、 テント内部にも通す。 僅かなスペー 相当困難な登攀が予想されるが、 もう 隊員の顔も晴 た。 テント内は狭く、 度東壁のずっと下の岩稜基部 悔いの残らない山登りをしよう。 岩盤にボルトを何本も打ち、 スが削られる。 六名の隊員 しかし、 れ晴れする。 C 2 が一日かけて、 これで東壁からの登頂 デコボコしてい (五八〇〇ば)を設営後二 三分の一程空中に飛び出 思い。 午前三時を少し回って 弱音を吐 全隊員の (公三〇〇江) 全力でピッ る ザイルでテ 隊全員の かないこ 意気込 足を伸 の可

次アタックー

分に起きテントから顔を出 頂 の期 待で胸が高ぶり、 す。 眠 n ない 星 明かりが弱く三 数時間を過ごす。 日間続 午前 零時 た晴 天 \mathcal{T}_{i}

0)

眺めはない。

頂上稜線の北の端に目を向けると雪庇

ついている。湧きだしてきたガスと舞う粉雪に

ある。 をとる。 うな鋭い痩せた岩尾根の上にふわっとした雪庇が東壁側に張り出 をあげる。かと思うと突然に深雪に落ち込む。ジリジリと、 り上がる。 雪壁にピッ 結び合う。 ルート工作隊によって固定ロープとワイヤー フェースからの雪崩が一箇所に集中する垂直の漏斗状の岩溝には く締まっていてアイゼンの前爪登攀が続く。 時三十分に最終キャンプ た頂上での正直な気持ちである。 ていた。″もうこれ以上登らなくてもよいのだ〟 チ五〇ぱのロープが伸びていく。4ピッチ程登り切ると大きな雪庇 確実に下り坂だ。 ゴリ(K2)の姿はない。 る。大きく深呼吸して東の空を眺める。世界第二位の高さを誇るチョ た核心部だ。これを登り切ると急峻な氷雪壁が主稜線まで続 も今日から崩れそうだ。 下にでた。もうそこは稜線である。 氷点下二五度Cを越す寒さ、 間断無く流れて来るチリ雪崩の恐怖の中、 最終キャンプを真夜中に出発して十二時間以上が 前日にヘッドランプを固定しておいたヘルメットをつ 薄い雪の下のスラブにアイゼンの前爪がガリガリと悲鳴 ケルを打ち込む。 初の高峰登山となった有富隊員は遅れ気味だ。 固定ロー フリーズドライの簡単な野菜スー (六三〇〇紅)を出発。 朝焼けの厚い雲に隠されている。天気は プの最終点で山崎隊員とメインロー 一足一足アイゼンをけり込みながらず 時計を見ると午後 偏西風が顔面 頂上稜線はノコギリの 梯子が懸けられ ルートエ Ŀ やっとたどり に吹き付 急傾斜の氷雪は 部 ダイヤモ 時五十六分で 作をす if 経過して 髭が プの ピッ プを 7 すめ 7 朝 K

が東側に

視界は遮られ、

出した小ピークがほんやり見える。固定ロープを二本使えば到達でおそうである。山崎隊員がトップでジグザグの細い稜線を辿る。ふきそうである。山崎隊員がトップでジグザグの細い稜線を辿る。ふきの山歯がこぼれる。風雪の中、急いでピッケルに中国、日本、JS白い歯がこぼれる。風雪の中、急いでピッケルに中国、日本、JS白い歯がこぼれる。風雪の中、急いでピッケルに中国、日本、JS白い歯がこぼれる。風雪の中、急いでピッケルに中国、日本、JS白い歯がこぼれる。風雪の中、急いでピッケルに中国、日本、JS白い歯がこぼれる。 固定ロープを二本使えば到達でと強風と疲労に追われながら小雪舞う山頂を後にする。

下陷

有富隊員がしきりに「寒い、寒い…」と呟く。元気な山崎隊員を

を渡す。

死で拭う。疲労の激しさに気力で立ち向かっている。上から大声でを落としながら慎重にエイト環をかける。頂上直下の急雪壁からは雪が激しく舞い上がる。下からの怒鳴り声が弱々しく届く。張り詰雪が激しく舞い上がる。下からの怒鳴り声が弱々しく届く。張り詰雪が高いたローブがゆるむ。続いて有富隊員が下降を始める。緩慢なめていたローブがゆるむ。続いて有富隊員が下降を始める。緩慢ないたローブがゆるむ。高度障害と疲労に痛めつけられた有富隊員がトップに下降に移る。高度障害と疲労に痛めつけられた有富隊員が

る。呼吸が出来なくて苦しいと訴えるようになる。不安が増す。こへたり込む。破損したゴーグルにはびっしりと雪がこびりついていバランスを失って何回も転倒し、そのたびにロープにぶら下がって下降が続く。ロープに振られ、転げるようにヨタヨタと下っていく。下降が続く。ロープに振られ、転げるようにヨタヨタと下っていく。から込む。破損したゴーグルにはびっしりと雪がこびら下がっていたり込む。の職不安が頭を過ぎる。C3まで延々と続く32ピッチの下励ます。一瞬不安が頭を過ぎる。C3まで延々と続く32ピッチの下

独立峰。しかも急峻な東壁では確実に強風で吹き飛ばされる。一瞬、こで、彼とビバークになるかも…。降りしきる雪、下り坂の天候。

死の恐怖を覚える

らない。苦しくても一歩一歩下りよう」と励ます。ゴーグルの予備のクラウンの頂きにたっても、C3にたどり着かなかったら何もなるのに。疲労で余裕がなかったのか。荒い呼吸を繰り返す。「未踏出発から何も食べていないという。ザックには、行動食が入ってい出気を出すようにテルモスの熱いミルク紅茶を飲ませる。聞くと、

まスもない。無事にC3に辿りつくことができた。 と、彼の意識も少しずつはっきりしてくる。クラウン東壁は急傾斜と、彼の意識も少しずつはっきりしてくる。クラウン東壁は急傾斜と、彼の意識も少しずつはっきりしてくる。クラウン東壁は急傾斜と、変形氷雪壁を15ピッチ下りきり、漏斗状の岩溝のあたりまでくるまスもない。無事にC3に辿りつくことができた。

―帰路・遊牧民の生活―

峠を越す寒風にさざ波をうっている。帰路のキャラバンでは、峠の小雪舞うアギール峠(四七八○≦)。広い峠の中ほどにある湖も、

ムは冷夏であった。 ないたが、エーデルワイスの真綿のような可憐な花が、名残を惜していたが、エーデルワイスの真綿のような可憐な花が、名残を惜しあちこちに草花が咲き乱れているとラクダ工は話していた。期待し

上がってくる。 ぼい歯を覗かせニコッと笑う。遊牧民達は夏の間、 がって来たのだ。ヤクシミシース(こんにちは)。声をかけると黄色っ る羊の群れ。キルギスの三人の牧童に出会う。朝早く羊を連れて上 の生き残りが、こんな高山に追いやられたのか。遠い斜面に点在す た"ナキウサギ"に似てい んでいる。隊員達の目が集まった。鼠かウサギか?私も覗きこむ。 が大声をあげる。 五年前、 峠を越えて、ガレ場を下り始めた。突然、先行していた亀田隊員 子連れ山旅で登った大雪山系のトムラウシの山頂付近で見 石と石を泥や家畜の糞で固めて作ったカルカが彼等 岩の間を走った。興奮した顔。 た。 低緯度のカラコルムでは、 両手で何かをつか 草を求めて山に 氷河時代

そこ。 入者を見つけたのだ。その叫びに驚いたのか家族総出で飛び出して 入者を見つけたのだ。その叫びに驚いたのか家族総出で飛び出して とこ。

クロック(大変おいしい)とお世辞を言うと、喜んでいっぱいくれれる。薄暗く冷やっとする。少し青カビの生えたナン(小麦粉をこねてカマドで焼いたパン)と手垢の染み付いた木のお椀にアイランねでカマドで焼いたパン)と手垢の染み付いた木のお椀にアイランは、それしかないことも確かだ。ナンを一口かじる。ベック・タ

じた。遊牧民の生活は家族共同体だ。小学校低学年ぐらいの男女は であった。若い隊員でも高度障害を起こす四二〇〇二を越す高さ。 ニコッとほほ笑んで見せてくれた。何と生後二、三週間の赤ちゃん た。 羊の毛から糸を紡いでいた。 かっていた。少し離れたところでは、 りの仕事だ。カルカの前に置かれた素朴な機織り器具にせっせと向 れ時には、羊を追ってカルカに帰る。中学生ぐらいの女子は、 羊の世話だ。朝、羊を連れだし、 厳しいカルカ生活の中で、すやすや寝ている姿に民族の逞しさを感 る。何だろう。胸元を指さし、片言のウイグル語と手振りで尋ねる。 赤い布に包み、抱いていた。覗くと、紐でぐるぐる巻きになって 何と素朴で気前のよい人達か。娘さんが魔法瓶のようなものを 昼間は野山を駆けずり回る。 母親は、 糸巻き棒を持って、

ル山中のふもとに住む彼等の手元に写真が届くだろうか。てもらったウイグル語の住所で、果たして中国の西の果て、アギーでもらったウイグル語の住所で、果たして中国の西の果て、アギーでもらったお礼に家族全員の記念写真を撮った。手帳に書い

ーエピローグー

鮮烈な魅力を感じた。 鮮烈な魅力を感じた。 鮮烈な魅力を感じた。 鮮烈な魅力を感じた。 鮮烈な魅力を感じた。 鮮烈な魅力を感じた。 が、彼の地を開放し、最初に挑んだ登山隊の写真から、 が、 しい山姿。一九八 が、 しい山姿。一九八 が、 しい山姿。一九八 が、 しい山姿。一九八 が、 しい山姿。一九八

貌。ラクダ工達からエレキン(親切な人)と呼ばれ、彼等と寝食を隊員の熱意。彼は核心部のルートを拓いた。ウイグル人のような風の一年、毎週大阪から駆け付け、土、日の訓練山行をこなした鈴木の一年、毎週大阪から駆け付け、土、日の訓練山行をこなした鈴木の一年、年週大阪から駆け付け、土、日の訓練山行をこなした鈴木の一年、年週大阪から上ができた。こ

共にした宮坂隊員の荷揚げでの活躍等、隊員一人一人が自己のもつ "輝き"を出し合っての初登頂だ。

年の逞しさに感動した中川隊員。各自がつかんだ素晴らしい感動 の腹を越す濁流の渡河、巧みな手綱さばきで乗り切るウイグルの少 冷気で顔に凍り付いた、と話してくれた最年少の松岡隊員。ラクダ 頂上を前にして、登頂の喜びで頬をつたわる涙が、早朝の厳しい

若者達に数々の青春のドラマを創った。

らく立ち尽くす。氷河の融水で顔を洗い、隊員一人一人と固い握手。 始める。初めて登頂の喜びがこみ上げて来る。全隊員に感謝。しば 最終の固定ロープを終え平坦な氷河へ。全隊員が待つC1が見え

たかが山登り、されど山登り。未踏峰への挑戦は、人類の新しい クラウン峰初登頂はチームワークの勝利であった。

今回の登山を通じて、明日の登山界を背負って立つ若者達が育っ

义化の創造につながる。

た事をご報告致します。 暖かいご支援を戴いた関係各位に心から感謝申し上げます。

タージ・チョカ(皇帝の冠の峰)と呼ばれている。インスガイティ氷河 上部から眺めたクラウン峰は、真にその名にふさわしい山姿をしていた。 (※1)皇冠峰(中国音:フォァンクワンフォン)は、現地では、ハン・

(※2) 中国最大の氷河で音蘇蓋堤氷川(インスガイティ氷河)と呼ぶ

九九三年五月十九日~八月三十日 ACTOKAI

社日本山岳会東海支部

日中友好皇冠峰登山隊一九九三

的 中国カラコルム皇冠峰(七二九五m)の初登頂

目

シャクスガム河流域の調査、 インスガイティ氷河の踏香

青年による日中友好国際親善活動

隊の構成

島正徳(28)、先発隊隊長=鈴木幹夫(26)、隊員=山崎彰人(26)・ 秀紀 (32)、登攀リーダー=阿部哲也 (30)・亀田正人 (28)・中 総隊長=湯浅道男(56)、隊長=徳島和男(48)、登攀隊長=酒井

夏目正憲 (25) · 宮坂仁 (24) · 有冨保之 (24) · 中川邦仁 (24) ·

笹森進也 (22) · 松岡清司 (21) · 長谷川哲也 (21

行動概要 (先発隊

五月 十七日 十九日 六名 カシュガル 隊荷準備、現地購入 名古屋→北京

二十三日 マザー出発 キャラバン開始

二十五日 アギール峠(四七八〇m

六月 二十九日 B 第四ルンゼ入り口 建設 (四四○○m) にABC建設

インスガイティ氷河の舌端 (四○○○m) にBC

六月 五月二十七日 後発隊 七日 七名 BCにて先発隊と合流 名古屋→北京

東南稜基部 (五一〇〇m)

六月

七日

名

名古屋→北京

十七日 全隊員 ABC集結

二十一日 東壁下部岩稜基部 東南稜末端のコル(五八〇〇m)C2建設 (六三〇〇m) C3設営

最終

キャンプとなる

七月

十四日

二十二日 第一次アタック 北京時間午後二時五十六分 徳

・ 第二次アファフ 一下向も寺丘子 雪井、可吊、島、山崎、有冨登頂

ロ 第二次アタック 午前九時五分 酒井、阿部、

鈴

二十八日 第三次アタック 午前十一時二十分 亀田、中島、木、中川登頂

二十九日 第四次アタック 午前七時 夏目、松岡、長谷三宮坂、笹森登頂

五日 インホン

登頂

八月

二十日 マザダーラ帰着

『日中友好皇冠峰登山隊一九九三報告書』94年3月発行『岳人』93年11月号、『山と溪谷』93年12月号、『岩と雪』93年12月

告

[註:本登山は日本山岳会海外登山基金助成金の割当てを受けて実

☆日本時間と北京時間との時差 一時間、

北京時間と新彊時間との時差

三十日

日本帰着

施された]

チョモロンゾ峰 中国側からの初登頂

立教大学チョモロンゾ登山隊・学術調査隊の記録

鰺 坂 青 青

ゾ峰の頂きに日の丸と立教大学校旗を翻し、中国側新ルートよりのB武石隊員、山岳部現役四年生部員高橋隊員の二名が、チョモロンー九九三年十月二十四日、午後二時四十五分、立教大学山岳部〇

登頂に成功した。

登丁に成功のを十二分に発揮した、立教らしい成功であると思っておなり、方の強風に苦しみながら勝ちとった実に爽やかな快挙であり、スーンの強風に苦しみながら勝ちとった実に爽やかな快挙であり、スーンの強風に苦しみながら勝ちとった実に爽やかな快挙であり、スーンの強風に苦しみながら勝ちとった実に爽やかな快挙であり、スーンの強風に苦しみながら勝ちとった実に爽やかな快挙であり、スーンの強力によった。

登山計画と許可申請

十周年を迎えました。この間、二百名を越える卒業生を生み、立教立教大学山岳部は一九二三年に創設され、一九九二年には創立七

登山協会の史占春前主席宛に同峰の登山許可申請が、立教大学山

の初登攀を目的に編成されたものであります。

一九九二年春、

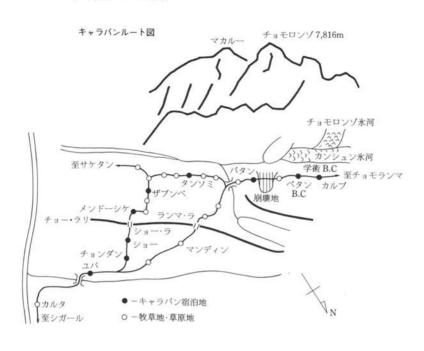
の学術調査及びチョモロンゾ峰(七八一六片)に中国側北西面より

念事業として計画されたもので、

カンシュン氷河、

カルタ氷河周辺

を学び、 登頂すると共に一年生まで全員がキャラバン、高度順化、 年置きに現役山岳部員の海外合宿を実施して、六〇〇〇ば級の山に カンバチェンへと遠征隊を派遣してまいりました。特に最近では一 バルン氷河遠征、南米ペルーアンデス、カラコルム、コーカサス、 積雪期初登攀の記録を立て、特に一九三六(昭和十一)年日本初の 海外遠征ヒマラヤのナンダーコート峰の初登頂を筆頭に、 チョモロンゾ峰への遠征隊は、立教大学山岳部創立七十周年の記 昭和の初期には、後立山、 友会を構成しクラブ活動を続けて参りました。 海外遠征の経験者の層を厚くすることが出来ました。 黒部谷、 剱岳、 南アルプス等に 登山 戦後には お 技術



答は、 長高田健夫教授より提出されました。 地 域 が未解放地区であるという事から この申請に対する最 不許 П であ 初 h 0

文が郵送され、 同年四月十二日、 かし h 私 ロン 強 伝達とい い交渉を続け 私達をあ 峰の たしまし 北京へ山友会より、 登山を同 わてさせ た結 ては 果、 年 度 たのであります。 E 人々山 限 九 h 友会より会 Ш 九三年 特別に許 本 朋 月 П 員 すると を北 高田 西川 教授 京 う 回答 派 0 遣

輩の間に議定書が調印されて「立教大学チョモロンゾ登山隊・ 私の三名が派遣された。 調査隊」 は正式に発足いたしました。 中 国登山 協会、 王富州· 主席と山 本 朋 学 先

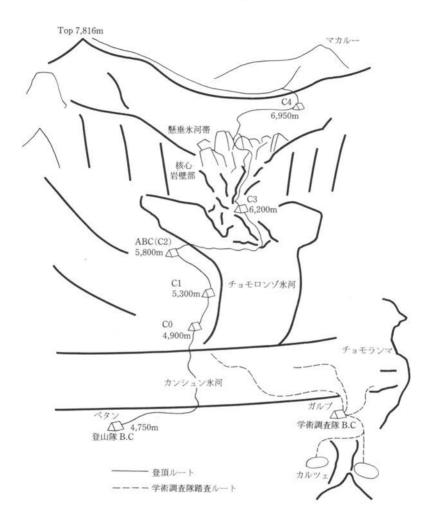
ための 員会が発足し、 委員会、 請により、 御後援を賜る事も決定されました。 登山隊のスター 準備は着々と進めら 募金委員会も設置されてそれぞれの活 浜田立教大学前総長を名誉委員長とするチョ 大学を挙げての御支援を受けることになっ トと同 時に、 n てゆき、 Ш 岳部、 H 本山 Ш 友会、 岳会、 動は開始され 理学部 読売新聞社 Ŧ Ш U 0) 会の 遠 > より 1 征 委 要

立教大学チョモロンゾ 0 チベ 7

隊の目的及び期間

河及びカルタ氷河 ∃ モロンゾ峰 九九三年 t 地域 月 1 の学 H 側 より十 北西面 登山 術調 隊 より 查、 月十 学術 並びに 0 -五日迄、 初登攀を目的とし、 調 查 中 隊 \mathbf{K} とする。 チョ は、 七 U カ > 3 派 峰 遣 2 期 間 氷

7 3 モロンゾ峰は、 K マラヤ山脈 一四〇〇かいのほぼ 中 央、 チ 3



峰 近く、 7 カ ル Ш 当群の 中にあり完全に中 Ė 回領に 置

4

ル

以 《後未開放 テレ 峰 1 は 山という事で今日までその 九 五四年十月、 クジー の二隊員が初登頂を果たしてい フラン ス 頂 7 は カ ル 深い 1 ね 偵 むり 察 隊 0 るが、 0 1] Vi 才 7 永

知らない山であった。 カルー 登山 私自 たが、 いからのアプロー 身では、 をしのぐようにもみえる美しい その際に、 九八八年 ・チは、 しかし、 利開社の 7 カルー まず車でギャンツェ H 特 今回中 本・ 派員としてチョ 山群の中にその存在を見る迄は全く 中 ・国側北面より 国 山だっ ネバ モラン 1 ルニ 見上 シガ 7 国 チョ け 峰 る山 1 0 空撮を モラン ル より 容は

に別れをつげて左ヘルートをとり、 F 越えで約 は三日間の行程である。 3 四七〇〇紅)、 モランマ・ロンブク寺院街道へ入り、 週間で、 またはランマ・ カンシュン氷河上のベースキャンプ地ペタン ユバ村より ラ(五三〇〇計) キャラバンを開始 カルタ村を経 チンソン 由してユ 村よりこ いず ショー・ n バ村まで か 0 の峠 街道 四

七五〇片 達する事が出来る。

を行った。 保隊員の 九九三年 五月 名が t 五〇ぱ) 成田を出 Ł H 偵 発して、 密察隊の ペタンに到着し、 北京、 Ш 本 朋 成 都、 総隊長、 ラ 调 ++ 間 終 中 0 由 偵 で五 Ш 察活 隊 月三 長 動

初より、

東京に於ける実行委員会で検討を重

ね

7

V

t.

北

14

面

たどる、というものだった。そのルート中で、 モロンゾ氷河最奥部の岩壁帯と、 1 h 1 氷河を突破して、 V は、 カ ル カンシュン氷 1 峰とチョモロンゾ 河より 部大雪原を経てチョ チョ その 峰の モロンゾ氷河に入り、 真中に 間にのびる大きな岩壁、 最も困 落ちる小さな岩 モロンゾ峰 難とされるチ 0 稜 3 を

UF

攀ルー

トを探ることが偵察隊の役目であった。

はない てチョ たらされたのであ 懸垂氷 とりつく小さな岩稜のルー にC1を建設する。ここを基点にABC (五八○○\\\) 点にデポキャンプを、チョ より少し高い 期 は気温も低くなるので何とか上部雪原へ達する事 か、 河も比較的安定してい モロンゾ氷河の末端にとりつく。 BCよりカンシュン氷河に約一○○↓ という調査結果が六月二十 (四九〇〇計) モロンゾⅡ峰 トを探り、 チョ る事を確認した。特に、 モロンゾ氷河入口を登り返 写真撮影を行 Ŧi. からの BCの H 偵 稜線上 公察隊 高度 位下 b, 0 ポ 帰 スト 四七 五三〇〇日 围 出 更に上 五〇計 小河を モンスー

登頂 へ向けて

で北京 は経費をなるべく切りつめる為に、 H カトマンズ隊の二手に別れて日本を出発した。 1成田発、 からと快諾 本隊は合計 向 鰺坂総隊長、 かっ 四名 登山協会側は私に対し古い 交渉は成功のうちに終了、 中 (うち学 国登山協会の歓迎を受け、 4: "建隊長、 術調查隊四 高所協力員 高田学術隊 名 友人 (ラオ・ 連 で構成され、 絡官 は 北京隊は八月 特に立 下二名 の李風君氏、 わない ポンヨー 隊として 通 0



荷とも収容し、やっとニエラム村で十四名の全隊 なっての作業だったが二台のトラックに隊員、

予定より二日遅

ン輸送を行った。降りしきる雨の中、

泥だらけに

れの九月八日の事であった。 員が顔を揃える事が出来たのは、

チョモロンゾ峰核心部懸垂氷河と

立たない為、

私達はニエラムで、

新たに二

一台のト

から

ラックをチャーターして約五〇〇二の崖崩れ個所

ポーター二十名と隊員によって荷物のピスト

 $|\mathbf{x}|$ が発生し、

|流人海戦術による復旧作業でも開通の見通し

車は通行不能の状態となっていた。

を喜び合った。 港ではチベット登山協会の高所長以下の出迎えを受け、互いに再会 訳の葉地暉氏を伴い計七名で成都経由でラサへと向かった。 ラサ空

成田発、 の買い出し等、 二日にカトマンズ入りし、 カトマンズ隊石野登攀隊長以下八名の計九名は、 キャラバンへ向けての準備に追われた。 日本より空輸の隊荷の 九月一 通 関 H 食

あるニエラム村で合流の予定であった。しかし国境の村ザムーとニ 北京隊とカトマンズ隊は、 九月六日にラサ・カトマンズ街道上に

> にはモンスーンも明けて順調にキャンプは延びていった。 九月二十五日ABC(五八〇〇㍍)を建設し、十月一日にはチョ デポキャンプ、C1への荷上げで登攀活動は開始される。 十日にBCが建設された。 週間、 雨や雪に悩まされながら九月二 九月末

キャラバンを開始した。ショー・ラ (四七〇〇)

へ。ユバからはヤク七十一頭を引きつれての大 モンスーン中の雨の中、車で入れる終点のユバ

建設され、 モロンゾ氷河最奥部、 撃が開始された。この登山の成否を左右するであろう核心部 であった。 登山は早くも第二段階に入り、 岩稜への取付き付近にC3(六二〇〇片) 岩壁部、 懸垂氷河への攻 への挑

登攀隊員八名を四名ずつ二隊に分けて、荷上げ、

ルー

ト工作、

休

れ

エラム間でモンスーンの大雨による大きな崖

は日に日に遅くなる に汗を滲ませながらじっと上部を見つめる数 部を見る事が出来る。 三十分位上流 一面に点のように見える隊員 返しながら攻撃は続けられ 歩一歩確実に へ登った高台から真正面に、 私はその 前 進する姿が確認される。 (達が強風で弓なりにたわむザイルを引 地に立って、 た。 BCより チ 双眼 日が過ぎる。 3 モロンゾ氷 鏡を握りしめる手 カンシ しかしスピード ユン 岩稜 河の核心 氷 上の 河

故だけは起こさない でくれ

するまでにこぎつけた。

神に祈るような毎日だ。 元気な声を無線機を通 日の行動を終ってキャンプに戻っ 聞 でく時 た隊員

今日も無事終っ

と気持のなごむ時間であっ

に整った。 間の休養をとり、 上部雪原にC4 さな岩稜と懸垂氷河の中に六〇〇以 月十二日 岩壁にとりつく雪稜に八五〇以、 隊員たちは一旦ベー 核心部を突破し、C3建設より十一日 (六九五〇計) 五日 十六日に別れてBCを出 が建設され、 スキャンプに下山し、 岩壁中央に落ちる逆層ぎみの小 のロープがフィックスされ アタックの態勢が完全 間 発し の悪戦苦闘 頂上 それぞれ二日 向 の末、 かっ た

暗な雪原をライトを 止む気配さえない。 隊は七一 ん日、 五〇計 撤退した。 第 のコル迄達したが、 次アタ 現 頼りに交替でラッセルをしながら登る。 九地時 この時神保隊員は 間午前六時C4を出 " ク。 晴 天だ。 強風と地吹雪のため L か 顔 し昨 に凍傷を負っ 夜 いからの 地吹雪の中真 アタッ たので アタッ 強風は 7

> ある。 C3の再建にとりかかり、 される始末だった。 ば、ここでもテント一張りが破損しており、 しまうという大きな打撃をうけた。 C3は完全に吹き飛ばされて跡形もなく、 翌日は休養のためC3へ向 隊員の勝利への執念に支えられながら、 十月二十四日には第二次アタックを挙行 け下山 仕方なくABC迄下山 したが、 装備、 C1でも 食糧とも紛失して H 0) 張りが 強風 してみれ 直ちに のため

ゆく。 高橋、 でサポート。 員はしばしば前進をはばまれる。 十月二十四日。この日も ラッセルはそれ程深くはない。稜線から吹きおろす 神保、 この 渡辺の四人は雪原を稜線に向かってゆっくりと登っ 頃から奇跡的に風が弱まってきた。 相変わらず強風が吹き荒 神保、 渡辺の二名は七五〇〇〇 れ T る。 強風に隊 ŧ

云えるアタッ

クのチャンスを摑んだのである

と捉える事が出来た。 をまくり上げ深呼吸をする。 一人の姿は小さな小さな点ではあるがBCからも双 目出帽の口に当る部分が凍りついて息苦しい。 頂上は確実に近づいてきた。午後 武石隊員の後に高橋隊員が 時四十五分、 立ち 酿 IĖ 鏡では 頂上に立っ 2続き一 0 7 は 歩 た

て喜びの歓声に包まれて、成功の感動に酔いしれる て当り前と云うような登頂の第 ため七五〇〇以迄到達したが断念し、 登攀隊員全員 隊員のみんな、 宮坂、 木 の登頂を目 貝沼、 今頂上につきましたよ」 神保の四隊員で行われ 指して十月 声だ。 しかしBC全体 全登山活動を終了すること 何とも 六日の れたが、 無表 一瞬であ 強風と悪天候 三次アタッ が 情 踊 h 上っ

0 は

になった。

学術調査隊の成果

周辺での学術調査であります。
我が隊のもう一つの重要な目的は、カンシュン氷河、カルタ氷河

ル側)での気象、氷河の研究の進歩に比べると、中国側(チベット現役山岳部員の計四名で構成された。ヒマラヤ山脈の南側(ネパー学術隊は立教大学高田理学部長を隊長に、田中副隊長以下二名の

われた。
おチョモランマ峰直下のカルブBC(五二○○≦)を基点にして行部チョモランマ峰直下のカルブBC(四七五○≦)とカンシュン氷河最奥

での調査は殆ど行われていないのが実情である。

カンシュン氷河最上流は幅五≛よるで氷塔の乱立する荒々しい氷河と部、六○○○台の高所での大気のサンプリングも行われた。上部、六○○台の高所での大気のサンプリングも行われた。定時気象観測と紫外線量の定時測量が行われ、一方ではカンシュ定時気象観測と紫外線量の定時測量が行われ、一方ではカンシュ

教授の研究室で行われた。

教授の研究室で行われた。

教授の研究室で行われた。

などのようでありチョモランマ東面、ローツェ北面は垂直に近い壁で、絶えずでありチョモランマ東面、ローツェ北面は垂直に近い壁で、絶えずでありチョモランマ東面、ローツェ北面は垂直に近い壁で、絶えずでありチョモランマ東面、ローツェ北面は垂直に近い壁で、絶えずでありチョモランマ東面、ローツェ北面は垂直に近い壁で、絶えずでありチョモランマ東面、ローツェ北面は垂直に近い壁で、絶えずでありチョモランマ東面、ローツェ北面は垂直に近い壁で、絶えずであり、

紀博士が、雪氷に関する分析や同位対比の測定は弘前大学理学部一方大気中の環境問題成分の分析は、地球環境研究センター古田

究が行われた。 については気象庁オゾン層解析室、伊藤朋之博士らの協力を得て研地球科学科の鶴見助教授の研究室で、紫外線量とオゾン層との関連

果が出る迄にはまだ時間を要するものの、 素飽和度測定が行われ、 崎医療福祉大学、 n 時に登山、 学術調査中の朝、 小野寺昇助教授が中心となって行われている。 この高所適応性に関するデータ解析は、 夕毎日 大きな成果が期待されて 回ずつ、 全 隊 員 の動 JII 酸

おわりに

おります。

意征を終った今、この登山を振り返ってみると、シェルバ、高所遠征を終った今、この登山を振り返ってみると、シェルバ、高所が「で構成された最高のチームワークを誇る隊でありましたが、ボストモンスーンという厳しい自然条件を克服し、未知のルートを開ストモンスーンという厳しい自然条件を克服し、未知のルートを開ストモンスーンという厳しい自然条件を克服し、未知のルートを開拓するという隊員達の強い。勝利への執念。、「不屈の精神力」に敬力になると、シェルバ、高所遠征を終った今、この登山を振り返ってみると、シェルバ、高所

御苦労に心より感謝致しております。が、間に入ってまとめ役をつとめた牛窪登山隊長、石野登攀隊長のが、間に入ってまとめ役をつとめた牛窪登山隊長、石野登攀隊長のおは、その都度徹底的に話し合う事によって見事に解決されました

隊員始め、この遠征を陰で支えて下さった方々、一人一人が心かの名に恥じない立派な成功をおさめる事が出来ました。の名に恥じない立派な成功をおさめる事が出来ました。山を愛する者として、「ヒマラヤ」という、地球が長い長い年月

だきます。 新聞社、 寸 援を賜った日本山岳会をはじめ、中国登山協会、チベット登山協会、 お陰と心から謝意を表し、 ら「やって良かったのだ」という大きな喜びをかみしめております。 教大学、 後になりましたが、 更に数えきれないほど多くの皆様方より賜った御力添えの 立教大学体育会、 各隊員の努力は勿論のこと、 御礼を申し上げ、 山友会、 山岳部、 報告を終わらせていた 理学部山の会、 多大なる御支

<記録概要>

目 活動期間 隊の名称 的 立教大学チョ カンシュン氷河及びカルタ氷河周辺の学 より初登攀 九九三年八月二十九日~十一月十日 モロンゾ峰 モロンゾ登山隊・学術調査隊 (七八一六計) のチベ ット 術調 側 九 北西 九三 查 面 中 12 1 \mathbf{E}

の構成 総隊長=鰺坂青青(59

隊

[登山隊]隊長=牛窪光政(49)、登攀隊長=石野繁一(34平沢徹(20)・平野友幸(20) 平沢徹(20)・平野友幸(20) 「学術調査隊]隊長=高田健夫(58)、隊員=田中司(50)

貝沼久範(25)・高橋克昌(24)・神保修麻(22)・渡辺隊員=宮坂永史(29)・武石浩明(26)・青木宏親(24)・[登山隊]隊長=牛窪光政(49)、登攀隊長=石野繁一(34)、

秀明 (24)

行動概要 八月二十九日北京隊、 C 日ニエラム村にて両隊合流。 建設。 一十一日 С 1 九 二十五日C2 (ABC) 月 士三 H カトマンズ隊成田 日ユ バ 村発。 7 建設。 Ħ В

> \mathbb{R} 天候のため断念。 橋が登頂成功。 ばされたC3再建。二十四日第二次アタック、武石 三次アタック、 十九日第一次アタック、武石・高橋・神保・渡辺七二五 三十日学術調査隊カンシュン氷河上流域調査へ。 C 3 建設。 強風と地吹雪のため断念。 十日学術調査隊BC下山。 宮坂・青木・貝沼・神保七五〇〇ぱで悪 神保・渡辺は七五〇〇紅迄。二十六日 三十一日BC撤収。 二十一日強風で吹き飛 十一月十日本隊帰 十二日 64 十月一 1.高 第

隊・学術調査隊一九九三報告書」(一九九四年十月)。(一六四号)。『山と溪谷』(一九九四年二月号)。『ヒマラ統売、朝日、毎日新聞運動面(十月二十九日)。『岩と雪』

報

告

アク・タシの初登頂

日印合同・広島山岳会ヒマラヤ登山隊一九九三の記録

はじめに

警察)と合同での仮登山許可書が届いたのである。 警察)と合同での仮登山許可書が届いたのである。

受入れられ、我々はシェルビ・カンリから写された平井一正氏の写ン氷河を遡り西壁から登るという名越の構想は画期的なものとして未登のサルトロ・カンリ〓峰(七七〇五點)をインドよりシアチェ

田内實

には極地法を採用する必要があると考えて、岩壁でのルート工作を準備として特に心掛けた点は、インド隊と合同で岩壁を登降する準備から出発まで・突然の変更

参加者が次第に固まり、五月から準備とトレーニングを開始した。

真を見て、見事な順層の岩壁に魅せられてしまった。

会員の中から

していたが、これもインド領事館から何の連絡もないまま五月を迎てからは荷物の梱包を開始した。ビザは九二年十二月の始めに申請を一インド側へ連絡をしていたが、何の反応もなかった。我々は九三年六月九日に日本を出発する予定でインドに連絡し、五月に入っ逐一インド側へ連絡をしていたが、何の反応もなかった。我々は九夕のティクスを組むなどの準備をすすめて行った。これらの計画は多のでは、これをでいる。

こと位で、特に変ったことはしてない。

体調の自主管理が出来るように症候に対する判定の学習会を持った重点としたトレーニングを行ったことと、高所順応について各人で

なるという皮肉な結果になったが、

結局日印別ルートとなり、

衝の

巧みさとシン氏の日本隊に対する理解があったからであ

んが、逆にインド隊に壁を登れという我々はフィックスザイルが足らなく

六月末でよいという内容である。ない、ビザをとるため他の山を申請してほしい。そして日本出発はない、ビザをとるため他の山を申請してほしい。そして日本出発はシン氏より便りが届いた。サルトロ・カンリは内務省の許可が下りえていた。焦れる我々の許へ五月も末になってITBPのフカム・

しい日程でデリー入りしたのである。
我々は装備、食糧などの準備を一応終っており、これを余り変更我々は装備、食糧などの準備を一応終っており、これを余り変更我々は装備、食糧などの準備を一応終っており、これを余り変更しい日程でデリー入りしたのである。

合同隊について

れて終盤の行動が尻切れになったのも残念である。 滞在期間の長さに比べて短いと思うし、 了解を求めるが我々は従うしかないのである。登山期間についても リットの第一には行動の自主性が損われることである。 今回の合同隊についてメリット・デメリットを考えてみる。 いても同じことで、 インド隊長の膳立てどおりに進められる。 含むインド滞在中のスケジュールは、リエゾンオフィサーを兼ねた 合同隊といっても色々と事情は異なると思うが、 我々の固執した南西壁ルートを登れたのは名越 BC撤収の日に追い立てら 先方も気を遣って説明し 登山ルートにつ 我々が経験した 登山日程を デメ

> たした。事故は無かったし重い病人や怪我もなかった。 壁を完登したし、 功は無かったであろう。しかし、それだけでは済まされない 成功である。登山隊に参加した人達の積み重ねと努力が無くては成 組んだインド隊も七人の登攀メンバー全員が南稜からの初登頂 また、ITBPが役人であったため行政からの援護があったことも 力でやったという充実感に欠ける気がするがこれは贅沢であろう。 るだけというツアーのような安易さであった。 の手配から宿泊のことまでインド側ですすめられ、 る。メリットは地元の利便に上乗り出来たことである。 切は充分理解出来るとしても、 通関や航空便の変更などを含めてたいへんに好都合なことが多かった。 我々のアク・タシは終った。 おわりに 次には、セレモニーや接待が多く、インド側の遠来の客に対する親 内二人は未踏の山頂に立つことが出来た。 我々はたいへん疲れたのが本音であ 六人の登攀メンバー 反面、苦労しても自 の内五人が 我々はこれに乗 登山は一応 輸送や荷駄 何 合同を かが を果 南

インドの人達から受けた親切に心から感謝したい。をこえた人の和があり温かい気持で遠征を終えたこともうれしい。最後は人の事になるが、考え方も習慣も違う合同隊にあって国境

とは幸運というしかない。

あった。あのルンゼの大崩壊が我々のルート上で起こらなかったこ

六月二十八日 曇

でです。 香港が台風のため欠航となり、一日遅れてのデリー 六月二十八日 曇 大阪~デリー

六月二十九日 快晴 デリー滞在

なったであろうか。

無理であった。

若しこれがサルトロ

・カンリであったらどう

到着となる。





TBPのトウルパティ氏に手伝ってもらっても丸一日かかる。 名越・溝手が空港に行き隊荷の通関手続をする。 インド隊よりI

快晴 デリー滞在

この時サルトロ・カンリはアク・タシに変更、 (インド・チベット・ボ 1 ダー : ポ (リス) カラコルム峠 長官に挨拶に

快晴 デリー滞在

征とカラコルム峠 長公使が来賓として出席、 ITBP会議室で日印合同隊の結団式を行う。日本大使館より神 へのトレッキングについて一斉に報道された。 この日テレビ、 新聞などでアク・タシ遠

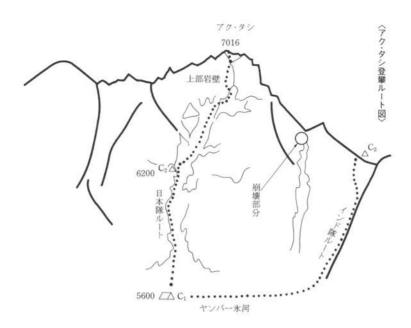
日本大使館へ挨拶に行く。

デリー滞在

ム・シン氏の夕食招待があり合同隊はこの 夜ITBP招待 七月三日 快晴 の夕食会、 デリー滞在 昨 夜はフカ

ような行事が多い。

ひた走りチャンディガールを過ぎ十八時頃 から山地にかかる。 八時五十五分いよいよ出発。 ブール着、 七月五日 I 七月四日 合同隊員はITBPのバスに乗り込み MFに集合しトラックに荷物を積み込 インド政府の宿泊所に泊まる。 快晴 プラスプールーマナリ デリート 九時二十分ブラス 広大な平原を ブラスプー ル



の湯舟に少し湯を入れて身体を温めるだけのものであった。分マナリに到着、雪嶺も見え涼しい。温泉は露天風呂ではなく個室分マナリに到着、雪嶺も見え涼しい。温泉は露天風呂ではなく個室

。 Lサーーエテトュ ・プトザイドニールエュエデン ニニエクライオは、エエト、マニマトが時四十八分出発、北側に聳え立つ山脈に突込むように登ってゆ七月六日 - 曇後快晴 - マナリ〜サルチュー

三二〇㍍)に到着、皆軽い高所障害が出る。バララチャ・ラ(四八九一㍍)を越えて十九時三十分サルチュー(四ラヤの眺望をほしいままにする。北側へ降りキーロンで昼食、更にく。九時十五分ロータン峠(三九五五㍍)に立ち白銀に輝く大ヒマ

七月七日 晴 サルチュー~レー

道路を走って十八時、レーに到着。

「大いの」が、昨夜宿泊した蒲鉾兵舎を後にする。モラン・ラ(四五○○」がのラチェン・ラ(五○六五」と続く山塊を越えてバカ○○」がらラチェン・ラ(五○六五」と続く山塊を越えてバカのでは、からラチェン・ラ(四六時五十五分、昨夜宿泊した蒲鉾兵舎を後にする。モラン・ラ(四六時五十五分、昨夜宿泊した蒲鉾兵舎を後にする。モラン・ラ(四六時五十五分、昨夜宿泊した蒲鉾兵舎を後にする。モラン・ラ(四六時五十五分、昨夜宿泊した蒲鉾兵舎を後にする。モラン・ラ(四六時五十五分、

七月八日~十四日 レー滞在

願と祝福行事の後、八時二十分に出発、バスは喘ぎながらゆっくり下各地大雨、マナリ~レー間の道路は不通、カルドン・ラは積雪のため交通遮断となった。十三日になってやっと雨が止む。 七月十五日 快晴後曇 レー~サソマ 七月十五日 快晴後曇 レー~サソマ

十六時二十五分シャイヨーク河畔に出て十七時ヌプラ谷に入った。

雪のカルドン・ラ (五六〇七紀)を十二時二十分に越える。

104



上部岩壁 鼻と呼んだ部分の登攀

に十六時到着。

アーミーキャンプ 水量の多いこの

川を右に見下しながら堆石の斜面をトラバースし、 川を騎馬で渡ってスキャンポチェ(四二〇〇㍍) 時十分より歩き始める。 グルンラスケー・ラ (四五七〇㍍) を越える。峠からはトロンポティ 一本が同行する。 本隊は八時五十分バスでチャングルンまで行き九 急斜面を一気に約一二〇〇は登ってチャン

七月十七日

晴

サソマースキャンポチ

I

朝から馬に荷積みを行い七時三十分荷駄七十四頭が出発、横

天気が悪くなるので停滞。

七月十六日

曇後雨

サソマ

砂と岩と雪嶺の風景だが名のとおり緑が多く人家も点々と続く。

時丁度サソマのITBPキャンプ(三三〇〇〇)

七月十八日 晴 スキャンポチェ BC

のモレーンで作られた台地で、 よりの連絡を待って移動する。 BPのキャンプに到着して待機、 氷河の出合を過ぎて十二時過ぎにヤンバー氷河を正面に望めるIT 道である。 九時出発、 七月十九日 高度四八〇〇八、 シルクルートといっても馬が通れるほどの踏み跡のようなも 一九〇七年日野強、 河岸段丘の上 昨日に続き中央アジア交易ルート 晴時々にわか雨 十三時 の岩と砂の道をたどって進む。 九〇九年大谷探検隊が通ったのもこの 水場が近く絶好のキャンプサイトで 右岸の河岸段丘とヤンバ 一十分到着し直ちにBCを建設する。 BC適地を探しに出た名越・山本 (シル クル 一氷河左岸 マモストン な

0

八時三十分よりヒンズーの祭壇前に集合して登山の安全祈願

セレモニーを行う。このあと隊荷の仕分けと整理をする。 日印両国旗と広島山岳会旗、ITBP旗を掲揚してBC開きの

七月二十日

暑い。午前中は全員が集まってミーティング、午後は荷物の整理。 早朝は○度で位でも日中は二○度で位になり日射が強いので結構

七月二十一日

ルート偵察をする。協議の結果日印別ルートをとることに決まり、 氷河の源流ともいえる五六○○Mの地点にC1を建設、 原がアク・タシ南西壁の直下まで続く条件の良いルートであった。 堆石帯をトラバースしながら氷河に入る。クレバスの無い綺麗な雪 員でヤンバー氷河の偵察に上がる。BCからサイドモレーンを登り 登山 行動の開始である。C1を求めて日印主力メンバーの殆ど全 更に上部の

までの荷上げにポーター五人を雇うインド提案を採用、C1から上 きカラコルム峠への踏査は出来ないとの事である。 入電があり、 の登攀に専念出来ることになった。この日ITBPの本部より無線 デリーでの報道に中国とパキスタンよりクレー 4 ムがつ

のルンゼから南稜へのルートで頂上を目指すことになる。又、C1

本隊は壁中央の大クーロアールから上部岩壁へ、インド隊は右端

H

七月二十二日 快晴後雨 C 1 雪

七時十五分BC出発、C1への荷上げ。 岡本・横山は十五時BCへ戻る。 晴 時 々にわ か雪 このあと雨、 名越・山本・溝手はC1泊 夜は激しく降る。

横山がC1で泊まる。高所順応はアプローチの条件が良かったこと

C1の積雪二〇たい。

C1泊りの三人は

BC

降 h

岡本・

吉岡

暗

もあり順調である。 七月二十四日 曇時々晴

○○紅地点までフィッ 本・吉岡がルート工作に上がり、 クスをつける。 横山はBCへ、 C1から大クー 名越・ ロアー ル Ŧi. 九

溝手はC1へ上がる。

名越・山本・溝手は六一 七月二十五日

五〇ぱまでルー

上工 作

岡本はBCへ、

横山はC1へ上がる。

七月二十六日

う。吉岡はBCへ降る 名越・溝手・ 山本は六二〇〇\coc2予定地までルート工作を行

七月二十七日 快晴

とにする。岡本はC1へ田内はC1を往復する 建設。日印ともにC3は設けずC2から頂上までルートを伸ばすこ か捗らない。インド隊は南稜のコル(六二〇〇計) 横山・山本はC2のキャンプサイト作りをするが氷は堅くなかな に到達、 C2 &

七月二十八日 山本・溝手でC2のサイト作り、氷は堅く手こずる。

名越・岡本・

吉岡はC1へ上がる。

七月二十九日

に泊る。 大崩壊し岩雪崩となって落下、 名越・岡本・吉岡・山本・溝手はC2を建設し山本と溝手がC2 この日インド隊ルートと日本隊ルートの間のルンゼ上部 被害は無かった。横山はBCへ降る。

一・岡本がC2に入る。 Ш 本 溝手はC2サイトの整備を行いC1へ降る。 替わって名

七月三十一

名越・岡本はC2より上部のルート工作を行 山はC1 上がる。 い六五 五〇ぱまで

フィックスを伸ばす。 八月一日 曇後にわか雨後晴 横

八月二日 名越・岡本はC1へ、 晴時々にわか雨 山本・溝手がC2に入る。 上部風

フィックスザイルが足らないので下部を外して上部の工作をす

氷壁

に1ピッチ伸ばして六七〇〇\\\まで行く。 Ш 本・溝手は上部岩壁の「鼻」と呼んだ部分を登りきり 横山はC2往復

今迄好天をもたらした西風が、 月三日 雨後晴 上部は雪 八月に入ると次々と積雲を運び雪

欠かせなく無人に出来ない。 を降らすようになる。悪天候の周期に入ったらしい。 一本・横山がC2へ上がる。三人はC2到着後一時間かかって除雪。 山本・溝手の下降を待たせて、 C2は除雪が 名越・

八月四日 時々晴 上部

はアタックに決める。 である。 天気は悪くC2の三名は停滞、 シン隊長は八日にC1を撤収すると言っており、 明日の天気予報は 「今日と同じ」 明日三人

八月五日 曇時々晴

了点に九時到着、 ップで垂壁部分を抜け頂上に続く雪面に出たのが十六時過ぎ、 名越・岡本・横 これより上はアルパインスタイルで登る。 山は 一時三十分C2を出発、 山本・溝手の工作終 岡本が

> 明日に備える。 初登頂をまかすことにして、六八七〇ぱの地点から三人は下降する。 雪壁の先に頂上部分が見えたが、 C1到着が二十一時十五分、 で充分と言い、進もうと思った名越も南稜を登っているインド隊に 人が揃 ったのは十七時となる。この時チラリとガスが切 期待したインド隊も悪天候のため引き返していた。 山本・溝手は二十一時六分C2に入り 岡本・横山は壁を抜けたからここ れ

八月六日 曇時々晴 上部風雪

くならなかった。十四時五十六分二人は下降開始、 とで頂上と判定する。 がわかる。依然視界は悪く、十四時十分山本が雪庇を踏み抜いたこ 着を待つ。 は様子を見ることにして、 でなだらかな所に立つ。十三時五十分である。視界が無いため 面に出る。やや緩い雪壁を2ピッチ トップで登る。十二時に名越パーティーが引き返した頂上直下の雪 山本・溝手は二時にC2を出発、 しかし十四時にインド隊は悪天候のため引き返したこと 溝手が十四時三十分到着、 同じく頂上を目指しているインド隊の到 (九〇)がザイル) フィックス終了点 待っても視界は良 途中でフィッ 登ったところ からは山 Ш

八月七日 曇にわか雨 上部は風雪 スを回収し二十一時三十分C2に帰着した。

インド隊はC2で停滞、 H 本隊はC2の撤収、 荷下しをする。

月九日 インド隊は三時 曇にわか雨 時C2に帰投。日本隊はC1を撤収して全員BCに下降 时出発、 Ŀ 十七時プレム・シン以下七名全員が山 一部は雪 頂に

インド隊はC1を撤収して全員

BCに降りる。

H

本隊は

荷物、 食 107

八月十日

功を祝う。 荷物整理、 ゴミの始末をする。 日印合同の夕食会を開き遠征の成

八月十一日

隊員に国境はない。我々のアク・タシは終わったのである。 ファイヤーを囲む。空罐を上手に打ってドラムとし歌い踊る両国の 荷物の梱包とゴミの始末、夕方よりヤクの糞を燃やしてキャンプ

八月十二日

雪後晴

BC-スキャンポチェ

時にスキャンポチェへ出発、 包まれて見えなかった。十七時スキャンポチェ到着。 合同隊の慰問に来訪、十一時に飛び立つ。BCの撤収を終わり十三 時ヘリコプターでITBP長官アリヤ氏とIMF総裁コーリー氏が 雪化粧で迎えた寒い朝、荷物をパッキングして出発に備える。十 晴れて来たのにアク・タシ頂部は雲に

八月十三日 晴 スキャンポチェーチャングルン

方より住民総出の大民族ダンスパーティーで歓迎と祝福をうける。 七時に出発、十三時にチャングルンITBPキャンプに到着、 4

十分レーのITBP駐屯地に着く。 七時三十五分出発、 八月十四日 快晴 チャングルンーレー バスは十七時カルドン・ラを越えて十九 着後盛大な歓迎をうける。

八月十五~十六日 レー滞在

八月十七日 快晴 レーケデリー

レー空港を八時三十分離陸、 九時四十分デリー

八月十八~二十四日

デリー

滞在

事を終る

八月二十日に合同隊の解散セレモニーをITBP会議室で行

0 八月二十五日 時デリー発、 十四時三十分大阪着、 デリー 大阪 小広 十九時三十一分広島着

<記録概要>

隊の名称 日印合同・広島山岳会ヒマラヤ登山隊一 九九三

目 活動期間 的 アク・タシ (七〇一六紀) 一九九三年六月二十八日~八月二十四日 の南西壁の登攀と登頂

リーダー=岡本良治 34 隊員=吉岡好英 横山

総隊長=田内實(67)、隊長=名越實(45)、

隊員

隊の構成

正雄 (37)、溝手康史 (38)、 山本宣夫

インド側(インド・チベット国境警察)

隊長=フカム・

シン (55)、医師=A・C・P・トウルパティ、隊員八名、

コック二名、ハイポーター七名

六月二十八日日本出国デリー着、

七月四日デリー発、

七

行動概要

C2建設、 月十八日BC建設、七月二十一日C1建設、 八月五日南西壁完登、 八月六日日本隊登頂 七月三十日

告 石』(日印合同・広島山岳会ヒマラヤ登山隊一九九三の報 八月八日インド隊登頂、 「岩と雪」(161号)(165号)、「シルクルートの 八月十二日BC 撤収

白

報

|註:本登山は日本山岳会海外登山基金助成金の割当てを受けて実

基調報告

青年登山懇談会

大学セミナー・ハウス(東京)

パネルディスカッション

学山岳部へのアンケート調査も実施した ある日本山岳会」をテーマとしたパネルディスカッションを 以来、二十数回の会合を通じて検討を重ね、 について検討してみようということとなり、 以前より懸案であった、日本山岳会の平均年齢高齢化の問 開催することにしたものである。また、その一環として、 行委員会」が組織された。同プロジェクトは九三年六月発足 学生等の各委員会のプロジェクトによる「青年登山懇談会実 会全体に関わることであるとの判断から、総務、 山対策全国大会」は一応の成果を得て終了した。そこで次は 九九二、九三年と二回にわたって開催された「中高年登 (巻末参照)。 内容が日本山 「若い人に魅力 指導、 大

日本山岳会に望むこと

山本

ているわけではないのでこれから私が話をすることは必ずしも全国

私は日本山岳会について、支部を含めて全国のことまで良く知っ

発は昆虫採集だったので、どちらかというと登るために山へ行くと う必要はないだろうということがあって山岳部に入ったのです。 他人と競い合うスポーツには向いていなくて、登山であれば競い す。高校時代から山岳部に入ったのですが、その背景には、 いうよりは、 的な登山をしてきたわけではありません。そもそも私の山 をさせていただきたいと思います。 的に通ずることではないと思うし、全国の支部の現状とは合致しな い部分もあろうかと思います。「日本山岳会に望むこと」として話 私は明治大学山岳部のOBですが、 大学と山岳部に属して山登りをしてきました。 何かするためのフィールドが登山だったということで 山登りについ てはあまり先鋭 登りの 私自 合

藤江義夫 藤井正彦

(青年部)。 (総務)・熊崎和宏 部) · 片岡泰彦 (指導) · 坂本正智

(青年部)・松原尚之(学生部 (総務)・相馬勉 委員=山本宗彦

(学生部)・ (学生

実行委員長宇田川芳伸

(青年部)、

青年登山懇談会実行委員は次のとおり

(順不同

義を感じなかったということもあります。どころではなかったということもあり、またあえて出向くだけの意生部の存在は何となく知ってはいましたが部のほうが忙しくてそれ

いえないわけです。行ってみると、一九八一年に中国のボゴタに行ったんな私が日本山岳会と関わることになったのは、大学四年の最をやっているから来てくれ」といわれたのがきっかけになりました。をやっているから来てくれ」といわれたのがきっかけになりました。をやっているから来てくれ」といわれたのがきっかけになりました。をやっているから来てくれ」といわれたのがきっかけになりました。をやっているから来てくれ」といわれたのがきっかけになりました。

ある時突然電話がかかってきて、「もう隊員に決まっているかられるかも―という気持ちがあった程度です。

して、私の同期の人間が二人参加して八○○○旨まで上がったので、おの学生との交流の機会を持ちました。その席で、ある大学の山岳都の学生との交流の機会を持ちました。その席で、ある大学の山岳社が三年から四年に上がる頃に明治大学がエベレストに遠征隊を出れが三年から四年に上がる頃に明治大学がエベレストに遠征隊を出れが三年から四年に上がる頃に明治大学がエベレストに遠征隊を出れが三年から四年に上がる頃に明治大学がエベレストに遠征隊を出れが三年から四年に上がる頃に明治大学が上げるの世界の世界の一旦により、その後の懇親会で初めて他の大学の山岳と呼んない。

彼らが八○○○旨まで上がれるのなら、ひょっとしたらオレにも登

なければ具合が悪いだろうといわれて入会しました。関わりが始まったわけです。日本山岳会の学生部主催だから会員で準備を手伝いに来い」という連絡があり、日本山岳会とはここからある時突然電話がかかってきて、「もう隊員に決まっているから

一時二十二歳だったので若年といわれたのですが、現在三十四歳

い人があまりいないんですね。になった仲間といつも同じ顔ぶれという感じがしております。新しになるのになぜか今だに若年で、気が付いてみると、そのころ一緒

五千余人の会員の中で、若い方から逆算すると、私は百八十七番

十七番目なのです。 すが、それだけの新しい人が入会しているのに私は若い方から百八目になります。昨年一年間で約三百人の方が入会したと聞いていま

実は私は一九八三年に青年懇談会主催のパミール、その翌年にカとになるのです。とになるのです。とになるのです。飲足ですが、私よりも若い人が入って来ないということは、何か蛇足ですが、私よりも若い人が入って来ないということは、何か

関わりがさらに濃くなったといえます。関わりがさらに濃くなったといえます。こ年続くと、いろいろな方とも知り合いになり、何かお手ました。三年続くと、いろいろな方とも知り合いになり、何かお手はいくらいはしなければならないという気持ちになって、ルームに伝いくらいはしなければならないという気持ちになって、ルームに関わりがさらに濃くなったといえます。

のネットワークができたことは非常に幸せだったと思っておりまが、日本山岳会に求めるものは人それぞれであり千差万別だと思いが、日本山岳会に求めるものは人それぞれであり千差万別だと思いが、日本山岳会に求めるものは人それぞれであり千差万別だと思いが、日本山岳会に求めるものは人それぞれであり千差万別だと思いが、私もそう思います。私は海かった。そころが先ほども述べたように、なぜかメンバーは変わってこなところが先ほども述べたように、なぜかメンバーは変わってこな

す。 しております。 い人には首を締 かし Ŧi 千人以上の会員が交流できるという一 めることになっているのではないかという 方の長所 が、 気 逆 かい

は ではないか。 れるということが日本山岳会では求めにくいということがあるから 1 か いる同人の名前で行きました。どうして日本山岳会の名前を使わな たこともあるし、 とはほとんどありません。 くりのために日本山 またステータスシンボルを求める人もあるでしょう。 Ш の人にとっては、 重々承知していますが かが救援に来てくれるだろうかー 登る仲間が欲しいということと、 ったのかを考えてみると、 に登りたい、 おられるでしょうし、 [を登りながら人生に彩りを加えたいという人もあるでしょう。 本山岳会への入会理 冬の黒部の横断に出掛けたのですが、 てはそういうものではないのではないか。二十代、三十代 日本山岳会」という名前を使って国内の個人山行をしたこ う名前で山 私は明治大学〇Bだから学生が n ということが第一 は 適当に名前をデッチ上げたこともあります。 人間のネットワークを広げたいからとか、 OBとしての当 岳会に入るという人はまずいないと思 一。同 激しい山 へ行って何か起こっ 由 明治大学山 は、 山岳会に求めるものとしてあ 人の名前で行ったのは、 昔を懐かしく語 の目的ではないかと思うの 一然の責任と考えて 一登りをしなくともそれぞれの地域 事故を起こしてはならないこと 山で遭難した時に救援に 岳部OB会という名前を使っ た時に、 遭難すれば必ず救援に その時は私が n 合 63 います。 たい たまたまり H しかし、 本山 ٤ います。 仲間づ 話会の 来てく です。 属して UX 去年、 若い H う人 緒

> あっ されているからです。 なるのではないかと思ってい 1 た時には、 6 私もその その同人の仲間 同人のメンバーであったということと、 私はそこのところが一つの大きなポ が救援に来てく れるという 形が もし イントに 確認

ます

に若い人が入ってくれると思います。 入って一緒に山へ行けるような下地があるならば、 ようで、 ですが、 されてい な人が集まっているのに、 があって、 部を卒業した後に改めて社会人山 会に入会して山へ行くということにはなっておりません。 の学生が集まって集会など開いたり、 日本山岳会は、 ない。 ところが大学を卒業したそれらの人たちがすぐに わりと入りづらいと思います。 全国的なネット 日本山 他の会には 岳会には学生 ウー いざ登山 ない クがあ 岳部に入るというのは 特 部があ に行 色として、 登山を行 h そういう時に日 ったときの h Ш を媒 年に ったりして 全 体に 玉 フォ もっとスム 何 的に多 回 L 本山 かは U 7 大学山 見簡単 H V 1 < Vi 岳会に るわ ろ 本山 から 0 1 いろ 支部 ス

あ ことの 線 0 観 うな価値観と同時に、 いう気がします。 もう一 から一 h 中心になっていく人はどうしても年 を包括するような懐の広さがもっとあってもよい H 本山 価値観 私 つは 歩引いた人が当たっていかざるを得なくなり、 たちは会員なので気楽に利用できますが、 岳会は五千人以上の会員がいるわけですから先に上げ 情報 が薄れていくのではないかという気がします。 しかし現実には、 センター ぜひどんどん山登りをしたい 的な機能です。 これだけ会員が増えると、 齢が上がって行き、 会にはいろいろな資 のでは それを利用 という人の 登るとい ない 谷 Ш かと たよ から 値

私は

遠足とか、林間学校などはどんどん減りつつあります。

と広く活用できる新たなことを考えれば、周囲から持たれる印象や すいようにもっと門戸を広げてもよいのではないでしょうか。日本 「敷居が高い」という印象が強い。せっかくの情報がもっ

多い。何をやっているのかよくわからないから入会する気持も起こ に出ていれば、よりアピールできると思う。またもし何かあった時 らない。登るということを通じて日本山岳会という名前がもっと表 イメージが変わってくるのではないでしょうか。 ートには「何をやっているのかよくわからない」という答えもかなり また、今回の企画を立案する段階で行った大学山岳部へのアンケ

活用することができれば、口コミで広がっていくであろうと思います。 ルするであろう。さらに、情報センターのような形で自由に情報を 実は、私は学校という場で仕事をしているので、最近学校で見ら

に、日本山岳会の救助隊が現地に向かったということからもアピー

です。私は埼玉県の中学校で仕事をしていますが、埼玉県に限って 会に入らないのは、日本山岳会の方に問題があるのではなく、世の れる現象を紹介し、参考に供したいと思います。若い人が日本山岳 中の風潮にあるという見方もできるという意味で参考に供したいの

いうと、これだけアウトドアがブームのようにいわれながら、中学

に含めれば無くなるとはいえませんが。 くということはあるだろうし、そういうものを野外活動というもの アスレチックとか運動公園のような管理された施設の中に連れて行 校の教育現場から野外活動は駆遂されつつあります。子供たちの活 動の場を野外に求めようという考えそのものが少なくなったし、こ からも減っていくような気がしています。もちろん、フィールド・ 山登りのような活動をする

を今その根底から見直す必要があるのではないかと思うのです。

長にぜひ山岳部を作りたいと話をしたことがありますが、「そんな の部も今の顧問が異動で転勤すれば消えてしまうでしょう。 中学校が二十三校あるうち山岳部があるのは一校にすぎません。 れ出すことをきらっています。山岳部についても、 飯盒炊はんをやってみたりといったことばかりで、そういう所に連 てしまいます。山の中へ行くのに、セットで町ででもできるような でしかできないことをしようと提案するわけですが、まず一 が好きだからせっかくの林間学校などでは山の中へ行って山のなか 危険なことはさせられない」と一蹴されました。 私のいる市では

を及ぼすことになるのではないかと危惧しております。こうした点 がどこへ行ったらよいでしょう」というもので愕然としました。 れしくなって行ってみると、最初の質問が「南アルプスへ行きたい 南アルプスへ行きたいのでぜひ相談に乗って欲しいというので、う 着て和気あいあいと山登りをするのが主流のような感じがします。 背負って山を歩くというのは流行ではなく、お揃いのトレーナーを 時に、あまり山登りはやっていないといわれました。重たい荷物を ではない野外活動をしようとする若者が育つでしょうか。 れた自然の中に行く者は恐らく減らないでしょうが、あえて、そう ?若年層に登山への関心を持たせるということに、少なからぬ影響 そういう子供たちが大きくなった時に、スキー場のような管理さ 中学校の現状がそういう高校生を育てているとすれば、これから 私は高校で山岳部に属していましたが、以前〇B会に顔を出した

[パネルディスカッション]

日本山岳会にするために若い人に魅力ある

1

・ディネーター

パネリスト 伊丹 紹泰 (前日本山岳会高所登山委員会担当理事)

貫田 宗男(アルパインツアーサービス社神長 幹雄(山と溪谷社 副編集長)

熊崎 和宏(文部省登山研修所講師) 片岡 泰彦(日本山岳会指導・遭対委員会担当理事) 山本 宗彦(日本山岳会学生指導委員会担当理事)

(アンタークティックウォー

ク南極点探検隊員

くことになりました。全国的規模で各大学山岳部へのアンケート調しようということからスタートして、本日ここにシンポジウムを開山岳会とは何なのかを考え、とにかく若い人達でディスカッション油的のづけているという現実に直面し、では若い人に魅力ある日本神の一個のでは、ここ数年若い人の入会が一個のでは、ここ数年若い人の入会が

査を行い討議していくなかで、

今後の日本山岳会の在り方を含め重

本日は六人のパネラーの方々に出席願い活発な意見交換をして要なテーマであるという認識に至りました。

ただきたいと思います。最初に簡単に自己紹介をお願いします。 ただきたいと思います。最初に簡単に自己紹介をお願いします。 ただきたいと思います。最初に簡単に自己紹介をお願いします。 ただきたいと思います。最初に簡単に自己紹介をお願いします。 ただきたいと思います。 最初に簡単に自己紹介をお願いします。 ただきたいと思います。 最初に簡単に自己紹介をお願いします。 ただきたいと思います。 最初に簡単に自己紹介をお願いします。 ただきたいと思います。 最初に簡単に自己紹介をお願いします。

貫田 高校の山岳部で山を始めました。子供のころ体が弱かった ので、競争のない世界として登山を選びました。体力がないので荷ので、競争のない世界として登山を選びました。体力がないのでずっとがあり、その岩登りの集団に入り二十一歳の時ヨーロッパ・アルプスへ行きました。社会人の山岳会は横のつながりがなく、その点大学山岳部をうらやましいと思うことがありました。しかし日本山大学山岳部をうらやましいと思うことがありました。しかし日本山大学山岳部をうらやましいと思うことがありました。体力がないので荷ので、競争のない世界として登山を選びました。体力がないので荷ので、競争のない世界として登山を選びました。体力がないので荷ので、競争のないです。

願いします。

峠で日本山岳会会員に出会い、誘われるままに集会委員会の人達と 東京へ転勤になり一人で出掛けるようになりました。たまたま三ッ タート、気さくな仲間がいることで卒業後も登っていたのですが、 何も知らずに大学で山登りを始めました。先輩の指導でス

仲間と楽しい時を過ごせる山は、愛情を持って接して行きたいと思 山へ行くようになったのです。山はスポーツであってスポーツでな 日本山岳会の内側に加わった感じを深くしています。一度深入りし います。一九八四年カンチェンジュンガ遠征隊に加わり、より一歩 い。自分と自然との対話に重きを置き、競うようなものではない。 すぎると容易に抜け出せないという良さもあるいい会と考えていま

熊崎

現在母校の成蹊大学で監督をしています。高校時代冬山も

ていろいろな意味でプラスになっています。中に入ってみると良い われ、参加し、 く顔を出していませんでした。卒業して後、一九八五年に日本山 ましたので、大学山岳部といいながらも、日本山岳会学生部には全 の時の仲間との付き合いが今だに続いており、楽しく、自分にとっ 会で中国の祁連山脈未踏峰への遠征計画があり、大学の先輩から誘 た社会人山岳会の人たちとヨーロッパ・アルプスに行ったりしてい やっていましたが、登山用具店でアルバイトをし、そこで知り合っ Bがいろいろあり、特に横のつながりに魅力を感じました。 以後日本山岳会へ出入りするようになりました。そ 岳

続いて一九八八年のチョモランマ遠征隊に参加しました。

あり、その後も日本山岳会隊で二度ヒマラヤに行きました。私にとっ 合は職場に恵まれていて、一カ月位の長期休暇を取りやすいことも 私の場 り出かけてしまったのです。結果的によかったと思っていますが、 横断計画を聞きつけ、 するとまた虫が騒ぎ出していました。そこにちょうど南極大陸徒歩 大学を出た頃はもう山は止めようと思っていたのですが、しばらく 日本山岳会学生部もなくてはならない存在となっていました。 学生のとき六千㍍のヒマラヤに出かけましたが、それ以上高い、 仕事か南極かで悩みましたが、結局南極をと

現状について話し合うことが多く、本日はそうした情報を分析して 講師を勤めさせていただいていますが、ここで全国の大学山岳部 ての日本山岳会は、 立山にある文部省の登山研修所で大学山岳部リーダー 利用し、 利用されているといったところです

みたいと思います。

自己を充分に生かすことができたようです。大学三年の頃先輩に日 ていたのか、山へのめり込み、変わり者の多い大学山岳部の中で、 たのですが入学と同時に山岳部へ入部しました。たまたま水が合っ に興味を持ち、大学では、冬山のできるクラブということで怖かっ 松原 法政大学山岳部〇Bの松原です。 私は高校三年の時、

出席しているうちに、大学山岳部では先輩・後輩が重要な意味を持 本山岳会学生部の集会に連れていかれ、出席してみました。

11 南極大陸で人生を決めてしまったようです。 事は 今になってヒマラヤの八千ぱ 年二カ月も休んだのに会社に復職でき感謝しています。 級に行きたくなってきたのですが、

大学山岳部の 現

があることと思い うことでお 大学山 願いします。 岳部の動向を一口に述べることは非常に困 ますが、大学山 岳部の現状と動向を、 問題提起と 難なも 0

日本の登山界をリードしてきた大学山

岳部とい

っても

関

いう ることから必然的にOB することによって、 り社会人になってからも活躍している先輩が現役との交流を活発に どや冬山登山を充分できない大学山岳部もあります。今回 ど級のバリエーションルートを登攀可能な大学もあれば、 東・関西の一部の大学であって、 は二、三年であるから、それだけでは初心者のようなもので、 かが決定的であり、 大学山岳部のレベルが高いか低いかは、優秀な指導者がいるかどう ん。全体としてレベルも低く部員も少ない現状にあると思い ケートは三百通発送したのに対し百通ほどしか回答がきていませ 特に海外遠征は実力とともに技術的な蓄積と経済力を必要とす ·形になる。これには現役への指導に熱心なOB会があるかどう 先輩の培ってきたものが大きい。在学中の経験 初めて実力のある大学山 が中心となり、 全国的とは言えない。 、そのなかに現役が加わると 岳部ができるのだと思 単独で八千 岩登りな ます。 0 やは アン

> ら可能な範囲で実行しているのが実情です。 も経済的にもどこまで現役への指導に当たれるか、 解釈してもいいかも知れない。私も一サラリーマンとして体力的に で中枢をなしている大学は、登山の実力と経済的余裕のある大学と 導者を求めてやってくるというパターンが多い。 日 暗中模索しなが 本山

上げ、 学生部の現状や若い人達への視点などいかがでしょうか んなときもあったというが、 す。日本山岳会では学生部の所属大学として八十校を数えるほど盛 伊丹 若い人達からの人気がゼロであると報じていたことがありま NHKのある番組で、 現状は極めて厳しい状態にありま 大学山 岳部を3Kの代表としてとり

B 本山岳会学生部の 現

これ に遠征しました。ちょうどソウル・オリンピックの二 学生時代として三指に入るくらい非常に印象深い フリークライミングの他、 あわただしい時でした。十人のパーティーでしたが、インスボン 経験しており、一九八八年の八月、 登山は印象的でした。互いにザイルで結び、酒を飲んで夜を明かし、 など各種の登山をやってきました。 せていただきます。 もすばらしい形で発揮されたからこそだったと思い 松 は、 原 日本山岳会学生部というヨコのつながりの組織の良 千日は H 本山岳会学生部の現状と活動ということで話をさ 私は一九八七年から八八年に学生部の委員長 沢登り、岩稜登り、 特に韓国の大学山 日本山岳会の学生部として韓国 人工登攀、 体験をしました。 ます。 岳部との交流 週 間前とい 尾根歩き 3 0

研

が決め手となってしまう。

公的な機関、

例えば文部省による登山

最

修所などへ参加してくる大学は新設校か地方の単科校であり、

した。もう亡くなりましたが早稲田のOBで竹中昇さんという方が で、参加校も激減状態でした。七五年頃の学生部は非常に活動的で だした頃の学生部は、ふだん常連として集まってくるのも十人以内 居一周マラソンとか六月の小川山集会などを行います。 回JACのルームに集まり、通信・行事を企画実施し、十一月の皇 出て来て活動できるのは十数校くらいでした。活動は基本的 八七年頃で約三十数校が加盟していましたが、実際にル 私が出席し に週一 ームに

ています。日本山岳会の学生部は学生時代により幅の広い山岳活動 岳会の学生部に集中してやっていました。韓国とかネパールの山々 五年生であったこともあり、 の時代に近づけたいと考えていました。特に二年目の時には、 を傾注していました。私が委員長をしている頃は少しでも竹中さん への計画が実行できたのもこうした背景があったからという気がし 竹中さんは学生部を若い登山家の集団として位置づけ、 自分の大学山岳部からは離れ、 自 日本山 一分の力 大学

分の大学でのリーダーを務めている場合が多く、 事を消化するのが精一杯で、 疑問を感じだしていることを聞き非常に驚きました。それぞれが自 います。参加している学生部の中心の人達が、その存在意義にすら 返事は返って来ませんでした。出席者も五、六人と少なく、年中行 いのではないかと思います。過去五年間で同じ大学のメンバー かし先日、学生部の現役と話し合ってみたところ、元気のいい 運営の難しさ、 組織の脆弱さを感じて 時間的調整など難 ば

す。

かりが常に多く参加していることも、

正常な状態とはいいがたい

をしたい学生にとってはなくてはならないものと痛感しています。

ではないでしょうか。これには各々の大学山 岳部での発展が必

うし、 あり、 山岳部の発展があってこそ、 Ш 岳部の現状を浮き彫りにしているのかも知れません。 今日のシンポジウムは日本山岳会の話ですが、 互いが影響を与え合い、 現状では困難なものがあります。 日本山岳会学生部も発展があるでしょ ともに発展していってほしいと願 それ は 個々の大学 同 時

日本山 岳会の現況

ます。

この時に委員長をしていました。

協力して対策に乗り出しています。 ど、メーカに任せる事なく、 り自分の立場からの取り組みとなってしまう。 片岡 伊丹 遭難対策を考えています。プラスチックブーツのバラバラ事故な の担当をしています。特に遭難については組織の枠を取り外して H H 本山 本山岳会での十数年間の経験から言えば、 岳会の現況について片岡さんから 勤労者山 岳連盟や日本山岳協会などと 私は登山の指導と遭

0 難

岳会として最大・最古であり、たとえていえば恐竜のようなもので 会しよう」と言われるところです。会員五千二百余名を擁する。 H 本山岳会の印象は、一言でいえば「もう少し年をとってから入

代は年間平均約百二十九名、 どうなっていくのかという問題があります。新入会員は 日本山岳会は都岳連加盟の一団体として、伝統と実績があります 平均年齢が年毎に上がり、 六〇年代は同百八十七名、七〇年代は 若い人の入らない会としてこれ 九五〇年 から

0% れは四十代以上が九〇%にもなることを意味しています。 十歳台まで若手としてくくっても全体の一○%にもなりません。こ であり喜ばしいことですが、 ・六%、三十歳代七・三%、四十歳代二二・七%、五十歳代三五 ます。 七名、 六十歳代二三・七%、 特にここ数年は急速に増加しています。これは大変健全 八〇年代は百九十二名、九〇年代は二百六十名、 このままでは平均年齢は上がるばかりです。 七十歳代九・六%となっています。 会員全体の年齢構成は、 十一二十歳代 年々高齢 となっ

化へと進んでおり、

若い会員も多くなるものと思います。 山そのものを実行する人々とがいて、 包容力があり、 今回のアンケートは、 山の経 験の多い集まりの中で、 定の方向性をもっていれば 登山を語る人々と登 本山

たいから入会するといった雰囲気がないといけません。組

織があり、

若い人が入会しやすいためには、

サロン的雰囲気より、

山へ登り

岳会の存在を知っていただけたわけで、 も変化と活性化のための参考にする時期に来ていると考えます。 伊丹 一本山岳会の年齢構成は、 各大学では一つのアプローチとして日 資料から平均五十四・八歳とで 内容を検討して外部 の意見

てい 長さんからご意見をいただきたいと思います。 -山岳会の将来を考え、 ます。 比較的若い人たちを擁している社会人山岳会の現状について この現状に不満というわけではありません。 発展するためには若い人たちの活力が重 しかし、 驶 H

社会人山岳会の

神長 社会人山岳会の動向に 0 て述べます。

> がり気味に定着してきたといってよいでしょう。 点から、いっときのアウトドアブームから、落ち着き、 にマッチしている、 うに思います。 登 山界全般はやや上り調子ぎみ、 登山は、 ③経済的にそれほど負担がかからない、 ①精神的な充足感が得られる、 なおかつ落ち着いてきてきたよ なおか などの 康志 つ上

です。 とに抵抗感をもっており、 が、実際は登山志向をもった若年層も増えているものと思われます。 で動いている人が多く、 しかし彼らは一般に規制されるのをきらい、 社会人山岳会も、若い新入会員の獲得には苦労しているの 山に行けば分かるように、 しかし中には若年層が比較的多い山 技術の習得に興味をもっています。 それでいて山には行きたいので、 中高年の登山者ばかり目立ってい 岳会もあり、 組 織の束縛を受けるこ その いく から ます 現 組

かを簡単に紹介いたします(内容省略) G登攀クラブ 雲上岳友会 会員数四十三名 会員数二十八名 平 半数一 均二十 五・六

歳

西朋登高会 ASAクラブ 会員数百三十五名 会員二十代多数 雲表クラブ

会員数三十名 二十名が二十代

これらの山岳会の共通点を列記すると ①卓越したリーダー がいて、 そのリー 実動二 ダーシップの下に

7

行を企画している。 のニー る山岳会であること。 代の若い会員が多く集まってい ・ズにも応えられる。 ③年間の山 ②ベテラン会員の多くが現役として自 ④会自体の目 行計 る 画が多様化していて、 的 意識 が明 確である。 分の . 会員 (5) Ш

みると、次のことが提起されます。などがあります。そこで若い人達に魅力ある山岳会について考えて

か。
一、会員が現役として自ら山を楽しみ、豊かな情緒を培っている

かちあっているか。 らこそ、自分たちが主体となって、全員登頂して、登山の喜びを分らこそ、自分たちが主体となって、全員登頂して、登山の喜びを分二、国内登山はもちろんのこと海外登山でも、いや海外登山だか

高校での山岳部の話を聞きましたが、特に高体連へ加盟している高校は大学とのつながりがほとんどありません。ひとつには競技登山に主力があり、自然愛好派的な登山でないところに問題がありま高校での山岳部の話を聞きましたが、特に高体連へ加盟している

未組織登山者の現状と傾っ

登山者を案内している貫田さんにお願いします。合ってみたいと思います。キリマンジャロやネパールなどに未組織合ってみたいと思います。キリマンジャロやネパールなどに未組織登山者について話し

山へ行ける時代になったものと痛感しています。 多くもっています。こうしたとき、今や組織に属さないでも海外の 貫田 私は仕事上、旅行社の企画で社会人登山者と接する機会を

②パートナーを見つけること、③遭難時の救援をしてくれること、からです。一九七○年の事でした。入会することで、①技術の修得、ルートや困難なアタックをするには社会人山岳会が最適だと考えた私は十八歳のとき社会人山岳会に入会しました。それは難しい

なく受け入れる点に疑問を感じていました。などを期待していました。大学山岳部は、OBの意見を何の抵抗

する代理店が繁盛しているのも、こうした登山者に照準を合わせて未組織登山者は二十年前でもたくさんいましたが、海外登山に対は格安のツアーと間違えているような人に出会うこともあります。近年、どこの山岳会でも中高年が目立ってきており、ひどい場合

りますが、このごろは全く組織と関係ないクライマーを見かけるこ組織に加入していることで安心して認め合うといったところがあ

チャンスを作ってあげているということになります。

こういう人童はやはりエキスパートで、講習会に出ては支持も修得、海外に出かけ実践で学んだ代表的な人です。

とがあります。例えば小西博文さんなど単独で講習会などで技術を

こういう人達はやはりエキスパートで、講習会に出ては技術をマスターし、登山隊に参加して実践で学んでいった人達です。このごた方法で登山隊に参加して実践で学んでいった人達です。このごこうした方法で登山隊に参加する傾向は今後ますます増えるものとも参加できるようになってきています。組織を嫌う若者にとっては大学山岳部の領域であったものが、今では未組織登山者にとっては大学山岳部の領域であったものが、今では未組織登山者にとって、ありに方法で登山隊に参加する傾向は今後ますます増えるものとこうした方法で登山隊に参加する傾向は今後ますます増えるものとこうした方法で登山隊に参加する傾向は今後ますます増えるものとこうした方法で登山隊に参加する傾向は今後ますます増えるものとこうした方法で登山隊に参加する傾向は今後ますます増えるものとこうした方法で登山隊に参加する傾向は今後ますます増えるものとこうによります。

大学山岳部の活性化対策

への処方箋についてお願いします。
ゆう 日本山岳会の学生部の隆盛は、大学山岳部の活性化強く関係していると思われますが、熊崎さんに大学山岳部の活発な活動が

なことがあります。
熊崎 まず今日問題となっている点について列挙すると次のよう

三、企画としては冬の富士山合宿とか大学同士の合同研修会など二、日本山岳会に加盟している大学山岳部はまだましな方である。一、全国的なレベルでの指導者不足である。

をやるべきと思っているが、現実には問題も多くあり実現できない。

日本山岳会学生部と文部省登山研修所との間に交流がなさすぎるところに意義があるはずです。全体のレベルアップのためにも、り、日本山岳会はあくまでもクラブとしてボランティアでやっていまそがを要求するのは無理なのでしょうか? 日本山岳会は種の保存育成を要求するのは無理なのでしょうか? 日本山岳会は種の保存育成を要求するのは無理なのでしょうか? 日本山岳会は種の保存育成を要求するのは無理なのでしょうか? 日本山岳会は種の保存のためにも若手育成の場を設ける必要があるようにも出います。

ではあるのか。松原さんいかがでしょうか。 は辺の力を上げることを目標にしてはどうでしょうか。

マスコミや山岳ジャーナリズムの影響も考えられます。雑誌に掲路では規制にしばられるとかガツガツやらなければならないと山岳部では規制にしばられるとかガツガツやらなければならないと山岳部では規制にしばられるとかガツガツやらなければならないと山岳部では規制にしばられるとかガツガツやらなければならないと山岳部では規制にしばられるとかガツガツやらなければならないと山岳部では規制にしばられるとかガツガッやらなければならないと松原 大学山岳部は3Kの代表格であり、危険、きつい、汚いと松原 大学山岳部は3Kの代表格であり、危険、きつい、汚いと

の免疫性が弱くなったのでしょうか。
、大学山岳部のもっている固有の良さとは別に、そういった世界と、大学山岳部のもっている固有の良さとは別に、そういった世界と、大学山岳部のもっている固有の良さとは別に、そういった世界の免疫性が弱くなったのでしょうな錯覚に陥る部分もあるようです。フ

入るには世の中が厳しすぎます。これから大学山岳部に入る人はむしろ白紙の人であって、これにこれから大学山岳部が必要であるとするなら、その方向性をしっかり考えないと、衰退するのではないでしょうか。山に登るために大学によれるでしょうかが要求されるでしょうないと、衰退するのではないでしょうか。

直さない限り自然の中でのびのびとした活動をする行動は取れませ 0) も五人もいればたいしたものです。 ケタにはなりません。部に顔を出す人は一人か二人で、OB全体で は半数も残りませんでした。卒業した後は五人残れば多い方で、二 ものに何の過ちがなくても、 山本 尊重と言っても、 これは日本の教育制度ともからんでいるように思います。 また、 大学山岳部出身の立場で経験を申し上げるならば、 雑誌は利用するものであるのに、 管理教育に徹底したものがあり、 一年で十八人入部したものが、 利用され、 根底から考え 雑誌の内容 部その 自 主性

なって来ているところに問題があります。にふり回されて自分を見失っているとすればそうした人間が多く

状なのです。 が表示なのに休みになると喜ぶなど、信じがたいのですがそれが現る部活なのに休みになると喜ぶなど、信じがたいのですがそれが現いるような現状に象徴的に現れていると思います。好きで入っている。

日本山岳会の問題点

司会 一九〇五年(明治三十八年)日本博物学同志会の支会としる。 一九〇五年(明治三十八年)日本博物学同志会の支会として現在は五千二百余名となっています。そして八〇~八五%の会良く、五〇%は直ちに収められています。そして八〇~八五%の会良く、五〇%は直ちに収められています。そして八〇~八五%の会良なに対して満足していただき、こんないい会はないと思います。 海外遠征にも参加させていただき、こんないい会はないと思いますが、 場は会に対して満足しています。私も二十年間在籍していますが、 場は会に対して満足しています。 でいただいたお礼奉公の気持からです。ここに並んでいる人達も多ていただいたお礼奉公の気持からです。ここに並んでいる人達も多ていただいたお礼奉公の気持からです。ここに並んでいる人達も多していただいたお礼奉公の気持からです。ことが必とっても同じような立場の方が多いのではないでしょうか。 とっても同じような立場の方が多いのではないでしょうか。とっても同じような立場の方が多いのではないでしょうか。

> 返ってきます。 じさんのやっているところ・メリットを感じない、といった声がじさんのやっているところ・メリットを感じない、といった声が貫田 一般的に日本山岳会についての認識として、知らない・お

ります。しかしこの三つとも日本山岳会にはありません。その代わ山岳会の三要素として、技術の修得・パートナー・遭難対策があ

り情報・人材・ボランティアといったことが充実しています。資金

面においても強力なものがあり、この点では若い人達からみても魅

力ある組織です。

にとって、障害になっているのではないかと思います。
かり海外遠征に参加させていただきました。それから八年、互いのなり海外遠征に参加させていただきました。それから八年、互いの人間関係や各界で活躍している方など、現在は違った意味で魅力を人間関係や各界で活躍していただきました。それから八年、互いの人間関係や各界で活躍していただきました。それから八年、互いの人間関係や各界で活躍していただきました。

松原 個人的には入会金そのものは安いとは思わないが、それは 大きな問題ではないと思う。要は若者にとって障害があるのではな 大きな問題ではないと思う。要は若者にとって障害があるのではな 大きな問題ではないと思う。要は若者にとって障害があるのではな はないと思う。要は若者にとって障害があるのではな

伊丹 日本山岳会も登山の活性化のために、海外登山基金からの

組織作りが必要ではないでしょうか。

なりますが、それまでに若い人達を温かく迎えられるような確かな行われるのも、十年くらい遅すぎたと思います。間もなく百周年と

要です。日本山岳会そのものを考えるこうしたディスカッションが

での施策・提案などいかがでしょうか。助成金交付などやっていますが、若い人たちを引き付けるという面

熊崎 日本山岳会のメリットとして、いろいろな人と知り合いに入会できることもある意味で魅力の一つかも知れません。しかし、に入会できることもある意味で魅力の一つかも知れません。しかし、お、山登りの点ではブラスにはならないでしょう。このことが若いも、山登りの点ではブラスにはならないでしょう。といると知り合いに入達にとって敷居の高さになっており、中へ飛び込む気にならない人達にとって敷居の高さになっており、中へ飛び込む気にならない人達にとって敷居の高さになっており、中へ飛び込む気にならない人達にとって

東の行事に関西のグループは参加できないし、それぞれにおいて可ところで、参加してくれる大学がどれくらいあるかが問題です。関岳会が例えば大学山岳部をバックアップするような学生部を作った伝できない可能性や機会を日本山岳会は作ってくれます。日本山若い人にとって実力があれば海外遠征など、小さな社会人クラブ

も、若い人が入りやすいような受け皿づくりなど考えられないものも、若い人が入りやすいような受け皿づくりなど考えられないものも、若い人が入りやすいような受け皿づくりなど考えられないものも、若い人が入りやすいような受け皿づくりなど考えられないものです。中丹 藤平会長は、青年対策こそ重要であるとして、今回のシン様力ある会である一方、敷居の高いのが欠点になっているのです。を力ある会である一方、敷居の高いのが欠点になっているのです。を力ある会である一方、敷居の高いのが欠点になっているのです。ではメリットがないと答えています。参加意識を価値あるものにするには多方面で検討する必要があります。こうした意味では非常に対している。関本では、一〇一・圏内の大学となり、ではメリットがよります。日本山岳会が若い人達をいかに吸収してではメリットがよります。日本山岳会が岩地へらいあるかが問題です。関本の行事によっているのでは、大学がどれくらいあるかが問題です。関東の行事に対している。日本山岳会が古りないというないという。日本山岳会が大学となり、

ものと考えます。 知れ渡るようにする、この山登りをしたいから日本山岳会に入りた これを日本山岳会がクラブとしてマスコミ等を通して一般的に広く 若い人たちのための登山集団としての存在は意味深いものとなるで 思う。山登りの方向性が合えば日本山岳会そのものを多少離れても い。そして若い人たちが集まってくるような、そんな形が望まし キューの組織作りはできない。 るでしょうし、新人の受け皿として適切な場となるように思います。 キューの体制をとれれば、他人まかせでないしっかりしたものにな での援助するといったものが考えられます。その組織が独自のレス あろう。一つのクラブとして独立したものを側面から場所と資金面 ラブやスケッチクラブのように同好会的に発足するのが望ましいと 片岡 ただ最初から新人を受け入れられるようなしっかりしたレス 具体的に作るとなると委員会でなく、アルパインスキーク 同好会的な集まりからスタートし、

貫田 中高年にとっての魅力ある日本山岳会は否定しないが、同 関田 中高年にとっての魅力ある日本山岳会は否定しないが、同 関田 中高年にとっての魅力ある日本山岳会は否定しないが、同 関田 中高年にとっての魅力ある日本山岳会は否定しないが、同 関田 中高年にとっての魅力ある日本山岳会は否定しないが、同

ティアに支えられてきた面が多くあります。ドイツ山岳会では四十なにかをするには資金を必要としますが、日本山岳会ではボラン

万人の会員がおり、 収支が百億円にも達するといいます。これを全

世界の山 岳活動に使っているのですから、日本とは違いがありすぎ

よって、大学山岳部とは別に日本山岳会に入会したいということで な素地は持っているのですから、ぜひ実現して行きたいものです。 て比較にもなりません。日本山岳会にとってもこうしたことが可能 山に登る人のための三要素が生かされた活動をすることに

気軽に引き付けるだけでは問題を残すことになるでしょう。 えるようになってはならない。海外登山に参加した人の何パーセン トが日本山岳会に残るかが問題であり、パック旅行のように若者を 底辺が広がって行くものと考えられます。ただ海外登山を手軽に考

に思います。日本の山も十分登っていないのに海外登山をしたなら、 貫田 私はチャンスを与えるということで大変な意味があるよう

れが日本山岳会に入ったときも、最初は引っ張り上げられて登った 求めても、それも一つの方法であり、いいように思います。われわ 的なことに欠ける面は確かにあります。しかし手段として手軽さを 山は苦労して登るもの、 山の情報も苦労して得るものといった本質

うか。

周年ではマカルー遠征隊が予定されています。こうした海外登山 六年のナンダデヴィなど多くの山 岳会はマナスル遠征隊以外にも、 は次代を担う人々の育成としての発想が根底にありました。 ル遠征など数多くの海外遠征を実施してきています。そしてこれら あり方と学生・青年部のあり方についていかがでしょうか。 のであり、最初の気軽さを悪く評価することもないように考えます。 青年部では、マッキンリーの気象観測に参加したり、パミー 岳記録を残して来ています。 一九七〇年のエベレスト、一九七 日本山 九十

> 行く気のない人を連れて行っても将来につながらない結果となり る遠征隊のようなものは今後もあってはならないように思います。 松原 自分としてはあまりにも楽に行ける山、 連れて行ってくれ

会にとってメリットはないでしょう。

年のナンダデヴィはボトムアップ型の計画でした。トップダウン型 熊崎 計画では、政治的経済的にメリットはありますが、下から盛り上 マナスルについての細かいことは知りませんが、一九七六

0

思う。そう言いながらも私はトップダウンの形で三国合同のチョ がったものでない限り今この時代に魅力を感じる者は少ないように 希望するものです。一九九○年のパミールとか一九九二年のアムネ ランマに参加したのですが、出来る限りボトムアップであることを れたということであり、こうしたことが最高の喜びではないでしょ マチンの遠征は自分で暖めていた計 画を、 日本山岳会がやらせてく

してとても大切なものと考えます。 登山隊を出して欲しいということです。こうした点は、きっかけと こと、今一つは頂上に立つことで相殺されるようなボトムアップの 神長 つには海外に行ったとき登頂したことによる喜びを知る

ないはずです。私は一九八八年にチョモランマに行かせてもら に連れて行ってもらい、 心から出掛け、 ような登山は、 したが、 山本 あなたを教育してあげるためにとか、 あの計画は私が作ったものではありません。それこそ棚ぼ 現在公募登山にみられると思う。 精一杯がんばれればいいのではあって、エベ 頂上まで到達できれば隊員としての上下は あなたのために行く 登りたいという一 レスト

力量・運がなかったのであって、 できた山でした。 た式にこれこれの計 るような下地があればいいように思います。登頂できなかったのは、 いってもらった山でした。それでも現場では一生 トップダウンであっても現場の 画があるから行かない 登山の出発点そのものには差異は かと誘 人間が精 一懸命荷揚げで苦労 われ て、 杯やれ 0 n

マナスル、

エベレスト、

ナムチャバ

ルワなど日本山岳会は

はないでしょうか。 シャーを与えないような、 うな登山が増えてくるでしょう。 目立つ海外登山をしてきました。 ような雰囲気が欲しいように思います。 、が満足するような遠征隊であれば、 会と遠征隊とが組織として対等にやれる そうしたとき日本山岳会がプレッ 今後は全員登頂、 自然に人も集まってくるので 例え失敗が続いても、 全員楽しめるよ 行く

はない ですし そ価値あるものとして受け止めたいものです。 山として挙げられているようですが、 ネリストの皆さんで熱心なディスカッションが行われました。 岳部に対 上占める割合はわずか九粁に過ぎません。このような現実と、 登ることがこれからの登山にとって重要であるように思 貫田 この占める比率が非常に高く、 、負担になるようなことはできるだけなくし、 日本山岳会の会員の平均年齢は五十四・八歳であり、 マッキンリー、 遠征隊もそこへ尺度をもって行くのではなく、 して行ったアンケート調査資料を参考にして、 キリマンジャロなどが学生が登ってみたい 十一三十歳代の会員が全会員数 日本山岳会は背伸びする必要 中高年も増えたこと 、自然に求める山 本日はパ 充実感こ 中高

> ようなことになろうかと思い るようなテーマではありませんが、 が問題であるだけに、 朝一夕に明確な結論や処方箋が導き出され ます。 本日の議論をまとめますと次の

とらわれることなく、個人レベルで日常的に自由な国 できるものとする。 ものとし、 会あるいは青年部名で山行が行え、遭難等有時の際の責任を担える な集団を、 若い世代の人たちが、 同集団には、 日本山岳会内に設置して欲しい。 意志さえあれば地方支部の若手会員 海外遠征時だけでなく、 その集団は、 出 内 身母 行が可 H 体等に 本山 Int 能 岳

最先端を行く登山計画の策定と平行して、 潮を会内に醸成すべきである。 充足感の得られる計画を指向すべきである。また、そのような 本会が主催する海外登山につい て、 数多くの隊員が登 世界の時 流 登 思潮 頂 の喜 0

を競う競技登山のあり方への疑問、 0 会にするための方策を積極的に考えていきたいものです 編者より・ 本日出された意見を参考にしながら、 会場参加者との応答では、 全会員を対象とする山岳保険等 若い人たちに魅 高体連、 国体での Ш K 岳

問題が出され ましたが、 紙幅の関係で割愛しました。

槍ヶ岳紀行

女は赤いメリンスの下着を着け、絹の脚半をしている。東京の学生 楽しいものだ。男はござ(日よけで、しかも雨具である)をまとい、 小商人などの普通の人々が寺や神社をお参りに行くという口実の下 と旅への誘惑に駆られる。移動は六月から始まる。農民、労働者、 じように、湿気の多い酷暑から逃れたい、休息を取りたい、日々の 繰り返しの生活から解放されたいという気持から、人々は夏になる 一八八六年八月初旬、私は日本にいた。この国でもフランスと同 そして楽しい旅である。この風変わりな旅人の群に出会うのも いささか長い旅に出ようと集まる。いつもあまり金のかからな 電信が届く所なら、容易に日用品を入手できるし、仕

根の優雅な湖のほとり、あるいは海辺に滞在する。鉄道の近くとか のかなたにあこがれるものだ。普通の人々は日光の涼しい山麓、 が忘れられない。しばらく旅行をしていないと、人間は何故か遠く ジョルジュ・アペ 水 訳

事もある程

度

のである。 毎日二百人~四百人が犠牲になっていて、東京は混乱を極めていた あった。当時の東京は倦怠どころではなかった。コレラが流行し、 らよいかを考えた。それはまったく個人的な、自分勝手な気持ちで なら連絡をとって処理することができるからである もすることがない。つきまとっていた倦怠から逃れるにはどうした 私は政府が与えてくれた休暇をできるだけ楽しく過ごす以外に何

かくして、かねてから関心のあった飛驒地方を旅の行く先にきめ 日本の内陸部の旅は、京都、 出発することにした。 日光、 箱根などのような古い昔から

名所旧跡を訪ねる。公務員もまた可能な限り同じように旅に出る。 は、かつてスコラ学派の人々がやったように、三、四人連れ立って

ヨーロッパ人はどうかというと、極東にきてもやはり避暑の楽しみ

たちは七月のはじめに解放されて、

田舎の家族の元に帰る。あるい

クリーニング店、

とも付け加えておこう。

椅子とテーブルでさえ、

めつ

たにお目にか

達者ではない。

彼はほとんどいつも誤解するし、誤訳する

からないし、あっても使いにくい。そこでは、

なんとか我慢できる

その他もろもろ

好

む者は缶詰食品、

ワ

イン数ケー

ス、炊事道具一式、シーツと衣類

一需品の店をみつけられないのである。たしかに、

靴を修理したり製造できる靴屋、

れるだけで、旅行ができなくなるものでもない。 地少しも欲しくはなかった。パスポートがなくても、少しばかり遅 国人に対して恩着せがましくパスポートを交付したが、そんなもの 国人に対して恩着せがましくパスポートを交付したが、そんなもの 国人に対して恩着せがましくパスポートがなくても、少しばかり遅 は少しも欲しくはなかった。パスポートがなくても、少しばかり遅 ないるだけで、旅行ができなくなるものでもない。

が、パン職人の経験不足を物語っている。 にくい不出来なものである。 偶然にパンでもみつけたにしても、 5 食用油、 ないといって拒否しても、 な障害であった。 、られている野菜、 ヨーロッパ人は面倒でもコックと食料品屋を引き連れることに 大きな町ですら、 小麦粉、 日本ではベッドがインテリア家具として知られていないこ 別の障害があった。それは条約に従うよりもはるかに重大 もし、この食べ慣れない奇妙な料理を胃が受付けないな あってもひどい品質のものだ。栄養なんて問題外だ。 ワイン、ブランデーなど、 日本の食べ物である。この日本の料理を食べたく じゃがいも、 食肉、 その人が贅沢だと非難されることはない まちがいなく一所懸命作ったのだろう コーヒー、 にんじん、えんどう、 重い、 フランスにおいて最も食 焼き方のまずい、 チョコレート、 すべてがない。 バター、 んげんも 消化し もし、

> ことだろう! 必要な場合には人力車に載せればよい。 それに鉄製のベッドなど一揃いを携行すればよい。これらの 通訳が付いたら、 や馬車屋や使用人の意のままになるだけで、 は、まさしく王様の贅沢さであろう。そして、 物した人にはおなじみであろう。 そのような足手纒いな荷物を持 その不便さは更にひどくなる。 しかし、これはなんと金が 人力車 金 の出 旅行者は宿屋 は っての数週間 最 し甲 近 覧会を見 荷物 一の主人 の旅行 か

その外国語を知っていると自慢したり、 行者はできれば通訳を使うという贅沢をすべきではないと考えたの る。また、尋ねるのも、 がうまく通じない。当然のことながら、 らが現地の人とヨーロッパ人旅行者との間に入っては、 である。たとい、 を通じさせることができた。その上、 まま日本の風習になじんでいった。どうにかこうにかこちらの はっきりといっておこう。 私が出発するときには、そのようなものは全くなかったことを 友人やガイドなどが通訳してくれたとしても、 用事を話すのも通訳にする。それに通 以前に行った狩猟や旅行でも意識しない 私は全く一人で旅に出た。 自信を持っているほどには 誰でもまず通訳に話し掛け 両者の意 思

魚である。 付けもしていない米飯 がて次第に受け入れてしまう。 かない。 アントルメとして出てくるのは、 私の胃は最初のうちは日本の食べ物を受け付けない これに卵を加えて、 海岸では魚を生で食べる。 一これがパンの代わりである。 数種類の料理を知ってい 元のままの形をしたままで、 内陸部では塩で保存したもの 焼魚、 あるい アントレ、 n 何の味 U B

際の料理は別である。これらに味付けとして、かつおぶしを削った 干ししいたけ、かぼちゃ、なす、いろいろな海草……これで普通の 主婦である。煮豆あるいは納豆、ときには粉にされ練状にされた豆、 「本の料理のほとんどすべてである。もちろん、祭や特別の行事の

に飲むだけである。 か茶を飲むことはめったにない。酒は贅沢な飲み物で、祭の日など 野菜や魚のスープは食事のうちでは重要なもので、食事の最後に湯 ものと醬油を用いる。米飯は大根や菜の漬け物と一緒に毎日食べる。

に役立つのである。武器は何も持たなかった。日本はどこもヨーロッ 人々を魅きつけ、知り合いになったり、 立つかを知っている。都で作られたものが辺ぴな村に住む善良な まごましたものが入っていた。私は経験からこれら小物がいかに役 のほかに贈り物として粗末な絵、 ある。その鞄と携帯毛布の中には、必要な衣類も入っていたが、そ コーヒー、チョコレートを少しと、ワインを二本入れておいたので 私は自分でいくつかの菓子を作って食べた。旅行鞄の中にパン、 ヘア・ピン、ナイフ、扇子などこ あたたかい歓待を受けるの

私はそこの自然の美しさに強く魅かれていたし、その地方に特有な 西に南北に走っていて、隣接の地方との境になっていた。北から南 風習を調べようと思ったのである。高く、険しい二つの山脈が東と のことながら、その住民が他の地方では見られない古い風習を保っ あるいはその逆に流れる川の狭い谷だけが、そこへ行けるルー 冬は寒さがきびしいが、夏は涼しく爽やかである。当然 旅行の行く先に飛驒地方を選んだ理由を述べておこう。 パの諸国が羨むような安全な国である。

ていることを期待してい

のように鉄道も立派な道路もなかった。 |山岳地方) のように思えた。もっとも、 飛驒は日本のオーヴェルニュ地方(フランスの中 飛騨にはオーヴェ

部

ところどころに木立が見られるだけである。最後には、 複線化する必要があり、すべての技術方法を再構築する必要がある。 展のためには不十分といわざるを得ないだろう。近い将来において 本の脊稜となっている山塊の麓まで単線の鉄道が通じている。 ヴ・ドレの絵を思い出させるかのようである 山を迂回する。この山はファンタスティックな鋸状の山で、グスター 広がる肥沃な大平野は、水田と桑畑と味気無い野原が一様につづき、 この途中では何も言及すべきものがない。 た。碓氷峠は前述した山塊の中に少しばかり開かれた場所である。 東京から碓氷峠までの百五十世の行程を約五時間で行くことができ は株主へ莫大な利益をもたらしているが、 、月十一日の朝早く、私は東京を出発した。 一八八四年以来、 隅田川と利根川の流域に 国の防衛および経済的発 汽車は妙義 H

いう。やがて、乗合馬車が我々を坂本へ連れていく。 各人は布あるいは油紙に包んだ小さい荷物を手に持っている。つい 声も立てず、混乱もない。ケースもトランクも大きな荷物もない。 で、茶屋の女中がやってきて、 ここで終点に着く。乗客すべてが降りる。人々は楽しそうに急ぎ、 しばらくお休み下さいと旅人たちに

様子を説明するのがいつも苦手である。この村は中仙道という非常 坂本はみすぼらしい五、 六軒の宿屋があるだけだ。 私は窮 迫した

かったのである。どうせ、いび私はわざと会話を長引かせた。

いびきと蚤とで眠れないと思った。

近くの部屋の人々は旅は道

汚い布団の中に横になるの

が恐ろ

か

予想はすっかり外れてしまった。

ことは不可能で、譲歩せざるを得なかった。もし拒否でもしたら、この依頼は単に形式的なものであって、この同室の要求を拒否するた。不運にも、客の数が部屋の数よりも多かった。それで、客のう私が選んだ宿屋の主人は何のためらいもなく、特別室に私を通し

礼儀知らずの人間と非難されるであろう。

同室者はここの心地悪さについて私ほどには不満を感じていない

習に順応しなければならないという格言である

ることを知らない。 けっして抵抗しないし、日常生活の些少の不便さに異議を申 他のアジア人と同じように、 ようだった。良い宿屋がどれくらい快適かを知らないのではない。 士官学校の生徒がいて、 はなれようとしなかった。 我々はすぐに親しくなった。 その知識を増大しようとして、 ヨーロッパ人からみると、 その少しばかりのフランス語の知識を利 日本人は免れられない運命に対して 同室者の中に 羨ましいくらいの忍 夜の十 時まで私に し立て

> この暴力からいつも学ぶのは、旅する国の良いあ かかれば、 で、各人は完全に独立しているかのように、各部屋のなかで思って こえてしまう。 各部屋の間には薄い壁があるだけだから、わずかな音でも互 人間らしい上品な礼儀を保って生活するのに、どうしてであろう。 赦をしない。 陽気なばか騒ぎが大きくなる。その結果、真夜中に、 食べて、 いるように見える。それでも、敢えていいたい、 関心であるかがよくわからない。日本では、人々はどんな場合でも 合奏であった。ものすごい大騒ぎ。 れとばかりに親しくなり、挨拶とお辞儀の攻撃が始まる。 おしゃべりをして、飲んだ。次第に、 静かさを欲し、静かにしてくれというにちがいないと。 他人の睡眠に対して、日本人がどうしてこのように しかしながら、それは暗黙の慣習あるいは虚構の力 日本の旅人はその隣人に情け 祭は活気を帯びる。 日本人でも病気に る いは不都合な慣 叫びと笑い 容 は

ない。 その地を利用して新しいマスカットを栽培している)。 ブル た土地は熔岩の厚い層の土におおわれた(ある若いぶどう栽 浅間山がそびえ、硫黄質の煙雲が頂上付近にあった。 谷には葦と水草におおわれた長い平原がつづいていた。少し右には あたりの風景は、 込んだ。この乗合馬車は交通のはげしい街道に走っているのである。 百年前のことである。多くの村が姿を消し、六~八キロ半径にあ ゴー やっとこさ、 六時頃、 ニュのぶどう栽培者から教えを受けて、一八八七年以来 碓氷峠を上る途中では一様で、 馬車屋は我々を三台の大きな乗合馬 峠の頂上に達すると、光景は一変する。 目を引くものとて 最近の 車

約四時間で、上田の小さい町へ下った。そこが馬車の終点である。

Ξ

上に、優雅な、かわいらしい鐘楼がひっそりと立っていた。清冽な川が流れていた。本通りの端れには、モミの木の茂った丘の部のアルザス地方)のある村によく似た感じを持っている。右には美しく晴れた日に見たのだが、上田はヴァージュ(フランス北東

馬車は我々を外観だけは立派な宿屋の前で降ろした。

た。

翌朝、上田へ散策に出掛けた。上田は養蚕の最も盛んな地域の

同行者たちは茶を飲んだ後、やがて分散した。私は数多くの挨拶

然とした。私はきちんとかなりのチップをはずんで、人力車で出発態なので、熟考の末、隣の村へ行きたいといったら、宿の主人は啞順快さを知っていた。私は粗末に扱われ、一人に放っておかれた。具としてそこにあった。私は粗末に扱われ、一人に放っておかれた。目としてそこにあった。私は経験からこの粗悪な豪華さの価格や不具としてそこにあった。私は経験からこの粗悪な豪華さの価格や不具としてそこにあった。私は経験からこの粗悪な豪華さの価格や不具として、熟考の末、隣の村へ行きたいといったら、宿の主人は啞声を見いた。

て特別に考えなくてもいい、また彼が思っている以上の宿代を支払気持ちが落ち着いてから、私はつけ加えていった―私の扱いについ儀な男は自分の耳が信じられなかった。それで、彼のびっくりした像な男は自分の耳が信じられなかった。それで、彼のびっくりした中之条村はたしかに異国人を泊めたことはなかった。だから、自

夕飯を用意している間に、主人は私を川へ案内した。彼はたいて

か、食欲が出て、女主人が用意してくれた甘い菓子を喜んで賞味し日本人は水浴を嫌い、湯に入るのが好きなのだ。体を動かしたせいを利用して、彼を驚かさないようにして、こっそりと水浴をした。ごした。もっとも、客などめったに来ないのだった。私はこの機会い日没後に釣りをしていた。そして、余暇はすべて網を修理して過い日没後に釣りをしていた。そして、余暇はすべて網を修理して過

大きな工場があり、そこでは特に若い女性たちが働いていた。葉が茂っていた。農家はこれを一年に二、三回摘み取る。郊外には木は地上十センチくらいで切られ、その切株から放射状に枝が出て、つである。平らなところにはすべて桑の木が植えられていた。桑の

タ方、警察官がやってきて、憲兵のようにいかめしく、堅苦しく、 をが不得手で、書式など全く知らなかったから、届けるのを忘れて、 とが不得手で、書式など全く知らなかったから、届けるのを忘れて、 とが不得手で、書式など全く知らなかったから、届けるのを忘れて、

TU,

槍ケ岳の険しい頂上を越えて飛驒へ向かうルートを選んだ。な街道を横目で見ながら、私は保福寺峠を越え、松本平を横切り、八月十五日、午前五時頃、中之条に別れを告げた。昔からの容易

こともできなかった。私の荷物を背負った男と一緒にてくてくと歩 福寺峠はたいへん険しく、殆ど人も通らず、 公的な馬車に乗る

至るところでみられるように、 風な建築様式の新しい学校が目に付く。そのような学校は、 に狭い庭と二、三の樹木があるだけである。わずかに、ヨーロッパ るような大きな農家は見当たらない。どの農家も小さい家のまわり いえるだろう。 この地方の村は質素なように見えた。うっ蒼とした竹林 平野の中の少しばかり豪華な建物と の奥にあ 日本の

客が立ち上がると、 あっても、そこに立ち寄って、一服し、熱い茶をすすって数分を過 名な神社や寺院にはそれぞれ茶店がある。どんなに貧しい旅人で を接待する、このような休憩所は日本では数多くある。峠、滝、 ごして元気を回復し、あたりの風景を楽しむのである。茶代として の近くには、二つの泉が涌き出ていた。きれいな清水である。旅人 銭か二銭のチップを受け取ると、いつも愛想のよい微笑で答え、 保福寺峠の上には、三、四軒の茶店がかたまって立っている。そ お礼の言葉とともに、ひかえめなお辞儀をする

ず、そっと歩いた。 い中庭と誰もいない空き部屋がつづいていた。彼女はもの静かに話 保福寺村の 使用人がいないので、女主人が私を家の奥へと導いた。 絶えず廊下をガラスのように光るまで拭いて磨き、 外国人の突然の侵入に少々おびえて、 唯一の宿屋はまるで古い修道院を転用したように見え 東海道の騒々しい宿屋では、 畳の上を音も立て 機敏な女中がたく さびし 竹の

橋やミニチュアの岩などを配した小庭がある。そんなところとは全

く違った宿屋なのであ その家族は女主人のほか、 祖母、 夫 それに小さい子供が二人で

な水だけで済ますことにしたのである。 に自慢気に示した。飲んでみろというのである。そこには、完全無 にいえば、薬剤師は数多い薬の中から黄色の粉末を取り出して、私 そして猫までが、出身の村そのものであった。その店の名誉のため ルよりもずっと田舎くさいホテルを思い出した。主人、使用人、客、 した。松本の知り合いの宿屋への紹介状を携えていたからである。 中の一級品である。これは私にとって非常に誘惑的であった。 ワインとレッテルに書いてある。これはたしかにワイン地 うだと示した。ソーテルヌ(ボルドー近くのワインの産地 広口びんの陰から深紅色の液体の入ったびんを取り出して、 り出した。無視されたことに驚いて、この元気のいい男は、 わうのは恐れ多いので辞退し、自分の旅行鞄の中からコーヒ 臭のコーヒーという表示が付いていた。私はそんな高価なものを味 部屋を見回しているうち、パリの、古い、かびくさい、 が宿屋である。そこの客は古くからのお得意さんばかりであった。 慮なく飲んだ。翌朝、たいへん喜ばしい期待に心を膨らまして出立 た。年老いた女性は、すっかり打ち解けて、私が作ったココアを遠 始めはおびえていたが、そのうちすぐに慣れてきて、好奇心を持っ ある。耕作と旅人の宿屋とを兼業していた。彼らに話し掛けると、 その宿屋もまた兼業者であった。一階が食料品と薬の店で、二階 今度もまた彼の努力は無駄であった。 私は誘惑に負けず、 田舎のホテ 下倉 ーを取

城は私がそれまでの旅行で見た城のうちでも、最も良く保存されて 院がある。 行者の関心を引くようなものは何もない。確かに、そこには古 なくぶらっと出掛けた。松本は古い城下町で、その城を除けば、 のごちゃごちゃした店のひやかしも終わったので、 しかし、寺は日本には無数にある。それに反して、 町へ目 松本 い寺 的 旅 \$

れている。 いたが、これは番人が自分の家族用に種を蒔いたのである。数多く くれ、まず荒れたままの庭を通った。あちこちに野菜が植えられて 重要な部分はどこも損傷を受けていない。年老いた番人が案内して があった。しかし、幸いにも中央の天守閣そのものは大事に保存さ 水面を、 一番手前の地区には刑務所があり、第二の地区には裁判所と中学校 青い浮草や神聖な花を咲かせた水蓮が一面に覆っていた。 その所有者が十七年間も放っておいたにもかかわらず、

な水源によって堀には水がいっぱいに湛えられており、その淀んだ 深い堀がそのまま残っていて、三重の城壁が城を守っていた。豊か いるものであった。一度は訪ねて見る価値があると思う。そこには

ら城 は佐倉城などは、 士の姿がありありと頭に浮かぶ。大阪城、 間から矢を射って、 まう。武士たちは平野から攻めてくる敵を待ち受けている。その狭 くと、するすると茂みの中に隠れた。小さい、 の蛇が地上で気持ち良さそうに日向ぼっこをしていて、我々が近付 などを見ていると、 ているのに驚いた。その巨大な城壁と梁、突出 の中に入る。よくみればみるほど、フランス中世の城の塔に似 こんな風に古い昔を想像させてくれない。それら 昔の日本の武士のことをいろいろと想像してし 五層の天守閣を守るために身をひそめている武 名古屋城 がっしりした入口か した狭間、狭い階段 水戸城あるい

はあまりにも近代的すぎるからである。

るところに、花と鳥があふれていた。 ぐれである。鮮やかな生け垣の手前には水田の緑がひろがっている。 はニワトリが通行を邪魔した。 しばしば、緑の草木の間を流れる小川にかかる狭い橋を渡った。 ている。農家の廻りには栗の木や柿の木があり、木の茂みはセミし な風景にうっとりしていた。 らしていた。私は馬車の心地よい揺れに身をゆだねながら、 翌八月十七日に松本を出発したとき、太陽はまぶしく松本平を 街道筋にはずっと美しい村々がつづ あるときは子供が、 あるとき 力 4

人々とすれちがった。 やがて、ジグザグの道は松本平を見えなくしてしまい、 間をくねくねと通じている小道を、 いものとなった。時折、 山の麓にさしかかると、あたりの様子が一変した。 この地方の馬が大好きな秣の束を背負 私はゆっくりと上 岩と谷川との っていっ 風景は った

銭必要である)。冬には家で織物を織るが、 くれた。水の落下のエネルギーを動力に利用しているというのであ れこれとささやき合っていた。工場主はめずらしい情報を提供して すめたので、工場へ入ると、工員たちは無遠慮な異国人についてあ 製糸工場をも経営していた。その主人は私に詳しく見学するようす ある。たった一軒しかない宿屋は輸送の仕事も兼ねていた。 る。そこには二十人の若い女性が働いていて、その熟練度に応じて 緒に一日生活するのに十銭かかるが、 銭ー十六銭の賃金を得ていた(この地方では、一 正午頃、 ガイドとともに島々村に着い 大きい村では十二銭 た。 その仕事をしても、 信濃地方の最 人の娘が家族と 辺境 了十五

 \mathcal{T}_{i}

と稼ぎにならなり

ず、一晩中眠ることができなかった。 から出そうとしても、 た。暗くて、扇子で追い払っても、捕まえようとしても、 蚊がいないと主張する。しかし、蚊はブンブンと部屋の中を飛び回 おその上、部屋には蚊帳がなかった。わが女主人は、このへんには 食べるもの)だけである。私は米が苦手なので用意しなかった。な なかった。ゆで卵六個、汚い赤砂糖百グラム、そば二包み(ゆでて で、村人が提供してくれた、ごくわずかな食料でがまんせざるを得 た。といって、松本まで戻るのはどうしても厭だった。そんなわけ の鶏ですら、誰も売ってくれなかった。じゃがいもの収穫もまだだっ ら少なくとも三日間かかる。入手できた食料はわずかだった。一羽 見では、私が実行しようとしている山旅は辛いものだ。 夕方には、私は苦労して登山用の食料を集めた。宿屋の主人の意 全く無駄であった。 蚊との戦いはうまくいか 最奥の村か 煙で部屋 2

V1

我々のブーツや短靴のように足を圧迫しない利点を持っている。それなのブーツや短靴のように足を圧迫しない利点を持っている。それでは靴を履くのが普通だが、どんな靴でも旅行には実用的ではないわば藁で作ったサンダルで、細い藁縄で足に結び付ける。ヨーロッたす雨傘しか荷物を持っていなかった。わらじを履いたが、これはかったす雨傘しか荷物を持っていなかった。わらじを履いたが、これはかったす雨傘しか荷物を持っていなかった。わらじを履いたが、これはかった。山をゆっくりと一定した速度で歩く。私自身は杖の役目を果かった。

茨や竹の切り株から足を守るには都合が悪いことは認めねばならないる間に作ってもらうことができる。けれども、わらじは森の中で価で買うことができる。そのサイズが小さかったら、昼食をとってとしても、干せばすぐに乾いてしまう。その上、旅人はどこでも安としても、干せばすぐに乾いてしまう。その上、旅人はどこでも安れに、履き替え用に数足のわらじを携行できる。たとえ雨に濡れた

この朝はたいへん快適な気分であった。日中は完全に晴れ上がり、天気の良い日がずっとつづくように思われた。ただ、少々暑かった。リー(英国のアフリカ探検家)のような気がした。私の目にはとても気にいった冒険のように思われた。私は自分がまるで小さいスタンリー(英国のアフリカ探検家)のような気がした。私の目にはとても気にいった冒険のように思われた。私は自分がまるで小さいスタンリー(英国のアフリカ探検家)のような気がした。私の間にはとても気にいった冒険のように思われた。私は自分がまるで小さいスタンリー(英国のアフリカ探検家)のような気がした。私の間にはとても気にいった冒険のように思われた。私は自分がまるで小さいスタンリー(英国のアフリカ探検家)のような気がした。私の目にはとても気にいった冒険のように思われた。それで、東京から持ってきた最後の一切れのパンを材本帯がはじまり、優雅な小さいと、表に受けてもで、東京から持ってきた最後の一切れのパンを水に浸けて食べ、我慢した。

で死後に生えたひげのように見えた。それら枯れ木の大部分は地面があり、それはふさふさとした青苔におおわれていた。それはまるじさせるようになった。太陽は雲の陰にかくれた。松の枯れた老木じるせるようになった。太陽は雲の陰にかくれた。松の枯れた老木で死後に無気味な気配を感

てきて、泥水でいっぱいになっていた。い。あちこちに馬の足跡が深い穴となっていて、近くから水が流れ非常に狭く、ひどく荒れている。数多くの木の根があって歩きづら、横たわることができず、近くの樹木に寄り掛かっていた。山道は

い描いた。やがて、わがガイドたちの善良で、正直な顔が私を安心て来るのに気がついた。それで、落とし穴の中へでも押し倒されるら次へと浮かび、この見知らぬ者たちについて勝手にいろいろと思っているのだ。彼らはすぐ襲って来る! 私の想像は次かえると思っているのだ。彼らはすぐ襲って来る! 私の想像は次かえると思っているのだ。彼らはすぐ襲って来る! 私の想像は次かえると思っているのだ。彼らはすぐ襲って来る! 私の担保は次かれるは近いた。それで、落とし穴の中へでも押し倒される

らの中を自由に走り回り、ゆったりと草を食べていた。れ、狭く閉じられたオアシスであった。馬が放牧されていて、草むきかけていた。その谷は周囲を岩壁によって上から下まで取り囲まわれわれが下の盆地、宮川谷に着いたときには、日がちょうど傾

た。隅の方には、谷川の流れが注いで小さい池を作っていて、その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいた。その小屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいて、そのか屋はアラブのあばら家に似ていて、赤褐色に黒ずんでいて、そのか屋はアラブのあばらないといって、赤褐色には、からないた。

太陽は今にも沈もうとしていた。私は池の澄み切った水面に映っさい神社があった。

いった。ちらっと見た影の秘められた魅惑をもう一度とらえようとた。しかし、それは容易ではなかった。沼地の中に一歩ずつ入ってた、あたりの風景の影を見ていた。そこにどうかして近付きたかっ

私は持ってきたそばをおいしく食べ、川からあまり遠くない場所りが消えてしまった。

これパン、(位々ン、)といばせこば、無太ごっこ。またしたったが、どうしたことか眠れなかった。蚊に刺されないように、頭ので、木の葉の褥の上に体を伸ばした。眠って元気を回復しようとし

れたような気持であった。身支度と朝食を急いで済まして出発する。その上悪いことには、日中に見た蚊の姿が、いらいらした頭にまぼたし、蚊の耐え難い音楽は私の努力の無益なことをあざ笑っていた。上にパルトー(短マント)をかぶせたが、無駄だった。息苦しかっ

とができた。

らいれた約五十年の二尾のいわなを食料として付け加えるこ

こっちの岸、あっちの岸と渡らねばならなかった。あるときは父親れ、両側はこんがらがって抜け出せないような藪であった。絶えず、なだらかで、石がそれほど大きくない斜面をみつけて進んだ。しかなだらかで、石がそれほど大きくない斜面をみつけて進んだ。しかなだらかで、石がそれほど大きくない斜面をみつけて進んだ。しかなりが槍ヶ岳の頂上に達するための唯一のルートである。まず、かなりこっちの岸、あっちの岸と渡らねばならなかった。あるときは父親れ、両側はこんがらがあった。

乾いた枝を集めて寝床を作るわけにいかな

洞穴の壁からは水が漏れて、

地面を濡ら

ばならないので、 は そのうちに、だいぶうまくなり、 冷たい水の中に腰まで入ってしまったが、太陽の御蔭ですぐ乾いた。 を借りて、 光っているものが見えた。これらをトラヴァー ぞっとするような恐ろしい光景であった。 ると、これらの岩塊が幻想的な雰囲気を醸し出しているのに気付い 像力を掻き立てるような雰囲気であった。 増していく。 それは中国絵画の愛好家が知っているような、 これは万年雪で、川の水源である。 垂直に切り立ち、 自分で歩いてトラヴァースした。二、三回、 沢の中の石は巨大になり、絶えずあちこちと跳ばね 疲れはひどくなるばかりであった。 尾根は鋸状で、多くの針峰となっていた。 より慎重になった。 この巨大な岩壁は高さ四 あちこちに斑点状に白く スしなければならな 画家の異常な想 ふと頭を上げ けれども困難 私は滑って

の方のガイドが私を肩に乗せてくれ、

あるときは彼の杖と手の

助け

寒着を持ってこなかった。 熊だといった。 住処にもなるらしく、ガイドは三、 達した。 ている武器といえば、 前には問題にならなかったから、 その代わり、 の平 そこは尾根から少ししか離れていなかった。 平地と比べると非常に低い。 地は夜の闇の中に沈んでいった。 れば しかし、 実在の敵がすぐに姿を現した。この三千ぱの高度の いいかを考えた。 ポケットにあるナイフだけで、 幸いにもそれは誤りであった。 軽率にも、 誤りでほんとうに良かった。 四百歩先の黒いものを指して、 体が凍らないように夜を過ご 我々は岩でできた洞穴に 私は白いズッ 熊の強力な爪 野性の動物の 我々が持っ クの防

> 中頃、 真っ白な万年雪は、 闇の深みの上に威圧するかのように浮き出ていた。 を置いているような錯覚に陥った。 光景を照らし出していた。まるで、 少し残っていたのである。 なことをしても無駄だった。 げて身を横たえ、その上に雨傘を広げて、ちぢこまって寝る。 枚のシャツとチョッキとズボンを着込む。 下には猪の皮を敷いていた。私も同じようにして寝ようと思い、一 十分後にはぐっすり眠ってしまった。体の上には分厚い油紙をかけ、 つづけた。やがて、 私はどうしても食べられなかった。食事の後、 念ながら、 ガイドたちは夕食の準備に忙しい。 私は旅行鞄から衣類を取り出すために外へ出る。 体が凍えてしまい、 何もない空間に張り出しているように見えた。 彼らも眠くなって、 満月が私の周りに青味がかった、奇妙な 濡れて、凍えて、みじめだった。 また洞穴に戻った。 くっきりとした山々の稜線 グスターヴ・ドレの絵の中に身 彼らが持ってきたワラビを 洞穴の中に入る。 そして、 数時間、 Ш 地面に毛布を広 腹のくほみの まだ衣 火を燃やし

ない。 高峰、 びえていた。その岩壁を見ながら、 はまったく存在しなかった。 トも下へ 手は全く垂直な絶壁になっていた。その尖端から四 濃と飛驒との境になっているコルへと登っていった。私はここの最 ヒーを飲んだが、 朝早く、 老練の猟師の手に支えられて、 槍ヶ岳に登りたかった。そこから二百歩くらいしか離れて 切り落とされていた。 私はコーヒーを沸かした。わが二人の山人は 彼らの好みに合ったようだ。それから、 我々の前には、 草木は一本も生えていない 私は考えた。まさかの場合には 殆ど垂直なピーク 幅の尾根に達した。左 百一 $\bar{\mathcal{H}}$ 初 我々は 百フィ 80 7 コー

風にしがみつけばいいだろうか。という落ちないようにどういうして取り付いたらいいのだろうか。岩から落ちないようにどういうスタンスとホールドをどこにすればいいのだろうか。しかし、どう

はるか遠くには、日光の山々が島のように平野から浮き出ている。山々が広がっている。すぐ近くには、信濃の盆地、浅間山、碓氷峠。のが一番いいかを考えた。目の下には、先程越えてきたすべてのるのが一番いいかを考えた。目の下には、先程越えてきたすべてのるのが一番いいかを考えた。目の下には、先程越えてきたすべてのるのが一番いいかを考えた。目の下には、先程越えてきたすべてのるのが一番いいかを考えた。目の下には、先程越えてきたすべてのるのが一番いいかを考えた。目の下には、先近、岩がガイドがその岩場を調べに出掛けたが、戻ってきて、最近、岩がガイドがその岩場を調べに出掛けたが、戻ってきて、最近、岩が

が主立った尖峰にまとわりついていた。くもりガラスのように鈍く光っている。あちこちで、淡い金色の雲白っぽく見える地点は大きい町である。はるか遠くには、日本海がいる。二、三の川が銀を流したように日に輝いている。いくつかの

と、飛驒と加賀の地方がひろがり、そこに白山がどっかりと座って

いる。美しく、荘厳な山容は一幅の画のようである。後を振り返る右の方には日本の最高峰、聖なる山、富士山がもやの中にかすんで

でであれました。 で下もこれにした。 で下もこれにした。 でであるう。そうすれば、登攀の疲れもすっかり吹き飛んでしまうだろ がし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ かし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ かし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ がし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ がし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ がし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ がし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ がし、もう時間的な余裕がなくなっていたので、ガイドの言葉に従っ

に急な斜面で、自分の体を支えるのがたいへんだった。足元の石が下降が始まる。これまで経験したことがないような辛さだ。非常

ルプスの同じ高度に見られる植物とはかなり違っていた。が食事の用意をしている間、私は植物採集をした。そこの植物はアが食事の用意をしている間、私は植物採集をした。そこの植物はアまずき、倒れた。正午には、ふたたび小さな沢に出る。この沢を下まずき、倒れた。正午には、ふたたび小さな沢に出る。この沢を下しょっちゅうころがり落ちる。あちこちで、石で隠れている穴につ

下に野宿することにしたが、我々はやっと十二、三*゚ルスーしか歩いて六時に、老ガイドが止まった方が良いと判断した。大きな柏の木のどき、五、六分休んだ。奔流を横切るのはたいへん危険であった。ときれた。それらの岩の中には我々の背よりも高いものがあった。ときれた。それらの岩の中には我々の背よりも高いものがあった。ときれた。そが大きな奔流になった。しかし、多くの支流が集まってい沢はゆるやかになっていった。しかし、多くの支流が集まってい

彼らが高く評価してくれたと信じる。をいなかったのである。私はその夜殆ど眠れなかった。当分の体力を回復させたかったのである。わが文明の産物をわたしなりに感謝の意を表したかったし、ガイドの苦労に対して整ったのである。私はその夜殆ど眠れなかった。

れては膝までもぐってしまった。それで、ガイドは何回となく私をに大きい、腐った倒木があって、その枝の茂みにだまされて足を入ち込み、藪の中を切り開いて通らねばならない。我が二人の同行者は枯れ枝を折り、蔓や莢をなたで切った。一方、私はまったく荷者は枯れ枝を折り、蔓や莢をなたで切った。一方、私はまったく荷者は枯れ枝を折り、蔓や莢をなたで切った。一方、私はまったく荷者は枯れ枝を折り、蔓や莢をなたで切った。一方、私はまったく荷者は枯れ枝を折り、蔓や莢をなたで切った。それで、ガイドは何回となく私をれては膝までもぐってしまった。それで、ガイドは何回となく私をれては膝までもぐってしまった。それで、ガイドは何回となく私をおするは、腐ったがあって、

このような態度を知らないだろう。

彼らはずうずうしく暴利をむさ内陸の住民の悪意剝き出しの、

それどころか、

辺境

ヨー

ーロッパ

人は、

海に面した町とか外国人に開かれ

た港町

しの、

顔だけ

はにやにや笑っている。

を割いて私に提供してくれた。自分たちが毎日経験していることがないのだと彼らは単純に判断したようだ。私の食料が無くなったときには、彼らは自分たちに残っている乏しい食料が無くなったときには、彼らはいつもじつに親切で思いやりがあった。待つ羽目になった。彼らはいつもじつに親切で思いやりがあった。

文句もいわないし、

要求もしないし、

断るのである。

しかし、

同じ日本人の旅行者や馬車屋、宿賃について全く文句をつ

地では、

村の宿屋の主人が宿泊を拒むのが普通である。

私が

六

私が口を出し、 であっても、これら村人たちに向き合うと全く臆病だった。それで、 どうしたらよいかわからず、 入るのを拒否した。 らはなるべく関わらないような、 錯覚がすっかり消えてしまった。 現れた。それらが両手をあげて歓迎してくれるように思えた。 らほっとした気持であった。 神坂の家々の屋根が見えたとき、 牛頃、 由からである。 我々が最初に出会った農民たちの態度で、 森の沼地の中にかすかな踏跡をみつけたときには、 屋 の主人もついに不承不承ながら譲歩し、 特別なことは必要でなく、そのままでいいからとね 野外に寝ろというのである。 期待されるようなサービスを提供できないとい 困惑した様子だった。 やがて、 冷たい態度をとっ すばやくちらっと我々を見て、 嬉しさで胸が一杯になっ 麦、いんげん、桑などの 人の良いガイドは この私の素朴な 山の中では勇敢 我々を部屋へ 宿屋も私が 畑が 心か 彼

> させ、 ある。 であろう。 い。これら旅行者が不親切な扱いを受ける理由としてはこれ じみた態度をとることなど、これらすべてを考え合わせてみれば うのである。それに、 葉についての無知とが、 るといわれる。 国人への憎しみや一八五四年の事件の記憶が未だに根深く残って べての者が個室を要求し、 ることも事 る者がどうしてこういう差別をするのであろうか。農民の心には外 は大きく門を開いて受け入れるのである。 宿屋から鍋を借りてバターのいやな臭いをしみ込ませてしま 畳の上に唾を吐き、 実である。外国人旅行者の不当な要求と現地の しかし、 宿屋の主人に対して警官のように厳しく子供 それだけではなく、 宿屋に恐ろしいほどの不安感を与えるので かれらだけの入浴を求め、ベッドを用 泥だらけの靴で家の中に上がり、 金を稼ぐ職業についてい 他の原因が加わってい 風習や言

たちの態度の変化を好ましく感じたのである えられた。 村に始めてやってきたというので、私は村人の好意ある好奇心で迎 解と食い違いの原因は少しずつ減少している。ともあれ、 H 本人もヨー 幸いにも、 般的な事 H 情について考慮する必要はなかった。 本人の態度には元来悪意など殆どなく、 ロッパの言葉をわかるようになった。 ヨーロッパ人も次第に日本人の習慣に慣れてきたし、 3 したがって、 私は 口

四人の男と三人の若い女性からなる家族が湯治のために船津から

を一日に七、八回繰り返す。これは日本の湯治場では殆どどこでもまん中に場所を取るようにすすめてくれた。この土地ではめったに真ん中に場所を取るようにすすめてくれた。この土地ではめったに真ん中に場所を取るようにすすめてくれた。この土地ではめったに真ん中に場所を取るようにすすめてくれた。この土地ではめったに真ん中に場所を取るようにすすめてくれた。この人々は親切に自分たちの来ていた。船津は小さい隣町である。この人々は親切に自分たちの来ていた。船津は小さい隣町である。この人々は親切に自分たちの来ていた。船津は小さい隣町である。この人々は親切に自分たちの来ていた。船津は小さい隣町である。この人々は親切に自分たちの来ていた。

見られる普通の過ごし方である。

しかしながら、私が村に着いたときにはもう日暮れ近かった。そ

あり、

りくねっていた。ところどころに、板あるいは丸太で出来た足場が

道は丘の斜面の岩を削ってつくられていて、川の流れに沿って曲が

れる。軽いめまいを感じながらも、無事に岩井戸村に着いた。

に移りながら進む。トラヴァースするときには私の鞄を背負ってく

もろそうで、心細かった。この困難な道を、ガイドは右に左

の村は八~十軒の大きな農家から成っていた。この山の中では樹木の村は八~十軒の大きな農家からないから、農家が大きいのである。家はそれぞれ台所と部屋とが廊下によって分けられている。こう。家はそれぞれ台所と部屋とが廊下によって分けられている。こう。家はそれぞれ台所と部屋とが廊下によって分けられている。この方式は日本の他の地方でも見られる。住民の体格は均整がとれているように思われる。子供は平地の子供よりもずっと活発で、体重はまったく見られない。畑にやってきた三人のたくましい娘の姿がしばらく私の記憶から消えなかった。彼女らはそれぞれ普通の人がしばらく私の記憶から消えなかった。彼女らはそれぞれ普通の人がけちあげられないような重い草の東を背負っていたのである。また、持ちあげられないような重い草の東を背負っていた。この山の中では樹木の村は八~十軒の大きな農家から成っていた。この山の中では樹木の村は八~十軒の大きな農家から成っていた。この山の中では樹木の村は八~十軒の大きな農家から成っていた。

私は自分の身を横たえる場所と食事をなんとかしなくてはならなろに体を倒すのだった。 物の裾をもんぺの中に入れていた。そして、荷を下ろすために、後赤く日焼けした顔で、髪は乱れ、藍色の木綿のもんぺをはいて、着

かった。

旅行者は宿に着いたらすぐにその資力と要望に応じてチッ

翌日、八月二十二日に、ポーターを一人連れて神坂を出発した。ひどく驚いたようだったが、感謝の一言もなく、金を受け取った。うし、私もこの習慣になじんでいる。今回、女主人はこのチップに

プを支払うのが普通である。日本人も殆どがそういう風に茶代を払

親切に私を泊めてくれるといったのは、ここの村長である。儀式やら言い訳やら聞き飽きた型通りの挨拶やら、いろいろとあった後、やら言い訳やら聞き飽きた型通りの挨拶やら、いろいろとあった後、があった。東京を出発して以来はじめて目にする本であった。村長の私的な部屋に泊まるのだろうか。私は判断がつかなかった。その部屋から出てみると、るのだろうか。私は判断がつかなかった。その部屋から出てみると、るのだろうか。私は判断がつかなかった。その部屋から出てみると、あのだろうか。私は判断がつかなかった。その部屋から出てみると、がないので、広い部屋いっぱいにひろがり、濃い黒褐色に光る梁をがないので、広い部屋いっぱいにひろがり、濃い黒褐色に光る梁をがないので、広い部屋いっぱいにひろがり、濃い黒褐色に光る梁をがないので、広い部屋いっぱいにひろがり、濃いまでは、この村長である。儀式もいまでは、またいので、水はなおったのは、ここの村長である。儀式もいまでは、またいるといった。

な農場であった。そこの家畜小屋と彼の家族たちには心から感心してはどうだといってくれた。その農場はまさしく自慢していいようい態度で私の好奇心を満足させようとした。そして、彼の農場を見的農民である。彼は少しも押し付けがましいところがなく、慎み深的農民である。彼は少しも押し付けがましいところがなく、慎み深わが主人は上品で、落ち着いた態度の立派な人物で、いわば紳士

は眠くて倒れそうだった。

た―牛馬、そして子供や幼児たち。我々は長い間おしゃべりをした。そして、私は彼に幾つかの小物を手渡すと、彼は固辞することならない場合、フランス人なら金を受け取らないということを強調するであることになる。日本人は、金持ちであれ貧乏人であれ、全く単純に、ることになる。日本人は、金持ちであれ貧乏人であれ、全く単純に、ることになる。日本人は、金持ちであれ貧乏人であれ、全く単純に、ないになる。日本人は、金持ちであれ貧乏人であれ、全く単純に、た一牛馬、そして子供や幼児たち。我々は長い間おしゃべりをした。

t

製糸工場とそこから出る汚水など、特に不快に感じた。非常に狭い谷間に閉じ込められた村で、小石だらけの階段状の通り、い。小さい村の詩情もないし、大きな町の豊かさとか快適さもない。八月二十三日に船津に着く。 私はこの山村があまり好きになれな

朝の約一時間に過ぎない。レセプションや名誉どころではなく、私着以来、警察署長が礼儀からか物珍しさからかやってきた。このような訪問の前触れであった。ついで神坂での私の水浴が話題になる。私のところがサロンのようになった。この噂を聞きつけて、たぶん私のところがサロンのようになった。この噂を聞きつけて、たぶん私のところがサロンのようになった。この噂を聞きつけて、たぶん私のところがサロンのようになった。この略を聞きつけて、たぶん私のところがサロンのようになった。この略を聞きつけて、たぶんれに入れて来た黒人の王様を扱うような状況である。今日の地方新聞に私の名が書き込まれたかどうかはわからない。いずれにしろ、この我が愛すべき人々が私に寝るのを許してくれた時間は、わずかこの我が愛すべき人々が私に寝るのを許してくれた時間は、わずかこの我が愛すべき人々が私に寝るのを許してくれた時間は、わずかというないというないというというない。到しないというないまではなく、私

鉱山はある大きな会社が経営していて、若い日本人技師の監督のだ。彼が風邪を引かないように、私は口を閉じることにした。彼はすっかり緊張していた。どうやら私が偉い人だと思い込んでし彼はすっかり緊張していた。どうやら私が偉い人だと思い込んでし彼はすっかり緊張していた。どうやら私が偉い人だと思い込んでし数は可能を発育がやってきた。六十以離れた、近くの鉱山に私数時間後に警察官がやってきた。六十以離れた、近くの鉱山に私

下で、銅と少しの銀を採掘していた。その技師は日本で教育を受け

た後に、ザクセン(ドイツの一地方)と英国で技術を学んだ。 た後に、ザクセン(ドイツの一地方)と英国で技術を学んだ。 たこにはドコーヴィル式狭軌鉄道が備わっていたのである。自分の服と坑夫用の服とを着替えてから、坑道に入る。両脇から水前り落ち、軟らかい土の上に溝が出来ている。坑夫たちはこの泥が滴り落ち、軟らかい土の上に溝が出来ている。坑夫たちはこの泥の中に腰を曲げたり、ひざまずいたりして、のみやハンマーで岩石の中に腰を曲げたり、ひざまずいたりして、のみやハンマーで岩石を削っている。坑道は非常に不規則な形を迫って、採掘の中心部へとた後に、ザクセン(ドイツの一地方)と英国で技術を学んだ。

ほどほどに食べられる)。坑夫はこの賃金で三交替で一日に八時間によって一日に二十五銭から五十銭稼ぐ。一人なら、家では十銭での食費は平均して八銭かかる(東京では腕のいい労働者はその職種の食費は平均して八銭かかる(東京では腕のいい労働者はその職種の食費は平均して八銭かかる(東京では腕のいい労働者はその職種がよっている。一人一日事の量に応じて支払われ、十五銭「三十銭である。 元夫はやった仕談明によると、女性の日当は十五銭以上である。坑夫はやった仕

た。泥んこの夜道を帰るのはたいへんなので、その申し出を断った。技師は私のうるさい質問にうんざりしたらしく、私を食事へ誘っ

138

いていの場合、 しかしながら、一緒の食事のために彼が用意してくれた鶏肉まで断 なかった。日本人の親切心の例としてこの出来事を挙げたい。た それは親切心のせいであり、利益を得ようという下

とにした。しばらく行ってから、私の乗った馬車は休息のために途 心は全くない。 の誘惑には勝てなかった。目配せで、私の旅行鞄はあっというまに して、庭の池に泳いでいる鯉を昼食用にどうかと私にすすめた。そ 楽しませてくれた。従業員も愛想が良く、部屋もきれいだった。そ から喜んでいた。この陽気な男は私が茶碗を手にしている間ずっと の棒を鍋の柄に代えるという、このすばらしい思い付きを、彼は心 中にある宿屋に停まった。宿屋の主人は元警察官であった。警察官 船津から高山までの行程は短いので、私は午前中、半日で行くこ

b

見えなくなり、部屋の隅におさまる。馬車は片付けられる。こんな そこには自在に鍋がかけられていて、野性味ある豪快な料理が用意 来ている。部屋の真ん中には四角にいろりが切られている。そして、 が家全体に息づいている。台所の十五本の梁はがっしりした木で出 た。それは私が日本で見た最も美しい農家であった。秩序と力強さ 地を案内してくれるよう主人に頼むと、近くの農家に案内してくれ わけで、半日で高山へ行くという予定は狂ってしまった。私はこの

い老人ではなくもっと好人物を期待していたのである。

棒のように素っ気ない年老いた農民、この抜け目のない、

0

ある。ある村では住民の十分の一に当たる十五人~二十人がすでに れた町の職員であった。その伝染病がこの地方に蔓延していたので てみたら、この人々はコレラの蔓延するのを防止するために派遣さ うか。私が寄生虫をこの地方にもたらしたというのだろうか。 のマント、脚、髪にパフ、パフ。私に魔法をかけようというのだろ パフと振り掛ける。車の前部の覆いにパフ。車輪にパフ。 の送風機を取り出して、パフ、パフとやりだした。旅行鞄にパフ、 すべきだろうか。私が決心する前に、彼らのうちの一人が進み出て、 は私の財布をねらっているのだろうか。ポケットのナイフを取り出 突然、馬車が停まった。六、七人の男が行く手を遮ってい が御者に停止を命じた。そして、ガウンの下から害虫駆除の 翌朝、八月二十六日、高山へ向かって馬車を走らせた。すると、 わが御者

は、 晩まで銅鑼や太鼓をたたいて、悪霊を追い払うのである。 すような毒物を使って治療する方法 りのように、類似療法 気の毒な人々は、呪いを払いのけるにふさわしいヨーロッパのお守 かし、一般的には別の方法がひろく行われている。 、二つの方法を同時に行なっているところがある。 (治療しようとする病気と同一 の薬品を使用したのである。 人々は朝から の症状を起こ 村 の中に

死んでいた。私にふりかけたのは薄めたフェノールであった。この

規則とおり、 かった。私は容疑者であった。それで、私は長々と交渉し、 当局が私を町に入るのを拒否しようとしていることがすぐにわ 拘束されて、薬を振りかけられたこと、しかも極めて 自分が

控え目なそぶりを示し、

てがきれいに光っている。我々を出迎えた、その家の主人は冷淡で

私の喜びをいささか台無しにした。私はこ

唐紙がそれらの境に立っている。床、

畳、梁、板、食器など、

すべ

とができる。この部屋のまわりには私的な部屋があって、真新しい されていた。天井には明かり取りがあり、ずっと高く屋根をみるこ

心深

てはいい

思い付きで、

掘り出し物という触れ込みだった。このワイ

ンは近くの森の中で摘まれた野性のぶどうからつくられたそうで、

Ŧī.

ていた。それは自分の醸造所でつくったワインであった。

彼にとっ

が宿の主人はこの地方の別の産物を私に提供しようと待ち構え

は軽い下痢でもあったら、 健 い場所に八日間も閉じ込められたであろう。 康であることを証明しなくてはならなかった。 強制的に引き返させら れて、 もし、 頭 たぶん、 痛あるい 寂

のであろう。 ている。また、 どっしりした寺や神社の屋根が一様な家々のひろがりに変化を与え れていて、大きな盆地の中にゆったりとひろがっている。わずかに、 ついて語られることはめったにない。 代官所があった。 は 飛驒地方の古 寺や神社の建物がこの地方の唯一の豪華さを示すも しかしながら、 い中心町で、かつては将 美しい町並みは整然とつくら 今日ではこの光栄ある過去に 軍の天領の一 部であ

聞 それを作った職人のすぐれた美的感覚をわかろうとしない。 物を求めた。それはこの地の真にオリジナルな特産物のように思わ この粗悪品ではどうにもならないので、やむを得ず、 りふれた漆器とか上質というよりは変わった磁器が作られている。 れはかつて交通が極端に不便であった時代の名残である。現地の新 た。日本人はその旅行した土地の名物を集めるのが好きである。そ は実際的であるとともに確実な情報を提供している。 街をざっと見てから、 人々は木目や木の色合いをうまく利用したと褒めるだけ 私は東京の友人への土産にするものを探し 樫で出来た小 高山ではあ

> もちろん、農家に泊まったり、家族だけでくつろいだ生活を送って いる農民を驚かしたりしての話である。 味のない安ワイン)でもこんな混合をしようとは思わないであろう。 脂のエキス、ゴムなどを混ぜ合わせたそうだ。どんなピケット の福島へ向かった。このルートは徒歩で三、四日の行程である。 その夕方、 高山を出発し、 街道や大きい宿屋を避けて、 中仙道 沿

私に味わってみるようすすめた。非常に酸っぱい黒すぐりの実、

V

制度、 は夫の両親の家で我慢して夫の帰りを待つのである。 に日本を去る者もいる。その場合、 べてが父親である。その上、結婚して一、二か月でパリを見るため はごく普通にみられることで、驚くには当たらない。パリに科学、 彼は高山に妻子を残したまま、ここにもう三週間も住んでいる。こ れから先、 員の訪問を受けた。彼はこの村に派遣され、駐在していたのである。 翌日は雨のために、甲に泊まったが、そのとき、郡役所の若 風俗などを研究するためにやって来る若い日本人は、殆どす 何か月もその状態が続くのである。こんなことは日本で 彼の若い妻は自分の 両親あるい 職

だと感じた。それで、隣家を訪れた。この小さい村で、夜の七 かったが、なんとか泊めてくれることになった。 しかし、運が悪かった。その人は紹介状を読み終わるとすぐに、丁 一歳~六十歳くらいの男が立っている。 家を自由に扱う権利を有している。私はどんな説明をしても無駄 私は中之宿の大農家宛の紹介状を携え、安心して甲を出 ほかにどうすることもできない。 しかし、きっぱりと宿泊を断った。どっちにしろ、 その隣人はなかなか承知しな 背の低い、 目の前には、 ずんぐりした、 彼は自分

0

相をした、移り気で、いたずらっぽい男である。元気気のいい、好奇心の強い、おしゃべりで、陽気な、猿のような人

外国語の音声を聞いて、まったく驚いたことには、最初に子供達が に訳して説明した。しかし、この元気のいい人たちは、フランス語 それほどびっくりすることではない。私は少々抵抗したが、 を絵と同じように考えている。そして、たいへん質素な藁葺きの家 はこんな風になるなんて予想していなかった。その晩は楽しいお 笑った。この愉快な楽しさは私にも移り、 他の者と同じようにどっと笑いだし、しかも、 ようとうっかり口を開けたのが軽率だった。口をあけた瞬間、 眉をしかめた。しかし、彼はこのそぶりで表現したことを言葉にし したことになるのではないかと心配して、大きな目をぐるぐる回し、 ただ、年老いた猿だけが笑いをこらえていた。この哄笑が私を侮辱 どっと笑いだし、ついで女性達が、最後に兄弟や夫が笑いだした。 れからすることがどういう効果をもつか予想していなかった。この で書かれたそのものを声に出して読んでくれという。私は自分がこ は書いた。そして、そこに書かれた内容をどうにかこうにか日本語 でも多少見栄えのする書を飾っている。したがって、主人の頼みも 取り出してきて、フランス語で一言何か書けという。日本人は文字 わりに集まっていた。食事が終わると、主人は約二年の長い和紙を しゃべりで終わった。 彼はまず家族と一緒に食事をしようと誘った。家族はいろりのま みんなで大笑いした。私 もっとも大きな声で 最後に 突然、

んな部屋がないのは確かだった。それで、大部屋でその家の息子の普通なら、ここで自分の部屋へ案内されることになるのだが、そ

る金額を支払う。

老農夫は私に馬を用意することができないので、

私の荷物を背

た。そして、絶え間ない悪夢が襲った。東京までの距離を計算して皮膚病への恐れが釘が打ち込まれたように頭の中にたたきこまれのもはじめてである。皮膚病にかかるのではないかと心配した。このもはじめてである。皮膚病にかかるのではないかと心配した。これはほんとうに苦痛であった。明かりもなく、マッチもなかった。とはにんとうに苦痛であった。明かりもなく、マッチもなかった。ことで私が記憶している限り横に布団だけが提供されたのである。ここで私が記憶している限り

みた。全速力で行っても、少なくとも四日かかる。四日と四晩をこ

のように過ごさねばならないとは!私は悲しかった。

負って、 のをやめる。すると、彼はいささか気を悪くして、ついに黙った。 が、無駄だった。このおやじはもっと速く歩いた。私は彼に答える 流れるので、私は聞かないことにした。そして、私は歩調を速めた ようとするのである。このおしゃべりは、蛇口から出る水のように ない場合には、話し方を変えずに、それだけ大声で叫んでわからせ 方があるのだということを理解せず、外国人が自分の話を理解でき した。そして、そのことを後悔していて、少しばかり働いて少々の が早かったが、 理解した(と私は信じる)ところによると、彼が隠居し、少々時期 でしばしば見られる。彼らはそもそも言葉にはいろいろな表現の仕 私に理解させようと大声で話した。この奇妙な行動は一般民衆の間 などについて自然と話しだした。ついで、私のことを訪ねた。 は家族や近所、また彼の住んでいる村やわれわれがたどっている道 自分だけの財産を作るつもりだといった。私が質問を終えると、彼 あれこれと談笑しながら出発する。 自分の財産および戸主としての権威を長男に譲り渡 彼の長々とした説明で 彼は

憩所で彼は自分の村へ帰っていった。 憩所で彼は自分の村へ帰っていった。 という作は、私がまるで忠実な下僕フライデーを連れた、現代のロビた人には、私がまるで忠実な下僕フライデーを連れた、現代のロビルルトー (短マント) を下におろして、わらじで歩き続けた。こんいルトー (短マント) を下におろして、わらじで歩き続けた。私に出会っと服装はヨーロッパ人にとって格好のいいものではない。最初の本に出会っというには、八月二十九日の夕方、中仙道という街道に出た。私に出会っと思いては、八月二十九日の夕方、中仙道という街道に出た。私に出会っ

旅の終わりの日々は最初ほど感動や興奮を与えないものだ。物珍しそれから先はいろいろの事があっというまに過ぎ去っていった。

泊まらずに行くことにした。乏が目立ち、帰りたいという気持ちだけが強くなる。そんなわけで、さも薄れてしまう。最初の印象の新鮮さは消えてしまう。疲労と欠さも薄れてしまう。最初の印象の新鮮さは消えてしまう。

馬車の交通は中仙道ではよく整備されている。また、旅行者も山の高さや数を物ともせずに一日に百ぱいを踏破する。もし急がねばならない場合があれば、もっと速く行くのである。このルートは東海道のように平凡でもなく、単調でもない。少なくとも、木曾川に沿う道をたどる限りは変化に富んでいるといえよう。その野性的な風光に加えて、たいへん美しい風景がずっとつづく。やがて、旅人は樅や杉の林でうす暗くなった山を登る。村はたいてい街道沿いにあまり間隔を置かずに次々と連なっている。殆ど至るところ、どんあまり間隔を置かずに次々と連なっている。始ど至るところ、どんあまり間隔を置かずに次々と連なっている。岩に、旅行者も山の高さや数を物ともせずに一日に百ぱいを踏破する。もし急がねばな小さな土地でも耕されて畑になっている。岩に、旅行者も山下諏訪(スイスの村のようだといわれている)での短い休憩の後、下諏訪(スイスの村のようだといわれている)での短い休憩の後、私は碓氷峠の麓にある鉄道の駅に着いた。

[訳者より] 本稿は、Appert, Georges—Un coin du Japon. La province de Hida, Extrait de la Revue de Géographie, Vol.27. 1890. Paris. Institut Géographique de Paris.を訳したものである。原文は十章に分かれているが、ここでは第九章まで訳し、第十章を省略した。紀行文は第九章で終わり、第十章は飛驒地方の民俗に関する観察記録だからである。

については、すでに安江安宣氏が『学燈』第八十三巻第十二号(一ジョジルユ・アペールが一八八六年に槍ヶ岳登山を行った事実

九八六年)に「ジョルジュ・アペールと槍ヶ岳」として発表して九八六年)に「ジョルジュ・アペールの槍ヶ岳登山については、訳者も『山書月報』第三四三号(一九九一年)に「ジョルジュ・アペールの槍ヶ岳登山」とし号(一九九一年)に「ジョルジュ・アペールの槍ヶ岳登山」とし号(一九九一年)に「ジョルジュ・アペールの槍ヶ岳登山」とし号(一九九一年)に「ジョルジュ・アペールの槍ヶ岳登山」とし号(一九九一年)に「ジョルジュ・アペールの槍ヶ岳登山」とし号(一九九一年)に「ジョルジュ・アペールと槍ヶ岳で、名行文そのものストン年譜」の中でも紹介されている。しかし、紀行文そのものストン年譜」の中でも紹介されている。しかし、紀行文としてはごく初期は翻訳されていなかった。外国人の登山紀行文としてはごく初期は翻訳されていなかった。外国人の登山紀行文としてはこれに対している。

旅している。

という短いマントを持って、わらじで槍ヶ岳へ登るのである。という短いマントを持って、わらじで槍ヶ岳へ登るのである。ジョルジュ・アペール(一八五〇~一九三四)はフランス人の短距離で飛驒へ向かおうとして、槍ヶ岳を越えたのではなく、最を訪れることであった。ただ、街道だけをたどるのではなく、最を訪れることであった。ただ、街道だけをたどるのではなく、最か日離で飛驒へ向かおうとして、槍ヶ岳を越えたのである。だから、アペールは槍ヶ岳の頂上に達しなかったことを、それほど後ら、アペールは槍ヶ岳の頂上に達しなかったことを、それほど後ら、アペールは槍ヶ岳の頂上に達しなかったことを、それほど後ら、アペールは槍ヶ岳の頂上に達しなかったことを、それほど後ら、アペールは信が、告ばいた。

めらいもせず、迷いもせず、飛驒側へ下り、目的地の飛驒地方を的らいもせず、迷いもせず、飛驒側へ下り、目的地の飛驒側へ下るから飛驒側へ下っていることからもそう思える。アペールはたいのであろう。かなり後になって、一九〇二年に小島鳥水がやはりのであろう。かなり後になって、一九〇二年に小島鳥水がやはりのであろう。かなり後になって、一九〇二年に小島鳥水がやはりのであろう。かなり後になって、一九〇二年に小島鳥水がやはりであろう。かなり後になって、一九〇二年に小島鳥水がやはりである。

アペールの旅行の特異な点は、友人も同行せず、通訳も連れず、 一人だったことである。もちろん、山道ではガイドを雇ったが、 日本の僻地を一人で旅行した例は少ないのではあるまいか。ずっ と後のウェストンですら一人では旅行していない。アペールはこ と後のウェストンですら一人では旅行していない。アペールはこ と後のウェストンですら一人では旅行していない。アペールはこ と後のウェストンですら一人では流行していない。アペールはこ と後のウェストンですら一人では流行していない。アペールはこ と後のウェストンですら一人では流行していない。 の紀行の中でも書いているように、自分と相手の意思が正確に伝 わらないから、通訳はいやだといっている。一人で旅行できるほ おいないから、通訳はいやだといっている。一人で旅行できるほ と、彼は日本語が達者であったのだろう。

と出来上がったわけである。

上高地に入ることなど、何の障害もなかったにちがいない。方へ旅行することは、東京に住んでいた外国人に対する旅行制限がをみると、制限は形式的なものだったのであろう。それ以上に、をみると、制限は形式的なものだったのであろう。それ以上に、をみると、制限は形式的なものだったのであろう。それ以上に、をみると、制限は形式的なものだったのであろう。それ以上に、をみると、制限は形式的なものだったのであろう。それ以上に、をみると、制限は形式的なものだったのであることなど、何の障害もなかったにちがいない。

行雲とともに―高畑棟材伝― (上)

浅 野 孝

私が高畑棟材という登山家を知ったのは、ずいぶんと昔のことだ。出合い

ら。それは私が山登りを始めた時だから、私の十六・七歳の頃であぶ。それは私が山登りを始めた時だから、私の十六・七歳の頃であぶ。それは私が山登りを始めた時だから、私の十六・七歳の頃である。

りおぼえているのは大島亮吉(註1)の神津牧場の紀行文だ。といであったと云っても過言ではない。私を山の世界にのめり込出合いであったと云っても過言ではない。私を山の世界にのめり込出合いであったと云っても過言ではない。私を山の世界にのめり込出合いであったと云っても過言ではない。そのことは、私と山との私と高畑棟材との出合いを考えてみる。そのことは、私と山との

年代をはっきりさせるため、

私の生年月日を記してみる。私は大

女斗者こうのこ、こでありて重は正十五年(一九二六)二月二十三日生れ、寅年のはや生れである。

かみたいな牛乳はのまない。」 飲む、この芳醇甘美な一ぱいの牛乳! 私は都会にいて米のとぎ飲む、この芳醇甘美な一ぱいの牛乳! 私は都会にいて米のとぎかむ、美しい、きよらかなこの信濃境の山上牧場の春浅い朝に教科書にのっていた大島の文章は

であった。

商業学校の三年生になった頃だと思う。初めて奥多摩の山を歩い。現在は馬頭刈尾根とよんでいるものだ。

を見て感激したものであった。 ・ 尾崎喜八(註2)著『山の繪本』の中にあった写真と同じ風景た。尾崎喜八(註2)著『山の繪本』の中にあった写真と同じ風景

その頃、銀座七丁目にあった三昧堂書店で尾崎喜八の『山の繪本』 中の秋に商業学校の同級生たちと大菩薩峠へ行った。霧の中の登山年の秋に商業学校の同級生たちと大菩薩峠へ行った。霧の中の登山年の秋に商業学校の同級生たちと大菩薩峠へ行った。霧の中の登山年の秋に商業学校の同級生たちと大菩薩峠へ行った。霧の中の登山年の秋に商業学校の同級生たちと大菩薩峠へ行った。霧の中の登山年の秋に商業学校の同級生たちと大菩薩峠へ行った。霧の中の登山年の秋に高楽学校の同級生たと大菩薩は、翌年の神学校の「山の繪本」をの頃、銀座七丁目にあった三昧堂書店で尾崎喜八の『山の繪本』をの頃、銀座七丁目にあった三昧堂書店で尾崎喜八の『山の繪本』をの頃、銀座七丁目にあった三昧堂書店で尾崎喜八の『山の繪本』をの頃、銀座七丁目にあった三昧堂書店で尾崎喜八の『山の繪本』をの頃、銀座七丁目にあった。

以の十弋後半は暗い苦しい生舌の洗いた時代であったが、私に山を歩いて登って文章にすることだということを知った。あったが『山』を購入して読んだ。そして、山とは研究すること、あるこがれ又おどろきが私の心に残った。大鳥亮吉の著書は古本でを買って読んだ。『山の繪本』に書かれていた山のこと、山に対すを買って読んだ。『山の繪本』に書かれていた山のこと、山に対す

た。

のしっかりした著者と本があったからだ。本はなく、山の情報にしても少なく、限られたものであったが良質本はなく、山の情報にしても少なく、限られたものであったが、私に私の十代後半は暗い苦しい生活の続いた時代であったが、私に

の繪本』を読んでいても瑞牆山の山名がよめなくて、ズイショウサる知識はない。又その記事を理解する学力も低かった。例えば『山と高原』『ケルン』。ハイキング社から『ハイキング』があった(註山の雑誌には、山と溪谷社の『山と溪谷』、朋文堂からは『山小屋』山の雑誌には、山と溪谷社の『山と溪谷』、朋文堂からは『山小屋』

からなかった。

の頃の思い出となっている。 ・ は頭で田部重治の『山と溪谷』の普及版を購入したのも楽しい少年 は座数寄屋橋交差点近くにあった第一書房は大きな書店で、その

た。 高畑棟材の『行雲とともに』を入手して読んだことを思い出す。

りの奥の深さを知った。西上州の山々を知ったのもこの本からだっ進んでゆくと、何と名前のわからない山が多いことか、そして山登のかも知れない。ついで『山を行く』を読んでみた。この本を読み

私が若干であるが、考証ずきになったのはこの辺りに原因がある

「晩春の神流川上流へ」(註4)を読んで新鮮な印象を受けた。「新編武蔵風土記稿」「多摩郡村誌」「武蔵通志」(山岳篇)(註5)などの文献のあることをこの本から学び、広範な高畑の知識におどろかされた。

LIBRIS―というものを知ったのは『行雲とともに』であった。こ『山麓通信』も幾度もくり返し読んだ本であった。蔵書票―EX・ら、この山頂へたどるまで、長い道程をたどることになった。ら、この山頂へたどるまで、長い道程をたどることになった。り、この珍しい山を知ったのも『山を行く』からで、文中赤久縄山。この珍しい山を知ったのも『山を行く』からで、文中

美を象徴したものである」「一句魚」は之によって清冷なる溪谷県高なる山岳美を象徴し、『山女魚』は之によって清冷なる溪谷県返しに用いた自作の蔵書票のうち『暁の富士』は之によって

と説明している。

「法員のでは、「大島売吉(一八九九~一九二八)大正期から昭和初期に活躍した。
「法員のでは、「大島売吉全集」、「大島売吉(一八九九~一九二八)大正期から昭和初期に活躍した。
「大島売吉(一八九九~一九二八)大正期から昭和初期に活躍した。

(註2) 尾崎喜八 (一八九二~一九七四) 詩人、登山家。代表的な山の本は散文集『山の繪本』(朋文堂)であり、多くの詩集、山の本が出版されては散文集『山の繪本』(朋文堂)であり、多くの詩集、山の本が出版されては散文集『山の繪本』(朋文堂) であり、多くの詩集、山の本が出版されては、『という』 (記名) にいる。代表的な山の本(註2) 尾崎喜八 (一八九二~一九七四) 詩人、登山家。代表的な山の本(註2) 尾崎喜八 (一八九二~一九七四) 詩人、登山家。代表的な山の本(註2) にいる。

(註3) 『山と溪谷』山と溪谷社、昭和五年(一九三二)四月刊。 「ハイキング社、昭和六年(一九三二)刊。『ハイキング 別東堂、昭和六年(一九三二)刊。『ハイキング 別東文堂、昭和十四年(一九三一)刊。『山と高原』朋文堂、昭和十四年(一九三一)五月刊。『山小屋』

第三号に初載。のち『山を行く』に再録された。(註4)「晩春の神流川上流へ」大正十二年(一九二三)『山岳』第十六年

重な文献である。
重な文献である。
重な文献である。
第二十年第一号に掲載したもの。奥多摩の研究にはかかせぬ貴て「山岳」第二十年第一号に掲載したもの。奥多摩の研究にはかかせぬ貴て「山岳」第二十年第一号に掲載したもの。奥多摩の研究にはかかせぬ貴

写筆し、『山岳篇)』は河田 解 著で、総説中の山岳篇全部を梅澤親光が『武蔵通志(山岳篇)』は河田 解 著で、総説中の山岳篇全部を梅澤親光が

その生涯

下っていった。 来郡磐戸村へ、さらに塩ノ沢峠(磐戸峠)をこえて多野郡上野村へ来郡磐戸村へ、さらに塩ノ沢峠(磐戸峠)をこえて多野郡上野村へ大正十年(一九二一)五月の下旬、一人の登山家が下仁田から甘

いたのは、かれこれ六時半であったろう。」「刻々と迫り来る黄昏と共に白井の旅舎山市屋(黒沢太仲)を叩「刻々と迫り来る黄昏と共にシロイ

とその紀行文に書いている。翌日

山市屋を発って濱平へ向う。」
しかといふ數匹の岩魚の煮びたしを何よりの肴に、赤坊の頭ほどもたといふ數匹の岩魚の煮びたしを何よりの肴に、赤坊の頭ほどもたといふ數匹の岩魚の煮びたしを何よりの肴に、赤坊の頭ほども

鉄道のある吉井駅まで歩いた。を西御荷鉾山をこえて、日野村へ下った。さらに小梨峠をこえ軽便を西御荷鉾山をこえて、日野村へ下った。さらに小梨峠をこえ軽便いに万場へ歩き、万場の山屋に泊り、第四日目の六月一日は雨の中その日は諏訪山を探り、浜平鉱泉泊。第三日目は浜平から神流川ぞ

この時の紀行は「晩春の神流川上流へ」となって、『山岳』第十

に掲載された。

おいる。おいる。としている。そしてこの上州の山岳地域を知ったとをよんだ事をしるしている。そしてこの上州の山岳地域を知ったとをよんだ事をしるしている。おいる。</

高畑の生涯について記してみる。

た。広い墓地の一隅にある順天堂病院の供養塔は検体された人達のののち遺骨は吉祥寺境内になる金銅製の大仏像の体内に納められた高畑の遺体は同日ただちに順天堂大学の病院に移送された。それは射元引受人のない死者にとっての法的処置であった。高畑の遺体は昭和三十四年(一九五九)度の医学実習のため解剖された。それた高畑の遺体は同日ただちに順天堂大学の病院に移送された。それにの方が、大田区矢口にあった高畑は昭和三十三年(一九五八)九月九日、大田区矢口にあった

ここに達するための私の行程には長いものがあった。供養塔と吉祥石畳がかくれるほどおちていた。山門から墓所への道は短かったが、合祀されている供養塔に詣でた。境内にはイチョウの黄葉が参道の昭和五十五年(一九八〇)十一月二十三日夕刻、私は高畑楝材の

寺の山門をカメラにおさめて帰宅した。

ために建てられたものである。

た、神谷量平、山崎金次郎、野口未延、鶴岡元之助、松本熊次郎(主な、神谷量平、山崎金次郎、野口未延、鶴岡元之助、松本熊次郎(武山と溪谷社社長川崎吉蔵の「おちこちの人―追憶!風山歩きを鼓吹した…」の章(『山と溪谷』昭和四十六年四月号)であった。きを鼓吹した…」の章(『山と溪谷』昭和四十六年四月号)であった。「戦争が始まってから、高畑氏の消息は、かき消すごとくとだえてしまったが、ある登山者が陣馬山の頂上にたどり着いたとき、てしまったが、ある登山者が陣馬山の頂上にたどり着いたとき、まるで防空壕のような穴倉から、ヌウーッと這い出て来た高畑氏を見かけたと話していたことがある。」

の年譜を調べてみると、この一時期の居どころについては不明の点がち、陣馬山麓附近に高畑没地としての伝説がうみだされた。たち、陣馬山麓附近に高畑没地としての伝説がうみだされた。たち、陣馬山麓附近に高畑没地としての伝説がうみだされた。たち、陣馬山麓附近に高畑没地としての伝説がうみだされた。たち、陣馬山麓附近に高畑没地としての伝説がうみだされた。たち、陣馬山麓附近に高畑没地としての伝説がうみだされた。

ぐな印象だけが残されている。

が多かった。

「高畑棟材 東京大学卒。大正初期、千葉青藍に師事して書を学の項は、 如と溪谷社刊『世界山岳百科事典』(註2)の高畑棟材

高畑の没年については種々の説があった。生前、高畑と交渉の

あ

かった。

を行く』『行雲とともに』『山麓通信 たが、昭和九年陣場山山麓に隠棲し、 る び、 及に尽くす。昭和六年雑誌『山小屋』創刊以来、 に仲間と霧藻会を創立。 々』『奥秩父と其附近』 木曽谷と東京付近の山々を愛した。 情操が豊かで新古典的自然描写を巧みとし、また詩人でもあ 翌十五年霧の旅会へ入会。 がある。」 自然の中に暮らす。 のほか、 大正十四年安田保善社内 共著『東京附近の 編集主任となっ 低山 趣味の普 著書『山

第二節道遙派の人々2低山派の人々」の項に

瓜生卓造の『日本山岳文学史』(註3)の「第九章紀行家の種々相、と記載されているが、高畑の生年月日及び没年等は記されていない。

「「霧の旅会」の仲間である高畑棟材の『山を行く』「行雲とともに」「「霧の旅会」の仲間である高畑棟材の『山を行く』「行雲とともに」ないらしい。伊豆の生まれらしく、東大を出て、しばらく安田保善社でサラリーマン生活をしていたが、千葉青藍に書を学び、絵善さ巧みに描いた。哲人であり、詩人であり、晩年は陣馬山麓の二も近みに描いた。哲人であり、詩人であり、晩年は陣馬山麓の二位の経歴は詳らかではを訪り、「「霧の旅会」の仲間である高畑棟材の『山を行く』「行雲とともに』

多い人物のようであった。 京周辺の その内容は親切をきわめたものであって、 ブックの先がけとなった本で、二著とも版を重ねたものであった。 「々」『奥秩父と其附近』を共著として出 又高畑と著書を共にした河田槙の回想においても、 々のよき時代を知り、 高畑と河田は朋文堂より 地誌、 歴史を知るには手頃の本で 版している。 今日読んでみて当時の東 当時ガイド・ 高畑はナゾの 『東京附 近の

2時代も彼はかなり窮乏していたもようであった。」半世をほとんど放浪の中に送っていたようであった。前の1門は山岳文芸雑誌『アルプ』七十七号の回想の中に

と述べている。さらに

のだろう」 りかたのようにも思われる。いや、まだどこかで生き続けてい 聞をわれわれに信じさせて、飄然と生きていたのも、 三十いくつかで死んだという話も、やはりNの伝達によるもので、 「『K(河田)君、Sがまだ生きているようだぜ』『えっ、 跡を解決するひまもなく、つい先年没してしまった。 たしか私が北海道在住中であったと記憶する。そのH堂もこの奇 かねたNの、好意の企画であった。そういう彼も放浪のうちに、 みた様子であった。私との共著も実は名ばかりで、 H堂のNとはどういう関係か、 あった。前の共著時代も彼はかなり窮乏していたもようであった。 翻弄されたらしく、半世のほとんど放浪の中に送っていたようで 案内書を彼と共著で出版したことがあった。かなり数奇な運命に てことになる』。Sというのは古い登山家で、昭和の初年に山 編集室を新築した時、 数年前、 筆跡はSの字だよ、たしかに。これでみるとまだ生きていたっ (新島) 君は手に一枚のハガキを持って私にこう呼びかけた。『こ 山岳書の出版と山岳雑誌の刊行で著名なH 祝賀会に呼ばれていった席上で、店主のN 相当親しい間柄でずいぶん面倒も 彼の窮状を見 (朋文) 堂が、 彼らし 彼がその ほんとか

と記している。

私は河田との共著を読んでみたかぎりにおいては「私との共著も

著に書かれている文章の内容を見ても、高畑の手による文章は多い。実は名ばかりで……」云々との記述を認めるわけにはいかない。共

意に満ちた言葉があるように私には考えられる。いた事実がある。単なる河田の記憶ちがい以上に、高畑に対する悪朋文堂社長新島章男と高畑との関係についても河田はよく知って

四年(一八七一)七月九日であるから、高畑の出生時、父は二十六母志川の弐男として届出が出されている。父運助の生年月日は明治た。出生地は東京市芝区白金台町一丁目五番地である。父高畑運助、高畑棟材が生れたのは、明治三十年(一八九七)十月一日であっ

同三十四年(一九〇一)九月五日生れの参男良材、同三十七年(一れの兄種材、同三十二年(一八九九)十月十二日生れの長女郷子、れの兄種材、同三十二年(一八九九)十二月十五日生高畑の兄弟姉妹には、明治二十八年(一八九五)十二月十五日生

歳であったと推定することができる。

清材、兄弟姉妹七名がいたことがわかる。
またか、兄弟姉妹七名がいたことがわかる。
またか、兄弟姉妹七名がいたことがわかる。

男入籍と記載されているので鈴木姓であった運助は高畑家に養子といる戸籍帳には明治二十七年(一八九四)八月二十五日鈴木惟孝四た。明治四年(一八七一)七月九日生れは前述の通りで、残されて父高畑運助は、秋田県秋田市長野町、鈴木惟孝、ルイの間に生れ

は抹消され棟材が家督を相続している。母志川はそれ以前に死亡しく高畑運助は昭和七年(一九三二)二月二十日死亡し、父の戸籍

なったようである。

兄弟姉妹のうち棟材と山に登っていたのは、三男の良材と四男へたものと思われる。

上流の案内文は、彼清材の文章であることが知られている。良材の文章が掲載されているし、『奥秩父と其附近』の中の吹笛川清材であった。高畑が初代編集長をつとめた雑誌『山小屋』に度々

により日本山岳会に入会している。会員番号は、棟材五九六、良材(一九一八)八月、木暮理太郎(註5)、高野鷹蔵(註6)の紹介している。三男の良材はよく棟材と共に山行をしており、大正七年兄長男の種材は大正六年(一九一八)五月十五日大阪市内で死亡

ことができる。
良材のことは『東京附近の山々』の凡例の中にその名前を見出す

五九七である。

だ葉煙草」が一緒に掲載されている。載されている。そして同号の二○頁には楝材の詩「きがらしのすん載されている。そして同号の二○頁には楝材の詩「きがらしのすんで葉煙草」が一緒に掲載されている。

とがあったが、高畑家の戸籍謄本を見て弟清材の存在を知ったわけ私はこの『山小屋』を見て清材は棟材のベンネームかと思ったこ

である。

とであった。 とであった。 とであった。

を訪れた時であった。二色鉱泉は栃谷の奥にあった古びた一軒宿で私がはじめて高力幸太郎の名を耳にしたのは、陣場山麓二色鉱泉

されたが、奥さんは健在であった。の二色鉱泉を訪れたのは昭和四十年代で、当主の政次郎さんは死去あった。今は故人となられた大木政次郎一家が住んでいた。私がそ

一さあ、ずい分長い間うちに居たね、よく高尾の若い人達がた一高畑さんの事をお聞きしたいのですが。という私の質問に

ずねてきたがね。

―いつ頃のことですか。

――そう支那事変の最中だったかね

――高畑さんは、宿賃をはらっていたのですか。

もっていったっけ。 達が気もち悪がったので、納屋に入れといたが、戦後高力さんが達が気もち悪がったので、納屋に入れといたが、戦後高力さんがていたかもね。そういえば高畑さんの首の彫物があったよ。子供――いや、そんなことは知らね、多分おじいさんが面倒を見てやっ

このことがあってから陣場山へ登った帰り、再び二色鉱泉によっ三十年もの昔のことなので、記憶もとぎれがちであった。こで私は高力という方の存在を知った。大木のおばあさんも約

の類を拾った。その中に高畑宛の手紙その他があった。てみたが、家人は留守であった。その時家の縁の下から一束の手紙

交友のあった高力幸太郎であった。電話口に出られたのが高畑とはじめのお宅へ電話をかけてみたら、電話口に出られたのが高畑とお名前の方が何というのかわからなかった。数少ない高力姓の一番東京に帰ってから高力という名を電話帳の中に見つけたが、さて

岳会」を創立した。会報『かやと』を発行し、しばしば高畑も会報高力は長年宮内省に勤務され、宮内省内の有志と共に「千代田山

に寄稿している。又高畑の栃谷二色鉱泉での生活について有益なものでいただくことができたのは高畑の側面を知るについて有益なものでいただくことができたのは高畑の側面を知るにとができた。接助をおしまなかった方で、特に死にいたる高畑の晩年における交援助をおしまなかった方で、特に死にいたる高畑の晩年における交援助をおしまなかった。

いただくことができた。ことができた。又高畑との交友に関するメモその他の資料を見せてことができた。又高畑との交友に関するメモその他の資料を見せてあった。早速高力宅へおじゃまして高畑の死去の前後のことを聞く

て高畑の知られざる空白をうめることができたのであった。大半は、高力の日記の中からぬき書きしたものであった。それによっ大な日記をつけられていた。私が知りたかった高畑に関する知識の大な日記を作り、スケッチをよくえがいた。大正時代からの膨

高力宛の便りから高畑のことを知る。それは高力幸太郎が宮内省高畑のことに話を戻してみる。

の歌会始の題は「林」であった。高力の入選歌はの歌会始に入選した短歌の事を高畑が知ったからであった。その時の歌会始に入選した短歌の事を高畑が知ったからであった。その時

からまつのめぶくあかるき高原の林を出でて雪の山見

であった。

高力宛高畑のハガキは

から御祝い申上ます。「わがことのように嬉しく朗々高吟すること幾度か、心から、心

甲午新春成人の日に 高畑棟材」 山恋ひの身にしみじみと懐かしき御歌なりしを壽ぎまつる山友の心を罩めし詠進歌芽ぶきあかるく入選せらる

「医療扶助生活扶助にすがりつつ闘病すでに十年超えぬる又続いて送られてきた一枚のハガキにも、次の短歌がよせられた。

たしました。

物置に劣れる部屋の隙間風に震えつつ煮る雑煮粥かな闘病は十年超ゆれど全快の希望を棄てず若水を汲む

共に差出人の住所の記載はない。ハガキには「大森」の郵便局の消―むねたか―」

くなかったからであったろう。あられたのとのというなかったからであったのも現在の生活扶助の場所を知られたが、前記朋文堂の新築祝の時に出したハガキもこの頃のことであった印がおされてあった。

それは江戸期の画家葛飾北斉が、晩年借金のため江戸に居られなくなり、相州の浦賀に落ちのび、友人達に出した手紙に「遠慮の儀は座候間、旅住之場所は、したため申さず候」と記した心境に似たものがあったのかも知れぬ。あるいは高畑のもつ矜持の精神がそうさせたものか。

はじまるものであった。
「田本、高力の短歌が「雲」の歌会始入選の祝詞に(一九五七)十二月末、高力の短歌が「雲」の歌会始入選の祝詞に(一九五八)一月十六日のことであった。それは昭和三十二年再び高畑から高力幸太郎宛に長文の手紙がとどいたのは昭和三十年である。

れしくて!「おめでとうございます。ほんとうに我事のように嬉しくて、う「おめでとうございます。ほんとうに我事のように嬉しくて、う

の、お題「雲」の晴れの入選者の中に又も尊名を拝し全く驚喜い歌会始入選者決る。 歌会始入選者決る。 の、お題「雲の患者から産経時事朝刊を貸してもらい、日ごろ活字の、お題「雲の患者から産経時事朝刊を貸してもらい、日ごろ活字

の「林」詠進歌は、全く偽りなく私の日にち毎日、一回または一からまつのめぶくあかるき高原の林を出でて雪の山見つ

回以上、病床で口誦でおります。

スコチン、ストマイ注射等に依り餘命をつないでおる有様です。今年の春―一月下旬から約二ヶ月間重態をつづけ、主治医 (二名)いづれ、「霊」のお歌の発表ある日を今から楽しみにしております。いづれ、「霊」のお歌の発表ある日を今から楽しみにしております。

に申し上げにくいのですが、もしお願いできますれば、に生活扶助の継続支給によるお蔭とおもい、今は、はや何の野心もなく静かにその日その日を送迎しておる次第です。もなく静かにその日その日を送迎しておる次第です。

したいと心からねがってやまぬ次第でありますが……。いつも枕頭に飾り御秀詠を口誦みながら貴兄の御高風を偲び、暮「林」と「雲」の短冊、各御署名入りで一葉づつお恵贈願いたく、

孤影悄然と病死、無縁仏となる覚悟をしておりました。然し最初尚、昭和十八年発病以来、みづから辱知諸兄姉への通信を絶ち、

たり、 紹介で大田区内のM病院に入院、 生委員に渉りをつけて医療扶助と生活扶助との手続をして下さっ に診て下すった町医が実に親切なお医者さんでして忙しい中を民 涙の出るほど嬉しい思いを致しました。 当院に転院療養中でございます。 M病院が廃業してしまったので このお医者さんの

(昨年五月)

現在、 せんでした。 ありません。また、 紙が戦中、 :何卒お含置下さい。 い年をお迎え下さいますようにル 私の現住所 戦後はじめてです。 何卒おゆるし下さい。 (及び現状) を御教えしたのは貴兄への此 都合により通知したくありませんから、 下らぬこと、 朋文堂主 ~ 、らべらと書流し申訳ありま (新島君) へも通知して その の手

高力幸太郎 走二十八日夜しるす。 高畑棟材

右

ていた病院は芙蓉病院であった。 「目蒲線武蔵新田下車……」と場所が記してある。 入院し

……」の二点で、 となる覚悟をしておりました……」と「辱知諸兄姉への通信を絶ち とができる。その一つは この手紙の中に、 昭和十八年 (一九四三) すっかり世捨人となっていたわけである。 二つの高畑の戦後の生きざまをうかがい 「昭和十八年……孤影悄然と病死、 来、 昭和三十三年 (一九五八) 0 間、 無 知るこ 無縁仏

の日 さに世捨人生活の十五年間が続いていた。手紙の宛名人である高力 和十九年十一月十二日、 陣場山に登る、 高畑氏死去のうわさ

> を聞き、 栃谷二色鉱泉にて真偽を確かめるも不明なり」

又の日記に

戦後高畑氏阿佐谷の小宅に来泊

とあるが、こちらの日付は不明である。 きる二枚のハガキがある。 発病の年の昭 和十八年 (一九四三)、 宛名はいずれも、 高畑の生活を知ることので 東京市杉並区荻窪

7

目一六二、佐々木隆である。

いる。 チがあり、 日付のあるもので、 力同様しばしば栃谷で生活していた高畑のもとに訪れている。 の主催する「奥高尾山岳会」の主力メンバーとなった。佐々木は 楽部の委員、 全国の勤務地を転勤したが、学生時代より山登りを始め、 佐々木は旧制成蹊高校から東大法学部を卒業後、 佐々木宛の一枚のハガキには札金鉱泉のスケッチと十八年三月 住所は山梨県南都留郡禾生村田野倉札金鉱泉内となって 昭和十年頃には高尾山麓に住んでいた佐藤文男 他の一枚のハガキには、表に札金鉱泉のスケッ 警務官となって Ш (註8 小屋俱 0 高

る。 は、 はらった高畑は市内下目黒一ノ二七寺村次郎方に下宿していたこと n たらしいが性格上それも長く続かなかったようである。 たことを知る。 この後の高畑の消息は不明となってしまったが、 私が推測できることは、 昭 そして一時 高畑の最後の著書『山の子供達』の後記から察することも出来 和十八年(一九四三)以来M病院、芙蓉病院にて療養中であ それ以前昭和十三年 大利根ボーリングという会社へ勤務したこともあっ 札金鉱泉ののちの隠棲生活は病院 (一九三八) 以来、栃谷を引き 前記の手紙によ

ŧ

4

れは昭和三十三年(一九五八)九月一日付のもので先の高力への便りの四年後、高畑は高力に手紙を出している。なり不帰の旅となったのではなかったかとも考えられる。

そ

中で御送金下されたく、くわしくは後日御報申上ます。」 ★尚ほ、お承諾下らば、御足労わずらわすまでもなく、手紙に封 時に、九月十日頃までに是非とも必要なのでございませんが、急 に是非とも入用のことがありますので、金五百円恩借仕り度く伏 してお願い申上げますが、枉げてお承諾下さらば嬉しく存じます。 高ほ、九月十日頃までに是非とも必要なのでございます。不二 時に、お承諾下らば、御足労わずらわすまでもなく、手紙に封 中で御送金下されたく、くわしくは後日御報申上ます。」

る。
これに応えて高力は九月三日付現金書留にして千円を送金してい

星印以下の文章は手紙の欄外に書かれていた。

が少し長いが全文を記載してみる。あり、九月四日更に金策無心の手紙がとどく。その時の手紙であるあり、九月四日更に金策無心の手紙がとどく。その時の手紙であるが少し長いが全人のである。

たせいか(?)所主のアッセンで、所主と気の合う良友が経営し

ておるようですが、私は平素、院長・主治医・看ゴ婦長や所主の

八名中、他の人(患者)は未だ踏ん切りがつかず、その去就に迷っ

云うことを、よく聞いて、おとなしく(?)治療専一に努めて居

ただただ感泣あるのみでございます。ほんとに、ほんとに有難うえって多額の現金をお贈り下され、ひたすら恐縮いたすと同時に、て来てくれました。この上もない御迷惑な御願ひにも拘らず、か『現金書留』一通、本日正午頃、看ゴ婦長みづから私のところに持っ「高力幸太郎様」九月四日夕、芙蓉病院十号室にて「高畑楝材拝」

ございました。厚く御礼申上ます。実は、この際、どう低く見積

もっても三千円位は絶対に必要なので、先月三十日、当病院の所

(経営者) から、我々、十号の全患者 (私を入れて八名)

肋

料

取四四〇円

合計

[74]

四〇円で、

あとの不足分は持参する

九

円也を恩借出来ますれば、

貴兄御好意の二千円+九月分の扶

ここ(芙蓉) 半封(一人宛て)やアチラ製の牛缶その他に有りつけるそうです 恐らく東京一の完全給食だろうとのこと。 の系統の病院へ転院出来るよう手続きしてくれたので、 てゐるという、 ため、 日三食の食膳にのぼる主食・副食類はいつも御馳走づくめで、 聞いてみましたら(現在、戻って来て十一号室に居る人です) 時々、 臨時特配ですから、そのために三食の御馳走の を退院することになっております。 (当院から行った婦人患者) 人の話を、 世田谷区内の千歳船橋駅 フレッシュなバター(マー かな環境の 『有隣病院』というカトリ (高井戸線?) また、 ガリンではない…… カトリック関係 同院に、 寝堀り葉ほ 今月 近くに在 質を

…その転院に際しての、いろい 六四〇円から、 ことです。 〇〇円、この合計二〇〇円を毎月、 >多少に拘らず一ヶ月の借り賃一○○円です。 廻り品等は全部、 残念なことは、 箸箱・夜具代用の毛布及ビ敷布類・荷造用の ○円になってしまっております。情けないことですけ 私など、 概算ザット三千四、 容赦なく差引かれ実際の毎月の手取り扶 全部、 入院する患者が持って行かなければならない 『有隣』に入院するには、 芙蓉病院の備品を使ってゐる者 ろの細かい買物 五百円!)。 福祉事ム所から頂 御好 夜具 これと洗濯代毎月 (例えば 意に甘え、 細引紐 八類・衣 助 いてゐる 料は、 れど… (類・身 (点数 もう

> らば、 層静養・治療に専心いたすことを御誓申上げます。 兄に対する私の最后の御願ひだと、 もりです。 品を極度に切り詰めて、この二四四 私終生の最も得難く有難い御好意と深く肝に命じて、 再三再四のまことに図々しいお願いですが、これを貴 御寛大なお心もてお聞 ○円のハンイ内で買整える 以

は誠心誠意応えているのには頭の下る思いである ができなかったからである。 長い高畑の手紙の全文引用したが、 乱文呉々もおゆるし下さい 血の出るような高畑の この切実な手紙を要約すること 要望に対

たが、 滝キヨ、 佐藤ナツとの間に生れた女子敦子と対面したいとの希望を伝える。 しかし、高畑の病状は悪化をたどる。高畑の臨終に間に合わなかっ 九 月六日、高力は高畑を芙蓉病院に見舞う。その時高畑は高力に、 死の床にかけつけたのは、 大木政次郎達であった。 高力幸太郎、 太田

下げるようなケチなことはしないさうです。

め 同日中に、 遺体は生活保護をうけていたので、 高力は高畑について詳細なメモを残してい 御茶の水にある順天堂大学へ移送された。 保護法の指定により

電 対

旨通 九 及び電話令嬢太田敦子氏に来院方要請、 九・九 芙蓉病院より電話、 新ハイキング社、 高畑氏逝去の報あり、 夕刻太田夫妻来院死の 朋文堂へ高畑氏 滝氏

ĮЩ 杨谷一 一色鉱泉へ行き高畑氏の塑像を受取

太田敦子氏来宅、塑像引取り承諾

• 新ハイキング誌の死亡記事掲載

三四・八・三〇 川越市太田敦子氏に塑像寄贈に赴く (同行元沢

高畑死亡時、高力幸太郎は手帳に高畑のデスマスクをスケッチする。

棟材氏デスマスク」と手帳の右隅に記している。 明三○・一○・一四生満六○才 三三・九・九 一二・三○高畑

とも師弟という、現在では俗におちてしまった言葉の範囲の内に、 高畑との関係をおくことを私は好まない。 何はともあれ著書を通して私にとって高畑は私の師であった。もっ 高畑棟材の逝去のもようは、高力によってこのように記録された。

を追ってその事を明らかにしてゆきたい。 その生涯に於て高畑ほど毀誉褒貶のあった岳人は他にない。以下順 るまで、高力をはじめ多数の人々の協力によって明らかになった。 正期から昭和にかけて、それも昭和三十三年(一九五八)の死に至 高畑の生前は、特に生涯の後半は霧の中にかくされていたが、大

棟材さんの事が載っていましたが、その高畑さんは今年の九月九 『新ハイキング』(註9)誌に高力の文章が掲載された。 本誌第四十九号の佐々木隆さんの記事中に高畑

日にさる病院で六十年の生涯を閉じられました。

になじみ深かった高畑さんも、戦後杳として消息を絶っていまし の労作)、『山麓通信』、『山の子供達』などの好著で山好きの人達 「山を行く」、『行雲とともに』、『東京附近の山々』(河田植さんと

> とうとう間に合わず娘さんと痛恨極りない涙の対面となってしま いました。 いる娘さんに是非会いたいと聞いて、その手配をしているうちに、 たえているのを見舞いましたが、最近、三十年も永い間義絶して

た。本年に入って、療養生活に身寄もない淋しい痩軀を病床に横

山と共に常に生きていることでありましょう。 に接することができますし高畑さんを知る我々の心の中に永遠の 高畑さんは死にましたが、残された著述を通じてその好

高畑さんがいかに山を愛していたか、 最近病床にあって私に示

された短歌に次の一首があります。

○木曽小舎の窓ゆ流るる乙女らの聖き歌声谷にこだます。

ていただいた。神谷恭、山崎金次郎、 (註1)神谷量平は、故神谷恭の長男。亡父宛の高畑からの手紙類を見せ 野口末延、鶴岡元之助、松本熊次郎

の項は斉藤一男執筆 の諸氏は霧の旅会の会員であった。 (註2) 『世界山岳百科事典』 (山と溪谷社 一九七一年七月刊)、「高畑棟材

四年(一九七九)東京新聞出版局刊。 (註3) 瓜生卓造 (一九二〇-一九八二) 『日本山岳文学史』は昭和五十

著に「一日二日山の旅」。多数の著書がある。霧の旅会会員 (註4)河田槙(一八九〇~一九七一) 父は明治期の地理学者 河田 È

日本山岳会三代目の会長になった。著書に『山の憶ひ出』上下巻(龍星閣) (註5) 木暮理太郎 (一八七三~一九四四) 昭和十年 (一九三五)

山岳会創立発起人の一人。『高山深谷』の編集など担当。 (註6) 「蝶類名稱類纂」がある。日本山岳会名誉会員 高野鷹蔵 (一八八四~一九六四 明治三十八年 (一九〇五) 山岳写真の名手。 日本

註7 高畑のハガキ、手紙類を見せていただいた。 高力幸太郎(一九〇三-一九九三) 著書に『みなかみ』自家版が

ある。

たが「奥高尾山岳会」を主催した。 (計8) 佐藤文男 (一九〇八~) 医師、 堅香子歌会主催。 短い時期であ

0

(註9) 『新ハイキング』昭和三十三年 (一九五八) 十一月五十二号。

霧藻 会のこと

て記してみる 高畑棟材が二十代から三十代に活動した「霧藻会」のことについ

この会は安田財閥系の諸会社の社員によって構成されてい

あった。内訳は安田保善社から十名、 ると会員数は、 藻』は霧藻山岳会の会報である。 昭和三年(一九二八)十一月二十日現在四十八名で 創刊号に会員名簿がありそれによ 安田銀行 (現在の富士銀行)

清直、 材が加わっている。 から三十四名、 霧藻会会報によると、 松村高、 知恵乃輪倶楽部から一名、 村形吉笛、 日本晝夜銀行から一名、 大正十四年 (一九二五) 三月十一日 丸山東美男、 それに書籍業の新島章男と高畑棟 今井四郎、 帝国海上火災保険会社から 宮本昌、 高畑棟 加藤

材の七名によって山岳会組織について協議がされ、

日の小集会で安田銀行から高畑棟材、

松村高、

安田保善社 いで同年五月

> に今井四郎 ら村形吉富、 の六名が発起人として登録されている。 加藤清直、 宮本昌の四名が幹事に選出された。そして会報第一 高畑棟材、 村形吉富、 丸山東美男、 묽

畑の幹事辞任のあと佐藤栄と丸山東美男の二名が幹事となった。 職したからで、以後準会員として霧藻会の運営に参加してゆく、 かし会報の編輯については高畑に一任されている。 ている。その理 幹事として選出された高畑が創刊号に於て別格の取り扱い 由は昭和三年 (一九二八) 安田銀行を病気のため退 がさ n

の他会員多数の紀行文でうずまっている。 本欄には木暮理太郎の「秩父のおもひで」、田部重治の「奥秩父の秋 美濃半紙二枚折りつづりのガリ版、一四四頁にわたる大冊であった。 「霧藻 (旅の手帳より)」「武尊山」の三篇を寄稿している 創刊号の発行は昭和三年 (一九二八) 十二月十五 高畑は「秩父雑詠」「黒瀧 日で、

編輯後記の中で高畑は

た。『霧

端として無碍にも断り兼ね、竟に不肖僣越乍ぬ自分に負はされた時には一寸当惑したが、 秋退行と同時に本会の幹事を辞任した、いはば只の一会員に過ぎ て了ったのである。 最も意義ある、そしてまた最もむづかし 竟に不肖僣越乍らと云うことになっ い創刊号の 自分も発起人の片ッ 幅輯を、 昨

我 拘はらず孰れも快諾を得たのである。そして三氏の御好意に依り、 氏の寄稿並びに茨木画伯の描画執筆の件は、 マの此の小さい一 我等が霧藻創刊号の爲めに豫々お願ひしてあった木暮、 機関誌が、 表紙及び巻頭を堂々と飾り得た事 非常な御多忙中にも H 面

と記している

編輯後記と読むことができる。 努力によるものであったと推察される。本人もその事を意識しての 田部の寄稿のあったことは、いずれも高畑個人の

と裾野めぐり」、雑録に「仙元峠・蕎麦粒山・川乗山」「大丹波川の 員であり画家の富田通雄が担当している。高畑は本欄に「富士五湖 れた。総頁数は一一一頁、体裁は創刊号と同じで、表紙は安田銀行 溪谷美」を発表した。 霧藻 第二号は昭和四年(一九二九)十二月二十八日に発行さ

丸山共著の『山のスケッチ』が朋文堂より発行された。 ブックの挿し画をえがいている。又昭和六年(一九三一)に富田 男もよく画をえがく人で、二人はのち高畑・河田槙共著のガイド 九二九)十月あった事が報じられている。発起人の一人、丸山東美 会報欄に霧藻会主催の「富田通雄氏水彩画個人展」が昭和四年(一

らくち」と「山を愛するといふこと」という箴言をのせている。そ は富田通雄が担当している。本欄には田部重治の「登山の意義」、 [中冬二の詩「雪に埋れた山の温泉場」「青根温泉」が、高畑は「し 「霧藻」第三号は昭和五年(一九三〇)十二月二十日発行。表紙

「山を愛するといふことは、 結局、 自分自身が山に愛されるとい

があった。

昭和五年(一九三〇)六月十五日、高畑の初めての著書『山を行

く」が朋文堂より出版された。

高畑は 第三号の編輯を最後に編輯の役をおりる。

輯後記は

ことは『霧藻』誌発展の上から観ても慥に能の無い話ゆえ、本號 「……近頃の登山界は愈々多事と相成りました。恁ふした折柄に 私の意の存するところを諒とせられたく冀ふ。 の編輯を最後として潔く勇退することに決心致しました。どうぞ 私ごとき舊派に属するかと想はれる人間が、刻下の時世を洞察す るの明なく、何時迄も我が『霧藻』 誌の編輯に携って居ると言ふ

致します。」 んで会員諸兄の健康を祈り併せて長いあひだの御厚情を只管感謝 筆を擱くにあたり、また本誌の編輯から身を退くにあたり、

謹

事に推挙され、昭和六年(一九三一)に発行を予定している雑誌『山 と結んでいる。この年の一月高畑の所属していた「霧の旅」 小屋』の準備に忙殺されたものと考えられる。

してみる。 イバル誌として多くの読者を集めた。時に高畑三十四歳であった。 高畑の著書及雑誌『山小屋』の発行者である新島章男のことを記 高畑棟材編輯主任となった『山小屋』は『山と溪谷』に対するラ

た安田銀行の山好きの人達との交際が始まり、霧藻会会員となり高 楽ビル内に書籍、 出版元である金港堂に勤務、二十一歳の時麴町区大手町にあった永 九八)父紋之助、 新島章男 (本名文男)は、九州大分県森町に明治三十 母ソ子の間に生れた。十代の後半上京し教科書の 雑誌等の取り次ぎ販売業をはじめた。 近くにあっ

谷恭に手紙を送っ

ている。

部

岳会の

す

畑 和六年(一九三一) 0 「山を行く」を発行し、 高畑を編輯主任に迎え、 山の出版社朋文堂としての地位を固 Ш 岳雜誌 Ш 小 屋 80

は多くの版を重ね洛陽の紙価を高からしめた。 出版した。時に『山を行く』、及び高畑・河田 其附近』、原全教の『奥秩父』、尾崎喜八『旅と滞在』等々昭和 本高山植物図説」、高畑・河田共著の を行く』の他に『行雲とともに』『山の子供達』、 一九三〇) 次いで『ケルン』『山と高原』を発行し、 から昭和八年(一九三四) 『東京附近の山々』『奥秩父と の間に約十七点の 高畑の著書では高畑の 出共著の 河野 ガイドブッ 一齢蔵 Ш 『現色日 岳書を 五年 īli

と方向を示した功績を忘れることはできない。 したことは大であると同時に、 通じて私達低山派にとっては、 たと考えられる。 前志』の出版は、出版人としての新島の理想と見識を示す事業であっ ったと云うことができる 途に山の本の出版を行い、 島の出生地の地誌である唐橋世濟 昭和四十年 戦前戦後を通じて日本の山岳界に貢献 (一九六五) 山のガイドブックに一つのスタイル 忘れ去ることのできない 『豊後國志』、 六十五歳で死去するまで それ等の 渡邊重春 出版著書を 出版社で 曹

0 よく上高地の梓川で釣糸をたれている姿を見たことがあっ 中の 話が少々は 渓流釣りに興味が移り、 [畑と新島兄弟 (章男と仁吉) 「初夏の両神山」でふれられている。 れるが、 高畑は前記霧藻山 昭和二十年末から三十年 との山 行については 晩年の新島は山登りよ 件について畏友神 『山を行く』 かけ

> 任を脊負されたを幸ひ範を霧の旅会会報にのっとりました……。 世帯の事とて活字印刷の立派やかなものは出せず編輯上の全責 が欲くなり今回急に具体化し年内に創刊号発行の予定でござい ……安田山 元より同好者がささやかな会費を持寄って守立ててゐる貧乏 岳会は創立四年后の今日に至りそろそろ年 会 報

會名を『霧藻会』と申すので誌名を『霧藻』といふ事

i

致

たが私のこの虎の子の原稿は山 さんの秩父に関する玉稿が含まれて居ります。 れた事のない玉稿、並びに来る二十日迄に必ず下さるといふ さんの 處女編輯を試みて居るのですから世の中ハ面白いものです」。 ります。武田、 字詰10行の四卦紙 りのもので相等長いものですが、 知れずやってきた『武尊山』に関する拙稿を寄せることにしまし 誌として洵に脱れざる所、 ました。本欄十餘篇の中には先日御多忙中特に寄稿下され て元幹事現準会員 節贈呈仕ります故御笑覧下され度希上ます。……創刊号は斯くし (二字不明) 『山岳』へは出しません。ですからまるで端折って書いて有 『秋の奥秩父』というなごやかな而も未だどこへ が五ツ六ツあるのが取柄と云へば取柄、 日高両氏の『武尊』に関する記文中に見えぬ (客員) 片 画 私も田部さんの原稿に励まされ なる私が意の儘に、 に十五枚にコンデンスしてしまい 岳第二奥上州号へ載せて頂くつも 紙数制限のため全く切り詰め25 私としては全くの 玉石混淆は同 就れ発刊の 過般人 た田 まし 木幕

大正 一期から 昭 和 初 期 10 かけて大小の山 岳会が雨後の 筍 0 如 創 この神谷宛の手紙は昭和三年(一九二八)十

月

十九日のものであ

登高会、東京山旅俱楽部等がアルビニズムを標榜して活動した。 しかし東京周辺の低山歩きを推進したのは、霧藻山岳会や霧の旅 昭和初期に鋭尖的な考えをもったR・C・C、登歩溪流会、日 早い時期関東に於ては霧の旅会、野歩路会が、大正後半か 本

には偉大なものがあった。 昭和十九年(一九四四)最終号を出すまで顕在であって、その功績 会などであって、霧藻会はその結末は不明であったが、霧の旅会は

|墓畔の草||一佐藤ナツのこと

三年(一九一四)三月のことであった。棟材十八歳の時である。 この滞在については『東京附近の山々』の「生藤山と其附近」の 高畑棟材が高尾山妙音谷にあった、佐藤旅館に滞在したのは大正

か。

日歩きまわったものである。」 高尾附近の丘陵や渓谷は徽に入り細を穿つ底の心組みでひにち毎 少よくなるとそろそろ多摩丘陵のそぞろ歩きがしてみたくなり、 尾妙音谷の佐藤旅館で暫らく静養を続けてゐたが、脚の自由が多 「大正三年春のことである。当時脚気を患ってゐた私は、武州高

と記している。この時代の高畑の生活をみると、大正五年(一九一 六)私立海城中学を卒業し、同年九月日本山岳会に入会。大正八年 (一九一九) 二月第三銀行に入社している。 高畑は脚気のため学校を休学して佐藤旅館に滞在し、 佐藤旅館主

人佐藤藤三郎の三女ナツと知り合うことになった。 高畑は生涯独身であったと伝えられているが、入籍こそしていな

> 人の間には一女子が生れている。 かったが、妻としてめとった女性がいた。即ち前記の佐藤ナツで二

のことについて昭和四十二年(一九六七)五月『新ハイキング』一 高畑と親友であったと自称する春日俊吉 (註1) は、高畑の結

三九号「誰れか故旧を忘るべき!(1)=高畑棟材氏の巻=」の中で

のひとは傍人を驚かす派手な"恋愛"をやった。見事にそれが成 先生であった。いずれは『山がとりもつロマンス』というところ 就した。高畑夫人千枝子さん、青山学院英文科出身で、某高女の 「……社会的にも安住のユトリが生じたのであろう。間もなくこ

然とした。天は、苛酷に過ぎると思ったのである。 とり可愛らしい童女が、両者にあたえられた。しかし摂理の非情 しようと考えているうちに、モハヤいけないという報に接し、粛 胸部疾患で、私などは高畑夫人病むと聞き、近くお見舞いに参上 の発病、あまりにも早かった死、いわゆる『奔馬性』と稱される な神々が、あたかもその代償を強要するかのごとくほどなく夫人 情景は一変してわが主人公は完全な悲劇の登場人物とかわる。ひ いと、半畳のひとつもあびせたくなるところだったが、やがて、 これまでは、秀才と淑女、ひとを羨ませるのも良い加減になさ

そこに引きとられた。」 関址手前の旅館『花屋』 一幸い、千枝子亡夫人のごく近しい縁者が高尾浅川の宿、 のあるじにあたる。迎えられて、 小仏

ろうか。 と記しているが、何を根拠として春日はこの文章を作ったものであ

婚

高畑の結婚生活に関しては事実に反している。例えば春日俊吉は都新聞のスポーツ記者として戦前に活躍した。しかし

も安住のユトリが生じ……」「本(註:『山を行く』)は売れる。銀行の位置も進む。社会的に

い矛盾にみちている。

一○)六月のことである。それ故春日の記述は年代的にもはなはだし二○)六月のこと、又第三銀行に入行したのは大正八年(一九一九)四)十八歳の頃であり、『山を行く』の初版は昭和五年(一九 ためるが、高畑が高尾山麓の佐藤旅館に滞在したのは大正三年(一

章をもうけ、高畑棟材のことにふれている。

瓜生卓造は『日本山岳文学史』のなかで、低山派の人々という一

棲し、読書と思索の日々を送った。生涯独身を通した。」「……哲人であり、詩人であり、晩年は陣馬山麓の二色鉱泉に隠

夏子の霊にささぐ」とあり、その要点を引用してみる。まずその「初年(一九三〇)七月二十二日に発行されている。本の副題は「佐藤文男、富士達によって編集発刊された『墓畔の草』がある。昭和五高畑の妻であった佐藤ナツについては、ナツの兄弟、佐藤愛之助、と書いている。一般には高畑独身のうわさが流れていた。

系みの人であったのです。
幸でなかったろう。姉の晩年はこの受難を超克した安らかなほほ亩から見ればいたましい受難の生涯であった。然し姉は決して不面から見ればいたましい受難の生涯でこの世を辭した。姉の一生は一

私達はいたづらに追憶の涙に溺るるを止めよう。愛憎の焰を踏

憧憬を捧げるのである。」 み越え踏み越え真剣に生きていった一人のひとの魂にかぎりなき

「墓畔の草」の編集者の一人、佐藤愛之助は「解説」の

略

病弱のゆえもあろう、若人のやるせない思いを山に忘れようとす病弱のゆえもあろう、若人のやるせない思いを山に忘れようとす高畑棟材。この青年は若い時胸を病み腺病質の文学青年であった。年を知ったことである。高尾山によく訪れ、泊まってゆく青年。このような静かな夏子の生活を粉々にくだいたのは、一人の青このような静かな夏子の生活を粉々にくだいたのは、一人の青

と記し、二人の結婚につい

しかし高畑家の返事はつめたかった。」母は棟材を伴って、結婚の許しを得ようとして高畑家を訪ねた。かった。ただ母のみ、夏子の悩みを感じ、棟材の頼みもあって、かった。ただ母のみ、夏子の悩みを感じ、棟材の頼みもあって、

であっ。 では、東京下谷の団子坂のほとりの小さな二階に生活の しかし二人は、東京下谷の団子坂のほとりの小さな二階に生活の しかし二人は、東京下谷の団子坂のほとりの小さな二階に生活の

戻り死去した。 戻り死去した。 大正九年(一九二○)六月十七日長女敦子が生れた。父棟材二十大正九年(一九二○)六月十七日長女敦子が生れた。父棟材二十

(一九二四) 六月二十二日高尾山の生家で没した。二十六歳三ヶ月三郎、母トシの十二人の子供のうち三女として出生し、大正十三年日東京府南多摩郡浅川村(現八王子市高尾町)高尾山に、父佐藤藤田東京府南多摩郡浅川村(現八王子市高尾町)高尾山に、父佐藤藤田東京府南多摩郡浅川村(一八九八)四月十八

と刻まれた墓碑がある。
を刻まれた墓碑がある。
俗名ナツ
行年二十七歳
高畑棟材建之大正十三年六月二十二日
俗名ナツ
行年二十七歳
高畑棟材建之た正十三年六月二十二日
俗名ナツ
行年二十七歳
高畑棟材建之たあった。

『墓畔の草』の「解説」は

雑誌に随筆など寄稿、孤独の生活をつづける。 二色鉱泉に病を養い、陣馬山の山頂小屋の小屋番などしながら、「その後棟材は高尾山にほど近い甲武相の山々の間にある栃谷の

ない。結核がすすみ淋しい生を終ったようである。」
「色鉱泉を去ったのち、棟材がどんな生活を送ったのかわから

少しくナツの身辺にふれてみる。それは残された日記である。こ記している。

された時、修養浅い身は、何となく居竦む様な感じがした、けれの内は、尊敬の念がみちて居た。あの気高い瞳からじっと見おろい、私の好きな色々なお話など何ふうち、何時しか私の小さい心ふ、私の好きな色々なお話など何ふうち、何時しか私の小さい心か、私の好きな色々なお話などがあり。と緊ったお口元からもれ給しゃる夜更くるも知らずあの意い高尚な趣味に富んでゐらっ立れた時、修養浅い身は、何となく居竦む様な感じがした、けれ

・大正八年五月十三日 曇天、寒き日なり、静かな山なり。ただ

執筆にあたっていた。

私は其の瞳が何よりも懐かしかった。

聞かるるものは、谷の流れの音のみ。

お忘れ下さいますな。山でどんなにか君慕ってゐる少女あるを…まらず、君戀しさに胸抱きて府向く山の少女、高畑様、高畑様、静かに針持ちてもの思へば、懐かし日の事ども思ひ出されてた

行かれた。罪の怖ろしさにむせび泣く。罪を母に詫びる。りと胸痛む。君よりの御文をそっと手に渡し、母は黙って向ふへ・大正九年一月十三日 母上上京、力なげの母の面ざしに、ぎく

―以下略―」

いる。 「墓畔の草」には挽歌として妙音庵主作家中里介山の歌がのって

今日はしも佐藤夏子の一周忌白百合に似て恨みある人

・去年の今日佐藤夏子は故郷の山にて死にぬ年二十七

・たらちねの手よりうはひて天上に移し植ゑたる白百合の花

大正十四年六月二十二日

三色鉱泉に居を定めていた事が知られている。 夏子と別れてのちの高畑は、山を漂々と歩き、一時期陣場山麓の最後の著書『山の子供達』の中にその片鱗を知ることができる。

高畑の文章の中に、夏子に関するものを見だすことはできないが、

の妙音谷草庵に中里介山が住んでいた。そこで小説『大菩薩峠』の余談になるが、この頃佐藤旅館の隣りにあった千年樫の大木の下

160

を左の如く解説している。 と記している。柞木田龍善の『中里介山伝』(註3) は、この序文 きれない夢のやうなローマンスも人間苦の観照もあった。」 随筆集『千年樫の下にて』(註2)におさめられた「序」に 高尾の山の千年樫の下は忘れない。ここにはどうしても現はし

どんなことも起きなかった、とはいえないはず、介山の日記の中 いる以上、そこは、はかることのできない男女の間である、いつ 「介山が ″夢のようなローマンス』 があったという言葉を残して 八夏子さんがきている。夏子さんの面影によく接したのははじ

/夜、夏ちゃん来り泣き話。/

めて、美しき人也。

とを知ることができる。 ような気がする。そしてほのかな愛が佐藤ナツにそそがれていたこ この事を考えると『墓畔の草』によせた介山の挽歌の意味がわかる と数年といわれるが、大正十三年、二十七歳で死亡している。」 ていたが、純粋な人で、恋愛と虚偽のなかに悩みの生活を送るこ この夏子さんは、三女、すでに銀行員で登山家のT氏と結婚し

ン社等に勤務。著者に『日本山岳遭難史』(三省堂)などがある 岡町出身。早大英文科卒、報知、読売新聞、 (註1) 春日俊吉 (一八九七~一九七五) 本名伊藤照雄。千葉県山武郡豊 博文館、ベースボールマガジ

里介山が住んでいて、小説『大菩薩峠』の執筆にあたっていた。随筆集『千 佐藤旅館のかたわらにあった千年樫の下の妙音谷草庵に一時期中

> 註3 年樫の下にて』は昭和三年(一九二八)二月隣人之友社刊 柞木田龍善著『中里介山伝』昭和四十七年 (一九七二)

奥高尾山岳会

行された。編集兼発行人は佐藤文男、発行所は東京府多摩郡浅川町 高尾山麓湯守ヶ谷であった。 (一九三五) 七月であった。そして会報『奥高尾』が七月十日に発 東京府下高尾山の麓に「奥高尾山岳会」が出来たのは、昭和十年

言ふ強身だけをふりかざして、勇敢に進んで行かうと思ふ。 第一号の「編集後記」で佐藤は 私たちは山に対しては全くの素人であるが、ただ土地ッ子だと 創刊号を先づ高畑棟材、松尾熊太、小川富五郎氏らの文章で飾

にお願ひしてをく。」 らせてもらったことは、喜びにたえない。今後共御支援の程を切

と記している。

云える。 ちの間に広がり始まり、学校山岳部や一般の山岳会とは別に、地元 の利を得た山岳会の発足をみたのが、「奥高尾山岳会」であったと 当時高畑棟材、河田植などの低山指向派の風潮がようやく青年た

に於ける研究発表にはめざましいものがあった。 秦野山岳会」「奥武蔵研究会」等々があって、それぞれのゲビート この様な地元の有志を中心に設立された山岳会に「奥多摩山岳会」 奥高尾』発刊にあたって、 低山趣味の提唱者の一人であった高

161

とのできないものであったと推測することも可能だ。あし、佐藤文男にとって、かつての義兄という関係も等閑に付すこるし、佐藤文男にとって、かつての義兄という関係も等閑に付すこるし、佐藤文男にとって、かつての義兄という関係も等閑に付すこるし、佐藤文男にとって、かつての義兄という関係も等閑に付すことも可能だ。

「回想の奥高尾」の文章の一部を引用してみる。

た最初の山々である。
た最初の山々である。
の思慕を培ひ育くんでくれた最初の山々である。
の思慕を培ひ育くんでくれた最初の山々である。

できない。

縦走したことがある。」
、大正四年頃の秋だったとおもふ。私はK・Tの両兄とともに、大正四年頃の秋だったとおもふ。私はK・Tの両兄とともに、

さらに「旅だより」に高畑の言葉がのっている。

「奥高尾山岳会の誕生を心から御祝ひ申し上ます。『山椒は小粒で「奥高尾山岳会の誕生を心から御祝ひ申し上ます。『山椒は小粒で「奥高尾山岳会の誕生を心から御祝ひ申し上ます。『山椒は小粒で「奥高尾山岳会の誕生を心から御祝ひ申し上ます。『山椒は小粒で「奥高尾山岳会の誕生を心から御祝ひ申し上ます。『山椒は小粒で「奥高尾山岳会の誕生を心から御祝ひ申し上ます。『山椒は小粒で

ではなかったかと思われる。『山麓通信』の「序に代へて」でんだ。高畑が陣場山麓栃谷に隠栖したのは昭和十年(一九三五)頃この頃高畑は東京馬込村を引きはらって栃谷の二色鉱泉に移り住

の高畑を迎えてくれる人、大木政次郎夫妻がいた事を忘れることはいる。その理由は高畑の放浪癖、又生活上のいきづまりたも記している。その理由は高畑の放浪癖、又生活上のいきづまりとも記している。その理由は高畑の放浪癖、又生活上のいきづまりとも記している。その理由は高畑の放浪癖、又生活上のいきづまりに利いるが、武相二國に跨る陣場山の麓、相模國津久井郡澤井村の「風に追はれる浮雲のやうに何処といふあてもなく都会を脱け出

「奥高尾」二号「旅だより」には 物語っている。会報に毎号のように投稿しているのを見てもわかる。 物語っている。会報に毎号のように投稿しているのを見てもわかる。 と推測できる。 奥高尾山岳会会員との交友がそのことを あったろうと推測できる。 奥高尾山岳会会員との交友がそのことを あったろうと推測できる。 奥高尾山岳会会員との交友がそのことを あったろうと推測できる。

「冠省、『奥高尾』創刊号正に入手御礼申上ます。豫想に違はぬ立「冠省、『奥高尾』創刊号正に入手御礼申上ます。豫想に違はぬ立「冠省、『奥高尾』創刊号正に入手御礼申上ます。豫想に違はぬ立二九・陣馬山麓にて 高畑棟材)」

いる。それは「奥高尾」第三号の中で会員島田辰己は「栃谷を憶」を発表して

無遠慮な振舞ひを午後二時すぎ迄たくましうしたのだった。其の高畑さんを訪ねてそして終に高畑さんのへだてない好遇に甘えて「栃谷の鉱泉宿に寄寓する私達の最もよき師であり指導者である

んたうに親しみある人であることも記憶にまざまざと残されてゐものではなかった。鉱泉宿の大木政次郎さんも老母も人好しのほ階にくつろひで高畑さんを中心に山や谿のこと、山の写真に就い路の底に織り込まれて忘れがたいものになってゐた。鉱泉宿の二裏の底に織り込まれて忘れがたいものになってゐた。鉱泉宿の二時の高畑さんや鉱泉宿の人々のこころよい待遇は、いつか私の脳時の高畑さんや鉱泉宿の人々のこころよい待遇は、いつか私の脳

その時の印象が前出の文章であった。 月下旬、高尾山―陣馬山―栃谷鉱泉に高畑楝材氏を訪問」とあり、「会員消息」の中に「東章、島田辰己、湯檜信吉、佐藤文男氏、八

る.....

私は、高畑の顔長なおでこの広い、いうなれば眉目秀麗なプロをる。編輯後記にも

「今度の山行は栃谷に高畑棟材氏を訪ね、一日ゆっくりするつも「今度の山行は栃谷に高畑棟材氏を訪ね、一日ゆっくりするつも

山岳会の会報にのっていた、大都会にある山岳会との相異について文男は「地方の山岳会」という巻頭言をのせている。これは奥多摩昭和十年(一九三五)十月二十日発行の『奥高尾』第四号で佐藤

べき筈だから、この特色を益々発揮することによって、こうした計である。地方山岳会には地方山岳会にのみ許された特色がある「―然しこれをもって直ちに地方山岳会の前途を悲観するのは早のなげきに対する地方山岳会の在り方を述べている。即ち

山岳会の精神的更生があり、将来の発展がある。とはわれわれ地方人が生れついてから馴れ親しんだ郷土の色をとはわれわれ地方人が生れついてから馴れ親しんだ郷土の色を地理的欠陥はおぎなはれて余りあるものと思う。

なものでなければならないのではなかろうか。」生活的な、土俗的な、そして個性的な、もっとわれわれに直接的生活的な、土俗的な、そして個性的な、もっとわれわれに直接い、とする、研究なり、紀行なり、随筆なりは余りに都会人の平面な

現代の山岳会は余りに中央集中的である。そして今の

を対

始める。 始める。 は『独立樹』『かやと』『霧の旅』等が多く、贈られてくる山岳会誌は『独立樹』『かやと』『霧の旅』等がと述べている。会員も地元浅川町のみならず東京市内各区の住人も

「深い秋雨のために、せっかく色づいた栃の葉が、さらさらと面をいかうにタッペ(霜)で凍てついた地へ落ちる頃になると、人々はまが下のやうに佗しく板屋打つ夜など、栃谷部落の人達と取り落葉が雨のやうに佗しく板屋打つ夜など、栃谷部落の人達と取りなます爐辺話ほど愉しいものはない。新鮮な木の実を差上げる心をまずが雨のために、せっかく色づいた栃の葉が、さらさらと面かどうか?」

だより」に投稿しているのが目だつ。荒井道太郎も短文をよせる。 ジュをも続々とお載せください。(一〇・二七夜・東京・『山小屋』 第五号には、高畑の薫陶を受けて高力幸太郎、佐々木隆などが「旅 歎的な紀行のみにとどめず、御地方に関する即物的なルポルター 致しました。地方会の貴重な資料として大切に保存致します。詠 『奥高尾』創刊号高畑君を通じて、二、三、四号直接に正に拝受 (楽部委員部報編輯係・荒井道太郎)」

下は発表なくのち『山麓通信』に掲載される。 この号に「爐辺閑話 栃の落葉 (二)」が連載されており、(三)

以

真から高畑のスケッチに変る。 は春日俊吉の「栃谷滞留雑記」 昭和十一年(一九三六)一月二十日発行、『奥高尾』六号の巻頭 」がのっている。この号より表紙は写

「奥高尾』七号には高畑の「小佛峠」が巻頭をかざる。

稱すと云々』と出てゐる。 大日佛の小像を安置し、小佛山宝珠寺と号せしより、地名を斯く を見ると、『小佛嶺と稱する濫觴は、 から相州小原宿まで上下約六粁。峠名の由来に就いて多摩郡村誌 小佛峠 (海抜五九〇米) は舊甲州街道の要路に当り、 往古僧行基此地に錫を止め、 武州小佛宿

城主北條陸奥守氏照を索制する為に、甲斐岩殿城主小山田左兵衛 系の岩石(小佛古生層)を以て名高く、史蹟上からは、永録十二 翻って、地質上から見ると、 武田信玄が小田原の北條氏康を攻める時、 第三紀古生層に属しいはゆる小佛 武州加住村の流山

> ねて、 時代に至り江戸西口の枢要地として関所 信茂を隊長、加藤丹後守を参謀となし、 小佛峠を越え駒木野を経て川原宿に討って出た事や、 (富士見関) が置かれた

兵二百、

卒九百の

事を以て名高い」。

をのせている。 信地方巡幸時、小仏峠ごえの事跡をこまごまと記している。 以下の続きとしては、明治十三年(一八八〇)六月の明治天皇の 「旅だより」には陣馬山から三国山、 軍刀利神社への山歩きの報告

ひき込む話術のうまさが発揮され、さぞ当人にとっても会員にとっ ても楽しかった一日であったことと推測できるものである。 も充分青年達の話しにうけ答えをし、 純朴な青年達にかこまれての高畑の得意気な姿が浮んでくる。 そして一月七日、 山の座談会が高畑を中心に開催された。 高畑の人なつっこさや、 村

尾崎喜八、田村榮等がおり、 ている。高力幸太郎も多くの質問に答えている一人であった。高力 の外には伊藤祷一、荒井道太郎、神谷量平、 もらっている。又知友に文学上や動植物等に関する疑問点を照会し 多くの山友達の世話になっており、山の本や原稿用紙などを送って 「奥高尾」八号の巻頭に高畑の「いたち」がのる。この頃高畑 朋文堂の新島章男も経済的な援助をお 田部重治、小宮良太郎、

しまなかった事がうかがわれる。 『奥高尾』 九号の「旅だより」に高畑は

の音(獨票六三二米)、オテフ塚、毘場 は方向転換して南郷の頭から小佛峠附近までを調べてゐます。 | 陣馬山から蠶山平までの山・地名調べが大體片付いたので今度 (明王峠附近)、長者屋敷

ソー 登人 そのほか、 全く履き違へた結果に他ならないのですが、誰が言出して大草履作って間口へぶら下げてゐます、これなどはオーソーリの語源を D のみに喰付いていたのではなかなか埒が開きません。また同じ佐 の変遷は殊に面白く例へば佐野川村の登里などは刀里 たからい 嬉しさ限りありません。 感興を覚えてその土地へ杖を曳くと多くの場合貴君のいふ『土臭 など作ったものか、とにかくヒュモラスな思付ではありませんか 味たっぷりで頗る面白い。 川村の鎌澤に傅はる、 生活的な、土俗的な、そして個性的な』素材にぶつかるので、 (中 リに在る唯一軒の農家(関本氏)では長さ一間位の大草履を 相も変わらず地名考証や研究に日時を費やしている高畑の Ш 世)となり遂に現在の登里となったのですから「登里 つか本誌上に発表したいと思います。山名 ムジナゲート、アカナヂ、ローグチなどといふ俚稱に 等の稱呼にはかなり面白い由来のあることが判りまし (三・五・陣場山麓にて 狼が死人に化けて現れたといふ民話はグ 面白いといへば和田の小字のオー 高畑棟材)」 (地名) (古代 稱呼

『奥高尾』第十一号に高畑の「山麓だより」が掲載された。

ほんのりと赤味を帯びた、素性のいい茅萱を山のやうに刈ってうなると炭俵を編む人達も俄かに忙しくなる。麥の種蒔きが終る頃から、到る處の山谷で炭焼きが始まる。か

くる。刈るのが面倒ならばそれを商売にしてゐる人から一駄(六くる。刈るのが面倒ならばそれを商売にしてゐる人から一駄のであるが、その工程は簾屋が簾を編む仕方と殆ど同じである。一枚の出来上り値段は纔か三銭か四銭に過ぎないが、手の速い者は一日平均二十枚、遅い者でも十枚は楽だといふから、農閑期では一日平均二十枚、遅い者でも十枚は楽だといふから、農閑期では一日平均二十枚、遅い者でも十枚は楽だといふから一駄(六と言へやう。

然し私は、頼る夫に死別れて乳呑児を親戚へ預け、数名の幼児を抱へて馴れぬ手に炭俵を編み乍ら、寒い春を細々と暮らしてゐるRといふ貧しい寡婦を見ると、すずろに胸を搏たれる。時たま、子などを買ってやるが義理堅いRさんはそれをよく憶えてゐて、いつか陣場の頂上で行逢った時午の辨當に持ってゐたオタラシを、固辭する私に惜気もなく呉れた。オタラシといふのは饂飩粉を水でかたく捏ねて、胡麻油を引いた鐵鍋で焼いたおいしい餅でを水でかたく捏ねて、胡麻油を引いた鐵鍋で焼いたおいしい餅である。

小夜泣きに泣く児はごくむ垂乳根の母

は

やつれて居たりけるかも

たばかることを言ふのみにして

高畑は文章の中で未亡人Rとその幼い娘子をえがいている。その時けてゐる、Rさんの淋しい後姿だと思っていただきたい。」幼い歌ではあるが、これが此の土地で最も不仕合せな暮しをつづ

る。 に死去した妻ナツ子のことと、その間に生まれた敦子の事と思われに死去した妻ナツ子のことと、その間に生まれた敦子の事と思われる。

滝キヨの子供として生長している。 昭和十一年 (一九三六)、敦子はすでに十七歳、ナツ子の長姉、

の医専に入学の為雑誌は第十二号から隔月発行になる。が京橋昭森社から発行された。『奥高尾』編輯者の佐藤文男は東京この年高畑棟材四十歳、初老を迎える。高畑の著作『山麓通信』

「奥高尾」第十三号の高畑の「旅だより」には

ぬ道志山(三等三角点六七五・四米)なのでした。より寧ろ石老の東南に突兀と聳え而も一般登山者から殆ど顧られ「荒井道太郎兄とともに石老山へ行ってきました。目的は石老山

チク刺すのには閉口しました。鬼アザミ、フクダンバラ、サルトリバラ等が鋭刺を逆立ててチク鬼アザミ、フクダンバラ、サルトリバラ等が鋭刺を逆立ててチク鬼にど簡単でなく、途中に樹叢に蔽はれた瘤起が三つ四つあるし、

れました。(明治節の朝、栃谷にて 高畑棟材)」野、南高尾、奥高尾、秩父方面の夕景は實に好印象をあたへて呉野、南高尾、奥高尾、秩父方面の夕景は實に好印象をあたへて呉

とあった。

五年(一九四〇)十月三日に発行された『山の子供達』の中に組入落の子供達に主題をとった小品で、少年勘太の物語である。昭和十ち「僕の百蟲譜(その一節)」である。これは栃谷の生活の間に村県高尾』第十四号の巻頭には久しぶりに高畑の文章がある。即

れられている。

文男の兄佐藤愛之助の「登山の歴史性―断章的に―」が掲載され、『奥高尾』第十五号、昭和十二年(一九三七)十二月発行、佐藤

編輯後記」に

ることができた。「いくたびかつまづきはしたけれど『奥高尾』も十五号をかさね

録や感想などをいただければ幸だとおもってゐる。(Y)」れてないこの地のスキーコンデションなどについて、経験者の記れてない。の地のスキーコンデションなどについて、経験者の記れてなり、「東高尾スキー特輯」とする考へである。いまだ紹介さ

はできなかった。と結んでいるが、私は『奥高尾』第十六号以後の小冊子を見ること

る。そして地方の小さな奥高尾山岳会の活動には目をみはるものが心とした、高畑棟材をめぐる若い登山者達の動きを知ることができいとした、高畑棟材をめぐる若い登山者達の動きを知ることができったした。から十二年(一九三七)の二年間、佐藤文男を中事情がその終刊にはたらいたものと推測することができるが、昭和これでこの小さな会報は終了したものと考えられる。いろいろのこれでこの小さな会報は終了したものと考えられる。いろいろの

あった。 あった。 あった。

私にとって望外の幸せであった。

もう一つの登山史 地 义 作りの Ш

佐 藤

代かれ

に入り、 当しました。このため、 の水の茗溪堂で『山 にたまたま神保町の本屋街の帰り道 書類に注意を払っていましたが、 間の大半を地 院に勤め、五十五年に退職しました。 岳会との縁が始まりました。 引き続き、 図作成に必要な資料集めを担 地理調查所、 日記』に出会い、 絶えず出版物、 四十二年 国土地理 この 日本 お茶 文

はじめに

私 は昭

和十七年に陸地測量部

これが私と山岳会とのご縁の最初で、

(二月二十五日の山岳史懇談会)

が

度 今

からしばらく毎年その点検を行ない を感じましたので、茗溪堂に連絡しました 東京大学史料 一覧表と山名一覧を見ると、 日記に収録されていた五万分の一 Ш 日記編集担当の皆川完 編纂所) を紹介され、 訂正の必要 氏氏 まし それ 地形 (当

U

目ということになります。 ことにもなりました。 三角点のない目ぼしい山の高さを測定する らの値が正しいのかという問題が生じ、 科年表や他の数表と値が違ってきて、 を読み取って改定しました。この 点が頂上にない山は等高線から山頂の高さ て、 違っていたことから、 られていた二万五千分の一 に この点検のさい、 山頂の高さを訂正するとともに、 最近になって、 山の高さが折から進め 新しい地形図によっ 国土地理院は山頂に 地形図の表示と 結果、 どち 三角 理 0

Ш

ることになりました。 めることに興味を持ち、 や汗ものなのですが、 それは余りにも拙く、 でした。それに加えて、私は理科系思考の 公の場に文章を発表するなどということは 章を掲載させて頂いたことです。 けられていた赤表紙の ため、文章を綴るのは苦手でもあったので、 全くありませんでしたので、初めての作文 今、読んでみても冷 このあと史料をまと 栞 現在まで続いてい K, 簡単な文

ている 五年に らその外郭団 わたり発表しました。 本国際地図学会の機関誌 試論」と名付けて同好者一名と共同で、 集に努め、 のが分り、 測量事業について、 当りました。そして、 りましたが、 国土地理院が創立百年を記念して、 地誌調査の項目を分担してその **【陸地測量部沿革誌】** 『測量・地図百年史』を作成したさ 五十二年から「 それからは余暇に関係資料の収 体である日本地図センターに 殆どふれられていない 途中、 大正十年に刊行され 地図 明治初期測量史 が明治初期の 国土地理院 に七 四十

きな転機でありました。

それは山日記に付

私にとって、

この山日記との

出会いは大

行なっています。 V 0 定年退職しました後も継続して、 た判任官や雇傭員に重点をおいた調査を 測量史とくに実際に底辺で作業を支えて 明治時代

ると、

た。

と言えます 今回 の懇談会での内容もこの調査の 環

登山の種類 レジャー登山などに分けられよう。 11 るが、その目的から信仰登山、 登山は早くから行なわれて 調査登山、

記録には登山の経路や周囲の状況には最小

0

限ふれられているが、

登山の方法、 レジャー

装備な 日の記録

登山

けられて比較的その様子が分っている。 修業のためになされていて、 一仰登山は特定の山をご神体として、 その数は少ない。 現在も続 礼

> との大きな違いと言えよう。 どは残されていない。

陸地測量部が明治十六年から始めた三角

検分に止まり、 作成にさいし、 境の山々に登ったと考えられるが、多くは 査登山は江戸時代に入って、 測量が充分になされた気配 国界を見きわめるために国 国絵図 0

るように、

登山経路と点の位置を示すのが

資料に「点の記」がある。これは表1にみ 測量作業で設置した三角点の場所を記した

主目的である。

しかも、

現在一般に公開し

はない。

そのことが国絵図のつながりを悪

くした。とくに、

銅などの鉱物採取のため、

高山地帯で顕著である。

位に整理されている。

作業単位毎に作成

式に書き直され、

五万分の一

地形図単

ているのは最新のデータを入れて、統一し

中世から山岳地帯の調査が行なわれている 材採取も一部の人達に限られ、 うである。 る。 なもので、 される点の記とは趣が変ってしまってい 最初の頃の一等三角測量のものは素朴 その 頃の名残りを止めているよ

か、

あまり記録に残されていない。

なかば世襲のように引きつがれたにすぎな

それはさておき、

表1は後にふれる天城

そして、三角点として使用する場所に目印 必要から、真先きに付近の最高点に登った。 石を埋め、その記録が残された。しかし、 とくに、三角測量では遠方まで見通す その作業の必然性から登山がなされ 本格的な測量が始められ だけである。 だ内務省地理局とあるだけである。この がある。他は天城山と同様に地理局の記 のもの八点、 辺の三角点では明治十三年に木村世徳選点 は明治十二年 Ш のもので、 選点作業即ち最初に登っ 十四年に三輪昌輔のもの一点 作業者の記録はなく、

明治初期の測量事情 いること故、 レジャー登山は皆さんが良く承知され 省略する。

明 仍治維

能新直

後

地

た。 ものであった。この三者はともに独自の計 省及び工部省(後に内務省に移る)による のもとに実行されたものは、 られたが、 図作成はいくつかの機関でばらばらに始め お雇外人を導入し、三者三様の方法で進め 画により、 その中で多少とも規則的な意図 互いの連絡はなく、 開拓使、 思い思い 軍

まとめたので、 による仏国式によった。その様子を表2に 部省は英人による英国式に、 即 ち、 開拓使は米人による米国式に、工 それによりながら話しを進 陸軍省は仏人

める。 開拓使 明 治 二年七月に設置された開

10

明治に入って、

168

たの

周

表1 国土地理院一等三角点点の記

一等三角点の記

17.1

	ばん じょう だけ 場万 図名 場万 図名 伊東
点 名	万城岳 横須賀 4三角測量原簿一次第9部
冠字選点番号	—— 第一号y 標識番号 <mark>標 石</mark> 第 —— 号
所 在 地	静岡県田方郡中伊豆町大字地蔵堂字万城岳 (278 杯班へ小班) 静岡県田方郡東伊豆町大字原良本 (338 杯班 い小班)地 目 山 林
听 有 者	林野亡(王内党林里大月相当区)
則標の種類	普通目標板付樹土高測標,mgs/里設法 地上(保護石 個)上部舗装・地干。
E A	明治 12年 5月 1日 遊点者 内務省地理局 :
造 標	平成 2年 8月 6日 造標者 图 稚 普 史 .
埋 標	明治 18年 6月 一日 埋標者 小 島 莊 平
觀 測	平成 2年 10月 17日 觀測者 圖椎 管史
自動車到達地	!点 天城高原 ゴルフ場 第二 駐車場
步 道 扶	
徒歩時間(距離	難) 約2時間(約2.5)
三角点周囲の状	
その	他 富士箱根伊亞国立公園 (特別保護地区)
	一次基準点測量: 至下方盤石 a.s.3m
要 図 2000	至八丁池

表 2 明治前半期三角測量概況

-	開拓使・北海道庁	1975.	軍 省	-	内務省		農商務省			
男3				7	(測量課)					
4		7. 参謀	局(間牒隊)設置	7. 8. 10.	大蔵省租税寮へ 工部省測量司設置 東京三角測量 英 マクビン					
5		4. 地誌	収集開始 準備 福田 半。	1000	英 マクビン ジョイネル ハーディ					
6	3. 三角測量開始 米 ワッソン, デイ	仏 ジョルダン ミュニエー ルボン								
7	勇払基線 荒井郁之助 福士成豊 奈佐 栄 関 大之 他	6. 参謀局測量課発足 長衛 議 福田 半 矢島守一 日和佐艮平 他		1.8.	内務省測量司 地理寮(量地課)	1 . 8 .	内務省地理(木石課 "(山林課)			
8	関 大之 他				Service for Control (Service)		(HITPINK)			
0	函館基線			1	(課員 148 人) 関八州大三角測量開	-				
9	11. 中止 (選点 1/3)	1. 東京周辺測量		1.	始					
10	明 9.5 日本蝦夷地質要 略之図 出版 ライマン	12. 参謀本部測量課 小管智淵 1. 2 万迅速図開始 1. 2 万迅速図開始 1. 2 万地測量班		8.	地理局(量地課) (課員40人余り) "(測量課) 大川通久 館 深彦 阿曽沼次郎	1. 内務省地理局 (山林課)				
11				1. 8.	全国三角測量と改称 那須西原基線 関東地方選点・観測)	5. 内務省地理局 (地質課) (独 ナウマン)				
12				(中部地方東部選点		3. 内務省勧農局				
13						3. 內勢有韌膜局 (地質課)				
14					・観測) /関東周辺観測 近畿東部選点 中部西部 "	4. 農商務省設置 (農務局地智家) 阿曾野鄉成久 以 大川川勝記 神足勝記				
15	2. 開拓使廃止 札幌, 函館, 根室, 3 県設置				(関東地方観測)	2.	地質調査所設置 独 シュット			
16				7.	三方原基線					
17		7. 内務省三角測量事業 移管 9. 参謀本部 測量局設置		7.	7. 陸軍省へ 関 大之 館 潔彦		20 万地質図出版開始 (大正 5 年完成) 関野修蔵 神足勝記			
18		等		三輪昌輔 木村世徳 二見鏡三郎 他		神足勝記 大川通久 阿曽沼次郎 f				
19	1. 北海道庁設置 福士成豊 他	角	T							
20	5 万	武丹阿波西林基線								
21	分 1 地形	5. 陸地測量部設置 天神野基線								
22	地形図作成		久留米基線							
23	成		摂			6.	地質調查所設置			
24	11/1 28	1								

もう一つの登山史

した。 選点、 れた。それは全道の三分の一の区域に相 後半に実施する迄、 われなかった。 六一九年の間に、三角点の このほか、 その標柱設置ケ所の大半を表るにあ 造標は日本海側四十一ケ所に行なわ 九年五月にライマンが作成 本格的な三角測量は行 #

郁之助(後に気象台長)が世話人格となっ 購入して、六年三月から開始された。 角測量を始めるため、 形、港湾、 はムレイ・デイを呼んだ。 イムズ・ワッソンを、さらに、六年六月に ンは本国より各種事業に必要な技術者を集 ラシ・ケプロンを顧問に招聘した。ケプロ 人助手として、五稜郭の幹部であった荒井 めたが、測量責任者として、五年二月にジェ そして、四年八月から始められていた地 使は黒田清隆が主宰し、米国農務局長 鉱山等の調査事業に加えて、 米国から測量器具を H

表 3 開拓使三角測量標柱設置状況一覧

調所出身の福士成豊が参加した。 之、溝口善補ら、及び通訳として函館諸 て、静岡藩沼津兵学校出身の奈佐栄、

作業は九年十一月に財政緊縮のため中止

され、この後、

陸地測量部が明治三十年代

(開拓使事業報告第1編より)

本

K	档	3	地 名	標準高度	北		緯	東		経
渡島	10.	H	兩館	1,093 尺	41°	45'	30"	140°	44'	00'
ex my	茅	部	汐首(恵山)	800	41	43	10	140	59	30
	ffs.	H	横津 (鞍状山)	3,500	41	55	30	140	47	00
	E	磯	鳥ヶ岳	2,000	41	46	25	140	30	15
	福	島	白神	1,100	41	24	15	140	13	50
	津軽外	1000000	千軒岳	3,400	41	34	15	140	13	00
	茅	部	獨川岳	2,700	42	03	10	140	29	00
胆振	ılı	越	遊楽府	4,100	42	11	45	140	06	00
45.34			流笏岳	1,050	42	24	30	140	15	20
後志	岩	内	雷電岳	3,250	42	53	30	140	29	50
EX.C.	1.1		ヤツナイ岳	2,800	43	05	00	140	39	00
胆振	虻	H	昆保岳	3,300	42	43	00	140	40	00
12.14	室	闡	室蘭(トッカリモイ)	550	42	19	20	140	58	20
	幌	別	オフレベツ岳	3,360	42	34	30	141	05	25
	É	老	白老	3,300	42	38	30	141	10	30
	Ŧ	歳	漁山	3,400	42	49	30	141	14	30
	虻	H	ムイネ岳	3,450	42	56	00	141	03	25
	手	该	紋別岳	2,600	42	47	30	141	24	00
石狩	札	幌	札幌 (本庁)	_	43	03	54	141	22	05
	, ,		手稲岳	2,950	43	04	25	141	11	45
	Ti	狩	阿曽岩岳	1,250	43	13	20	140	59	00
	空	知	郁春別岳	450	43	12	00	141	47	00
	派	益	チャラシナイ岳	1,570	43	28	50	141	26	00
天塩	増	毛	雄冬山	3,290	43	44	40	141	24	00
	留	萌	ボロソノホリ	1,730	43	56	00	141	42	00
	天	塩	ピイシリ岳	-	44	13	30	141	59	45
	2.5	100	ショサンベツ岳		44	32	00	141	46	00
			弁慶内岳	1,630	44	44	00	142	05	10
			幌尻岳	460	44	54	25	141	42	25
北見	宗	谷	宗谷岳		45	02	25	142	06	00
	565		纍乱岳	510	45	21	50	141	39	00

部まで調査されているので、 した 日本蝦 夷地質要略之図 ライ には ーマンは 内 全 陸

道を踏 一岳に登っていると思われる。 査したと判断される。この 時 には主

拓使は十五年二

一月に廃止されて、

、札幌、

ので、 した。 分の 道内の山地は殆どすべて登っていると判断 集められ、 一県に分散されていた測量技術者も道庁に 月には統合されて北海道庁が置かれた。 この地図は骨格がしっかりしている 地形図作りを始め、 簡易三角測量を行なったと思われ、 根室の三県に分割されたが、 福士が長となって、 二十八年に完成 道内の五万 十九年

在住の外国人から英語などを身につけ を主宰する武田成章について、 船大工の家に生まれ、 拓使の作業に終始従事 海洋 知識によって通訳として参加した 操船術、 船位測定法等を、 開港後、 した福士は函 船 諸 記技術の 師術調所 また、 館

それらの

気象観測を手伝いながら測量器具の取

溝口は三 たものである。 一角測量 め の当時の在籍者には工部省測量

司から

上記の荒井

量の責任者に マスターし、

なっつ デイ、

荒井の跡をつ

が は 中 士 - 止されると内務省に移り、 一年に陸軍省に移っ また、 奈佐

0

全国の 省に地理司が新設され、 工部省・内務省 測量を実施することとされ 明 治 測量掛がおか 三年 七 たが、 月 民 部

Ш

重豊らがいた。

れ、 れたが、 マクビンを長とし、 止されて、 民部省は廃止された。 術者の養成に着手したばかりの四年七月に 測量司となった。そして、 直後の八月に工部省工学寮に移さ 大蔵省租税寮に縮少して吸 H・B・ジョイネル、 同時に、 英人C・A・ 地理司も廃 収さ

八州大三角測量」と称する一等三角測量を い、九年一 京 技術者の養成を行ないながら、 J・T・ハーディら九人を雇傭して、 都、 一等三角測量を開始した。この後、 浜、 月から関東地方を対象とする「関 新潟等の三角測量を順次行な 東京市 大阪、 内の 測量

反抗 h 危惧を抱いていて、 始めた。 を 関東地方から始めたのは戊辰戦争のさい その要求によるものであっ した東北諸県の動向に、 行なうのに 入用 東京防衛に使う地図作 な基準点を欲 陸軍省がまだ L たたた

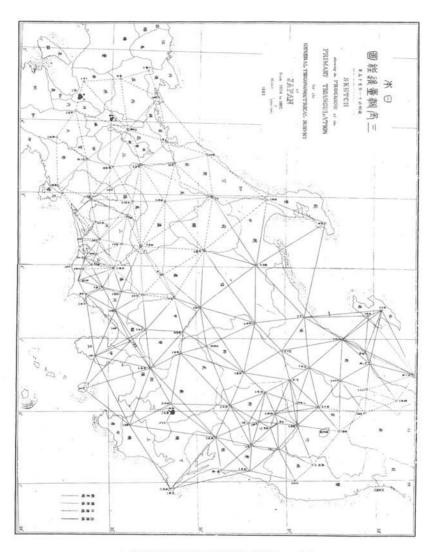
> 世徳、 蔵ら、 梨羽 (量地課) 入局者大川 内務省土木寮からの森本義 真田義啓ら、 時 起、 阿曽沼 七年九月設置の地理 次郎、 通久、 館 三輪昌 潔彦、 俱 関野 木

なかったため、 が順次帰国した後に、 具を購入して、技術を習得したので、 器械を独占して、 業には当初英人が自分 H 日本人技術者には使わ 本人側では独自に測量器 支障なく作業を続 達で持ってきた

ることができた。

が、 なっ 挙げた人達に限られた。 拓使をやめた荒井郁之助、 縮少され 地課は最盛期の八年末に百 業を取り止 なったので、 た。この四十人余りの人員で気象観測も しかし、十年一月 四十人余りに削減され、 た。 め 八月に改称した測量 測量の要員はほぼ前に名前 角 の行政 測量に専念することに 従って、 関大之が入局 74 整理により、 事業も大幅に 十八 課には 人の課 作の作 開 量

るとともに、 十一年一月 関 東 地方 那須西原基線の測量 から 15 全国 西 方に 三角測量」 作 業区域を拡大す と改



の選点、 月には三方原基 観測を進めた。 一線の測量を実施した。 さらに、 年

t

予算等の面 の移管が行なわれた。この頃では従事人員、 いた参謀本部測量課の三角測量事業との統 移管申入れがあり、 が望ましいということになり、 年七月に入って、 軍側と大きな格差が生じ + 五年以降始められて 陸軍省から事業の

られ、 よる藩兵の整理、 担当するとされたが、 局が新設され、 部が行なう作業に使用されたものが多 範囲であった。本州の中央部では主要な山 域は東北地方南部から近畿地方東部に及ぶ した状況は図1 明治九年一月から十七年七月までに 陸軍省 一月に陸海軍分立 それらの業務は地方の状況探査に止 一角点に選ばれていて、 段落した翌年三月に、 明治四年七月、 地図政誌、 のとおりであって、 鎮台編入の業務に手をと 折からの廃藩置県に 参謀局はようやく全 間課通 後に陸地測量 兵部省に参謀 陸軍省 報などを 作業地 Vi 実施 Fi

> ため、 木村信卿が五年十月に築造局から入局し 事 その責任者として参謀局に入った。し した福田半を呼んで、 仙台藩出身で大学 たらしく、 業の内容について局長の山県有朋と衝突 同年十二月、木村は測量事業を始める 和算家で淀川改修工事の測量を担当 すぐに辞めてしまい、 (後に文部省) その準備を始めさせ かわっ 出身の しかし、

平 父、 が出来るのを待った。 間もなく始まっ そして、洋式測量の技術習修を進めながら、 る長嶺譲が長となり、 浅田世良、 福田理軒の弟子の矢島守一、 桑野庫三らが集められた。 た内務省の三角測量の成果 福田 のほか、 日和佐艮 福田 0

部

クリー び、 謀 士官学校での測量教授に、 年 C・ジョルダン、 Ħ. 中佐A・マル 方、兵学寮では五年六月に始 月にミュニエ 士官候補生に測量を教えさせた。 は六年十二 クリーを長に、 一月に帰国し、 ー参謀中佐が来日して、 I・ビエイヤールらを呼 フランスから参 かわりに七 工兵大尉 80 られた マル

から兵学寮大教授に移っていた塚本明毅が

教

師首長となる。

そして、

測量技術を教え

模原基線を設置し、

それより西方へと測

地誌収集を開始し、

静岡藩沼津兵学校

三十七人が十三年一月 られた士官学校第一~三期卒業生 の作成に従事することになる 地形図 (後に迅 速二万と呼ば から始まる二万分の n るも のうち

0)

測

翌年 意向にそって、 役で地形図の不備を痛感した山 十二月に参謀局改組) 佐小菅智淵 手将校とともに学んだ士官学校教官工兵 応急的作成を費用の上からも望んだ。 量を伴った本格的な地形図作成では 業を待っていたが、 測量 長 一月から地形図作成にのり出した。 が十二年十一月に参謀本部 一課では前述のように内務省 (五稜郭参加者、 仏人教師から測量技術を若 + 測量課長に就任 年三月 後に陸地測量 からの 県は三角 (十一年 なく、 四 南 測

測量課が新設され、

大村益次郎の弟子であ

た。

七年六月、

参謀局

の組織拡充のさい、

設け に三角測量を手がける大地測量班が課内に の基礎的な欠陥をなくすため、 した十九年で打切りとなった。 差が次第に集積され、 欠いているため、 られ、 かし、 、測量を行なうことにした。 この作業は本格的な三角測量を 地理局 東京から離れるにつれ誤 0 等三 ほぼ関東平 一角点を使っ この 十五年二月 野が終了

なり、 を流れ作業に効率化するため、 年七月に陸軍省 朝した工兵大尉 量事業は統合され、 となった。 内を三角測量課、 図 わり、 体制とし、 課 予算とともに参謀本部 Ш 三軍側 県の内務大臣就任 班を編制 測量課をまとめて、 本格的な三角測量事業に取 九月、 は内務省に事業の合併を申 地理局事業と重複 田 への移管が決まり、 田坂虎之助が十六年 坂は三 替えした大地測量 参謀本部では測量事業 地形測量課 地 理局 角 八測量 もあって、 0 測量担当者は に移され 測量局とし、 独立してい 課 することに 地図課 の課長、 部 二月に 一角測 た。 Æ 11 0

ように、 木村世徳らが中心となって、表2に示した この後、 補点があるの 況は図2のとおりで、 中部 関大之、 等三角測量 本州中央部 地方から西方に向けて事業が で数が多くなっ 治七年に内務省が発足 館 これには本点の 潔彦、 0 は地理局移籍 等三 ている。 角 点設 組 1.E 置 0

> が 地質、 た時、 まだ人員、 地質調査に専任することになった。し H 課と改称され、 独立し、 十二年に入って、ドイツ人技師 林課となった後、 鉱物等を対象にしたが、 理 和田維四郎が課長心得となって、 予算ともに不十分であっ 寮内に さらに、 木石課 翌十一年五 十年一 かい 置 か れ、 月に すぐに山 月、 ナウマン 地質課 地 か 林

月にドイツ留学か

5

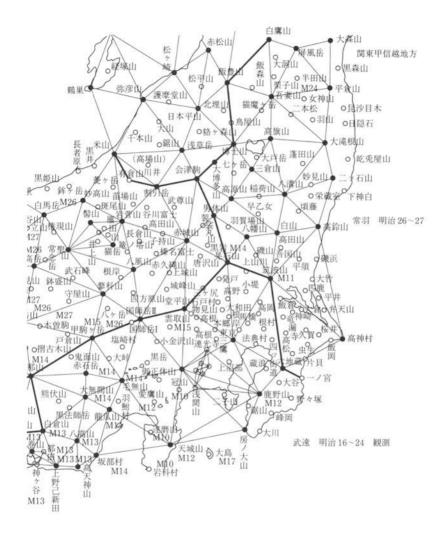
作り、 さは水銀晴雨計で、 b 作 5 経緯度値を決めた。 野 は 画で二十万分の一地質図の全図整備が認め から 修蔵が移り、 九 成を地質調査と併行して進めることにな 地形図は当然なかったので、 傭聘され、その意見書により、 作業は平板測量により 測量課から大川通久、 人員、 それから二十万分の一 予算が拡充された。 地質課の神足 位 置は 天体観 五万分の 阿曾沼次郎 に縮 勝記に加 自 この 目前で地 測により 80 十二年計 た 図を 時に わ 盐 関 0 义

移され、 にさいし、 は 十三年三月 農務局地質課となり、 き地形測量を担当した。 さらに、 地質課 殿農局 + 四年 は は 同 地 省に移 四 理 月 局 から 記 され 農商 0) 四 勧 務省設 農局に 人は 31 質

の別、二十万分の一地質別の再なまた、十八年十二月に地質局、二十三年六月地質課はこの後、十五年二月に地質調査

る。 たが、 その間に順次観 業である。 係を測定して、 図と比較されて、 であったため、 から同縮尺の輯製二十万図が発売され 拘わらず広く利用され の実測図で、 の五万分の一 大正五年に完了した。 けられていて、 隔にまで縮める。 に観測点を設け、 等三 図葉の出版を皮切りに、 の間、 作業としては始めにほぼ 一角測量 こちらの 測量で、 二十万分の一地質図の作成は その為、 二十万分の一という縮 地形図が整備される迄 十七年 特に山 測 地球上の位置を確定する作 方は各種資料による編 良し悪しを問われてい 始めの大枠でする作 点を補い、 大枠を定める。 角 角測量は地点 この た。当 点 心密な観 岳地帯は悪く、 伊 0 豆 順次刊行され 間隔は六十 図 兰横 時 ほ 測が必要とな は陸地測量 13 陸 浜 四サーバ 地測 次い 相 互 7 から 質 図 部 部

この

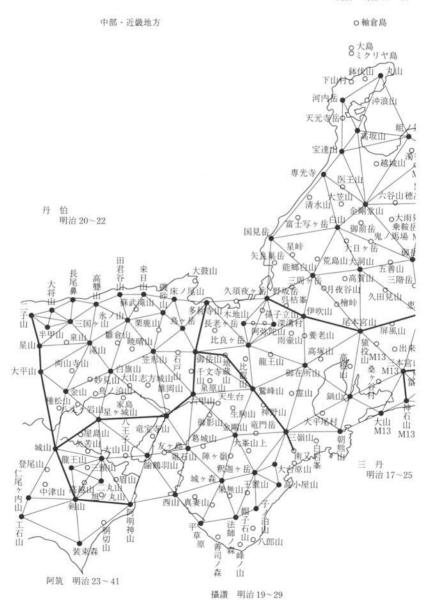


- 一等三角本点
- 一等三角補点及 増大点 M10 選点年(M=明治)

図 2 陸地測量部一等三角点設置状況図

(日本山岳会会員 水野公男作成から)

美信 明治 28~31



とながら周辺の見通しが良くなけれ は三点の三角点が作る三角形が正 点との ば近い程精度が上る。 間 0 角観測を行なう。 また当 三角形に ればなら 測 量 7

ない。 据付、 る。 後続作業の器材、 に条件に合っているか確かめる必要があ あたりの山を登ったり下りたりして、 士山や槍ヶ岳はその第一候補となろうが、 見晴しの良いことのみから見れば、 このため、 観測時の滞在等を考慮すると外さざ 食糧の 三角点の位置を探すには 運搬、 観測器械の 実際 富

距離が少し短く、 には櫓を建てれば済むからである。 東地方周辺から近畿地方迄選点が進められ さほどの苦心は無かった。 務省地理局では前述の 始めの 関八州時代は一 また平地が多くあっ 义 一等三角並みで 1 低地の ように関 場合 たの

るを得なくなる。

央アルプスでも木曽駒ヶ岳だけ、 を伴なう。 ?には白山だけであった。これは登山の難 プスでは乗鞍山の一点だけであるし、 部地方の高山地帯に入ると大変な労力 田田 動 そのため、 ヶ岳、 赤 点の数は減り、 石山 の二点、 南アル この 北ア 中 II プ

> 近畿ではずっと点数が多くなっている。 ては次項でふれる。これに反し、 易が大きく影響してい る このことに 東海、 0 Vi 東

参謀本部測量課が三角測量を始めた十六

地理局では近畿地方まで事業を拡

年には

げ、 三方原基線ごと取り込む結果ともなっ から、この地区では地理局設置の三角点を を始めた直後に地理局事業を合併したこと 0 ため、武蔵から遠江までの「武遠三角網 三方原基線の測量も終了してい た。 た。

観測数値も同様であると思うが、

未確認で

作業の状況 移 た。これは選点に従事した作業者が地理 6 ある。十七年から始まる「三丹三角網」に 籍組であってみれば当然と言えよう。 地 理 局選点の三 等三角測量作業の実際に 角点が相当数包含され 局

入り、 5 移 東京大学を明治十二年に卒業して地理局に 演したものである。二見は安政 十六年に、 ついて、今まで紹介されてい h 一点を次にとり上げ つは内務省地理局に所属してい 陸地測量部発足後も班長心得として 一角測 二見鏡三郎が東京地学協会で講 量に従事、 七年に るもの 三年生まれ 陸 の中か 圧軍省に た明

> 常歩行 = フ甲州 引続き測 テ纔二絶頂二達セリ是二於テ始 程凡ソ五、 セリ土民ノ言ニ日 夏…… さらに、三十年京都帝国 大阪鉄道技師長を経て、二十八年三高教授 クコト三里 日ノ食ヲ蓄ヘ十六名ノ人夫ヲ傭 ケントシ甲 演の中で、選点について「明治十二年 四里ニシテ日 ノ能ク進ムヘキニ非ス行 屈指ノ山 課員某甲遠国界二一 量を担当したが、二十 六里 未タ山 州 奈良田村ヨリ白根 ナナル 岳恰モ絶壁ヲ攀ル 頂二達 ク該村ヨリ白根 ハヒニ没 ヘシト・・・・・ 大学教授になっ セス三日 ノ三角測点ヲ設 セリ翌日又行 クコ テ里程 因 Ш ヘリ名 年に辞 カ如 テ四 Ш ノ晩二及 1 頂 ク尋 僅 テ発 迄 里

ハ測 ス雪ヲ踏ミ野ニ宿シ辛酸亦極マレリト該点 奈良田 里以上ナリシヲ知レリ帰途……二日ニシテ Ш は高山であっ 失敗の例を挙げ 角 ノ成リ難 村ニ至レリ ても後続作業を考慮して ルキヲ以 其 ている。 間固ヨリー テ遂ニ之ヲ廃セリ 確かに、 小 村落

二五千尺二過キス……時恰モ冱寒ノ期ニ近 余天城 観測に ノ測 つい 角 従 7 事 明 セリ 治十三年十二月 其 Ш 直立

中

8

た訳である。

もう一つの登山史

表 4 主要高山測量一覧(寺田寅彦「地図を眺めて」から

山脈又	t1	岳	名			Ξ			角		點		測量	上年度	涧	量	掛	標高
				等級	Et.		名	<u>1</u>	听	在		地	62.45					m.
富士		+	Щ	II	寓	士	Щ	静岡,	富士、ナ	官町		土山頂ケ 光	類點 發標 觀期	大正15	Щ	名	八菽	3776.2
	白	北	榝	m	白	极	岳	山梨	,中互摩	,遊安	H, 1	资倉	鐵點 遊標 觀測	明治37	古	村	武雄	3192.3
赤石	根	問ノ	嶽	ш	相	,	岳	"	"	,		//	類點 造標 觀測	明治37	吉	村:	武雄	3189.2
	山	及品	嶽	11	盛沙	鳥	计	"	南互摩	西山西,	村,	奈良田	撰 遊 遊 類 類	1	Щ	本米	三郎	3025.9
飛 駒	植	ケ	嶽	II	翰	4	岳	長野	,南安曼	,安曇	村,	鎗ヶ岳	提點 造機 觀期	調治35	直中		武岩	3179.5
赤石	恶	深 (東	級	獨立標高			-	(III				河原所在						3146.
<i>or</i> 41	赤	石	嶽	I	赤	石ケ	岳	"	下伊那	,大鹿	村,	大河原	高	期治14 // 24 // 24	375	省地 井	現局監	3120.0
	ES	唐澤	数	III	奥	毱	高	"	南安县	,安曼	村,	上高地	安 造 被 数 周	開治39		100	郎治	3103.0
飛り	1 "	前穗?	高嶽	I	穗	高	岳	"	V	v		u	数點 造標 觀測	明治26 " 28 " 29	部	井輪	金 三 经	3090.2
飛り 弱 (日本アンルプス)) P	南	級	III	北	穗	高	,	,	,		,	遊標 遊標 数期	期治39	阿	部	郡治	3032.6
	100	西穗?	高级	ııı	前	蘊	高	"	,	,		,	一個型型	,	Ħ	部	郡治	2908.5
赤石	完	Щ	嶽	III	党	Щ	岳	"	下伊那	,大鹿	村,:	大河原	養點 造標 觀察	期治37	白	井	由清	3083,2
飛り 野 (日本ア)	P		微	I	御	岳	Щ	"	西筑摩	,三岳	村,	県澤	資源	期治26 " 28 " 29	館古三	田輪	改發日益作前	3063.4
赤石	휓	見	榝	11	鹽	見	Щ	"	上伊那	,伊那	里村	t, iff	遊覧 使機 報題	明治35	家	中戊	之助	3046.8
	仙	文 ケ	級)	11	前		岳	"	,	,		,	提	期治35	щ		三郎	3032.7
飛り	乘	缺	微	1	乘	较	岳		南安曼	,安曇	村,;	大野川	遊職 遠機 概得	明治27 " 28 " 32	館古古	田寒	2 盛牧	3026.2
赤 石	至		嶽	獨立 標高	-				安倍, 対 湿ノ岳									3011.
	劍		嶽	IV	鮙		岳	富山	中新川	, 立山	Ħ,	芦峅守	撰點 造機 數期	期份40	柴	畸芳	太郎	2998.
飛 厚 (サネア)	立		Щ	I	立		Щ	"	,	-		,	鋼點 安排	期治27 " 27 " 33	館古古	m	建作服	2991.9
	7k	(原	四(品	III	水	nin m	Щ	"	上新川	大山	Ħ,	有峰	類點 克茨 製力	明治19			巨大郎	2977.7
赤 石	斟	4	嶽	1	the P	削ケ	岳	山梨,	北互摩	駒城	Ħ, ŧ	黃手	(数数 (対 の) (数 数	期計14 / 24 / 24	内部	井	超級 至 守	2965.5
木曾	駒	ታ	嶽	I	a I	向ケ	岳	長野,	西筑摩	上松	NT, /	I-JII	数點 遊標 製器	明治27 " 27 " 32	超古港	B 2	Z 整作友	2956.2
	白	馬	嶽	I	白	馬	岳	,	北安曼	北城	Ħ, I	白馬山	養脂	期法26 " 27 " 30	古	d		2933.1
	藥	節ヶ	嶽	II	藥部	重ケ	岳	富山,	上新川,	大山	Ħ, 7	扩 棒	調點 這機 觀測	助治37	直	井木孫	武郎	2926.0
飛 原(日本ア)	野	口五郎	嶽	II	五	鄉	岳	長野,	北安量	平村,	野口	1	裁劃	期治35 "	直鈴	井木孫	武太郎	2924 3
	数	翻	嶽	ш	中		俣	富山,	上新川	大山	Ħ, a	育峰	校 流 数 概	期治39	佐石	木	三大郎	2924 1
	大	天 井	嶽	III	天	章	Щ	長野,	南安曼	有明	H, 1	中房	野楽	助治39	柴	Щ.	龙熊	2922.1
	鎗	4	岳	ш	鎗	4	岳	y	北安曼	北城	Ħ, ī	山	資源	期合(0	吉	野	半平	2903.1

表4 (前頁のつづき)

山脈又火山常	Ш	岳名		프	角 點	測量年度	测量掛	旗高
火川沿			等級	點名	所 在 地	概點 明治26	似 双 张	m.
	Д	赤 嶽	I	赤岳	長野, 南佐久, 南牧村, 海尻	養點 期於26 造課 " 28 觀測 " 32	館 程 登 田中万太郎 田 文 友	2899.17
富士	4	横 微	獨立 標高	-	// // // // // // // // // // // // //			2830.
	嶽	阿彌陀嶽	獨立標高	_	// // // // // // // // // // // // //			2807.
	笠	ケ級(腐ヶ駅)	II	笠ヶ岳	岐阜, 吉城, 上寶村, 神坂	頭點 明治35 造標 觀期 "	直 井 武 鈴木孫太郎	2897.48
飛 驒 (日本ア)	鹿	島 鎗 岳	II	跑 島 入	長野, 北安曇, 平村, 鹿島	類點 造機 製刷 製刷	古田盛作	2889.71
(A-7X/	立	山岡山	獨立概高	-	富山,中新川,立山村, 芦峅寺所 在(III) 別山ノ東南約千二百米			2885.
赤石	蝠	幅 岳	III	中 侯	静岡,安倍,井川村,田代	類花 遺標 製物 製物	臼井由清	2864.69
飛 原(日本ア)	赤	牛 岳	III	赤手岳	富山,上新川,大山村,有峰	類點 造被 数額 数額	佐々木戸次郎	2864.23
木 曾	前	駒ヶ嶽	II	駒ヶ岳	長野, 西領摩, 大桑村, 須原	類點 造標 觀測 觀測	勢 菜三	2864.23
飛頭	雙	六	II	中侵岳	岐阜, 吉城, 上資村, 金木戶	鐵路 明治35 臺灣 明治35	直 井 武 鈴木孫太郎	2860.29
(日本ア)	Ξ	ッ級	III	三ッ岳	長野, 北安曇, 平村, 野口	類點 造機 製網 製網	佐々木戸次郎	2844.59
木曾	南	駒ケ嶽	獨立標高		" 西筑摩,大桑村,須原所在 (III) 越百ノ北東約二千五百米			2842.
飛 輝 (日本ア)	Ξ	快速率级 (實際級)	ш	三ッス	富山,上新川,大山村,有峰	撰點 造機 觀測 觀測	佐々木戸次郎	2841.2
赤石	鳳	風 山(製書を数)	II	觀音岳	山梨,北互摩,清哲村,青木	類點 造機 製器 製器	山本米三郎	2840.92
	黑	部五郎殺(中ノ保証)	III	黒 部	富山,上新川,大山村,有峰	類點 造機 製荷	佐々木戸次郎	2839.58
派 厚	惠	比须数	獨立探高	-	岐阜、大野、丹生川村、岩井谷所 在 (III) 岩井ノ東北約九百米			2823.
(日本ア)	針	ノ木岳	III	野口	長野, 南安曇, 平村, 野口	類點}明治40 類例 "	柴崎芳太郎 脊 木 一 郎	2820.60
	組	父 岳	III	粗父岳	富山,中新川,立山村,芦峅寺	類點 造線 製剤 製剤	青木一郎	2669.82
赤石	大	澤 岳	III	大泽岳	長野,下伊那,上村,北又真	類點 造標 觀標 期益38	岡本義雄	2819.36
飛驒	拔	戶 敬	III	真笠ヶ岳	岐阜, 吉城, 上資村, 神坂	資訊 造機 製品 製品	阿部郡治	2812.80
(日本ア)	東	天 井 嶽	獨立	_	長野, 南安曇, 西穂高村, 牧所在 (III) 赤橡ノ北西約千六百米			2811.
	上	河內岳	11	上河內岳	静岡,安倍,井川村,田代	遊沫 遊沫 製酒	古田客重好	2802.93
赤 石	小	河內岳	II	小河內	長野,下伊那,大良村,大河原	提點 造機 觀測	家中虎之助	2801.50

昭和七年五月調



図3 明神岳下山の図 館 潔彦画 (添え書きに「八月一日導者上條嘉門次ヲ随へ雨中明神岳ヲ下ル」とある)

表 5 一等三角点穂高岳点の記

一等三角点の記

ふりが	な	Œ	だか	だけ・	1/:	20万	図名	1/	5万图	图名	上	高	地
ά.	名		高	岳	高	T N	ш	三角	測量原	頁簿一	次第	92	部
过字番	号	館	第 7 -	号	標言	战 番	号	標	石 3	育			号
	0.00	長野県南3	安曇郡安徽	量村大字	上高地等	Z横尾	引上堀	迠49	69番±	世(上	高地	国有	林
听 在	地	108 林氏	班口小班,	109林班	口小班,	112株	班口小	班)~	地	目	Ш		林
			(長野?				/	-					-
所 有	者											1112	\exists
則標の種	類	普通測標	-机板高	1.82m	埋;	设 法		地上	(保証	雙石一	個)	-	
選	点	明治20	6年 8	月 1日	選	太 者		館	25	累	彦	~	
造	標	昭和65	2年 8)	月27日	造	製 者		林			保	1	
埋	標	明治28	8年10	月11日	埋札	票 者		高	井	腔	Ξ	1	
観	測	昭和6:	2年 8	月30日	観	1 者		林			保	1	
自動車至	月達	地点上沿	高地・河流	童橋 /									
歩 道	状	況 登1	山道(幅0).8m) あ	ŋ -								
徒歩時間	(距	離) 48	時間30分	分(約6	.5km) -	8							
三角点周	囲の	状況 岩口	Ц -										
7 0)	他中部	8山岳国	立公園特	別保護地	也域内	1	現況	地目	原	野		
要,	Į į	8 1 15 20	基準点測 :	阿拉瑟		F	奥稳昌	h Æ		/_			-
-	7		根高岳	BROS BROS	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	á	1	1) () ·)		
			27.00					13.7 A	47	- AREA		`	
127	100	Jac Carrier	922638	1/20	i / -	7 .	11	アルン	1.1	1.			- 1

シテ払 頻リニ 往々七、 テ晴ル」と災害に遭遇した様にもふれてい 測中の苦労を述 十二月二十八日 ナルヲ以テ益ヾ奮励シテ測角ニ従事シ遂ニ 過キ奈何トモスル能 二纏ヒ桜花 尽ク氷結シテ石 信濃岩菅山 麓地蔵堂村二於 際余 7 始ト為ス所ヲ知ラサリシ八日ニ至テ天始 以 降 暁 ノ最モ忘レ難キハ八月五日 テ何度タリシヤヲ詳 朔風漂冽殆ト禁ユ Ш トモ華氏 度二降 二赴ケリ ヲ促セシト雖トモ ノ爛漫タルニ似タリ……村民等 三至 ラ如シ テ新春ヲ迎 風 レリ 雨忽チ さらに 其山直立凡七千五 テ事 ハス是年幸二降 樹木 湿気ヲ有スル 業全ク卆ル 天幕 一度以上 可ラス ヘリ」とその ニセスト 昨 事業已二半二 如キハ白 7 十五 寒温 翻 リ暴風ニ 二昇ラス 倒シ余 年ハ 依 片雪ノ稀 モノ 百尺 霜之 テ其 儀 余 観 ÷

たの 一つ目 E 和 介しているものである。 寺 は寺 九年九 田寅彦全随筆五』(岩波書店 觸媒』「天災と国防 地 測 H 寅彦が 月 量 師梅 0 東京朝 %随筆 本豊吉から Ħ 地 新 利聞に この 図を眺 転載され、 開 随筆は 掲 めて 載さ たこ

> 十二年に 角 長、 ちらと渡って歩ゐている。 5 6 0 九 Vi る人達は年が年中普通 「点への 数十 九三 である。 その中で「一 やうな山 頂上が選ば 高等官四等 キロ乃至百 見通し 陸 0 それだから、 地 収 測量 頂上ばかりを捜 n 録され が る。 等三角点にはみんな高 利かなけ 丰 部に入り、 軍中佐 その理 た。 U の人は滅多に登らな 0) 梅 距 待 さうして天気が 離に 角測量に従事す れ 曲 本豊吉 遇 当 してあちらこ ばならないか は各三角 時三 ある隣接三 であ は 鱼 明 2 点か Ш 班

> > ると思う。

との見透しを調べて歩く て行ってはそこから百 要である。 ならない。 悪くて相 に三角 日でもそれが見える迄待ってゐなけれ 点の位置を選定する 手 深山 0 Ш 0 測量を始める前には 頂 峯から 峯と一 角点が見えなけ 丰 一口以内 0 であ 選点作業が必 る。 の他 0 つ登 先づ 0 n 高峯 点を ば 第 ば

幾

点に る 夫六名乃至 決定するのに平均二週 位は 仕 場所によっ お 事である」 かかる。 11 る観 測 名位の 技師 と書い ては水汲みだけ 作業に天気がよくて 一人技手一人と測量人 一間は 行で天幕 か かる。 0 4 一活をす も二週 : 中 4

間

4に示した。 集に収録した。その なかった。 測量年 その 新聞紙上にはス 0) 三角 際 度を陸地 そして、 点と火山に È 選点、 一要高 測 量 その 中の主要高山 部 1 お 二千八 12 後に出 ス it 調 の点で掲載 る 査して貰 測 百点以 0) 測 版 した随 の分を表 者とそ Ŀ から でき 0 た 分

時の記 紙に画 に画いたのが 潔彦は 十六年八月 かなか雰囲気が出 クロでしか掲載できない のに該当する。 この表の中で、 は 画 寺田が年 陸地測量部では殆ど選点に明 録が 0 地 てい 月 理 2表5の 日 局 る 図3で、 中 日と記載され か 館が登 山登りをしてい 5 この 点の記 初期 致 7 陸地 して V るも 义 選点作業に使 Ш の選 測 で、 0) は 0 てい 水彩 量 が残念だが、 る 0 様子を自 点に従 選点は 部 である。 た人と 1: 闽 移 it 事 明 暮 0 L た人 治 た図 n た館

三十六年に 省に入り、 なお、 館 は 休職となり、 嘉 年 永三年生ま 務 省 八年休職満期 年 陸 軍 Τi 省 I

たいと思います。 もう一つの登山史ということおわりに もう一つの登山史ということれ に調査で知りえたことを主にして、それ をに調査で知りえたことを主にして、それ をに は が と いっと が ら いっと が ら いっと が ら い と 思います。

(本稿は一九九四年二月二十五日開かれ(本稿は一九九四年二月二十五日開かれた第二十二回山岳史懇談会における佐藤 、第二十二回山岳史懇談会における佐藤 がいたものです。)



北穂

塔田也寿

文章を公にされていた

新 刊 紹 介

訪多栄蔵著 雁部貞夫・ 師

ヒマラヤ山河誌

カニシヤ出版 九九四年四月刊

ヒマラヤ文献研究の業績で知られる、 版上製(箱入り)三八七ページ 諏訪多栄蔵氏の研究成果の 七五〇〇円

う言葉が、まさに当てはまる程、これらの人々との出会いが、 いるが、 後のヒマラヤ研究面に大きな影響を与えている。ことが述べられて 協力者の一人であった吉永定雄氏により詳しく述べられている。そ る朋文堂の季刊誌 後の諏訪多氏の人生を大きく左右しているように思えてならない。 の冒頭に 諏訪多氏の経歴については その篤実な人柄から云って、。人生は人との出会い。とい 吉沢一郎、 "諏訪多さんにとって西岡一雄、 戦前、 戦後マナスル登山 「探検」に 深田久弥、 昭和十七年に創刊された加納一郎氏主宰によ 山岳 「ヒマラヤ山岳文献抄」をまとめられ 望月達夫氏などとの出会いが、その の頃からは、 第八十八年追悼欄で、 加納一 『岳人』を中心に数々 郎、 藤木九三、宮 その 氏 0

> 出版された。 年には、このシリーズとして、ベイリーの『ヒマラヤの謎の河』を をあかね書房より『ヒマラヤ名著全集』の一冊として刊行、 A・ランの『登山百年史』、引き続きE・シプトンの『地図の空白部 に入社されてからは、 後半からで、 しかし著者の文筆活動の油の乗り切った時 昭和四十一年に住友電工を退社され、 文筆活動に拍車がかかり、 期 は、 翌四十二年には、 神戸の三建化工 昭和三十年代

ていたものの、これ迄一冊の本にまとめられたものはなかった。 後者はクロニクルであった。この間『岳人』誌に多彩な執筆を行 カラコルム会議より上梓されたが、前者は、 クシュ、カラコルム登山、探検史」の二冊を、 念文集』として「ヒンズークシュ、 全二巻(学研刊)の刊行に尽力、 境』の企画・編集、 ヤの高峰』を、 た仕事まで引き受けることになり、四十七年には、 四十六年三月に深田久弥氏が急逝されてからは、 五十~五十一年には、 五十二~五十三年には、 カラコルム研究誌」と「ヒンズー 五十五年には、『田中栄蔵古稀記 白水社の『ヒマラヤー人と辺 日本ヒンズークシュ・ 諸氏の寄稿集であり、 『世界山岳地図集成 同氏の 同氏のやり残 ピマラ

が同氏に対する最大の供養ではないかと考えて、 ヒマラヤ研究に関する代表的な文章をまとめた遺著を刊行すること 両氏は、 てのよき理解者でもあり、 氏の『ヒマラヤの高峰』の編集等を通じて知り合い、諏訪多氏にとっ 氏等四十名の出版発起人に呼びかけ、 一九九二年五月に諏訪多氏が八十一歳で物故された後、 諏訪多氏が生前出版しようとして果たせなかった、 協力者でもあった雁部貞夫、 「ヒマラヤ山河誌 本会元会長今西壽 薬師義美の 刊行会

スタッフとして前記吉永定雄氏を加えて、 幸いに、ナカニシヤ出版の中西健夫社長の力強い支援を得 編集作業をつづけ、 本年 編集

次に本書の内容につき述べる。

四月刊行の運びとなったものである

本書は本文七章と略年譜 一章「ヒマラヤ小論」は、著者の提唱していた「ヒマラヤ登山 初出一覧、 あとがきで構成されている。

L

書いておいて欲しかった。

の著者の知識と情報があれば、

いくらでも書けた筈であり、

学」の序論のようなものである。ヒマラヤ登山は現在ではスポーツ

二十年経った現在においても、 よいであろうとして、この小論の目標はヒマラヤ登山をヒマラヤ登 昭和四十六年の『岳人』誌に一年間に亘り連載されたものであるが 登山学の十二のテーマを選んで小論がまとめられている。これらは 地域適応、命名法、山座同定、 得意な分野である文献、地図、年代誌、オリエンテーション、言語 山学として考えてみることにある、としている。とり敢えず著者の としてとらえられているが、現在のヒマラヤには 情報量が多くはなっているものの、 山姿論、登路解説、情報、ヒマラヤ 「学」があっても

タ・ベースになる様なものは見られない。著者の提唱した通りに実 理などは、前から云われているものの、 のは少ないといっても過言ではない。コンピューターによる情報管 して、著者が小論として取りあげた分野では、著者を越えているも していれば素晴らしいものになっていたに違いない 我が国に於ては未だにデー

余り変り映えしてはいない。著者の専門分野でない他の分野は別と

すさまじかった。外国の山岳会のジャーナルの情報では遅すぎると

にしても著者のネパ

ール開国直後の貪欲な迄の情報収

仏集熱は

第六章「ヒマラヤ素描集」。著者の山姿図(登攀ルート入り)は

意に脱帽したことを憶えている して、 インドの日刊紙 「ステーツマン」を態々購読しておら れた熱

筆したもの。いわば「ヒマラヤ風物誌」ともいうべきもので、 者を中心に、若い人数人と分担して執筆。 第二章「ヒマラヤ今昔抄」は、 昭和四十九年に その中の六編を著者 岳 人 当時 が執

がその選定を行ったものである。 お探られつつある地域の代表的文献をとりあげたシリーズで、著者 ン・ウォードの「青いケシの国」 者が連載したものを集めたもの。このシリーズは、例えばキングド 白水社から、標題のシリーズで刊行された各巻の付録 第三章「ヒマラヤ―人と辺境」は、 の様に、 昭和 ヒマラヤの中でも今日な 五十一五十一年にかけて (月報) に著

点を収録している の中から「マッシャー 人』誌のために企画して連載したもの 第四章「カラコルムの名峰」は、深田久弥氏の没後、 ブルム」「デイステギール・サール」など八 (昭和五十一年、 著者が『岳

かった るといっていたが、 登山史上の重要人物の評伝を書くことは、 著者の企画により『岳人』誌に連載したもの。著者自身は、 A・L・マム、P・アウフシュナイターの四名しか書 第五章「ヒマラヤニスト抄」は、 (編者注 ※のみ『岩と雪』三九号より 残念ながら、H・ティッヒー、 昭和四十四年~四十五年にかけ、 山座同定同様に重要であ E・シプトン、

著

展望など、著者の提唱する「ヒマラヤ登山学」を垣間見る感がある。

なお編者も初出一覧の末尾に、当初収録を考えたが、種々勘案の

割愛したと注記されているが、

日山協主催で行った海外登山技

登山ルートの追跡、その登山に対する評価、

、参考文献、将来の課題・

みられる、その本の著者の人となり、その地域の探検史、その山の

術研究会で発表された「ランタン谷の解明」(昭和四十二年及び四十

なくその能力を発揮している。 ケッチ能力)は地図の作成や、 古くは、穂高岳ルート図集などでも知られているが、その画技 その描写力が素晴らしく、その緻密、 ヒマラヤの山座同定などでも 克明な描線には特徴がある。 遺憾 (ス

訪多氏の山姿図を必ず依頼していた。 深田久弥氏もこの点に着目され、氏の文章を補完する意味で、 諏

されたものと想像される。これらの絵はいずれもソフトタッチで描 している に残されていた未発表の四十点のヒマラヤの絵の中から十点を収録 これらの絵は藤木氏の蔵書の写真などからコピー代りにスケッチ 今回、素描集として採録したスケッチは、 戦前のスケッチブック

のとして他の追随を許さないものといえる。この多面的な解説文に 要し、著者が如何にティルマンに共感をもっていたかを実証するも 中でもティルマンの「ネパール・ヒマラヤ」は四〇〇字七十五枚を ラヤ名著全集』(全12巻) に執筆された、六編の長文の解説文である 一郎氏と三人で編集委員となって、あかね書房より刊行した『ヒマ 第七章「ヒマラヤ―名著とその世界」。著者が、深田久弥、 吉沢

かれており、その雰囲気をよく伝えている。

ルの山座同定」も同様である。 「山岳」第六十四年(一九六九) に発表された「イスト U オナー

たものであったからである。

のモデルケースであり、

であった。この報文は著者の提唱する「ヒマラヤの山座同定」の初

以後日本の登山界でも一般化する様になっ

三年度日山協特別事業報告書所収)

が収録されなかったことは残念

巻末に掲載された著者の略年譜は、 著者の研究業績を経時的に知

る上で大変参考になる。 稿を終えるに当り、著者が如何に、 後進の若 い人達 0 面 倒をよく

でも、 見てこられたかについて付記しておきたい のチャンスを与えて、種々と指導しておられたし、見知らぬ人から 『岳人』の原稿についても、適任の若い人達を見つけると、 ヒマラヤに関する質問を受ければ、どんな難しい問題でも、 執筆

り、さながら関西での梁山泊の感を呈していた。 さんのお宅には、いつもヒマラヤを目指す関西の若者達が訪れてお 親身になって文献を調査され教えてくれることが多かった。 東の深田久弥氏の「九山山房」に対し、八尾の公団住宅の諏訪多

ランドの雑誌からコピーして情報の提供をして下さったことなど忘 クシュのルンコーの近くで見かけた、ソデクロツルの写真を、 れることが出来ない 会会報『山』に執筆した際にも、いち早くポーランド隊が、ヒンズー 私事に亘り恐縮であるが、「ヒマラヤを越えるツル」のことを本

んでおられた。その意味でも、 著者は、常に自分の集めた情報を公開し、活用されることをのぞ 本書が多くのヒマラヤを目指すもの

に利用されることを希望して止まない次第である。

兄の努力に感謝してこの稿を終わりとする。 本書の難しい編集を担当された、 雁部、 薬師、 吉永の諸

松田雄一

江本嘉伸著

九

一蔵漂泊

山と溪谷社 上卷 一九九三年・下巻 九

九四年刊

A 5 判 上巻二九三ページ 110000H 二八〇〇円

下巻三一四ページ

る場合が少なくない。著者は本書で、「偶然の出会い、というもの は、自分ではいかんともしがたい、そのような偶発性や運に関係す して、モンゴル国の首都ウランバートルでのムンフジャムツという が旅ではとりわけ意味をもつ」と述べているが、その象徴的事例と 旅には偶発的なことだとか運がつきものである。旅の魅力的要素

帰りしたのだった。彼は「モンゴル革命後、故郷を脱出し、 内モンゴル、チベットのラサ、インドのカリンポンなどに住んだの 老人との出会いを序章で引いている。 モンゴル人ムンフジャムツは六十年ぶりでアメリカから祖国に里 一九六八年アメリカに渡った」のであり、ラサに住んでいた当 中国の

念を燃やした十人の日本人たち。ここにその一人一人の旅の要約を

その時代の国際情勢の中でときには翻弄されながらチベットに執

肥佐生と親交があった。 本書に登場するチベットをめざした十人の日本人の一人、木村

会ったムンフジャムツも、 の老人の死を私は自分に言い聞かせた。人の一生には、だれにも他 ゴルだったのだ。胸をぎゅっと締めつけられるような思いで、 事実を知るのである。ムンフジャムツ老人は意外にも、 あっただろう」。 人のうかがい知れぬドラマがある。ウランバートルのホテルで出 のように心境を述べている。「帰る所は、アメリカでなくて、 訃報を、翌朝ホテルのレストランで息子から知らされた著者は、次 日後、故郷の村を訪れたのちアメリカへ帰る前夜、死去する。 なにげない会話をきっかけに、その老人の過去を聞き、 ウランバートルのホテルのレストランで偶然に同席した老人との 内情はもっともっと波瀾に富んだ人生で それから九 著者は右の

十人は、幸せな旅をした。二十世紀の末、『旅の時代』といわれる ものだ」と述べ、最後にこうむすんでいる。「困難ではあったが、 は本書の各所でそのことを考察する。そして終章で、旅が「いかに の旅の記録を追いながら、便利になった現代の旅とも比較し、著者 その本質はなにか。いまから一世紀及至半世紀前、 知的刺激にあふれたものであるか」、さらに「その人の人間性その る以前のチベットをめざした、個性豊かな十人の日本人のそれぞれ むろん旅の魅力は、意外性や偶発性だけではありえない。しかし、 ま、彼らが実践したような『知の体験』 は、まれである」。 中国に併合され

行動力の凄さであろう。 使命こそ異なっていても、 て第三グループが野元甚蔵、 海を含めて矢島保治郎、 プに分けている。 掲げることは避けるが、 成田安輝が第一グループ、 最初にチベットに到達した能海寛や寺本婉雅をは 青木文教、 著者はそれら十人の日本人たちを三グ 彼らに共通しているのは強靭な精神力と 西川一三、 多田等観が第二グループ、 木村肥佐生である。 その後の再入蔵の 目的や)河口慧 そし il

う貴重な写真も、 ではあるまいか。 点がドラマチックであり、 生を登場させ、 著者は年代順にこれら十人の日本人の旅について触れるのでは 前述のムンフジャムツとの出会いから、 そこから個々の旅を関連づけて展開している。 旅へ誘うようで本書を魅力的なものにしているの 読者をして引きつける。 まず第一章で木村肥佐 臨場感のともな この な

チベットに関心のある読者にとって知識をふやす意味でもありがた ちりばめられてあるので、 有意義な本といえよう。 い。著者の博識には脱帽させられる。 また本書にはチベットの歴史や文化、 読みごたえがあるのはもちろんのこと、 読みやすく、 政治、 宗教などについても 内容の充実した

に関する次のくだりである。 で気がひけるが、 精通した著者なればこその着眼点も目につく。 本書に関して、こうしたことを述べるのは「釈迦に説法」 食欲をつねになくさないところにあった、 確さが魅力になっているようにも思われる。 新聞記者である著者の、 「河口の、 チベットの旅を通じての 緻密な取 と筆者には思わ たとえば河口慧海 また登山 材にもとずく記 のよう や探

トのラサに達した河口慧海の強さについて、 点からはなかなかとらえにくいものである。 Н 本人として最初にネパールに入域し、 ヒマラヤを越えてチベ 般的にはこうした視

る。 ほかの地にはない、 ト仏教の魅力など、 ている。「閉ざされてきた国ゆえの神秘性、地政学上の重要性、チベ マラヤ山脈の北、 それにしてもチベットの魅力とはなんだろうか。 天に最も近い所に存在するチベットには、世界の 理由は人によってそれぞれであるだろうが、 不思議な吸引力があるのだ、と筆者は考えて 著者はこう述 K

に本書はそのことを教え、旅の魅力や本質を示唆してくれる その心は豊かさに満ちていた。現代の管理社会に閉ざされた私たち ある年表も見やすく参考になる。 十人の日本人は、そのだれもが行動力においてスケールが大きく、 描かれた十人の日本人が旅したときと、変わらぬ光景だろう。 ど祈禱旗がはためいている。時代状況は変貌しても、それは本書 石砂漠地帯である。 なお本書は上下二巻からなっているが、下巻の巻末に付記され いまもチベットは魅力を秘めている。かつてチベットへ雄飛した 世界最高地の高原に位置するチベットは、 無数にある、そこの峠では必ずといってい 大部分が荒涼とした岩 いほ T

立山のいぶき— 万葉集から 近代登山事始めまで』

シー・エー・ピー 一九九二年十一月刊

注記に時折ゆき当たる。これは、書籍等の保存の程度を表す語彙で、 「極美本」や「美本」とは、どちらかといえば反対の意がある。 古書目録に目を通していると、「ツカレ」又は「ツカレ本」なる 四六判 三八一ページ 二〇〇〇円

をかけ、取扱いは丁寧を宗とした。なのに斯様になったのは、古文 目録で、いくらおかげを蒙ったかわからぬ と、幾度となく汎用したからである。私にとっては、いわば必需の 書や古絵図等を発注する際の参考に、あるいは、古文献等の検索に 十二年)はもうよれよれで、文字通りそのツカレ本である といっても、購入時は極美本だった。直ちにパラフィン紙のカバー

私の書架にある『立山黒部文献目録』(富山県立図書館・昭和三

記の目録同様、どうやらツカレ本への道を辿ることになりそうであ された。資料の宝庫ともいえる本書は、私の書棚にあるかぎり、前 が、先頃『立山のいぶき―万葉集から近代登山事始めまで』を上梓 その編者―立山・黒部を語るに余人をもって替え難い廣瀬誠氏

廣瀬氏はその「はしがき」に、『古事記』の「大和は国のまほろば」

著者はまず、美女平や弥陀ヶ原出土の縄文期の遺物をもってきて、

雪きらめかせ、深々と雲霧いぶく、立山し美はし』と立山を讃えた 云々を引きながらいう。「私は『立山は山のまほろば、こごし岩

た。その立山に対する、あらんかぎりの思いをうち傾けて書き上げ 水で育った。幼少から立山を仰ぎ、敬い、慕い、讃嘆してやまなかっ またいう。「私もまた越中男子として立山の下に生まれ、 立山

に血がかよっている。此処彼処の行間に、今なお脈打つ「古きよき うか。「越中びとの魂をたくましくはぐくんできた母なる山」―立山 立山の歴史と文化にかくも的確に肉付けした著述がかつてあったろ 誌」、十「立山をめぐる人物群像」、の全十章から成っている。 七「立山開発と災害」、八「近代登山事始め」、九「近代の文学と書 五「立山の地名と習俗風俗」、六「神仏の交渉と分離をめぐって」、 景―文学を中心に」、三「立山の美術と文化財」、四「立山禅定の道」、 たのが本書である」と。 それは、一「立山の山岳信仰をめぐって」、二「中近世立山の風 古往今来、立山関係の書物は数多く出版されてはいる。しかし、

るばかりだが、さりとて煩瑣という感がない。いずれも好個なもの 者が最も尽瘁した部分であろう。引用文献等の夥多なるには驚倒す あるまいか。事象・事物への洞察は隅々まで透っており、鋭い。著 らいである。これは稀有のことで、まさしく空前の書といえよう。 立山」のいぶきを感じさせて間然するところがない。空恐ろしいく なかんずく、立山の山岳信仰をめぐる第一章は、本書の圧巻では しかも理路が整っており、 難解ではない。

190

立山と人とのかかわり初めから起筆する。次いで、『萬葉集』の大忠素を淡々と展開。大伴池主の「敬和立山賦」等をこれと比較し、思素を淡々と展開。大伴池主の「敬和立山賦」等をこれと比較し、に上出来だ、と喝破する。

このあたり、歌人岡野弘彦氏をしてその著『花幾年』に、「一夜で山の天候は急変して、翌日は猛烈な風雨。その雨の中を、案内してくれる国学院で同級だった廣瀬誠君は、大伴池主の『立山の賦にながらまって、身はふるえ上がるように寒いが、廣瀬君の情熱の声はれとおって、身はふるえ上がるように寒いが、廣瀬君の情熱の声はれとおって、身はふるえ上がるように寒いが、廣瀬君の情熱の声はれとおって、身はふるえ上がるように寒いが、廣瀬君の情熱の声はれとおって、身はふるえ上がるように寒いが、寒瀬田の中を、案内して山の天候は急変して、翌日は猛烈な風雨。その雨の中を、案内して山の天候は急変している。

| 編章の「媼」は、芦峅の「峅」とともに、越中だけで通用した字にはいう。その字体の異様さもさることながら、媼尊像の形相も劣らく蛇蝎の如く嫌っていた。しかし、非凡な眼をもつ著者の、覚醒らく蛇蝎の如く嫌っていた。しかし、非凡な眼をもつ著者の、覚醒を促す論考に接して、己が観念に変化の兆しが見えはじめた。それを促す論考に接して、己が観念に変化の兆しが見えはじめた。それを促す論考に接して、己が観念に変化の兆しが見えはじめた。それを促す論考に接して、己が観念に変化の兆しが見えはじめた。それをでいる。

三州志』で、架空の人物、と断じた佐伯有若の署名を、京都の随心立山開山にふれては、加賀藩の碩学富田景周が、その著『越登賀りが上乗である。

紙幅がない。ここでは、第二章にある次の一事を略記するにとどめず、廣瀬氏は―、とここらで氏の出自、経歴を紹介したいが、もうら、重厚である。 著者の博覧強記ぶりには心服する。それもそのはり、重厚である。

著者なのである。 著者なのである。 (一八四〇)、立山に登拝、漢文の『登立山記』(弘化天保十一年(一八四〇)、立山に登拝、漢文の『登立山記』(弘化天保十一年(一八四〇)、立山に登拝、漢文の『登立山記』

る。

「剱岳・立山の雄大を讃嘆した敬業の心情が脈々として私の血脈「剱岳・立山の雄大を讃嘆した敬業の心情が脈々として私のなな敬業も、今にして羽翼を伸ばす思いであろうということはさておくが、敬業はまたとない末裔に恵まれたものである。私たちはその余徳で本書を得た、といえるかもしれない。

九年・桂書房)である。
に出ている。その論文集が『立山黒部奥山の歴史と伝承』(昭和五十

瀬誠著作目録』(昭和五十七年)があることを付記しておく。 ついでながら、さらに著者の論文等に就きたい人のために、『廣

(湯口康雄

太田五雄著

近代スポーツ登山65年の歴史と現在』『屋久島の山岳

菊版上製 三四〇ページ 三九〇〇円八重岳書房 一九九三年刊

は、並たいていのことではできなかったはずである。

たして誠に喜ばしい。

大州でもっとも魅力ある山岳は屋久島の山やまである。屋久島の九州でもっとも魅力ある山岳は屋久島の山やまである。屋久島の上れ州でもっとも魅力ある山岳は屋久島の山やまである。屋久島の

そのとき太田さんは弱冠二十歳頃であったが、屋久島に対してなみ島の山」を見た太田さんから、手紙をもらってからのことであった。太田さんと初めて合ったのは昭和三十七年初夏、私宅であった。べておきたい。 本書紹介にあたり、屋久島がとりもつ太田さんと私との関係を述べておきたい。

たこともしばしばであった。それだけに、これほど通いつめることたこともしばしばであった。それだけに、これほど通いつめることたどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、険しい岩壁登攀が数多く含またどるのではなく、未知の沢を探り、大田さんとの交流にはそれななみならぬ情熱を秘めていることを知った。私も屋久島にはそれななみならぬ情熱を秘めていることを知った。私も屋久島にはそれななみならぬ情熱を秘めていることを知った。

そこから私らの踏み跡をたどって降りてきたのだった。何日も遅れ、 を家川上流を解明するため太田さんらは右俣に、私らは左俣 るが、安房川上流を解明するため太田さんらは右俣に、私らは左俣 のでおそく彼らも永田に降りてきた。彼らは四日間かかってた。その夜おそく彼らも永田に降りてきなり、私らは退却してウィルソン株で一夜明かした後、安房が、安房川上流を解明するため太田さんらは石俣に、私らは左俣をが、安房川上流を解明するため大田さんらは石俣に、私らは左俣をが、安房川上流を解明するため大田さんらは石俣に、私らは左俣をが、安房川上流を解明するため大田さんらは石俣に、私らは左俣をが、安房川上流を解明するため大田さんらは石俣に、私らは左俣を添えた。 本で、安原川上流を解明するため大田さんらは右俣に、私らは左俣 が、安房川上流を解明するため大田さんらは右俣に、私らは左俣 なが、安房川上流を解明するため大田さんらは右俣に、私らは左俣 なが、安房川上流を解明するため大田さんらは右俣に、私らは左俣

果ては遭難ではないかと心配しただけに、その日の感動は未だに忘

べてハる。 れられない。このことは、本書四九ページに淡々とわずか三行で述

岩場なども詳述しており、 はなく、 られている。これらから理解されるように、本書は単なる案内書で さらに六種の付表と、折込み付図として詳細な屋久島管内図が加え ラーの八ページ三十九葉と、各章の初めの白黒計九十八葉からなる。 山道案内、 さて、本書は屋久島の沿革に始まり、 登山根拠地、 屋久島の山と原生林がもたらす素晴らしい自然、 岩場、 名所・旧 登攀の記録、 屋久島の山岳集成版である。 跡、 交通の十四章からなる。 地名・山名、 自 然、 Ш 山岳遭難、 岳概要、 Ш 写真はカ 気 岳 象、 Ш 岳の 沢 登

一章「沿革」から五章「登山道案内」までと、十一章「山岳の見るう。これらについて紹介をすすめる。著者がもっと名考、岩屋、廃道など他書にはない内容が多々ある。著者がもっと所」以降は案内書にもありそうな項目であるが、細かく読むと、地所」以降は案内書にもありそうな項目であるが、細かく読むと、地所」以降は案内書にもありそうな項目であるが、細かく読むと、地方の見の見いない。

12 十一二十世紀に対して高距差は千八百ぱもあり、 を費やしており、ここに心血が注がれている。 ついては全般的に、 はすべて網羅されており、 域であるため、 六章は沢をまとめているが、本書の約三分の一、一一〇ページ分 永田川など十二の河川について説明されている。 「難ではあるが魅力ある山行となる。 石ゴー その容相は、 口帯などで特徴づけられる。それだけに沢の遡行 さらに本流、 安房川、 急流、 支流合わせて四十七沢の説明が 急瀑、 宮之浦 本章では屋久島の主要河 ナメラ、 ЛĮ 屋久島の沢は、 里 加えて日本の最多 京味川、 ゴルジュ、 大きな河川 小揚子川、 滝

> この光景をむさぼりながらの遡行は贅沢の極みであった」と感傷に 黒味川メンガクボでは、 にして引用している。 耽ることもある を踏査した著者に改めて敬意を表したい。著者は単独のことも多く、 に詳述している。本人が踏査していない沢については出典を明らか なかには二、三日もかかる上級者向きの行程 ある。このうち三十二沢は著者自身の遡行(一部下降) 私も永田川を遡行しているだけに、多くの沢 鮮苔、 紅 葉、 落葉の沢に感動し、「一人で はもあ n 録である。

どを登攀している。七五岳北壁GCCダイレクトルートは、 あると述べている。 クボ右岸の処女岩壁やピナクルのクライミングは、 たが、まだ未登の岩壁も残されている。とくに永田川 の岩場は昭和四十年代に入ってから今日まで多くのルートが開かれ 壁などのように数回目にして開かれた困難なルートもある。 私が提案しただけに感慨深い。そのほか本富岳南 十五年から四十七年にかけて四回目での初登であった。これは最 東稜の初登、 くし山岳会から福岡GCC代表として、彼や仲間は七五岳北壁、 ついて、二十五ルートを図入りで述べている。 七章では、 本富岳、 障子尾根、 七五岳および永田 前障子南西壁、 ネマチ西壁、 岳 から障子岳周 著者自身は、 西壁や前障子正 今後の楽しみで 上流ネマチノ ローソク岩な 辺の岩場に 屋久島 しんつ 同 面 初

二百十六の記録を年代順に文献とともにまとめてあり、十八ページせるものではない。本文ではクラブごとに述べているが、付表には記録を総ざらいしなければならず、大変な仕事であり一朝にして成記録を総ざらいしなければならず、大変な仕事である。これは過去の

におよぶ。 がなされてくる。 州のみならず、関西、 便も良くなり、 無~二回の記録しかない秘境の島であった。四十年代からは交通の 鹿児島・佐賀両大学山岳部など九州勢の活動が目立つ。これまでは 会の活躍で占められている。戦後から昭和四十年までは 一部に険しい尾根やピークが含まれるが沢の開拓が主であり、 (加藤数功ら) およびその伝統を受け継いだしんつくし山岳会や、 和の初期 年間数回以上と飛躍的に記録も増える。クラブも九 関東、 から戦前は、第五高等学校山岳部と筑紫山 北陸と拡がり、 渓谷に加えて岩壁登攀 筑紫山 年間

九章では、これまで混乱していた地名・山名について古文献や記録を繙き、地元意見を尊重しつつ整理している。山名や谷名などは、録を繙き、地元意見を尊重しつつ整理している。山名や谷名などは、緑を繙き、地元意見を尊重しつつ整理している。山名や谷名などは、緑を繙き、地元意見を尊重しつつ整理している。山名や谷名などは、緑を橋と遭難の関係を吟味し、その防止を呼びかけた警句である。かくいう私も昭和三十一年ここで岳友を失った苦しい体験をもってかくいう私も昭和三十一年ここで岳友を失った苦しい体験をもってかくいう私も昭和三十一年ここで岳友を失った苦しい体験をもってかくいう私も昭和三十一年ここで岳友を失った苦しい体験をもってかくいう私も昭和三十一年ここで岳友を失った苦しい体験をもってかくいう私も昭和三十一年ここで岳友を失った苦しい体験をもってかくいう私も昭和三十一年ここで岳友を失った苦しい体験をもってからいる。

屋久島は平成五年十二月、自然遺産の世界遺産として白神山地とを示す証拠である。私が屋久島の自然を如何に保全すべきか、著十九年自然保護誌上である。今この自然を如何に保全すべきか、著者は常に自問自答して、地元民とともに考えようとしている。そしてこの問題は、今後に課せられた大きなテーマとして思索し続けるでこの問題は、今後に課せられた大きなテーマとして思索し続けるという。

ロバート・スワン著 三方洋子記

『北極を歩く』

四六判 二九四ページ 二九八七円図書出版社(海外旅行選書)一九九三年刊

でアリーは生涯を極地探検に捧げ、一九○九年、北極点に初到達でアリーは生涯を極地探検に捧げ、一九○九年、北極点に初到達が成されたが、それ以後犬ぞりは使われていない。エスキモーを到達が成されたが、それ以後犬ぞりは使われていない。エスキモーを到達が成されたが、それ以後犬ぞりは使われていない。エスキモーを到達が成されたが、それ以後犬ぞりは使われていない。エスキモーを到達が成されたが、それ以後犬ぞりは使われていない。エスキモーを対したが、大の到達させた。個人の情熱と国家の威信がひとつになって地理的探検を成功した。個人の情熱と国家の威信がひとつになっている。

極地探検は現代の価値観の多様化に伴い、さまざまな方法で行な を地探検は現代の価値観の多様化に伴い、さまざまな方法で行な の成果を収めている。

アイスウォーク隊が北極点をめざした。同じ時期、六ヶ国六人に一九八九年、ロバート・スワン[英・三二歳]を隊長に七ヶ国八人

アンガス

[カナダ・三二歳]

はエスキモー。

自然に依存した生活

保全を訴えるには、

しく、アイスウォークのメッセージの対象である、と著者は考える。

生活状態も汚染されたエスキモーこそふさわ

全を訴えるもので、時代を反映した必然的なものといえる。よる国際隊が犬ぞりで南極大陸を横断した。両隊とも地球環境の保

ことになった。 若い人たちの環境問題への関心を高めるために、さらに学生隊を組 ンホールは年々拡大し、基地周辺では巨大ゴミが放置されていた。 玉 と考えられた。この体験から、 きを七十二日 著者R・スワンは仲間二人とスコット隊の足跡をたどり、一四〇〇 織した。十五ヶ国から二十二人が本隊を支援し環境問題に取り組む 時の日 争や侵略を知らない唯一の大陸を保全することの大切さを思い、 際隊を組織して北極点から環境保全を訴えようと決意する。 書はR・スワン著 オゾンホールによる紫外線が原因で皮膚ガンのもとになる 焼けで皮膚がボロボロにはがれた。それは帰国後半年間も 間無補給で八六年一月十二日、 "ICEWALK"(一九九〇年) 汚染された地球環境に危機感を抱き 南極点に到達した。こ の邦訳であ る。 オゾ

なのだろう。

八隊員のうち極地の未経験者は大西宏氏[二六歳]と黒人のダリハ隊員のうち極地の未経験者は大西宏氏[二六歳]と黒人のダリ経験がないことで行動が左右されてしまった。

と感じ安堵する。 の終わり近くで著者は、 ある。民族固有の文化が侵され失われていく現実が見えてくる。 う」と語る。彼はカナダ政府の移住計画により白人家庭で西洋 環境の中で一生暮らした両親や先祖への尊敬を教えてくれると思 れさせてくれると思う。僕がたった数週間しか我慢できないだろう うとする努力を知った。このアイスウォークは僕に、僕の背景を触 こ(北極)の人々のことを知り、環境への彼らの気遣い、 そして、「八番目の男」として彼を隊に加えた。出発前アンガスは「そ 教育を受けて育った。だから「北極への憧れなんてなかった」ので の生活にいかに密着しているかを知り、 アイスウォークの本来的な意味を実感できた瞬間 アンガスが極北の地で「くつろいでいる」 ある種の伝統的文化を守ろ 環境が人々 一風の

たのだった。 と理解を示す。著者はミーシャの知識、 ンバーはいい奴ばかりだが、極地経験が不足している。自分の経験 と慰める。彼は医師として体の傷ばかりでなく、 ては楽しい。 ロ、今度の旅は君にとってずいぶんきついみたいだね。でも僕にとっ てに頼っている自分に気づく。大西氏が消耗し切っている時に「ヒ められるが、「極地で生き残るために何が必要か、彼はわかっている」 を皆で使えばいい」と言い切る。 ポーラーブリッジ隊の一員。九十一日間で北極海を横断した。 ロシア人医師ミーシャ [三五歳] は八八年のソ連 今度は一緒にエベレストに行き反対の立場になろう」 著者は彼との議論で何度も追 エネルギー、やさしさの全 心の傷も治してい ・カナダ合同 0

大西宏氏は南米での登山を終えて帰国後、「腹にずしっとくる」

いと言われていた大西氏の弱り方に極地の厳しさが想像されてく消耗し切り限界を越えかかるが、意地だけで頑張り通す。山では強極地の環境は簡単に彼を受け入れてくれなかった。長期戦の極地で極地の環境は簡単に彼を受け入れてくれなかった。長期戦の極地で活に「北極」が加わる。訓練を経て出発するが、音葉の問題はあったが、持ち前の明るさと行動力で参加を決意する。言葉の問題はあったが、持ち前の明るさと行動力で参加を決意する。

る。

東傷を負ったダリルの参加で、隊は初めからリスクを負っていた。 東傷を負ったダリルの参加で、隊は初めからリスクを負っていた。 「超聞もおくれ進度はおそかった。 四日目にしてチームに亀出発は二週間もおくれ進度はおそかった。 四日目にしてチームに亀出発は二週間もおくれ進度はおそかった。 四日目にしてチームに亀出発は二週間もおくれ進度はおそかった。 四日目にしてチームに亀出発は二週間もおくれ進度はおそかった。 四日目にしてチームに亀出発は二週間もおくれ進度はおそかった。 四日目にしてチームに亀出発は一週間もおくれ進度はおそかった。

という。

大西宏氏への鎮魂の意を込めて本稿を起こした。

まとまりはじめた。大西氏の荷物のことでアンガスとグレアムは不弱者を排除しようという考えは依然尾を引いていたが、チームは

独自の意味を持っていた。

葉の違いを乗り越えて国際隊としての目的を達成する。感情が交差が抱く感情が絡み合い、極寒と開水面の危険の中で、国や文化、言ある。それぞれの想いを抱いて五月十四日極点に到達した。だれもある。それぞれの想いを抱いて五月十四日極点に到達した。だれもある。されぞれの想いを抱いて五月十四日極点に到達した。だれもある。されぞれの想いを担いをな感情はつきものだ」が、人ともきっぱりと否定する。「探検にいやな感情はつきものだ」が、満をぶちまけるが、ベースから「ダリルをはずすか?」の無線に二

する人間模様の葛藤劇として読むこともできる。

大西氏はその後エベレストに登頂し、自らが中心となって南極行

極点に立った。大西氏の夢の場所、南極点に仲間の手で分骨されたれからもう三年になる。残されたメンバーが隊を再編し無補給で南一年十月十六日、ナムチャバルワで帰らぬ人となってしまった。あに吐露していたのが思い出される。計画は順調に進んでいたが、九を組織した。「実現には事業家の素養が不可欠です」と準備期間中

宇都木愼一)

岐阜県哺乳動物調査研究会編·著

『滅びゆく森の王者 ツキノワグマ』

A五変形判 二三八ページ 一九〇〇円 岐阜新聞社一九九三年刊

東根千万億著

『SOS ツキノワグマ』

B6判 二五三ページ 一三〇〇円

毎年、必ずといってよいほど新聞紙面を賑わすツキノワグマだが、毎年、必ずといってよいほど新聞紙面を賑わすツキノワグマだが、毎年、必ずといってよいほど新聞紙面を賑わすツキノワグマだが、

ツキノワグマを論ずるに必要な項目をほぼ網羅したものとなっていられた本である。扱われている項目も両者に共通するものが多く、新聞記事を元に編まれた地方出版物である。どちらも、熊に関して、新聞記事を元に編まれた地方出版物である。どちらも、熊に関して、グマ』である。

ものに留まらず、かなり幅広い。 等陣には大学教官から獣医、教師まで総勢二十五名(執筆十八名・筆陣には大学教官から獣医、教師まで総勢二十五名(執筆十八名・著『滅びゆく……』は一般向け解説書兼随筆集という趣の本で、執著『滅びゆく……』は一般向け解説書兼随筆集という趣の本で、執

かたや東根千万億著『SOS……』はベテラン記者一人の徹底した取材に基づくルボルタージュである。そして、扱われる情報は、た取材に基づくルボルタージュである。『滅びゆく……』は、中見えて、その配列は極めて組織的である。『滅びゆく……』は、中見えて、その配列は極めて組織的である。『滅びゆく……』は、中見えて、その配列は極めて組織的である。『滅びゆく……』は、中見えて、その配列は極めて組織的である。『滅びゆく……』は、中見えて、その配列は極めて組織的である。『滅びゆく……』は、中見えて、その配列は極めて組織的である。『滅びゆく……』はベテラン記者一人の徹底した以前に、「ないだった。」といいた。

口絵八頁、A5変形判の立派な体裁をもつ。
口絵八頁、A5変形判の立派な体裁をもつ。
て文体、学術的信びょう性のレベルには多様性があることを理解して文体、学術的信びょう性のレベルには多様性があることを理解して文体、学術的信びょう性のレベルには多様性があることを理解して文体、学術的信びょう性のレベルには多様性があることを理解して文体、学術的信びょう性のレベルには多様性があることを理解して文体、学術的信びょう性のレベルには多様性があることを理解していただきたい」。

に起因する冗長さによって議論の展開と視点の絞り込みに鋭さを欠かとなる。分担執筆の故か、全体に記述内容が重複・錯綜し、これご謙遜を……、と思って読み進むうち、そうでもないことが明ら

る。

く結果となった。

情報が活かし切れていない。なされていないため、漠然とした部分があり、せっかくの聞き取りなされていないため、漠然とした部分があり、せっかくの聞き取りまた、伝聞、確認された事実、推定などの峻別が必ずしも厳密に

していれば記述の展開もより明確になったことだろう。補ってぐっと読み易くなったに違いないし、内容の整理がしっかりうまく組み立てれば、記述の「繰り返し」は読み手の知識不足を

とが窺われるだけに、なおさらのこと、惜しいと思う。聞き取りが、丁寧で多岐にわたり、要点を押さえたものであるこ

ば、クマ入門の手ごろな文章となるであろう。
た人にとっては、一つ一つの項目を独立した記事として気楽に読めた人にとっては、一つ一つの項目を独立した記事として気楽に読めた人にとっては、一つ一つの項目を独立した記解を招きそうだが、そう

特記しておかなければならない。 余りある多様でかつ興味深い内容が盛り込まれている。このことはそりある多様でかつ興味深い内容が盛り込まれている。このことは

特に、飼育への挑戦・クマを"探る"・人と自然の共存のために・特に、飼育への挑戦・クマを"探る"・人と自然の共存のために・ろう記事が並ぶ。

ヒントが隠されている。ここでは内容の詳細に立ち入らないが、クものだ。クマを「見る側」の問題点、その是正の可能性への沢山のの本の元になった新聞記事を学校教育の教材にしてしまったという「クマから学ぶ子供たち」の章などは、なかなかユニークで、こ

どは、本書を一読していただければ納得できることの筈である。マ「を」学ぶ、ではなく、クマ「から」学ぶ、になっていることな

生態と環境、狭まる生活圏、共存への道、の全三部六五項目、二では、『SOS……』はどうか。

というには少々厚い。 五三頁+カラー口絵八頁からなる、B6判の小振りな本は、小冊子五三頁+カラー口絵八頁からなる、B6判の小振りな本は、小冊子生態と環境 狭まる生活圏 共春への道 の全三部六五項目 二

最初に手に取って頁を繰ってみたとき、一つ一つの取材事例がこ

が浮き彫りにされる様は見事である。はんまりとまとまっているため、分かりやすい反面、これでツキノワグマの全体像や複雑に絡み合う現代の「自然と人間」の諸相が見りがマの全体像や複雑に絡み合う現代の「自然と人間」の諸相が見じんまりとまとまっているため、分かりやすい反面、これでツキノじんまりとまとまっているため、分かりやすい反面、これでツキノ

「マタギ」や「巻き狩り」、「啓発教育」など、各項目の後に【解説】いる。分かりやすく、メリハリのある文章で、とにかく多角的だ。全体に今、クマと人間との間に何が起きているかを冷静に分析してトピックを積み重ねることで、「ツキノワグマの現在」を炙りだし、

とかなりな詳細が語られていて、取材努力の成果が光る。特に取材による実証または検証の迫力は圧倒的である。例えば、特に取材による実証または検証の迫力は圧倒的である。例えば、が付され、本文に盛り込めなかった情報を補っている。

実相に迫るのは想像以上に難しい。いことが多い。クマを巡って複雑に絡み合った人間の心情・利害のいことが多い。クマを巡って複雑に絡み合った人間の心情・利害の書評子も聞き取り調査を行うが、普通ではなかなかに聞き出せな

辛口の行政批判をまじえながら展開する現状分析などは読んでい

した情報を一般向けに整理することの難しさを示している。今後の記述も認められる。この点は、著者の勉強不足というよりも、錯綜述などに、必ずしも適切とはいえない部分や、誤解を招きかねないが自然に想像されて思わずニヤリとしてしまうことが度々あった。てなかなかに小気味良く、読み進むうちに、敏腕新聞記者氏の風貌

人間が変わったのである。問題であるという感を更に深くした。クマが変わったのではない。両書を読み終えて、「クマ問題」の背景をなすものは、人の世の

類書執筆の際の課題であろう。

言葉として語られている。(ま)ない山や森はどんなだろうと想像すると何だか恐ろしい――(ま)ない山や森はどんなだろうと想像すると何だか恐ろしい――クマ被害を考えるとクマはいない方がよいと思うが、クマも住め

大きな手がかりとなるに違いない。を少しでも理解したいと想うとき、ここに取り上げた二冊の本は、自然と接するに留まる都市生活者とは含蓄が違う。その言葉の意味自然と接するに留まる都市生活者とは含蓄が違う。その言葉の意味

求してゆくと、その先にあるのはいつも人間社会の錯綜した闇であツキノワグマはその一典型という感を強くした。「熊の現在」を追近よくある話で、書評子の調査しているライチョウでもそうだが、動物を語って見えてくるのが人間の世界のこと、というのは、最

両書とも、「熊の絶滅」を含む野性生物の壊滅をその射程に捉え

更にその先には何があるのか。

るようでもある。 ているようだが、「人間社会の崩壊」がチラチラと見え隠れしてい

開が、二冊の先に求められているのであろう。
る「実際」が、どう連携できるか、その視点からさらなる議論の展学」の問題と、今まさに日本各地の現場で様々な人達が直面してい現場からみれば、観念論として一蹴される運命にあるこうした「哲

剣に考えるべきである。このような出版が、中央ではなく地方からなされることの意味を真このような出版が、中央ではなく地方からなされることの意味を真ワグマに関する本の一部も同様である。これは偶然ではないだろう。最初に触れたように両書は地方出版物である。これ以外のツキノ

い。 しかしそのことが両書の価値を低からしめるものでは決してなる。しかしそのことが両書の価値を低からしめるものでは決してない目からみれば内容に疑義のある部分を多少なりとも含んではい。専門家

自然は、人間社会の歪みを映す鏡である。そこに映った歪んだ像に立ち至ってしまった日本の自然を考えるとき、ここで取り上げたような言葉を書評子は好まない。だが、そうせざるを得ない「現状」よりな言葉を書評子は好まない。だが、そうせざるを得ない「現状」という人間の思い上がりがそのまま活字になった

している二冊はその意味で良書といってよい。を、素直に読み取ることは難しい。その困難な作業をある程度実現

ツキノワグマにも人間にも、もう余り時間はない、そのことをこ広く一般の方々に読まれることを期待している。書評子は、この二冊が、岐阜県や岩手県のみならず、日本全国で

の二冊は、淡々とかつ雄弁に語ってくれる。

(北原正宣

金子民雄著

東ヒマラヤ探検史』

四六判 二七一ページ 二二〇〇円連合出版 一九九三年三月刊

咬みながらナムチャバルワをぐるりと蛇行するさまは何人をも寄せは一○○\\ | もの荒瀬となって怒涛のごとく流れ下り、白い泡が岩をおしている。ヒマラヤの雪解け水を集めた豊かな流れは、大渡下を過している。ヒマラヤの雪解け水を集めた豊かな流れは、大渡下を過している。ヒマラヤの雪解け水を集めた豊かな流れは、大渡下を過している。ヒマラヤの雪解け水を集めた豊かな流れは、大渡下を過している。ヒマラヤの雪解け水を集めた豊かな流れは、大渡下を過している。ヒマラヤの雪解け水を集めた豊かな流れは、大渡下を過している。ヒマラヤの東端のナムが出ている。ヒマラヤの東端としたヤル・ツァンポー河の流れは、ヒマラツァンポー・リを源としたヤル・ツァンポー河の流れは、ヒマラツァンポー・リを源としたヤル・ツァンポー河の流れは、ヒマラツァンポー・リを源としたヤル・ツァンポー河の流れは、ヒマラツァンポー・リを源としたヤル・ツァンポー河の流れは、ヒマラツァンポー・リを源としたヤル・ツァンポー河の流れは、ヒマラットの背後の南手がよりた。

は、

永い間、

北側にはこれと平行して東へ流れるツァンポー河が古くから知られ

地理学者を悩ませた謎の川であった。ヒマラヤ山

このうちとくにヒマラヤ山脈の東南に寄ったブラーマプトラ河

中国大陸には大河川が多く、長さ一〇〇〇**以上の河川は千五、つけぬ堅固な要塞を彷彿させる。

な褶曲部分である。辺り立った山、深い渓谷が東西の交通を坊ずては、いくつかの山脈が平行して北から南に連なる地球上の最も顕著すべット自治区東部と四川省南西部と雲南省にまたがる横断山脈余りで、その多くは地形に即して東流し太平洋に注いでいる。

差は千~三千景に達し、気候の垂直変化も激しく、亜熱帯から寒帯江・金沙江・雅魯蔵布江が流れ、山上からこれらの川床までの高度いるところから横断山脈と呼ばれている。各山脈の間を怒江・瀾滄な褶曲部分である。切り立った山、深い渓谷が東西の交通を妨げてな褶曲部分である。切り立った山、深い渓谷が東西の交通を妨げて

る。 なっている。そして、横断山脈地域の大河川はおおむね南流していまで山麓から頂上へと変化するため、中国でも有名な生物の宝庫と

「大ヒマラヤ山脈は西はアフガニスタンから、南はミャンマー(旧「大ヒマラヤ山脈は西はアフガニスタンから、南はミャンマー(旧でルマ)、東は中国南西の省、雲南、四川にまで東西二四○○**以ビルマ)、東は中国南西の省、雲南、四川にまで東西二四○○**以ビルマ)、東は中国南西の省、雲南、四川にまで東西二四○○**以ビルマ)、東は中国南西の省、雲南、四川にまで東西二四○○**以ビルマブトラ河が、チベット側からヒマラヤ山脈を横断して、南側ラーマブトラ河が、チベット側からヒマラヤ山脈を横断して、南側のインドの平原に流れ出てくる。

 展高瀾げ顕山
 五

 芳度 滝 て 著脈
 百

 200

初頭にかけて神秘の大屈曲部をめぐって、多くの探検家たちを魅了 注ぐことが解明されるまでには、一七○○年代から一九○○年代の ル・ツァンボー河=ブラーマプトラ河とガンジス河がベンガル湾に 要したのである。ここではその歴史と探検をたどってみたいと想う」 てベンガル湾に注ぐことが確認されるまでには、 かったからである。 ていたが、この川が一体どこに流れ出すのか、だれも推測がつ (本書一〇~一一ページ) と言うようにヒマラヤを分水嶺としたヤ ツァンポー河がブラーマプトラ河と名前を変え 途方もない年月を かなな

昆 やナムチャバルワなどの山はもとより、 リック・M・ベイリー著)であった。その時は私の山登り事始めが から刊行されたヒマラヤ名著全集一の『ヒマラヤ謎の河』(フレデ ったために忘れられない一冊となった。 虫採集に端を発していることもあって、 私が初めてこの地域の書物に接したのは一九六八年にあかね書房 博物学的な記述にも興味を ヤルツァンポーの幻と滝

してやまない場所であった。

ながら一 て左側がナムチャバルワ、右側がギャラペリと識別するまでにそん 左手前方の雲の上に聳え立つ大きな山塊に気が付く。近づくにつれ 成都空港を飛び立った飛行機はミニヤコンカや横断山脈の山々を見 はチョモランマ峰の登山許可を取得し、念願のチベットに向かった。 一九八〇年、 い時間はかからなかった。 路ラサへと向かう。眼下の雪山に見とれている間もなく、 戦後初めてのチベット地区の登山解禁で日本山 出会

。世界最高峰の未登峰ナムチャバルワの初登頂までは、幾多の人々 九〇年八月、 ナムチャバルワ峰の中国との合同登山許可を取

> 要であった。 偵察・試登の繰り返しによる情報の収集・分析と体験の蓄積が必

0

経験、 を膨らませていった。 体験に触れながら、世界最高の未踏峰ナムチャバルワ登頂実現の 山岳連盟のペマコウチュンまでの踏査や、 初登頂のチャンスをものにするために中国隊のナイプン峰 中国科学院の資料、ヒマラヤ協会のギャラペリ登頂、 その他の貴い先人たちの までの

日目、 院のリモートセンシング用のセスナサイテーションを待つこと十三 辺の小型ジェット機による偵察をおこなった。北京からの中国 四二〇世の飛行をして峻険なナムチャバルワに接近した。 コンガ空港を飛び立った機はヤルツァンポー河に沿

十一月には読売新聞社の取材飛行に同乗して、

ナムチャバ

ル

7

周

でている。 に翠濃くその色を変え、所々には白い砂の堆積が自然の交響曲を奏 カーブとなって東へと向かっている。悠久たる流れは時に碧く、 のが望見できる。そして所々にダム湖を作り、 五きのとてつもない大河となり大きな鋼鉄船が荷物を運搬している 眼下には満々と水を蓄えたヤルツァンポー の流れが、 時には細いヘアピン 時には 四 時 1

プトラ河に沿って北上し、 チャバルワの南面に到達する。ベンガル湾の湿潤な空気がブラー 0) 白銀の峰を紺碧の空に突き上げている。飛行機はナムチャ 尖峰を中心に二○昔の円周内を正確に周回する。 小型ジェット機は時速五○○≒のスピードで約四○分ほどでナム 屈曲点でもたらす大量の降雪は 角錐 ル 7 7

さらに厚い雪を蓄えた北

面

主峰に続く立派なサンルン峰から、

峰の上空にさしかかる。我を忘れて押し続けるシャッターの合間に 長大な北西稜を跨ぎ圧倒的に切れ落ちる西壁を眺め、 ナイプン

ふと眼下を見ると、ヤルツァンポーの屈曲点は白蛇のごとく光り輝

で追ったが、チベット自治区人民政府と空軍の特別許可をもってし しい景色も網膜に焼き付けることしか出来なかったのは返すがえす ルツァンボー河の流れだけでも一冊の写真集となりそうな、すばら ても定められた範囲内の飛行と撮影しか出来ず、 ベイリーとモーズヘッドやキングドンウォードの踏査ルートを目 屈曲部の全容とヤ

あった。

トの豊富な動植物や昆虫を見ることが出来たのは、

望外の喜びで

二十二日、七四六〇ぱの地点に到達してその年の登山を終了した。 後の雪崩で大西隊員を失い、態勢を立て直しての登山再開も十 一九九一年の本隊のナイプン峰手前の六二〇〇以地点で、 降雪直 月

も残念であった。

一九九二年の隊は前年度の失敗の要因をいろいろな角度から分析 万全の態勢で挑んだお陰で十一名の日本・チベットの隊員が登

アタックは足掛け三年に及ぶ大仕事となったが、ヒマラヤ探検時代 一九九○年の偵察から一九九一年の本隊、そして一九九一 一年の再

ルワのベースキャンプから四三〇〇はのキャンプ1までは、 発し東進し五〇〇〇にの米拉を越えると回りの光景がガラリと変わ の先人たちの苦労には及ぶべくもない。 しかし、乾燥した西チベットの殺伐とした大地と比べ、ラサを出 葉樹から針葉樹を見るようになる。三五二〇ぱのナムチャバ 亜熱帯

Ш

「や場所が存在することを示唆している。

サム、ミャンマーに跨がる地域には深いベールに包まれた魅力的な

性気候の湿潤な環境に育まれたトウヒやシラビソの大原生林を抜

り、ケシボウズを見るだけだったが)・ダイオウや雪蓮など東チベ ケシ」(もちろん三回の入山はいずれもケシの開花時期を過ぎてお キャンプ2に続く谷に入れば一九一三年ベイリーの発見した け、シャクナゲの大木の間をくぐれば数々の高山植物の大地に至り、

かの本によって、その凄惨な旅の概要をかいま見ることが出来た。 まじさをまざまざと見せつけてくれる。 入手出来得るかぎりの資料を駆使して、 本書は著者の『ヘディン伝』や『西域列伝』に見られるように、 東チベット探検については、今までにも内外で出版されたいくつ 活劇のごとく秘境探検の凄

た土 生き返らせ、その躍動を伝えてくれる。まだまだ東部チベット、 検の歴史の整理とともに、その時代に駆け巡った探検家たちを今に るために必要なのが研究であり、そのための惜しみない努力である。 ある。ふと抱いた興味から夢を膨らませ、 本書は過去の多くの人達を魅了して止まなかった、 ヒマラヤ探検時代が終わったと言われ、 |地が踏査された後もまだまだ未知の部分が存在するのは事実で 作り上げた目標を達成す 長くベールに包まれ

登山記録を貪るように読破し、ヒマラヤの高峰への夢を馳せたよう 、モー その昔、若い人達がヤングハズバンドの『カラコルムを越えて』 本書が若い人達の目にとまり、 リスエルゾーグの『処女峰アンナプルナ』やその他の探検誌 先達たちの壮絶な探検に興味を

私だけではないであろう。 もったとき、新しい時代の幕開けが始まるであろうことを願うのは

重廣恒夫

五月号(五七六号

会報「山」

図書紹介一

覧

——一九九三年度

グリンデルワルト編『鈴鹿 私達の山」(成文堂

白籏史朗著『白籏史朗写真集 GREAT HIMARAYA』(朝日新聞社

●六月号 (五七七号

日本山岳会アルパイン・スキークラブ編『雪上散歩』 No.

湯口康雄著『黒部奥山史談』を読んで(桂書房

●七月号(五七八号

meter peaks JERZY KUKUCZKA "MY VERTICAL WORLD Climbing the 8 000

●八月号(五七九号

安曇村誌編纂室『地図でみる安曇村の昔と今―明治末期と平成の安

曇村全図―』(安曇村教育委員会

藤田和夫著『アルプス・ヒマラヤからの発想』

(朝日新聞社

高澤光雄編『北の山と人―その登山史的考察―』(日本山書の会)

●九月号(五八○号

平沢利夫著『北アルプス・スケッチ山歩』 (銀河書房

中島博昭編著一唄え安曇節 だれよりも安曇野を愛した男榛葉太生」

(郷土出版社

長岡忠一著『日本スキー事始め―レルヒと長岡外史将軍との出会い』

(ベースボールマガジン社)

平野武利著『山頂にて―中央沿線・山からのパノラマ』(山と溪谷社)

●十月号(五八一号)

斎藤一男著『山をよむ』(アテネ書房

初見一雄追悼集

日本植物分類学会編著『レッドデータブック・日本の絶滅危惧植物 鈴木弘道著『山の高さ』(日本測量協会

(農村文化社

●十一月号 (五八二号

太田五雄著『屋久島の山岳』(八重岳書房 静岡市山岳連盟編『静岡市の三角点一〇〇』

"FLOWERS OF THE HIMARAYA"

●十二月号 (五八三号)

久保田展弘著・新妻喜永写真『神の山 (山と溪谷社) 山岳宗教の源流をゆく―』

小泉武栄・清水長正編『山の自然学入門』(古今書院

ルドルフ・ヴァイス編『アルパイン・ディクショナリー』 沢聰句集 「縦走路」(ふらんす堂)

●一月号 (五八四号)

大和久震平著『古代山岳信仰遺跡の研究』(名著出版

「広島県山岳連盟五十周年記念誌」(広島県山岳連盟

A・チェリー=ガラード著/加納一郎訳 「世界最悪の旅 悲運のス

コット南極探検隊 (朝日新聞社

荒賀憲雄詩集『霧の中に』(文京書房

●二月号 (五八五号) 柴崎徹著

『宮城の名山』

牧潤一著 「レッツ・スケッチ 山の絵教室』(日貿出版社)

石原きくよ著『山を想えば人恋し―北アルプス開拓の先駆者百瀬慎 不破哲三著『回想の山道―私の山行ノートから』(山と溪谷社

太郎の生涯―』(郷土出版社

ジョン・ミューア著/岡島成行訳 "はじめてのシェラの夏」(宝島社

石田稔郎著『韓国の岩場

"World Directory of Environmental Organizations"

小泉武栄著『日本の山はなぜ美しい― 山の自然学への招待―』

●三月号(五八六号

E・シプトン著/田中純夫訳『エベレスト―一九五一 年の偵察遠征

(日本山岳会越後支部

岡田日郎著 「四季折々の 辿 東京新聞社出版局

增永迪男著 四手井綱英著『森に学ぶ―エコロジーから自然保護へ―』(海鳴社) 『霧の森―ふくいの山・四季―』(ナカニシヤ出

"CONPACT HANDBOOK OF THE BIRDS OF INDIA "A GUIDE TO BIRDS OF NEPAL"

PAKISTAN"

岡島成行著 田畑真一著 $\overline{\mathbf{w}}$ 『アメリカの環境保護運動』 ウェストンの信濃路探訪 (岩波書店

田 巽氏 (一九〇五~一九九四)

にひたったものである。 であったころの、神韻縹緲の山のこころに包まれているような気分 ときに大先輩にお目にかかってお話をうかがっていると、 山が山

なったものである。 の後に従って、霧の山稜をゆっくりと歩んでいるような気持ちに 機会は残念ながらなかった。しかし、あのお姿に接するたびに、そ いつお会いしても、温顔と穏やかな口調はかわりなかった。 は朝日新聞論説委員室OB会の会合などと、その場はいろいろでも、 日本山岳会の晩餐会、日本エッセイスト・クラブの会合、 遙かな後輩であるわたしには、島田さんのおともをして山に行く あるい

ページをふと繰ってみるならわしである。 れている。新聞の小さなコラムを書くのにこころ疲れたとき、その まったけれど、わたしの座右には、高雅の香りを放つご著書が残さ 優しさと知性の、あのお話をうかがうことはもうできなくなってし 、ま、その後姿は霧の奥を、遠く、深い高みへと消えてしまった。

追

・遙かなりエヴェレスト―マロリー追想―』(大修館書店)は、

V

悼

が語りかけてくる本である。 つ読んでも勇気を与えてくれる本である。行間から、 島田さんの声

わたしはアーヴィングに島田さんを重ね合わせながら、いつも読む 思案した」と「おわりに」にお書きになっているが、とんでもない、 マロリーの師アーヴィングのことなど、少し書き過ぎたかなと

後姿を拝しながら歩んできたのである。 私事にわたって恐縮だけれど、実はわたしと亡父は、島田さんの

事をし、先輩のよく行かれたのと同じスペイン料理屋に行き、ハム 入った。そして、島田さんと二十年の星霜をへだててロンドンで仕 しばしばきかされながら育った。わたしもサッカーをやり、朝日に た。幼いわたしは、休日の夕餉に、大先輩の知性とお人柄について 手であった。亡父も、少し後輩にはなるが、ほぼ同じ時期に早大の レットを観劇なさったのと同じ所で、それを見た。 選手であった。島田さんは朝日新聞に入り、やがて亡父も後に続い 大正から昭和初めの日本サッカーの創成期に島田さんは慶

のも、もとをたどれば鳥田さんの影響ということになる。 書感想文で、ヤングハズバントの『エヴェレスト登山記』を選んだ 本』などが並んでいた。中学二年生のわたしが、夏休みの宿題の読 の上での登山がもっぱらだった。書架には尾崎喜八さんの『山の繪 島田さんに学んで亡父も山好きになった。実際の山歩きよりも本

のですが、その偉大な影はわたしのような三十歳も年下の若輩にも が大勢いるのに、小生ごときが追悼文を記しているのは僣越そのも (島田さんと山行をともにし、山について親しく語り合っ

及んでいるというように、おくみとり下されば幸いです。)

求めた。 で、昭和二十六年、二十七年当時の縮刷版の中に「師」の姿を探して、昭和二十六年、二十七年当時の縮刷版の中に「師」の姿を探し

いてお書きになっていた。ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』戦後初の欧州特派員となった人は、まず英国の読書シーズンにつ

の草稿を目にしたときのことがつづられていた。赤、青、緑のクレ

記されていた。

うに語りながら、マロリーがエベレスト遠征の際に、ロバート・ブリー伝やタキトウスの『ゲルマニア』を読んでいたことをうれしそを想い出していた。ドウラギリI峰で安間荘氏が鳥田さんのマロをの記事を読みながら、名著『山稜の読書家』(茗溪堂)の一節

リッジス編の詞華集やハムレットを持って行って朗読したこと、こに言ったがで、「エー」だコペーン「美名の際し、エノ

いるのである。
W・ノイスがヒラリーのサポートを果たしたあと、ディケンズとド

た山稜の読書家たちと語り合っておられる、あの姿を。の声を聴くのである。同時に想うのである。遙かな高みで、すぐれは、ああ、何度読み返したことか。そして、読むたびに、島田さん

いたいものだ、と思っている」と結ばれているこの文章を、わたし

「これからも私は、多くの、すぐれた山稜の読書家たちに巡りあ

島田さんのあの、ちょっと丸味のある字で、「齢八十のささやかなこの本には、エーデルワイスを印刷したしおりがはさんである。

していることによってから。里程標のつもりでまとめたものです。ご高覧いただければ幸甚です。

一九八五年九月」と書いてある。

島田さんが歩いておられるではないか。社に何か用事があったのだ日酔いであった。ぼんやり窓の外を眺めていると、これはしまった。でバスに乗ってしまった。いつもは歩くのに、その日は不覚にも二本を頂戴したころのある日、わたしは新橋駅前から築地の会社ま

(轡田隆史)

であった。どこまでも、どこまでも進んでゆくような、永遠の足ど

りであった。

ろう。あの長い足で、ゆっくりと、しかし、

限り無く確実な足どり

略歴

九二七年 慶応義塾大学法学部政治学科卒業、東京電灯㈱入社九〇五年 一月二十五日生まれ

九三〇年 日本山岳会入会 (会員番号一二二七)。以降理事、

九三一年 朝日新聞社入社

議員など役職歴任

九四五年 同社論説委員兼務

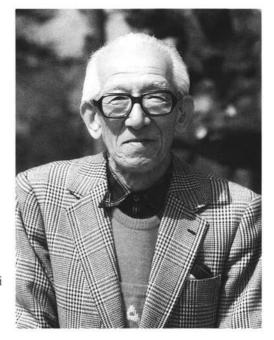
。 同社東京本社欧米部

長

九六〇年 同社参与

九六五年 朝日新聞社退社。人事官に就任

追 悼 OBITUARY



名誉会員 島 田 巽氏 SHIMADA Tatsumi (Hon. Mem.) (1905~1994)



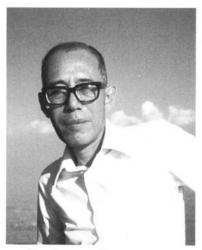
名誉会員 関 根 吉 郎氏 SEKINE Kichirō (Hon. Mem.) (1915~1994)



橘 真 琴氏 TACHIBANA Makoto (1901~1993)



近藤恒雄氏 KONDŌ Tsuneo (1902~1993)



花 井 馨氏 HANAI Kaoru (1914~1994)



内 田 耕 作氏 UCHIDA Kōsaku (1908~1993)



海野治良氏 UNNO Haruyoshi (1906~1994)



鶴 岡 元之助氏 TSURUOKA Motonosuke (1900~1993)



小 林 基 子氏 KOBAYASHI Motoko (1932~1993)



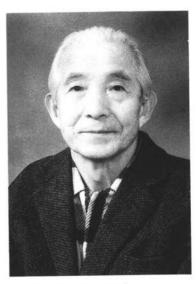
三島昌夫氏 MISHIMA Masao (1935~1993)



岩 下 莞 爾氏 IWASHITA Kanji (1935~1993)



佐藤正倫氏 SATŌ Masanori (1963~1993)



金 井 五 郎氏 KANAI Goro (1909~1993)

九七七年 主なる著書 人事官任期満了

九四九年 『マーシャルプラン 米国の対外援助政策』 朝日新聞

九五三年 『今日のヨーロッパ』朝日新聞社 刊

九五五五年 『ふだん着の英国』暮しの手帖社刊

九五六年 松方三郎共訳『わがエヴェレスト』朝日新聞社 訳書『新聞と大衆』岩波書店刊

『カンチェンジュンガその成功の記録』

九五七年

訳書

朝日新聞

九七六年

『山・人・本』茗溪堂刊

「遙かなりエヴェレスト─マロリー追想─」大修館書

九八五年 『山稜の読書家』 茗溪堂刊

関 根 吉 郎氏(一九一 五~一九九四

関根吉郎・その登山の軌跡

かしこれも正確な説明ではない。 るヒマラヤ派的な人々との間で相克が繰り返された時代がある。し いうべき人々と、マンメリーに触発されてより困難なルートを求め 早大山岳部の歴史を辿って見ると、広く山を愛する逍遙派とでも 逍遙派といってもワンダーフォー

> だが、このようなこだわりが嵩じてイデオロギー論争に迄発展して、 強いて云えばヒマラヤを視野に入れるか入れないかの違い、あるい ゲルのような山歩きをしていた訳ではなく、冬の剱岳西面に新しい は都会育ちと地方出身者との気風のちがいであったかも知れないの 足跡を残したり、積雪期ジャンダルム飛驒尾根を登った人達である。

他者を排除したり、袂を分かって分裂するとなると矢張り穏やかで はない。 早大山岳部はその正式報告書リュックサック八号 (No1、No2)

れ後輩として又登山史家としての困惑をのべている。この事件のヒ であるが山崎安治は『穂高星夜』『山の序曲』などでこのことに触 の空白を残してしまった。その遠因は前にのべたような事によるの を一九三九(昭和十四)年に発刊しているが七号との間に約四年間 マラヤ派のオピニオンリーダーの一人が関根吉郎であった。

崎安治などがいた。 鈴木の他、難波清一、今村正二、吉阪隆正、杉本義信、 早大の鈴木正俊などがおり、早大山岳部では前後の年代を含めると あったようだ。付属中時代からの山の友人は松高に進んだ村山雅美、 ひとかどの登山観を持ち目標を立てて着実に実行していく人柄で に日本山岳会に入会した(昭和八年九月)ことを見ても若い時から 田高等学院理科に入学、同時に山岳部に入部した。付属中の頃、 関根は一九三五(昭和十)年、東京高師付属中を経て、第一早稲 百瀬孝、 Ш 既

の人には少し分かりにくい。その頃早稲田の体育会運動部はロサン 方、スポーツ的な登り方をしようというものであったが、これは今 当時の関根の思想は、 早稲田の体育会に属する山岳部らしい登り

である。 ゼルス、 国 昭和十二年日支事変勃発、 当時の国情も考え併せる必要があろう。 伊藤愿による京大K2の計画などが刺激になっていた筈であるが、 る。この背景には昭和十一年立大堀田らによるナンダコート登頂、 にヒマラヤの高峰を登ることができる極地法登山の推進と実践であ その具体策として提案されたのが不断のトレーニングと、安全確実 いという願望と義務感のようなものがあったと思われるのである。 東京大会を目前にして、 怪し気なイデオロギーで染め揚げる傾向が無かったとはいえない。 チスの国家社会主義的な思想の流れはスポーツ全般は勿論 中が統制 従って山 ル 一色になり、 リンの両オリンピックに多数の選手を送り出 岳部も第一級の登山を行い、 第一級のスポーツ集団と見られていた時代 英米依存からドイツへの傾斜に伴って、ナ 引き続いて国家総動員法の成立、まさに 昭和十一年二・二六事件、 ヒマラヤを目指 、登山 次の した 迄

体

おであったらしい。この悩みと遠征登山の意義については

は何処に遠征して自らの思いを晴らしたらよいのか、

悩みもひとし

かなりな成果を挙げていくのである。 もっと自 部の小さなサークルの中でもこの画一的な登山論に飽き足りず なに魅力的に見えたか、少しは分かるような気がする。しかし山 岳部の若者達にとって、一見個人否定にも見える極地法登山がどん そう考えると、 十大山 岳部 由な登山を求めた人達がいたことも忘れてはならない。 はこの後 稜より 時勢に敏感で探検としてヒマラヤを夢見ていた山 関根達の努力によって第一次冠帽峰 第二次冠帽峰 山登りとしては明神岳東稜が と極地法登山を軸として 新高 岳

を登るということには多少のロマンチシズムも無い訳ではない

が当

口

関

根

のコンビが大奮闘する姿を目にしたことがある。そして相

は

だが他の計

三面については少し説明がいる。これら外地の

そして極地法は格好な演習問題であったかも知れない。

まり新聞紙上を飾ることもなかった。 たちの方が登山としては遙かに難度が高い。しかし彼等の成果は 同じくして東面の民幕谷を直登して冠帽峰に登った京城大の泉靖 過儀礼として欠くことのできないものであったようだ。 征する山々は彼等のプレイグラウンドの一 ヒマラヤを目指す若者達にとってこういう形式の遠征は一 内地の学生が意気高らかに 部に過ぎない。 早大と時 彼等は 0 0 通 あ

籍していた関根はまるで遠くから眺める巨峰のような存在であっ 勢が定着した早大山岳部に入った私にとって、たまたま十二月迄在 における山と探検」の中で梅棹忠夫が明解に指摘している 露営の講義をしたりしたが一九四四 四二(昭和十七)年十一月関西支部主催の冬期山岳研究講座で雪中 た。卒業後腎臓を患った為兵役につかず暫く関西に勤務した。一九 一九四一(昭和十六)年、 第二次冠帽峰遠征が終って、 (昭和十 九 年早大応用化学の 極 地法

度、 た。 する役目を背負った時代である。 研究室に戻り敗戦を迎えることになった。 「行軍登山」の名の下に全国組織を持っていた日本登山 既に谷口現吉 関根が対外的に目覚ましい活躍ぶりを見せるのは戦後である。 岳連盟)との調整、 残る問題は登山協会対策であったが、 日本山岳会が体協に加盟し全国の登山団体をまとめ国 関根らの 学生登山者層の吸収であった。 指導 0 下にあり 懸案となっていたのは戦時 松方· 関西も殆ど支障は 藤 島体制の下で谷 関東学生連盟 |体を推進 中から なか (日本 T

時

一京一、一京に、三宮・三宮・三宮・三宮・三宮・三宮龍胤、とそれぞれ稲門の先輩であったことも皮肉な話である。子側の指導者は関東は小笠原勇八、小島六郎、関西は藤木九三、

四

あったのである。 L に力を盡くすと同時にヒマラヤ登山を夢見るようになっていった。 を初めて目にするような新鮮な喜びであった。そして関根の考え方 4: 私の勝手な推測である。 だけではなく、 る。そしてこの人間集団はそれぞれの属している大学山 て山岳会に出入りするようになっていったが、 まに挙げると、 かし講和条約 提案が他大学の人々に少なからぬ衝撃を与えたことも事 集団との間の討論や研究会に参加することは私にとって広い世間 一方日本山 浜野正男、 関根が一目置き、 岳会学生 谷口現吉、 林和夫、 色彩の異る多数の先輩から影響を受けるように も結ば 部として再出発した学生 れていない敗戦国の現実には自ずと限界が 私もOBの端くれとして関根に引っ張られ 辰沼広吉などの名前が浮 堀田彌一、今村正二、藤井運平、 ひそかに認めていた人々を思 これらの諸先輩と学 一登山界は谷口 かがぶ。 勿論これは 岳部の強化 手実であ 望月達 つくま ・関根

その対策として一九四九 に当って学生層から反発を受けて関根が拒否される事件があっ からない点がある。 遠征を唱えプロードピークの計画で若いOB達を引っ張っ 機が熟するのを待っていても良かった筈なのだが、 関根があんなにあせっていたのは何故だったのかよく分 Ш 戦後、 岳部も順調に育ちつつあった。 現 実は先に述べた通りで皆がうんざりしてし (昭和 早大山 二十 岳部 四 の内部ではペテガリ岳 年自ら監督に就任して学生 従って周囲 の計 只管 四の環

> 九五二 二十六)年に実行できていればマナスルに始まった日本登山界の を持てないものだとす 中であった。登山とは常に新しい経験の積み重ねの上にしか存在感 八)年五月には第一次マナスル隊が八千に峰の洗礼を受けている最 査隊は日本を後にしているし、 の海外登山として評価されたかも知れないが、この隊が出発した一 もなく、甚だ面白味に欠けるものになってしまった。 部隊に先導された登山は、考えていた試みが実行できるような機会 ン大統領の手厚い保護を受け登山は無事終了した。しかし同 側の延期要請によって実行は翌年になってしまった。狙い通りペロ の発展にうまく同調できたかも知れないのだ。 云う可く、 7 まった時代である。こんな時在留邦人の多いアルゼンチンに着 アコンカグアに方向転換を計った関根の着想は (昭和二十七)年十月より二ヶ月前、 魅力的なものであった。そして計画通り一九 ればこの登山隊はいかにも影の 彼等が帰国 した一九五三 今西錦司のマナスル踏 しかしアルゼンチン 確かに戦後初 Ti 和二十 Ш 次 和

くされそうになっていた時点で既 検的な視点からヒマラヤを捕えていた彼には八千台 とから面積への拡がり、より探検的なものへの回帰である。 きなかった。それだけ スを論じ、極地法登山を推進してきたのにその先頭を切ることはで か。昔からあれ程情熱的にヒマラヤ遠征を切望し、そのタクティク ではなかろうか。 この頃から関根の心の中には何か変化が出始めたのではなかろう 昭和三十年頃から朝日新聞社と組んで南 が原因とは云えないが、 に興味の対象ではなくなっていた 高さを追 峰 が殆ど登り 求めるこ 0

なってしまった。

が、今、ふと想うことは、 れることになってしまった。この間の事情は私にはよく分からない は参加していたのに、最終的には西堀栄三郎、村山雅美に引き継が の設営を分担しようとしたのである。三十一年涛沸湖の予備試験迄 関根は、その着想は抜群、人を引き込む

甘く見ていたのではないかという疑念である。 説得力も大したものであったが、 組織については稍無関心、むしろ

が、キリマンジャロもケニヤも登山としては平凡、事のついでに登っ 鴫原らに拒絶されるのである。今考えれば大人気ないことであった 引き入れ、山岳部との共催を考えたが、山岳部長近藤等、監督村木・ 検を加味した赤道アフリカ探検隊を計画した。これには自動車部を のような顔で行くのはお断り、あく迄個人的な立場でという論旨で てくるのはよいが、山岳部員が譬え、女性でも部を代表する大事業 極に引き続いて、一九五八 (昭和三十三) 年には山と若干の探

る。 う願いが伏線になっていたようだ。この後、一九六○(昭和三十五) あったが彼自身の行動は少しずつ登山からはみ出して行ったのであ 年、吉阪隆正に率いられたマッキンリー登山などはその現われで この計画には将来七大陸の最高峰を早大の関係者で登りたいとい

ング協会の役員として国際部長迄務めるに到ったこと――丁度一九 ティングにほれ込み、大学の部長、さらには日本ウェイトリフティ 迄は分かり易いが、トレーニングとして推奨していたウェイトリフ 早稲田の中に若い同志を集めて探検部の創設者になる。この辺り (昭和四十九)年国際舞台で中国と台湾の交替劇が行われた微

> 囲の人間にとっては甚だ分かりにくい部分があった。 件を起こした山岳部に対して、学内で廃止論を唱えたことなど、

妙な時期の調整役を果たした――、少し前後するがたまたま遭難

の交友関係は続き、 しかし関根の日常は山と全く縁を切った訳ではなかった。 山崎安治の登山史の仕事にも人一倍関心を持ち 昔から

の出自である山岳部に対しても一度は廃部を唱えながらも折ある毎 応援したし、山岳会の有志閑談会の出席率もよかった。そして自分

5 執して反対者をやっつけるだけの頑固おやじで、好き勝手にやって に姿を見せ、厳しい批判と叱聲を絶やさなかったのである。 生を終わったのかと思われかねない。それでも良いのだが、昔か 関根に育てられ、時には従い、時には彼を反面教師と見て今日に ここ迄書いてくると関根吉郎とは一体なんだったのだ。自説に固

だ。司馬遼太郎に「日本的感性」という小文があるが、「日本では 我々はその文化の定義と分類を明らかにするのを忘れ 関根は若い時から登山は文化なりと喝破していたが、 ていたよう 聞 にく方の

を記して終りにし度い。

到った者の一人としては、もう少し増しな名誉会員関根吉郎の総括

は好かれない類いであったかも知れないと思えるのだ。 この考え方を当て嵌めると、どうやら関根の登山文化論の芯は西欧 音楽や絵画のような創造的な文化の面でピカソやゴッホのような の荒々しくダイナミックなもの、そして、ひょっとすると日本人に ようなものが好まれ、見てもその方が心が休まる」と述 大な個性は生まれにくい。ともすれば様式化され、平面的な光琳の しかしこの べている。

荒々しさの中にも女性に対する優しさと思いやりが隠れていたこと

なって、 に対する最高の誄詞ではなかったろうか。 求め、私たちに挑戦することの素晴らしさや、勇気ある行動の大切 と誇り高さだけは心底に秘められていたのではなかったろうか。本 ようになったかと思うのである。しかし何物をも恐れない向う意気 る処であったようだが、このことについては後輩今村俊輔が記して さを教えて下さいました」という一節があった。これこそ関根吉郎 年四月に行われた「偲ぶ会」の案内状に、「生涯夢とロマンを追い 静まり、 U いる。更に晩年、養子縁組した寿美子を支えとして生活することに を知る人は少ない。おそらく御母堂に対する敬愛と訓育の然らしめ い人もついに人並みになったのか、若い時の激しい登山観も自ずと たという話を聞くと、 仲間百瀬孝の中房温泉を訪ね、 緑の山々に心の安らぎを求める日本的な自然観にひかれる 思いもかけない心の安寧を得たようだ。亡くなる前年、 思わず胸を打たれるのである。あの誇り高 唯呆然として安曇の山河を眺めて

九一五 (大正四) 年八月四日 を名乗る。東京高師付属小、付属中を経て、三五 都小石川に生まれる。一八年母の実家廃家につき関根姓 年早稲田大学第一高等学院理科入学、四一 年十二月同大学理工学部応用化学科卒業 松井秀三郎、栄の長男として東京 昭 (昭和 和十

(昭和八) 年九月 冠帽峰遠征、 早大山岳部時代は、 三九 日本山岳会入会 (昭和十四) 三六 (昭和十一) 年一月第一次北鮮 年一月台湾新高山遠征 (会員番号一四六九)。

> 四〇 昭 和十六)年一 (昭和十五) 月第二次冠帽峰遠征 年三月明神岳東稜より奥穂高へ、

和十九) ~四六 (同二十一) 年 日本山岳会幹

九四四

九四九 九四六 (昭和二十四) (昭和二十一) 助教授、六二(同三十七)年教授 年 年 早大理工学部講師 関東学生連盟理事 五 五

同三十

年

九五三 (昭和二十八) 年一月 リフティング部の部長をも兼る。 同部部長、また五六(同三十一)年頃より早大ウェイト どの隊長を務めた。五九 (同三十四) 年早大探検部創立・ 遠征隊、六一(同三十六)年早大メキシコ学術調査隊な カグア登頂、五八(同三十三)年一月早大赤道アフリカ 山岳部学生・OBを率いてアコン

九八六 (昭和六十一) 年 早大退職、 同名誉教授

九八八 (昭和六十三) 年 日本山岳会名誉会員、 同年寿美子と養

九九四 (平成六) 子縁組 年一月 東京女子医大病院にて肺炎のため死去

村木潤次郎

近 藤 恒 雄 氏(一九〇二~一九九三)

なく亡くなる数ケ月前まで、大磯の自邸の背後の高麗山を平常のよ 近藤さんは殆ど九十一歳近くまで長寿を保たれた。それば かりで

実に長いこと山歩きを楽しみ、それを生涯の伴侶とした。ら、十七、八歳から九十歳ぐらいまで、戦中戦後の混乱期を除いて、うに散歩し、入院されたのは極めてわずかだったようである。だか

老年になっても脚力の衰えを見せなかったのは、一九六六(昭和と言えるのかも知れない。と言えるのかも知れない。と言えるのかも知れない。と言えるのかも知れない。と言えるのかも知れない。

どであった。

五(昭和十)年七月の燕岳から團衛谷下降もそういう山の一つで、五(昭和十)年七月の燕岳から團衛谷下降もそういう山の一つで、鉱山㈱に入社し、後年三井化学工業㈱創立と共にそちらへ移った。私が一橋山岳部に入った。卒業は一九二九(昭和四)年で三井立後間もない山岳部に入った。卒業は一九二九(昭和四)年で三井立後間もない山岳部に入った。卒業は一九二九(昭和四)年で三井立後間もない山岳部に入った。卒業は一九二九(昭和四)年で三井立後間もない山岳部に入った。

機会はなかった。

機会はなかった。

の本勤となり九州へ移られたので、戦後東京に復帰される迄同行の人転勤となり九州へ移られたので、戦後東京に復帰される迄同行の人転勤となり九州へ移られたので、戦後東京に復帰される迄同行したが、一型年十月中旬には奥秩父の道の定かでない山旅に同行したが、一

それに加えて頂いたのが近藤さんとの初めての山だった。

原藤七さん等の山に年季の入ったよい仲間が近藤さんの周りに出来その頃はよく深田久弥、川喜田壮太郎、川崎精雄、佐藤久一朗、笠秋の和名倉山で、藤島敏男さん、村尾金二さんとの四人だったが、戦後初めて近藤さんと同行したのは、一九六三(昭和三十八)年

て、実に楽しい時代でもあった。

そのうち深田、

川喜田、

村尾、

藤島、

佐藤さんなどが順次鬼籍に

非常に大きい心の痛手であり、胸中の寂寥感は見るに忍びえないほ九月の村尾さんの長逝は、無二の親友でもあった近藤さんにとって入られ、周辺が次第に淋しくなった。殊に一九七五(昭和五十)年

に行かれたりしたようだ。 をれから後は私がよく同行した若い仲間の山行に参加したり、近に行われた針葉樹会(山岳部OB会)の懇親山行に参加したり、近に行かれた針葉樹会(山岳部OB会)の懇親山行に誘ったり、たま

私の思い出に残る晩年の山旅のなかで、殊に近藤さんが喜んだのは、牧野衛さんの案内を受けて、奥三河の低山へ何度か出かけたこは、牧野衛さんの案内を受けて、奥三河の低山へ何度か出かけたこは、牧野衛さんの案内を受けて、奥三河の低山へ何度か出かけたこは、牧野衛さんの案内を受けて、奥三河の低山へ何度か出かけたこは、牧野衛さんの案内を受けて、奥三河の低山へ何度か出かけたこは、牧野衛さん八十三歳、牧野さんにしても七十九歳という高齢で、が、近藤さん八十三歳、牧野さんにしても七十九歳という高齢で、江目目は小雨だったが近藤さんの足腰のしっかりしていたのには驚くほかなかった。

牧野さんや同行した水野公男、中山啓司さんらにいつも感謝してい牧野さんや同行した水野公男、中山啓司さんらにいつも感謝してい近藤さんにとっては、これらの低山が晩年での大きな楽しみで、

と五十回に近い。登った山の名の羅列は紙幅の点からも省略したい近藤さんと同行した山は、奥三河が最後になったが、数えてみる

追

五八二号三ページ参照

望月達夫

とのないような山が多かった。

近藤さんは針葉樹会、一橋山岳部に対し終生楽しみ、大切い友人をつくり、その人達との山歩きや付合いを終生楽しみ、大切い方人をつくり、その人達との山歩きや付合いを終生楽しみ、大切い方人をつくり、その人達との山歩きや付合いを終生限りない愛情を注が近藤さんは針葉樹会、一橋山岳部に対し終生限りない愛情を注が近藤さんは針葉樹会、一橋山岳部に対し終生限りない愛情を注が

たら俺は山を止めるよ」というのが信条の一つでもあった。持って貰うようなことはなかった。「自分の荷が自分で担げなくなっめて厳しく、例えば山歩きの際にかつぐ荷物などは、絶対に他人に他人に対しては、肌理細かい愛情を示したが、自らに対しては極

一郎君は追想する。

一郎君は追想する。

一郎君は追想する。

一郎君は追想する。

一郎君は追想する。

とを記しておく。 の一社員から三井化学工業(現三井東圧化学)の副社長になったこの一社員から三井化学工業(現三井東圧化学)の副社長になったことを記しておく。

ため大磯町の病院で逝去。 一九九三(平成五)年六月十三日午前〇時十分、急性呼吸不全の

会籍を離れたが一九六八(昭和四十三)年三月復活。(なお会報『山』紹介者は浦松佐美太郎、松方三郎、藤島敏男の三氏。戦争直後一時本会への入会は一九三〇(昭和五)年六月、会員番号一一九四、

橘 真琴氏(一九○一~一九九三)

り一周り上の同じ丑年、よく冗談で私の葬儀には必ず弔辞を読んでこの人は百歳まで大丈夫だと誰もが信じていた。九十二歳で私よ

下さいと話していた。

葬養の参列督は多影であった。南毎鉄道関系卸歴々、球団では鳴た。余りにも突然の親族、後輩に看取られながらの死であった。一九九三(平成五)年十二月二十五日夕刻、静かに生を終えられ

とは札幌北海中学の二年後輩であったとか。日本山岳会からは元会長等、異色は元オリンピック陸上選手南部忠平氏。この人は橘さん岡さんが、杉浦元投手は九州から、関西学院の院長、学長、同窓会葬儀の参列者は多彩であった。南海鉄道関係御歴々、球団では鶴

長今西壽雄氏もお見えいただいた。

を実現したことは我々関西人の誇りであった。
代表としてプロ野球全国制覇を成しとげ、所謂大阪御堂筋パレード代表としてプロ野球全国制覇を成しとげ、所謂大阪御堂筋パレードで良くみる。そんな性格が指導者としてかつての南海ホークス球団温顔は人をひきつける魅力を持ち、明るく抱擁力があり後輩の面倒温顔は人をひきつける魅力を持ち、明るく抱擁力があり後輩の面倒

三つあったと。その一つは勿論南海の優勝、二つ目は関西学院大学この南海優勝に関し、橘さんは今年は自分にとって嬉しいことが

フィックに遠征事務の裏方達数名を招待していただいた。とに角ペルー遠征を祝してと、紀州白浜の南海経営のホテル・パシ山岳部のペルー遠征の成功、三つ目は何だったか今思い出せない。

橋さんはスポーツ感覚にすぐれ、剣道は四段の腕前、関西学生スキー大会に選手として出場、ゴルフ歴も長く、シングルのハンディキー大会に選手として出場、ゴルフ歴も長く、シングルのハンディー大会に選手として出場、ゴルフ歴も長く、シングルのハンディーの発音に表す。

数年前には永年会員になっておられます。会員番号は一七七七でし数年前には永年会員になっておられました。日本山岳会にも一九三九(昭和十四)年に入会され、られました。日本山岳会にも一九三九(昭和十四)年に入会され、られました。日本山岳会にも一九三九(昭和十四)年に入会され、日迄六十余年に亘り山岳部・山岳会の指導者として会長を勤めてこられます。会員番号は一七七七でし、数年前には永年会員であり、記録的な登攀こそ山歴としては関西学院山岳部創設期でもあり、記録的な登攀こそ山歴としては関西学院山岳部創設期でもあり、記録的な登攀こそ

四季を楽しむかたわら、つい先年まで理事長をしておられた千刈カ趣味は植物に対する造詣が深く、自宅の庭に色々の花木を植えて

した。橘さんがなくなられても約束を実行し、その写真を霊前におれていまいまで、要年それが成長した時ゴルフ場付きの植木屋が日頃見かけない雑草と思い刈り取ってしまったと、嘆いておられました。それに、一様立と思い刈り取ってしまったと、嘆いておられました。それに、一様立と思い刈り取ってしまったと、「でいておられました。それに、「ないが、要節の花が咲いたらかずに翌年再度植付け、今では毎年花を咲かせているとのこと。際りずに翌年再度植付け、今では毎年花を咲いせているとのこと。といれているとのに簡単なカメラはないか、季節の花咲いたらい、「ないでは自分で選定した草木を配置し、その育成充実をといた。「私では自分で選定した草木を配置し、その育成充実をといい。「私では自分で選定した草木を配置し、その育成充実をといい。「私では自分で選定した草木を配置し、その育成充実をといい。「ないが、「ない」といいました。

す。

こうした橘さんの後輩に対する気配りは私だけでなく皆に注がれていたものです。この度の葬儀に際し、御親族の方から一切の仕切ていたものです。この度の葬儀に際し、御親族の方から一切の仕切ていたものです。

供えしたいものです。

(塩津正英

学を出るとすぐ中国に渡り、

カメラマンの助手を勤める。

昭和

内田耕作氏(一九〇八~一九九三)

一九九三 (平成五) 年、年の瀬もいよいよ押しせまった十二月二十八日の早朝、山岳写真の先輩、Kさんから訃報が飛び込んで来た。内田耕作さんが亡くなったと言う。しばらく体の不調を訴えていた」とは人づてには聞いていたが……。享年八十五歳。
ことは人づてには聞いていたが……。享年八十五歳。
ことは人づてには聞いていたが……。享年八十五歳。
ことは人づてには聞いていたが……。享年八十五歳。
ことは人づてには聞いていたが……。享年八十五歳。

をこよなく愛し、とくに山頂周辺のオブジェ的な花崗岩群は内田さ出展する写真の多くは詩情豊かな作風であった。そして「燕岳」に開催する協会写真展には欠かさずに出品するという現役ぶり。また日本山岳写真協会(風見武秀会長)の名誉会員として毎年秋

を持ちよく山に登ったと言う。 を持ちよく山に登ったと言う。 を持ちよく山に登ったと言う。 を持ちよく山に登ったと言う。 を持ちよく山に登ったと言う。

十年頃帰国、神楽坂で喫茶店「RELO」の経営をまかされる。十年頃帰国、神楽坂で喫茶店「RELO」は、そのうち山の写真好きの溜り場となり、山村民俗研究家の岩科小一郎さんの呼びかけで内田さんをはじめ船越好文さん(会員番号一九四六番)も加わり一九三六(昭和十一)年の夏さん(会員番号一九四六番)も加わり一九三六(昭和十一)年の夏七年は、日本の名の重鎮・木暮理太郎さんを迎えた。

員番号二二○五・永年会員)も入会する。 一九三八(昭和十三)年には船越さんの紹介で風見武秀さん(会

で大活躍、とくに仕上げの技術は抜群であった。けられるということで多くの愛好家が入会、内田さんは指導的立場いなかった。しかし、CHCに入れば、山と写真の両方の指導が受いなかった。しかし、CHCに入れば、山と写真の両方の指導が受いなかった。

のまま数名の仲間らと居残ったと言う。 昭和十四年、創立三年後にしてCHCはついに分裂。内田さんはそ 方では会員が増え過ぎ、そのため運営上さまざまな問題が起こり、 もしばしば登場した。しかしクラブの活動は目覚ましかったが、一 もしばしば登場した。しかしクラブの活動は目覚ましかったが、一

め三浦敬三さん、塚本閤治さんも加わった。 を創立しメンバーには槍ヶ岳山荘の創立者・穂苅三寿雄さんをはじを創立しメンバーには槍ヶ岳山荘の創立者・穂苅三寿雄さんをはじ

、ボミニュ。戦中のため、山の活動もままならなかったのでは船越さんがいた。戦中のため、山の活動もままならなかったので員番号一九五○番)、太平洋戦争突入の年であったが、会の先輩に向田さんが山岳会に入ったのは戦前の一九四一(昭和十六)年(会

らだと言われる。その頃私も協会に入れて頂き内田さんの作風からたが、本来の資質と感性が発揮出来たのは昭和三十年代に入ってか山岳写真協会」と改める。内田さんは早速協会のメンバーに加わっ戦後「東京山岳写真会」は会員が全国に及んだため名称を「日本

の写真愛好者たちを魅了させた。というになった。中でもボエティックな描写で捉えた燕岳の写真は山ようになった。中でもボエティックな描写で捉えた燕岳の写真は山くなり優れた作品を次々と山岳雑誌に、また写真展などで発表する一九六九(昭和四十四)年、山岳会に復帰すると山行の回数も多の写真愛好者たちを魅了させた。

多くのことを学んだ。

ていた。

「山のABC」などの編集同人として活躍し持ち味を発揮した著書『山のABC』などの編集同人として活躍し持ち味を発揮した著書『山のABC』などの編集同人として活躍し持ち味を発揮した者書『山のABC』などの場合の文芸誌『アすでに山岳写真家として名を馳せていたが、その頃山の文芸誌『ア

となっていた。となっていた。となっていた。となっていた。となっていた。とのビル内に移り、これを機会にコーヒーショップ「アルプ」を開くのビル内に移り、これを機会にコーヒーショップを経営し、後に店は近当時有楽町のビルの一角でカメラショップを経営し、後に店は近

ンディー、コーヒーにクラシック音楽。とくにモーツァルトに夢中山と写真の他、好きなものと言ったら、まずビール、そしてブラまで首にニコンをぶらさげ現役として滑っていた。

スキー歴は古く、その技術はプロ級の腕前とか、

とまれ八十近く

奏曲が式場に流れた。若い世代の会員と好きなビールで喉を潤しな告別式には故人がもっとも好きであったモーツァルトのピアノ協

になっていたという。

表したい。

(羽田栄治)

花井 馨氏(一九一四~一九九四

「弥彦に生を受け、育った私の最初の登山は勿論、弥彦山である。「弥彦に生を受け、育った私の最初の登山は勿論、弥彦山である。大正十年の春、弥彦西尋常小学校に入学した時の校長は、山好きの大正十年の春、弥彦西尋常小学校に入学した時の校長は、山好きの上級生に励まされ稜線下の急坂を登り切り、今吾々が『佐渡見平』と名付けた日本海が見渡せる場所で涼風に当たり、子供ながらホッと名付けた日本海が見渡せる場所で涼風に当たり、子供ながらホッと名付けた日本海が見渡せる場所で涼風に当たり、子供ながらホッとしたことを今でも鮮明に覚えている。全校登山は何回か続き、ことしたことを今でも鮮明に覚えている。全校登山は何回か続き、ことしたことを今でも鮮明に覚えている。全校登山は何回か続き、ことはでいる。

あったが、スポーツこそが次代を担う若者達を育成することができ会長の要職にあったからである。そんな多忙を極めていた先生で信越特定郵便局長会の会長をし、その後、全国特定郵便局長会の副便局の局長さんが滅多にしか弥彦にいない。それもそのはず先生は、独りのがあったが、スポーツこそが次代を担う若者達を育成することができ会長の要職にあったからである。そんな多忙を極めていた先生は、外方の手には先生は、外方郵便局長であった。当時の新私が物心ついた時には先生は、弥彦郵便局長であった。当時の新

共に会長として後進の指導に当ってこられ、弥彦スキークラブ、弥 る源であるとして、その振興に努力された。特に、スキーと登山 彦山岳会を新潟県にあって有数の組織として育ててくれた。 クラブを、一九五一(昭和二十六)年には弥彦山岳会を創設され ついては、 時代は少し遡るが、一九三四 (昭和九) 年に弥彦スキー 7

1本山岳会には一九四六(昭和二十一)年に入会され、会員番号

二三六四だった。

奥さんも昨年の十月に逝くなられた。柔和で物静かにお話しされて 訪れていた。先生がお留守の時には奥さんが応対されていた。その 県の山々を紹介されていた。先生の自宅は常に山仕度をした人達が 山を求心力として多くの岳人を弥彦に招いて弥彦山はもとより新潟 は弥彦の地で開催することが恒例となっている。先生は、霊峰弥彦 越後支部の役員としてその発展に尽力された。越後支部の定期総会 お二人囲炉裏端で来し方を静かにお話しされておられることだろ いるお姿が偲ばれます。忙しかった先生を奥さんは彼岸に迎えられ、 また、弥彦のみでなく県内の登山者講習会の講師や、 Н 本山 岳会

ことで「弥彦山の雨乞行事」を再現することになった。故事では、 の変化もあって、かつての賑わいも下降ぎみであった。 越後平野に旱天が続くと弥彦の農家の人達は弥彦山に登り頂上に仮 の活性化のため、 先生を語るに忘れることのできないものに、 越後一宮・彌彦神社の夏祭り「灯籠神事」が戦後の大きな時代 ひたすら雨を祈り雨が少しでも降れば仮小屋を焼き、 お祭り当日に弥彦山にちなんだ何かを、という 弥彦山松明登山があ

追

悼

に第一回弥彦山松明登山祭が実施された。 H Ш 拝道は火の列が連なり壮観であったという。先生は、 て山麓で待っていた農家の人達は高張提灯を掲げて迎えに登り、 夜間であれば、その火を松明に移し灯りにして山を下る。 の実現のために奔走された。一九五四 日本山岳会越後支部長藤島玄先生と県下の岳人達の支援のもと (昭和二十九) 年七月十三 弥彦山松明登 これをみ

弥彦山松明登山祭讃歌

神山弥彦ぞ

越路の象徴

二百万人 仰ぎて崇し

神意を慰めむ 岳人集りて

太古のままの 心を捧ぐ

満山火をもて 輝して進む

岳人三百 意気ぞ高

今日まで多くの参加者によって愛唱されてきた。 山祭讃歌」を全員で合唱しながら下り、市中を行進するのである。 五日の夜弥彦山頂より松明を手にした岳人達がこの 詩は先生が作られ 「雪山讃歌」の曲で歌うのである。 「弥彦山松明登 毎年七月二十

と願うものである」と書いている。当日は病軀をおして松明を手に、 謝すると共に、この松明の灯を二十一世紀につないでいって欲しい 年間にわたり弥彦山松明登山祭を支えてくれた多くの人達に深く感 たのである。記念誌の松明登山回顧の最後のくだりで「ここに四十 しっかりとした足どりで市中行進をされた。苦労された四十年を思 起こしてか感涙にむせんで、 一九九三(平成五)年七月二十五日、 何度も目頭をおさえているお姿を忘 記念すべき第四十回を迎え

217

れた。享年八十一歳 回弥彦山松明登山祭へとはつないではくれず、本年二月四日急逝さ 生は大きく頷かれた。 れることができない。「先生、 しかし、病魔はそれを許してくれず、四十一 来年四十一回も頑張りましょう」。先

語り明かしたことは忘れることのできない思い出である。 引き合わせてくれたものだ。なかでも、深田久弥先生と一晩中飲み 代の日本山岳会長を弥彦山松明登山祭にお招きして私共若い者達に 年五月に冠松次郎先生を弥彦山にお迎えしてから中央の先生方と歴 病に冒されてからの先生は、万葉集に思いを寄せて「弥彦万葉の 先生は、山を愛し、山の友を大事にした。一九六○(昭和三十五

介された。 葉集巻十六の弥彦歌の二首を先生は、いろいろな機会をとおして紹 ことは、 葉集に、鄙ざかる弥彦山 会」をつくり自ら会長をするなど後進の指導を怠ることはなかった。 日本最古の歌集、世界にも誇るべき日本民族最大の文学遺産の万 何物にも代え難い幸福であり喜びであると思う、として万 (神) の歌が載せられ今日まで伝えられた

この拙い追悼文の結びとしたい。 先生がこよなく愛してやまなかった、 弥彦歌の一首をご紹介して

やひこ おのれ神さび あお雲の 棚引く日すら

叙勲の栄に浴したことを追記しておきます。 一九八五 (昭和六十) 年 渡辺富衛=弥彦山岳会 一勲四等瑞宝章」の

卷十六一三八八三

忙しかった先生は、

海流 野の 良氏(一九〇六~一九九四)

時間でも山の話をして居られました。 げて粋にかぶり、 て、近くの珈琲館へ参りましたが、一杯のコーヒーに一時間でも二 のコーヒー好きで、よく「一寸つき合って下さいよ」などと誘われ やかな姿が想い出されました。お酒を全く嗜まない海野さんは無類 のチロリアンシューズを履いて、何時もダンディーな海野さんの穏 荘の今井店長からの電話でした。同時にチロルハットをちょっと曲 海野治良さん(会員番号二四〇九) ブライヤーのパイプをくわえ、 の訃報に接したのは、 靴はヴィ ブラム底 H

いた訳です。但し、もうその頃には中国大陸で始まった戦争がだん して小川町に在った好日山荘を知り、 0 道具類を集め始め、 イキングをする程度のものでしたが。そんな訳でボツボツと必要な で北アルプスや南アルプスの縦走を計画する以外は、 中学生の事ですから夏休みを利用して先生の引率で五 時に、迷わずに山岳部へ入部しました。尤も、 尾や奥多摩を歩いていた私はこの年に中学 この海野さんに私が最初にお目に掛かったのは一九四一 美津濃や本郷のカジマヤ等を覗く事がありました。そんな一 年のことです。小学校四、 偶々学校が神田猿楽町にあった事もあり 五年の頃から山に興味を持ち、 海野さんとも親しくさせて頂 (旧制) 山岳部とはいっても へ入学すると同 東京近郊の 一六日の日 (昭和: 裏高 +

戦後は

九五五

(昭和三十)

年にフランスのエドワー

ル

フレン

戦局の悪化に伴い海野さんも御家族共々信州菅平へ疎開されてお店 ています。この年の十二月に太平洋戦争に突入しましたが、 て無く、 だんと拡大し、 好日山荘でも草鞋や輪カンが積み上げられていたのを覚え 物資も乏しくなって居て美津濃でも碌な用具 やがて も置い

K

も閉店されてしまいました。

されたのだそうです。 さで独立し東京へ進出して、 の西岡一雄さんの知遇を得て、 の運動具売場でスキーや登山 海野さんは一九〇六 日本では最古の歴史を有する登山とスキーの専門店「好日山荘 (明治三十九) 年大阪の生れです。 「東京好日山荘」を神田小川町に創業 一用具の担当者として勤めて居られた 一九三二 (昭和七) 年二十六歳の若 大阪 三越

三丁目に移って現在では山の店とスキーの店の二店を経営されて居 戦後はいち早く一九四六 九五一 この好日山荘の歴史はそのまま日本の登山に於ける用具 (昭和二十六)年に銀座二丁目に移転、 (昭和二十二) 年に日本橋兜町で再 その後銀座 出

世に出しました。 して居りました。 三代にわたりソールエージェントとして広くその製品を世に送り出 品を送り出して居ります 名品をラインナップし、 歴史であるといっても過言でない程に、 郎のピッケルは第一作より扱い、その後改良を加えつつ数多く 初めて製作し、 先ずピッケルやアイゼンに関しては、 羽毛入り寝袋や羽毛服等数々のアイデアと新商 ドームテントやカマボコテント等を、 札幌門田については直馬、 多くのオリジナル 仙台の山内 我が国 商品を

> スキーヤーであった為と考えられます。大阪に居られた当時、 店としての立場ばかりでは無く、 止まる処を知らず実践されました。これは海野さんが単に登山用 輸出を始めています。一九六二(昭和三十七) に至り、 ナは強度ニトンを突破して居り、 はヘッドのスキーを輸入して、その輸入元となって居ります。又、 ドと提携して日本の総代理店となり、シモンやシャルレのピッケル、 ブ)ハーケンを創製して好評を博する等々、 九五六 ロミテの靴などを初めて日本に紹介しました。又、アメリカから 一九六四(昭和三十九)年にはアメリカへ向けて本格的に (昭和三十一)年に創作した変型D型の安全環付きカラビ 自身熟達したアルピニストであり 当時世界中の登山家に愛用され 用具の改良や研究には 年には波型 ウェ

Ξ Ξ 八ッ峰上半部の初トレースを成功させ、 グ・クラブ)の創設に参画し、一九二九 時子さん等と第二登するなど第一線で活躍されて居りました。 トを小國達雄さん、 の初登をなし、又、 に属して一九三三(昭和八) て活動し、 雄さんや朝日新聞の藤木九三さん等とRCC(ロッククライミン (昭和十)年に明峰山岳会に迎えられてからは明峰の会員とし 同会の黄金時代を作り上げる大きな原動力となってい 人見卯八郎さんの二人が初登攀した翌日に川森 一九三六(昭和十一)年八月には同峰明大ル 年前穂高北尾根四峰日本登高会ル 上京してからは日本登高会 (昭和四) 年四月雪の 一九 1 1

訓練の最中に尾根を乗り越えて落ちて来た大雪崩に就寝中の も先鋭的なクライマーの一人として活躍されました。 年二月のマチガ沢本谷S字付近では、 1) 一九四 す。そして雪中露営や雪洞研究等も熱心に実践し、

当時としては最

潰され、 四人の犠牲者を出すと云うアクシデントにも見舞われてい

セコだ、草津だ、八方だと度々お供を仰せつかりましたが、どんな れています。又、スキーも日本スキー連盟の指導員であり、 多栄蔵さんの紹介によって一九四六(昭和二十一)年十月に入会さ 日本山 岳会への入会は戦後になってからで谷口現吉さんと、 私も二 諏訪

毎年御夫婦でかなり長期にわたって滞在し滑って居られた様です。 雪質でも実に優雅に滑って居られました。特に蔵王がお気に入りで

を初めて使用したのも海野さんだったと言う事です。この他、『谷 ンスとリズムの登攀」とか、「バランス・クライミング」等の造語 も充分に通用するものであります。又、技術の解説に当って「バラ のものであったばかりでなく、その内容は五十数年経過した現在で 付けて岩や氷の技術を解説したもので、当時の技術書としては最高 れます。これは野島滋弘さん、森彪さん等が撮影した写真に註釈を された『岩と氷雪への登攀技術 岳・仙の倉・苗場山』とか、『登山技術と用具』、『スキーのABC』、 著作については一九三九(昭和十四)年に高橋照さんと共著で出 ―写真解説―』が最初のものと思わ

者の為のサロンと云った感じのあった「好日山荘」の主人に相応し 肩にかかり、 空の下で丁度満開の桜が風に散って、立ちつくす数百人の会葬者の 等多くの著作を送り出して居られます。 四月七日朝、 一時も誰 か山の関係者が集って、 如何にも温厚な海野さんの葬儀にふさわしい情景でし 海野さんの御自宅に近い杉並の堀の内斎場は快晴の 登山用具店と云うよりも登山

「スキー教室」、「登山教室」、

『岩登り教室』、『新しいスキー教室』、

立ちでした。謹んで御冥福をお祈り致します。 く、多くの岳人達に温かく見守られての静かな、 静かな彼岸への旅

• 海野治良氏主要著書

『岩と氷雪への「登攀技術」─写真解説─』 高橋照共著 九三九年 三省堂

「谷川岳・仙の倉・ 苗場山』三省堂

一九四〇年

「登山技術と用具」 スキーのABC 西岡 山と溪谷社 雄・諏訪多栄蔵共著 一九五 - 年

山と溪谷社

九

五四年

『スキー教室』 「登山教室」 八木 新しいスキー教室 「岩登り教室」 八木 八木 治·岡部一彦共著 山と溪谷社 治·岡部一彦共著 治・岡部 一彦共著 一九六四年 山と溪谷社 山と溪谷社 山と溪谷社 九五六年 九五四年 九五七年

1 楽 英司氏(一九一〇~一九九三)

八月十四日に亡くなられてから八か月、つくづくそんな思いに耽け のものとはかなり違っていたのではないか。工楽さんが一九九三年 つ不可欠の人材であった。工楽さんなしには、 人として、また第二次世界大戦後の再建の中心人物として、重要か 工楽英司さんは、 京都大学学士山岳会(AACK)の創設者の一 AACKの姿は現在

違いない。工楽さんはこのスキー合宿で会計をつとめている。 はて登山活動を始めた。「三高歌集―一九七八」によると、「吹雪のして登山活動を始めた。「三高歌集―一九七八」によると、「吹雪のして登山活動を始めた。「三高歌集―一九七八」によると、「吹雪のして登山活動を始めた。「三高歌集―一九七八」によると、「吹雪のして登山活動を始めた。「三高歌集―一九七八」によると、「吹雪のして登山活動を始めた。」

る昨今である

また、ヒマラヤ登山への第一歩として、一九三一年十二月から翌れ、工楽さんはその庶務担当の役員をつとめることとなった。理学部化学科の一回生であった一九三一年六月にAACKは結成さ桑原などの大先輩を中心として活発となった。工楽さんが京都大学桑原などの大先輩を中心として活発となった。工楽さんが京都大学への頃から京都でのヒマラヤを目指す動きが今西、西堀、四手井、

年一月にかけての富士大沢口冬季登山によって、わが国最初のボー年一月にかけての富士大沢口冬季登山によって、わが国最初のボールの下降の富士大沢口冬季登山によって、わが国最初のボー年一月にかけての富士大沢口冬季登山によって、わが国最初のボー

一方、戦争によって中断されていたヒマラヤへの夢は、西堀さん学位を取得し、教授として教養部化学に勤めることとなった。けの鎮火作業の指揮などに従事したが、学位取得の熱意は黙しがた井の鎮火作業の指揮などに従事したが、学位取得の熱意は黙しがた日本鉱業㈱に入社して同社の台湾竹東の製油所に勤務し、困難な油日本鉱業㈱に入社して同社の台湾竹東の製油所に勤務し、困難な油工楽さんは、一九三三年に京都帝国大学を卒業した後、請われて工楽さんは、一九三三年に京都帝国大学を卒業した後、請われて

を事務局長に選んで、正式に再発足することとなった。ACK再建の準備会が開かれ、桑原さんを再建委員長に、工楽さんのネパール入国の成功を機に実現へ向けて動き出し、一九五二年A

工楽さんは翌一九五三年、請われて参議院文教専門委員に転出すことに鮮かであり、また強力でもあった。

楽さん流の仕事のやり方を学んだのである。に工楽さんの見事な指示が忘れられない。これらを通じて、私は工更を行うが、この厄介な法人化の手続きを担当した私には、いまだ更を行うが、この厄介な法人化の手続きを担当した私には、いまだ

心からご冥福をお祈り申し上げて、追悼のことばを捧げたい。西堀さんの告別式の時であった。足のご不自由なのが痛ましかった。た。私が最後に工楽さんにお目にかかったのは、一九八九年四月、に転出され、一九八三年まで教職に就かれてすこぶるお元気であって、土次八年、西堀さんの世話もあって、工楽さんは東海大学教授

(近藤良夫)

両氏。) (工楽英司氏は一九九三年八月十四日逝去、享年八十三歳。一九(工楽英司氏は一九九三年八月十四日逝去、享年八十三歳。一九

中尾佐助氏(一九一六~一九九三)

健在。共にイロリを囲んだような気がする。で、昭和十五年頃。北沢峠の長衛の小舎で、当時はまだ竹沢長衛がで、昭和十五年頃。北沢峠の長衛の小舎で、当時はまだ竹沢長衛が

その頃、戦雲と共にヒマラヤの夢破れた京大学士山岳会では、当 を受けだしたのである。 を受けだしたのである。 を受けだしたのである。 を受けだしたのである。 との頃、戦雲と共にヒマラヤの夢破れた京大学士山岳会では、当

中尾さんは木原均先生の弟子であり、遺伝・育種学の方はプロで中尾さんは木原均先生の弟子であり、遺伝・育種学の方はプロである。しかし彼はそれよりずっと前から植物の採集や栽培に凝ったことがある。だから全くアマの道楽ながら、中尾さんとの御縁がたことがある。だから全くアマの道楽ながら、中尾さんとの御縁がのスライド映写会をやると、忽ちにして「ああ、シナノキンバイがあるね」などと指摘し、「君はなかなかカンがいいな」などと彼にほめてもらった。こんな調子で、戦後ヒマラヤで彌次喜多道中をやったので、ふたりとも結構楽しかった。

一九四一(昭和十六)年夏、このふたりは今西錦司さんのチーム

労したようだ。
おしたようだ。をつとも、最後は現地招集で、山西あたりで苦中尾さんは今西さんの「西北研究所」赴任と共に、モンゴルへゆく私は北部大興安嶺、そして陸軍入隊というコースを辿った。しかしに加わって、カロリン群島特にポナベ島の学術調査を経験。その後

戦後早々、京大関係者の多い自然史学会という集いの論文集で、 、京大関係者の多い自然史学会という集いの論文集で、 、京大関係者の多い自然史学会という集いの論文集で、 でのロマンが、その口火を切ったのである。それはアカデミックな がの位の、栽培植物と農耕の起源をめぐる、ユニークで雄大な研 の後の彼の、栽培植物と農耕の起源をめぐる、ユニークで雄大な研 のであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、 でであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、 でであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、 でであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、 でであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、 でであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、 でであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、 でであると共に、世界の野性的な各地を遍歴する必要がある点で、

マナスル遠征は、まず登るべき山を探しにゆくところから始まってナスル遠征は、まず登るべき山をたらいちがう。今西さんは哲学的であり、中尾さんは技術的。そのくせ、このためにソリがは哲学的であり、中尾さんは技術的。そのくせ、このためにソリがは哲学的であり、中尾さんは技術的。そのくせ、このためにソリがは哲学的であり、中尾さんは技術的。そのくせ、このためにはドライにかしている。

かわれたこともある。それを私たちも自認していたことは、このグマラヤ」という本を書いたジャーナリスト徳岡孝夫氏に、文中から向がある。中尾さん・梅棹忠夫さん・私の三人もそうであり、「ヒ由来、京都人、特に今西さんを囲む仲間には、この点で著しい傾

追

を進めていたからだ。

堅きこと鉄のごとし」とのべた通りである プを自己評価した梅棹さんが、「人情薄きこと紙のごとく、 団

と強く推薦し、その上富川君自身が「川喜田さんをさしおいて参加 するのはいやだ」と後輩の仁義を押し通したので、さすがの今西さ 芦田譲治・岩村忍というお歴々の大先生が「川喜田がゆくべきだ」 富川盛道君を強く推し、 もめだった。推薦元の京都大学生物誌研究会の中では、 科学班は、中尾さんと私になった。しかし私の参加は、 さて今西隊の探検が実り、 私も内諾した。ところが木原均・並河功・ 翌春の第一次登山隊に二名つけ 今西さんが 内情はひと られ

ある。

とみえ、後半ではどちらかといえば私が中尾さんをイジメていたぐ りにイジメの対象になった。ところが私もこの伝統に染まっている 子分みたいなものなので、科学班の道中前半では、今西さんの代わ 西さんとなかなか妥協しない。それに私は中学五年から今西さんの ところが中尾さんもヘソ曲がりで有名なので、 案件によっては今

で行きづまっていた時、 西さんと大喧嘩してしまった。 画に合流するよう要請した時、 マール計画をやっていた私に、 質だった。そこで今西さんが僚友四手井綱彦さんにアンナプルナ第 私は今西グループの最左翼で、後白河法皇は好まない東エビス気 計画を学士山岳会でやるよう押しつけ、しかもカンジロバ=ヒ 今西さんと中尾さんは秘かにブータン計 というのも、 わざわざそれをやめさして四手井計 時は諒承していたが、 四手井計画が資金問題 間もなく今

> それから三、四日後には、ケロリと仲直りして一杯飲んでいたので しては鉄でも、内部では火の出るように渡りあっていた。そのくせ、 は潰す」といきまくありさま。このように今西グループは、外に対 切ってしまった。当然今西さんから大目玉を喰い、 れを探知した私は、立腹してブータン計画のスポンサーをぶち 私は「裏切り者

のような気がする。 イする」などと強がりをいっていたものの、これが些か早世の原因 いひとり暮らしだったようだ。 気の毒にも奥さんを早く亡くし、 アジア・アフリカなど、栽培植物研究のロマンを追う旅を重 あいが重なった。彼はネパールの後も、カラコルム・アッサム・西 地方へ連れていった西岡京治君のブータン入りなど、いろいろつき のおつきあいがあったり、彼の弟子で私がネパールのトルボ (Dolpo) 中尾さんとは、その後のブータン入りをめぐってブータン王室と ヘソ曲がりのため「ひとりでセイセ 娘さんお二人を片づけた後は淋し ねた。

九五二年五月入会、会員番号四〇〇二。紹介者は高木正孝、 安両氏。 何といっても、惜しい人材を失ったものである。 中尾佐助氏は一九九三年十一月二十日逝去。享年七十三歳。 加藤泰

111 喜田 郎

鶴岡元之助氏 (一九〇〇~一九九三)

日本山岳会のクラブイズムを守り続けている土曜会に、故神谷恭氏等と共に所属していた「霧の旅」の会員として、最後まで楽しみに不自由な足をかばいながら、出席を続けておられた鶴岡さんが、年年(一九九三年九月二日)肝不全の為享年九十三歳で永眠された。韓岡さんは故人となられた松本熊次郎さんや山崎金次郎さん等と霧の旅の会員として深い友情に結ばれて仲良く土曜会に出席されて、いつも楽しそうに山の思い出を語っておられた姿が、今も印象で、いつも楽しそうに山の思い出を語っておられた山崎金次郎さん等とで残っている。松本、山崎両氏が亡くなられて淋しい土曜会に、故神谷恭に後も、いつもにこやかに優しいお心で迎えて下さったのが、鶴岡た後も、いつもにこやかに優しいお心で迎えて下さったのが、鶴岡さんであった。

> 西荻南に自宅を新築して晩年迄過ごされた。 西荻南に自宅を新築して晩年迄過ごされた。 西荻南に自宅を新築して晩年迄過ごされた。 で藤功一建築設計事務所に就職、設備関係の仕事を担当された。そ 佐藤功一建築設計事務所に就職、設備関係の仕事を担当された。そ で藤功一建築設計事務所に就職、設備関係の仕事を担当された。そ

年は静岡支部主催のもみじ会や、山梨支部主催の木暮祭等に参加さ十七)年引退された。それ以来日本山岳会の行事や山行に参加、晩五)年退職された後、ツル設備研究室を開設され一九八二(昭和五五)年退職された後、ツル設備研究室を開設され一九八二(昭和三十員番号は四一三七であった。その後大成建設を一九六○(昭和三十月)年で、会日本山岳会に入会されたのは、一九五三(昭和二十八)年で、会日本山岳会に入会されたのは、一九五三(昭和二十八)年で、会日本山岳会に入会されたのは、一九五三(昭和二十八)年で、会日本山岳会に入会されたのは、一九五三(昭和二十八)年で、会日本山岳会に入会されたのは、一九五三(昭和二十八)年で、

きたので、その頃がなつかしく思い出される。 はお海外の旅ではヨーロッパ、アラスカ、カナディアンロッキー、会の行事や山行にも参加され、足の丈夫な頃は山行にご一緒で見の親睦を計る為に出来て第三水曜日に集まった三水会にも所属され、会の状態があります。 れるのを楽しみとされていた。

お肴に竹筒のお薬湯を頂いて一夜歓談するのが楽しみの軽い山行でお肴に竹筒のお薬湯を頂いて一夜歓談するのが楽しみの軽い山行であって、鶴岡さんはいつも安心して私の山行に参加して下さった。で、鶴岡さんはいつも安心して私の山行に参加して下さった。で、鶴岡さんはいつも安心して私の山行に参加して下さった。で、鶴岡さんはいつも安心して私の山行に参加して下さった。で、鶴岡さんはいつも安心して私の山行に参加して下さった。で、鶴岡さんはいつも安心して私の山行に参加して下さった。で、鶴岡さんはい力を強い出答れる。

こられて甘辛両党の私達に配って下さったのはとても嬉しかった。 入ると楽しそうに山の思い出話を語って下さった。 大きな体に似合わずいつも笑顔でおだやかに話されて、 鶴岡さんはいつも銀座名物「空也もなか」を重いのに一箱持って おみきが

三水会山行での思い出は数多く残されている。 な体の鶴岡さんに安全に下って頂く為に力のある男性に頼んだが、 強烈な思い出となった。山頂で記念行事が終って下山の折は、大き 元が滑るので、鶴岡さんを手拭いで引っぱり上げたのが私の最後の 又三水会二〇〇回記念山行で、陣馬山へ登った時は雪があって足

が、杖を持って懸命に出席されていた。 山岳会ルームの土曜会に来られるのもやっとと言う時代があった その後膝の関節が時折痛んで、名倉接骨院に通われるようになり、

て帰ったことが時々あった。 はずむと、帰る時間を忘れられて、私が中央線の荻窪までご一緒し からと、いつもひと足先に帰られるようになったが、土曜会で話が 足が悪くなってからは、明るい内に帰らないと娘たちが心配する

或る年竹寺集会の帰りに滝沢さんと三人で一緒に帰った時、

鶴岡

も感謝していた優しい心情が、鶴岡さんの心の豊かさのように思え 西荻窪の鶴岡さんの娘さんの所へ届けに行ったこともあった。 さんが電車の中に杖を忘れられたので、滝沢さんがその杖を持って 鶴岡さんは大切な杖が戻って、届けてくれた友人に対して、 とて

がて来る八月二十八日に鶴岡さんの一周忌を催しますからと藤

さんと出席してお悔み申し上げた。 平淑子さんからのご案内状をお会いした時頂いたので、山岳会の皆

坂倉登喜子

百 瀬 茂氏(一九一一—一九九三)

せたいがどうか、との問い合わせでした。 赤羽支部長からの電話で、百瀬一茂さんの追悼文を『山

お引受けした次第である。 昨年は当信濃支部としてはお二人の長老、 大切な大先輩を失い

私の同郷でもあり先輩であるので支部長のご配意に感謝し原稿を

淋しさをしみじみ痛感する昨今である。

れた。高山元老と相前後して百瀬一茂氏を亡くし支部としても貴重 日本山岳会評議員、名誉会員、 崎喜八氏の後を受けて十五年の長期に亘り三代支部長とし、 な存在の人を失った。 その一人が高山忠四朗氏で信濃支部初代支部長槙有恒氏に次ぐ尾 長野県山岳協会長等幅広い活躍をさ

あった。 力されたことは会員の模範であった。性格は几帳面で温厚な人柄で (会員番号四三五五)。以来支部の事業には極めて熱心に進んで協 百瀬氏は高山支部長の紹介で日本山岳会へ一九五六年入会した 煙草一切好まず、専ら趣味は山登り一 筋の山男そのものの人で

常日頃は極めて健康で身軽な理想の体格で若き頃は正にカモシカ

如き動きであった。 晩年は十年程前に胃の病気で手術をされて以来体調思わしくなく

少の無理をおしても入山しておられたその信念には心を打たれるも 近年は入退院を繰り返しつつも好きな山・上高地へは折を見ては多 のがある。

と共に多年に亘っての御厚情に対し、 三歳。誠に残念何とも云うべき言葉を知らず心から哀悼の意を表す 然しその病魔との闘いには勝てず、 深く感謝の意を申し上げる次 昨年力尽き他界された。 八十

花き園芸を併せて経営されている。 樹園を経営され、現在はご子息の健氏ご夫婦で大規模な温室による 百瀬先輩は恵まれた環境即ち北アルプス玄関口の波田町に育ち果

第である。

尚、山を愛した百瀬氏の影響も大きく甥である赤穂誠氏は当支部

員で活躍、三女光子さんの夫大月一男氏は現波田山岳会長をつとめ、 他多くの孫達も皆山が大好きで毎年一族でパーティーを組んで山行

査された。

人であった。 とにかく、暇を見いだしては山に入る事の出来る境遇に恵まれた

13

されて来たとの事でした。

山登りの始まりは一九二二年からで、連続七十年の山登りをして

山五百六十九座、 信濃支部報」二十号に投稿された随想の中に国内二千片級以上 三千以以上二十七座を登頂、 延べ千数百回入山

され、勿論「信州百山」は全部登られたと報告している。

ラヤトレッキングを計画実現したのであった。

百瀬氏を始め宮原利

ち山行記録がきちっと整理され、 記念のバッチ等全部保管されていたのには感心させられ 今回百瀬氏宅を訪問して驚いた事は、 しかもその資料の数十冊を始

0

平ホールにてスライドによる映写会が開かれたのが印象に残る。 筆者も共に参加して来た。入会時は第十回ウ祭で、当時は別宮会長、 0 日高副会長で本部から藤木、 が思い出される。記念講演にはマナスル登頂の槙隊長、 石原、折井、板倉の各氏が出席された

ある事業の実行委員として鳥帽子岳―槍ヶ岳の間を藤沢敦会員と踏 きな行事であった。県境一千ま、三千以以上山岳十五座、 んで協力された点感謝を申し上げたい。 められ、特に晩年は二、三日前より上高地に準備のため入山され進 支部に於ける活躍を振り返って見ると、 長野県境一周踏査隊も大

峰登山隊実行委員会副委員長として準備に協力された功績も大き 又、支部永年の念願であったネパールヒマラヤ・アンナプルナー

年の功労に対し感謝状が数多く授与され、その人柄が伺える 共に永年勤められ、それぞれ県知事、 員有志四名、 山以外の地域社会にも貢献された。 最後に特筆したいのは、病気される前年の一九八二年信濃支部会 いずれも明治生れの七十歳以上の男女のみで夢のヒマ 厚生大臣、 民生児童委員並びに保護司を 法務大臣他より永

以来百瀬氏はウ祭には特に熱心で毎回庶務会計等実行委員をつと 日本山岳会信濃支部主催の歴史あるウェストン祭には第一回より この魅力

昭和の初期よりの

Ш 日記即

日程で全員無事に目的達成、夢を実現した。 中村喜美氏、田中仲治氏の四人で明治隊と称して十五日間の

遠い山旅をつづけておられることであろう。 された百瀬一茂さんには人生の最高の幸せを感じつつ今は西の国の この様に亡くなられる寸前迄心から山を愛し社会のためにも盡く

(蒲生明登

合掌

|林基子さん (一九三二~一九九三)

人の淳人さんから電話があり、基子さんの急逝を知らされた。 十日前の九月二十七日、立川の朝日カルチャーセンターへ、一年 晴天の霹靂とは正にこのこと。一九九三年十月八日の払暁、 御主

小屋にお越し下さい。黒松仙醸、 す。これが私の美学」と便りがあった。これで、また一緒に山行が ぶりに元気な姿を見せてくれた。以前「或る日元気な姿で出現しま 十月五日に受けとった葉書には「十一月の閑日、八ツの小さな山 八海山が待っています」と、書い

でトイレに起き、そこで「アッ」と叫んで倒れ、そのままだったと じゃあ明日、病院に行こうといって休んだそうだ。夜明けに、一人 て来たばかりなのに。 あとで、御主人に伺うと、前夜、薬を飲んだら具合が悪くなった。

悼

追

のこと。この世に、こんな馬鹿なことがあってたまるか。これが、 様子をきいたときの実感である。

より私の方がつきあいは長いのよ」。 は高校三年生。基子さんの口ぐせは「山村さん、奥さんの秀子さん 基子さんとの出会いは、一九五○年秋、金峰山行に始まる。

インベルク」に所属して山行を重ねた。 ングフラウ」を組織して活動の拠点とした。また串田孫一先生の「マ その後、彼女とその仲間は、山梨で初めての女性だけの山岳会「ユ

アルプス農鳥岳の石室で四人の慶応の学生らと出会った。片や、 一九五七年八月、串田先生と二人の若い女性のパーティーは、 南

を、こなたタバコをそれぞれ切らせており、

物々交換

乗りもあげず、行を別にして山をくだった。 に喫うので、やおら一本を口にした。この二つのパーティーは、 タバコを嗜まなかった一人の学生は、仲間があまりにもうまそう

もう一人の女性、基子さんの終生の友、前田清子(本会会員)さん 九七九年五月 (イラン革命の難をさけ帰国中)、山梨県金山平で開 宮下先生は、あれ以来、愛煙家となってしまったという。もち論、 さん。慶応の学生の一人は、母校の教授となった宮下啓三博士。一 かれた、第十八回木暮理太郎翁碑前懇親会の席上、再会を果たした。 二十二年後、若い女性の一人は結婚して、二児の母となった基子

え、一人での対応がむずかしくなってきた。そこで、基子さんに白 にて、女性のための登山教室を担当することになった。受講生も増 時はとび、一九八六年から、私は、 朝日カルチャーセンター立川

も一緒であった。

羽の矢をたて、八八年から応援をたのんだ。

この五年間、毎月の山行に、その都度ちがったケーキを焼いて持参 これは有難かった。男の見落していた所をよく配慮してくれた。

だいてきた。これは正月山行の楽しみの一つであった。 してくれた。個人的なことをいえば、それ以前から、暮れになると、 ずしりと重いブランデーをたっぷりきかせたフルーツケーキをいた

てもらった。その中に「白峰への憧れを抱き初めた頃」と題する小 文があった。 山仲間、小林清香さんから、若い時の基子さんの手記の一部を見せ 基子さんが、何故山に登るようになったのか。最近、彼女の古い

から一里の山道を歩き、汽車に一時間乗り、通学。泣きの涙の女学 一家は、甲府で戦災にあい、父親の実家、甲斐大泉に疎開。

だと知った。これが大きな慰めとはげましになり、何時か、あの頂 校一年生の日々だったという。 に立ちたい。これが、基子さんの山登りの原点になったと書き残し 秋もなか頃、 一番早く白くなる山を見付けた。それが、白峰北岳

んの声が今も耳に残る。 くちで杯を重ね、少しトーンをあげて、口早やにしゃべった基子さ かくて、四十年間、基子さんは登り続けた。山小舎で、オチョボ

私たち仲間にも、わずかでも、そのお裾分けがいただければと、心 さん、愛犬、愛猫の上に、天上から御加護をたれたまわんことを。 基子さん、心あらば、御主人、理恵さん、理人さんの二人のお子

から御冥福を祈る。

九三二 (昭和七) 年四月三日 三井文夫、ふゆの三女として甲府

市に生まれる

九五 九五〇 (昭和二十六) 年 (昭和二十五) 年 甲府二高卒業。この頃より一九五八年 鳳凰三山、 金峰山などに登

にかけて、甲斐駒ヶ岳、 仙丈岳、 鋸岳、 八ヶ岳、

光岳、 山、瑞牆山、金峰山、甲武信岳、横手山(スキー)、聖岳、 赤石岳、 塩見缶、 蝙蝠岳など、精力的に山行を重

九五四 (昭和二十九) 年 ねる 国体選手として四国石鎚山に登

九五九 九五七 (昭和三十四) 年 (昭和三十二) 年 信州富士見の小林淳人(山梨大学山 日本山岳会に入会、 会員番号四五六五

九六二 ぐまれる。その後、子連れ登山を楽しみ、東京周辺の山々、 (昭和三十七) 年 部 OB) と結婚。 長女理恵、一九六六年、 南ア、北ア、谷川岳などに歩を進める 長男理人にめ

北アなどに遊ぶ

一九七八 一九八八 (昭和五十三) 年~一九八〇年 一家あげて主人の任地テ (昭和六十三) 年から、 山教室のサブリーダーをつとめる。その間、受講生らと、 ヘラン(イラン)へ。在住中スイス各地をトレッキング 朝日カルチャーセンター立川の登

九九二 九九一 (平成四) 年 (平成三) 南アルプス全山を縦走 年 八ヶ岳山麓、 胆石症の手術をうけ 泉原に山

(平成五) 年十月八日 心不全にて自宅

(調布市

228

悼

山の文学、 去、遺体を長野県茅野市頼岳寺に葬る 山の音楽、 山の花を愛しつづけた六十一年の

短い生涯であった。

山村正光

下莞爾氏(一九三五~一九九三)

年を迎えられました。 うというものでした。極地探検は準備七分、現場三分という岩下さ 企画しました。その計画は厳冬のベーリング海峡を徒歩で横断しよ んは、その準備をほぼ終了させ、家族と一緒に一九九三年の新しい 九九二年夏、岩下さんは極北の大自然を舞台とした特別番組を

さんのもとへ届いた診断の結果は、岩下さんの全ての夢を打ち砕く ものでした。岩下さんの胸に写った影は「肺癌」でした。 かう若い隊員たちへ、ドキュメンタリストとしての全ての思いを込 二月、岩下さんは病のことを一切口にせず、ベーリング海峡へ向 しかし、「少し胸が痛む、風邪かな」と病院で診察を受けた岩下

はありませんでした。

あるがままに撮ろう。あるがままに語ろう。

めた「詩」を送ってきました。

在るものはあると言おう。 自然を恐れず、されど、 心いものはないと言おう。 侮らず。

大自然を相手の時は幸運が必要である。

というパスツールの言葉があることを識ってほしい。 をいだいて元気に帰ってこよう。」 いつものことながら、一人一人が"為ってよかった"という想い "幸運は準備された心にしか訪れない。

キュメンタリーに対する姿勢でありました。 いて「真実を報道せよ」ということであり、岩下さんの一貫したド 無いものはないと言おう」とは、ドキュメンタリーの制作にお

疑似体験できるように描きながら、最高峰チョモランマを主人公に 賭けた36時間! これがチョモランマだ」の番組は、登山の模様を 追求した結果の作品であって、岩下さんが想定していたシナリオで した構成でした。これは「無いものはないと言おう」とする真実を 記録しながら頂上を目指し、断念したテレビ隊員の目を、視聴者が 一九八〇年の日本山岳会チョモランマ登山を記録した「生と死に

ありました。 の心の奥底にしっかりとインプットされた「故郷の風景と感触」が に大きな影響を与えたのですが、それよりずっと以前に、岩下さん 自然とエスキモーの生き方は、岩下さんの自然観、 北極の自然と民族を記録されていました。酷寒な北極圏での厳しい ヒマラヤ登山の作品を手掛ける前、岩下さんは十年以上に渡って 冒険観、死生観

終えた岩下さんは、お母さんに連れられ姉の瑞子さんと信州中野へ 一九四三(昭和十八)年の春、東京中野の国民学校で小学二年を

ありました。 や赤石山、 九歳のときでした。西に黒姫 戦火を逃れて疎開し、松川町の国民学校へ転校しました。岩下さん その間を流れる千曲川。信州中野はその千曲川の辺りに 妙高の山々、東に志賀高原の岩菅山

岩下さんと山を中心とした自然との付き合いの始まりでした。 ました」と話して下さいました。信州中野で過ごした少年時代は でした。また、毎日近くの箱山へ登り、泥だらけになって帰ってき にしを捕ったり、螢狩りに行ったり、特に沢ガニと遊ぶのが大好き がらかな弟で、みんなに〝ほがらか莞爾〟と言われていました。たの少年時代を過ごしたのでした。姉の瑞子さんは「莞爾はとてもほ 岩下さんはその豊かな自然の中で小学三年から五年、十一歳まで

早稲田大学に入学した岩下さんはお父さんの所を拠点として北アル プスの穂高連峰をさかんに登られました。 いたお父様が、松本製紙の社長として信州へ出向された頃でした。 岩下さんと山との関係が一層深くなったのは、毎日新聞に勤めて

そして、「山は好きだけど、それより土に触っていると心が和むん 返らせてしまうのですが、一番好きな花はヤマユリだったそうです。 好きな岩下さんは、道に棄ててあった花をそっと家に持ち帰り生き 絵が描かれ、沢ガニを見つけると話しかけたりしたそうです。花の 持をいつも手紙にして奥さまに送ったそうですが、いつも沢ガニの 日本テレビに就職して奥さまと出会った岩下さんは、ご自分の気

テレビ界では数々の優れた作品を創った岩下さんは、 ヤマユリが好きな穏やかな人でしたが、一方では繊細で激情的 沢ガニと話 だよ」と、奥さんによく語られたそうです。

です。 そして、奥さんがカサブランカの名札を引っ張ると紐がつながって 下さんは、奥さんにカサブランカの花をプレゼントなさいました。 大変なこともあったようですが、ある日、 な人でもありました。その全てを献身的に受け止めてきた奥さまは いて根元の土の中からビニールに包まれた「手紙」が出てきたそう 病院から自宅に戻った岩

ブランカの花は、岩下さんが妻の広美さんへ宛てた最後の手紙と 看護の疲れが融けていったそうです。その後、 ほがらか莞爾のいたずらに、奥さまは思わず「くすっ」となり、 病状が悪化し、

なったのでした。(合掌

一九五八 九三五 (昭和三十三) 年三月 (昭和十) 年八月二十日 卒業、 同四月日本テレビ放送網株式会社入社 早稲田大学政治経済学部経済学科 東京都中野区沼袋に生まれる

九五九 (昭和三十四) 紹介者は高山忠四朗 年 日本山岳会入会、 小里頼忠 会員番号四八三五

九七四 (昭和四十九) 年 放送文化基金優秀賞 「エスキモーの道」芸術祭優秀賞受賞

九七六(昭和五十一)年 「最後のエスキモー」芸術祭優秀賞受賞 放送文化基金優秀賞

九七八 (昭和五十三) 年 一北極点に立つ」芸術祭優秀賞受賞

九八〇 (昭和五十五) トレント山岳映画祭銀賞他受賞多数 年 日本山岳会チョモランマ登山隊に日本

追

テレビ隊責任者として参加

1 生と死に賭けた36時間! これがチョモランマだ」

九八四 (昭和五十九) 年 芸術祭優秀賞受賞・テレビジョン学会賞他受賞多数 日本山岳会カンチェンジュンガ登山隊

(昭和六十三) 年 に日本テレビ責任者として参加 チョモランマ三国友好登山隊にテレビ

九九三(平成五)年 隊長として参加、 頂上生中継に成功

十二月十九日午後三時四十分 ブ・ディレクター昇格 日本テレビ役員待遇社会情報局エグゼクティ 呼吸不全のため逝去 Ŧi.

進

片 桐理一郎氏 (一九二四~一九九三)

んが涸沢へ来られた。 て、私達新人がやっと合宿の何かが分かりかけてきたとき、 ことはなかった。同行の新人達から岩登りのバランスが抜群に良い パーティーの組み合わせが違ったため、穂高の岩登りに同 (昭和二十六) 年七月涸沢合宿である。 ·桐さん (当時神保さん) に最初にお目にかかったのは、 グリセードがスキー同様の滑り方で、 合宿に入って二、 今教えられているスタ 三日し 一九五 片桐さ 行する

> と考え込んだりしたものだった。その後、東京の会社に移られた先 とづいており、三十歳にして人生の仕事を終えてしまったような諦 での山登りの話をうかがった。山でかいまみた厳しさはなく、 5・6のコルまでとのこと、私達新人部員は真剣に何時間かかるか をお尋ねしたところ、北穂東稜からのぼって、奥穂―前穂― 先輩の口から出た。新人の一人がおそるおそる「涸沢一周」 と、「ぼやぼやしている奴は、涸沢を一周してこい」という言葉が 観があった。私にとって眩しかった人の一人であった。 たんとした語り口の穏やかなお人柄は、この人の経験した戦争にも 輩の下宿にお邪魔して、京城一中での冬季の金剛山系縦走など朝鮮 イルとは別のものだということだった。テントでのんびりしている 北尾根

入れることができたからでもあった。当時の部生活を次のように書 いておられる。 の薄井脩助さん くなる中で、登山に取り組まれた。鹿島槍の山行が多いのは、 (昭和十六年卒) ご一家の援助により、食料を手に

一九四三(昭和十八)年立教大学予科に入学、戦時の食料の乏し

に行って参りますので、軍事教練の先生にお詫びしてください』と 戦ったことは、 応召後、 お願いしなければならない。おかげで『軍事教練』は不可だった」。 があった。山に行くのはこの『教練』が問題で、辻荘一部長に『山 昭和十八年十月、 部は『立教大学報国山岳部』と言い、授業には『学校軍事教練』 教練をサボっていたため、幹部候補生になれず、兵のまま いかにも片桐さんらしいエピソードである。 雨中の「出陣学徒壮行会」の時には穂高合宿に

参加されており、

いずれ出征するので山登りもできなくなるという

思いであったとのことである。

の焼失について長い間その責任を負っておられ、そのためか、山岳かったが、疎開した器具等の殆どが焼失してしまった。器具・書籍往復は、空腹のためかなりの重労働であった。部室は戦災を受けなに積み込んで、世田谷の田丸恒雄さん(昭和十九年卒)宅への運搬山の器具・書籍を分散疎開することにも従事された。大八車一杯

部

への支援を義務と考えられていたようである。

国、翌年一月復学、山岳部総務を引き継がれた。

「地域で、大学、山岳部総務を引き継がれた。

「地域で、大学、山岳部の経験がら得たものによることが多年活で生き残れたのは、山岳部の経験から得たものによることが多年活で生き残れたのは、山岳部の経験から得たものによることが多いと話された。一九四五(昭和二十)年一月、世田谷砲兵隊に入営、満州へ移動、一九四五(昭和二十)年一月、世田谷砲兵隊に入営、満州へ移動、

しながら、品質を重視した製作を心掛けられた。一九五七 つの極なんて夢みたいだ」と、テント製作十五年の成果を喜ばれた。 ウスコルで最高高度をそれぞれ記録したことについて、「一 最初に作られたスキーザックに盛之助さんからケチを付けられたり ご自分で工夫を加えたり、材料や工具の入手のルートを開拓された。 んや二代続けて「片桐」を支えている職人さんの仕事を見ながら、 に入られた。「片桐」の仕事に慣れるために努力された。盛之助さ 大隊が最北を 一九五五(昭和三十)年片桐美智子さんと結婚、 年より南極観測隊のテント製作に従事され、一九七〇 年には片桐製のテントが三極に立てられた。北極探検の東 極観測隊が最南を、エベレスト・スキー 片 桐 (昭和二 年に三 の仕 隊がサ (昭和 事

一九九○(平成二)年六月、喉頭ガンの手術を受けられ、声帯を大う事になった。それにもかかわらず、大学山岳部の谷川岳合宿(一年の)に参加されたり、松田祥二君(昭和三十年卒)らと大う事になった。それにもかかわらず、大学山岳部の谷川岳合宿(一年の)に、東京といいた。

としてヒマラヤへお供したかったのに、残念でならない。謹んでごは昏睡状態にあり、お耳に入れることはできなかった。後輩の一人登山には最後まで高い関心と支援を寄せられたが、登頂の報告時に力された。一九九三(平成五)年、チョモロンゾ(七、八一六片)立れた。一九九一(平成三)年、チョモロンゾ登山計画が提案された際は、一九九一(平成三)年、チョモロンゾ登山計画が提案された際は、

墓所 練馬区谷原六—八—二五 宝林寺

冥福を祈ります。

(西川益生)

略歴

スホッケー、登山に取り組む 九三七(昭和十二)年 京城第一中学校に入学。ラグビー、ア.九二四(大正十三)年 京都・神保家に生まれる

三月 三ツ峠、八月 剣岳 真砂沢合宿、 九四三(昭和十八)年 立教大学予科入学、山岳部に入部

十月 涸沢合宿、十一月 谷川岳 マチガ沢、三月 三ツ峠、八月 剣岳 真砂沢合宿、

(昭和十九) 年 二月 甲斐駒ヶ岳、三月 鹿島槍ヶ岳十一月 鹿島槍ヶ岳 赤岩尾根、十二月 谷川岳スキー

九四

四

根 Ŧi. 月 三ツ峠、 Ŧī. 月 立山 Ŧi. 竜 岳 七月

穂高岳、 十月 鹿島槍ヶ岳

九四 $\overline{T_1}$ (昭和二十年) 一月 世田谷砲兵隊に入営

九月 八月 小興安嶺でソ連軍と戦う。 日本敗戦

(昭和 一十二)年 ハルピンでソ連軍の捕虜となる 十二月 シベリアより帰

九四六

(昭和) 三月 鹿島槍ヶ岳 一月 立教大学へ復学 東尾根、五月 三ツ峠

穂高岳、七月 涸沢合宿

十一月 後立山 唐松・冷池

九六〇 九四八 (昭和三十五) 年 (昭和二十三) 年 小原勝郎 立教大学経済学部を卒業 日本山岳会に入会 浜野正男 会員番号五〇四八

九六九 (昭和四十四) 紹介者 年 八月 チビ谷 (涸沢岳西尾根 第一

九七〇 (昭和五十八) (昭和四十五 年 年 片桐製テントによって三極制覇される 岳部 「部報一〇号」編集委員会委員

九八九 (平成元) 年 立教山友会会長 二期 四年間

(平成五 喉頭ガンにより三井記念病院で逝

島 夫 氏(一九三五~一九九三)

下山して行った。私は、言葉もなく立ち尽くしていた。 週間ほど前、 を合わせないよう一言「三島さんがカトマンズで亡くなった」。二 えてくれた山友会の太田晃介氏の顔を見付ける。表情厳しく、 境となる河の橋の手前でトラックを降りた所にネパール側から出 立教大学チョモロンゾ学術調査隊四名の顔には安堵感があった。 あとは日本に戻るだけ。一九九三年のポストモンスーンに行った 支援隊としてBCまで手紙を携えて来てくれ、元気に 迎

て花立の尾根に飛び出た。彼との初の登山であった。 当時の沢登りスタイルの草鞋をととのえ、何とか水無の本流をつめ なった。週末の度に単独で山登りに出掛けていることを知った彼が 似合わず断言的に物を言う貴公子然たる三島君と話しをするように 頭の学生帽はまだしも、 めに丹沢の沢登りに誘う。 たことがある。浅間は庭みたいなものだ」という。それならと手始 「俺も行く」という。彼の家の別荘が北軽井沢にあり、「浅間山に登っ 一九五四 (昭和二十九)年に大学に入学した私は、クラスに顔に 革靴にショルダーバックである。 待合せの渋沢駅で、私はあっと驚いた。

第一回の合宿であった槍ヶ岳集中登山が無事成功したのも、 手腕を発揮した。この生来の面倒見のよさは生涯変わらなかった。 トであった。 この様なことがきっかけで、理学部に山の会が創立された。当時 岳部長の石島渉先生に部長を兼ねて頂き、三十名程でのスター 三島君は創立者の一人として、マネージメントにその 彼の献

で送り出した。戻ってくるまでの気の重さは、今でも脳裏に残ってして家には言わないでくれ、何かあったらお前頼むぞ」ということたいということで、蔵王を宮城側から山形に抜けることにした。「決身的働きによるものであった。卒業記念に雪の山を一人でやって見

大学で放射化学を専攻し、希望していた東海村の原子力研究所に大学で放射化学を専攻し、希望していた東海村の原子力研究の最盛期であり、多忙であったのであろう、あまり山に入らなかったようである。国立公衆衛生院に移り、 対側衛生学部で、食物中の微量金属元素から始め、その興味を生体 中にと発展させ、数々の業績を残した。

しまった。彼は何とも気に入らなかった様であるが、潰瘍が見付かを出航したが、体に異常ありということで、南極からUターンしてたとは絶えてなかった。山懸先生の推薦で南極越冬隊員として晴海大先輩は酒豪、彼もこの点では人後に落ちない。すすめられて断る大先輩は酒豪、彼もこの点では人後に落ちない。すすめられて断る大先輩は酒豪、彼は何とも気に入らなかった様であるが、潰瘍が見付かり出る。

した、これから下る、快晴ですべての山が見える」。カンチはどうもかったが大満足で下山して行った。ランマラからの交信で「今到着なったが大満足で下山して行った。ランマラからの交信で「今到着なったが大満足で下山して行った。ランマラからの交信で「今到着なったが大満足で下山して行った。ランマラからの交信で「今到着なったが大満足で下山して行った。ランマラからの交信で「今到着なったが大満足で下山して行った。ランマラからの交信で「今到着ないが、カトマンズ、ラサ経由でBCに顔を見せたのが十月した、これから下る、快晴ですべての山が見える」。カンチはどうとなった。

ギーが消えていくのがわかった。 ましておいたという骨を拾ったとき、自分の体からすべてのエネル残しておいたという骨を拾ったとき、斉毘に付された寺院の裏手で、真はとっておく」「じゃあ東京でな」、これが四十年間の彼との最後だという私の問いに「よくわからないが東にでかいのが見える、写だという私の問いに「よくわからないが東にでかいのが見える、写

一九九三 (平成五)年十一月十三日、立教学院諸聖徒礼拝堂は、一九九三 (平成五)年十一月十三日、立教学院諸聖徒礼拝堂は、

抜け落ちたものを感じて寂寞感をぬぐい得ない。御冥福を祈る。せめてもの慰めとするには、一年を経た今でも、私には何か大きく夫人の「あれだけあこがれていたヒマラヤで逝ったのですから」をあり、研究者として勝れた人材を失い哀惜の思いは尽きない。球子あり、研究者として勝れた人材を失い哀惜の思いは尽きない。球子あり、研究者としておれた人材を失い哀惜の思いは尽きない。球子あり、研究者としておける死は、二人目のお孫さんを目前にし三島君のカトマンズにおける死は、二人目のお孫さんを目前にし

階

九三五

東京都品川区小山に生まれる

である。

胃の殆んどを失くしたことを考えるとこの措置は正しかった様

一九五九年 日本山岳会入会、会員番号六一一五九九年 日本原子力研究所東海研究所入所一九五九年 日本原子力研究所東海研究所入所一九六四年 立教大学理岳会会長

九六八年

厚生省国立公衆衛生院入省

山登りの道具は先輩から借り集め、

オーバー手袋やオーバー・

もない

・ズなどは米軍の放出や旧軍隊のキャンバス地などを使って、

「達が初めて金井さんに逢ったのはその頃だった。戦後間

九九三年 九八三年 九九三年 九七〇年 十月十七日 立教大学一般教養部非常勤講師 信州大学医学部非 第十二次日 マンズのホテルで急逝。 本南 チョモロンゾのBCから帰国途中、 享年五十八歲 測 員

(高田健 夫

カト

金 Ŧi. 郎氏(一九〇九~一九九三)

なに早いとは思わなかった。 金井五郎氏が亡くなった。 父はもう長くはないと思います、と話されたが、 昨年暮れの支部晩餐会で御子息の哲夫 まさかこん

Ш ばらく勤めていたが、 第二次世界大戦では二度応召し、終戦を迎えた。その後進駐 に新潟から北海道に移り、学校を出たのち郵便配達をしながら山に る人で知らない人はまず居ないだろう。小学校のとき御両親と一緒 金井さんは山にこそあまり登らなかったが、北海道で山登りをす 札幌近郊の山で登山やスキーを楽しんだと聞いている。 テント作りを内職のような形で始めたという。 将来のことを考え、子供の頃から好きだった 軍にし

ど、資金の面でも非常に御世話になっている。

で、北海道で山登りをする人達は山の道具だけではなく、遠征時な 札幌だけではなく旭川にも支店を持つ、押しも押されぬ登山用具店 そうだ。現在「秀岳荘」は御子息の哲夫氏が引き継いでおられるが、 に洩らしたところ、直行さんは同じならもっとよかった、と笑った な店があることを知って、同じ名前でなくてよかった、と直行さん という名前を付けてもらったと聞く。後で東京に秀山荘という有名 類も置くようになり、北大山岳部〇Bの坂本直行さんに、「秀岳荘 ト」という名前だったが、門田のピッケルやアイゼンなど山の用具 たときにはもう新製品として店頭に並んでいた。初めは「金井テン 性格だったから、新しいアイデアの品の試作を頼むと、次に店へ行っ 付けで売ってもらった部員がいたという。何せ商売熱心で気さくな の道具を安く作ってくれた。後で聞くと、出世払いでいいから、と などを頼みだした。金井さんは我々の希望をよく聞いて、色々な山 和二十四、 いた。テントまでは自分で作ることができなかったからである。昭 夏テント、森林帯をこえるとイグルーを作って日高山脈の稜線を歩 自分で手縫いで作っていた。その頃の北大山岳部の冬山は、 五年頃から金井さんにテントやザックなどの製作や修

幌におられた望月達夫氏の「北の山」、 たものであった。今その総目録を見ると、第一巻の巻頭はその頃札 者も一人一編限りという原則を守り、 で通巻四十五号)。 P R 誌とはいいながら店の宣伝はせず、 いう随筆誌を発行されたことである 金井さんの偉い点は、「秀岳荘」のPR誌として『山の素描』と (昭和三十七年から五十一年ま 北海道の山と人とを基調とし 続いて故加納 郎氏の「霧

藤平正夫氏、本田勝一氏、故三田幸夫氏……と、そうそうたる方々の随想が寄せられている。このような採算を度外視した異色の出版の随想が寄せられている。このような採算を度外視した異色の出版物の発行が、坂本直行、山口透らの協力があったとはいえ、金井され個人の力で続いたことは、北海道の登山史、文学史のうえで特筆すべきことがらであろう。しかも一人一編限りという原則を守り、すべきことがらであろう。しかも一人一編限りという原則を守り、中五年続いた後惜しまれながらきっぱりと廃刊された。私も一度書かせてもらったが、今懐かしく思い出している。

を非さんのもう一つの面は、画のことである。前にも名前が出た 直行さんを囲んで作った「歩々の会」という、山と自然を愛する人 達の画の会の創設以来の会員で、展覧会にはその風貌のようにひょ きらい、今でも愛用している。晩年は奥様の健康が優れず、又最近 もらい、今でも愛用している。晩年は奥様の健康が優れず、又最近 もらい、今でも愛用している。晩年は奥様の健康が優れず、又最近 もらい、今でも愛用している。明年は奥様の健康が優れず、又最近 もきっちりと納め、昨年九月に出版した三十周年記念画集にも「瀬 と気軽にスケッチ・ブック入れを作って もらい、今でも愛用している。晩年は奥様の健康が優れず、又最近 もきっちりと納め、昨年九月に出版した三十周年記念画集にも「瀬 という、山と自然を愛する人

愛する人を愛した金井さんの御冥福を祈って筆を置きたい。 子が生き生きと書かれている。 登りだったと思う。直行さんの著書 ん達と一緒に行った日高ポロシリ岳 中野征紀、 棚海岸」の画と短い随想を出していただいた。 会員番号七一八六番 藤井運平両氏。一九五九 一九七一(昭和四十六)年入会。紹介者は 山の道具を通し、 への登山が、多分最も大きな山 「雪原の足あと」にその時の様 (昭和三十四)年夏に、 山と自然と、 野田四郎 直行さ 山を

渡邊宏之氏(一九〇八~一九九三)

日本山岳会入会の紹介者である織内信彦先輩から、渡邊宏之さんが亡愛して止まなかった、栃木県山岳連盟名誉会長、渡邊宏之さんが亡愛して止まなかった、栃木県山岳連盟名誉会長、渡邊宏之さんが敬多くの岳人から慈父の如く慕われ、交際されたほとんどの人が敬くなられて、六月二十七日、一周忌を迎えた。

十三 三越運動具部、 ネームに 各地の山に足跡を残している。 男として生まれ、真岡中学時代より登山に親しみ、一九二 んの用具も数点お借りした。その中に上質の布地の寝袋があったが、 た栃木県立自然博物館で、「登山用具の今昔展」を開催し、 た。卒業後は、三越に入社して山岳部に入り、 さんらの薫陶を受け、 初対面されたらしい)その後、 渡邊さんは、一九〇八年、栃木県上三川町の素封家、 年卒業、 (実用新案登録) 親の薦めで東京農大に入ったが(農大で織内さんと 東京)と銘うってあった。 先鋭的クライマー、 第一四〇三〇六號、 慶応義塾に移り、 今年の春、 日光中宮祠に新しく立て リーダーとして活躍され 山行に没頭し、 山岳蒲團 槙有恒、 生沼家の五 四 日本

頼っていたが、機械化を計り、千田商会という総合商社のインドに業の石材業に専念された。当時、大谷石の採掘は、専らつるはしに一九三八年、栃木県の名家、渡邊家の養嗣子として迎えられ、家

渡邊さんは、

海外登山に出かける若い者を前に「より高く、

より

巡幸された折、 場になるなど、ご苦労も多かったようである。 は大谷石の採掘場が中島飛行機(現在の富士重工スバル)の地下工 持っておられた。 を導入し、 勤 務しておられた登高会の先輩三田幸夫さんを通じて、 採石場を視察され、 石材業界にも大きく貢献した事であろう。 改良を重ねて成功する等、 御説明申し上げたところ、「そ 先駆者としての炯眼も 戦後、 昭和天皇が御 裁 級断機 中

の精神でしっかりやるように」と励まされたと感激しておられた。

地元に城山山岳会を創り会長に就任。一九五六年、

一九五〇年、

察官友の会等の役員として社会に大きく貢献されました。 を、また社会事業家としても下野三楽園、 員 方面にわたり幅広い活躍をされたが、教育家としても、 を退いたが、請われて名誉会長に就任していただいたのであった。 競技面でもすばらしい成績を収めることができた。一九八二年会長 年度ということもあり、いろいろとご苦労をお掛けしたが、運営面 サハマ・イリマニに登頂、三つの無名峰の初登頂に成功している。 された。一九六八年、 長に就任、そのレベル・アップ、遭難防止、 くの優秀な岳人が育っていった。一九六三年から栃木県山岳連盟会 日下田実隊員らを招いて講演会を開き、 槙隊長率いる日本山岳会隊がマナスル登頂に成功するや、 九八〇年、栃の葉国体では、地元岳連会長として、 渡邊さんは、本業の石材業はもとよりであるが、実業家として多 宇都宮市教育委員長、 ボリビヤ・アンデスに登山隊を送り、 栃木県教育委員会連合会長等多くの役職 若者に夢と感動を与え、多 栃木県保護観察協会 自然保護活動等に尽力 正式種目の初 作新学院役 植隊長, 最高峰

よく表している。

合掌

コンタが、コンダン、自然之愛ン、『こさ愛ン、コンダン、 まなそして細心に計画を樹て、大胆に行動せよ」と論していた。困難な、大自然のもとに、いかにして自分に打ち克つか試すのです。

山を尊び、山を愛し、自然を愛し、郷土を愛し、石を愛し、母校をこよなく愛した方であったが、人情に厚く、恩義を忘れない方でをこよなく愛した方であったが、人情に厚く、恩義を忘れない方でをこよなく愛した方であったが、人情に厚く、恩義を忘れない方であった。日本山岳会と関係のある話をご披露すると、一九六○(昭和三十五)年、奥秩父・金山平にある、JACの功労者・木暮理太郎翁の碑を移築する話が持ちあがった際、台座になる大きな大谷石郎翁の碑を移築する話が持ちあがった際、台座になる大きな大谷石郎高の叫ーダーであった佐藤久一朗さんや三井松男さん(ともに故人、三井さんは日本山岳会山梨支部長で同支部発起人のひともに故人、三井さんは日本山岳会山梨支部長で同支部発起人のひともに故人、三井さんは日本山岳会山梨支部長で同支部発起人のひともに故人、三井さんは日本山岳会山梨さんと、春風に接するようで心のされていた。書斎でお話を聞いていると、春風に接するようで心のされていた。書斎でお話を聞いていると、春風に接するようで心のならぎを覚え、たびたびお訪ねしては四方山話をしたものである。

(坂口三郎)

手塚晴雄氏(一九〇七~一九九四)

にあって活躍したが、六年組には夭折した中島嘉一郎氏をはじめ、年三月に東京商科大学(現一橋大学)を卒業した。在学中は山岳部手塚晴雄氏は本会元理事磯野計蔵氏と同期で一九三一(昭和六)

諸氏がいて、 で一橋山岳部の充実した時代であった。 金田 昭和三年、 郎、 四年組 宇佐美敏夫、久保田礼治、 (吉沢一郎氏、 近藤恒雄氏ら) 横倉吟三郎等の につ

周辺 が、一九二八 上手だったのであろう。 かけている。これでみると手塚氏は同期生のなかではスキーが相当 山連盟の要請にもとづき早大山岳部員の江口新造氏と白馬山麓細野 られたとある。更に三〇年一月二十九日から二月六日迄関東学生登 き槍の肩を越えたときもひどい風雪で、槍の穂へ登るのを断念させ 槍平から飛驒乗越を越えて上高地へ下った。この時は風雪が長 (昭和四)年三月スキーで乗鞍岳登行、 磯野氏らと霞沢三本槍、 至仏山に登ったほか五月に八ヶ岳川俣川を遡行したこと、二九 塚氏の在部中の足跡は『針葉樹』四号、五号に収載されている (現白馬町) の山案内人に対するスキー講習会の講師として出 (昭和三) 年三月尾瀬へスキーで入り、 明神岳、 穂高、 同年七月浦松佐美太郎、 0 (昭和五) 年 燧ヶ岳、 景鶴 く続 一月

昭

キーに出かけていた。 月には十勝岳などへも行って、戦争がひどくなる迄は、 卒業後も富士へスキーをもって出かけたり、三三(昭和八) 屢々山やス 年

持があったのかも知れない。古いことなので私自身はっきり覚えて は近藤恒雄、望月)。特に入会の動機があったような記憶もないが、 いのときなので随分おそい方と思う。会員番号は八二八八 手塚氏の入会は一九七七(昭和五十二)年七月だから七十歳ぐら い仲間に会えるとか、或いは上高地の山研を利用できるとかの気 (紹介者

> 元気で出席され、 年十二月に近藤、 顔が見えなかった。 0 B会である針葉樹会へも昔はよく出席されたが、 私たちと部歌「山讃賦」を声高らかに歌われたと 吉沢両先輩の卒寿のお祝いをOB会で催したとき 私がお目にかかった最後は一九九二(平成四 最近はあまり

きであった。

八十六歳で逝去されたのを知ったのは一ケ月以上たってからだが、 う)を経営されていた。九四 和六年組のなかでは一番長命であった。 手塚氏は卒業後は家業の手塚株式会社 (平成六) 年一月十四日脳梗塞により (甲斐絹等の織物製品を扱 合掌。

H 野 悦 郎氏 (一九四〇~一九九四

手記で読んでいるうちに、今にも、やあ、 6 そのものに生きた。日野悦郎、二月三日寒い朝、二十数年も いるのが見つかった。「山への想い」「高所登山へ向う姿勢」等々の 続けてのランニング通 書いたであろう、数百枚の山行記録が、 数週間後、彼の多くの遺品の中より、一山行ごとに酒を飲みなが 人生の全てを、 山に賭けた。 勤の途中、 山のために三十年間、 突然の心臓麻痺で倒 白石さん』と言って、彼 山の様に積み重ね合って れる。 独身寮で、 h

が

ポーター一人を連れ十日分の食糧を持って雪のナンパ

·

四つの氷河を通って、

十日間かかって山頂直下七二五〇ぱ

崎窯業に入社、二十二、三歳より縦走や、岩登りに熱中していた。後は工業高校卒業後、二、三の会社を転職して、一九六七年に黒さな表現や、かざりはせず、今ではまれに見る、朴訥な人であった。してたとえ八○○○旨を登頂しても、けっして粋がらず、又おおげしく、他人には穏やかで、いつも落ち着き払い、出しゃばらず、そ

す岩と雪の世界へと取りつかれて行った。年の夏、初めてヨーロッパアルブスへ向かう。マッターホルン・への夏、初めてヨーロッパアルブスへ向かう。マッターホルン・へ彼はまもなく職域山岳会の盛んな時期に会社の山岳部に入部、七三

イルで登ったら、との意見でまとまり、 が、八六年秋のチョ・オュー(八二〇一日)遠征の時のことだった。 ことになった。彼とは二十年来の付き合いの間、数えきれない程一 に良きライバルになり、又最強のパートナーとして、 えんのではない?」と聞かれ、その場で口論となったのが縁で、後 好きそうな男から「このテントでは春山、冬山の降雪や強風には耐 会の休憩時に張ってPRをした。その時一人の長身の、いかにも山 緒に山行をしたが、中でも二人で酒を飲むと、かならず話に出 神戸トモミツ製の吊り下げテント(今のダンロップテント)を講習 岩登り講習会であった。その時は私が小さな山の店を開いて三年目、 ートで臨んだが登れず、日野さんからの西稜よりアルパインスタ 北九州ヒマラヤ同人八人のメンバーで、ゴジュンバ氷河より東稜 H 「野さんとの初めての出会いは、七三年の五月、 結局、 H 野 福岳連の野北の 交流を深める 白石とシェル るの

> たもんだの末に、お互い命の保証は自分で持とうということになっ に日野さんは、「俺一人でいいから登らせてくれ」と一時間位すっ じて、「日野さん、食糧もあとわずかやし降りよう」と頼んだが逆 とあめ二つずつ、 まで下りて日野さんの帰りをただただ無事を祈って待った。 て、十月十六日、日野さん一人で山頂へアタック、 間天候を待ったが良くならず、十二日目の夜、 食糧を食べられて、五日目より朝は紅茶のみ、昼はクラッ に最終テントを張った。ナンパ・ラまでの途 夜は二人でアルファー米一袋、最終テントで二 中、 私は体力の限界を感 ポーター 私は五〇〇〇公 カー 1夜間

二日後の四時頃かすかに「白石さん」と言う声が。気のせいかなこ日後の四時頃かすかに「白石さん」と言う声が。気のせいかなこれ、お互い疲労困憊の死闘の登山でくきかない私の面倒を見てくれ、お互い疲労困憊の死闘の登山でくきかない私の面倒を見てくれ、お互い疲労困憊の死闘の登山でと思っていると五、六分後目の前に現われ、「白石さん登ったバイ」。

それからチョ・オユーより帰国後九二年にチベットのシシャパン で(八○○八記)、九三年マッキンレー(六一九五記)と残りの時 で(八○○八記)、九三年マッキンレー(六一九五記)と残りの時 は壮絶であった。鉄人日野と言われた彼も人間であったのか。いつ は壮絶であった。鉄人日野と言われた彼も人間であったのか。いつ ものようにいつもの道を走って、そのまま天国まで逝ってしまった。 ものようにいつもの道を走って、そのまま天国まで逝ってしまった。 ものようにいつもの道を走って、そのまま天国まで逝ってしまった。 ものようにいつもの道を走って、そのまま天国まで逝ってしまった。 りと生きている。長い間の日野さんの力強い友情に深く深く感謝 かりと生きている。長い間の日野さんの力強い友情に深く深く感謝 かりと生きている。長い間の日野さんの力強い友情に深く深く感謝 かりと生きている。長い間の日野さんの力強い友情に深く深く感謝 かりと生きている。長い間の日野さんの力強い友情に深く深く感謝 して謹んで冥福をお祈りします。

略

一九四○年 五月十五日、大分県玖珠郡にて出生

一九六八年 黑崎窯業山岳部入部

一九七三年 ヨーロッパアルプス、モンテ・ローザ、マッターホル

九七五年 ヨーロッパアルプス、ツール、ロンド北壁、ン、グレポン南峰、モンブラン登頂

一九八六年 チョ・オユー、西稜よりアルバインスタイルで登頂一九八一年 ネパールヒマラヤ、ニルギリ北峰、西稜より登頂一九七五年 ヨーロッパアルプス、ツール、ロンド北壁、他登攀

九九二年 シシャパンマ中央峰登頂健児、成末洋介

九九二年

日本山岳会入会、会員番号一一〇九六。紹介者 吉村

九九四年 二月三日 ランニング通勤途中、心臓麻痺により逝去。九九三年 マッキンレー登頂。韓国、雪岳山山行

享年五十四歳

(白石宣夫)

佐藤正倫氏(一九六三~一九九三)

その後、太田原高校を経て、一九八三年四月東京農業大学造園学野球部に情熱を燃やし、中学時代主将として県大会に出場している。佐藤久之、ミイ御夫妻の長男として生まれた。氏家小、中学校時代一九六三年八月十一日、故佐藤正倫は、栃木県塩谷郡氏家町に、

輩の故馬場哲也とともに参加し、

ネパ

ール側隊員中最年少隊員とし

一年後の一九八八年、

なく海外へと自分たちの山登りを展開する、新たな出発点となった。

日本山岳会主催の三国合同登山隊に五年先

彼の山登りに最も影響を与えた、当時山岳部の監督であった、故に入学、同時に山岳部へ入部し、山登りを志すことになった。

早坂敬二郎との出会いがあった。

に部は活況を呈し、今後の活動に希望がわいた。一九八三年は近年になく佐藤を含め五名の入部者があり、久しぶりその頃、東京農大山岳部は部員の減少で悩んでいた時期であった。

五月連休、佐藤は新人歓迎合宿の八海山で初めて本格的な山登り 五月連休、佐藤は新人歓迎合宿のであったのかいで、ごく単純なものであった。彼の山登りを始める動機は、尾瀬したい……」と、書いてあった。彼の山登りを始める動機は、尾瀬したい……」と、書いてあった。彼の山登りを始める動機は、尾瀬したい……」と、書いてあった。彼の山登りを始める動機は、尾瀬で行った時の思い出か、体を動かせる何かをしてみたかったのかいで行った時の思い出か、体を動かせる何かをしてみたかったのかいであったのではなかろうか。

とっても佐藤にとっても、東京農大山岳部にとっても、国内だけでもかかわらず無類の力を発揮し、頂上に立つ。この登山は、早坂にはもとより、生活態度まで、公私にわたり指導した。その努力が、はもとより、生活態度まで、公私にわたり指導した。その努力が、はもとより、生活態度まで、公私にわたり指導した。その努力が、はもとより、生活態度まで、公私にわたり指導した。その努力が、はもとより、生活態度まで、公私にわたり指導した。その後、東京農大山岳部員とともに彼は、年中山登りをするようその後、東京農大山岳部員とともに彼は、年中山登りをするよう

でいった。私の大切な先輩であった二人の遺影を雪の中に埋め……」 を望む……。とても懐かしい光景であった。感動が静かに私を包ん

登頂の想いを書き綴り、二人の先輩の遺志を胸に秘め、

前年失

は

て、サウスコルまで達した。ここで日本山岳会で活躍する人々と知 山登りはもとより、 人間的にも幅を広げていくようになっ

一九八九年、ナンガ・パルバット・ラキオトピーク東南稜

へ東京

生を含め体調を崩していく隊員の中にあって、主力として活躍して し、各キャンプへの荷上げ品目を割り出し、隊に貢献していた。学 屋根にキャンプを八つ建設する計画に対して、そつなく装備調達を この登山は、 することができず、失敗に終わった。彼の担当は、装備で、長大な 隊で挑んだ。ここで私は佐藤と本格的な登山を始めることになった。 農大山岳部は南雲和雄を総隊長に、早坂をはじめ、十三名からなる 馬場を落雷によって失い、六二〇〇は地点までしか達

めない。

いた姿は、いまだ記憶に新しい。

なるカラコルムの峰々、そして昨年……東京農業大学が挑んだラキ ン・ボルティアも一緒だった。この時の想いを、『Nanga とともに第二次アタックに向かう。おりしもスペイン登山隊、ラモ に向かった。天候悪化により第一次アタック失敗後、長尾妙子女史 ネニアソブ隊の一員として、ナンガ・パルバット・ディアミール壁 オトピーク東南稜、ヘルマン・ブールが踏破したジルバープラトー arbat一九八九報告書』に「静かなる感動」として記している。 「一つの小ピークを越え、 このラキオトピーク東南稜失敗の後、一九九〇年六月、 頂上に着く。ここからは……悠然と連 同人パイ Р

> 伺われる。二人の大切な先輩とは、ラキオトピーク東南稜で亡くなっ 敗した、このナンガ・パルバットに雪辱を期して登っていたことが た馬場であり、もう一人は白馬岳で亡くなった中島真也である

常々言っていた「仲間たちとの山登り」に傾倒していったことは否 ぱり農大の仲間たちと登りたかった」と語っていたように、 るものだと感じたようだ。しかし、登頂したにせよ、後日、「やっ おける個々の技術、 た。特にこの登山は、個々を中心とした実力主義的登山で、 この登山では大学山岳部とは違った社会人の人達の山登りであっ 精神基盤の大切さを知り、 登山とは個々に帰す 登山に

仲であった。一応の偵察の目的を達成した。 だった。大西君とは三国合同隊以来の付き合いをしており、 ナムチャバルワ峰に早坂とともに偵察に行った。 この年の十一月~十二月にかけ、日本山岳会が登ろうとしていた 故大西宏君も IH

によるものだと思ってやまない。 でも中心的な働きをする。 初の八〇〇〇計峰に立った。メンバーの先頭に立って、 私は、早坂、八幡敏正、佐藤、谷川太郎の農大の仲間たちとともに、 Ш ド・ピーク登山隊に参加する。早坂が言っていたように、 登りを願い実行していた結果であった。一九九一年七月十一 一九九一年、 加藤和夫総隊長、早坂隊長のもとに東京農大プロ 私が頂上に立てたのは、彼の力ある行動 仲間との

テ 間違いない。 1 この登山の成功で、 クスを学んだことが佐藤にとってのおおきな収穫であったこと 早坂の組んだ完璧な八〇〇〇に峰攻略

一九九二年三月、山登りの師であった早坂が大天井岳で遭難し、

んぞや」という、自らへの問いかけの日々であった。藤も捜索活動に没頭する。度重なる仲間たちの遭難は「登山とはな存方不明となった。六月に遺体を発見し、収容するまで、私も、佐行方不明となった。六月に遺体を発見し、収容するまで、私も、佐

この一九九二年九月、日本山岳会主催の日中ナムチャバルワ峰登 山際に参加し、ナムチャバルワ峰へ向かった。早坂、大西君等とと もに債察に行った山である。ここでも、主力メンバーとして活躍し、 見事登頂する。名実ともにエキスペディション・クライマーとして の地位を確立した登山であったようだ。彼からの手紙に「元気にやっ ています。ガッシャブルムⅡ峰許可取得の件よろしくお願いします」 と短く書いてあった。彼はナムチャバルワの出発前にガッシャブル ムⅡ峰のアプリケーションを提出していた。

う確信に近い思いがあった。と谷川はこの登山に出発した。

彼らの今の力からすれば登れるとい

早坂が組んだタクティクスをそのまま踏襲したものであった。 名。この登山において佐藤は、 あった。早坂の現役時代の監督だった山下康成を隊長に、大林一成、 質的には三ケ月あまりで実行に移すもので、実にハードなもので らないという義務感にさいなまれていた。許可取得から五ケ月、 なっていたものである。私たちにとって、是が非でも実行せねばな 全てを立案し実行する。そのタクティクスは、ブロード・ピー 谷川太郎、長久保浩司、 可が届 一九九三年の年明け早々、ガッシャブルムⅡ峰南 いた。この登山計画は、 学生の吉田裕一、佐藤、そして私と、 登山のタクティクス、ルート工 早坂が一九九二年に実行することに 稜からの登山許 計七 クで 実

十月十八日午後八時を廻ったころ、事故の一報が飛び込む。佐藤一大月十八日午後八時を廻ったころ、事故処理に終始しながら、実感のない遺離の報であった。その後、事故処理に終始しながら、実感のない済んだばかりの田園風景が広がり、何事もなかったようにやんわり済んだばかりの田園風景が広がり、何事もなかったようにやんわりとした雲がたなびいていた。ずっと前に「おれんちは牛がいる田舎だからなあ」と言っていたことが頭をよぎった。そのこと以外、佐藤はあまり自分を語らなかった。

から、学生の自主性を重んじて、その計画を行おうとしていたふしから、学生の自主性を重んじて、その計画を行おうとしていたふしたような気がする。佐藤とは「登山とは」などと大上段に話をしたたような気がする。佐藤とは「登山とは」などと大上段に話をしたたような気がする。佐藤とは「登山とは」などと大上段に話をしたたような気がする。佐藤とは「登山とは」などと大上段に話をしたがら、学生の自主性を重んじて、その計画を行おうとしていたふし彼の登山観を探ってみた。そこには早坂のアルビニズムへの追随彼の登山観を探ってみた。そこには早坂のアルビニズムへの追随

七月二十二日、学生の吉田を含め、

南稜の第五登、

このルートから日本隊として初の登頂に成功

登攀隊員全員、

ガッシャ

ブル

ると、 がある。 いと思う昨今である 日々を想い、彼の育てた若い後輩たちとまた次の山登りを計画した ブルムⅡ峰と三度の八○○○☆に一緒に登ったときの喜怒哀楽の 空に流れ始めた。ナンガ・パルバット、ブロード・ピーク、ガッシャ に山登りを続けたいがためだからである。 こさないための対処である。そしてまた、佐藤とこれからも、 遭難を起こしたときの事後処理活動の会ではない。 ろうか。 兄や仲間同様に、 ということもあり、 性の欠如も生じていた。大学山岳部は、四年間という短いサイクル そこには、技術は養われるが甘えも生じやすいことも確かで、 示し、学生の責任感を養っていこうとしていた。部員数の減少もあ かし、それが人間たるゆえんで自然と人間との違いなのではないだ ていたようだ。 の中で後輩たちにでき得るだけ、 猛暑の続いた夏の終わりを告げるかのように、すじを帯びた雲が 佐藤の遭難の後、私どもの会で遭対委員会を作った。その目的は、 佐藤の遭難は、 (佐藤正倫氏は一九八七年日本山岳会に入会。 それまで、監督、コーチが毎度のごとく入山していた。しかし ある人は言った。登山を志す人は皆そう思うに違いない。し 合宿に同行しなくても、 クレバスへ滑落という基礎的な登山技術欠如にあ 自分が育てた後輩と、いつもヒマラヤを思い描い ひずみができやすい体質がある。そうした現状 総合的な登山観を植えつけ、 学生だけでできるような方向性を 会員番号一〇一五 それは遭難を起 とも 早坂

会報「山」訃報・追悼文一覧

一九九三年七月号(五七八号)

計報 野口末延氏・麻生武治氏・高山忠四朗氏 (Y・

八月号(五七九号)

ル(市川義輝)、山とスキーの古い友達・麻生武治さんを偲ぶ(佐一郎)、杉本義信君を偲んで(小林勇次郎)、麻生翁のスキーシュプー麻生武治さんの思い出(長島春雄)、山に還った高山さん(赤羽孝麻生武治さんの思い出

十一月号(五八二号)

藤テル

穂高岳山荘の今田重太郎さんを悼む(伊藤茂

一九九四年一月号(五八四号

M

計報 三島昌夫氏(中村太郎

四月号(五八七号

白い世界に生きた岩下莞爾さん

五月号(五八八号)

島田巽さんを偲ぶ(織内信彦

小笠原岩雄

―支部だより

報告・会計報告、同五年度事業計画案・予算案及び前記役員人事が役員も約半数が入れ代わり支部事務所も変更した。平成四年度事業で小須田喜夫前支部長から野田四郎支部長に引き継がれ、他の支部平成五年度は役員の交代年度にあたり、四月二十二日の支部総会単一土 海 道 支 部■

冬の一時を楽しんだ。

承認され

Ш 態も不明であったので、 創立二十五周年記念山行で、ニイカップ在住の会員の努力で計 新緑の森林を散策し春の野の花を楽しんだ。イドンナップ岳は支部 カムイシリ山は二十二日夜半から雨、 半島の南白水岳 七月十七日~十八日日高イドンナップ岳、 年度の支部山 参加者の半数は濃霧の中を登頂、 る遙かなる山であることを改めて知らされたが、 道が出来たとはいえ、険悪なシュンベツ川とニイカップ川 前年秋の台風で途中道路が崩れており、新しい登山道の状 翌年二月十一日~十三日ニセコ山群でのスキー。 行は五月二十二日~二十三日にかけてカムイシリ 六月五日~六日にかけて新役員で下見に出 翌朝には小降りになったが濃 他はようやく芽吹きだした 十月二日~三日渡島 本番は本

州

各支部からの参加者を含め行動十二時間の末無事登頂を終えた。

機会が増えるよう、支部山行は全道各地で行うように考えている。

でき、 5 山頂から新雪に思い思いのシュプールを描いて五色温泉に下った山 にとっては、時代の変化を感ぜずにはおられない。二月のニセコは しい沢登りと薮漕ぎを強いられた道内の山々に近年新しい登山 スキー組、 白水岳は道南の山、 天気に恵まれ初秋のブナ林を登る静かな山であった。 高齢者にも登山の機会が増したが、 家族連れでゲレンデを滑る者、 昨 年大津波の被害を受けた奥尻島を望みなが 夜のコンパ、皆それぞれ 昔の北海道の山を知る者 今まで除 道

「つる」の二次会に流れる。「つる」の二次会に流れる。(爺々)ヌプリとシー・カヤックの旅、高澤光雄氏のネバール・トーダ外登山報告会は三月十五日、金井哲夫氏の国後島チャチャーであり、東京の二次会に流れる。

を持っている。 大正初期に植林されたドイツトウヒの美林とエゾマツ・トドマツと で森林観察会を行ったことである。この林は第二次世界戦争が終わ 本年度行事計画・予算案、役員人事を承認し懇親会になった。 であった。四月二十一日の支部総会で前年度行事報告・会計 北四五○昔、東西五○○古、 策と晩春・初夏の花と樹林を楽しんだ。北海道は御承知のように南 広葉樹が混交した見事な森林である。支部長の案内で快晴の森林散 るまでは御料林で、幸い昭和二十九年の大台風の被害にも逢わず、 今年度の新しい行事は、 平成六年度の人事は役員交代年度ではないため、数人の交代のみ そこに分散する約二百人の会員に出来るだけ参加 五月二十九日、 日本全土の約四分の一 札幌近郊のミスマイ林道 弱の広大な面

、総会提出議題の審議をし、

午後盛岡自治会館でまず上野幸人会員

午前中の支部委員会

に移籍

成五年総会等を三月二十八日に開催した。

本年度の最初の山行は道北の天塩岳で六月十一日~十二日に行い、本年度の最初の山行は道北の天塩岳で六月十一日~十二日に行いの山だが「日高山脈の展望台」という日高在住会員の推薦で決まっの山だが「日高山脈の展望台」という日高在住会員の推薦で決まっの山だが「日高山脈の展望台」という日高在住会員の推薦で決まった。冬期山行は過去何年か続いたニセコから離れ、冬山のレベル・た。冬期山行は過去何年か続いた三セコから離れ、冬山のレベル・アップを図って十勝岳周辺で行うことになった。

ければならないだろう。
(野田四郎)の支部でも同じと思うが年令・経験等にも大きな拡がりがある。この支部でも同じと思うが年令・経験等にも大きな拡がりがある。こが述のように、北海道は会員が広い道内に分散している。またど

岩 手 支 部

野辺山に登った。幹事=鹿野・渡辺・須々田。り天候が良くなかったが宮古の会員渡辺さんの先導で紅葉の美しい夫・浅野孝一の両氏も来て下さり十五人が集まった。翌四日はあま平成四年秋の例会―十月三日岩泉町安家のかむら旅館に望月達

理で参加した。 する日の青森支部が出来ていないので岩手支部長中谷が会長代た。JACの青森支部が出来ていないので岩手支部長中谷が会長代第一回青森ウェストン祭が十月十日に青森県新郷村で開催され

に登った。幹事=菊池(修)ほか水沢の会員。 に登った。幹事=菊池(修)ほか水沢の会員。 を必め会―四月十七日、金ヶ崎町金ヶ崎温泉に十七人が出席。翌

成発送。予約販売としたので赤字を出さずに済んだ。 五月二十一日「続かぬか平の山々・二上純一氏遺稿集と共に」や

夏の例会―七月十日夏油温泉国民宿舎夏油山荘にて十七人参

に登った。幹事=高橋(俊)・高橋(博)。と救急法についてスライドと実技をまじえて講演をしていただいと救急法についてスライドと実技をまじえて講演をしていただい岩手医大高次救急センターの安井豊会員から中高年登山者の問題点

十九日瀧山登山。中谷・椚田・中谷・阿部陽子参加。東北集会は九月十八日山形支部主管で山形市西蔵王山荘で開催。

つく状態であった。幹事=山崎成一。 走。収穫皆無の大凶作地域で茸も駄目で熊の行動の証拠ばかり目に 秋の例会―十月二日岩泉町かむら旅館。三日音床山―宇霊羅山縦

花・松田・諏訪出席。青森県在住の岩手支部会員七人が新青森支部青森支部設立総会―十一月二十日青森市。中谷・菊池(修)・立

(中谷 充)

Ш 形 支 部

数少ない事業実施に留めている。 平成五年度の事業内容は、 各会員が重複所属の関係上、 例年通 h

開催。 本会総会に先だって開かれた支部総会は、十九名の出席のもとに 会計・事業・予算案などを審議。規約の一部を改定・役員の

改選などを行った。

岳に於いて親善交流登山を実施した。また、秋期(十一月)には、 斗鉉理事ほか三名)の一行十七名を迎え、新緑の太平山と秋田駒ヶ 慶南支部(金英文支部長ほか十二名)、並びに韓国山岳会本会 支部山行は、姉妹山交流登山として、春期 (六月) は韓国山 岳会

にて中止。急拠、 繰り返され、代って隣接の皮投岳を実施。 北林委員の年祝いとして北林山を計画したが、諸般の事情で延期が 晴天に気を良くして、帰路上にある竜ヶ森に登っ しかし、ヤブが濃く県境

集会などにも出席し、 にはこれまでの最多数でもある十三名が出席。その他自然保護全国 山形支部主管の東北支部集会(瀧山)には五名。 共に懇親を深めた。 また年次晩餐会

佐々木民秀)

入会員は三名、

実質会員は六十二名と初の六十代を越えた。

支部会報の発行は増刊して三回、

通算二十六号に至っている。新

△一九九二年度

度は次の山行を行った。 支部山行をより活発に、 との総会での目標を生かそうと、九二年

雁戸山 (清掃登山)、 鳥海山・大平口 (清掃登山

面白山・紅葉川

鳥海山・清吉新道

骶岳

(親子で地形を観察する会

十一月 男加無山

二月 蔵王 (樹氷原を滑る会

三月 靈山(悪天候のため中止)

この他、

支部行事として、四月・総会。十二月・晩餐会

(銀山

た。 が、九一年八月の「韓国・雪岳山登山報告」を作成し会員に配布し 泉)を実施した。支部報は本年度は諸種の事情で発行できなかった

として、深い哀悼の意を捧げるものである。 大天井岳における雪崩により短い生涯をとじられた。同郷の山形人 ダーとして活躍されつつあった山形県羽黒町出身の早坂敬二郎氏が 三月に、支部には所属していなかったが、日本山岳会若手のリー

烈な風雪に妨げられ、 員グループが、厳冬期の鳥海新山北壁に五度目の挑戦をしたが、 ひるがえってみると、個々人の山行は活発で意欲的なものはある また、二月上旬、佐藤淳志氏をリーダーとする酒田地域の若い会 今回も初登を果たせなかった。 強

としても、 何かを求めたい。 支部会員の心の結集という姿での実績について、 そんな思いの九二年のまとめである。 もつと

一九九三年度

を自分達自身の中に吹きこもうとの希いをこめてこの年を過ごし を占めている。それを少しでも抜け出す一面をもつくり、 平均年令の高い支部なりの、 和やかで且つゆるやかな行事が主流 新鮮な風

丁岳偵察行 真田事務局長新任 五月

総会

(西川町克雪センター)

役員改選

大橋支部長再

摩耶山(清掃登山

東北集会のコース試登

七人 八月 利尻山

十月 九月 丁山地 瀧山 (東北支部集会

(笹子一丁—萱森—笹子)

十二月 支部年次晚餐会

十二月~ 一月 会員個々の山行として、天山ハンテングリ峰、 エベレスト山麓トレッキング

黒伏山、

キナバル山、 東北集会は山形支部が担当となり、 カナダ・スキー行等々があった。 その準備と実施を通して支部

会員の結集という稔りが得られた。そして当地特有の芋煮の夕の前 地から四十六名の参加を得て盛会裡に秋色の瀧

を

Ш

九三年度の山行は次のとおりであった。六月十二~十三日=

ういった無償の行為が人々や行政に伝わり、次第々々に自然保護 鳥海山のイヌワシの観察を厳しい冬期まで続行したことである。こ 会員の参加する姿が少々もの足りないと思う。それはそれで現実と 輪を広げてゆく一つの核となることを念ずるものである。 年度を振り返ってみると、集まることの悦びという原点に、 特筆したいのは、自然保護委員の佐藤淳志会員が殆んど独力で、 支部

いを、 何を求めているのか。もしかしたら果てしないかも知れないこの問 して見つめようと思う。この小さい支部の中で、支部会員が支部に 互いに反応させ合いながら今後の支部を形造ってゆきたい。

九九四年六月現在の支部会員は五十六名である。年に一~二名 城 支 部

心に、 わが支部も中高年が多いが、山行意欲は新入会員に劣らずなお盛ん ではあっても、 る希望も多くなっている。その希望に沿うべく宮城県内や近県を中 毎回多くの会員の参加を得ており支部としての山行計 低い山でも手軽に出掛けられる山行を続けている。 会員がふえてゆくことは大変うれしいことである。

九月十八日~ 形県最上町)・十名、 五日~二十六日=栗駒山ドゾウ沢 自然保護山行・十二名参加、 十九日=東北地区集会 八月二十九日=蔵王丸山沢 (沢登り)・十二名 七月三十一日~八月一日小又山 (沢登り)・六名、十月二十三 (山形県瀧山)・九名、九月二

た四年度の計画は春の総会で決定しているが、合計十五の事業を 大四年度の計画は春の総会で決定しているが、合計十五の事業を

ちしている。
もご案内を差し上げてきたが、今後とも多くの皆さんの参加をお待もご案内を差し上げてきたが、今後とも多くの皆さんの参加をお待きるように手頃に企画されているので、これまでも本部や各支部に以上述べたように宮城支部の山行は一人でも多くの会員が参加で

パーティーの折などにかみ砕いたお話しをお聞きすることもあったことであった。電気通信に関するわが国の第一人者だった氏から最近は支部の仲間と山行を共にすることはなくなってはいたが、七十五歳を過ぎるまで時々はマイペースで仲間とともに山を楽が、七十五歳を過ぎるまで時々はマイペースで仲間とともに山を楽か、七十五歳を過ぎるまで時々はマイペースで仲間とともに山を楽から最近は支部の仲間と山行を共にすることはなくなってはいた九三年度、宮城支部での悲しい出来事は岡田幸千生会員(七〇一九三年度、宮城支部での悲しい出来事は岡田幸千生会員(七〇一

たりここに謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第である。が、今ではそれもかなわぬこととなってしまった。稿を終えるにあ

四郡光昭)

越後支部

のでありました。
のお返りにはかなりの努力が必要だなという感じを強烈に受けたもの若返りにはかなりの努力が必要だなという感じを強烈に受けたもの若返りにはかなりの努力が必要だなという感じを強烈に受けたものでありました。

その表の数字の物語るものは、恐らく各支部における共通の問題をしまえる。産業界、趣味の世界を問わず、旗を振る側の人達にとって、アンテナを錆付かせることは命取りとなり得る。のでなかろうか。症状を、数字で段階化し、その組織の現在を判断のでなかろうか。症状を、数字で段階化し、その組織の現在を判断する基準を作る等、症状のキャッチ策、対応策等多ければ多い程よいと思える。産業界、趣味の世界を問わず、旗を振る側の人達にとった。と、大部分の人が気付く事が遅くなるので恐ろしい。気がく症状には、大部分の人が気付く事が遅くなるので、アンテナを錆付かせることは命取りとなり得る。

けて来た情熱の源泉はなんであったのだろうと興味深く、その業績がである。事務局であってもその辺は調査した訳ではなく、なにか漠然とした不安感を肌に感じているのは、私だけであろうか。調査の必要をせまられている。 で多分に洩れず、越後支部でも会員年齢の高齢化は始まっているご多分に洩れず、越後支部でも会員年齢の高齢化は始まっているご多分に洩れず、越後支部でも会員年齢の高齢化は始まっている

心配されておりました山梨支部も、

行部が誕生し、

支部行事も軌道に乗って参りました。

特に本部の

平成三年度の総会以来、

新しい

足跡を見直しているこの頃でもあります。

である。 代は終わりを告げた。本部と支部との関連から鑑みて、 れた運営を、 る運営見本を自己の身内に持っているにも関わらず、 過渡期を迎えている。 々の支部も、 惰性で続けて来なかったろうか、私自身も反省しきり 第二世代から第三世代にさしかかっていて、 ただ単に仲が良いのが一番よろしいという時 余りにかけ離 最良と思え 今、

何があっても充分に機能しない、有名無実であった委員会をどう機 による院政的運営や、金銭的事後承諾等は排除されて当然であろう。 委員諸氏に自覚の心が湧き上がって来ている。心よい緊張感を持っ 能させ、 ガラス張りの 清々しい雰囲気を造りあげてゆきたいものである。 本部の運営と有機的につなげてゆくか、 運営と会計は当然のことである。 比較的若い世代の ひとにぎりの委員

上げます。

田田

Щ

支

部

さて総会では、何と云っても昨年の全国支部懇談会の報告でした。 引退なさるとのことで、 全国の会員の皆様、よろしくお願いいたします。 山梨支部八十六名の責任者をお引き受けすることになりまし 年度の総会は四月十五日開催され、 支部長が新任されることになり、 大沢支部長が御 高齢 不肖 0

> とで、 御参加を戴き、 を申し上げましたところ、 役員会にも承認され昨年は当初から、支部懇談会の議題で終始いた 事業であります、 しました。「錦秋の奥秩父、木暮理太郎を偲んで」と題して御案内 致しました。目的をもって支部運営に当ることは、支部の結束にも 距離電話で明日には次年度の会場を発表しなければならないとのこ 又、運営にも張りがあり、 理事の藤井氏より依頼を受け、 好評のうちに終了出来ましたこと、 全国支部懇談会を、 良い結果が生まれるものと意気込んで、 東京を初め全国十六支部の会員の多数 山梨がお引き受けすることに 昨 年の会場の福岡より、 心から感謝申し

会の計画もすすめて考えて居ります。 支部員は別のそれぞれの会に席を置き、登山活動をいたしている会 功いたしました。支部独自の海外計画は今は考えておりませんが、 ムネマチン峰への派遣が実施され、支部員五名が参加し、登頂に成 本年度も、 員が居りますので、 冬のスキーを使っての山行と温泉の宿と予定をいたしておりま 又九十周年の行事であります、 海外登山の計画があり、 深田祭・木暮祭に続いて、 支部山行は懇親登山が中心になって居ります。 これ は山 静岡・信濃・越後との交流懇親 七月の納涼懇親登山、 梨岳 連が中心となって、 秋の山 7

を考えて参るつもりです。 ているところであります。 の皆様の期待にこたえる支部の運営を配慮しながら、 又さらに今後は、 田原屋」にて開催し、 全国の支部を訪問しながら、 毎月の役員会は甲府市の会員宅でありま 支部員も年々増加して居りますので、 ワインで乾杯しながら、 登山 なごやかな役員 計画を思案し 今後の支部

計画の折には是非お立ち寄り下さい。お待ちいたして居ります。会で会の指針を定めて居ります。全国の会員の皆様、山梨への登山

古屋学而

京都

支

部

ト達は、そのまま京都の登山史である。

西先生にとっても私にとっても山の原点の地である。 られ「この地は奇しくも旧三高山岳部の山 碑は清らかな流れのほとりの苔むした自然石に砲金製のレリーフを ら「棲み分け理論」を生んだ鴨川の源流である。このあたりは北山 深い北山に戻って来られ大変うれ 立民族学博物館館長の梅棹忠夫さんも不自由な目をおして駆けつけ 嵌め込んだもので、 の中心部とも云うべきところで、近くには魚谷山、 揺籃の地であり、 姉にご助力をお願いしたところ、多くの会員からご支援をいただい 余名が参加した。この日を心待ちにされていたと云う愛弟子の前国 十二日の除幕式には、 た。京都北山は、 りの地に記念碑を、との計画が持ち上がり、全国のJAC会員諸兄 立したことである。三回忌に合わせ、 京都支部産みの親である故今西錦司先生の記念碑を、 平成六年度京都支部最大のイベントは、 学者、登山家、探検家としての今西先生を育んだ 建立地の直谷は、 周囲の自然に溶けこむように建っている。六月 遺族、 支部会員はじめ遠来の会員を合わせ百 しい」とあいさつをされた。 ヒラタカゲロウの生態調査か 先生を偲ぶよすがとしてゆか 元日本山岳会会長、 小屋のあった場所で、 貴船山があり、 先生が思い出 京都北山に建 、また、

たものである。北山からスタートした、日本を代表するアルピニスを数え会員交流の輪も大いに拡がり成功であった。三十山完登を記念してこの秋を目途に出版の準備が進んでいる。「山城三十山」は、を数え会員交流の輪も大いに拡がり成功であった。三十山完登を記を散え会員交流の輪も大いに拡がり成功であった。三十山完登を記さて、支部が二年に亘りシリーズとして取り組んだ「山城三十山」さて、支部が二年に亘りシリーズとして取り組んだ「山城三十山」

強の支部」なるたのもしい一文は、 支部だよりは年四回発行。最近号の、山本一夫会員の「目指そう最 物を拝観した。支部行事も定着し年々盛り上りを見せている。また、 の上映があった。三十九年前の京都大学カラコルム、ヒンズークシュ 等。第三水曜に開催する山水会では、主なものに映画「カラコルム」 と合同で奥美濃の 今年は福井支部にも声をかけ、「銀杏峰」へ。新緑山でその他の活動としては、恒例になった関西支部との 強い宣言である。 きし興味深いお話を伺った。今年の国宝見学は、 探検隊の貴重なフィルムである。隊員であった藤田和夫さんをお招 支部との交流を深めている。その他岩登り、 「西の水」に、何れも四十名近い参加があり近 京都支部設立十 沢登り、 比叡山延暦寺の宝 周年を目前に スケッチ山 行は岐阜支部 スキー 登 Ш

富山支部

六月に四十五周年記念事業を終え、五十周年に向けてのステップ

を踏みだした。

は記念碑の完成を祝う披露の会を開催する予定である。

員のニュースが中心であり少しずつ内容を充実させたい。 通信も予定どおり四回を発行したが、内容は例会の報告、

告の協力をいただいて発行している。 支部の運営は本部よりの還元金のみで行い通信は会員の中より広

年間行事としては、 例会山行を四回、 室内例会を四回行い会員

山行報告と講話を聞き、会費は三千円で会員相互の親睦を深めてい

る。

山行では新しい山研へも行き楽しんで来た。

会議が開け、 だ)に山岳団体が使用するルームが出来あがった。三十人位までの 十月には木戸自動車工業(支部長経営)事務所二階(一〇〇平方 シュラフを持参すれば宿泊することができる。

をひびかせている」

工場北側には三・六は×七ばのクライミング・ボードを県の

前支部長の勲五等双光旭日章叙勲記念祝賀会と支部には嬉しいこと り大いに利用してほしいと思っている。 補助で競技選手強化の施設として完成、 昨年は、 藤平正夫会長の環境庁長官表彰記念祝賀会、若林啓之助 四〇〇平方にの駐車場もあ

会員個々では、 海外での活動もあり、サトパント、 シルクロ ード、

があった。

村記念碑を建てた。この記念碑には離村記の文(廣瀬誠会員記) 顕彰碑横に湧きでている榎清水の整備のための受皿として水鉢と離 キリマンジャロ、 創立四十五周年記念事業の一部であった旧河内村にある播隆上人 雪岳山などへ出かけている。

方々と会員とで行い山菜や心づくしの差し入れにより話に花をさか 月三日には、播隆祭とあわせて完成した碑の除幕式を旧河内の

に時間的な遠隔地にあっては、

視点は変わるが支部と本部の関係に就いて。

この地にゆかりのある方々の名がきざみこまれている。

せたあと高頭山へ登った。 この記念碑と水鉢を建てるに当り、

会員の浜田石苑建設株

長浜

会

田文二氏の多大なご協力があった。

離村記念碑文

0

たが、 静けさに帰った 村の飲み水であった榎清水だけ 内道場、 「ここ熊野川沿いの河内は中世以来の古村、 大正から昭和にかけて村びとは次々に離村し、 播隆上人もこの地に生まれた 村は近代大山町に編入され 鎮守は八幡社、 が今も清らかな音 河内は太古の 寺は Ш

らないと思っている。 の数が増えるよう考えながら、 支部にはまだ多くの課題もあり、 五十周年に向けて努力しなければな まず山行、 例会に参加する会員

木戸繁良

福 # 支 部

に重点をおく清掃登山 形を、整えつつあるところである。それは、支部規約の設定 蒙活動の実践があり、まだ年一回ではあるが、 または月毎の例会山行の実施、支部報一号の発行になるだろうか。 のひとつとなっている。 外に、自然環境をどう考えるか、の観点に立っての会員個人の啓 福井支部は設立以来二年半を経過して、ようやく山岳会としての (本年は平家岳・経ヶ岳の二山) 山のより一層の美化 8 支部活 阳月

当支部

会報に掲載されている魅力あふれる

それは、最近年毎に行なわれる募金への為力の変合いにも現れる本山岳会本部を、別世界と視る支部会員の多いことも事実である。催しに参加をすることが、いちじるしく困難となる。その結果、日

部会(第三水曜日)での話題のひとつは、本部に関する出来事の解て感じられるかどうか、という観点にかかってもいる。月ごとの支ようになっている。この点については、日本山岳会を自分の会としよれは、最近年毎に行なわれる募金への協力の度合いにも現れる

説となっている。会報編集により一層の工夫を望んでいる。

登り。

スキー山行の足が伸びてもいる。
には、福井の山は静寂な環境の中にある。そうした中で、ヤブ潜りのみを辛棒すれば、登山をよく味わうことのできるのも、当支部の山の特徴である。また近年は、そうした山岳に向けての支部会員の出の特徴である。また近年は、そうした山岳に向けての支部会員をいる。

地の刈り払いも実行できるようになっている。 (増永迪男)として機械を購入している者も多く、燃料タンクを持ちこんで、奥年毎に地域を変え登山道の刈り払いを行なっている。今では、個人に住む多くの人びとが離村したことから、地方自治体より我が会員に住む多くの人びとが離村したことから、地方自治体より我が会員には多くの人びとが離村したことから、地方自治体より我が会員には多くの人びとが離村したことから、地方自治体より表が、

関 西 支 部

及び、例会山行・集会などの行事への参加は、どうしても時間距離の新入会員二十二名)。地域が九州・山陰・京都を除く十二府県に関西支部の会員は、九四年三月末現在、四百二十二名です(昨年

次に九三年度に開催した十三行事の内訳は左記の通りです。時間位のところの会員になります。

四月二十一日 支部総会。参加者三十七名。

七月十~十一日 例会山行。雨天中止。予定は大峰上多古谷沢沢四月二十四日 例会山行。参加者七名。妙見山とブナ植樹。

九月二十六日 第五回藤木祭。参加者百二十名(一般を含む)。九月十九日 例会山行。参加者十六名。阿舎利山。九月四日 図書虫干し。参加者十六名。根来氏を囲んで語る会。

十一月十四日 例会山行。参加者十名。京都北山小野村割岳。十月二十日 集会。参加者三十名。シッキムの山と人。

十一月二十八日 自然保護例会。参加者十名。粟鹿山。

一月二十六日 新年会。『今西壽雄と語る』出版披露。参加者八十二月十二日 もちつき。参加者三十八名。大阪浜寺今西邸。

十九名。

三月十二~十三日 例会山行(京都支部合同)。一月三十日 例会山行。十二名。袴ヶ岳。

参加者十五名。

支部報発行 年四日

銀杏峰

今年度行事予定は十五回程度です。

当支部では、昨年度から支部会費三千円を納入していただくことを有馬不引う気に十五匹利馬です

になりましたが、納入率は八八%でした。

(三品武彦)

今年度は、

一山陰支部

活動が活発となってきております。 平成五年度に新しく若い男性三名の入会をみることが出来て一段と 支部活動の活性化を図るということで、取り組んできた新会員も

平成五年度の主な行事は、毎年恒例の友の会の山行を九月十七日平成五年度の主な行事は、毎年恒例の友の会の山行を九月十七日にかけて北アルプスの蝶ヶ岳、焼岳、徳本峠方面とし、となったが翌日は北アルプスの蝶ヶ岳、焼岳、徳本峠方面とし、となったが翌日は北アルプスには珍しい快晴に恵まれ楽しい山行と九月十七日平成五年度の主な行事は、毎年恒例の友の会の山行を九月十七日平成五年度の主な行事は、毎年恒例の友の会の山行を九月十七日

ントラストを楽しむことが出来ました。ことで、甲川源流を訪ね渓流に散る紅葉とダイナミックな滝とのコロじく十一月三日の紅葉狩り山行は、大山の未知の滝探訪という

近況報告など受けて盛会でした。 開催し、ゲストに日本山岳会常務理事の小倉茂暉氏を迎え山岳会の支部の年次晩餐会は、平成五年十一月十一日に米子国際ホテルで

を設置して、大山周辺の未知の滝を調査することにしました。ターとして活動する林原健蔵会員を中心に未知の滝調査研究委員会川暢一支部長以下留任した中で、新しく国土地理院のマップモニホテルで開催し、事業報告、事業計画等協議の後役員改選を行い吉平成六年度は、役員改選の年となっており、四月八日に米子国際平成六年度は、役員改選の年となっており、四月八日に米子国際

として七月八日から二十一日において友の会との合同ヨーロッパア

山陰支部創立四十五周年となり、

その記念事業の一つ

メンヒ、モンブラン等の登山を計画しています。ルプス登山とハイキングの旅は、参加者十八名で、ブライトホルン、

がぜひ完遂したいものと考えています。ぞれの仕事の都合等により遅々として進んでいない状況であります花を添えるべく会員一丸となって頑張っているところですが、それ花を添えるべく会員一丸となって頑張っているところですが、それ

かけて戸隠小屋を中心に登山することにしています。
ある戸隠、飯縄の山旅」のタイトルで九月三十日から十月三日に訪ねる戸隠、飯縄の山旅」のタイトルで九月三十日から十月三日に

年に向けて会の活性化を進めて行きたいと考えています。ことや、支部独自で海外の山への登山など、やがて来る創立五十周会員の高齢化防止を図るうえからも本部の活動に積極的に参加する会員の高齢化防止を図るうえからも本部の活動に積極的に参加する

中井俊一

福岡支部

国支部懇談会が山梨支部の担当で行われ三名が出席した。一月の新番で阿蘇高岳に登り盛会であった。十月二十三日~二十四日には全九月二十五日~二十六日には九州四支部親睦登山会を熊本支部の当九月二十五日~二十六日には九州四支部親睦登山会を熊本支部の当九月二十五日~二十六日には九州四支部親睦登山会を熊本支部の当たに福岡市の会場まで来て戴き、百名近い聴講者に喜びの報告をし氏に福岡市の会場まで来て戴き、百名近い聴講者に喜びの報告をし氏に福岡市の会場まで来て戴き、百名近い聴講者に喜びの報告をしてもいる。

は百四十名に達し、女性会員も八名に増えた。は百四十名に達し、女性会員も八名に増えた。四月末で支部の会員は事故があったので中止のやむなきに至った。四月末で支部の会員は野親を深めた。三月の伯耆大山での山陰支部との交流の雪山登山年の「岳人の集い」は北九州市の会場で行い三十名以上の参加があ

出」と題する文章は最古参の会員である月原俊二会員に御願いした 報は四月に第二号を、十月に第三号を発行し、年二回の支部報を支 ています。会報の会員消息欄に記載するためです。 復ハガキの返信用には必ず短文で近況を知らせてもらえるよう努め るだけ多くの会員の名前が出ることを目標にしておりますので、 野悦郎会員が今は死去していないのが残念です。会報の原稿は出来 るのが大変でした。又「マッキンレー登頂」の記事を寄稿した、日 のですが、手を負傷して字がうまく書けず、耳も悪いので活字にす 執筆を御願いしたが格調高い内容であった。第三号の「交々の思い 初期の日本山岳会」と云う題目の記事は副支部長の松本徰夫会員に てくれたのは御苦労様と云う外はない。第二号の「『山岳』 ました。原稿集めが大変で、事務局の蔵富氏が大部分の仕事をやっ 部会員の全員に届けることにより所期の目標を達成することが出来 会員の親睦、情報の伝達の方法として昨年第一号を創刊した支部 に見る 往

ん。又同月十二日に会員山下朋美氏が伯耆大山で雪崩による事故死々の二峰を完登した記録保持者でしたから大変惜しまれてなりませした事です。彼は支部では八千尉峰のチョー・オユー、シシャパンした事です。彼は支部では八千尉峰のチョー・オユー、シシャパンした事です。彼は支部では八千尉峰のチョー・オユー、シシャパンした事では、今回の記事には大変悲しい出来事ですが、会員離りにした。

念な出来事と云う外はありません。をされたことです。日頃から登山指導をされていた彼にとっては残

九州四支部による「屋久島自然観察登山」については当初平成六年十月に実施の予定でしたが、「世界の自然遺産」の指定を受けたため一般観光客が急増したため、期日を平成七年に繰り延べ、自然ため一般観光客が急増したため、期日を平成七年に繰り延べ、自然に渡る。 (屋久島自然観察登山」については当初平成六年十月に実施の予定でしたが、「世界の自然遺産」の指定を受けた

果九州支部

で山登りが仕事のような熱心さである。ている者もいるし、海外に出かけていく者もいる。いずれも、まるている者もいるし、海外に出かけていく者もいる。いずれも、まるを込めて、山々に登り回っている。をは冬、夏は夏、それぞれの思い

支部では今年もまた、県境の山々を中心に毎月の定例山行を繰り返してきた。先に当支部が選定した「大分一○○山」を登り尽くした会員もかなりいるが、狭い大分県内でも、いまだに人知れず眠っているような山もそれなりに多いものだ。標高はさほどでもなく、ヤブ山もたくさんだが、それとて、支部会員にとっては「ふるさとの山」であり、それを再確認することで、山への思い入れも一層深の山」であり、それを再確認することで、山への思い入れも一層深い山」であり、それを再確認することで、山への思い入れも一層深い山」であり、それを再確認することで、山への思い入れも一層深い山」であり、それを再確認することで、山への思い入れも一層深い山」であり、それを関しているようなが、

○○山といえば、当支部が先に刊行した「大分百山」も、

254

る

熊 本 支 部

ないか」との問い合わせがひっきりなしである。 部がまたたく間に売り切れてしまった。 森林を主体に九州の山はかなり荒廃したし、 登山ルートの変更を余儀なくされた山も目立つ。そうしたこ まずは再調査からのスタートだ。 改定版の作成に取り掛かった。 事務局には 先年の台風禍によ 大分県も例外では できればそれに応 「再刊の予定

ての来訪で、 隊を送り込む時期に来たようだ。 登山者は増えることだろう。 韓国への定期航空路が開設されたこともあるが、 訪れてくれた。 山に出かけているが、先方の希望もあり、 そうしたおり、 そして夜の交歓会とたいへんな盛り上がりを見せた。 仁川支部を中心にメンバーも三十余人と増え、 前回は仁川山岳会だったが、 韓国からの友好登山隊が再び 逆にこちらからも会員が個人的 今回は韓国山岳会とし そろそろ組織的な登山 「くじゅう山 今後も同国からの 大分から 合同登 に韓国 群」を

会員の意向も固まった。 ク集会はぜひとも東九州・ 一支部も三十五周年となる。そうしたこともあって、 日本山岳会は創立九十周年。 大分県で開催していただきたいと、 そして若輩ではあるが、 祝賀のブロッ 支部 東九

5 なっている。 さらに、 もトレ こらで自前の東九州支部隊を考える時ではないかと思ってい 連山 ヒマラヤなどへ記念の登山隊を送りたいとの意見も多く 九四年は支部会員の多くが所属する大分県山 脈に登山隊を派遣し、 キングを含めてヒマラヤ経験者が多数いることか メンバーに会員 なかかわ ったが、

> 部総会は、 五名及び会計幹事一名が夫々再選されました。 しました。役員改選では、改選期にあたる委員 (会員の宮崎豊喜氏経営のレストラン) 年間の支部の動きについて報告します。 四月二十五日十八時から、 例年通り熊本市のホルン山 で開催し二十一名が出席 (常務委員を含む 先ず平 成 Ŧī. 年度支

屋

幾分少な目の十八名が参集して開催。 市のホルン山小屋で、今シーズンの多雨・冷夏を反映して例年より の紹介や、 夏季例会(ビールパーティー)は、 久しぶりに出席した会員もいて盛会でした。 八月二十二日十八時 それでも新入会員 から

東九州、 モランマ/サガルマータ登山隊に北側隊員として参加した、 阿蘇高岳(一五九二号)に登頂しましたが、中・日・ネ三国 た九州四支部合同会議と併せて実施しました。九月二十五日十八時 行会員が山頂からパラグライダー て九州地区の連帯感と友好を深めました。翌日は全員で仙 会場の阿蘇郡一の宮町の民宿「阿蘇の四季」に九州四支部 秋期例会 宮崎、 楽しい山行になりました。 (阿蘇高岳) 熊本)の有志四十名が参集し、 は今年度、 の初フライトに成功するなどのこ 熊本支部が担当することになっ 会議と懇談会を通じ 友好チョ 峡 から

脇坂順 ルン山 スの最高峰モンブランに登り、 傘寿・脇坂順一先生を囲む会は十月十四日十八時 小屋に十八名が出席して、 先生の偉業を讃え、 併せて傘寿のお祝いをしました。 海外の山百五十峰登頂を達成さ この夏、 八十歳でスイス・アル から 熊 本市 0

懇親を深めて盛会でした。 屋に二十名が参集して開催され、 年晩餐会は平成六年一月八日十八時半から熊本市のホルン山 恒例の会員近況スピーチもあり、

n 地豆腐料理にアザミ飯という珍味佳肴に佐藤会員、 集しました。 宮崎県北部の大崩山群 「あけぼの荘」に、 の地酒を酌み交わして大いに盛り上がりました。 日に登りました。 春季例会 (大崩山群・五葉岳) その夜は名物の「しし鍋」、 はるばる熊本からマイカーを連ねて十五名が参 前日の夕刻 五葉岳 五七〇江) 日之影町見立の水無平にある民宿 は広吉会員のホームグラウンド、 シカ刺身、 春まだ浅い三月十 田上会員差し入 ヤマメ、 山菜、

囲気に一同大満足でした。 と大洞鉱山の伝説にある「御化粧山」を廻って下りましたが、 見渡す大崩の 巻いて登りつめると一五六九・七ばの三等三角点がある山頂です。 道では時 口に車を置いて、 朝は七時に出発、 間が早いので、 折り陽がさすと樹霜が花吹雪のように散り冬山のような雰 山波は 奥州屋谷吐合いから山道に入り、 その名にそぐわない険しい岩峰の 大吹谷沿いに日之影林道をのぼり化粧山登山 面に純白の霧氷に飾られて見事な景観でし 山頂岩盤を東へ 本田誠也 「お姫山 尾根

母

宮 支 部

までになりました。宮崎ウェストン祭も回を重ねるたびに盛大にな 宮崎支部では一番の行事として、 支部で顕彰することを決めてから、 宮崎県高千穂町のウェ 平成六年で第十回を迎える ストン碑

> n, 方々の出席を戴き感謝いたしております。 第二回より本部の会長、 副会長の出席、 九州の各支部長、

小

0)

最初から関係された、 開催することになりますが、ウェストン碑建設の経緯、 と一体となって、盛大に催されるまでになりました。今後も益々盛 十一月二日は前夜祭、 致しておりますが、高千穂町長をはじめ地区の方々の御好意により、 大になって行くものと思います。 五ヶ所小学校の方々が、 登山百年を迎えて、 現在では、 主催を高千穂町と、 十一月三日ウェストン祭と、 碑建設の経緯について、 前高千穂町長甲斐畩常氏がウェストン師の 村起こしの一環行事として力を入れ、 本年で第十回宮崎ウェストン祭を 日本山岳会宮崎支部 平成 町 一年十 0) 資料収集等 五ヶ所地区、 共 月 開 H 祖



宮崎ウェストン祭

会員

以上、

ウェストン碑建立の経緯ですが、

風光明媚な、

高千穂三秀

碑

の経緯を記する」

す。 ウェストン祭が催されるようになった経緯を紹介したいと思いま ウェストン祭が催されるようになった経緯を紹介したいと思いま は建立された碑文を紹介して、高千穂の地にウェストン碑が出来、

盛大に行なわれた。 H この三秀台に、英国 配した記念碑が、ウェストン氏が通ったであろう旧道の横にあたる、 たヨークシャー石、 財を戴き昭和四十一年十一月六日英国のウェストン生家より贈られ 会を設置し議長佐藤正松氏を委員長として、 に指定され、 和三十年冬に確記立証され 山に登山していることが五ヶ所の元庄屋矢津田鷹太郎の日記にて昭 本アルプスに初登山する前年の明治二十三年十一月六日秀峰 H 1本山 岳会育ての親 機を逸せず高千穂町議会にウェストン碑建設特別委員 矢津田日記の元文、ウェストン氏のレリーフを 一大使館より祝賀メッセージをいただき除幕式が 英人牧師ウォル た、 昭和四十年三月 ター 町内外多数の方々の浄 ・ウェ 祖 母、 ストン氏 傾国定公園 性祖母 が、

長今西壽雄氏、 年五月二日日本山 くも本年町制七十年と、 第一回宮崎ウェストン祭を共催、 昭 出 その後地元北稜山岳会が中心となり碑へ洋鐘をとの話が持ち上が 各地山岳会や町内の方々の御理解と御協力を戴き、 和六十年十一月三日高千穂町と日本山岳会宮崎支部におい 「席を仰ぎ懸鐘式を挙行。ここにウェストン碑の完成をみた。 元会長西堀栄三郎氏の出席を得、 岳会、 ウェストン師祖母登山百周年を迎えるに当 日本山 岳協会から、 昭和六十 一年には、 小島六郎氏、 以後回を重ね奇し 日本山 昭和四十七 尾関広氏 て、

して、先人の残された業績を継承して行きたいと思います。宮崎ウェストン祭を二十回、三十回と、日本山岳会の歴史の一頁と台に立つ、ウェストン碑を日本山岳会の皆さんにも知っていただき、

(魚本定良)

会 務 報 告

九九二 (平成五) 年六月~一九九四 (平成六) 年五月

九九三年度役員・評議員・支部長

会 長 藤平正夫

副 会 鴫原啓佑 ·中村純二

常務理 40 小倉茂暉·大倉昌身·大森弘一郎·村井龍

理

4 勉・南井英弘・堀井昌子・渡邊雄二・溝口洋三・中川 山口俊輔・片岡泰彦・南川金一・松浦祥次郎・伊藤 敵・水野 武·山

本宗彦・大谷 亮

事 中島伊平・川崎 辦

監:

常任評議員 斎藤惇生・湯浅道男・西村政晃・宮下秀樹・神崎忠男・重廣恒

議 H 西丸震哉・村木潤次郎・徳久球雄・鈴木郭之・國見利夫・田部 井淳子・廣江 研·山田 二郎・小須田喜夫・松田雄一・平林克

敏·田中弘美·梅木秀徳·宮本数男

評

長 島) · 佐藤一栄 光行(秋田)·大橋克也(山形)·西郡光昭(宮城)·中嶋正夫(福 野田四郎 (北海道)・松島静吾 (青森)・中谷充 (越後)・田中弘美 (信濃)・古屋学而 (岩手)・岡田 (山梨)・

支

部

井) · 阿部和行 安間荘 (京都)・木戸繁良(富山)・増江俊三(石川)・中村 (静岡)・尾上 (関西)・吉川暢 昇 (東海)・高木碕男 (岐阜)・斎藤惇 (山陰)・吉村健児 (福岡)・ 義 (福

理事会は会長、理事、

監事、常任評議員によって構成される。

梅木秀德

(東九州) · 本田誠也

(熊本)・魚本定良(宮崎

◇六月理事会 一九九三年六月十七日 本会会議室

出席者二十一名

▽審議事項

然保護活動の事業継続・活動資金として 一、活動資金のための写真販売について(マッキンリー気象観測および自

岐阜新支部長就任について

▽報告事項

一、責任者賠償保険について

山研について①四月二十八日山研竣工式、②今後の工事計画について、 図書管理用パソコン購入について

③自転車振興会に寄付金の申請

Ŧ, [74] 名誉会員の訃報について 藤平会長の他団体、委員就任について

国際交流青少年環境体験登山 (HAT-J) について

一討議事項

一、藤平会長より「当面の問題点」が提案された。

環境問題、 問題について、 制の整備、③同好会グルーブについて、④支部の問題点について、⑤環境 ①一九九五年の九十周年記念行事の取組みについて、②組織改正と内部体 経済援助など、発展途上国への援助 ⑥国際化対応について (外国人登山家の増加対応他)、② (8)山岳会の若年層会員の

◇七月理事会 七月八日 会報「山」五七九号参昭

本会会議室

確保、⑨会のスペース確保

出席者二十名

▽審議事項

ナムチャバルワ写真展の写真パネルについて

雪岳山 東宝東和映画「クリフハンガー」チャリティー試写会について (韓国) 国際交流環境体験登山後援について

キルギスタン偵察隊派遣について

海外登山基金委員会について

マカルーのチベット側登山許可申請について

報告事項

ヤルツァンボー河探検隊の隊長変更 会員募金について

三、「山岳」編集内容について

◇九月理事会 本会会議室 会報 「山」五八〇号参照

出席者二十五名

▽審議事項 、第一回日本山岳耐久レース大会後援について

「山岳総合索引」追加支出について

海外登山基金委員会について

一九九五年マカルー登山申請について

九十周年企画 海外出張の取り扱い

[報告事項]

一、タンボチェ僧院落慶法要

図書管理

年次晩餐会について

山研関係

藤平会長から次の六点が提案され、討議された。①先年のアンケートをど [討議事項]

> 握とサービス、④支部について、⑤青年層発掘について、⑥環境問題、 うみるか (二十一世紀の展望として)、②組織改正、 ③同好会クラブの把

会報「山」五八二号参昭

◇十月理事会 十月十三日 本会会議室

出席者二十五名

▽審議事項

、日本三○○名山の新ハイキング社より出版通知について

一、ヤルツァンポー河探検隊名義後援について 九月十日武井隊員行方不 明により捜索支援協力隊の名義

三、年次晩餐会における会長特別表彰について

脇坂順一氏(八十歳で海

外登山一五〇峰達成

中間監査について 十月十二日実施

九十周年事業について ①ルーム拡張 現在の財務について 会費納入は順調、財務はおおむね良好 (長期的準備委員会で検討)、

②データバンク (研究調査の小委員会設置)、③九十年史 (百年史・記念 益者負担方式で)、⑥記念フォーラムの開催、準備委員の選任を次回十一 誌準備)、④海外遠征(マカルー北面)、⑤ブロック別記念式典(総務、受

報告事項

月十一日の理事会で決める

、海外登山基金 来年度分は十一月三十日締切り

二、年次晩餐会 十二月四日 (土) 新高輪プリンスホテルで。会員による

絵画展を開催

会報「山」五八三号参昭

◇評議員会 十月十三日 本会会議室

出席者、藤平会長、鴫原・中村副会長、 斎藤・宮下・神崎・重廣各常任評

議員、西丸・村木・鈴木・国見・山田・平林・梅木・宮本・田中各評議員

一、ルームの拡大

二、九十周年のブロック別の式典

三、文章と映像の九十年史作成

百周年に向けてデータバンクの設置 マカルー北面の登山

◇十一月理事会 十一月十一日 本会会議室 六、平成五年度名誉会員推薦の件

出席者二十二名

▽審議事項

一、青森支部設立について

二、慶大「トランゴ・タワー」都岳連への推薦状について

三、委員の追加増員について

山研に関する取材について

報告事項

一、小島鳥水レリーフについて

一、評議委員会報告 本年度の名誉会員は前会長山田二郎氏に決定。年次

晩餐会で発表

三、UIAAアジア会議

月三十一日、広中環境庁長官来訪、 山研報告 ①平成五年度(四~十月)山研利用者合計七九五人、②十 ③自転車振興会による実地検査④山研

特別委員会の解散

七、チベット登山協会からの募金申し入れについて プラスチック・ブーツについて

年次晩餐会について

会報「山」五八四号参昭 八、雪氷学会の社団法人登録について

◇支部長会議 十二月四日 新高輪プリンスホテル・紅玉の間

一、創立九十周年記念事業の件

二、上高地山岳研究所の件 日本山岳会青年登山懇談会の件

全国支部懇談会の件

五、各支部報告

六、その他

◇十二月理事会 十二月十六日 本会会議室

出席者二十四名

▽審議事項

一、日本大学チョモランマ登山隊一九九五の後援要請について

二、シルバータートル・ダウラギリ一九九四隊の後援要請について 山研改築特別委員会の会計報告と解散について

Ŧį, 六年度予算の要求について 海外登山基金について

六、寄付金について 中川喜久雄会員から百万円の寄付があり、長期計画

準備金に入れる

究会を開き、東稜ルートを研究、②文部省スポーツ振興基金申請について、 七、JACマカルー登山隊・一九九五について ①十二月三日高所登山研

③事務所、基金、企業協賛、後援会等について

一、青森支部設立総会について

[報告事項

青年登山懇談会について 年次晩餐会、懇親山行について

会報「山」五八五号参照 四、チベット登山協会から四団体へ募金要請について

◇一月理事会 一月二十日 本会会議室

出席者二十五名

▽審議事項

基金の助成は四隊に決定した 一、海外登山基金委員会審議について 一月十二日、委員会で審議の結果、

東海支部寄託図書について

ウェストンの写真等の貸し出しについて

四、JACマカルー登山隊一九九五・小委員会報告について

[報告事項

一、定款変更(副会長一名増)の認可について

会報「山」五八六号参昭 青年登山懇談会について

◇二月理事会 二月十日 本会会議室

出席者二十一名 ▽審議事項

会を設け、九十周年事業として本年五月の総会に提案する 長を委員長に実行委員会を設け、小委員会を解散。募金委員会、登山委員 一、JACマカルー登山隊一九九五年実行委員会の組織について 藤平会

組織の見直しについて

故武田久吉元会長の写真掲載について

北海道トムラウシ登山の名義後援要請について (HAT―J)

平成六年度事業計画案について 飯田市時又・ウェストン祭について

平成六年度予算案について

青年部新委員の選任 廃棄図書について

報告事項

会報「山」五八七号参照 一、「秩父宮記念学術賞」について

◇三月理事会 三月十日 本会会議室

出席者二十四名

▽審議事項

一、GACネパール登山隊一九九四の都岳連への推薦について

二、重複本の会員頒布について

三、「山岳」掲載文の転載依頼について

平成五年度事業報告および平成六年度事業計画 (案) を原案どおり承

平成六年度予算案を各委員会担当理事と折衝終了、一部補正し承認 現ルームのリフォームおよび一○四号室賃借について

七、三月議事録署名人の委嘱について

組織の見直し・担当委員について

二、「青年登山懇談会」「支部事務局担当者会議」について

三、山岳研究所開所について

会報 「山」五八八号参照

◇四月理事・評議員会議 四月十五日 本会会議室

出席者二十六名

常任評議員の互選により、 宮下常任評議員が議長に選任された。

◆議事

平成六年度通常総会提出議案

「第二号議案」平成六年度事業計画(案)および収支予算(案)について 「第一号議案」平成五年度事業報告および収支決算・財産目録について

認された。 事業計画(案)は小倉理事、収支予算(案)は大倉理事から説明され承

「第三号議案」平成六年度除籍予定者について

宗彦、期間・平成七年二月~五月下旬、②九十周年記念式典について 山隊一九九五」総隊長・藤平正夫、登山隊長・重廣恒夫、登攀隊長・山本 「第四号議案」九十周年記念事業の取り組みについて ①「マカルー峰登 全

念事業募金」について②ルーム拡張について ④データ・バンクについて調査研究 また次の二点についてもそれぞれ承認された 1 「マカルー九十周年記

国支部をハー十ブロックに分けて行う、③百年史への取り組みについて、

会報「山」五八九参照

◇五月理事会 五月二十日 本会会議室

出席者二十二名

▽審議事項

一、マカルー峰九十周年合同募金委員会(案)について 支部長交替について信濃支部、山梨支部

東海支部寄託図書目録について 通巻一四六部を寄託 農大ツインズ峰登山隊より都岳連への推薦状について

会報「山」の印刷所の変更について 財日本レジャースポーツ振興協会より後援依頼について

報告事項

一、マカルー一九九五登山隊について

ルームのリフォーム

マッキンリー気象観測機器設置登山隊

四 外国人登山者の増加と遭難について

Ŧį, 山研について

t ヤルツァンポー科学探検隊のカヌー遭難事故について

総会の議事録署名人について

滋賀県湖東町の西堀記念館の建設について

会報「山」五九〇号参照

◇支部長会議 五月二十一日 千代田区大手町、 JAビル

一、日本山岳会マカルー登山隊一九九五遠征について

一、日本山岳会創立九十周年記念式典開催と地方支部ブロック別集会の件

三、全国支部懇談会 関西支部担当

(合同募金)

四、事務局担当者会議について

五、平成七年度各支部報告

◇平成六年度通常総会 五月二十一日 千代田区大手町、JAビル

六、その他

出席者一八八名

一、平成五年四月一日~平成六年三月三十一日事業報告および収支決算、

財産目録承認の件 平成六年度事業計画 (案) および収支予算 (案) 決定の件

平成六年度除籍予定者の件

記念式典開催と地方支部ブロック別の件、 その他 ①日本山岳会マカルー登山隊一九九五遠征の件、 ③合同募金の件 ②九十周年

◇主な行事と集会

▽六月六日 上高地

▽六月五~六日 谷川岳 青年部・学生部合宿 第四十七回ウェストン祭

▽六月十二~十三日 霧降高原 フォトビデオ撮影会 中央アルプス

▽七月六日 ルーム ▽六月十七日 小川山 青年部・岩登り講習会

▽七月十四~十五日 新潟 第一回高所登山研究委員会

▽七月二十三日 ルーム 青年部·学生部OB懇談会 全国山岳遭難対策協議会に参加

▽八月八日 海外・青年部、キルギスタン共和国アカーエフ大統領と会見

▽八月二十九日 北アルプス上空 自然保護専門委員会空撮による登山道周辺の破壊調査

▽九月一日 ルーム

青年部・カッシャブルムⅡ峰報告会

▽九月十一~十二日 戸倉

自然保護委員会全国集会

▽十月二~三日 木曽駒 自然保護専門委員会山の自然学第一回講座

▽九月十一日

遭難対策委員会・プラブーツ突然破壊四団体協議会(日山協、

H A T

▽十一月十四日

ルーム

観察山行

勞山、日本山岳会)

▽十一月十六日

医療委員会 国際観光 ▽十月五日

▽十月六日 ルーム 遭難対策委員会プラブーツ突然破壊四団体協議会

青年部キルギスタン天山山脈踏査隊報告

▽十月十六日 都市センターホール

新入会員懇談会

>十月二十三~二十四日 山梨

全国支部懇談会

▽十月二十八日 ルーム

図書委員会第一回山の本シリーズ「山岳図書 古本屋の舞台裏

▽十一月一日

遭難対策委員会プラブーツ突然破壊四団体協議会

▽十一月八日 ルーム

青年部·学生部·学生部加盟校監督会議

▽十一月十一日 アルカディア 講演会「火山を読む」

▽十一月十四日 武甲山

資料講演会

▽十一月十六~二十九日 三省堂ギャラリー フォト・ビデオクラブ写真展

▽十月三日

高尾山

▽一月十二日 ルーム ▽一月十五~十七日 八方尾根 ▽一月十二日 ルーム ▽一月八日 国民生活センター ▽十二月十七日 ▽十二月四日 新高輪プリンスホテル ▽十二月十二日 三頭山 ▽十二月五日 ▽十二月四日 ▽十二月三日 ルーム ▽十一月二十八日 国民生活センター ▽十一月二十六日 >十一月二十四日 一番町出張所 立教大学チョモロンゾ報告会 山の自然学第四回講座 懇親スキー山行 年次晚餐会懇親山行 年次晚餐会 山の自然学第三回講座 支部長会議 第二回高所登山委員会(立教大学チョモロンゾ登山隊 山の自然学第二回講座 プラブーツ突然破壊四団体協議会 フリークライミング講習会 テーピング講習会 弘法山 新高輪プリンスホテル ▽二月二十五日 ▽二月二十五日 ▽二月二十一日 原宿 ▽二月十七~二十日 屋久島 ▽二月十六日 ▽二月十五日 ルーム ▽二月五~六日 八ヶ岳 ▽二月五日 ルーム ▽一月三十日 秋川丘陵 ▽一月二十六日 麴町集会室 ▽一月二十一日 ルーム ▽一月十七日 ▽一月十五日 木曽駒 チベット登山協会代表来日歓迎レセプション ヒマラヤンジャーナル編集長来日歓迎レセプション ブラブーツ突然破壊四団体協議会 アイスクライミング講習会 第二回マカルー峰小委員会 山の自然学第五回講習 テーピング講習会 16プフィルム映画会 第二十二回山岳史懇談会「もう一つの登山史―陸地測量部の登山 山の自然学第六回講座 プラブーツ突然破壊四団体協議会 山の自然学実習 国民生活センター ルーム

第一回マカルー峰登山小委員会

山の自然学第七回講座

▽二月二十六~二十七日 八王子 日本山岳会青年登山懇談会

▽三月二日 ルーム

第三回マカルー峰小委員会

▽三月七日 ルーム

▽三月十二日 食糧会館 第四回マカルー峰小委員会

新入会員オリエンテーション

▽三月十四日 ルーム 第五回マカルー峰小委員会

▽三月二十六~二十八日 妙高・火打山 第二十五回山岳図書を語る夕べ『地図を使った風景スケッチ入門』

▽三月二十五日 ルーム

山スキー講習会

◇研究・シンポジウム ▽七月七日

マカルー山群のチベット側研究会

▽八月四日

キルギスタン天山山脈研究会

▽二月二日 マカルー峰東稜研究会

▽四月~三月

隔月 レスキュー研究会

▽四月十日 青山学院大学

丹沢シンポジウム

▽五月二十一~二十二日

宮城勤労総合福祉センター

第十三回日本登山医学シンポジウム

◇登山施設の改善、その他登山のための適切な事業

▽上高地山岳研究所の改築

▽山に関する貴重なフィルム、スライド、テープ、アルバム等の複製、絵

画の補修および資料の収集、整理、管理

◇山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

▽二月二十六~二十七日 大学セミナーハウス (八王子) 若者に魅力ある日本山岳会にするために 青年登山懇談会・バネルディ

スカッション

◇自然保護活動の推進

▽八月一日~三十日

自然保護活動の実践

▽十月~三月

鳥海山保護対策

◇機関紙などの発行

▽『山岳』第八十八年 (一九九三年) の発行

▽会報「山」第五七五~五八六号の発行

◇国内および外国山岳団体との連絡、情報交換

▽海外登山団体との機関誌および情報の交換 ▽国内関係団体(日山協、都岳連、HAT─Jその他)との密接な連絡

▽第四次マッキンリー気象観測機器設置登山の実施

◇海外登山

▽その他目的を達成するために必要な事業を行う ▽山岳図書の拡充

265

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. 89

Issued December 1994

CONTENTS

In those days, when the pasture existed at Kamikochi \cdots ORIUCHI, Nobuhiko \cdots (7)	
Mt. Yahiko; in deep relation to the Japanese Alpine Club	
······ CHIKUGI, Tsuyoshi··· (23)	
Will mountain village arounded by Raligrass (Rhododendron) be created?	
OHMORI, Kohichiro (32)	
Beauty of mountains based on modern ages alpinism view TANAKA, Sumio (41)	
Report on meteorological observation on Mt. McKinley ··· OHKURA, Yoshitomi··· (56)	
First ascent of Mt. Sagarmatha south-west face in winter	
······YAGIHARA, Kuniaki··· (68)	*
Record of first ascent of Mt. Crown······TOKUSHIMA, Kazuo··· (77)	*
First ascent of Mt. Chomo Lonzo through the route of China side	
Indo (ITBP)-Japan (HAC) Aq·Tash expedition 1993 ······· TAUCHI, Minoru··· (100)	*
A promotion method to attract JAC for younger potential members	
—Record of the panel discussion—·····JAC Young Member's Committee··· (109)	
"Un coin du Japan. La province de Hida" : Georges APPERT	
······Translated by MIZUNO, Tsutomu··· (124)	
The life of Munetaka TAKAHATA ······· ASANO, Kohichi··· (143)	
A history of geographical survey mountaineering ········SATOH, Sakae··· (167)	
Book Review	
Obituary	
Reports from branches · · · · · (244)	
JAC's notes	
The Japanese Alpine Club's environmental conservation history (3) $\cdots\cdots\cdots$ (A77)	
Catalogues of mountain books ····· (A35)	
Results of qustionnaire on University Alpine Clubs	
·····JAC Young Member's Committee··· (A32)	
*English abstract attached	

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: Tokyo, Chiyoda-ku, Yonban-cho, 5-4

Office Bearers and Committee 1994 (May1994-April1995)

President: FUIIHIRA Masao

Vice Presidents: SHIGIHARA Keisuke, NAKAMURA Jyunji

Honorary Secretary: OGURA Shigeki Honorary Editor: MINAMIKAWA Kin-ichi Honorary Librarian: MIZUNO Tsutomu Honorary Treasurer: OHKURA Masami

Auditor: NAKAJIMA Ihei, KAWASAKI Iwao

Committee

ITO Takashi KATAOKA Yasuhiko MATSUURA Shohjiroh MINAMII Hidehiro

HORII Masako

MINAMIKAWA Kin-ichi MIZOGUCHI Yohzoh MIZUNO Tsutomu MURAI Ryuuichi NAKAGAWA Takeshi OGURA Shigeki

OHKURA Masami OHMORI Kohichiro OHTANI Ryoh WATANABE Yuhji YAMAMOTO Mune-

hiko

YAMAGUCHI Shun-

suke

Council

HIRABAYASHI Katsutoshi

HIROE Ken KANZAKI Tadao KOSUDA Yoshio KUNIMI Toshio MATSUDA Yu-ichi MIYAMOTO Kazuo MIYASHITA Hideki MURAKI Junjiroh NISHIMURA Masaaki NISHIMARU Shinya SAITO Atsuo SHIGEHIRO Tsungo

SAITO Atsuo SHIGEHIRO Tsuneo SUZUKI Hiroyuki TABEI Junko TANAKA Hiromi TOKUHISA Tamao UMEKI Hidenori YAMADA Jiroh YUASA Michio

Chairmen of Branches

Hokkaido: NODA Shiroh Aomori: MATSUSHIMA Seigo Iwate: NAKAYA Mitsuru Akita: OKADA Mitsuyuki

Yamagata: OHHASHI Katsuya Miyagi: NISHIGORI Mitsuaki Fukushima: NAKAJIMA Masao

Echigo: SATO Ichiei Shinano: TANAKA Hiromi Yamanashi: FURUYA Gakuji

Shizuoka: ANMA Soh Tokai: ONOE Noboru Gifu: TAKAGI Sakio
Kyoto: SAITO Atsuo
Tovama: KIDO Shigeyoshi

Ishikawa: MASUE Shunzoh
Fukui: NAKAMURA Tadashi
Kansai: ABE Kazuvuki

San-in : KIKKAWA Yohichi Fukuoka : YOSHIMURA Kenji Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori

Kumamoto: HONDA Seiya Miyazaki: UOMOTO Sadayoshi

Challenged to Mt. Sagarmatha South-West Face in Winter Kuniaki YAGIHARA

Preface

At 3:20 p.m. to on 18th December 1993, we succeeded for the first ascent of Mt. Sagarmatha by South-West Face in winter. Moreover, both of the second and the third team also succeeded. So, six members in seven stood on the summit.

It was the grand project that was made by Gunma Mountaineering Association (G.M.A.) after the second attempt to scale Mt. Everest called The Third Pole, called Sagarmatha in Nepal and Qomolangma in China, by South-West Face in winter.

It was the third record of "the first ascent" comming after Dhaulagiril (8,167 m) by South East Ridge in autumn 1978 and Annapurna I (8,091 m) by South Face in winter 1987 \sim 88 made by G.M.A.

G.M.A. had sent three reconnaissance teams and seven expedition teams to Himalaya. Various difficult subjects in Himalaya are worked up one by one by the superior climbers. Now, 7,000 m class virgin peaks are in only those areas where nobody are allowed to enter due to political reason, and no 8,000 m class virgin peaks after the first ascent of Mt. Shisha Pangma (8,012 m) in 1964. So, the superior climbers are paying attention to only the climbing by difficult route.

Even climbing from variational route in that period called "The Iron Age" became common sense, by traverse, by without artificial oxygen, by small number of climbers, by solo, by speedy movement, and by alpine style including all of the preceding conditions also had been made, we meet the demands of the times that developes for "climbing in winter season as the following theme".

Climbing in Himalaya by Gunma Mountaineering Association

In this sense, the first action by G.M.A. in Himalaya was the reconnaissance for Mt. Dhaulagiri IV (7,661 m) in spring 1971.

In spring 1970, some 8,000 m class peaks were climed by variational route like Mt. Makalu (8,463 m) by South East Ridge, Mt. Annapurna I by South Face and Mt. Nanga Parbat by Rupar Face. Of course we had no relation with such superior climbing in the world, Gunma Prefecture was newly developing in mountaineering world in Japan who aimed to Himalaya.

In spite of first visiting in Nepal and being perplexed, three members went up Konabon Khola, Branch of Myadge Khola, and stayed at one Japanese team's camp named $G \cdot H \cdot M \cdot J$ who was climbing Mt. Dhaulagiri IV on that time, and climbed up to Camp 2, 5,100 m high. From Camp 2, rocky ridge, one of the most difficult section, was seen close by hand and on that time they felt confident that they would "climb sure" though it seemed difficult

and returned to Japan.

In spring next year, 1972, Nepal Government did not issue the formal climbing permission due to Indo-Pakistani Strife, so we examined postponement of climbing and changing peak out of Nepal at one time. We received the news that climbing permission was unofficially arranged the end of January because Indo-Pakistani Strife condition took a turn for the better, so we could start the end of February.

Climbed up South East Ridge of Mt. Gurja Himal, already reconnoitered south side, and Mr. Myagde Matha (6,273 m), and from there we were descending in order to make the route to scheduled place as Camp 5 situated at great snow plateu on Konabon Glacier. But we gave up our climbing because one member died at Camp 4 due to high altitude sickness.

In autumn 1975, Mrt. Dhaulagiril was scaled by eleven members of Japanese Kamoshika Dojin Team. One of eleven was I, Yagihara, who was the member of G.M.A team in 1971 and 1972. Also South-West Face on Mt. Everest was scaled by British team in the same autumn for the first time.

In autumn 1978, we aimed at South East Ridge on Mt. Dhaulagiri I. We climbed up to South East Ridge from East Dhaulagiri Glacier and struggled on the huge and difficult ridge.

On 23 rd September, one month passed since climbing started, three members fell down to South Face side and were missing. All our searching in some days were in vain, we could not only remove their bodies but also find them. We concluded that it was impossible to search any more and started to climb.

Three members scaled on 18 th October and three more scaled on 21 st. But on 20 th, the deputy leader fell down and died on his carrying way to Camp 5 $(6.950 \, \text{m})$. Though we succeeded the first ascent of Mt. Dhaulagiri I by South East Ridge, four members were sacrificed as costs.

We lost members in both of twice expedition in Himalaya. We thought that needed in a little time to come back again next. But we joined to large expedition teams which were not sponsored by G.M.A and tried to climb continue in order to keep the ray of hope for Himalaya.

On that time, we were shown off the first ascent of Mt. Sagarmatha in winter made by Polish team.

Kamoshika Dojin team planed to scale Mt. Dhaulagiril (8,167 m) by Pear Route on North Face and 10 members in 18 joined from G.M.A. Three members succeeded the first ascent by Pear Route in 26 days and made the step future.

On the first day of our return way, we tried to select our next peak and the route while we climbed down on Myadge Khola Glacier. All of our objects were huge games like Mt. Sagarmatha by South-West Face, Mt. Lhotse by South Face, Mt. Makalu by North West Face and Mt. Dhaulagiri I by South Face.

Mt. Annapurna I South Face in winter

In winter $1984 \sim 85$, we tried to climb British route on South Face, but Mt. Annapurna I did not allow for us to stand the top.

Some of members had experience climbing Mt. Everest and Mt. Manaslu in winter season, still more, summitter of Mt. Everest in winter also. But it was quite different "winter on Mt. Annapurna I" from "winter in Himalaya" experienced by them.

Against our forecast, heavy snowfall attacked us many times. We had too less experience to forcast and judge about "winter in Himalaya".

It may be the discrepancy between Mt. Himalaya, border China and Nepal, and Mt. Annapurna I situated on south side distant from main mountain range.

In autumn 1985, after returned to Japan, I took the arrangement of filming "Story of Naomi Uemura" in my hands and organized the team taking film on the top of Mt. Everest. 11 members include 8 from G.M.A were gathered. It was the first operation on restoration to climb Mt. Annapurna I by South Face.

Indian Army team was climbing before us. Unfortunate Indian team gave up by South-West Face and changed to stake by South East Ridge. In spite of some attachings, they gave up to scale. Their climbing ended tragically; one member died due to falling and four were frozen to death at South Col (about 8,000 m high). I and one more member threw down their bodies at South Col to Western Cwm due to request by Indian team.

On 30 th October, seven members of our team scaled the summit under the calm and clear, and our schedule was done. Probably, it came up to my view and my wants. Now, we got the chance to rechallenge for Mt. Annapurna I by South Face.

On December 1987, We G.M.A started to make the first ascent for South Face on Mt. Annapurna I.

Our object was by British route and scaling in 15 days. There were no sufferers in members and sherpas though six tents were damaged and almost foods, equipments and gears just carried up for upper camps were lost at Camp 1 due to avalanche. We prepared equipments, gears and foods about double of necessity at our Base Camp by way of prefection.

On 20 th December, four members started from Camp 4, 7,400 m high, and scaled the summit after hard struggle in 12 hours, though our schedule was delayed because of hurts of members due to falling stones and snowfall after that. They did not use artificial oxygen.

However, after descended the rock face near the summit, one member fell down when they were descending on snow field where inclination became gentle slightly.

Moreover, one more step on traversing to Camp 4 along the fixed rope, one member fell down. Only his voice "oh!" and "flashing spark in the dark" due to striking crampon on rock remained. He was gone and no returned.

Got over the Tragedy

Theur of "the first ascent" for "8 000 m class peak" "in winter" "by rock face route" changed in dark in a moment.

It was the origin that the plan for Mt. Sagarmatha, Mt. Everest, by South-West Face was recognized by the board of directors of G.M.A in March 1984, when the plan for Mt. Annapurna I by South Face was driving, as "possibility to climb ten years after from now by junior and senior high school students in the present".

The period was changed due to concern with the plan for Mt. Annapurna I. In addition to, the period had to be delayed one more year and postponed in 1991—92 because of the tragedy on Mt. McKinley in February 1989, severe winter; the late Yamada and his two members had gone. Expedition for Mt. Sagarmatha in winter was the 50 th anniversary of foundation of G.M.A.

The late Yamada was one of the world figure climbers and scaled nine peaks and twelfth of 8,000 m class including three times (in winter, in autumn and traverse from north side to south in spring) on Mt. Everest. There were no members who made the first ascent of Mt. Annapurna I by South Face in winter due to their tragedy.

It is not too much to say that to scale Mt. Sagarmatha, the highest peak in the world and situated in exceeding altitude, by South-West Face in winter when natural condition is the most severe means to get all kinds of difficulties in climbing in Himalaya.

We would try to do such a big climbing as one local organization in Japan named G.M.A. Moreover, we decided try to climb only by South-West Face for our target with no idea about escape route like South East Ridge, normal route, in the least. We started to arrange after concentrated all members' mind thoroughly. We resolved that even though we would fail through the misdirection of our power, we do not hesitate even to die in honour.

How should we climb Mt. Sagarmatha by South-West Face in winter? Though we also have experience of climbing in Himalaya suitably, we would check up on the result, success and failure, of former climbing to Mt. Sagarmatha by South-West Face and winter-climbing again. I thought that we would be able to draw the answer "possibility to climb" when we made the best use of our experience in the climb to Mt. Annapurna I by South Face.

The most requisite one for "success" is speedy movement. I was no anxious about their technique. We scaled Mt. Annapurna I in 20 days. Considering wind in winter and the cases of former expeditions, I would like to finishi our climbing in 20 days or before Christmas Day.

However, we were caught by viorent Jet Stream in winter, in spite of reaching Final Camp height of 8,350 m twice or three times, and attacked raging gale whenever reached at Final Camp, and obstructed by cold wind blowing up and down along South-West Face.

On 9 th February 1992, we could not help giving up our climbing after tried in 71 days.

Though we could give experience of climbing in Himalaya for young members, we could not only holding the acclimatization till main climbing in winter but also making the most use of it because climbing Mt. Kangchenjunga as Pre-Mt. Sagarmatha expedition was in spring season. I knew that climbing in autumn season was more advantageous than in spring for climbing in winter. I determined when we would rechallenge to Mt. Sagarmatha by South-West Face, we should improve equipments and gears in light weight, try to climb 8,000 m class peak just before main climbing in order to get acclimatization and take complete rest after the climbing.

The First Ascent in winter

I thought that we would use artificial oxygen for climbing Mt. Cho Oyu in autumn 1993 in order to get only advantage point like acclimatization without leaving our fatigue. All of 12 members include only for climb Mt. Cho Oyu and 6 sherpas scaled the summit as the result. We could achieve the desired end purpose.

We dared to climb with artificial oxygen and by West-North-West Ridge, normal route. Moreover, we scaled on 8 th October, 11 th and 12 th when monsoon was over. It was all of our impression that we had never experienced such a strainless climbing in our much experience of climbing in Himalaya. Our tactics to scale without leaving our fatigue and hurtless was complete success. And it was certainly great effect for young members who got self-assurance because of being on the summit by themselves.

His Majesty's Government of Nepal provided new Mountaineering Regulation in autumn 1992, and announced that "Expedition team for Mt. Sagarmatha will be permitted five members for each team from autumn season in 1993. In case of increase, maximum two members will be permitted. Royalty for Mt. Sagarmatha costs US \$50,000 per each team even if only one member, and increase of member's fee costs US \$10,000 per each person". We could not help climbing only seven members because 10 members were not permitted in spite of negotiation.

Actual climbing members were seven. I as the leader and our doctor Senya Sumiyoshi joined and stayed at Base Camp by Trekking Permission. All of seven members were the members of the last winter Mt. Sagarmatha South-West Face Expedition.

Start to climb on South-West Face in Winter

1 st December, at last it broke long-waited turn of winter season. But we were anxious about the weather because the sky above Base Camp were covered with alto-stratus from the early morning.

Ice Fall, gateway to Mt. Sagarmatha, is one of the most dangerous sections of this route. There are no safe ways in the huge ice fall, 700 m distance of height by 1 km in width and blocking in our way. Devil is waiting for us everywhere with keep his mouth opening. So,

not only sherpas but also we feel like to chant "ONMANI PEMFUM".

Our Camp 1 placed 6,020 m high was getting on the ice precipipe.

When we turned to Mt. Nuptse side after traversing sometimes, we could see whole South-West Face on large scale.

Camp 2, 6,500 m high, was pitched on glacier covered with moraine and flanks of West Ridge, higher than Western Cwm a little bit, where was very comfortable as a camp site. We established it a little nearer to West Ridge side than last time.

At 6:00 a.m. on 2 nd, temperature at Camp 2 was -19°C and not so cold as we thought. On the same day, Ogata, Hoshino and Dawa Tashi went up for making route to Temporary Camp on their schedule.

In this time we pitched only one tent as Temporary Camp at the last Camp 3, and would with drew after making the route to Camp 3 (the last Camp 4). We would shift from Camp 2 to Camp 3 directly.

At 5:30 a.m. on 7 th, I got up and looked outside. What It was snowing and the range of vision became narrow about 100 m far only. Sometimes our tent was attacked by blizzard.

We had no work in Temporary Camp due to the stormy weather, so we decided to go down to Camp 2 immediately.

On 8 th, the strong wind began to rage from midnight. It raged whole day, though snow coulds were swept away.

Camp 3 would be established at the same place of the last Camp 4, 7, 600 m high, in that time. That place was safe from falling stones comming from Rock Band because of distance from Large Central Gully and protected by the grey, remarkable rock wall in the back ground.

The vertical wall about 300 m distance of height soares in black at the height of 8 000 m on South-West Face. The British called that place "Rock Band". To pass that overshelming Rock Band is the key point to attack for South-West Face. We can see couloir extending both sides under that Rock Band. Right side couloir extends for South Ridge and left side for West Ridge severally. Both of them were taken as the route by each past teams and the hopeless confronting vertical wall has never been tried.

We alternatived the same route as the last time, first scaled by British team in 1975. That is to say we would try to climb up along the left side couloir cutting into the left edge of Rock Band.

Nazuka's team reached the foot of the couloir cut deeply after extending five pitches on the snow wall which inclination about 50° . The couloir was only $3\sim4$ m wide and the rock wall on both side completely. It seemed that we could not escape to the both side.

There was full of snow in the couloir as last time, and the slope of the route continued riging 'up in inclination of about 50°. We could climb up without difficulty because the chockstone on the way was almost covered with snow in winter.

When we extended our route two pitches from the foot of the couloir, we reached the place where we felt as if we were in the bottom of a well because of surrounded by rock wall. The place was one of the most difficult section because of the vertical rock wall about 25 m high standing in our way to Lampe.

The good news of having passed up Rock Band was announced by walkie talkie at 14:15.

We could reach the intended place height of 8,350 m as Camp 4 after extending one more pitch in the gully.

On 12 th, we heard tha roar of the violent winter wind from South Col to Mt. Lhotse side when we got up in the morning. Ogata's team shifted to Camp 3 following to our schedule though we left slightly uneasy.

On 14 th, Ogata and Hoshino, passed one night at the height of 8,350 m, started to take a step onward on the virgin route. The route became quite steep snow wall after traversing one pitch on the slab from Camp 4. We went up one pitch straight, then traversed about 4 m to the right side along Snow Band and after then the first barrier waited us. The vertical wall, about 4 m high, blocked in our way. It was hard to climb with being equipped whole include oxygen cylinders in spite of only grade [V+in technical. We climbed over depended on left ropes by Korean team.

On 15 th, Ogata and Hoshino having spended two night at Camp 4 could extend the route smoothly because of almost calm and clear weather, too. However, we could not reach the point, one of the most difficult section, on South Summit Gully dur to lack of ropes.

On 16 th, Sato told me that his rib might be broken because his chest was paining when he caughed. So, Sato had to be out of climbing, Tanabe and Ezuka were sent as the second team from the next day.

On 17 th, it grew colder from last night and the temperature was -23°C in the morning. On the day, the pair of Nazuka and Goto started from Camp 4 and after reached the highest point by Ogata's team made the route on South Summit Gully from 11:30.

At first, we extended the route on the snow wall, shaped like Gully and traversed to the greatest depth like running water gutter through under the reddish brown slab zone called Rock Step by British team. Each of ropes was fixed up to the place.

The brittle red-brown gully continued from there. We made the route two pitches of the gully on grade $\mathbb{I} +$. And we reached snow wall after the gully.

Making route on the day was finished up to there and we started to go down at 16:10 and reached at Camp 4 at 17:30.

Anyway, to scale South-West Face is quite hard. South-West Face did not allow us to enter the last gate though we were close to be able to recognize each rock of South Summit Col.

We expected Nazuka's team on next day again.

On 18th, strong wind from last night stopped and calm morning came.

Nazuka's team, carried our expectation on their sholders, told us that it was calm around Camp 4 at 7:00 a.m. by walkie talkie. It was said that already Goto started at 6:45 a.m.

Both of two reached the highest point of last day at 10:33 a.m. They started to make the route from there. At last they reached on South Summit Col. It was the time at 13:05. The summit of Mt. Sagarmatha was within hail in snow mist beyong Hillary Step from there.

From there the route was known well by Nazuka. They went up step by step carefully in unbearable roaring gale. At 15:20 at last, they stood on the summit of the highest peak in the world in winter

They stayed on the summit about 20 minutes to perform the ceremony. Goto also would reach soon.

Oh they did it I felt relieved with all my heart. Now, I could feel without grief of tragedy. I was deeply impressed with the result of success for scale comming to my heart. It was my first impression that we would be able to return Japan sure. Finally, we were free from the feeling compressed mental pressure.

In that way, the first ascent by South-West Face in winter on 18 th December was made by the first team without mishap.

On 20 th, at 5:15 a.m. on the day, Tanabe and Ezuka, second team, started from Camp 4. At 11:20 a.m. they succeeded in reaching the summit. They made the first ascent with their tenacity in spite of raging gale and attained Hat Trick. However, Ezuka was operated and removed part of his little finger due to frosvite later in compensation for his glory.

On 22 nd, Ogata and Hoshino, the third team, started from Camp 4 at 6:10 a.m. Both of us carried three oxygen cylinders, made in the former USSR and capacity of three litter, on your shoulders. They climbed up smoothly without suffer of weight because of taking oxygen. Already we reached the 8th pitch when we had to contact at 7:00 a.m.

At 9:25 a.m. they reached hoped-for South Summit Col. Indeed, it was raging gale as if I would be blown off. Ogata changed his oxygen cylinder while Ogata was waiting for Hoshino.

Ogata found red dadget, wreck of antena, empty oxygen cylinder and others in front of me. It seemed that it was the summit over there soon. It took just one hour for me from South Summit Col, and at last Ogata reached the summit at 10:40 a.m.

The first ascent of Mt. CROWN in 1993 CROWN Expedition Japananese Alpine Club-TOKAI Branch

The Name of mountain we ascended is "CROWN", it is located about 40 km north west of M 1, K 2 in Karakourm. It is 7,295 m high above sea level and 3 rd highest unclimed mountain in the world.

The first group (6 members) of this expedition arrived in Kashger 19 th May 1993, we

received here all our equipments and provisions delivered from Japan and bought some vegetable we needed.

The first caravan started from Mazer Dara with 52 camels on 23 May along the Yarkand liver and we reached the Shaksgam river throught the Agirl pass (4,780 m) on 26 May. We proceeded the caravan along the Shaksgam river, crossing over the river several times, and finally arrived at the end of Crevasse Glacier which is the biggest glacier in China. on 29 May. Base camp was established here at the height of 4,100 m on 29 May. It was located on the side moraine at the right side of the Crevasse Glacier. From 30 May, we started finding route to Advance base camp upwards. The route from base camp to advance base camp (ABC), 4,400 m height, is on the left side morained of Crevasse Glacier through the deposit camp (4,300 m). We set up ABC at the entrance of 4 th runse of CROWN on 1 June. The second group departured from Japan on 27 May join at BC on 7 June. The rest of members, H. Sakai who is chief climbing leader in the team, joined at ABC on 17 June.

On 11 June, we set up the Camp 1 in front of the big front wall of the Crown at the height of 5,100 m on the moraine. The route from ABC to C 1 was on the side moraine of 4 th runse, we fixed 3 ropes on the steep rock wall at the height of 4,400 m for the convenience of descent. In order to avoid an avalanche from icefall which is lower part of the east face, we made a detour to the south east face. We fixed 23 ropes from C 1 to C 2. C 2 (5,800 m) was set up on 21 June on the end of south east ridge. C 2 was covered around with deep snow and the route from C 1 to C 2 was steep snow slope. And there, we traversed to east face along the rock band, it was very steep slope covered with deep snow. This route was so delicate because of the risk of avalanche from the east face. We fixed 20 ropes from C 2 to C 3. At first, we had a plan to make C 3 at the height of around 6,500 m and final camp at the height of 7,000 m at the east face, but East face was too steep to make a apace for stay, finally we gave up setting up the camp at the east face, since we had to set up Camp 3 (final camp) at the height of 6,300 m where it is about 800 m lower than our expectation. We had to dig snow all day to make a space for camp at the poit of fifth ridge from the south east ridge. C 3 was set up to keep hanging out the edge of tent to the open space on 14 July.

East face was mixed with rock and ice wall which is covered thin snow and it had a most steep slope in our route, it was almost between 60 and 80 degrees. The most difficult part of this route was called "The exit of funnel", at which all snowslide from the upper part of east face was gathered. We set 7 m wire ladder on this part on 17 July. 28 fixed rope was established on the east face to the foot of the summit at the height of about 7,100 m on 21 July. The first assault party, Tokushima, Yamasaki and Aritomi started from C 3 at 2:30 a.m. on 22 July, they reached at the end of the fixed rope at 7:00 a.m. and there they extended the route another 4 pitches. They finally reached the summit at 2:56 p.m. under cloudy weather. They descend the C 2 on the same day. The total of fixed rope was 32 pitches from final camp to the summit.

After 3 days bad weather, the second assault party, Sakai, Abe, Suzuki and Nakagawa started from C 3 at 2:30 a.m. under fine weather and reached the summit at 9:05 a.m. on 27 July. The third assault party, Kameda, Nakashima, Miyasaka and Sasamori reached the summit on 28 July and the final assault party, Natsume, Matsuoka and Hasegawa also reached the summit on 29 July. They also started from C 3 at early morning and descend the C 2 on the same day. Our all members finally could reached the summit through the new route at the east face.

We carried out fixed ropes as much as we could, especially we took out all between C 1 and C 2. On 31 July, we evacuated C 1 and moved down to ABC. We returned to Sugket Jnagal on 6 August, which is Base Camp for cooperator of Chinese and for Base Camp of Mt. K 2. We stayed 10 days waiting for camels for caravan and started return marching on 15 August. After 10 days, we finally returned in Kashger on 24 August.

Japanese Members

Expedition leader	Kazuo Tokushima	(ag	ge 48)
Cheif climbing leader	Hideki Sakai	(32)
Climbing leader (Manager)	Tetsuya Abe	(30)
Climbing leader (Tactics)	Tetsuya Abe	(28)
Climbing leader (Tactics)	Masanori Nakashima	(28)
Preparatory leader	Mikio Suzuki	(26)
Climbing Member (Transportation)	Akito Yamazaki	(26)
Climbing Member (Accountant)	Masanori Natsume	(25)
Climbing Member (Food)	Hitoshi Miyasaki	(24)
Climbing Member (Equipment)	Kunihito Nakagawa	(24)
Climbing Member (Equipment)	Yasuyuki Aritomi	(24)
Climbing Member (Health)	Shinya Sasamori	(22)
Climbing Member (Document)	Kiyoshi Matsuoka	(21)
Climbing Member (Food)	Tetsuya Hasegawa	(21)

INDO (ITBP)-JAPAN (HAC) AQ \cdot TASH EXPEDITION 1993 HIROSHIMA ALPINE CLUB

The summary of the act of Japanese members is as under.

- 7/17 Sasoma~Camp of Army
- 7/18 Camp of Army~BC (4 800 m)
- 7/21 We begin to climb for mountain. We set up C 1 (5 600 m) and decide the climbing route.

7/22 - 23

We carry up the climbing goods to C1.

7/24 Okamoto and Yoshioka search the route in the South Wall and fix the fope to the point

of 5,900 m.

Other member carry up the climbing goods to C1.

- 7/25 Nagoshi, Yokoyama, Mizote search the route and fix the rope up to the point of 6,150 m.
- 7/26 Nagoshi, Yokoyama, Mizote search the route and fix the rope to the point of 6,200 m.
- $7/27 \sim 30$

We cut the ice at the place of C 2 (6,200 m) and make tent-site and set the tent of C 2.

- 7/31 Nagoshi and Okamoto search the route and fix the rope up to the point of 6,550 m.
 They reach up to Upper-Snow-Face.
- 8/1 All members Stay in C1 or C2.
- 8/2 Yamamoto and Mizote search the route and fix the rope to the point of 6,700 m up to Rock-Nose in Upper-Rock-Area. They stay at C 2 at night.
- 8/3 Yamamoto and Mizote go down from C 2 to C 1. Nagoshi, Okamoto, Yokoyama go up to C 2 from C 1. They stay at C 2 at tight.
- 8/4 We stay at C1 or C2 because of bad weather.
- 8/5 Nagoshi, Okamoto, Yokoyama attack the summit. They climb Upper-Rock-Area and have very difficurty to climb through the Rock Area. It is very bad weather.

At last, they climb up through that area and reach to the Snow Face under the Summit at the point of $6\,870\,\mathrm{m}$ at $16\,00$. But, they don't go up to the summit and go down to C 1 because they have the idea that Indian members must be the first-summitter. Yamamoto and Mizote Climb up to C 2 from C 1 at night.

8/6 Yamamoto and Mizote start for the summit from C 2 at AM. 2:00. They arrive at the point of the end of Upper Rock Area at AM. 12:00. They climb about 180 m from there in the snow face, and at last they reach to the summit. Yamamoto arrive at the summit at 14:10. Mizote arrive at the summit at 14:30.

They can't see the view around the summit, because the weather is very bad. They withdraw some fix-ropes and go down to C2 at night.

- 8/7 Yamamoto and Mizote withdraw C 2 and fix-ropes under C 2 and they cna't withdraw the rest of ropes above C 2 because we must withdraw C 1 8 th Aug. and don't have enough time for withdrawing. They go down to C 1 in the evening.
- 8/8 We withdraw C1 and go down to BC.

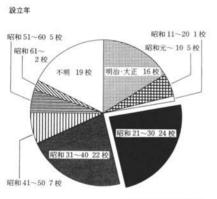
We and Porters carry down the all climbing goods to BC.

- 8/9 We stay at BC, all day.
- 8/10-11 We work and pack our climbing goods.
- 8/13 BC~Sasoma

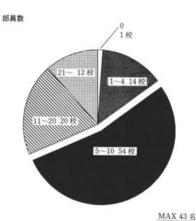
大学山岳部 アンケート調査集計報告書(抜粋)

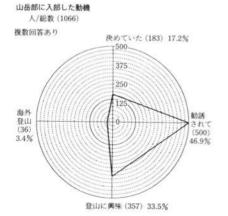
日本山岳会青年登山懇談会では、大学山岳部がかかえる問題や現状を調査するために、 1993年10月大学山岳部にアンケート調査を実施した。

調査は、全国の大学山岳部のうち、文部省登山研修所に住所データのある286校の部 長・監督宛にアンケート用紙を発送し、廃部等で存在しないと返送された7校を除き 101校からの回答を基に集計を行ったものである。本稿は表記調査報告書の中から主要 項目を抜粋したものである。

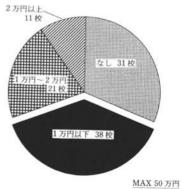


昭和は10年ごとに分けた

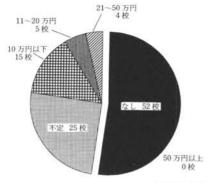






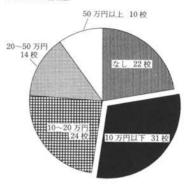


OB からの援助金



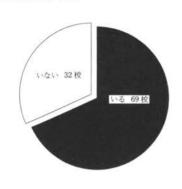
MAX 40 万円

大学からの補助金

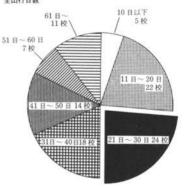


MAX 227 万円

部報を発行している大学

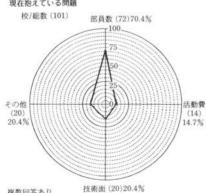


全山行日数



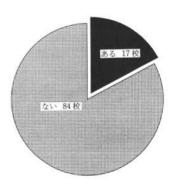
MAX 90 日

現在抱えている問題



複数回答あり グラフは実際の回答を4パターンにした。

過去5年以内に事故があった大学

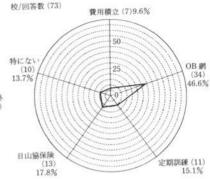


事故が起こった時、大学側の対応



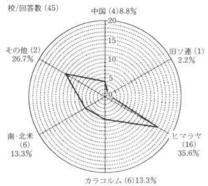
事故を経験している部員が少なかった為、 回答が少なかった。

事故対策

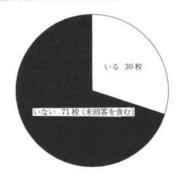


複数回答あり、未回答を特にないに含めた。

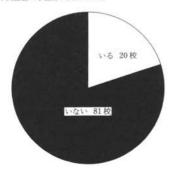
興味ある山



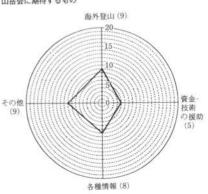
日本山岳会に入会したいと考えている部員



日本山岳会の学生部に入っている



日本山岳会に入会したいと考えている部員がいる内で山岳会に期待するもの



山岳図書目録

「山岳図書目録」について

日本山岳会図書委員会

山の世界で本の占める比重は大きなものがあります。そして山の本の出版は、自然科学、人文科学、文芸など、いろいろな分野で盛んですが、しかし、どんな本が出ているのか、また、その本は、いつ、どこから出たのか、そうした本の情報は、なかなか手に入りにくいのが現実です。いま、そうした情報を一般的に知るのによいのは、『岩と雪』年鑑の図書情報欄でしょうが、日本山岳会図書委員会では、出版情報を会員諸氏にお届けするための作業を毎月おこなっています。ここでは、それを基に、日本で出版されたものと、外国で出版されたものを調べてまとめてみました。日本で、あるいは外国での山の本の出版状況がどうなっているのか、この資料がお役にたてば幸いです。

なにぶん制約のある労力と時間内での調査であり、また、記載した本のすべてを現物 にあたっているわけではありませんので、不備なところがあるかもしれません。お気づ きの点はお知らせいただき、今後の作業の参考にしてゆきたいと存じます。よろしくご 協力をお願いいたします。

- ・記載は、日本で出版された日本語(または外国語)の図書と、外国で出版された英語、 ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語の図書です。
- 日本語のものは、発行年月日が1992年と1993年、英語ほかの外国語のものは、発行年月日が1991年と1992年のものです。
- ・記載は整理番号,書名,著者名,発行所名,定価,判型,発行地の順です。
- ・定価, 判型は, 日本語図書のみ記載しました。判型が数字で表示されているものの単位は mm です。
- ・記載の配列は、和書が書名の五十音順、洋書は書名のアルファベット順です。
- 整理番号のうち、Nは日本語、Dはドイツ語、Eは英語、Esはスペイン語、Fはフランス語、Iはイタリア語です。N92とは、日本語図書、1992年発行の意味です。
- ・このリストは、主として図書委員会の次のメンバーが担当しました(順不同)。 岩淵泰郎、大橋 晋、越田和男、大森久雄、松家 晋、岡沢祐吉、岩瀬皓祐、泉 久 恵、平井吉夫、小川益夫、三好まき子。

山岳図書目録——日本語 1992年

No.	書 名	著 者	発行所	定価	判型
N 92-001	アジアハイウェーを行く	産経新聞特別取材班	テレメディア	¥1800	A5
N 92-002	秋田・源流の山旅	藤原優太郎	無明舎出版	¥2000	A5変
N 92-003	アフガニスタン紀行	岩村 忍/著 勝藤 猛/解説	朝日新聞社	¥ 510	文庫判
N 92-004	ある日岩場で―堀越道朗 山の軌跡―	登歩溪流会/編	登歩溪流会	¥3500	A5
N 92-005	アルプス・ヒマラヤから の発想	藤田和夫	朝日新聞社	¥ 660	文庫判
N 92-006	アンデスの記録者ワマ ン・ポマーインディオの 歴史像を読む—	染田秀藤・友枝啓泰著	平凡社	¥3800	A5
N 92-007	アンナプルナⅢ—1991年 アンナプルナⅢ峰登山隊 の記録—	札幌北稜クラブ/編	札幌北稜クラブ		В5
N 92-008	ANNAPURNA DAKSHIN EXP.	静岡市山岳連盟ソサエティ・ネパール・ヒマラヤ 登山隊/編	同隊/刊		В5
N 92-009	飯豊連峰懐賦―残雪とお 花畑, 紅葉と温泉―	山田 格	山田 格		A5
N 92-010	生きぬくことは冒険だよ	長谷川恒男/著 長谷川 昌美・小田豊二/編	集英社	¥1300	四六版
N 92-011	泉隆次郎追悼集	大阪市立大学山岳会/編	大阪市立大学山 岳会		A5
N 92-012	伊那谷の民俗―向山雅重 写真集―	向山雅重/著 向山資料 保存会/編	新葉社	¥3500	A4変
N 92-013	大ぞり隊,南極大陸横断 す	舟津奎三	講談社	¥1500	四六判
N 92-014	今西錦司一評伝—	本田靖春	山と溪谷社	¥1900	四六判
N 92-015	岩登りの確保技術	日本勤労者山岳連盟技術 委員会/編	同会/刊	¥1800	A5
N 92-016	ウォルター・ウェストン 年譜	日本山岳会/編	日本山岳会		A5
N 92-017	裏磐梯	新井幸人	時事通信社	¥1200	四六変
N 92-018	麗しき四川の夏一雪宝頂 登頂—	酒井国光/編	日本ヒマラヤ協 会	¥1000	В5
N 92-019	越後三面山人記―マタギ の自然観に習う―	田口洋美	農山漁村文化協会	¥2800	A5
N 92-020	エトロフの青いトマト― 素顔の北方領土, エトロ フ, クナシリ紀行―	753777757	山と溪谷社	¥1800	A5
N 92-021	エメラルドの王国―熱帯 雨林の危機―	ナショナル・ジオグラ フィック協会/編 大出 健/訳	岩波書店	¥2900	B5変
N 92-022	大いなる山 大いなる谷	志水哲也	白山書房	¥2200	四六判

N 92-023	小笠原の自然 東洋のガラバゴス	小笠原自然環境研究会/ 編	古今書院	¥1800 四六判
N 92-024	奥多摩山・渓・峠	宮内敏雄	百水社/発行 星雲社/発売	¥3300 四六判 ※復刻版
N 92-025	女ひとり世界を往く	N.el サーダウィ/著 鳥居千代香/訳	図書出版社	¥2987 四六判
N 92-026	女ひとり中国を行く	山本美智子	北斗出版	¥1700 四六判 ※改訂版
N 92-027	還らざる者たち	原真	悠々社	¥2500 四六判
N 92-028	輝く壁―ガッシャーブル ム主峰8068―	岡山大学山岳部/編	岡山大学山岳部	¥5000 A4
N 92-029	カトマンズ百景	内田良平	山と溪谷社	¥2800 B5
N 92-030	カムイたちの後裔	鍛冶英介	つり人社	¥ 880 新書判
N 92-031	ガンジス	ラグビール・シン/写真 中尾ハジメ/訳	岩波書店	¥4000 B4変 *写真集
N 92-032	汽車が好き、山は友だち 一昭和の山旅の記録—	長谷川末男	草思社	¥3200 四六判
N 92-033	北アルプス一上一	信濃毎日新聞社編集局/ 編	同局/刊	¥3500 菊倍判
N 92-034	北アルプス一下一	信濃毎日新聞社編集局/ 編	同局/刊	¥3500 菊倍判
N 92-035	北千島冒険紀行	阿部幹雄	山と溪谷社	¥2400 A5
N 92-036	北のオデッセイ―北海道 沿岸ぐるり徒歩の旅―	榛谷泰明	山と溪谷社	¥1200 B5変
N 92-037	北の山と本―その登山史 的考察―	高澤光雄/編	日本山書の会/ 発行 穂高書房 /発売	¥2500 A5
N 92-038	九州百名山	山と溪谷社/編	山と溪谷社	¥2300 B5変
N 92-039	樹よ。一屋久島の豊かな いのち—	山下大明	小学館	¥3800 A4横長 *写真集
N 92-040	京都滋賀南部の山	内田嘉弘	ナカニシヤ出版	¥2000 四六判
N 92-041	熊野修験	宮家 準	吉川弘文館	¥2900 四六判
N 92-042	クリュチェフスカヤ 4813m	阿部幹雄/編	北海道カムチャ ツカ登山隊	¥ 600 B5
N 92-043	黑部奥山史談	湯口康雄	桂書房	¥3090 A5
N 92-044	國分勘兵衛(貫一)遺稿抄	國分勘兵衛/著 國分富 久子/編	国分株式会社	A5
N 92-045	砂漠の中のシルクロード 一悠久の自然と歴史—	真木太一・みどり/著	新日本出版社	¥3000 A5
N 92-046	サハリン・北方四島―歌 え!ゆたかなる四季―	後藤昌美	北海道新聞社	¥2500 B5横長
N 92-047	THE ROCKIES アラスカ からメキシコまで	岩橋崇至	ぎょうせい	¥16000 B4横長 *写真集
N 92-048	THE ROCKY MOUNTAINS	吉野 信	平凡社	¥4500 A4変
N 92-049	山岳環境保護国際シンポ ジウム 東京会議1991報 告書	HAT-J国際会議・編集 委員会/編	HAT-J	¥2000 B5

N 92-050	山岳総合索引 1905-1990	日本山岳会/編	緑蔭書房	¥27810	B5
N 92-050	山稜の四季	全日本山岳写真協会/編	山と溪谷社	¥6000	A4
N 92-052	静かな山、小さな山	石井光造	東京新聞出版局	¥1600	四六判
N 92-053	静かな山一歩き方とガイドー	石井光造	白山書房	¥1600	四六判
N 92-054	自然保護年鑑3 世界と 日本の自然は今	自然保護年鑑編集委員会 /編	自然保護年鑑刊 行会(日正社)	¥7500	B5
N 92-055	社長室はアウトドア	辰野 勇	山と溪谷社	¥2200	A5
N 92-056	修験の世界	村山修一	人文書院	¥3090	四六判
N 92-057	憧憬の白き壁 冬期アン ナプルナ I 峰南壁	群馬県山岳連盟/編	群馬県山岳連盟		
N 92-058	白神の四季―クマゲラの 棲む森―	根深 誠	白水社	¥1400	四六判
N 92-059	白簱史朗の変幻富士―写 真紀行―	白簱史朗	新日本出版社	¥6000	A4変
N 92-060	新日本の山	日本山岳写真集団	東京新聞出版局	¥3900	B5変
N 92-061	新・山靴の音	芳野満彦	東京新聞出版局	¥1300	四六判
N 92-062	スーパー低山ベストコー ス一東京周辺一	武村岳男	山と溪谷社	¥1500	A5
N 92-063	周防100山百景	中島篤巳	マツノ書店	¥1300	B6
N 92-064	スキーツアーのススメ	北田啓郎	山と溪谷社	¥ 800	新書判
N 92-065	鈴鹿の山と谷 6	西尾寿一	ナカニシヤ出版	¥3700	A5
N 92-066	1991年インド・ヒマラ ヤ・ジョギンⅠ・Ⅱ峰登 山報告書	練馬山の会インド・ヒマ ラヤ登山隊/編	同隊/刊		B5
N 92-067	1990年チュール合宿報告 書	立教大学山岳部/編	立教大学山岳部	¥2000	B5
N 92-068	1988年パミール国際キャ ンプ レーニン峰登山報 告書	埼玉県高体連登山部顧問 会パミール登山隊/編	同隊/刊	¥1000	В5
N 92-069	空の名前	高橋健司	光琳社出版	¥3200	A5
N 92-070	大山一その自然と歴史一	山陽新聞社出版局/編	山陽新聞社	¥2800	B5変
N 92-071	平の小屋物語―黒部の自 然とイワナよ永遠に―	今西資博	(株)法研	¥1800	四六判
N 92-072	立山夢幻	横山 宏	光村印刷	¥1500	A4変
N 92-073	立山明媚	高橋敬市	桂書房	¥1500	B5変
N 92-074	多摩の街道―歩こうふる さとの道を―	津波克明·宅間 靖·清 水克悦/著	けやき出版	¥1300	四六判
N 92-075	地球は燃えている	アレックス・シューマト フ/著 旦 敬介/訳	新潮社	¥2500	四六判
N 92-076	地球へ! RIFT VAL- LEY ODYSSEY	野町和嘉	講談社	¥5800	菊四判
N 92-077	千島紀行	S.ベルクマン/著 加 納一郎/訳 北村泰一・ 宮田浩人/解説	朝日新聞社	¥ 440	文庫判

N 92-078	チベットの報告 2	イッポリト・デシデリ/ 著 フィリッポ・デ・ フィリッピ/編 薬師義 美/訳	平凡社	¥2884 *3	B6変 東洋文庫
N 92-079	中央アジアに入った日本 人	金子民雄	中央公論社	¥780	文庫判
N 92-080	中央アルプス	津野祐次	山と溪谷社	¥2900	A4変
N 92-081	中国登山の手引 第二版	山森欣一/編	日本ヒマラヤ協 会	¥3500	B5
N 92-082	鳥海・月山	石橋睦美	山と溪谷社	¥2900	A4変
N 92-083	天山―シルクロードの秘 境―	鈴木重彦	東京新聞出版局	¥3900	B5変
N 92-084	天壇の山に挑む―ミニヤ・コンカ東面―	山森欣一/編	日本ヒマラヤ協 会	¥2500	В5
N 92-085	東海自然歩道31選「東海 版」	名古屋歩く会/編	七賢出版	¥1300	四六判
N 92-086	東海自然歩道を歩く	後藤典重/編・著	新ハイキング社	¥1300	A5
N 92-087	冬期サガルマータ南西壁 登山報告書	群馬県山岳連盟/編	群馬県山岳連盟	非売品	В5
N 92-088	東京の山百山―50コース 一	東京野歩路会/編	山と溪谷社	¥1500	A5
N 92-089	東洋紀行1	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳	平凡社	¥3090 *3	B6変 東洋文庫
		7 19 (
N 92-090	東洋紀行 2	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳	平凡社	¥3090 *3	B6変 東洋文庫
N 92-090 N 92-091	東洋紀行 2 季の白山	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸	平凡社		
	es descriptions in t	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳		*3 ¥3500	東洋文庫
N 92-091	季の白山	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中奥志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他	光村印刷	*3 ¥3500	東洋文庫 B4変
N 92-091 N 92-092	季の白山 とやま山歩き一新版―	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中與志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他 /著	光村印刷 シー・エー・ビー	*3 ¥3500 ¥2000	東洋文庫 B4変 四六判
N 92-091 N 92-092 N 92-093	季の白山 とやま山歩き一新版一 七大陸最高峰に立って 25人の極地探検家一ス コット、アムンゼン、ナ	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中與志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他 /著 田部井淳子 加納一郎/著 北村泰一	光村印刷 シー・エー・ビー 小学館	*3 ¥3500 ¥2000 ¥1400	東洋文庫 B4変 四六判 菊判
N 92-091 N 92-092 N 92-093 N 92-094	季の白山 とやま山歩き一新版一 七大陸最高峰に立って 25人の極地探検家一ス コット、アムンゼン、ナ ンセン一 日中合同梅里雪山学術登	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中典志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他 /著 田部井淳子 加納一郎/著 北村泰一 /解説	光村印刷 シー・エー・ビー 小学館 朝日新聞社	*3500 ¥2000 ¥1400 ¥ 600	東洋文庫 B4変 四六判 菊判 文庫判
N 92-091 N 92-092 N 92-093 N 92-094 N 92-095	季の白山 とやま山歩き一新版一 七大陸最高峰に立って 25人の極地探検家一スコット、アムンゼン、ナンセン一 日中合同梅里雪山学術登 山隊報告書 日本アルブス―山岳紀行	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中奥志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他 /著 田部井淳子 加納一郎/著 北村泰一 /解説 京都大学学士山岳会/編 小島烏水/著 近藤信行	光村印刷 シー・エー・ビー 小学館 朝日新聞社 同会/刊	*3 ¥3500 ¥2000 ¥1400 ¥ 600	東洋文庫 B4変型 四六期 判軍車 1 B5
N 92-091 N 92-092 N 92-093 N 92-094 N 92-095 N 92-096	季の白山とやま山歩き一新版一 七大陸最高峰に立って 25人の極地探検家ースコット,アムンゼン,ナンセンー 日中合同梅里雪山学術登山隊報告書 日本アルプス―山岳紀行 文集― 日本型環境教育の「提案」 一自然との共生をめざし	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中奥志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他 /著 田部井淳子 加納一郎/著 北村泰一 /解説 京都大学学士山岳会/編 小島鳥水/著 近藤信行 /編 清里環境教育フォーラム	光村印刷 シー・エー・ビー 小学館 朝日新聞社 同会/刊 岩波書店	*3 ¥3500 ¥2000 ¥1400 ¥ 600 非売品 ¥ 720	東洋文庫 B4変判 四、 菊庫 文庫 東判 185 文庫判
N 92-091 N 92-092 N 92-093 N 92-094 N 92-095 N 92-096 N 92-097	季の白山とやま山歩き一新版一 七大陸最高峰に立って 25人の極地探検家一スコット、アムンゼン、ナンセン一 日中合同梅里雪山学術登山隊報告書 日本アルプス―山岳紀行 文集― 日本型環境教育の「提案」 一自然との共生をめざして一 日本山岳紀行―ドイツ人	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中奥志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他 /著 田部井淳子 加納一郎/著 北村泰一/解説 京都大学学士山岳会/編 小島烏水/著 近藤信行/編 清里環境教育フォーラム 実行委員会 W.シュタイニッツアー	光村印刷 シー・エー・ピー 小学館 朝日新聞社 同会/刊 岩波書店 小学館	*3 ¥3500 ¥2000 ¥1400 ¥ 600 非売品 ¥ 720 ¥2800	東洋文庫 B4変判 四六 判判 文庫 割5 文庫 和
N 92-091 N 92-092 N 92-093 N 92-094 N 92-095 N 92-096 N 92-097	季の白山とやま山歩き一新版一 七大陸最高峰に立って 25人の極地探検家一スコット、アムンゼン、ナンセン一 日中合同梅里雪山学術登山隊報告書 日本アルプス―山岳紀行 文集― 日本型環境教育の「提案」 一自然との共生をめざして一 日本山岳紀行一ドイツ人 が見た明治末の信州―	G. クライトナー/著 大林太良/監 小谷裕幸 /訳 田中奥志雄 橋本 廣・佐伯郁夫 他 /著 田部井淳子 加納一郎/著 北村泰一/解説 京都大学学士山岳会/編 小島鳥水/著 近藤信行/編 清里環境教育フォーラム 実行委員会 W.シュタイニッツアー/著 安藤・梅野淑子/	光村印刷 シー・エー・ピー 小学館 朝日新聞社 同会/刊 岩波書店 小学館 信濃毎日新聞社	*3 ¥3500 ¥2000 ¥1400 ¥ 600 非売品 ¥ 720 ¥2800	東洋文庫 B4変車 四六 菊庫 A5 四六 新庫判 A5 四六 日本 日本

N 92-102	日本旅行日記1	アーネスト・サトウ/著 庄田元男/訳	平凡社	¥2781 ※項	B6変 東洋文庫
N 92-103	梅里雪山	京都大学学士山岳会梅里 雪山追悼文集編集委員会 /編	同会/刊		菊判
N 92-104	梅里雪山事故調査報告書	京都大学学士山岳会梅里 雪山事故調査委員会/編	同会/刊		B5
N 92-105	白山―国立公園とその周 辺―	金沢ナカオ山岳会/編	高島出版印刷株 式会社		
N 92-106	白山連峰文献集―日本山 岳会会報「山岳」より抜 粋 明治中期より昭和初 期まで―	力丸茂穂	力丸茂穂		A5
N 92-107	初めての富士山	大山行男	小学館	¥3900	菊倍判
N 92-108	はじめて登山をする君た ちへ	石川茂治	随想社	¥1236	A5
N 92-109	花と歴史の50山―いまも 現役 山々を語る―	田中澄江	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N 92-110	花の尾瀬	新井幸人	講談社	¥1200	B6変
N 92-111	早池峰山の四季	高橋亭夫/文·写真 岩 手日報社出版部/編	岩手日報社	¥2200	B5変
N 92-112	バャルラー 京都高等学 校登山部顧問団モンゴル 登山隊'92報告書	京都高等学校登山部顧問 団/編	同団/刊	¥1000	A4変
N 92-113	飛驒の山山 国境編	酒井昭市	ナカニシヤ出版	¥2800	四六判
N 92-114	ヒマラヤに挑戦して	パウル・バウアー/著 伊藤 愿/訳	中央公論社	¥ 520	文庫判
N 92-115	ヒマラヤの山旅術	大蔵喜福/文 中村みつ を/絵	山と溪谷社	¥ 800	新書判
N 92-116	ヒマラヤ冒険物語	クリス・ボニントン/著 田口二郎/訳	岩波書店	¥1100	B6変
N 92-117	ヒマラヤン・クライマー 一世界の山岳探究に捧げ た半生一	ダグ・スコット/著 坂 下直枝/訳	山と溪谷社	¥4800	A4
N 92-118	百歳までの山登り	富田弘平	新ハイキング社	¥1800	A6
N 92-119	兵庫丹波の山 (下)―多 紀郡の山―	慶佐次盛一	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N 92-120	氷雪圏の王国 テラ[地球]の想い	川口邦雄/写真 濱田隆 士/文	文一総合出版	¥4500	B4変
N 92-121	広島県スポーツ登山半世 紀の歩み―広島県山岳連 盟50周年記念誌―	広島県山岳連盟	広島県山岳連盟		B5変
N 92-122	宏よナムチャバルワ峰に 輝く小さな星になったの か	大西俊章	崑崙社		B6
N 92-123	ヒンズークシュの名峰― TIRICH MIR―	日本山岳会京都支部/編	同支部	¥2760	A4変
N 92-124	福岡・佐賀県の山歩き	吉川 満	葦書房	¥1680	四六判

N 92-125	富士山―その自然のすべ て―	諏訪 彰/編	同文書院	¥6500	B5
N 92-126	富士山の噴火	つじ よしのぶ	築地書館	¥2060	四六判
N 92-127	二人のチョモランマ	貫田宗男	山と溪谷社	¥1500	В6
N 92-128	ブナ林の自然誌	遠藤泰彦・原正 利・大 場 達/編	千葉県立中央博 物館		B5
N 92-129	焚火―ひろしまをめぐる 山と谷―	加藤武三	加藤武三	¥10 000	A5
N 92-130	続・焚火―ひろしまをめ ぐる山と谷―	加藤武三			B5
N 92-131	深野稔生の宮城の山 ガ イド―里山・奥山62座―	深野稔生	歷史春秋出版	¥1800	B5変
N 92-132	噴火・溶岩・火砕流一火 山からのメッセージ	カティア&モーリス・ク ラフト/著 青木正樹/ 訳	山と溪谷社	¥5800 1	80×300
N 92-133	北海道夏山ガイド5 一道 南・夕張の山々一	梅沢 俊・菅原靖彦・中 川 順/著	北海道新聞社	¥1800	B6
N 92-134	北越の山歩き	橋本 廣	桂書房	¥ 824	新書判
N 92-135	星と嵐一6つの北壁登行 一	ガストン・レビュファ/ 著 近藤 等/訳	集英社	¥ 440	文庫判
N 92-136	Hokkaido Climb 2	竹内政信/編	北海道奴隷俱楽 部&バラグーク ラブ	¥1800	A5
N 92-137	北海道・大地の光景	石津 聡	中西出版	¥2800	A4変
N 92-138	WHITE SAIL (6446m) SUCCESS REPORT	山岡人志/編	板橋勤労者山岳 会		В5
N 92-139	マカルー I 峰登山報告書 MAKALU 8463m	ベルニナ山岳会マカルー 峰登山隊/編	ベルニナ山岳会		В5
N 92-140	昌彦がゆく 伊東昌彦追 悼集	三浦・立木・佐藤・田村 /編	横浜市立大学探 検部		
N 92-141	松本徰夫教授記念論文集 一火山と岩石の探究:日 本から中国・南極へ一	松本徰夫	松本徰夫教授記 念		B5変
N 92-142	マヤとアステカの国の 山々―ピコ・デ・オリサ バの記録―	根元恵夫/編	江戸川区役所山 岳会	頒価実費	B5
N 92-143	みちのく百山百湯	奥田 博・後藤義英/文 若林健二/写真	山と溪谷社	¥2300	B5変
N 92-144	緑の牧歌	太田愛人	恒文社	¥2800	A5
N 92-145	南アルプス―静寂と秘境 を求めて	平口善朗・福田民雄・斎 藤多積/著	光陽出版社	¥1500	四六判
N 92-146	宮城の名山	柴崎 徹	河北新報社	¥1600	В6
N 92-147	名山・秘峰探訪 都道府 県最高峰の山	小宮裕二	現代旅行研究所	¥1700	四六判
N 92-148	メキシコの山々―根本恵 夫の登山ガイド―	根本恵夫	根本恵夫		A5
N 92-149	メラの微笑み―ヒンクー の乙女―	神戸メラピーク登山隊/ 編	同隊/刊		B5

N92-150 森の365日一宮崎学のフタロウ谷日記― スのちから一生命を育むもの― 大学とののとしましましましましましましましましましましましましましましましましましま		
80-0- N92-152 森の水音を聞く	N 92-150	00 四六判
N92-153 森を考える一白神ブナ原 生林からの報告	N 92-151	00 四六判
生林からの報告	N 92-152	00 A5
N92-155 野鳥 藤本和典 主婦の友社 ¥1500 い2-156 山ありて 旅ありき 山本佗介 近代文芸社 ¥1700 い2-157 山靴を履いたお巡りさん 世早界警別山岳警備隊/ 山と溪谷社 ¥1400 を早界警別山岳警備隊/ 山と溪谷社 ¥1400 を早期を1500 山の女一株山郷・焼畑の 谷に生きた女の一生― 二/編 山と渓谷社 第十400 会に生きた女の一生― 二/編 明子160 山の女一株山郷・焼畑の 谷に生きた女の一生― 二/編 明子161 山の気象と天気図 銀谷国衛 白山書房 ¥1800 N92-162 山の自然学入門 小泉武栄・清水長正・高 古今書院 ¥2400 田将志/編 平石秀樹 日本山岳会宮城支部/編 同会 第1800 下92-164 羊拱山登山報告書一JAC 所対項質 Yang Gong Shan Expedition '91― N92-165 夢自然 章木/春 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-166 夢自然 草木/春 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-167 夢自然 草木/春 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-168 夢自然 草木/秋 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-169 ラインホルト・メスナー自伝一自由なる魂を求め アーカインホルト・メスナー自伝一自由なる魂を求め アーカインホルト・メスナー自伝一自由なる魂を求め アーカインホルト・メスナー自伝ー自由なる魂を求め アーカインホルト・メスナー 音橋順一郎/企画・制作 宝島社 ¥2860 下一日本絶滅危機動物図鑑 下一日本絶滅危機動物図鑑 東京新聞出版局 ¥1500 東京新聞出版局 ¥1500 東京新聞出版局 ¥1500 東京新聞出版局 ¥1500 東京新聞出版局 ¥1500 第1500 東京新聞出版局 ¥1500 著 小原秀雄/解説 ジー	N 92-153	00 四六判
N92-156 山ありて 旅ありき 山本佗介 近代文芸社 ¥1700 N92-157 山靴を履いたお巡りさん 一北アルブス飛騨側を護 る山男たちの手記― 米川正利 山と溪谷社 ¥1400 富合ヒュッテ N92-159 山と空一憧れと実践と― 奥淳一追悼編集委員会/ 編 山の女―秋山郷・焼畑の 谷に生きた女の一生― 1編 白山書房 ¥1800 N92-161 山の気象と天気図 銀谷国衛 白山書房 ¥1800 N92-162 山の自然学入門 明神志一編 中石秀樹 日本山岳会宮城支部/編 同会	N 92-154	00 B4横長 *写真集
N92-157 山靴を履いたお巡りさん	N 92-155	00 A6
- 北アルブス飛驒側を護 る山男たちの手記─ N92-158 山小屋物語―北八ヶ岳黒	N 92-156	00 四六判
百合ヒュッテ 10 10 10 10 10 10 10 1	N 92-157	00 B6
編 N92-160 山の女一秋山郷・焼畑の 谷に生きた女の一生― N92-161 山の気象と天気図 銀谷国衛 白山書房 Y1800 N92-162 山の自然学入門 小泉武栄・清水長正・高 古今書院 Y2400 田将志/編 平石秀樹 平石秀樹 平石秀樹 下石秀樹 日本山岳会宮城支部/編 同会	N 92-158	00 B6
日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 日本地域を機動物図鑑 東京新聞出版局 平1500 平173 日本地域を機動物図鑑 東京新聞出版局 平1500 平173 日本地域を増加 平1500 平175 平1	N 92-159	B5変
N92-162 山の自然学入門 小泉武栄・清水長正・高 古今書院 田将志/編 田将志/編 平石秀樹 平石秀樹 平石秀樹 同会 Y2400 N92-163 山の友に恵まれて 平石秀樹 平石秀樹 同会 Miyagi Yang Gong Shan Expedition '91— 中本山岳会宮城支部/編 同会 田と溪谷社 編 同会 N92-165 夢自然 きのこ 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 以292-167 助き 華木/春 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 以292-167 助き 華木/教 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 以292-168 助き 漢谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 以292-169 サインホルト・メスナー自伝ー自由なる魂を求めて一 /著 松浦雅之/訳で一 /著 松浦雅之/訳でして 日本絶滅危機動物図鑑 芸橋順一郎/企画・制作 宝島社 ¥2980 上のドデータアニマルズ 一日本絶滅危機動物図鑑 芸橋順一郎/企画・制作 宝島社 ¥2980 東京新聞出版局 ¥1500 集一自然からのメッセー 著 小原秀雄/解説 ジー	N 92-160	00 四六判
N92-163 山の友に恵まれて 平石秀樹 平石秀樹 平石秀樹	N 92-161	00 四六判
N92-164 羊拱山登山報告書―JAC Miyagi Yang Gong Shan Expedition '91— 日本山岳会宮城支部/編 同会 N92-165 夢自然 きのこ 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 い92-166 夢自然 草木/春 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 い92-167 夢自然 草木/教 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 い92-168 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 山と溪谷社 ¥1200 小92-169 N92-169 亨インホルト・メスナー自伝―自由なる魂を求めて一 /著 松浦雅之/訳でしまります。 下一 「田喜秋 王川大学出版部 ¥2500 岩橋順一郎/企画・制作 宝島社 ¥2980 小92-171 王川大学出版部 ¥2266 岩橋順一郎/企画・制作 宝島社 ¥2980 中三郎 山 *増補新版 N92-172 六十歳からの日本三百名山 *増補新版 田中三郎 東京新聞出版局 ¥1500 集―自然からのメッセー 著 小原秀雄/解説 ジー 東京新聞出版 ¥15000	N 92-162	00 A5
Miyagi Yang Gong Shan Expedition '91— N 92-165 夢自然 きのこ 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N 92-166 夢自然 草木/春 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N 92-167 夢自然 草木/夏 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N 92-168 夢自然 草木/秋 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N 92-169 ラインホルト・メスナー 自伝―自由なる魂を求め でー /著 松浦雅之/訳 で	N 92-163	A5
N92-166 夢自然 草木/春 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-167 夢自然 草木/夏 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-168 夢自然 草木/秋 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-169 ラインホルト・メスナー ラインホルト・メスナー 自伝―自由なる魂を求め でー	N 92-164	B5
N92-167 夢自然 草木/夏 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-168 夢自然 草木/秋 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-169 ラインホルト・メスナー 自伝—自由なる魂を求めって― /著 松浦雅之/訳 TBSプリタニカ ¥2500 田宮本 (大学) 日本絶滅危機動物図鑑 田中三郎 東京新聞出版局 ¥1500 N92-172 六十歳からの日本三百名 田中三郎 東京新聞出版局 ¥1500 東一自然からのメッセー 著 小原秀雄/解説 ¥15000	N 92-165)0 B5変
N92-168 夢自然 草木/秋 山と溪谷社/編 山と溪谷社 ¥1200 N92-169 ラインホルト・メスナー 自伝―自由なる魂を求め で―	N 92-166)0 B5変
N92-169 ラインホルト・メスナー ラインホルト・メスナー 自伝―自由なる魂を求め で―	N 92-167	00 B5変
自伝―自由なる魂を求め /著 松浦雅之/訳 で― N92-170 歴史のなかの旅人たち 岡田喜秋 玉川大学出版部 ¥2266 N92-171 レッドデータアニマルズ ―日本絶滅危機動物図鑑 ― N92-172 六十歳からの日本三百名 田中三郎 東京新聞出版局 ¥1500 山 *増補新版 N92-173 ロバート・ベイツマン画 集―自然からのメッセー 著 小原秀雄/解説 ジー	N 92-168	00 B5変
N92-171 レッドデータアニマルズ 岩橋順一郎/企画・制作 宝島社 ¥2980 一日本絶滅危機動物図鑑 	N 92-169	00 四六判
- 日本絶滅危機動物図鑑 - N92-172	N 92-170	66 四六判
山 *増補新版 N92-173 ロバート・ベイツマン画 ロバート・ベイツマン/ 同朋舎出版 ¥15000 集一自然からのメッセー 著 小原秀雄/解説 ジー	N 92-171	80 B5変
集一自然からのメッセー 著 小原秀雄/解説 ジー	N 92-172	00 四六判
N 92-174 わが八ヶ岳 田辺邦彦 田辺邦彦 ¥2500	N 92-173	000 B4変
	N 92-174	00 B5
N92-175 わが山と旅 秋谷 豊 恒文社 ¥2800	N 92-175	00 A5

山岳図書目録——日本語 1993年

No.	書 名	著者	発行所	定価	判型
N93-001	青いケシを訪ねて―中国 ・四川省 巴朗山峠	石浦邦夫	石浦邦夫	18	80×190
N93-002	アゲハチョウ	松本克臣/写真 三木 卓/まえがき	山と溪谷社	¥2500	B5変
N93-003	アジアハイウェー 第1 巻	NHK アジアハイウェー ・プロジェクト/著	日本放送協会	¥1800	四六判
N93-004	アジアハイウェー 第2 巻	NHK アジアハイウェー ・プロジェクト/著	日本放送協会	¥1800	四六判
N93-005	アジアハイウェー 第3 巻	NHK アジアハイウェー ・プロジェクト/著	日本放送協会	¥1800	四六判
N93-006	梓川―季節の流れのなか で一	穂苅貞雄	山と溪谷社	¥2000	A5変 写真集
N93-007	渥美の自然の講演会記録 集 4	渥美自然の会	同会	¥1000	B5
N93-008	アマチュア森林学のすす め一ブナの森への招待一	西口親雄	八坂書房	¥2000	四六判
N93-009	アマの首飾り	稲門山岳会ビスタリ・ト レック オ	同会		A5
N93-010	アメリカ原風景―アンセ ル・アダムズ写真集―	アンセル・アダムズ/著 原信田実/訳	岩波書店	¥15000	B3変
N93-011	アメリカ大陸探検史	アンヌ・ユゴン/著 堀 信行/監		¥1400	B6変
N93-012	歩いた、よかった、ふれ あった	田中正八郎・はるみ	山と溪谷社	¥1600	В6
N93-013	アルプス徒歩旅行―テプ フェル先生と愉快な仲間 たち―	ルドルフ・テブフェル/ 著 加太宏邦/訳	図書出版社	¥3296	四六判
N93-014	アンナプルナ周遊	内田良平	山と溪谷社	¥3200	В6
N93-015	言い残したい森の話	四手井綱英	人文書院	¥1957	四六判
N93-016	いきいき九十歳の生活術	黒田初子	草思社	¥1500	四六判
N93-017	苺畑よ永遠に	加藤幸子	新潮社	¥1600	四六判
N93-018	一度は訪ねたい信州の 「日本一」「長野県一」	藤井哲二	銀河書房	¥1800	四六判
N93-019	イニュニック[生命]―ア ラスカの原野を旅する―	星野道夫	新潮社	¥1300	四六判
N93-020	岩手山の四季	高橋喜平/写真·文 岩 手日報社出版部/編	岩手日報社	¥2200	B5変
N93-021	植村直己と山で1泊	植村直己	小学館	¥ 760	A6判
N93-022	Walk京都35	山と溪谷社/編	山と溪谷社	¥1400	В6
N93-023	内野常次郎小伝―上高地 の常さん―	中丸 工	日本山書の会	¥2575	A5
N93-024	碓氷峠越え	井田定男	光村印刷	¥1000	A5変
N93-025	美しき谷の姉妹峰―四姑 娘登山の記録―	谷田川武/編	日本ヒマラヤ協 会	¥1000	B5
N93-027	雲南・西南中国の人々	鎌沢久也/写真・文	平河出版社	¥3600	B5

N93-027	SOSツキノワグマ	東根千万億/著 岩手日 報社出版部/編	岩手日報社	¥1300	В6
N93-028	エベレスト―1951年の偵 察遠征―	エリック・シプトン/著 田中純夫/訳	JAC越後支部	¥1000	В6
N93-029	エベレストで何が起きて いるか	上村信太郎	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N93-030	エベレストの頂上は昔, 海だった一地球と生命45 億年の歴史―	小出良幸	PHP 研究所	¥1250	四六判
N93-031	遠藤ケイのキジ撃ち日記	遠藤ケイ	山と溪谷社	¥2300	A5
N93-032	奥羽山系雪国の草花	瀬川 強	熊谷印刷出版部	¥1500	170×175
N93-033	お母さんの歩いた山道	雨宮清子	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N93-034	オートキャンプ大全	金沢寛太郎/編	山と溪谷社	¥1600	A5
N93-035	奥多摩わくわく登山	堀口行雄	のんぶる舎	¥1300	В6
N93-036	奥美濃―ヤブ山登山のす すめ―	高木泰夫	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判*改訂版
N93-037	オコジョ―白い谷の妖精	增田戻樹	講談社	¥1500	B6変
N93-038	尾瀬	木原 浩	山と溪谷社	¥2900	A4変 *写真集
N93-039	OZE-変幻の姿-	麻賀 進	青菁社	¥3000	A4
N93-040	尾瀬自然ハンドブック	河内輝明/編・著	自由国民社	¥1300	新書判
N93-041	尾瀬の四季を歩く―フォ トガイド―	川井靖元	東京新聞出版局	¥2700	B5変
N93-042	尾瀬 花の旅―花は尾瀬 の道しるべ―	布施正直/写真・文	講談社	¥1500	A5
N93-043	尾瀬ものがたり	浅野孝一	新潮社	¥1400	B5変
N93-044	尾瀬を歩こう―まんがハ イキングガイド―	小田悦望	上毛新聞社	¥ 900	B6
N93-045	尾根は囁く	奈良輪美智野	うらべ書房	¥1500	A5
N93-046	おらが富士340座	中島信典	山と溪谷社	¥1600	四六判
N93-047	女ひとりの日本百名山	石井昭子	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N93-048	回想の山道	不破哲三	山と溪谷社	¥1400	四六判
N93-049	改訂・北海道ファミリー 登山	菅原靖彦	北海タイムス社	¥2300	四六判
N93-050	風の巡礼	滝田恒男	画廊たきた/刊	¥3800 *誌画	AB変 集
N93-051	花鳥風影	前田真三	神無書房	¥3800	B5変
N93-052	月山 花讃歌	芳賀竹志	崙書房	¥1500	B6変
N93-053	カトマンズデイドリーム 一ネパール紀行—	佐々木幹郎	五柳書院	¥1800	四六判
N93-054	上高地―写真でたどる山 と花の旅―	中村至申	ほおずき書籍	¥1300	A5
N93-055	上高地・安曇野・黒部	実業之日本社/編	実業之日本社	¥800	B6変
N93-056	神の山・御嶽	生駒勘七/文 徳永 靖 /写真	日本文化社	¥8300	A4変
N93-057	神の山へ	久保田展弘/文 新妻喜 永/写真	山と溪谷社	¥2800	B5変

N93-058	カヤック	ウイリアム・ニーリー/ 著 辰野 勇/監・訳 杉本美穂子/訳	山海堂	¥2000	B5
N93-059	カラコルム登山隊 92報 告書一八木沢和彦君追悼 一	松本政英·浜本健·小室 裕/編	錦稜会		A4
N93-060	カラコルムヒマラヤ	藤田基弘	東京新聞出版局	¥4700	AB判
N93-061	ガリバーが行く	野田知佑	新潮社	¥ 360	文庫判
N93-062	環境庁レンジャーが選ん だ国立公園フィールドガ イド (上)	環境庁ネイチャーウォッ チング研究会	山と溪谷社	¥1800	A5
N93-063	環境庁レンジャーが選ん だ国立公園フィールドガ イド (下)	環境庁ネイチャーウォッ チング研究会	山と溪谷社	¥1800	A5
N93-064	韓国の岩場	石田稔郎	石田稔郎	¥1000	B6
N93-065	関西キャンプ場400	山と溪谷社	山と溪谷社	¥1400	B6
N93-066	カンチェンジュンガ―西 ・東―	山森欣一・尾形好雄/編	日本ヒマラヤ協 会	¥4000	A5
N93-067	ギアナ高地をよぎりて― 地球の創世と絶滅―	柳澤義幸	日本カメラ社	¥8000	B4変
N93-068	奇岩大陸	難波 毅	講談社	¥3300	210×280
N93-069	木曾御岳百草物語	銀河書房/編	銀河書房房	¥1030	四六判
N93-070	北アルプス・スケッチ山 歩	平沢利夫	銀河書房	¥3500	B5変
N93-071	北アルプス動物物語	千葉彬司	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N93-072	北九州の山と自然	帆柱自然公園愛護会/編	海鳥社	¥1500	四六判
N93-073	北岳を歩く	中西俊明	山と溪谷社	¥1600	A5
N93-074	北の大地から―川と水を めぐる二十六の物語―	竹田津実/写真・文	恒文社	¥2800	A5
N93-075	きのこ	小林路子/画	山と溪谷社	¥3000	A4
N93-076	ギフチョウ属 最後の混 棲地―山形県置賜地方か らの報告―	草刈広一	無明舎出版	¥2000	四六判
N93-077	キャンプで逢いましょう	田中律子	山と溪谷社	¥1000	В6
N93-078	'92天山山脈トムール峰 登山報告書	天山登攀俱楽部トムール 峰登山隊/編	同隊		В5
N93-079	今日からはじめるバード ウォッチング	日本野鳥の会/編	往日本野鳥の会	¥4000	A5
N93-080	京都ふるさと登山50選	京都山友会/編	京都新聞社	¥1200	B6変
N93-081	極東一シベリアの自然 人、生活	毎日新聞社/編	毎日新聞社	¥8500	A4変 *写真集
N93-082	極北の夢	バリー・ロペス/著 石 田善彦/訳	草思社	¥3200	四六判
N93-083	霧の森―ふくいの山・四 季―	增永迪男	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N93-084	句集 縦走路	沢聰	ふらんす堂		四六判
N93-085	釧路湿原―知られざる生 物たち―	北海道新聞社/編	北海道新聞社	¥1350	四六判

N93-086	釧路湿原―日本環境の現 在―	本多勝一/編	朝日新聞社	¥1300	文庫判
N93-087	釧路湿原を歩く	立松和平	講談社	¥1500	A5
N93-088	クマゲラの森から	有澤 浩	朝日新聞社	¥1750	四六判
N93-089	グリーンランドは旅人を 離さない	熊谷 榧	白山書房	¥2000	四六判
N93-090	GREAT KARAKORAM	白籏史朗	朝日新聞社	¥77003	300×305
N93-091	京滋百山 三角点を行く (上)	芝村文治	かもがわ出版	¥1200	四六判
N93-092	京滋百山 三角点を行く (下)	芝村文治	かもがわ出版	¥1200	四六判
N93-093	激流の長良川	渡辺 斉	エフエー出版	¥1200	四六判
N93-094	原生林紀行一日本の自然	工藤父母道/編・監	山と溪谷社	¥2000	A5
N93-095	原生林・里山・水田を守 る!	全国集会の記録刊行会/ 編	無明舎出版	¥2200	四六判
N93-096	現代訳・旅行用心集	八隅瀘菴/著 桜井正信 /監訳	八坂書房	¥2000	四六判
N93-097	原野の料理番	坂本 嵩	朝文社	¥1400	四六判
N93-098	興安嶺挽歌	濱川 昇/編 笹原忠夫 /著	鉱脈社	¥3000	四六判
N93-099	高原の音楽譜	手塚宗求	恒文社	¥1800	四六判
N93-100	高山植物	木原 浩	山と溪谷社	¥2000	B6変
N93-101	高山チョウ―可憐な生き ものの記録―<信州の自 然誌>	堀 勝彦	信濃毎日新聞社	¥1700	A5
N93-102	心に残る山―静かな山の 紀行集―	石井光造	白山書房	¥1650	四六判
N93-103	最後の熱帯雨林―地球環 境保護アトラス―	マーク・コリンズ/編 甲山隆司・黒田末寿/監	同朋舍出版	¥6000	A4変
N93-104	里山讚歌	里山讚歌編集委員会/編	中国・地域づくり	¥1250	В6
N93-105	里山の自然をまもる	石井実・植田邦彦・重松 敏則/著	築地書館	¥1854	四六判
N93-106	里山の博物誌―虫の目, 人の目,タヌキの目―	盛口 満	木魂社	¥1500	四六判
N93-107	砂漠を緑に	遠山柾雄	岩波書店	¥ 580	新書判
N93-108	サハラ砂漠縦断記	ジェフリー・ハワード/ 著 柴田都志子/訳	図書出版社	¥3440	四六判
N93-109	サハラ縦走	野町和嘉	岩波書店 *同時	¥1200 寺代ライコ	B6変 ブラリー
N93-110	サハリン・アムール民族 誌―ニブフ族の生活と世 界観―	E.A. クレイノヴィッチ /著 枡本 哲/訳	法政大学出版局	¥6386	A5
N93-111	サバンナの風―東アフリ カの自然と人と動物と…	サバンナクラブ/編	メディアパル	¥2900	A5
N93-112	ザ・リバー	ヘンリー・D.ソロー/ 著 真崎義博/訳	宝島社	¥1800	四六判

N93-113	山河光彩	中村至伸	ほおずき書籍 ¥1200 A4	変
N93-114	山窩の生活	鷹野弥三郎/著 塩見鮮 一郎/解説	明石書店 ¥2575 四六	判
N93-115	山菜	中川重年	小学館 ¥1800 B6	変
N93-116	山頂にて―中央沿線・山 からのパノラマ―	平野武利	山と溪谷社 ¥2300	B5
N93-117	山頂に昼寝あり―卯亭惚 人の山族日記―	W. フォレスト	山と溪谷社 ¥ 980 新書	判
N93-118	山巓に光求めて一俳句で たどる50名山—	蓮実淳夫	牧羊社 ¥ 942 四六	判
N93-119	散歩学のすすめ	松永伍一	講談社 ¥1500 四六	判
N93-120	山漁一渓流魚と人の自然 誌	鈴野藤夫	農山漁村文化協 ¥4000 四六 会	判
N93-121	C.W. ニコルのアウト ドア・クッキング	C.W. ニコル/著 竹 内和世/訳	講談社 ¥1200	A5
N93-122	四季折々の山	岡田日郎	東京新聞出版局 ¥1800 四六	判
N93-123	四季爽風―日光国立公園・奥日光とその周辺―	関 政夫	光村印刷 ¥3000 B5	変
N93-124	四季鳥海山	青野恭典	日本カメラ社 ¥2200 B5	変
N93-125	四季の語らい	串田孫一	新日本出版社 ¥2000	В6
N93-126	四季の山	岳人編集部/編	東京新聞出版局 ¥1500 四六	判
N93-127	至高一谷口現吉遺稿集一	谷口現吉	谷口義子	A5
N93-128	希夏邦馬峰―シシャパン マ中央峰登頂記録―	立正大学山岳部中国登山 隊/編	同隊	A5
N93-129	地震・火山の辞典	勝又 護/編	東京堂出版 ¥5800	A5
N93-130	静岡県のとうげ	金子昌彦・西畑 武/著	金子昌彦·西畑 武	.80
N93-131	静岡市の三角点100	静岡市山岳連盟/編	静岡市山岳連盟四六	判
N93-132	しずおか野の花・山の花	杉野孝雄/編	静岡新聞社出版 ¥2500 四六 局	判
N93-133	しずおか 私たちの山々 一高校生と教師の山83山 一	静岡高体連登山部/編	同部 ¥1750	A5
N93-134	四川・雲南・ビルマ紀行 一作家・艾蕪と二〇年代 アジアー	尾坂徳司	東方書店 ¥3800 四六	判
N93-135	自然学の提唱・自然学の 展開	今西錦司	講談社 ¥5500 四六 *増補版 今西錦司集	
N93-136	自然観察ノート―飯綱高 原・戸隠高原―	和田 清・平沢信夫/著	ほおずき書籍 ¥1000	A5
N93-137	自然観察ノート―上高地 一	和田 清	ほおずき書籍 ¥1000	A5
N93-138	自然地名集	建設省国土地理院/編	財日本地図セン ¥3000 ター	В5
N93-139	自然保護運動の原点・尾 瀬	福島県自然保護協会/編	東京新聞出版局 ¥1200	B5
N93-140	湿原の花と山	小荒井実	歴史春秋社出版 ¥2000 B	5変

N93-141	信濃川―人と風土と環境 一	新潟日報特別取材班	恒文社	¥1800	四六判
N93-142	篠栗八十八カ所霊場めぐ り	井上 優	西日本新聞社	¥1500	B6
N93-143	写真紀行 白簇史朗の光 彩尾瀬	白簇史朗	新日本出版社	¥6000	A4変
N93-144	十三世紀の西方見聞録	那谷敏郎	新潮社	¥1200	四六判
N93-145	知られざる北部シッキム の山々	日本ヒマラヤ協会/編	日本ヒマラヤ協 会	¥2000	В6
N93-146	シルクロード	長沢和俊	講談社	¥1100	文庫判
N93-147	シルクロード—文明交流 の過去・現在・未来	第2回福岡国際シンポジ ウム実行委員会/編	アイネック学術 出版	¥3000	A5
N93-148	シルクロード 風の回廊	滝口鉄夫	中西出版	¥1600	В6
N93-149	シルクロード紀行 (上)	井上 靖	岩波書店 *同印	¥ 900 寺代ライ	B6変 ブラリー
N93-150	シルクロード紀行 (下)	井上 靖	岩波書店	¥ 950	B6変
			*同問	寺代ライ:	ブラリー
N93-151	シルクロード ゴールデ ン紀行―ホータンから西 安へ―	中村太郎	いなほ書房	¥1500	В6
N93-152	シルクロードでワインを 造る	石井賢二	築地書館	¥2060	四六判
N93-153	シルクロードとユカタン 探訪	橋場文俊	三月書房	¥2000	В6
N93-154	信州・アルプスの花100 選	增村征夫	郷土出版社	¥1600	A5変
N93-155	信州の自然誌「高山チョ ウ」	堀 勝彦	信濃毎日新聞社	¥1700	A5
N93-156	信州・野の花100選	增村征夫	郷土出版社	¥1600	A5変
N93-157	信州の風景画名作選―心 に響く―	長野県信濃美術館/編	同館		В6
N93-158	信州の山城	信濃史学会/編	信毎書籍セン ター	¥2500	A5
N93-159	信州・山の花100選	增村征夫	郷土出版社	¥1600	A5変
N93-160	スイス・ホテル案内	土田陽介	リプロポート	¥3914	A5変
N93-161	素顔のサハリン千島	金子知好	連合出版	¥1700	四六判
N93-162	すぐ役立つ四季の山	岳人編集部/編	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N93-163	すぐ役立つ山の豆知識	岳人編集部/編	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N93-164	鈴鹿一私達の山一	グリンデルワルト/編	成文堂	¥1300	A5
N93-165	スパンティーク全員登頂	神奈川ヒマラヤ登山隊 1992/編	同隊	¥2700	A4
N93-166	西南秘境万里行	沈澈/著 譚佐強/訳	恒文社	¥2800	B6
N93-167	生物社会の論理	今西錦司	講談社	¥4900	四六判
			*增補版	今西錦;	司全集4
N93-168	世界最悪の旅 悲運のス コット南極探検隊	A. チェリー=ガラード /著 加納一郎/訳 北 村泰一/解説	朝日新聞社	¥1300	文庫判

N93-169	ゼフィルスの森―日本の 森とミドリシジミ族―	栗田貞多男	クレオ	¥9800	A4変
N93-170	草原行・遊牧論他	今西錦司	講談社 *増補版	¥4900 今西錦	四六判司全集2
N93-171	続・アルプス	水野 勉	未来工房		90×70
N93-172	続・美しい自然公園 第 11巻―阿蘇くじゅう国立 公園「阿蘇」	自然環境研究センター/ 編	自然公園美化管 理財団		¥340
N93-173	続・かぬか平の山々一二 上純一氏遺稿集と共に	日本山岳会岩手支部/編 著	中谷充		B5変
N93-174	続・立山のふもとから	船尾美津子	山と溪谷社	¥1800	A5変
N93-175	続北海道のキノコ	五十嵐恒夫	北海道新聞社	¥2300	四六判
N93-176	続・山梨のハイキング コース	上野 巌	山梨日々新聞社	¥1900	В6
N93-177	そしてみんな登った一不 揃いな先生たちの冒険—	敷島悦朗	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N93-178	空から女が降ってくる― スポーツ文化の誕生―	富山太佳夫	岩波書店	¥2500	四六判
N93-179	空からのたより―機長の ―	岡留恒健	山と溪谷社	¥1700	四六判
N93-180	高尾山	茅野義博	山と溪谷社	¥1900	B5変
N93-181	タクラマカン砂漠漂流記	岳 真也	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N93-182	楽しみのぶらり歩き	石井光造	ダイヤモンド社	¥1400	四六判
N93-183	田淵行男作品集Vol.1	田淵行男/著 八巻康晴・嶺村昇治/編	田淵行男記念館	¥2400	В5
N93-184	W. ウェストンの信濃路 探訪―日本アルプスの父 ―	田畑真一	センチュリー出 版	¥1600	В6
N93-185	多摩川	佐藤秀明	山と溪谷社	¥2800	B5変
N93-186	多摩川探検隊	辻まこと	小学館	¥ 780	A6変
N93-187	丹沢―ブナは訴える―	神奈川新聞社/編	神奈川新聞社	¥1500	A5
N93-188	丹沢があぶない!―山小 屋の主人たちと語る1992 年丹沢シンポジウム	丹沢ドン会/編	夢工房	¥ 500	A5
N93-189	丹沢を楽しむ―自然にや さしい丹沢ガイド―	鈴木澄雄	夢工房	¥1800	A5
N93-190	地球はだれのもの?	丸山直樹	岩波書店	¥1300	В6
N93-191	地球への挑戦―冒険者た ちの熱きメッセージ―	近藤純夫	日本文芸社	¥1000	四六判
N93-192	地図と地域	京都大学地理研究会/編	ナカニシヤ出版	¥1500	В6
N93-193	地図の旅愁―谷・野・川 と人びと―	籠瀬良明	古今書院	¥2400	A5
N93-194	地図を使った風景スケッチ入門―やわらかい透視 図法で山の風景を描く―	山口裕一	山と溪谷社	¥2500	A5
N93-195	チベットの死者の書	川崎信定/訳	筑摩書房	¥ 820	文庫判*原典訳
N93-196	チベットはお好き?	後藤ふたば	山と溪谷社	¥ 930	新書判

N93-197	西藏漂泊 上	江本嘉伸	山と溪谷社	¥2800	A5
N93-198	チベットの文化―決定版 一	R.A. スタン/著 山口 瑞鳳・定方晟/訳	岩波書店	¥12000	A5
N93-199	チベット民話28夜物語	ペマ・ギャルポ/監 関 根房子/編	山手書房新社	¥1800	В6
N93-200	チャレンジ・アドベンチャー―感動と体験の―	斎藤哲瑯・舟橋明男/編 著	黎明書房	¥2500	В6
N93-201	中南米ひとり旅―血が騒 ぐ大陸一周―	川合宣雄	連合出版	¥1700	В6
N93-202	チョウが消えた!?一昆 虫の研究—	原 聖樹・青山潤三/著	あかね書房	¥1800	B5変
N93-203	頂上の旗―生と死のある ところ―	原真	悠々社		六判 新版
N93-204	朝鮮奥地紀行 1	イサベラ・バード/著 朴尚得/訳	平凡社	¥2884 *東洋	B6変 文庫
N93-205	チョモランマ・カンシュン谷周辺の地形―明治大学チョモランマ峰遠征隊、学術班報告書―	小畴 尚/編	同隊		B5
N93-206	チョモランマ登山報告 1992	日本カザフスタン友好チョモランマ登山隊/編	同隊		B5変
N93-207	追悼 井上治郎	井上治郎遺稿・追悼集刊 行会/編	井上治郎遺稿文 集	[7C	六判
N93-208	次のリレー走者―守部浩 遺稿・追悼集―	守部浩遺稿・追悼編集委 員会・鳥取久松山岳会/ 編	守谷裕子		A5
N93-209	筑波山はいま―人びとの 暮らしと自然―	読売新聞水戸支局/編	筑波書林	¥1600	B6
N93-210	てっぺんから見た真っ白 い地球	高野孝子	ジャパンタイム ズ	¥1600 Œ	六判
N93-211	DENALI — Mt. MCKIN- LEY—第4次登山報告書 1993年	絹川祥夫/編	日本山岳会第4 次マッキンリー 気象観測登山隊 /発行		A4
N93-212	電車で行く山々	西山正知	けやき出版	¥1400 四	六判
N93-213	東京の滝―続々発見-都 市砂漠のオアシス―	小澤洋三/写真 三島昭 男/文	舞字社	¥3800	A4
N93-214	峠道の歴史探訪	山本 偦	東京新聞出版局	¥1800 四	六判
N93-215	東洋紀行 3	G. クライトナー/著 小谷裕幸・森田 明/訳 大林太良/監	平凡社	¥2884 *東洋	B6変 文庫
N93-216	動乱の中央アジア探検	金子民雄	朝日新聞社	¥ 720 文	庫判
N93-217	遠く 高く一大西宏遺稿 集一	大西 宏	悠々社	¥6500	A5
N93-218	戸隠とその石仏	千種義人	信濃毎日新聞社	¥1800	A5
N93-219	特選紀行 いで湯の山旅	美坂哲男/著 新妻喜永 /写真	山と溪谷社	¥2300	A5

N93-220	どこまでも広く―カリ の海から風のパタゴニ		高野 潤		情報センター出 版	¥4000	A4変
N93-221	登山者のためのお天気	(学	城所邦夫		山と溪谷社	¥ 980	新書判
N93-222	栃木のいで湯ハイク5	5	宇都宮ハイキン	グクラブ	随想舍	¥1854	A5
N93-223	栃木の山 207		栃木県高体連登口	山専門部	同部		
N93-224	ドナウ・源流域紀行- -ロッパ分水界のドラ -		堀 淳一/文・2	写真	東京書籍	¥2200	A5
N93-225	南極環境調査報告 (19 1993)	91-	吉川謙二/編		アンターティッ クウォーク南極 点探検隊		B5
N93-226	ナンダ・デヴィ		西木正明		徳間書店	¥1500	四六判
N93-227	日本アルプスの鳥		梓川鳥類生態研3 中村登流/監	完会/著	信濃毎日新聞社	¥2800	A5
N93-228	日本アルプス花の図録	Ĺ	伊藤嘉治		編集工房らかぽ し	¥2400	B6変
N93-229	日本温泉・鉱泉分布図 び一覧]及	金原啓司		通産省地質調査	¥5200	B4変
N93-230	日本紀行		井上 靖		岩波書店 *同時	¥1000 寺代ライ	B6変 ブラリー
N93-231	日本的自然観の方法 西生態学の意味する《 一		丹羽文夫		農山漁村文化協 会	¥1700	В6
N93-232	日本のいちばん南にませいたく 一不思議空 「八重山」から「もうひつの日本」が見えてく	間と	楠山忠之		情報センター出 版局	¥1600	四六判
N93-233	日本の大自然 1 大雪 国立公園	Ш	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-234	日本の大自然 2 阿勤 重国立公園	久	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-235	日本の大自然 3 上信 高原国立公園	越	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-236	日本の大自然 4 十利 八幡平国立公園	田田	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-237	日本の大自然 5 霧島 久国立公園	屋	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-238	日本の大自然 6 吉野 野国立公園	熊	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-239	日本の大自然 7 阿第 立公園	国	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-240	日本の大自然 8 白山 立公園	国	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-241	日本の大自然 9 釧路 原国立公園	湿	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変
N93-242	日本の大自然 10 南 内海国立公園	戸	森田敏隆/写真 平/文	立松和	毎日新聞社	¥2800	A4変

N93-243	日本の山はなぜ美しい	小泉武栄	古今書院	¥2600	四六判
N93-244	ネイチャーフォト入門	吉野 信	写真工業出版社	¥3000	B5
N93-245	「熱帯雨林」総論	T.C ホイットモア/著 熊崎実・小林繁男/ 監・訳	築地書館	¥4944	A4変
N93-246	熱帯雨林とサラワク先住 民一人権とエコロジーを 守るたたかい―	サラワク・キャンベーン 委員会/訳 竹内直一/ 編	明石書店	¥2060	四六判
N93-247	ネパール人の暮らしと政 治	山本真弓	中央公論社	¥ 680	新書判
N93-248	ネパールの人びと	川喜多二郎/監	古今書院	¥8300 *增补	四六判 補新装版
N93-249	野山の幸 ピクニック	橋本郁三/文・写真	淡交社	¥1800	A5
N93-250	野山のテーブル―フィー ルドキッチンノート―	落合慎一	双葉社	¥1850	B6変
N93-251	ハイグレード・ハイキン グ一東京周辺一	内田鍈一/編	山と溪谷社	¥1600	A5
N93-252	白頭山	朝鮮民主主義人民共和国 科学院・社会科学院	日朝友好資料セ ンター		資料集
N93-253	白頭山	岩橋崇至/写真	SSB/刊	¥100,0	00 A3
N93-254	箱根火山探訪	袴田和夫	神奈川新聞社	¥ 950	新書判
N93-255	はじめてのシエラの夏	ジョン・ミューア/著 岡島成行/訳	宝島社	¥1600	四六判
N93-256	パタゴニアふたたび	B. チャトウィン、P.セール/著 池田栄一/訳	白水社	¥1500	四六変
N93-257	花ごよみ大山	棚田耕吉・小西 毅・川 上明敏・鷲見寛幸/著	米子今井書店	¥2000	В6
N93-258	花見鳥	叶内拓哉	文一総合出版	¥2000	A4変
N93-259	遙かなる山―閑良屋会結 成15周年記念	内田良平/監	光村出版	¥3090 2	240×250
N93-260	バルン氷河紀行	福田宏年	中央公論社	¥ 580	文庫判
N93-261	東ヒマラヤ探検史	金子民雄	連合出版	¥2200	四六判
N93-262	秘境秋山郷を旅する	大薮 宏	新潟日報事業社	¥1500	B6
N93-263	秘境の山旅	大内尚樹/編	白山書房	¥1800	四六判
N93-264	飛驒おもしろ博物館	飛驒自然史学会/編	中日新聞本社	¥1500	四六判
N93-265	日高の動物記	桑原康彰	南雲堂	¥1800	四六判
N93-266	ピナトゥボ山と先住民族 アエタ	ラカス/編 越田清和/ 訳	明石書店	¥2200	四六判
N93-267	HIMALAYA	水越 武	講談社	¥15,00	0 A3変
N93-268	ヒマラヤを語る・カラコ ラム	今西錦司	講談社 *増補版	¥4900 今西錦	四六判司全集3
N93-269	氷原の彼方へ―ドキュメ ント南極探検隊―	永田秀樹	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N93-270	兵庫自然史ハイキング	地学団体研究会大阪支部 神戸班	創元社	¥1500	В6
N93-271	氷雪立山	石崎義高	シエナ出版	¥3500	265×295
N93-272	漂白の山民 木地屋の世 界	橋本鉄男	白水社	¥2300	В6

N93-273	比良山系の自然 総合ガ イド3	京都滋賀自然観察会	京都新聞社	¥1400	四六判
N93-274	ピレネー紀行	カミロ・ホセ・セラ/著 日比野和幸・野々山真 輝帆/監・訳	彩流社	¥2800	四六判
N93-275	琵琶湖周辺の山―うり坊 の足跡―	長宗清司	ナカニシヤ出版	¥2200	四六判
N93-276	ブータンに図書館をつく る	石田孝夫	明石書店	¥2300	A5
N93-277	福島安正―ユーラシヤ単 騎横断―	豊田 穣	講談社	¥1800	В6
N93-278	富士眩燿	白籏史朗	朝日新聞社	¥50003	310×310
N93-279	富士山の四季を撮る	紅陽会/編	講談社	¥1500	A5
N93-280	ブナ原生林―白神逍遙―	根深 誠	立風書房	¥2800	A5
N93-281	ブナ林からの贈りもの	熊谷 榧/文 石橋睦美 /写真	世界文化社	¥2000	A5
N93-282	分県登山ガイド―全45冊 一	山と溪谷社/編	山と溪谷社	¥1600	A5
N93-283	僕の単独行	原伸也	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N93-284	僕のマウンテンバイク旅 行術	九里德泰	山と溪谷社	¥1800	A5
N93-285	北陸・花の散歩道―北陸 再発見シリーズ―	北陸電力/企画	シー・エー・ピ	¥ 800	В5
N93-286	北海道キャンピングガイ ド'93	長野 晃/編	ギミック	¥1200	A5
N93-287	北海道キャンプ場ガイド ―93年版―	廣瀬 誠	亜璃西社	¥1800	四六判
N93-288	北海道夏山ガイド⑥—道 東・道北・増毛の山やま —	梅沢 俊・菅原靖彦・中 川 潤/著	北海道新聞社	¥2200	В6
N93-289	北海道の花―増補版―	鮫島惇一郎・辻井達一・ 梅沢 俊/著	北海道大学図書 刊行会	¥2678	四六判
N93-290	北海道百名山	梅沢 俊/写真 伊藤健 次/文	山と溪谷社	¥2500	B5変
N93-291	北海道ファミリー登山 *改訂版	菅原靖彦	北海タイムス社	¥2300	四六判
N93-292	北極を歩く	R. スワン/著 三方洋 子/訳	図書出版社	¥2987	四六判
N93-293	POBEDAから未踏無名峰 へ	日本教員登山隊・川崎市 教員登山隊	同隊	¥4000	B5
N93-294	ホーリー・ヒマラヤ	伊藤健司	恒友出版	¥2500	A5
N93-295	滅びゆく森の王者―ツキ ノワグマ	岐阜県立哺乳動物調査研 究会/編·著	岐阜新聞社	¥ 900	A5
N93-296	マウンテンワールド	ナショナル・ジオグラフィック協会/編 吉永 定雄/訳	同朋舎出版	¥9800	A4変
N93-297	マクリーンの川 "A river runs through it"	ノーマン・マクリーン/ 著 渡辺利雄/訳	集英社	¥1500	四六変
N93-298	幻の谷―祖谷―	木田哲夫	木田哲夫	2	20×330

		Adm also MV 1/	メナルナ山田へ	¥1800	В6
N93-299	幻のニホンオオカミ	柳内賢治	さきたま出版会	¥3600	220
N93-300	幻の花々とともに	上山智子	風媒社		
N93-301	水と原生林のはざまで	シュヴァイツェル/著 野村實/訳	岩波書店	¥ 410	文庫判
N93-302	水の旅	富山和子	文藝春秋社	¥ 450	文庫判
N93-303	みちのく名峰紀行	高橋裕司	無明舎	¥1500	
N93-304	南アルプスの花たち―北 岳とその周辺―	村松正文	山梨日々新聞社	¥1900	A5
N93-305	妙義山と周辺のドライビ ングスポット	あさを社/編	あさを社	¥1000	В6
N93-306	MERAREAK 遠きシシャ パンマ	長野県山岳協会30周年記 念シシャパンマ登山隊	同隊		В5
N93-307	もうひとつのヒムルンヒマール	北海道大学山の会/編	同会	非売品	В5
N93-308	森が消えれば海も死ぬ― 陸と海を結ぶ生態学―	松永勝彦	講談社	¥ 740	新書判
N93-309	森からの使者	J.マクフィー/著 竹内 和世/訳	東京書籍	¥2300	四六判
N93-310	森に学ぶ―エコロジーから自然保護へ―	四手井綱英	海鳴社	¥2060	四六判
N93-311	森のしずく	ミハイル・プリーンシ ヴィン/著 太田正一/ 訳	パピルス	¥3800	A5変
N93-312	森の珍獣ヤマネ―冬眠の 謎を探る―	中島福男	信濃毎日新聞社	¥1600	A5
N93-313	屋久島の山岳―近代スポーツ登山65年の歴史と 現代―	太田五雄	八重岳書房	¥3900	菊判
N93-314	屋久島 森・水・山	日下田紀三	八重岳書房	¥4300	A4変
N93-315	山歩き 始めました	鷹沢のり子	山と溪谷社	¥1400	四六判
N93-316	山ことば辞典―岩科山岳 語彙集成―	岩科小一郎/著 藤本一 美/編	百水社/刊 星 雲社/発売	¥1600	四六判
N93-317	山旅 四十周年記念誌	本荘山の会	本荘山の会		B5
N93-318	山と渓谷―新編―	田部重治/著 近藤信行 /編	岩波書店	¥ 570	文庫判
N93-319	山と里の信仰史	宮田 登	吉川弘文館	¥5850	A5
N93-320	山と自然の文化誌	三上和利	甲陽書房	¥1500	四六判
N93-321	山と法服	岡村治信	山と溪谷社	¥1600	B6
N93-322	山に暮らす―失われゆく 山の民俗学―	遠藤ケイ	岩波書店	¥2400	В5
N93-323	山の絵 教室	牧 潤一	日貿出版社	¥2266	B5
N93-324	山の絵本	尾崎喜八	岩波書店	¥ 620	文庫判
N93-325	山の尾根の風を分けるカンバの木―山紀行―	高橋敬一	随想舍	¥1854	四六判
N93-326	山の木と花	福森雅武	神無書房	¥3800	B5変
N93-327	山の高さ	鈴木弘道	日本測量協会	¥2300	В6
N93-328	山の花ずかん一夕張山地 一	梅沢 俊	北海道新聞社	¥2200	В6

N93-329	山の花への道	坂本健三/写真 坂本艶	坂本健三・艶子	¥8000 265×215
N93-330	1107 # 14467	子/文	D + 1 - 1	110000 PET
N93-331	山の花幽幻	白簇史朗	日本カメラ社	¥2200 B5変
N93-331	山の花繚乱	白簱史朗	日本カメラ社	¥2200 B5変
	山宿スケッチ帖	岡部一彦/画・文	白山書房	¥2000 A5
N93-333	山を想えば人恋し	石原きくよ	郷土出版社	¥1600 四六判
N93-334	山を考える (新版)	本多勝一	朝日新聞社	¥ 580 文庫判
N93-335	山をよむ	斎藤一男	アテネ書房	¥1500 四六判
N93-336	雪山邂逅	佐伯邦夫	桂書房	¥1200 B5横変
N93-337	四つの河 六つの山脈	ゴンボ・タシ/著 ペマ・ギャルボ/監 棚瀬慈郎/訳	山手書房新社	*写真集 ¥1500 四六判
N93-338	ロッククライミング	ケヴィン・ウォーカー/ 著 高橋恭子/訳	同朋舎出版	¥2000 A5変
N93-339	路傍	山田 学	光琳社出版	¥2800 210×210
N93-340	我が故郷の山々一若き日 の山行より一	小川忠邦	山路書房	非売品 A5
山岳図	書目録英語 19:	91年		
No.	書 名	著 者	発行所	発行地
E91-001	Adventure Guide to Mount Rainier: Hiking, Climbing & Skiing in Mt. Rainier Nat. Park	Smoot, Jeff	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E91-002	The Alpine 4000m Peaks, by the Classic Routes	Goedeke, R.	Hodder & Stoughton/ Diadem	London
E91-003	The Alps	Lee, Stephen	Batsford	London
E91-004	Antarctica: Both Heaven & Hell	Messner, Reinhold/Tr. by Neate, Jill	Mountaineers Crowwood Press	Seattle London
E91-005	At Home in the Himalayas	Noble, Christina	Collins	London
E91-006	The Basic Essentials of Hypothermia	Forgey, William W.	ICS Books	Merriville, Indiana
E91-007	Backpacker's Handbooks	Townsend, Chris	Oxford Illustrated Press	Somerset, UK
E91-008	The Best Hill Walking in Scotland	McNeish, Cameron	Lochar Publishing	London
E91-009	Bosgran and the North Coast	Hannigan, Des	Climber's Club	London
E91-010	Chamonix to Zermatt: The Walker's Haute Route	Reynolds, Kev	Cicerone Press	London
E91-011	Classic Rock Climbs in Southern England	Birkett, Bill	Oxford Illustrated Press	Somerset, UK

E91-012	Classic Walks in the Alps	Ed. by Reynolds, Kev	Oxford Illustrated Press	Somerset, UK
E91-013	Climber's Guide to Tahoe Rock	Carville, Mike	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E91-014	A Colour Atlas of Mountain Medicine	Vallotton, J. & Dubas, F.	Wolfe Publishing	
E91-015	Dauphine : Pathmaster Guides / 30 Circular Walks From Regional Centres	Bellos, Ilona & Marison, Hugh	Crowood Press	London
E91-016	The Early Climbs	Roberts, David	Mountaineers	Seattle
E91-017	Early Lithographed Books	Twyman, Micheal	Farrand Press & Private Lib- raries Associa- tion	
E91-018	Eiger Dreams: Venture among Men and Mountains	Krakauer, Jon	Lyons & Burford	
E91-019	The Endless Knot-K2, Mountain of Dreams and Destiny	Diemberger, Kurt/Tr. by Salkeld, Audrey	Grafton Books	London
E91-020	Everest Reconnaissance	Howard-Bury, Charles & Mallory, George L./Ed. by Keaney, Marian	Hodder & Stoughton	London
E91-021	Eyes to the Hills: The Mountain Landscape of Britain	Stainforth, Gordon	Constable	London
E91-022	Face Climbing: How to Rock Climb	Long, John	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E91-023	The First Ascent of Mount Kenya	McKinder, Halford J./Ed. by Baubour, K. Michael	Hurst	London
E91-024	Flammes de Pierre	Sauvy, Anne	Diadem Books	London
E91-025	Francis Younghusband and the Great Game	Verrier, Anthony	Jonathan Cape	London
E91-026	Free Spirit: A Climber's Life	Messner, Reinhold/Tr. by Neate, Jill	Hodder & Stoughton Mountaineers	London Seattle
E91-027	Froggatt, Peak Rock Climbs/5th, Series, Vol. 3, Eastern Gritstone	Vol. compiler Sharples, Keith	BMC	
E91-028	Geodesy, Geophysics and Geology of the Upper Shaksgam Valley (North- East Karakoram) and South Sinkiang	Desio, Ardito, et al.	Consiglio Nazionale delle Richerche	Milano
E91-029	Gower & South - East Wales	Ed. by Richardson, Alun	South Wales Mountaineering Club	

E91-030	Green Cognac : The Education of a Mountain Fighter	Putnam, William Lowell	The AAC Press	New York
E91-031	A Guide to the Birds of Nepal (2nd ed)	Inskipp, Carol & Tim	Christopher Helm/A & C Black	
E91-032	The Handbook of Alpine Climbing	Barry, John	Crowood Press	London
E91-033	The Himalayan Ecology and Environment	Himalayan Environmental Trust	H.E.T.	
E91-034	Himalayan Flowers	Mehta, Ashwin/text by Bole, P. V.	Mapin Publishing	Ahemdabad
E91-035	Himalayan Passage	Schmidt, Jereny	Mountaineers	Seattle
E91-036	Himalayan Rivers, Lakes & Glaciers	Negi, S. S.	Indus Publishing	New Delhi
E91-037	The Illustrated Encyclo- paedia of Walking & Backpacking	Westacott, Hugh	Oxford Illustrated Press	Somorset, UK
E91-038	Island at the Edge of the World: A South Geor- gian Odyssey	Venables, Stephen	Hodder & Soughton	London
E91-039	Knaur : A Restricted Land in the Himalaya	Bajpai, S. C.	Indus Publishing	New Delhi
E91-040	Last Days	Roskelley, John	Stackpole Books	Harrisburg, Pennsylvania
E91-041	A Lifelong Love Affair with the Mountains	Filsinger, John	A. G. Hallidin Publishing	Indiana, Pennsylvania
E91-042	Limestone : 100 Best Limestone Climbs in Brit- ain	Craggs, Chris	Cicerone Press	London
E91-043	Long Distance Walks in the Pyrenees	Townsend, Chris	Crowood Press	London
E91-044	Long Distance Walks in Scotland	Stewart, Arthur	Crowood Press	London
E91-045	L R Wager: A Life 1904- 1965	Compiled by Hargreaves, J.	Priv. Printed	
E91-046	Mer de Glace	Fell, Alison	Methuen	London
E91-047	The Merry-Go-Round of My Life: An Adventur- er's Diary	Hachtel, Richard	Vantage Press	New York
E91-048	Modern Alpine Climbing : Equipment & Techniques	Schubert, P./Tr. by Steele, G. & Vapenikova, M.	Cicerone Press	London
E91-049	Mount Everest National Park	Jefferies, Margaret	Mountaineers	Seattle
E91-050	Mount McKinley : The Conquest of Denali	Washburn, Bradford & Roberts, David	Harry N. Abrams, Inc.	New York

E91-051	Mountaineering and Mountain Club Serials: A Guide to English Lan- guage Titles	Seiser, Vergia & Lockerby, Robert	Scarecrow Press/Shelwing	London
E91-052	Mountain Goddess: Gen- der and Politics in a Himalayan Pilgrimage	Sax, William	Oxford Univ. Press	New York
E91-053	Mountains: An Anthology	Kenny, Anthony	John Murrey	London
E91-054	Mountain World in Dan- ger: Climate Change in the Forests and Moun- tains of Europe	Nilsson, Sten & Pitt, David	Earthscan Publication	
E91-055	The Munro Almanac	McNeish, Cameron	Lochar Publishing	London
E91-056	Operation Everest II. 1985	Houston, C. S., Cymerman, A. & Sutton, J.R.	US Army Res. Inst. of Environmental Medicine	Narick, Massachusetts
E91-057	Outcrops	Gifford, Terry	Littlewood	
E91-058	Power of Climbing: In- terviews Photography	Jones, David B. A.	Vision Poster	
E91-059	Peaks and Passes of the Garhwal Himalaya	Babicz, Jan	Alpinistyczny Klub Eksploracyjny	ul Armii Krajowej, 12, Poland
E91-060	Peak & Pennie Country	Poucher, W. A.	Constable	London
E91-061	People in High Places: Approach to Tibet	Salkeld, Audrey	Jonathan Cape	London
E91-062	Quest for Adventure $\langle pb.$ repr \rangle	Bonington, Chris	Hodder & Stoughton	London
E91-063	The Rock Climbing Guide to Europe	Jones, David	Crowood Press	London
E91-064	Running High: The First Continuous Traverse of the 303 Mountains of Britain and Ireland	Symonds, Hugh	Lochar Publishing	London
E91-065	Scottish Hill and Moun- tain Names	Drummond, Peter	Scottish Moun- taineering Trust	Edinburgh
E91-066	Second Ascent : The Story of High Herr	Osius, Alison	Stackpole Books	Harrisburg, Pennsylvania
E91-067	Selected Alpine Climbs in the Canadian Rockies	Dougherty, Sean	Rocky Mountain Books	Calgary, Alberta
E91-068	Shawangung Rock Climbs Vol.1: The Traps	Williams, Dick	Amer. Alpine Club Press	New York
E91-069	Shawangung Rock Climbs Vol.2: The Near Traps	Williams, Dick	Amer. Alpine Club Press	New York
E91-070	Shawangung Rock Climbs Vol.3: Sky Top	Williams, Dick	Amer. Alpine Club Press	New York

E91-071	Sherpas : The Brave Mountaineers	Ed. by Shastry, Padma	Himalayan Mountaineering Institute	Darjieeling
E91-072	Ski Touring in Scotland	Oakley, Angela	Cicerone Press	London
E91-073	Ski Safe: A Safety Manu- al for All Ski Sports	Scottish Nat. Ski Council	Cordee	London
E91-074	The Southern Highlands	Bennet, D. J.	Scottish Mountaineering Trust	Edinburgh
E91-075	South West Climbs: Rock Climbs from Corn- wall, Devon, Somerset, Dorset & Jersey	Littlejohn, Pat	Diadem Books	London
E91-076	Stubai : Passmaster Guides/30 Circular Walks from Regional Centre	White, John	Crowood Press	London
E91-077	Surviving Denali : A Study of Accidents on Mount McKinley 1903- 1990 (2nd. ed. Revised)	Waterman, Jonathan	Amer. Alpine Club Press	New York
E91-078	Suspended Sentences from the Life of a Climb- ing Cameraman	Curran, Jim	Hodder & Stoughton	London
E91-079	A Talent for Adventure	Croft, Andrew	The SPA Ltd/Andrew Croft	
E91-080	Towards the Unknown Mountains	Wood, Bob	Ptarmigan Press	
E91-081	Trekking in the Indian Himalaya	Weare, Garry	Lonely Planet	
E91-082	Trekking in Nepal (6th. ed.)	Bezruchka, Stephen	Mountaineers	Seattle
E91-083	Trekking in Tibet : A Traveller's Guide	McCue, Gary	Cordee	London
E91-084	Trekking Mount Everest	Uchida, Ryohei	Chronicle Books	San Francisco
E91-085	The Turquoise Mountain : Brian Blessed on Everest	Blessed, Brian	Bloomsbury	
E91-086	View from the Ridge	Brown, Dave & Michell, Ian	Ernest Press	London
E91-087	Walking in the Dolomites	Price, Gillian	Cicerone Press	London
E91-088	Walking the Summits of Somerset & Avon : A Newly Charted Walk from Minehead to Chep- stow	Brown, Hamish	Patrick Stephens	
E91-089	War in High Himalaya: The Indian Army in Crisis, 1962	Major General Palit, D. K.	Lancer International	New Delhi
E91-090	Winter Climbs : Ben Nevis & Glencoe	Kimber, Alan	Cicerone Press	London

E91-091	The Worst Weather on Earth: A History of the Mount Washington Ob- servatory	Putnam, William L.	Mt. Washington Observatory/ Amer. Alp. Club	
E91-092	The World of Lake Louise : A Guide for Hikers	Beers, Don	Highline Publishing	
E91-093	Yorkshire and the Peak District : 100 Classic Climbs, Limestone	Jackson, Chris	Crowood Press London	

山岳図書目録——英語 1992年

四五四	音日	9924		
No.	書 名	著 者	発行所	発行地
E92-001	Alaska's Brooks Range	Kauffmann, John M.	Mountaineers	Seattle
E92-002	Antarctica: An Introduc- tory Guide	Galimberti, Diana	Zagier & Urruty	
E92-003	As I Saw It From Shanti Nivas	Gibson, Jack	By Author	Ajmer
E92-004	The Ascent	Long, Jeff	Willim Morrow	New York
E92-005	The Bernese Alps, Switzerland: A Walking Guide	Reynolds, Kev	Cicerone Press	London
E92-006	Best of Boulder Climbs	Rossiter, Richard	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E92-007	Buttermere & Eastern Crags	Graham, R., David, A. & Price, T.	Fell & Rock Climbing Club	London
E92-008	The Call of Everest: The First Ascent by an Indian Woman	Khular, Brig. D. K.	Vision Books	New Delhi
E92-009	Classic Climbs in the Caucasus: 80 Selected Climbs in the Elbruz and Bezingi Regions of the Svenatian Range	Bender, Friedrich / Tr. by Neate, Jill	Diadem Books Menasha Ridge Press	London Birmingham, Alabama
E92-010	The Climbers: A History of Mountaineering	Bonington, Chris	BBC Books/ Hodder & Stoughton	London
E92-011	Climbers Guide to Smith Rock	Watts, Alan	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E92-012	Climbing Adventures: A Climber's Passion	Bridwell, Jim	ICS Books	Merriville, Indiana
E92-013	The Climbing Guide to Scotland	Prentice, Tom	Crowood Press	London
E92-014	The Columbia Mountains of Canada-Central	Fox, J. K., Laurilla, R. W., Putnam, W. L. & Whipple, E. R.	Amer. Alpine Club Press	New York
E92-015	The Columbia Mountains of Canada - West and South	Whipple, E. R., Laurilla, R. W. & Putnam, W. L.	Amer. Alpine Club Press	New York
E92-016	Crossing Antarctica	Sateger, W. & Bowermaster, Jon	Alfred A. Knoph	New York

E92-017	The Crystal Desert : Summers in Antarctica	Cambell, David G.	Houghton Mifflin	Boston
E92-018	The Darkness Beckons: The History and Development of Cave Diving	Farr, Martyn	Diadem Books	London
E92-019	Eastern Alps: The Classic Routes on the Highest Peaks	Seibert, Dieter	Diadem Books	London
E92-020	Encycopaedia of Mountaineering	Unsworth, Walt	Hodber & Stoughton	London
E92-021	Escape to the Dales: 45 Walks in and around the Yorkshire Dales	Allen, Bob	Micheal Joseph	London
E92-022	Everest : From Sea to Summit	Macartney-Snape, Tim	Australian Geographic Pty	Terry Hills
E92-023	Flammes de Pierre	Sauvy, Anne	Diadem Books Trafalger Square	London North Pomfret, Vermont
E92-024	From the Pennines to the Highlands: A Walking Route through the Scot- tish Borders	Brown, Hamish	Lochar Publishing	London
E92-025	Ganga Descends	Bond, Ruskin	The English Book Depot	Dehra Dun
E92-026	Glen Coe: Rock and Ice Climb, including Glen Etive & Ardgour	Crocket, K. V., Anderson, R. & Cuthburtson, D./Ed. by Everett, R. D.	S. M. C.	
E92-027	The Ground Controversy	Bonney, Orrin & Lorrain	Amer, Alpine Club Press	New York
E92-028	High Altitude Medicine	Ed. by Ueda, G., Reeves, J. T. & Sekiguchi, M.	Shinshu Univ. Press	Japan
E92-029	The High Sierra: Peaks, Passes & Trails	Scor, R. J.	Mountaineers	Seattle
E92-030	The High Sierra: Peaks, Passes & Trails	Scor, R. J.	Cordee	London
E92-031	Himalayan Climber : A Lifetime's Quest to the World Greater Ranges	Scott, Doug	Diadem Books	London
E92-032	Himalayan Climber : A Lifetime's Quest to the World Greater Ranges	Scott, Doug	Sierra Club Books	San Francisco
E92-033	Hitler's Mountain Troop	Lucas, James	Arms & Armour Press	London
E92-034	Hypoxia and Mountain Medicine	Sutton, J. R., Coates, G. & Houston, C. S.	Queen City Printers Inc.	Burlington, Vermont
E92-035	In Monte Viso's Horizon : Climbing All the Alpine 4000m Peaks	McLewin, Will	Ernest Press	London

E92-036	The International Sympo- sium on Conservation of Mountain Environment	HAT-J	HAT-J	Japan
E92-037	John Muir : The Eight Wilderness Discovery Books	Muir, John	Mountaineers Diadem Books	Seattle London
E92-038	K-2: The 1939 Tragety	Kuffman, A. J. & Putnam, W. L.	Diadem Books Mountaineers	London Seattle
E92-039	Ladakh Through the Ages	Kaul, Shridhar & Kaul, H. N.	Indus Publishing Co.	New Delhi
E92-040	Lahaul-Spiti: A Forbid- den Land in the Hima- layas	Bajpai,B.C.	Indus Publishing Co.	New Delhi
E92-041	Last Days	Roskelley, John	Hodder & Stoughton	London
E92-042	Leading Out : Women Climbers Reaching for the Top	Ed. by DaSilva, Rachel	Seal Press	
E92-043	Lost Lhasa : Heinrich Harrer's Tibet	Harrer, Heinrich	Adams	New York
E92-044	Master of Rock: A Light- hearted Walk of John Gill	Ament, Pat	Adventure's M. P.	
E92-045	Medicine for Moun- taineering	Ed. by Wilkerson, James A.	Mountaineers	Seattle
E92-046	Mountaineering : The Freedom of the Hills	Ed. by Graydon, Don	Mountaineers	Seattle
E92-047	Mount Elbruz Region : Guide and Maps	Collomb & Wielochowski	West Col	
E92-048	A Munroist's Log	Butterfield, Irvne & Baines, Jack	Ernest Press	London
E92-049	My Vertical World: Climbing the 8000m Peaks (English Edition)	Kukuczka, Jerzy	Hodder & Stoughton Mountaineers	London Seattle
E92-050	Never Judge a Man by his Umbrella	Elliott, Nicholas	Micheal Russel ⟨Repr.⟩	
E92-051	North of England Rock Climbs	Stewart, Wilson	Cordee	London
E92-052	The Quiet Land: The Diaries of Frank Debenham, Member of the British Antarctic Expedition, 1910-1913	Ed.by Back, Debenham June	Blunstisham Books & Erskine Press	Hundingdon
E92-053	Rock Climbs of Tuolumne Meadows (3rd.Ed.)	Reid, Don & Falkenstein, Chris	Chockstone Press	Evergreen. Colorado
E92-054	Scrambles in the Cana- dian Rockies	Kane, Alan	Rocky Mountain Books	Calgary, Alberta
E92-055	Sea, Ice-and-Rock: Sail- ing and Climbing Above the Arctic Circle	Bonington, Chris & Knox-Johnston, Robin	Hodder & Stoughton	London
E92-056	Seven Sacred Rivers	Aitken, Bill	Penguin Books	New Delhi

E92-057	The Southern Uplands	Andrew, K. M.	Scottish	Edinburgh
			Mountaineering Trust	
E92-058	Sprit of the Ages ⟨by Pat Ament⟩	Robbins, Royal	Adventure's M. P.	
E92-059	The State of the World's Mountains: A Global Re- port	Ed. by Stone, Peter B.	Zed Books	London & New Jersey
E92-060	Summit Guide to the Cas- cade Volcanos	Smoot, Jeff	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E92-061	Summits for All: 100 Easy Mountains for Walkers (The French Alps)	Prevost, Edouard / Tr. by Neate, Jill	Cordee	London
E92-062	To the Top of the World : Alpine Challenges in the Himalaya and Karakoram	Messner, Reinhold / Tr. by Neate, Jill	Crowood Press Mountaineers	London Seattle
E92-063	Turner in the Alps: The Journey through France and Switzerland in 1802	David, Hill	Geoge Philip	
E92-064	Tyrants and Mountains: A Reckless Life	Hills, Denis	John Murray	London
E92-065	Wainwright in the Val- leys of Lakeland	Wainwright, A. / Photos by Bradds, Derry	Michael Joseph	London
E92-066	Wainwright's Favourite Lakeland Mountains	Wainwright, A. / Photos by Brabbs, Derry	Michael Joseph	London
E92-067	Walking Britain's Skyline : 45 Classic Routes	Greenbank, Tony	Crowood Press	London
E92-068	Walking in Ticino, Switzerland	Reynolds, Kev	Cicerone Press	London
E92-069	The Water People	Simpson, Joe	Jonathan Cape	London
E92-070	Yankee Rock and Ice	Waterman, Laura & Guy	Stackpole Books	Harrisburg, Pennsylvania
E92-071	Zen in the Art of Climbing Mountains	Shulman, Nevile	Element Shaftesbury	Dorset
山岳図	書目録――ドイツ語	1991年		
No.	書 名	著 者	発行所	発行地
G91-001	Eine Agrargeschichte der inneren Alpen— Graubünden, Tessin, Wallis 1500-1800	Jon Mathieu	Chronos- Verlag,	Zürich
G91-002	Alaska 〈Abenteuer am Polarkreis〉	Udo Bernhart	Verlag J. Berg (Reihe ⟨Berge der Welt⟩),	München
G91-003	Die Alpen (Eine Welt in Menschenhand)	Universität Bern	Geographischen Institut EDMZ	Bern
G91-004	Die Alpen im Europa der neunziger Jahre	Werner Bätzing/Paul Mes- serli	Geographisches Institut,	Bern
G91-005	Die Alpenvereinshütten	D. A. V.	Rother Verlag,	München

G91-006	Auf der Grenz um den Kanton Bern	SAC-Subsektion Huttwil	Paul Seiler, Weierhausstr.9	Huttwil
G91-007	Berg '91 〈Alpenvereinsjahrbuch〉	D. Ö. A. V. u. Alpenverein Südtirol	D. Ö. A. V. u. Alpenverein Südtirol	München, Innsbruck, Bozen
G91-008	$ \begin{array}{lll} Bergamasker & Alpen \\ \langle Gebietsführer & für \\ Wanderer & und \\ Bergsteiger \rangle \end{array} $	Helmut Dumler	Bergverlag Rudolf Rother,	München
G91-009	Bergamasker Alpen ⟨Tourenführer⟩	Maria Oberndörfer	Verlag J. Berg,	München
G91-010	Bergsteigen (Verlockung des Ungewissen)	Robert Bösch	Stūrtz Verlag,	Würzburg
G91-011	Bergstreiflichter	Christoph Streit und Mar- kus Streit	Wider Verlagsgeno- ssenschaft,	Bern
G91-012	Claridenfirn-Messungen 1914~1984	Hans Müller, Giovanni Kappenberger	Verl. Fachvereine,	ETH Zürich
G91-013	Clubführer Berner Alpen 1 (Sanetsch bis Gemmi)	Daniel Anker u. s. w.	SAC-Verlag.	Chur
G91-014	Flora des Kantons Bern	Konrad Lauber ; Gerhart Wagner	Verlag Paul Haupt,	Bern
G91-015	Gipfel und Geheimnisse ⟨Nur die Geister der Luft wissen, was mir begegnet⟩	Kurt Diemberger	Bruckmann Verlag,	München
G91-016	Kletterführer Alpstein	Philippe Hostettler	SAC-Verlag	Bern
G91-017	Mont-Blanc-Gruppe 〈Gebietsführer für Wanderer, Bergsteiger und Kletterer〉	Hartmut Eberlein	Bergverlag Rother,	München
G91-018	Neue Hüttenziele (50 leichte Tagestouren)	Ernst Höhne	Verlag J. Berg.	München
G91-019	Neue Lawinenkunde (Ein Leitfaden für die Praxis)	Werner Munter	SAC-Verlag,	Chur
G91-020	Neuland (Gewagte Schritte im Alpinismus)	Stefan König ; Jürgen Wink- ler	Verlag J. Berg,	München
G91-021	Ortleralpen 〈Alpenvereinsführer〉	Rudolf Weiss	Bergverlag Rudolf Rother,	München
G91-022	Ringbuch (Wandern Mont Blanc)	Alain Adrian	Elster Verlag,	Lizenz
G91-023	Die schönsten Skitouren in den Westalpen (Schweiz, Frankreich, Italien)	Bernd Ritschel	Bruckmann Verlag,	München
G91-024	$\begin{array}{ccc} \text{Schritte} & \text{in} & \text{Tibet} \\ \langle \text{Trekking zum Orakelsee} \rangle \end{array}$	Henrik Rhyn	Hans Erpf,	Bern
G91-025	Silvretta und Samnaun	Dieter Seibert	Rosenheimer Verlagshaus.	Rosenheim

G91-026	Skitouren Schweiz ⟨Graubûnden, Ostschweiz⟩	Daniel Anker ; Rudolf Weiss	Steiger Verlag,	Innsbruck
G91-027	Der Sternenhimmel 1992	Ernst Hügli ; Hans Roth	Verlag Salle+ Sauerländer	Aarau
G91-028	Sternstunden des Alpinismus	Stefan König	Bruckmann,	München
G91-029	Törbel—Schatztruhe im Wallis	Lieselotte Kuertz, Foto Lamby News	Lamby News,	Brig
G91-030	Toskana-Rhapsodie 〈Der Marmor und seine Menschen〉	Albrecht Leopold Kunz	Edition Stemmle,	Schaffhausen
G91-031	Traumpässe (Auf alten Saumpfaden von In- nsbruck nach Chamonix)	Ronald Gohl ; Franz Auf der Maur	Verlag J. Berg,	München
G91-032	Verdon (Der grosse Canyon)	Philippe Royer	Rosenheimer Verlag,	Rosenheim
G91-033	Wanderungen in Ligurien	Martin Locher ; Holger Wolandt	Bruckmann Verlag,	München
G91-034	Weg der Schweiz	Balz Theus, Mürra Zabel, Emil Amacher	Werd Verlag,	Zürich
G91-035	Weitwanderwege zwi- schen Montblanc und Monte Viso	Henning Böhme	Bruckmann Verlag,	München
G91-036	Westalpen Skitouren- führer	Reinhard Klappert	Verlag J. Berg.	München
G91-037	Zum Wasserhaushalt im Einzugsgebiet der Rhône bis Gletsch	André Bernath	Verl. Fachvereine,	ETH Zürich
G91-038	Zürcher Hausberge	Michael Pause; Ulrich Tubbesing	BLV-Verlalg,	München
山岳図:	書目録――ドイツ語	1992年		
No.	書 名	著者	発行所	発行地
G92-001	Abschied vom Himalaya ⟨Erfolg und Tragik am K2 und am Broad Peak⟩	Karl M. Herrligkofer	Bruckmann,	München
G92-002	Alois Carigiet	Hansjakob Diggelmann ; Therese Bhattacharya-Stettler ; Hans ten Dornkaat	AS Buchkonzept,	Zürich
G92-003	Aufbruch in die Einsam- keit (5000 Jahre Über- leben in den Alpen)	Hans Haid	Rosenheimer Verlagshaus.	Rosenheim
G92-004	Aus dem Leben eines Hüttenwarts	Hans Philipp	Emil Sutter,	Grindelwald
G92-005	Berg '92 〈Alpenvereins jahrbuch〉	D. Ö. A. V. u. Alpenverein Südtirol	D. Ö. A. V. u. Alpenverein Südtirol	München, Innsbruck, Bozen

G92-006	Bergheimat (Jahresschrift des Liechtensteiner			Vaduz
	Alpenvereins			
G92-007	Charakterberge der Schweiz (23 Bergregionen von A-Z)		Ringier Buchverlag	Zürich
G92-008	Clubführer Glarner Alpen	Werner Luchsinger	SAC-Verlag,	Bern
G92-009	Clubführer Tessiner Alpen $\langle 1 \text{ u. } 2 \rangle$	Giuseppe Brenna	SAC-Verlag,	Bern
G92-010	Clubführer Urner Alpen Ost	Toni Fullin	SAC-Verlag,	Bern
G92-011	Geologie der Schweiz	Toni P. Labhart	Ott Verlag,	Thun
G92-012	Die Geschichte des Was- serbaus in der Schweiz	Niklaus Schnitter	Olynthus Verlag,	Oberbözberg
G92-013	Die Gletscher Graubündens (Physische Geographie, Vol 33, 1992)	Max Maisch	Geographisches Institut der Univ. Zürich	Zürich,
G92-014	Gratwanderungen ⟨Notizen über Berg- steigen und Alpenverein⟩	Fritz März	Rosenheimer Verlagshaus,	Rosenheim
G92-015	Hüttenführer Südtirol	Hans Kammerer	Verlag J. Berg,	München
G92-016	Kletterführer Bockmattli, Brügglerkette, Amden	Thomas Götz ; Michael Wyser	SAC-Verlag,	Bern
G92-017	Klettern im Schweizer Granit (全2巻)	Swen Holst; Barbara Herrmann	Panico Alpinverlag,	Köngen
G92-018	Der Mann im Eis	Universität Innsbruck,		Innsbruck
G92-019	Niesen und Stockhorn 〈Bergbesteigungen im 16. Jahrhundert〉	Max A Bratschi (Hrsg.) 2wei, Lateintexte von Ber- ner Humanisten	Ott Verlag,	Thun
G92-020	Norwegen	Bernhard Pollmann ; Tho- mas Keuchel	Verlag J. Berg,	München
G92-021	La Palma Wanderführer	Peter Grimm	Verlag J. Berg,	München
G92-022	Rund um Südtirol	Reinhold Messner	Piper,	München
G92-023	Schweiz plaisir 〈Die schönsten Kletterein〉	Jürg von Känel	Filidor-Verlag.	Reichenbach
G92-024	Ski Express	Peter Keil	Verlag J. Berg,	München
G92-025	Der Sternenhimmel 1993	Hügli/Roth/Städeli	Verlag Sauerländer,	Aarau
G92-026	Trekking	Bruno Baumann ; Toni Siller	Bruckmann Verlag,	München
G92-027	Verkehrswege im alten Rätien (Bd.4)	Armon Planta	Bündner Monatsblatt,	Chur
G92-028	40 lohnende Bergtouren in der Schweiz	Franz Auf der Maur (Hrsg.)	Werd Verlag,	Zürich
G92-029	Wanderungen in der Provence	Joëlle Kirch	Verlag J. Berg,	München

G92-030	Wanderungen in der Provence	Maria und Bernd Riffler	Bruckmann Verlag,	München
G92-031	Der Weg (Vom Monte Rosa zum Mittelmeer)	Eberhard Neubronner	Verlag J. Berg,	München
G92-032	Wirbelsäulenbeschwerden (Bd.1)	Willy Zink	Verlag Wolfgang Kastner,	Altenholz
G92-033	Wurzeln und Visionen	Christian Küchli ; Jeanne Chevalier	AT Verlag,	Aarau-Stuttgart
G92-034	Zermatt	Beat P. Truffer	Aroleit-Verlag.	Zermatt
G92-035	Der Zeuge aus dem Glet- scher 〈Das Rätsel der frühen Alpen-Europäer〉	Lawrence Barfield ; Ebba Koller ; Andreas Lippert	Überreuter Verlag,	Wien
G92-036	Zillertaler Alpen 〈Berge, Täler, Touren Geschichten.〉	Harald und Birgit Antes	Rosenheimer Verlag,	Rosenheim
山岳図:	書目録――フランス語	1991年		
No.	書 名	著 者	発行所	発行地
F91-001	Ablon	Robert Durieux	Éd. H. D. S. B.,	Annecy
F91-002	L'Antarctique-Ciel et En- fer	Reinhold Messner	Éd. Arthaud,	Paris
F91-003	Au coeur du Verdon, Le Grand Canyon	Philippe Royer	Éd. Didier et Richard,	Grenoble
F91-004	L'Aventure jusqu'au bout	Françoise Boivin, Jean-Marc Porte	Éd. Recto/ Verso.	Meylan
F91-005	Blachon sport,	Tome Ⅲ	Éd. Robert Laffont.	Paris
F91-006	Bularung Sar Première ascension	C. Milz, T. Bionda, H. Hügli, JJ. Sauvain, A. Vaucher	Éd. Club alpin suisse, section neuchâteloise	
F91-007	Buoux 1991		Éd. Pierre Duret, Bruno Fara. Serge Jaulin,	Cavaillon
F91-008	Caroux escalades	le CAF Béziers-Caroux	Éd. CAF,	Béziers
F91-009	Les cascades de glace de l'Argentierois et du Briançonnais	Robert Balestra. Préface de F. Damilano, G. Perroux	Éd. Robert Balestra.	Briançon
F91-010	125 ans pour la Montagne 1866-1991		Éd. CAI sezione d'Aosta et Regione autonoma valle d'Aosta,	Aoste
F91-011	Chamonix 24, Grenoble 68, Albertville 92, Le Roman des Jeux	Claude Francillon	Éd. Glénat,	Grenoble
F91-012	Christine Janin Première Française à l'Everest	Christine Janin, Hélène Armand	Éd. Donoël,	Paris

F91-013	Les contes de Ricou	Pierre Charmoz, Anne-Françoise Couloumy (illustrations)	Éd. Le Polygraphe,	Angers
F91-014	Contes populaires du Dauphiné, Tome I	Charles Joisten	Éd. Glénat	
F91-015	Contes nouveaux des Pyrénées	Michel-Aimé Baudouy	Éd. Milan,	Toulouse
F91-016	Contes traditionnels des Pyrénées	Michel Cosem	Éd. Milan,	Toulouse
F91-017	Contribution au Traite- ment lexicographique des vocabulaires specialisés	Christiane Tetet	Université de Franche-Comté (Th se de doctorat)	
F91-018	Crash au Mont Blanc Les fanto mes du (Malabar Princess)	Françoise Rey	Éd. Glénat,	Grenoble
F91-019	La Dame du Puits	Samivel	Ed. (l'Age d'Homme),	Lausanne
F91-020	L'Épopée du ski aux Pyrénées	Marcellin Bérot	Éd. Randonnées pyrénéennes	Tarbes
F91-021	Escalade dans la vallée du Giffre		Éd. Promo- Grimpe,	Samoëns
F91-022	L'Escalade en France 1989-1990	Philippe Bourdeau	Éd. La documentation française	Paris
F91-023	Escalade passion	Jean Kouchner, photos de Olivier Grünewald	Éd. Atlas,	Paris
F91-024	Escalade, actes du colloque, ENSA, Chamonix 1989		Éd. Actio.	Joinville-le -Pont
F91-025	L'Everest	F. Pédron, C. Petit-Castelli, JM. Asselin	Éd. Albin Michel, coll. ⟨Extrême⟩,	Paris
F91-026	Everest L'Impossible exploit	Christine de Colombel	Éd. Denoël,	Paris
F91-027	Les falaises de Beauvoir		Éd. Association pour le développement de l'alpinisme et des sports de montagne,	Poitiers
F91-028	Falaise de l'Hortus (escalades en Pays d'Oc)		Éd. Patrick Pages,	Montpellier
F91-029	Les Flammes de Pierre	Louis Espinassous, Hélène Sorbé	Éd. Jean-Marc de Faucompret,	Lons
F91-030	G. R. 51 Provence et Côte d'Azur	Balcons de la Méditerrannée	Éd. F. F. R. P.,	Paris
F91-031	Gaston Fébus Prince des Pyrénées	Pierre Tucoo-Chala	Éd. Deucalion,	Pau

F91-032	Glace, Couloirs et Cas- cades	Bruno Gardent, Pascal Tournaire	Éd. Glénat.	Grenoble
F91-033	La Grande flore illustrée des Pyrénées	Marcel Saule. Préface de Claude Dendaletche. Aquarelles d'Hélène Saule-Sorbé	Coédition Randonnées Pyrénées- Editions	Milan
F91-034	Grenoble Pays, Paysans, Paysages	S. Bonnefoy, A. Bosso, JC. Duclos, M. Léonardon	Éd. Musée Dauphinois- Glénat,	Grenoble
F91-035	Grimper au Verdon	B. Gorglon, D. Taupin, JF. Lignon	Éd. F. F. M. E., Lei Lagramusas,	Le Palud- sur-Verdon
F91-036	Guides de Haute Montagne. Territoire et Identité	Philippe Bourdeau	Revue de géographie alpine, numéro hors série,	Grenoble
F91-037	Guide de l'Aventure tout pour partir aux Quatre Coins du Monde	Guilde européenne du raid	Éd. Albin Michel,	Paris
F91-038	Guide plein air du Quebec	Royal Dupuis	Éd. Trafic communication inc. Diffusion Chiron,	Montréal
F91-039	Le guide de la Tarentaise	Marius Hudry	Éd. La Manufacture,	Besançon
F91-040	Guide de l'escalade en Belgique	P. Dumoulin, R. Grebeude	Éd. Union belge de spéléologie, société de spéléologie de Wallonie,	Liège
F91-041	Le Haut-Atlas	André Fougerolles	Éd. Glénat,	Grenoble
F91-042	Haute Randonnée alpine du Lac Léman à la Méditerranée en 50 étapes	Club alpin français	Éd. Edisud,	Aix-en- Provence
F91-043	Haute Randonnée Pyré- néenne	Georges Véron	Éd. RandonnLes pyrénéennes,	Tarbes
F91-044	Hautes altitudes voyage dans l'oxygene rare	Pierre Beghin	Éd. Didier et Richard,	Grenoble
F91-045	Homo Turisticus-du Tourisme ordinaire en Montagne	Revue de géographie alpine, $\ensuremath{n^{\circ}4}$		
F91-046	Images du Briançonnais (1750-1950)	Robert Merle	Éd. Edisud,	Aix-en- Provence
F91-047	Inde du Nord	Yves Beigbeder	Éd. Arthaud,	Paris
	Ande du livia			
F91-048		Jean-Pierre Verdier	Éd. Amphora,	Paris

F91-050	La Jonte		Éd. Section Causses et Cévennes du C. A. F.,	Millau
F91-051	Memoires d'aventures de Roger Frison-Roche	Maurice Dessemond, photos de Georges et Pierre Tair- raz	Éd. A. G. E. P.,	Paris
F91-052	Les métiers de la Mon- tagne	Bruno Fleury, Marcel Peres	Éd. Glénat,	Grenoble
F91-053	Mexique. Guatemala	Jean-Pierre Courau	Éd. Arthaud,	Paris
F91-054	Les Milieux Naturels du Globe	Jean Demangeot	Éd. Masson,	Paris
F91-055	Le Mont Blanc	Frison-Roche	Éd. Flammarion,	Paris
F91-056	Le Mont Blanc 2	Michel Piola	Éd. Glénat.	Grenoble
F91-057	Les Montagnes au Siècle des Lumières	Numa Broc	Éd. du ComitOdes travaux historiques et scientifiques.	Paris
F91-058	Montagnes de Verre	Dino Buzzati	Éd. Denoël,	Paris
F91-059	Les Mots de la Montagne autour du Mont Blanc	Hubert Bessat, Claudette Germi/ELLUG,	Éd. litteraires et linguistiques de l'université de Grenoble université Stendhal,	Grenoble
F91-060	Namatse Sab	Henri Sigayret	Éd. de Belledonne, collec. 〈Les Cahiers de la montagne〉,	Grenoble
F91-061	Névé Bleu Regard	Emmanuel Lepage et Dieter	Éd. Glénat,	Grenoble
F91-062	Nouveaux itinéraires	Musée de l'Élysée	Musée de l'Élysée	Lausanne
F91-063	L'Oisans nouveau est arrivé		Éd. Jean- Michel Cambon,	Saint-Martin- d'Hères
F91-064	Orpierre Topo d'escalade		Éd. Commune d'Orpierre,	Orpierre
F91-065	Parapente plus	Gérard Delorm	Éd. G. Delorme,	Chambéry
F91-066	Parcs nationaux des Pyrénées		Éd. Jean-Marc de Faucompret, Parc national des Pyrénées,	Lons et Tarbes
F91-067	Pathologie et Altitude	Jean-Paul Richalet, Christian Rathat	Éd. Masson,	Paris
F91-068	Pistes Himalayennes	Cyprien Luraghi, Muraghi Gurung	Éd. Albin Michel,	Paris
F91-069	Pyrénées aux Mille Lscs	Alain Bourneton	Éd. Glénat,	Grenoble

F91-070	Pyrénées Centrales Franco-Espagnoles	R. Mirouse	Éd. Masson,	Paris
F91-071	Queyras	photos de Pierre Putelat	Éd. P. Putelat,	Molines-en- Queyras
F91-072	Randonnées en Asie	Giancarlo Corbellini	Éd. Denoël	
F91-073	Randonnées en Europe	G. Corbellini, F. Figari	Éd. Denoël,	Paris
F91-074	Rocs Nature	Catherine Destivelle, photos de Gérard Kosicky	Éd. Denoël,	Paris
F91-075	Le Romantisme et les Pyrénées	Jean Fourcassié	Éd. Esper,	Toulouse
F91-076	Saint-Étienne-de-Tinée, jadis et aujourd'hui	Robert Bourdon	Éd. Robert Bourdon,	Saint-Etienne- de-Tinée
F91-077	Sanetsch et Miroir d'Argentine	Claude, Yves Remy	Éd. P. Keiser,	Montreux
F91-078	Savoie	Ruth et Jean-Yves Mariotte	Éd. Arthaud.	Paris
F91-079	Savoie: mode d'emploi	Claude Battistelli	Éd. de la fontaine de Siloé,	73800 Les Marches
F91-080	Ski et Sécurité	François Valla ANENA	Éd. Glénat.	Grenoble
F91-081	Le Sport et son Droit	Dominique Remy	Éd. Romillat.	Paris
F91-082	Sur le Sentier des légendes de Nos Mon- tagnes	Christian Delval	Éd. les Grands Ormes, La Doye,	39400 Morez
F91-083	Tashi Deleks	Christiane Drieux	Éd. Christiane Drieux,	Vichy
F91-084	La Ténèbre et l'Azur	Anne Sauvy	Éd. Arthaud,	Paris
F91-085	Terre de Sel, Terre de Gel-des deserts du Chili à la Patagonie	Olivier Föllmi	Éd. S. D. E., Paris et Olizane,	Genève
F91-086	Thailande Escalades rock climbing	François Burnier. Dominique Potard	Éd. Vamos, B. P. 3	Argentière
F91-087	Le Tigre et le Lama	Erik Allgöwer	Éd. Olizane,	Genève
F91-088	Topo guide d'escalades presles		Éd. Dominique Duhaut,	Grenoble
F91-089	Du Tourisme ordinaire en Montagne	sous la direction de B. Debarbieux, JO. Majas- tre	Revue de géographie alpine décembre	Grenouble
F91-090	Les 3000 des Pyrénées	Juan Buyse et 30 pyréneistes français et espagnols	Éd. J. et D. Editions.	Pau
F91-091	Un tunnel pour Don Vicente	Marianne Bernard	Éd. JC. Bihet,	France
F91-092	Un Velo chez Gengis Khan	Christiane Drieux	Éd. Christiane Drieux,	Vichy
F91-093	Vers les lacs du Dauphiné. De Belledonne au Viso	Serge Coupé	Éd. Glénat,	Grenoble

山岳図書目録――フランス語 1992年

No.	書 名	著 者	発行所	発行地
F92-001	À travers l'Aragon inso- lite Récits, Contes et Légendes du Sobrarbe	André Galicia	3, rue des Bleuets,	65800 Aureilhan
F92-002	Alpinisme à ski. Esca- lade en Glace raide	W. Müller	Éd. du Club alpin suisse	
F92-003	Alpinisme et Escalade. Guide des techniques	Erik Decamp	Éd. Didier- Richard,	Grenoble
F92-004	Au royaume des Mon- tagnes	René Desmaison	Éd. BarthOlemy,	Avignon
F92-005	Au-dela de la randonnée Massif des Écrins	C. Girard	Éd. C. Girard, Imprimerie des Escartons,	Briançon
F92-006	Autrefois les Pyrénées	Claude Bailhé	Éd. Milan,	Toulouse
F92-007	L'Aventure verticale dans les Alpes d'Azur. Escalade, Canyoning, Spéléologie	A. Oddou, C. et JP. Sounier	Éd. Edisud.	Aix-en- Provence
F92-008	Les Calanques	G. Bernard, D. Gorgeon, C. Kern, D. Privat	Éd. Comité départemental des Bouches- du-Rhône de la Fédération française de la montagne et de l'escalade	
F92-009	Les Canyons de la Sierra de Guara	F. Biarge, E. Salamero	Éd. Rando,	Tarbes
F92-010	Canyons et Barrancos. Massif du Mont Perdu. Gavarnie. À Sierra de Guar	Jean-Paul Pontroué avec la collaboration Jean-Louis Lechene 65000	Éd. Foehn, impasse Louis- Blériot,	Tarbes
F92-011	Cavaillon	Pierre Duret, Serge Jaulin	Éd. Scriba,	Avignon
F92-012	Cent Randonnées à skis en Ariège, Andorre, Pyrénées orientales	Daniel Daubin, Michel Dedieu. Préface de Louis Audoubert	Éd. Randonnées pyrénéennes,	Tarbes
F92-013	Chamonix-40 ans dans la Vallée	Jean-Philippe Charbonnier	Éd. Gl nat,	Grenoble
F92-014	50 Promenades faciles avec vos enfants dans les Pyrénées françaises et espagnoles	Louis Audoubert	Éd. Milan,	Toulouse
F92-015	Cipra 1952-1992		Éd. Commission internationale pour la protection des Alpes, CIPRA,	Vaduz

F92-016	Les cols du Parc du Mercantour	Michel Bricola	Éd. Glénat,	Grenoble
F92-017	Cormot	la section de Chalon-sur- Saône du Club alpin fran- çais		
F92-018	Corse-Les plus beaux sentiers	JF. Devaud	Éd. Glénat,	Grenoble
F92-019	Cours d'escalade en dix leçons. De l'escalade libre à la compétition	P. Paci	Éd. de Vecchi,	Paris
F92-020	Escalade	Stefan Glowacz, Wolfgang Pohl	Éd. Hachette/ CIL,	Paris
F92-021	Escalade dans la moyenne vallée de l'Arve	Gilles Brunot, Denis Cardot	Éd. Brunot- Cardot,	Chamonix
F92-022	Escalade en Drôme pro- vençale : Buis-les- Baronnies, Ubrieux	V. Isely		Gap
F92-023	Escalades granitiques en Morvan	Jean-Luc Scola	Éd. Parc naturel régional du Morvan,	Saulieu
F92-024	Eternel antarctique. Voyage au pays des glaces	Ron Naveen, divers auteurs	Solar,	Paris
F92-025	Face à l'Himalaya	Doug Scott	Éd. Arthaud.	Paris
F92-026	La faune secrète de l'Alpe		Éd. Didier Richard,	Grenoble
F92-027	De fil en aiguille. Raconte- moi une mon- tagne		Éd. Tri ves Ecoles, 38930	Clelles
F92-028	Gaspard de la Meije	Roger Canac	Éd. des Presses universitaires de Grenoble	
F92-029	Gites-Refuges France et Frontières 1992-1993	Annick et Serge Mouraret	Éd. La Cadole,	78140 Vélizy
F92-030	La grande traversée des Pyrénées	Louis Audoubert	Éd. Milan,	Toulouse
F92-031	Le guide de la Haute- Savoie	sous la direction de Michel Germain	Éd. du Parc- Horvath,	69130 Ecully
F92-032	Guide des Oiseaux de Proie du Monde	Martin Walters	Éd. Arthaud,	Paris
F92-033	Guide VTT Haute- Savoie- Mont- Blanc-100 itinéraires du Léman au Mont-Blanc	D. Cassani, JM. Lamory	Éd. Olizane,	Genève
F92-034	Haut Valais	François Labande	Éd. Olizane,	Genève
F92-035	Haute Romanche. Mon- tagnes sauvages	Bruno Soleymieux	Éd. La Pierre Farabo,	La Grave
F92-036	Haute Romanche- Escalade, Cascade de glace et Ski	Bruno Soleymieux	Éd. La Pierre Farabo,	La Grave

F92-037	Hauteroche	Alain Finet	Éd. FSGT,	
F92-038	Himalaya. Guide de trek- king	Hugh Swift	Éd. Apsara,	Nice
F92-039	K2-Rêve et Destin	Kurt Diemberger	Éd. Arthaud	
F92-040	Le Massif des Écrins vu du ciel	Philippe Poulet, Pascal Sombardier	Éd. Glénat,	Grenoble
F92-041	Le Mont-Aiguille et son Double	Philippe Bourdeau, E. Decamp, JO. Majastre, O. Vizioz	Éd. des Presses universitaires de Grenoble	
F92-042	La Montagne Encyclopédie poétique		Éd. Jean Grassin,	Carnac
F92-043	Des Monts et des Mythes-l'Imaginaire so- cial de la Montagne	Jean-Paul Bozonnet	Éd. Presses universitaires de Grenoble, coll. (Montagnes)	
F92-044	Norbert Casteret, explo- rateur d'abê mes	Jacques Joffre	Éd. Milan,	Toulouse
F92-045	Ozone, un trou pour rien	R. Maduro, R. Schauerhammer	Éd. Alcuin,	Paris
F92-046	Passagers de l'Everest	Cécile Aslande, peintures de Pierre Dutrievoz, photos de Guy Martin	Éd. Phoenix,	Grenoble
F92-047	Le pè lerinage d'Embrun au Mont Guillaume	Georges Rose	Éd. Société d'études des Hautes-Alpes	
F92-048	Photo-Évasion-Pyrénées	images de F. Annet, paroles d'H. Tazieff, M. Sébastien, D. Lhomond, B. Bonnefond	Éd. Artifact,	24202 Sarlat
F92-049	Randonnée pédestre et Trekking. 100 itinéraires à travers la France. Alpes, Pyrénées, Massif Central, Corse	Thomas Tisch	Éd. de Vecchi,	Paris
F92-050	Randonnées autour du Mont-Blanc	David Belden	Éd. Glénat,	Grenoble
F92-051	Les Refuges des Pyrénées	Louis Audoubert, Hubert Odier	Éd. Milan,	Toulouse
F92-052	Le Risque d'Avalanche. Nouveau guide pratique	Werner Munter	Éd. du Club alpin suisse,	Berne
F92-053	Saisons et Climats Le Guide de tous les voyageurs	Jean-Noël Darde	Éd. Balland,	Paris
F92-054	Saou	la section de Saou du Club alpin français	Éd. Synclinal	
F92-055	Savoie-l'Esprit des lieux	Pierre Préau	Éd. de la fontaine de Siloé,	73800 Les Marches

F92-056	Selection d'escalades dans les Calanques	C. Bignon, JL. Fenouil, M. Frisque, A. Lucchesi, Préface de Georges Livanos	Éd. Edisud,	Aix-en- Provence
F92-057	Sentiers de Grande Randonnée. GR 653. Chemin de Saint- Jacques. Itinéraire arago- nais : Somport- Undues de Lerida	la Fédération aragonaise de montagne	Éd. Prames.	Saragosse
F92-058	Solo trekking. Randon- nées lointaines avec Christine Janin	Philippe Bardiau	Éd. Glénat,	Grenoble
F92-059	Sur les traces de Saturnin Bouttaz à Fontcouverte- en-Maurienne (1742- 1816)	G. Roche-Galopini	Éd. Terradou, Le Chaffaut,	Alpes de Haute- Provence
F92-060	Tairraz Père et Fils	Préface de M. Dessemond	Éd. Contrejour,	Paris
F92-061	La Terre, des ressources en creux et en bosses	Monique Fort	Éd. de l'Amitié- Rageot,	Paris
F92-062	Les Tigres des neiges	Bernard Germain	Éd. Ouest France,	Rennes
F92-063	La Traversée des Alpes par Hannibal	Francis de Coninck	Éd. Ediculture	
F92-064	Une Vie d'alpiniste	Reinhold Messner	Éd. Arthaud,	Paris
F92-065	Verticualidad	Rainier Munsch. Lavis: François Carrafancq. Photographies: Didier Sorbé. Chorégraphie: Christian Ravier	Éd. JM. de	Faucompret
山岳図	書目録――イタリア語	1991年		
No.	書 名	著 者	発行所	発行地
I91-001	Alpinismo Italiano in Karakorum	Aldo Audisio	Éd. C. A. I. Museo nazionale della montagna,	Torino
191-001 191-002	F. T. S.	Aldo Audisio R. Armelloni	Museo nazionale	Torino Milano
	Karakorum		Museo nazionale della montagna, Éd. CAI/TCI,	
191-002	Karakorum Andolla-Sempione Arrampicata in Valle	R. Armelloni Andrea Plat, Sabina Gaggi-	Museo nazionale della montagna, Éd. CAI/TCI,	Milano
I91-002 I91-003	Karakorum Andolla-Sempione Arrampicata in Valle d'Aosta Atlante orografico del	R. Armelloni Andrea Plat, Sabina Gaggi- ni	Museo nazionale della montagna, Èd. CAI/TCI, Èd. A. Plat, Èd. Priuli et	Milano Aosta
191-002 191-003 191-004	Karakorum Andolla-Sempione Arrampicata in Valle d'Aosta Atlante orografico del Monte Bianco	R. Armelloni Andrea Plat, Sabina Gaggi- ni Sergio Marazzi	Museo nazionale della montagna, Èd. CAI/TCI, Èd. A. Plat, Èd. Priuli et Verlucca,	Milano Aosta Torino

山岳図書目録――イタリア語 1992年

Pirineos en BTT

No.	書 名	著 者	発行所	発行地
192-001	Il Lazio Piu Bello	G. Ielardi	Éd. Mediterranee,	Roma
192-002	Sui Sentieri delle Leg- gende	C. Cima	Éd. Mediterranee,	Roma
山岳図	書目録――スペイン語	1991年		
No.	書 名	著 者	発行所	発行地
Es91-001	Senderos del Serrablo GR 16	la Federacion aragonesa de montanismo	Éd. Comité nacional de Senderos de Gran Recorrido,	Zaragoza
山岳図	書目録――スペイン語	1992年		
No.	書 名	著 者	発行所	発行地
Es92-001	Por la Retuerta de Pina	JB. Zumeta	Éd. Prames,	Zaragoza
Es92-002	Senderos de Gran Recorrido. GR 90. Tier- ras del Moncayo. Tarazona-Morata de Jalon	la Fédération aragonaise de montagne	Éd. Prames,	Zaragoza
Es92-003	La Travesia de Los	A. Valls Rovira, J. Lapar-	Éd. Prames,	Zaragoza

ra Nuez

日本山岳会・自然保護の歩み (3)

<平成元年 (1989) ~平成5年 (1993) >

[お読みになる前に]

- 1. この年譜は「山岳」第86年・同第87年掲載に続く平成元年から平成5年までの 日本山岳会・自然保護の歩みの記録で、今号をもって完結いたします。
- 2. 論稿の出典は,原則として,①機関誌「山岳」,②会報「山」,③自然保護委員会「議事録」の三種類に限定しました。
- 3. 近年,自然保護分野における日本山岳会会員が関係する様々な活動や,著作等は,活字になったものだけでも実に膨大なものですが,とてもそのすべてを網羅することはできません。せめて,支部で活動された実績だけでもピック・アップしたかったのですが,今回はかないませんでした。

また、僻地等で環境保護に尽瘁されていたにも関わらず、その活躍が発表され ないまま物故された会員もおられました。

- 4. 論稿を所属させた年度は、「山岳」や「山」の出版年に拠っていますので、発生した時期との相違があります。
- 5. 表題・著者名はほぼ原典どおりとしましたので、イニシャル、号等の場合があります。
- 6. 極力原文のニュアンスを伝えようとしましたが、不整合のある点はお許し下さ
- 7. 明治から平成へと連なる89年間の「自然保護の歩み」が、皆様の今後の山行に お役にたてば幸いに存じます。

1994年6月30日

日本川岳会「自然保護委員会」

平成元年 (1989)

自然保護随想『イエローストンの山火事』

[関塚貞亨]

* 国立公園の指定から百年目に当たる1972年を契機に、「あるがままの自然にまかせよう」という姿勢に政策転換した。今年の山火事で百万エーカー近くが焼けたが、「山火事は悪いことばかりではない。パインの種子は高温に会い初めて発芽する。天然更新もされ、肥沃な土地が生れ、新しい生命も育まれる」との公園管理者の発言や、知人の生の情報を紹介。

(「山」523号)

[横山 隆]

* 集会委員会と自然保護委員会共催の山行報告。バックアップしてくれた 長蔵小屋の平野紀子氏は「尾瀬がもっとも混むシーズンに訪れる人達は、 混んだ尾瀬からの被害者であると同時に、加害者でもあるのです」と挨拶 した。積雪40センチの翌朝、帰途につく。 (「山」523号)

自然保護随想『登山のマナーについて』

[関塚貞亨]

* 自然破壊に対する反対運動も重要だが、それ以前の問題として、山岳会会員の自然保護意識を高める必要があるのではないか。昨秋「霜のきた尾瀬で自然を語る」山行を集会委の協力を得て実施したが、一参加者は木道から湿原に向って放尿した。尾瀬のし尿による富栄養化も話題になった自然保護委が企画した山行だけに残念だった。 (「山」524号)

自然保護随想『建物の外側はだれのものか』

[小倉 厚]

* 上高地の帝国ホテルを建築するとき、上高地の風景との調和に苦心した と聞く。自然保護運動も自然破壊やゴミの清掃といった類型のものばかり でなく、人類共通の財産である自然景観の保護にも目を向けなければなら ない時ではなかろうか。 (「山」525号)

図書紹介『縄文杉は訴える』 三島昭男著

[松本徰男]

* 本書は緑の大切さ、自然の尊さとともに、自然をないがしろにするような人類であれば、やがて破滅することを強く訴えている。縄文杉の屋久島で著者と会い、緑に対する情熱の深さにうたれた。 (「山」525号)

図書紹介『森からの警告』 畑 正憲/C.W.ニコル対談集 加藤則芳編

〔近藤 緑〕

* 昭和62年,知床の原生林が老齢過熟木伐採による森の若返りだとして,強行伐採された2カ月後に行われた対談。怒りをぶつける2人。それぞれの個性が行間にひびき合い、自然に対する危機感が身に迫ってくる。

(「山 | 526号)

図書紹介『森林を蘇らせた日本人』 牧野和春著

[麦食 啓]

* 森林施策に関わった上杉鷹山ら歴史上の群像にスポットを当て、足で書いた点に特色がある。林政で大事なのは「対策ではなくて、哲学をもった改革ではあるまいか」、先人の生きざまを凝視したい。 (「山」526号)

「奥武蔵日だまり山行報告」

[山口悠紀子]

* 古い峠道と山村、開発されたゴルフ場、古いものと新しいものを実視して参加者は何かを感じ取って欲しいと自然保護委員会で企画した。自分の

ゴミを自分で持ち帰ることは徹底しなかった。

(「山 | 526号)

自然観察山行「宮ヶ瀬ビジターセンターと春木山」

[自然保護委員会]

* 神奈川県宮ヶ瀬のビジターセンターで講義を聞いた後,近くの山に入り ケモノ道で野性動物の痕跡をたどる。次回は一般会員向けに,勉強会と観 察山行の2回に分けて実施したい。 (「山」526号)

自然保護随想『欧州の異常気象と環境問題』

[関塚貞亨]

* 「オゾン層保護国際会議」がロンドンで開かれた。3月下旬のパリの気温は摂氏28度と真夏なみだ。スイスでは子供たちが半袖姿で遊んでいる。 政治家が環境問題を深刻に受けとめる背景には、この異常気象があるからである。 (「山」527号)

「昨今の異常気象と高山植物」

[白籏史朗]

* 暖冬異変、冷夏現象という異常気象の原因は、まだ結論が出ず、対策も 実施されていないが、緑の減少こそが本当の原因であろう。山梨県で昭和 61年に制定した「高山植物保護条例」を国で制定してもらい、一木一草を いとおしむ心が、やがては地球を緑と水の星に還し、気象を正常なサイク ルに戻す近道ではないかと考える。 (「山」528号)

自然保護随想『美しい地球をよごさないで』

[麦倉 啓]

* 手塚治虫氏の「ガラスの地球を救え」、自然保護を訴える70数ヵ国の子供たちの声「美しい地球を汚さないで」、西堀栄三郎氏の言葉を紹介し、地球上に登場して間もない人類が、地上の全生命体の存続か滅亡かの鍵を握っていることなどにふれる。 (「山」528号)

「ハヤチネウスユキソウなど植物学者が盗掘――高知の名誉教授検挙」

[岩手日報 平成元年7月8日付記事]

* 花巻署は、早池峰国定公園特定地域内特別保護区、国の特別天然記念物 に指定されているハヤチネウスユキソウなど14種類の高山植物を無許可で 採取したY高知大名誉教授を検挙した。同氏は高知営林局の林野監視員も 務め、日本山岳会会員でもある。

「自然保護考」 渡辺兵力氏講演会報告

[横山 降]

* 開発と保護の対立・矛盾,何処の何の自然を保護するのか,自然保全の 提唱といった渡辺氏がつくられたプログラムにそって話をすすめられた。 人口増加と生活水準の向上追求が自然の破壊をすすめている原因であり, 日本山岳会の自然保護活動は反対運動ではなく,自然保全運動にこそ力を

自然保護随想『縄文杉を見に』

[山口悠紀子]

* 屋久島の縄文杉の周囲は綱が張られ、木片が敷きつめられて根を保護している。しかし老人会の一団は綱を乗り越え写真を撮ろうとし、注意されても不満顔であった。トイレ紙も散乱していた。 (「山」531号)

「九州・奥祖母山地とツキノワグマー

[松本徰夫]

* 昭和35年、祖母山東面の学術保安林が解除された危機感から、九州山岳 保護協会を設立して、伐採反対運動を展開した。その後、国定公園の指定 を受け、祖母山以東の自然林は残っているものの、他は見るも無残に伐り まくられている。クマやカモシカたちが安住できる広さの自然林を確保す るためには、林野庁にのみ任す訳にはいかない。 (「山」532号)

自然保護随想『小 径』

[武田満子]

* 木道やコンクリート舗装の道が、自然保護の役を果していることも見逃せない。今では森林に限らず、人の手を加えて保全しないと自然が保護されない場所が多くなっている。 (「山」532号)

「会員アンケート結果報告 (4)」 24 強化, 充実して欲しい事業

* 「自然保護」が61%で群を抜いてトップである(前回の83年の調査も同様)。「山小屋の建設」が35%とそれに次いでいる。 (「山 | 533号)

「富士山自然観察山行の報告」

* 溶岩流上に発達した森林,火山性土壌に成立した森林,独立峰の厳しい環境に耐え抜く植物群落など意外に紹介されていない富士山の植物の世界を訪ねた。山行当日の9月3日の富士五合目は風雨が強く、山麓のビジターセンターに戻って見学,また植物体系の講義を受け、視察山行の不足を補なった。 (「山」533号・自然保護委員会9月議事録)

自然保護随想『追良瀬行に想う――青森県白神山地』

「中村あや〕

* ブナ林は火事になりませんと山の友人は言った。激しい雨となったが、原生林の雨は落葉の厚く積った大地に音もなく吸い込まれてゆく。それがブナの伐り尽くされた秋田県側に出ると、降った雨はむき出しの土砂をまき込み、濁流となって奔り降る。白神を美しい姿のまま後世に伝えて行くため、森林保護の声をあげ続けたい。 (「山」533号)

「一緒に歩いて山の環境保全を考えよう――をテーマに、平成元年度自然保護委・

全国集会、戸隠で開催 |

「山口悠紀子・近藤 緑他〕

* 10月7~8日,戸隠で開催。43名参加。席上,信濃支部からは岩菅山の 冬季オリンピックコース,横通岳他2件のロープウェイ問題が,山陰支部 からは,大山の崩壊による植生破壊の保全対策が,山梨支部からは,高山 植物の盗掘で手錠を掛けられる人が出た他,各支部から報告がなされた。 4つのグループに分かれて「山岳会としての環境保全運動はどうあるべ きか」について,パネルディスカッションを行い,海外登山における環境 保護を重視する啓蒙運動に力を入れるべき。国内では地域の問題だけでな く,全国に共通な問題を取り上げる。自然保護運動は,地元との交流活動 が重要。ゴミ持ち帰り運動などの実践を積み重ねる。自然保護教育に力を そそぐ等が議論された。 (「山」534・533号)

「冬季五輪競技コースを岩菅山山域以外の県内既存施設の改修により実施すべき ことに関する要望書 | の提出について [自然保護委員会]

* 標記要望書の文面が、自然保護委員会小委員会でまとまり、11月の理事会に提出され、11月17日に文部大臣、環境庁長官、日本オリンピック委員会会長に直接手交すべく、会長および委員長代理が赴いた。要望書は各々の代理の管理者に手交した。 [自然保護委員会10月・11月議事録]

「ヒマラヤ・アドヴェンチャー・トラスト発足」

[田部井淳子]

* ヒラリー卿が先頭に立ち、各国の山愛好家やヒマラヤのトレッキングを 計画している旅行社に呼びかけて『ヒマラヤと自然を守ろう』という意図 のもと「ヒマラヤ・アドヴェンチャー・トラスト」の発会式が香港で行わ れた。日本からは、田部井淳子氏他が出席した。 (「山」534号)

図書紹介『太平洋地域環境問題論考集』 日本環境協会 [高遠 宏]

* 1987年に第1回太平洋環境会議が名古屋で開催され,第2回 (1989年) のアメリカでの会議を前にとりまとめられたもの。オーストラリア,中国 等5ヵ国の比較など,山岳会の自然保護活動とも深く関連のある論考もあ る。 (「山」534号)

会務報告「岩菅山冬季オリンピックに関する要望書提出の件」

* 岩菅山は、登山の見地からも重要な山なので、オリンピックコースは現在の施設を利用して開催して欲しい旨の要望書を、関係各官庁、長野県、 長野市、日本オリンピック委員会に提出する。 (「山」534号)

「自然への愛に生きた――平野長英と田淵行男」

「蜂谷 緑]

* 尾瀬の山守りとして生涯を終えた長蔵小屋二代目の平野長英さんと、安

曇野に住んだ山岳写真家・田淵行男さんへの追悼。自然環境の保全は、何より子供のうちからの教育だと実践する蜂谷氏は、首都圏の子供たちを尾瀬に案内し、長英・靖子夫妻にも引き合わせた。子供たちに「自然の愛」を語った翁の姿が最後となった。田淵行男さんは行動の人と呼ぶにふさわしい生涯を最晩年まですごされた。 (山岳 第84年 102~105頁)

図書紹介『ブナが消える――四季の自然林を歩く』 庄司幸助著 〔細井澄子〕

* 東北の山々のブナ原生林の危機的状況の中で、著者の20年に及ぶブナと の関わりを収録したもの。残されたブナ原生林を守る運動に立ち上がる必 要を感じ、その運動に合流したい思いに駆られる書である。

(山岳 第84年 172~173頁)

図書紹介『ブナの森は緑のダム――森林の研究』太田 威著 〔細井澄子〕

* 天然の水がめ――ブナの森の役割を、わずか64頁でありながら、ブナの森に関する全てを、さらには自然界の森羅万象を語っている。配された写真は12年間を山ごもり中心の生活を続けながら撮された6万コマに及ぶ中から選ばれた力作である。 (山岳 第84年 173~175頁)

「山小屋における自然エネルギー利用の現状と今後の課題」

[鳥居 亮・森 武昭・木村茂雄]

* 各地の山小屋に風力・太陽光電池・水力などによる自然エネルギー利用が普及した。自然エネルギー利用発電システムは、自然と調和した枯渇することのないクリーンエネルギー源であることが最大の特長であり、山小屋の電源として極めて有効である。風力発電機では1基10~30万円のものが市販されているが、太陽電池はコストダウンは難しいようである。付帯設備の簡略化を計ることが重要である。 (山岳 第84年 A46~A56頁)

平成2年(1990)

自然保護随想『登山道は、今』

〔斉藤 桂〕

* 折立から雲の平の道は、登山人口の増加により登山道の道幅が広がり、 湿原も足による破壊がどんどん起っている。環境庁が1億円もかけて作っ た石段(伯耆大山では蛇篭という)も、登り難いのか両脇に幅広い踏跡が ある。森は救えても、湿原は戻らない。 (「山」535号)

図書紹介『マウンテン・ワールド 全19巻』 スイス山岳研究財団編 吉沢一郎監訳 [大島輝夫]

* ヒマラヤ高峯の栄光の時代に発行され続けた山岳年鑑全17冊に別巻2冊 を加えた日本語訳が、今回完結した。第1巻に「ユングラウフ鉄道とアル プスの高所研究所」の記事がある。当初鉄道計画が発表された時、人々の 間や国会で激しい論議があった。これは我々に、自然保護と開発とをどの ように調和させるかの一つの示唆を与えるのではあるまいか。

(「山」535号)

要望書「冬季五輪競技コースを岩菅山山域以外の県内既存施設の改修により実施 すべきことに関する要望書」 平成元年11月9日 社団法人 日本山岳会

* 1988年6月、日本オリンピック委員会は1998年冬季オリンピック開催の日本候補地を長野市に決定し、滑降とスーパー大回転両コースを志賀高原の最高峰裏岩菅山 (2337m) の西斜面に新設する計画を立てた。日本山岳会は、志賀高原の中でも、オオシラビソ、ダケカンバの混交林が最大規模で纏って残されている東館山の東斜面から岩菅山の西斜面にかけての山域の開発に反対する要望書を出した。冬季オリンピックは既存施設を使用して開催するという世界の趨勢に逆行することなく、岩菅山山域の開発を行わないで実施するよう強く要望した。 (「山」535号)

自然保護随想『負のフィードバックと正のフィードバック』 〔澤井政信〕

* 人や動物の生活は、多かれ少なかれ自然破壊を伴うものだが、大資本に よる自然を食いものにした開発に、漠然とした心配を抱いているのは、生 物としての本能的な不安によるものかも知れない。 (「山」536号)

勉強会「尾瀬の自然保全についての環境庁の考え方を聞く」

* 環境庁自然保護局保護管理課長,係長,専門官を講師に呼んで,2月27 日JACルームにて開催。湿原保護のため,昭和30年から木道整備をしている。1mに付き2万7千円要し,7~8年で付け替える。木材はソ連から輸入している。42年から宿泊数を凍結し,2,300畳である。過剰利用への対策として,JACに腹案はあるか? 観光バスも含めて,鳩待峠から戸倉へ,沼山峠から御池へと車を下げて,歩いて行かせるのが良い。

(自然保護委員会2月議事録)

自然保護随想『大山の山頂から』

「小西 毅〕

* かつて風衝草原で覆われていた大山頂上は、登山者の踏圧によって、急速に裸地に至った。「頂上を保護する会」が一丸となって結成され、緑の復元に協力する一木一石運動が提唱され今日に至っているが、学校集団登山の中には末恐しい所業も多い。「こも伏せ」、「流水分散作業」と一つひとつの協力が結実しつつもある。 (「山」537号)

「立山の夜間照明計画をつぶす、高齢化社会のリゾート計画など」

[関塚貞亨]

藤平副会長の自然保護講演会

* リゾート事業は、採算に合わなければ引き揚げてしまう資本の論理が支配していることを忘れてはいけない。急速に老齢化が進んでいる日本でのリゾートは、し残したことや、やりたかったことがやれ、ゆったりとして安価な滞在が楽しめ、自然と共生できる施設ではなかろうか。ハードに金をかけ、自然を切り売りするキンキラキンのリゾートではなく、ソフトが大切である。私の地元の富山では、昨年、立山を夜間照明するという幼稚きわまりないプランや、大日平に馬を走らせるなどのリゾート計画もあったが、ことあるごとに反対を力説したら、県当局や知事から推進の考えのないことが言明された。 (「山」538号)

自然保護随想『カモシカか人間か』

[梅木秀徳]

* 「カモシカが大切か、人間が大切か? — 祖母・傾山麓に住む伐採・運搬に携わっている人達から」。「絵にかいた餅が食えないように、美しい風景だけで腹は太らない — 九重草原の住民」。「保護に留意しつつ森林施業をする — お役所の約束」。自然破壊の図式を描いてみても、今日・明日を食っていくためにはどうするか。自然保護運動が本当の正念場に立たされる時が来たように思う。 (「山」538号)

「自然環境を守る紙の節約」

[山口一孝]

* わが国の莫大な木材需要は、緑地の荒廃砂漠化を惹き起こしている。私 は地球規模で増加している大気中のCO₂濃度増加と気候温暖化の関係に注 目したい。木材は新聞紙に圧倒的多く消費されている。紙面の節約は、森 林環境保全につながると考える。 (「山」538号)

「奥多摩・自然保護パトロール」

[市倉金蔵]

* 東京の奥座敷奥多摩で、環境庁自然公園指導員としてパトロールをしている。環境衛生、風致保護、鳥獣保護などが仕事だが、最近は山野草の希少種の盗掘が頻発し、私有の庭先まで荒らされたり、カタクリ等の群生地が1シーズンで壊滅している。 (「山」539号)

自然保護随想『アメリカの二人の自然保護主義者』

[麦倉 啓]

* シェラ・クラブの創立者ジョン・ミューアと、アメリカの初代森林局長 官ギフォード・ピンショー。二人の自然観は異っており、ミューアの「破 壊的商業主義から原生林を残さねば、人間性そのものが破壊される」に対 し、ピンショーは「森林は保護するが、森林の持続的生産により人類の繁 栄のために安定した森林の供給を確保する」といった思想だった。二人の 意見の対立を超えて、昨今は地球環境の保全が切実な問題となっている。

(「山」539号)

自然保護随想『上高地ダム』

[松丸秀夫]

* 昭和31年に、上高地に高さ45年のロックフィルダムを造る計画がもち上った際の、日本山岳会と松方副会長をめぐってのエピソードを紹介。 国立公園協会などと協力して、ダム計画阻止は成功した。(「山」540号)

図書紹介『今西錦司――自然を求めて』 斎藤清明著 〔岩坪五郎〕

* 今西錦司は、生涯一登山家でありつづけた。登山をつうじて、自然を求めつづけ、自然を全体として理解しようと努力した。 (「山」540号)

図書紹介『火山と人間』 南日本新聞火山取材班著 〔式 正英〕

* 火山活動が人に及ぼす影響・災害・資源・エネルギー・環境問題など、 火山に関する最新の基礎情報を得るのに最適。 (「山」540号)

図書紹介『人間は自然を守れるか』 岡部牧夫著 〔松丸秀夫〕

* 「専門研究者や行政機関に負けない確実な観察・調査をしてデータを蓄積しておき、周到な論理を築き、弁証と修辞の術をつくせ」と、自らの自然保護活動を実践した例が挙げられている。 (「山」540号)

図書紹介『森に新風が吹く日』 井原俊一著

[松丸秀夫]

* 「非生産性の元凶」の章がある。目を覆いたくなるような惨状、国有林 経営の現状である。 (「山」540号)

「ニューデリー出張報告」

(山田二郎)

* 4月29日から31日迄,ニューデリーで開催されたヒマラヤン・アドヴェンチャー・トラストの第一回会議に招待され,田部井さんらと出席してきた。諸外国からの参加者8ヵ国31名を含め,総員183名の規模のものであった。初日のガンヂー印度政府環境庁長官の挨拶に始まり,30日,31日の2日間にわたってミッチリ各講師のスピーチがあった。1991年秋の,日本での会合に向けての企画が進められており,当会のほか,日山協,HAJ,労山などの諸団体が相協力して,わが国の国際的責任の一端を果すべく,全面的に協力する合意がなされている。帰国後の5月16日に田部井さんを中心に上記団体関係者の会合が持たれた。 (「山」541号)

「南極の山の清掃登山」

 $[Y \cdot M]$

* 南極大陸の最高峰を有するエルズウォーズ山脈の登山は、この5年の間 に始まったばかりである。本年1月、ヴィンソン(4897(元)に最初の清掃 登山が行われ、約140⁺。のゴミをチリまで持ち帰った。南極の聖地を保全するための基礎が確立した。カナダのヴァンクーバーにあるAdventure Network International社から同社の企画を知らせる資料が届いた。

(「山 | 541号)

自然保護随想『一寸臭い話』

[浦島太郎]

* 30余年ぶりに山を歩く。人も多く想像以上に汚れて、荒れていた。山々は自然の浄化作用で処理できる時代ではない。登山者のモラル、山で稼ぐ権利を主張する人々、役所に色々申し上げたい。例えば尾瀬の下水処理、入山料などと言わず、公共事業投資の中に組み込めないものだろうか。

(「山」541号)

「富士山の自然観察山行報告――自然保護委員会」

[中村あや]

* 6月17日(日)に実施、参加者は24名。講師は田村説三会員。スバルラインを切り開いたため、林緑にはマント群落が理論どおりよく発達しているが、標高が高くなり環境が厳しくなると、マント群落が成長せず、林緑から次々とコメツガなどが倒れてゆき、無残な有様を呈している。5合目からは御庭へ、さらに奥庭から原生林の中を降る。実例を見ながらの解説はよく納得がいく観察山行であった。 (「山」542号)

自然保護随想『奥秩父・富士・尾瀬をめぐる問題』

〔木名瀬 亘〕

* 奥秩父荒川源流の原生林の乱伐の果に、連峰スカイラインなる構想が生まれ、富士スバルラインによる生態変化が心配されていた折、当時面談した環境庁長官は、道路建設にかかわる利権がこの種の問題の根本にあると嘆いていた。尾瀬のオーバーユース問題は、自動車公害であって、「登って入山すべき尾瀬が下る尾瀬」になったがための現象であろう。

(「山」542号)

「環境危機に山岳会の対応は如何――人間と自然保護の調和が大切」

村木副会長の自然保護講演会

[関塚貞亨]

* 登山人口の増大、便利さを願う高齢化登山者、過疎化と都市集中化、森林の荒廃、村おこし、人集めとしての観光開発、天下の悪法――リゾート開発法といった問題の絡み合い。登山者は、汚染者負担の原則を確立したい。私は登山者として、自然の中に踏み込むことによって、自然を乱していると自覚している。自然保護に対する取り組み方は、自然には手を加えないということに価値を求めるのではなく、そこに生活している人達のことも考えて、調和のとれるような方向を考えなくては余りにも寂しい。「自然保護委員会から――つの問題提起である今講演に対して、『山』紙

上での討論を提案する。投稿は10月20日迄に。〕

(「山」543号)

自然保護随想『ヨーロッパの旅より』

[選野道治]

* フィンランドでは、銀ギラギンの日本のリゾート開発を疎ましく感ずる 体験。西独では、日本の山村もレジャー開発に血道を上げずに、当地のよ うなファームステイといった村おこし対策も検討してみたらよさそうだと いう体験。しかし「吾々には堅実な次代の国民を育成する環境を残す責任 がある」という森林家たちに降り注ぐ酸性雨は痛ましい。(「山」543号)

自然保護随想『中高年登山者とフィールドマナー』

〔山口俊輔〕

* 中高年登山者が実に多い。自然保護というのはまず、各人が山を荒らさないという初心の実践ではないだろうか。いかに中高年登山者に、フィールドマナーの啓蒙をするかの努力が足りないと思う。 (「山」544号)

「第15回自然保護全国集会"登山者ができる自然保護"をテーマに」

[中村あや他]

* 9月15・16日の両日,平成2年度自然保護全国集会が静岡支部の支援のもとに三島市で開かれた。柿田川湧水の見学では、地元の柿田川自然保護の会会長よりトラスト活動他の説明を受けた。函南原生林の見学の他、箱根の里少年自然の家で入所式。翌日、山田会長の挨拶の後、秋田支部を皮切に支部報告。鳥海山のスキー場計画。京都・北山のファミリー登山による汚れの激しさ。山陰・大山での一木一草運動の困難な現状。熊本支部からは原生林の伐採を止めるために、林野庁への独立採算性廃止を訴えるなど。グループ討議では「海外登山における自然保護」、「その地域に住む人々との調和を考えた自然保護」、「尾瀬を例とした自然保護」、「登山者が個人でできる自然保護」、「リゾート法と自然保護」の5グループに分かれて討議した。参加者72名。

[国際シンポジウム報告]

 $[Y \cdot M]$

* 花と緑の国際シンポジウムが「ヒマラヤの南側と北側――自然と人間生活の調和」をテーマに大阪で開かれた。大阪市大の日中友好学術登山隊の報告の一環として企画された。しめくくりの、増えすぎたヒマラヤ地域の人口問題の解決が先決には、前途多難を思わせた。 (「山」545号)

自然保護随想『カミさんの話』

[小西奎二]

* 人間活動の巨大化、生活水準の向上、世界の人口増加が地球環境を悪化されている。ブナ林保護、リゾート開発阻止もよいが、足元を見つめ直そう。本当に必要なもの、無くてもよいものとを区別し、カミを大切にする

「村木副会長『自然保護講演会』についての紙上討論(第1回)」

* 登山者自身や登山関係業者達への自然破壊・汚染防止啓蒙運動の強化 (広瀬 潔)。消費者の浪費が環境破壊の元凶になっていることを自覚反 省し、討論会を重ね、世論に訴える(二木久夫)。講演を拝聴したが、村 木氏の真意をさらに伺いたい。①裏岩菅山の滑降コース開発問題、②他 の具体例にもとづいた見解(本多勝一)。地域との調和には往々、資本の ない地元のかげに隠れた巨大資本の企みがある。裏岩菅山のスキーコー ス開発はその典型といえる(澤井政信)。(「山」546号)

「尾瀬問題の解決のために」

「自然保護委員会]

* 尾瀬の「入山料徴収」についての本会の考え方が、一部の新聞に報道され誤解を招きかねないので、結論を述べる。徴収よりも他になすべき多くのことがらとして、戸倉・大清水・御池で輸送手段を止める。し尿・雑排水の処理施設を尾瀬沼地区・山の鼻地区にも設置する。トイレ有料化・山小屋の風呂・食事の他、中・長期的な対策も掲げる。 (「山」546号)

自然保護随想『自然保護とマスコミ』

[梨羽時春]

* 森林保護は自然の原生林のままで保護しなくてはならない。それには自 然保護団体の活動だけではなく、マスコミの力も利用したい。山を見る眼 や感じる心を養い、山を守る怒りの心も忘れまい。 (「山」546号)

現地調査「鳥海山の大規模スキー場開発」

* 10月15~16日,澤井自然保護委員長他5名で山形県八幡町に赴き,大手 デベロッパーの国土計画による「鳥海山スキー場建設」予定地を視察した。 貴重な奇形ブナ林が伐採されるのを阻止しようとする側と,過疎脱却を推 進する町当局の対立がある。 (自然保護委員会11・12月議事録)

特集・自然保護を考える①「自然保護の諸問題――山に登るものの立場からひと つの提言」 (藤平正夫)

* 保護か開発かといった次元ではなく、文化の観点から自然保護を考えたい。心情的で素朴な保護論は反発をまねくし、開発至上主義の失敗も明らかだ。私たち山に登るものは、自然を愛しながら、一方では自然破壊について加担もしている。すぐれた自然を聖域とするのではなく、多くの人々と分かち合い、総合的な保全を適切にコントロールしなければならない。

(山岳 第85年 7~14頁)

特集・自然保護を考える②「山岳会の自然保護の方向と問題点――環境元年に登 山者として考えたことなど」 [関塚貞亨]

* 1990年は地球環境元年と呼ぶのにふさわしい年となったとして、山岳会の自然保護の方向と、自然保護委員会の活動について、「世界宗教としての自然保護」、「自然保護活動のジレンマ」、「自然保護教室としての尾瀬」、「山小屋の屎尿・廃棄物処理」、「長野冬期五輪・岩菅開発断念の教訓」、「山岳会の自然保護の流れ」、「海外登山の汚染と国際協力」の7節に分けて述べている。 (山岳 第85年 15~27頁)

平成3年(1991年)

「HAT-J発会式」

[北村節子]

* ヒマラヤの自然保護を、登山者の立場から考えていこうという「ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト・ジャパン (略称HAT-J)」の発会式が関係 4 団体 (JAC, ヒマラヤ登山協会、労山、日山協)の他、インド・中国大使館関係者らを交じえて開かれた。HAT-Jの代表には、田部井淳子さんがなった。 (「山」547号)

自然保護随想『アニマル・トレッキング』

「市川義輝〕

* 長野オリンピックの会場予定地の一つ積雪期の奥志賀で、野外博物館活動をした体験から、同じエリアでも国民のレジャーのために開発されてもよい自然と、守られるべき自然が存在してよいと述懐。 (「山」547号)

「尾瀬全国集会――婦人懇談会 |

[穴田雪江]

* 平成2年10月,長蔵小屋で全国集会を開催し、夜は自然保護を軸に、神 崎忠男 (HAT-J),近藤緑 (自然保護委員),平野紀子の3氏に話をしても らった。尾瀬という「美の世界に住む者は美を守らねばならない、美のた めに戦わねばならない」は、平野長英から脈々と受け継がれている。138 名の参加を得た有意義な集いとなった。 (「山」548号)

自然保護随想『美しい風景を守りたい』

〔藤井 健〕

* ゴミの持ち帰りという常識がまだ根付いていない。山小屋の屎尿処理問題にもっと研究費を投じてほしい。スキー場開発行為は、地元の人にとっては原風景が失われることを意味する。 (「山」549号)

「鳥海山における大規模スキー場開発についての要望書の件」

[自然保護委員会]

* 2月12日の常任理事会,14日の理事会を経て,23日に松本理事・澤井委 員長が八幡町に赴き,町長に要望書を提出。当日のテレビ,翌日の新聞各 紙で報道された。なお、16日の山形支部の支部会議の決定にもとづき、山 形支部はこの問題に介入しないことを同町長に表明した。

(1 · 2月自然保護委員会議事録、「山」549号1月理事会会務報告)

「HAT-Jシンポジウム――ヒマラヤの自然を守る懇談会」 〔関塚貞亭〕

* 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストは「ヒマラヤの自然を汚染しないために――テイクイン・テイクアウト」と題したシンボジウムと、 岡島成行氏の講演、懇談会を開いた。ヒマラヤ 4 団体関係者やヒマラヤ OB他が集った。出席者は63名。 (「山」551号)

[鳥海山南麓のスキー場開発方法の変更を求める要望書を提出] 〔松本恒廣〕

* ①延べ3.8*。のスキーコースとゴンドラリフトの建設は、「鳥海国定公園の保護及び利用に関する基本方針」に反する。②豪雪、冬季強風地帯のスキー場には危険が伴う。③南麓斜面の平均9度の斜度がスキー場として適切だろうか他の委員長名の要望書を提出した。八幡町長からは、地域活性化のためスキー場開発に理解を示してほしい旨の発言があった。

(「山」551号)

自然保護随想『自然保護の象徴・函南原生林を歩く』

[中井修二]

* 函南原生林は三島市などの水源涵養林として徳川時代から禁伐林とされてきた。樹齢700年、樹高20年を超すブナやアカガシの巨木と一期一会の出会いをし、自然保護に努める心を新たにした。 (「山」551号)

「山岳地域における環境保全シンポジウム――し尿・雑排水処理問題」

[科学研究委員会・自然保護委員会共催]

* 4月6日に開催。山小屋における処理の現状や試み(北アルブス燕山荘・ 尾瀬長蔵小屋など),環境庁の景勝地におけるし尿雑排水対策,既設のト イレを利用できない山域や冬山で,登山者はどのように排泄処理するのが 自然環境により好ましいかといった6つの演題について学者,山小屋経営 者,環境庁職員,自然保護委員が討議した。参加者は63名。

(自然保護委員会4月議事録,「山」548号)

勉強会「森林生態系保護地域について」

[自然保護委員会]

* 4月23日,ルームにて林野庁経営企画課の尾頭課長補佐を講師に、①林業と自然保護に関する検討委員会報告の概要 ②森林生態系保護地域の追加指定について ③人と森林とのふれあいの場の創造 (ヒューマン・グリーン・プラン) について、主に行政的立場からの説明を受けた後、質疑応答に移った。Q) リゾート法やグリーン・プランによって保安林解除が

容易になるのでは? A) 保安林制度は法律ではないが、非常に強いものであり、利害関係者は自由に意見が言える。むしろこの制度を利用して自然保護運動した例(青秋林道)さえある位だ。

(自然保護委員会5月資料)

自然保護随想『尾瀬の自然は護られている』

「中村武雄〕

* 尾瀬では観光登山者が目立つ。尾瀬の名物は、どんなお土産でしょうか とも尋ねられる。環境庁が中心になって、国立公園での文化の高い楽しみ 方を普及して行く必要を感じる。 (「山」552号)

「秩父自然観察山行――亜高山帯の森林と大型哺乳類の観察」 〔木名瀬 亘〕

* 奥秩父、小鹿野町(両神山の北)で自然観察山行を実施した。参加者は 31名。地元の山持ちの方を講師に頼み、カモシカの食害もヒノキの単一樹 相で起きるので、他種がまざれば避けられるなどきめの細かい観察山行が でき、保護運動の基礎を培った。 (「山」552号)

図書紹介『尾瀬 その風の中に』 毎日新聞社前橋支局編 〔蜂谷 緑〕

* 至仏山の荒廃のために消えていくホソバヒナウスユキソウ、アヤメ平の 危機、目的のないツアーの増加を憂い入園料問題へと導いている。この本 を読むことは、自らの「尾瀬問題」を反芻するよい機会になるに違いない。 (「山」553号)

自然保護随想『林業と自然保護』

〔伊藤 敞〕

* 林業の本質はコンサーベーションであり、正しい林業は自然保護に通じる。奥地天然林の大面積皆伐は、正しい手段の管理とはいえず、林業ではない。東大の北海道演習林の施業は、伐採もたえず行われているが、自然がみごとに保たれている好例である。 (「山」553号)

HAT-J講演会「回想のヒマラヤと環境保護」

* ビマラヤと環境保全をテーマに、映画・ビデオ・スライドを使い、堀田 弥一、今西寿雄氏ら4人の講師を中心に、パネラーと参加者全員による討 論を企画した。 (「山」553号)

「HAT-J清掃登山について

[自然保護委員会]

* 6月2日・上高地で、9日・丹沢の大倉尾根とヤビツ峠を中心に清掃登山を行なう。自然保護委員会は主に丹沢を受け持った。(6月議事録他)

「永年会員 中沢真二氏をかこむ談話会|

* 中沢氏は、尾瀬発電計画によって尾瀬ヶ原が水没するのを未然に防いだ 功労者の一人である。その経緯は会報「山」492号で掲載済みだが、満百 歳を迎えるに当って、尾瀬に関心の深い会員に話しておきたいという申し 出があり、山田会長他数名が拝聴した。 (「山」554号)

* 平成3年度の自然保護全国集会が6月29日に、越後支部、新潟県山岳協会、新発田市の支援のもとに開催。全国から100名を越す会員が集まり、基本理念の制定へと極めて有意義な討議が行われた。藤平副会長他の挨拶の後、地元の筑木会員による基調講演があり、14支部からの報告。テーマの討議は3氏への指名発言の後、種々の意見が交わされた。結論としては基本理念の必要性は賛成されたが、成文案については、各支部に持ち帰り検討の上、来年の全国集会で再確認する。 (「山」555号)

「村木前副会長"自然保護講演会"についての紙上討論(第2回)」

* 自然破壊は経済的な欲望によって行われる場合もあるが、世界的に見れば爆発的な人口増加による場合が多い。自然保護と地元活性化の両立では、単なる反対ではなく、村おこしの効果が上がるように地元を啓蒙する時代ではなかろうか。無論、絶対開発をゆるすべきでない山や地域はあろう(村木潤次郎)。 自然破壊を最小にする山登りが大切。生半可なお題目の列挙では実にならない(笠井 篤)。 (「山」555号)

図書紹介『山と自然と人間を愛して』筑木 力著

「小倉 厚〕

* NHK新潟放送局「朝の随想」を中心に今までの発表作品をまとめた著者の4冊目。山を思う、自然を愛する、山に取り組む等の6章からなり、ひとつの哲学とも言える見識が随所にうかがえる。 (「山」555号)

自然保護随想『山と人と (蔵王から)』

[大橋克也]

* 自然の中に生き、恩恵を受けている多くの動物、植物の一員にすぎない 人間なのだから、自然に謙虚な姿勢で接したい。幕営をすれば、自然に後 遺症を残しはしなかったかと思う心が大切だろう。 (「山」555号)

自然保護随想『ゴミと日本人』

[横山 隆]

* 日本人のゴミに対する公徳心の欠如には目を覆いたくなる。ゴミを捨て たら高額の罰金をとるシンガポールはきれいな街であった。自然保護の教 育は小学生のときから教えなければ駄目なのだという見解は正しい。

(「山」556号)

「HAT-」 山岳地域の環境保全に関する国際シンポジウムいよいよ開催! |

* 11月に開かれる標記シンポジウムの具体的なお知らせ。ヒラリー、メスナー、エルツォーグ、ボニントンらが、自然観、保護運動のポリシーを語る。東京会議の後、富山エクスカージョンが行われる。 (「山」557号)

「自然観察山行・尼ヶ禿山と玉原湿原」

[小倉 厚]

* 自然保護委員会では奥上州の尼ヶ禿山と玉原高原の湿原で、自然観察山 行を行った。講師の田村説三氏から植生の説明を受ける。かつての秘境中 の秘境も玉原湖の出現と山岳道路の整備で、自然破壊が心配され始めた。 土壌安定地区、攪乱地、谷筋と典型的な林相が観察され有益であった。

(「山 | 557号)

図書紹介『ブータン王国自然調査団報告』 富山県自然保護協会・日本山岳会富 山支部 〔田中外治〕

* ブータン政府は国外からの観光客収入の魅力を知りつつも、国内資源と バランスをとりながら受け入れをコントロールしている。国民は枯木しか 勝手に拾うことができない堅実なブータンの現状を伝えている。ブータン は零の上の天国、このままそっとしておきたい。 (「山」558号)

自然保護随想『遊びの意識を変える』

[塚本珪一]

* ヘリスキー客が頭上をかすめていき、自然破壊は遊ぶ側の倫理感によって左右すると痛感した。自然の中で遊ぶ時にできるだけ人工物を利用しないという原則を確立したいものである。 (「山」558号)

「登山家たちが"明日の山"を語った|

[江本嘉伸]

* 山に登ることにとりつかれた人類が、わずか半世紀の間に、そこを「攻撃」する姿勢から、「守る」姿勢に転じようとしている。「山岳環境保護国際シンボジウム・東京会議」はその現場であった。ヒラリー、エルゾーグ、メスナー、そしてミスロフスキーは「サウスコルのボンベ、高所のゴミは深刻な自然破壊ではない。人々の住む山麓の汚染にこそ取り組まなければならない」と私に語った。「それにしてもボランティアでよくここまでやれましたね」と、最後にボニントンはもらした。 (「山」559号)

「天狗さんと新緑の山歩き」

[中井修二]

* 丹沢自然保護協会副会長のシュトルテ氏 (天狗さん) の案内で, 畑尾山 のブナの原生林へと自然観察に出かけた。新緑の低山歩きからでも, 自然 保護の肝要を痛感した。 (「山」559号)

自然保護随想『山地活用と国土保全』

[上善峰男]

* 東京都民の森造成工事は、渓谷をコンクリートで固めるなど手荒な手法で啞然とさせられたが、昨年5月に開場した。しかし台風の猛威により、 1年余で崩壊・閉鎖された。自然に対する理念と心が不可欠ではないだろうか。 (「山」559号)

図書紹介『神々のみた氷河期への旅』 小野有五 (文)・大森弘一郎 (写真) [岩田修二]

* 空からみる北アルプス自然誌という副題があり、飛驒山脈の自然の成り たちを説明する。「双六氷床」の存在など小野氏の刺激的な記述、大森氏 の立体視可能なステレオ写真もすばらしい。 (「山」559号)

「立山全国集会報告——富山支部」

[石坂久忠]

* 「中高年登山者の立場」をテーマに開いたシンポジューム。登山人口の 増加による自然保護問題の啓蒙は急務。自然環境教育は、一人一人のモラ ルの高揚などの対策が必要であることを確認した。 (「山」559号)

「登山から見た自然保護」

〔筑木 力〕

* 山と人との関わり/登山マナーの原点/文明は自然と対立する/日本人の自然観にみられる矛盾/文明の利器が形成する技術環境/自然保護に関わる最近の事情/地球環境の保全に関する楽観論と悲観論と第三の考え/日本山岳会が当面する課題よりなる。平成3年度本会自然保護全国集会の基調講演に加筆したもの。日本人の公共美観に対する意識が低いのは、自然に対する日本人の甘え意識の表われである。

(山岳 第86年 20~29頁)

「日本山岳会・自然保護の歩み (1)」

[自然保護委員会]

* 明治38年 (1905年)~昭和50年 (1975年) 間の『山岳』と会報『山』に 掲載された自然保護に関する活動・随想・図書紹介などをピックアップ して,簡潔に紹介した。 (山岳 第86年 A36~A56頁)

平成 4年 (1992)

「HAT-J 国際シンポジウム (東京・富山) "世界の岳人一堂に" 山岳環境保護 を謳う!」 〔北村節子〕

* 昨年の11月9日・10日「山岳環境保護国際シンポジウム・東京会議」が、 12日には富山会議が開催された。当会をはじめ、日本の山岳界4大組織が 結集し、「山岳環境保護の重要さを多くの人に訴える」という当初の目的 を達成した。世界を代表する豪華な山岳人と、インド、ネパール、中国な ど地元の行政官たちまで、今日の山岳を語るにふさわしいメンバーが一堂 に会した。

* 『東京アピール』 ①高所登山の計画の中に、あらゆる廃棄物を持ちか える努力を明記する。 ②ヒマラヤを訪れるトレッカーは、村人との 相互理解を作り上げ、森林を維持するため薪を使用しない。 ③山岳 地域の観光については、環境美化教育を展開する。 (「山」560号)

シンポジウム報告「中高年登山者の立場」

[小倉 厚]

* 昨年9月,立山で標記シンポジウムが行われ,4名の講師の1人,水上 富山県自然保護課長の基調講演は、高地におけるゴミ対策、山小屋のし 尿浄化の問題、雷鳥の羽数増加による環境への影響等であった。

(「山」560号)

自然保護随想『女・子供の自然保護』

[山口悠紀子]

* その土地、その山の所有者、地権者が開発に賛成している場合、反対運動はできないのだろうか。「自然は子孫からの借りもの」である。未来の所有者、住人が美しい自然を望んだ時、復元が難しい開発を、現在の所有者がする権利を持っているのだろうか。 (「山」561号)

「自然環境保全のための観察山行――上越国境・稲包山」 〔関塚貞亨〕

* 稲包山周辺は「ぐんまリフレッシュ高原リゾート」構想の一環として、 国土計画(株)と中之条町、新治村が第3セクター方式で、スキー場他の 施設計画をもっている。山頂のすぐ隣は筍山の苗場スキー場だったが、稲 包側のスキー場予定地は狭く、むしろ岩菅、焼額へと続くクロスカントリー スキーコースの適地では、と感想をもらす委員もいた。 (「山」561号)

「山研改築委員会報告"山研と自然エネルギー"」 〔坂本正智〕

* 自然環境保全が叫ばれている折、新しい山研建設プランの中に「自然エネルギー利用計画」がある。山研裏手の善六沢の水流を利用した1~5 kwの小水力発電装置を設置しようと進めている。 (「山」562号)

自然保護随想『豊かな自然と個性ある人間の共生を目指して』 [中谷絹子]

* リゾート法の名のもとに行われている自然破壊は、人々の余暇時間のす ごし方のワンパターン化を促がし、擬似自然と過ごすことを一層進めさせ るものである。個性ある過ごし方を提唱したい。 (「山」562号)

「日本山岳会の自然保護についての基本理念 (案) まとまる」

[自然保護委員会]

* 平成3年度の自然保護全国集会後も、標記理念の文案を検討していた自 然保護委員会は、4月定例理事会に、前文および5項からなる「基本理念」 を提出した。 (自然保護委員会3月議事録)

「自然観察・日だまり山行――大野峠から旧正丸峠へ」 [小倉 厚]

* 自然保護委員会が年2回実施する自然観察山行を奥武蔵の古い峠を結んで行った。講師は田村説三委員、参加者は24名であった。大野峠への山道は江戸時代からの林業地で見事な杉林であった。 (「山」563号)

自然保護随想『自然保護と開発のはざま』

[佐藤一栄]

* 独立採算制のノルマを負わされた林野庁の広報誌から、平標山近くに別 荘地開発が行われることを知った。苗場山麓スキー場群の観光事業にとっ て山の尊厳は一顧だにされていない。スキー客、登山客がまき散らすゴミ を拾い集めながら異常な光景に目を覆いたくなる。 (「山」563号)

自然保護随想『フツウの市民にできること』

(市川義輝)

* 清掃登山などの美談を、日本のマスコミは取り上げたがり、時に捏造するが、そうした姿勢は企業が行っている大規模な自然環境の破壊から、善意のゴミ拾いの当事者や、一般視聴者・読者の目をそらせることにつながらないだろうか。ネパールで植林する同胞に心が動く。 (「山」564号)

自然保護随想『ゴミ拾い』

〔穴田雪江〕

* 「山に登る」ことと「自然保護」に、甚だしい矛盾を感じるようになった。下を向いてゴミを拾うだけでは身近かな自然さえ守れないだろうが、 私にできるゴミ拾いを続けたい。 (「山」565号)

「秩父多摩国立公園・豆焼沢の現地視察」

* 7月25~26日,5人の委員が視察した。国道140号・雁坂峠の下を掘削工 事中だが、土砂を沢に投棄し、沢が埋っている。国道工事という名の下に 自然破壊が行われている。 (自然保護委員会・7月議事録)

勉強会「地球サミットの現場から」

* 6月3~14日, ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された「地球サミット」に取材記者として参加した滑志田委員からの報告。氏が作成した大部な資料を各自で学習した。 (自然保護委員会・7月議事録)

「HETによるヒマラヤ・コード――ヒマラヤで正しく行動するために(ヒマラヤ・

環境・トラストの行動規約)」

* ヒマラヤの環境を守るため、ここを訪れる人は次の規約に従うことが求められる。『自然に対するルール』として、キャンプ地で/森林をこわさない/ゴミの焼却場所/ガイドやポーターに等の5項の他、『人々の生活に対するルール』として4項目の規約を定めている。 (「山」566号)

「鳥海山を守る闘い」

(池田昭二)

* 鳥海山に大規模スキー場を作ることに反対する署名は2万人を越えたが、地元の八幡町民は7人だけ。地元では反対しにくい環境が作られていたが、最近「鳥海山の自然を守る会」に理解を示す住民も現われ心強い。 (「山」567号)

自然保護随想『酸性雨』

〔渡辺 徹〕

* 日本でも強い酸性雨が観測された。中国の重慶・広州等から放出される 大気汚染物質は想像以上のものらしい。日本の脱硫装置等の技術が中国の 工業地帯でも生かされることを望みたい。 (「山」567号)

「自然保護全国集会――基本理念に, 白熱の論議」

[松本恒庸]

* 「山の環境破壊を考える」をテーマに掲げた平成4年度の全国集会が、京都支部・関西支部の支援を得て、15支部77名の会員を集めて開催された。 議題の「自然保護の基本理念の制定について」は、昨年と同様な賛成意見、 具体的な活動が先である、行動指針としてとらえるべきではないか等白熱 した。各支部からの報告の後、田部井委員よりHETの行動規約の紹介。遠 藤京子会員からはカラコルムでの植樹への協力依頼があった。

最後は、「山岳地域における特定自然の実態調査」について、関塚委員がスライドを用いて手法を紹介し、各支部でも見直し作業をと勧めた。

(「山 | 567号)

勉強会「三頭山の台風被害について」

* 元東京都林務課長・栗原 浩氏より,三頭山に「都民の森」を作った経 緯および台風12号で大きな被害を受けた状況,また本年4月末に一部再開 した件などの説明を受けた。 (自然保護委員会・9月議事録)

海外の山「セイブ・エベレスト」

[江本嘉伸]

* 山岳環境保護の目的から、エベレスト登山の規則が大きく変わることとなった。本年5月12日のエベレスト登頂者は32人。ネパール当局は登山料の大幅引き上げと、ゴミの「本国への持ち帰り」を義務づけた。「クンブ地域の環境保護のため」という。 (「山」568号)

「富士山をめぐる最近の話題」

 $[Y \cdot M]$

* 地球サミットがブラジルで開催された年ということで, 静岡支部でも「富士山の森林限界の研究」を記念行事の一つにした。その他, 静岡県内では富士山に関する崩壊防止対策等々の研究会やイベントが開催された。

(「山」568号)

自然保護随想『山水経にみる山』

〔篠崎 仁〕

* 自然を仏教的に解釈している本が『正法眼蔵』であるという。現代における自然環境の危機的状況に際して、人間と自然の不二一如を信じて疑わない伝統的な自然観の良さをとらえ直してみるのも山の功徳であろう。

(「山」568号)

「三頭山と都民の森を歩く――環境月間の行事として」 [木名瀬 亘]

* 秩父多摩国立公園の重要な水源地の一つに秋川奥の三頭山がある。平成 3年8月の台風12号による豪雨で、奥多摩周遊道路は今までになく大規模 に崩落した。山岳地帯における無理な道路施工がいかに自然破壊を伴なう かを如実に示している。三頭山の周遊道も台風禍により未だ随所で通行止 になっているが、山は落着いた雰囲気で樹相の移り変りの興味ある地帯で あった。ごみはめっきり減っていた。参加者28名。 (「山」568号)

「自然保護委員会の行動指針について」

[澤井政信]

* 本年度の自然保護全国集会で「行動指針」が採択された。将来は「日本 山岳会の自然保護の理念」となるように努力していきたいとして、基本理 念の必要を感じたきっかけ、小委員会による起草準備、平成3年度・4年 度の自然保護全国集会での種々な意見、その間の各支部自然保護委員や会 員あるいは本会指導層の見解など、これまでの経緯を紹介している。

(「山」569号)

「日本山岳会自然保護委員会の行動指針」

[自然保護委員会]

* 前文のあと、①地球環境、生態系の維持や復元に積極的に貢献する。 ②わが国の山々を破壊から守って後世に伝える。 ③登山行為の認識。 ④過剰な利便性の追求を監視する。 ⑤海外登山に際しての配慮。の5 項からなる行動指針の紹介。 (「山 | 569号)

「クリーン度の高いナムチャバルワ峰遠征隊」

[市川義輝]

* ナムチャバルワ登山隊の荷造りには隊員の他、学生部、青年部、総務など多くの会員が助勢した。自然保護委員会から少しだけ手伝った際の印象

を「食糧等について」、「根包資材について」、「装備について」等に分けて 詳細に報告している。 (「山」569号)

海外の山「東チベットからの朗報」

[江本嘉伸]

* 未踏峰ナムチャバルワは、日中合同隊により、ついに登られた。撤収に あたって重広隊長は、中国側責任者、協力員たちと第二キャンプに残った。 「ベースでも毎日掃除。タバコの吸殻捨てたら怒られる」と3年間この山 に取り組んだ中国側隊員が教えてくれた。「山を汚さない」が、この隊の 合言葉であり、何も残したくない、と考えたのだ。 (「山」570号)

自然保護随想『保護と保全』

[田村説三]

* 絶対に手をつけずに守らなければならない(保護)優れた自然もある。 しかし、多くの場合、その自然の恩恵を受けられるような、上手な自然の 利用のしかた(保全)を基本に据えていかなければ、矛盾は大きく広がる ばかりである。 (「山」570号)

図書紹介『ライチョウ』 大町山岳博物館編

[松沢箭夫]

* ライチョウの生息地域がせばまり、個体数が減っていることが知られて 久しい。本書は生態を知ることにより絶滅をくい止めようとした大町山岳 博物館の人達による飼育実験活動の報告である。 (「山」570号)

「名誉会員を囲む会」

 $[Y \cdot M]$

* 今年の会では、自然保護の問題に話題が集中した。「創立当初よりの経 線はあるが、昨今は地球全体の問題にまで発展し、多くの団体が活動す るようになっている。JACは登山者の集りだから、やるべき内容をしぼり、 方針を明確にしていった方がよい(田口)」他の貴重なアドバイスを頂い た。 (「山」570号)

「IMF会議に出席して」

[大森弘一郎]

* インド登山財団が主催した、ヒマラヤン・マウンテニアリング・アンド・ツーリズム・ミートという会議に会長代理として出席した報告。会議の内容には、環境破壊の防止、ヒマラヤ地域での清掃登山等が含まれ、300人程の参加者の中にはボニントンら旧知の顔があった。

([山| 571号)

「国際山岳連盟 (UIAA) 松本集会」

[鈴木郭之]

* 今回の総会の特色に、UIAA総会出席者全員と地元の人々を加えた環境 シンポジウムの開催があった。これはUIAA初の試みであった。日本から は、HAT-J代表の田部井氏がエベレストでの体験を、日本ヒマラヤ協会の 尾形好雄氏(会員)が、群馬岳連隊の冬期エベレスト登山における降ろ したゴミの最終集積地の問題点等を報告した。

UIAA自然保護委員会は、毎年9月19日、20日をクリーン・マウンテン・ディとして、国際的な伝統行事日としたい等を提唱した。(「山」571号)

「UIAA 松本アッピール (原文=英文) |

* UIAA松本会議で、山岳環境保護に関して、我々は次のようにアッピールするとして、ヒマラヤ環境トラスト(HET)が出した行動規約に言及している。4項からなる。 (「山」571号、および同566号を参照)

自然保護随想『避難小屋を清掃する』

[山口悠紀子]

* 船形山に仲間と登った折,先行した仲間が,山頂の避難小屋を清掃していた。後から着いた地元勢の2パーティから「東京の人に掃除してもらって申し訳ない」と言われ、早速交流の輪が広がった。 (「山」571号)

「自然保護委・ライオンズクラブを支援」

[小倉 厚]

* ライオンズクラブの「高尾山の自然観察と山をきれいにする活動」計画 に際して、自然保護委員会は中村武雄委員を中心に、全面的に支援した。 当行動に対し、ライオンズクラブ(東京北部第8リジョン)は、後日大森 常務理事、池田委員長を招待して、JACの自然保護活動にと50万円の寄付 をした。当日(11月8日)の参加者は約200名。 (「山」571号)

「山々の環境問題について登山家たちは、何を語ったか――1991年山岳環境保護 国際シンポジウムから」 (江本嘉伸)

* HATの標記シンポジウム・東京集会に、提唱者のヒラリーの他、エル ゾーグ、ボニントン、メスナー、ミスロフスキーら多数が参集した。基 調講演を行った4人の登山家の認識は、ヒマラヤへの入山制限と、持ち こんだ物は、全て持ちかえられなければならないという指摘で一致して いた。基調講演には、山岳を抱く「登られる側」の出番がなかったのは 寂しかったが、ネパールのポカレルによれば、サガルマータのゴミの総 量は50トン以上という。

アメリカのマッコーネルは、チョモランマ清掃登山隊を組織し、汗を かいた人間だけに説得力のある話をしたが、「本当の危機はゴミではない。 人口の過密と森林の破壊だ」と重要なことを話した。

(山岳 第86年 7~20頁)

「日本山岳会・自然保護の歩み (2)」

[自然保護委員会]

* 昭和51年 (1976年) ~昭和63年 (1988年) 間の『山岳』と会報『山』に 掲載された自然保護に関する活動・随想・情報・図書紹介などをピック アップして、簡潔に紹介した。 (山岳 第86年 A59~A84頁)

平成5年(1993)

平成 4 年度年次晚餐会

[高田眞哉]

「ナムチャバルワ、山研改築 二大イベント達成も併せ祝う」

* 病欠の山田会長に代わって藤平副会長が、会の現況を報告した。とくに環境問題にふれ「支部長会議で"登山と自然保護、環境保全との調和について、若い登山家に考えて対処する"ように要望。また日本の山も国際化時代を迎えて、どのように考えたらよいか、海外の山へ登るときに、その国の伝統文化を汲みとって悠しい。環境問題はグローバル、地域的の両面から対処することが課題である」と語った。 (「山」572号)

海外の山「ビスケットを作って南極を歩く」

[江本嘉伸]

* 歩いて南極点までたどり着こう、と「アンタークティックウォーク南極 点探検隊」の吉川謙二隊長ら3人の日本人青年は、一人140キロの橇を曳 いて頑張っている。吉川隊長は「到着すること自体が目的ではない。環境 調査が目的」と20⁺。ごとに雪を採集。環境汚染のデータを持ち帰る方針。 悲壮感のない奮闘ぶりがいい。 (「山」572号)

「ブロードピーク登山と植林トレッキング隊員募集」

[小倉 厚]

* 長年に亘る登山活動や軍事駐留などにより樹木の荒廃が著しいパキスタンで「ヒマラヤの緑を取り戻そう」とブロードビーク登山隊(隊長・関根幸次)が、登山活動の中で植林を計画、バイユで柳の挿木1,000本を植えるため、ヒマラヤン・グリーン・クラブを組織、募金活動を開始した。

(「山」573号)

図書紹介『森を考える――白神ブナ原生林からの報告』 根深誠編著〔近藤 緑〕 * この本を読んで、自然保護とは「人も自然も」生き残るための唯一の道 なのだということを、改めて考えさせられた。 (「山」573号)

講演会「登山者による自然破壊について考える」

〔横山 隆〕

* 自然保護委員会主催、小野有五北大教授は①植物や動物に与える影響、②ゴミとし尿の問題、③登山者自身が歩くことによる浸食、④とくにヒマラヤなどで行なわれている燃料として用いる木材の伐採について、に分類し、とくに③の問題の実際的な破壊状況、この対策について提言された。 (「山 | 573号)

「森を読む」講演会を聴講して

〔早川 滉〕

* 集会委員会が主催,東京大学総合研究所資料館,生物系助教授大場秀章 先生による10月,11月の二回に亘る講演の報告。森のイロハから始まり地 球規模の専門的な最高レベルの一端まで話は幅広く、解り易かった。

(「山」573号)

自然保護随想『自然体験の試み』

[蜂谷 緑]

* 戸隠の森林植物園で探鳥会をしていた時、にわか雨にあって50人ほどの 参加者は、思い思いに樹の下に身を寄せた。雨宿りの人々は、おのずとブ ナやカンバの木陰にたたずみ、誰も針葉樹の下に行こうとしなかった。

(「山 | 573号)

「韓国山岳会との会談に関する報告 (上・下)」

[大森弘一郎]

* 韓国と富山の間に直行便ができ、韓国から北アルプスへ登る人が増えてきた。言葉のできないこと、習慣の違いなど、トラブルも予想される。昨年、韓国山岳会の孫慶錫副会長が松本へみえたときに、JACと韓国山岳会の幹部が話し合いを持つことが決まり、92年11月末に藤平副会長(当時)らが訪韓、韓国山岳会幹部と懇談した。話し合いを参考に、後述(山580号)の四ヵ国語による「北アルプス自然保護・安全登山案内書」が完成、関係方面、山小屋などに配布することができた。 (「山」574号、575号)

「すべての会員に考えてもらいたいこと (1)(2)」

〔羽賀克巳〕

* 私は「日本山岳会の自然保護活動に基本理念が必要」と考えている。山岳会は創立当時から山岳の環境保全について格調高い理想をかかげ、その伝統を受け継いだ松方氏ら諸先輩が自然保護運動に取り組み、実績を積んできた。戦後の高度成長、バブル期を経て、バブル崩壊後も山河の荒廃は進んでいる。山岳会々員は創立の理想と伝統を想い、「いま何をなすべきか」を考えて行動し、諸先輩の功績を後輩に誤りなく伝えよう。

(「山」574号, 575号)

自然保護随想「保全と管理の必要性」

〔片岡博〕

* 多くの登山者が訪れる尾瀬は、彼等によって持ちこまれる種子の芽生え と繁茂が原を変ぼうさせている。同じような問題が各地で起っている。あ るがままで手をつけず自然の遷移にまかせる考え方もあるだろうが、いま、 ある自然を、そのままの姿で残していくとなると、管理をしていかなけれ ばならない。それも容易なことではないだろう。 (「山」574号)

「背理を生きる自然保護」

「笠木 力〕

* 「自然環境を保護するためには破壊源の人間を滅ぼす必要がある」という背理の中で、我々人類は生きていかなければならない。ブラジルの地球サミットでは「持続可能な開発」という至難な課題が採択された。我々が自然保護を考えるとき、人間集団が背負う背理を自覚して問題を善意をもって、誠実に探索していくことで活路が開ける。 (「山」574号)

自然保護随想『猿焼き山のゴミ』

[山口悠紀子]

* 11月中旬に道志の猿焼き山に登った。山頂に空き缶、スチロール皿、アルミ箔などが散乱していた。人も少ない不遇な山なので、拾って帰ってきた。登山者が山を破壊し、、生態系を狂わしているそうだが、私は山の被害を最小限にとどめ、山に入らせてもらっている。そんな山歩きを続けたい。 (「山 | 575号)

南極旅行 アンタークティックウォーク南極点探検隊 副隊長 [松原尚之]

* 「山」572号「海外の山」で紹介された「環境調査が主目的」だった探 検隊が、67日1,100⁺。を140⁺。のソリを曳いて、無事に南極点に達し、任 務を果した。 (「山」575号)

自然保護随想『みんなが渡れば恐くない』

[小倉 厚]

* 山を歩いていて稜線に立つと忽然と眼下に広大なスキー場やゴルフ場の 開発によって荒らされた自然をみて、がく然とすることが多くなった。狭 い国土に、こんなに多くのゴルフ場が必要か、水源を汚し公害が歴然とし ているのに、多くの愛好者がいるからといって、公共放送や報道が、プロ ゴルファーをもちあげ、ゴルフを大きく取りあげすぎているように思う。 (「山」576号)

「ザゼン草自生地から正丸峠」

[山口悠紀子]

* 自然保護委員会が主催し、登山者によって崩壊した登山道と、長い年月 をかけて出来あがった峠道を対比して歩く、自然観察と日だまり山行の企 画だったが、雨が降ったために伊豆ヶ岳への崩壊地登山はカットした。

(「山」576号)

自然保護随想『遊びの中の祈り』

〔池田 剛〕

* いま登山をとりまく環境は、すべてに豊かになり、有難い世の中になった。古代人は謙虚に自然と接し、自然のあらゆる事象に霊魂・神を感じ、 そして自然への畏怖が祈りへと昇華していった。いま山へ登る人たちは、 人間の行為のなかに潜む祈りの心と対峙してみることも無駄ではあるま

([山| 577号)

Via

「山の自然保護を考える 第一回シンポシウム」

[小倉 厚]

* 自然保護委員会主催,4月10日青山学院講堂で72人の参加を得て,実施 した。講師は「横山隆一氏」(自然保護協会保護部長)「小泉武栄氏」(東 京学芸大学教養学部助教授)「松本清氏」(フリージャーナリスト,巻桟 山の山道裸地化の縮少と自然の復元に取り組み中)「水上憲宗氏」(戸隠 を守り育てる協議会会長)の四人。基調講演と質疑応答の報告。

(「山」577号)

「あえて艱難に挑み前進を」

[会長 藤平正夫]

* 私なりにとらえている今度の問題は「創立90周年への取組み」「多様化、 大規模化した会の組織化」「若年層会員の増強」のほか「環境保全と国際 化に対しては、論議する段階ではなく、具体的解決を迫られている」関係 諸団体と協議しながら、理事会などで討議して具体的手順を決めていきた い。 (「山」578号)

「第47回ウエストン祭 新緑の上高地で開催」 信濃支部 〔東 秀樹〕

* 6月6日の碑前祭で主催者の赤羽支部長の挨拶,藤平正夫山岳会会長のお話し、ともに自然保護問題に触れているのが印象的だった。赤羽支部長「少しでも昔のままの自然を大切に」藤平会長「日本の山は素晴らしいと国際的にも評価されており、外国の登山者も増えた。しかし自然は非常に脆い。ウエストンさんの遺徳を偲び、上高地の自然を大切に守っていきたい」。また「ナムチャバルワ初登頂」を講演した重廣恒夫氏も「自然は我々だけのものではななく、いかに後世にそのままの姿を伝えていくかにかかっている」と結んだ。 (「山」579号)

自然保護随想『山の清掃運動とゴミ』

[関塚貞亨]

* 山の清掃も、単に山のゴミを山麓におろすだけでは解決しない。里もゴミの処理に難儀していて、麓におろされた山のゴミを里の役所が処理に困るケースもでている。奥多摩の山のゴミが、再び日の出町のゴミ廃棄場に埋めもどされていったら、はたして環境にプラスになっているのか疑問だ。 (「山」579号)

「日本山岳会が包含する 当面の問題点について」 〔会長 藤平正夫〕

* 会報「山」578号「あえて艱難に挑み前進を」を、さらに詳しく敷衍した。 とくに「社会的問題となった環境保全の問題は、当会の動向が問われるこ とが多くなってくる。外国からの登山者も増え、国際化とからんで、いわ ゆる業際の問題であり、単に登山の問題でなく文化摩擦でもある。必然的 に日山協、UIAAとの関係にもかかわってくる。私は壮大な長期計画は好 まない。個別の実行計画の積みあげが、実務的である。柔軟性、弾力性を 重視したい。 (「山」580号)

「4ヵ国語の"北アルプス自然保護・安全登山案内書"を作成 [大森弘一郎]

* 海外からの登山客の増加に伴い、言葉や習慣の違いから戸惑われることがないように、自然保護委員会が作成した。夏山用、冬山用に、それぞれ 8項目の留意事項を列記したパンフレットで、山小屋、中華民国、韓国山 岳会に配布した。別項でパンフレットの全文も掲載している。

(「山」580号)

「自然保護運動に活躍する九州山岳人」

〔山田 格〕

* 九州地区で自然保護に活躍している主な団体の紹介。「九州背稜の原生林を守る協議会」「大崩山登山道路建設に反対の会」「九重連峰の混雑と坊ヶツルのわだち跡」「諫早湾干拓工事と渡り鳥対策」の四つの活動を述べ、ほかに天草などの自然環境破壊につながる話、など中央で気づかぬ自然破壊の計画が目白押しで、これに反対する人たちも大勢いて心強い。
(「山」580号)

自然保護随想『知識と行動は別?』

[関塚貞亨]

* 登山者には大別して二つのタイプがある。野草や虫をよけて歩いている 人,無頓着に野草を踏みしだいて歩く人,しかし無頓着に歩いている人が トラスト運動やブナ基金の金集めに功績をあげたりするから,人間という 存在は複雑である。 (「山」580号)

「環境庁長官表彰を受けて」

[藤平正夫]

* 第35回自然公園大会で,藤平正夫会長は長官表彰を受けられた。授賞式 は7月28日,皇太子,同妃殿下が臨席して山口県秋吉台で行なわれた。長 官表彰は団体2,個人7で,上高地五千尺の藤沢氏も受賞した。

(「山 | 580号)

会務報告・委員会運営方針

[大森弘一郎]

* 自然保護委員会は「自らの活動実績で対外発言力を増す」という方針で進める。各委員のやりたいテーマを中心に部会を設置。とりあえず①ミニコミ部会 ②海外文献部会 ③子供の自然保護教育部会 ④定点観測部会 ⑤視察山行部会 ⑥森部会 ⑦鳥海山部会,を設置した。

また自然保護の活動実績を増やす目的で「自然保護専門委員会」を新設

した。今年は①日本アルプスの自然保護重点地区を空陸からウオッチし、 対策を打ち出す、②若年の自然保護指導者の養成、のため指導を行なう。 (「山」580号)

「自然保護に関する図書紹介の集い」

[自然保護委員会]

* 本会図書室に山の自然保護関係の洋書54冊が入った。岡島成行会員が渡 米中に選んだもので、10月22日ルームで書籍が紹介された。

予告 (「山」580号)

「山の破壊を見る――武甲山」

[自然保護委員会]

* 11月14日(日)西武秩父駅に集合し、武甲山山頂から石灰岩採掘の作業 現場を見た。 予告(「山」580号)

「マッキンリー気象観測プロジェクト」「山岳自然保護活動」基金のためヒマラヤ大型絵葉書を頒布 〔科学研究委員会,自然保護専門委員会〕

* ヒマラヤ空撮大型ポストカード10枚組みを2,000円で頒布,この利益を, 両委員会の活動に使う。 (「山」580号)

「自然保護委員会・ミニコミ部会『木の目草の芽』を創刊」

* 生まれたばかりの本小冊子には、自然保護に関心を寄せる会員の誰でもが、自由に投稿でき、毎月第一火曜日夕方からの公開編集会議に参加できる。発行は隔月。『自然破壊の惨状は、そのまま人心の荒廃を物語っているのだろう。自然を大切にすることは、つまり人間を愛することにほかならない。』が創刊の言葉。「日本山岳会の自然保護はどうあるべきか」というテーマ等を追求していく。創刊号の主な記事は、「丹沢山塊ブナ林枯死の原因探れ」、「中高生100人・ハバロフスク自然探検隊」、「現地報告・鳥海山南麓大規模スキー場開発問題の現状」、「山の自然保護を考える」、「"鳩待通り"を歩いてきました」 (創刊号発行:1993年9月10日)

「韓国・国際環境保存講演会に参加して」

[大森弘一郎]

* HAT-Jが主催し、大韓山岳聯盟が共催して、9月5日ソウルで行なわれた。 藤平会長は「環境問題の取り組みは各国の共通認識になった。国際的な文 化の融和は、時間をかけて個人と個人の接触をふやしていく必要がある。 重廣恒夫評議員「美しいヒマラヤを後世に残すために、持ちこんだものは 持ち帰るのが原則、しかし限界への挑戦であるため100%持ち帰っていな いのが実情だ。未知の世界に挑戦する権利を使うために、最大限山を汚さ ない努力が必要だ」。シンポジウムの最後に大森から「4ヵ国語・環境と 安全登山パンフレット」を配布した。 (「山」581号)

「環境保護に意欲的な台湾を訪問して」

[大森弘一郎]

* 「山」580号で紹介した「4ヵ国語の北アルプス自然保護・安全登山案 内書」作成にあたって、中国語への翻訳などで中華民国山岳協会の蔡会 長ら幹部にずいぶんお世話になったので、パンフレット完成を機会に7 月18日~21日に藤平会長とともに訪台した。 (「山」581号)

自然保護随想『夢の上高地鉄道』

[関塚貞亨]

* 上高地はマイカー規制にかかわらず、観光バスなどの渋滞が続き、排気 ガスの公害も心配だ。安曇村が計画している上高地鉄道に期待したくなる が、釜トンネルをラックレールの鉄道が走れば、厳冬の上高地も観光客が 溢れるおそれもある。上高地鉄道は夢のままにしておくべきか。

(「山」581号)

図書紹介 『レッドデーターブック日本の絶滅危惧植物』日本植物分類学会編著 「大沢雅彦」

* この本の元は1989年に自然保護協会と世界自然保護基金日本委員会が設置した「我が国における保護上重要な植物種および群落に関する研究委員会」の種分科会がまとめた「我が国における保護上重要な植物種の現状」 (1989年発行)であるが、種や生育地のカラー写真をふんだんに取り入れ、美しく見やすくなっている。 (「山」581号)

「山の自然学現地講座」通年参加者募集

[白然保護専門委員会]

* 「山」580号で案内した講座の募集案内。月1回1年間続ける。

(「山」581号)

「平成五年度自然保護全国集会」

『日本山岳会の自然保護はどうあるべきか』

[小倉 厚]

* 9月11~12日,尾瀬の玄関口,戸倉の「ロッジ長蔵」で開催した。全国 11支部を含め参加者は57名。群馬県の商工労働部副部長の吉田茂作氏を講 師としてアヤメ平の植生復元状況を有志25名で視察した。支部報告,自然 保護委員会の活動報告の後,懇談会。12日は午前中に全体会議に続き,分 科会。A)自然保護とリーダーの役割,参加者15名,B)自然保護のため のボランティア,参加者9名,C)自然破壊に対する反対運動,参加者16 名,に分かれ討論。締め括りに藤平会長が講評を行った。(「山」582号)

自然保護随想『田舎に住んでみて』

「小倉 厚]

* 都会と農村を住み分けて5年目になった。都会にあって考えていた自然

保護と、農村に住んで実感する自然保護とは、かなりずれがあるように思う。都会では何もかも自然のままがよいという考えが支配的だが、生活基盤を農山村におく場合は、それでは全く困る。 (「山」582号)

「会務報告 9日定例理事会」

* 自然保護委員会,自然保護専門委員会の活動。 (「山」582号)

自然保護随想『保全と安全の面立』

[関塚貞享]

* 首都圏近郊の低山の登山道は、丸太を組み合わせた階段など、歩くリズムに乗りにくい登山道が多い。中高年登山者など足の弱い者は、登り下りに階段を避けて、道の両側の歩き易い草地を歩くようになり、裸地が広がってしまう。登山道の丸太の土止めが不完全で、障害物のように登山道に立ち塞がってしまって、道になっていないところもある。登山者の安全を無視した登山道は、環境破壊を速めるだけだ。 (「山」583号)

図書紹介 『山の自然学入門』小泉武栄・清水長正編

〔児玉 茂〕

* 山の地形を研究する若手グループ (寒冷地形談話会) が、北海道の利尻 岳から屋久島の宮ノ浦岳まで60座一地域について視覚的に目立つポイント を研究成果に裏付けられた平易な文章でまとめた。 (「山」583号)

会務報告 10 月定例理事会

* 自然保護委員会, 自然保護専門委員会の活動および現状報告。

(「山」 583号)

図書紹介 『森を考える 白神ブナ原生林からの報告』根深 誠編著

〔滑志田 降〕

* 日本海型の典型的ブナ林を主体とする原生的な天然林は、わが国屈指の森林景観として名高い。その生態系を保全し、遺伝子資源を後世に伝えるため、国は白神山地の主要部分を森林生態系保護地域、自然環境保全地域に指定し、世界遺産条約の自然遺産として登録することも決まった。しかし、そこまでの道は険しかった。本書は約10年にわたる保全へのたたかいの過程を再現し、その歩みを年次的に整理した記録集である。

(山岳 第88年 173~175頁)

あとがき

この企画が実現したきっかけは、数年前の委員会にさかのぼる。

委員の近藤 緑さんが「古い山岳を読むと、山岳の荒廃を憂え自然保護を訴える記述が目につく。発起人をはじめ草創期の長老たちは、自然保護の先覚者だった」とい

う意味の発言をしたことがあった。それから幾許(いくばく)かのときが過ぎて、当時の委員長だった國見利夫氏が、B4版で十数ページに亙る資料を委員会で配った。 それは、昭和五年創刊の会報1号から最新の会報までの自然保護に関係する記事の総目録で、委員長が、ひとりでコツコツと調査した労作であった。

また、しばらくのときが過ぎて、委員会有志による小委員会が組織され、市川義輝委員を小委員長として、十数人の委員が山岳の明治期、大正前期、後期、昭和10年まで、というように、また山岳、会報は別に分担して調査、ようやく山岳第86年(1991年刊)に1905~1975年までを、山岳第87号(1992年刊)に1976~1988年(昭和51~63年)までを、そして本号(1994年刊)に1989~1993年(平成元年~5年)までの関係記述を載せることができた。

ひと仕事終えて、小委員の一人としてふりかえると、山岳13年(大正7年)の巻頭の扉を飾っていた「登山道徳」と題する福地信代戯言という漢詩を載せなかったので、前半の四句を収録する。『岩石草木 置之山岳 不敢毀傷 徳之始也』なかなか立派な詩だ。また山岳の雑報欄に埋まって見落としてしまった大正8年の「田中子爵の白馬大池調査」の小記事を載せなかったことなども悔いが残る。湖沼学の権威は「水温が低く、養魚には不適、経済的価値なし」という報告を寄せている。現在の思考で非難してはいけない。その時代は「十和田湖の養鱒の苦闘と成功の物語」が美談であり、つい最近まで富国と地域振興が、第一の目標だったのである。

また、会報 (5号) その他に載っている高野鷹蔵さんの「老兵の嘉門次物語」の一節「何時の頃かは知らず、上高地の木が殆ど全部伐られてなくなってしまった。しかし翁は、六十年もすれば元に戻るよ、と平然としていた」という話、自然保護に直接に関連する話ではないような、あるような、載せるべきだったかどうか、いまでも迷っている。

このほか、明治、大正の山岳に記事を寄せている発起人を始めとする長老がたの謙虚さについて、敬意というか、ある種の感慨を抱いたことについて触れたい。例えば、山岳第13年の雑報欄に梅沢親光さんが「机上談山」という小見出しで7ページに亙って珠玉の山岳保護論を書いている。いまなら巻頭にもってきたいような記事である。実物を見てもらえば分かるが、発起人であるがゆえの謙虚さと言うのか、いささか自画自賛になるが、よくぞ見つけたというような目立たない扱いである。

梅沢さんについては、田部重治さんの著書のなかで秩父会の項にでてくるが、その 事績についての記述は少ないように思う。そして大正15年に急逝した。山岳会にとって大きな損失であった。いま環境問題が世人の注目を浴びているとき、この珠玉の記事の発見に、何か因縁めいたものを感じるのは担当者だけであろうか。

もう一つ,同じ山岳第13年の「大町山案内人組合」規約の一部『濫りに樹木を伐採するな』も大正7年のこととしては画期的なものであろう。この記事と関連して、思い出すのは、深田久弥氏の著書のなかの光岳登山の項に「案内人が、テントのそばに立っている大木を、鬱陶しいや、と切り倒す」記述がある。現代の思考で、その案内人や、深田さんを非難するのは的外れ、というものであろう。誤解を懼れずに言えば、

現代では許されることではないが、麓まで辿り着くのでも大変だった当時の南アルプス南部で降りこめられ、その憂鬱を払うように、案内人は行動したのであろう。当時の南アルプスの雰囲気を伝え、ある種の爽快さを感ずる名著を非難する気は毛頭ない。当時の北アルプスと南アルプスの自然や林相の違いを示す例として、あてえとりあげたまでである。

さて,この企画の完成までには,先に述べたように十人前後の委員が関わった。そして,市川義輝委員(以下,敬称略)が総括責任者となって取纏め,下記の各委員が,いくつかの時代に区切って、調査をした。

『山岳』および関係誌

明治39年~44年	近藤 緑	大正元年~7年	市川義輝
大正8年~14年	関塚貞亨	昭和元年~19年	澤井政信
昭和20年~29年	池田 剛	昭和30年~39年	國見利夫
昭和40年~44年	田中茂夫	昭和45年~50年	斎藤かつら
昭和51年~55年	武田満子	昭和56年~平成元年	山口悠紀子
平成2年~4年	市川義輝	平成5年	関塚貞亨

「会報」

昭和5年~平成元年	横山 隆	平成2年~4年	市川義輝
平成5年	関塚貞亨		

また、記述に統一性を持たせるために、上記各委員の原稿は、主として市川義輝小 委員長が中心となって取纏め、横山 隆、近藤 緑、関塚貞亨が編集を補佐し、一応 の完了を見た。

もとより、山岳会の「自然保護の歩み」を完全に網羅した、と言い切る自信はない。 見落としも多いと思うし、記事や著述の内容を、3行や4行にダイジェストするのは 難しい。著者の言わんとするものと違い、的外れのものとなって、著者の不興や不満 を買うケースも多いに違いない。編集取纏めに当たった担当委員の非才をお詫びする とともに、ご容赦頂きたい。

今回は、平成5年12月までを区切りとしたが、あと十一年で山岳会は、創立100周年を迎える。それまでに自然保護の歩みも、世界、日本の歴史を踏まえた、より完璧なものを作りたいと考えている。本欄に対するお叱りとともに、多くの会員諸兄のご意見と、ご教示をお願いしたい。(関塚)



トレッキングからエクスペディションまで。



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、 ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、 アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、 アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への 主催ツアーやインフォメーションを用意しております。 もちろん日本国内の山旅も企画しております。 トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための

航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとに ご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

図8 アルパインツアーサービス 様式会社

東 京 〒105 東京都港区新橋2-13-8(新橋東和ビル5階) ☎03(3503)1911(代表)

名古屋 〒450 名古屋市中村区名駅3-23-6(第2千福ビル8階) ☎052(581)3211(代表) 大 阪 〒550 大阪市西区靱本町1-5-18(本町天祥ビル9階) ☎06(444)3033(代表)

広 島 〒730 広島市中区小町2-28(小町ハイツ5階) ☎082(542)1660(代表)

福 岡 〒810 福岡市中央区舞鶴1-2-8(セントラルビル5階) ☎092(715)1557(代表) 位 台 〒980 仙台市青葉区一番町2-3-20(第3日本オフィスビル7階) ☎022(265)4611(代表) ●先人の遺産を座右の書に!

全18点22册 |本の山岳名著

Щ 北 解題書·特別資料付 企画·編集/日本山岳会 現金価格 195,700円

在庫

日 B

木

風

景

論

心質重

日

日本の近代アルピニズム史上不滅の光を放つ"山岳名著"の完全覆刻 僅少!

1

ランド

ス

ス

日 怒沼 ル 日

尾 ハウィ

۲

鬼

田久吉

会以 Ł Ш 西

7 0

プ

ス

木九

Ш Ш 黑

2

記

板

倉勝

宣

覆刻日本の 本特 第 山別 太山 号 岳資 郎新装増補 会料 100号 Щ 報

H •

[岳名著解題 覆 版全 刻 合 木

ウオル本 氷河と萬年雪の Mountaineer 岳 0 ァ 9 = 省 山 ルプス登山と探 察 伊藤秀五郎 Japanese 今西 and

記 辻村伊 山 小島 村伊助 助 Alps 鳥 检

本アル 本ア 本 部 ル 研 ~ 妥谷 行 Ш ル 究 > 嶽 谷 フ プス スと秩父巡 行 2 志 冠 随 有 松 全 鹿子 高 次郎 恒 想 四 向頭式編 木員 卷 禮 1

日 P

田部重治 鳥 解題書•特別資料2点付 企画·編集/日本山岳会

現金価格 180.250円

信

全20点29册 3本の山岳名著 覆刻

江戸期から昭和期前半まで、現在入手困難な「山の名著」の集大成

0

繪

本

崎

喜八

Playground **角隆上人筆** 特別資料(2) 中 山岳会 解題 卷 岳 に Ш 名著解題 描 書「新選覆 岳 < 礼 ター・ウェ 9 足立 拝 the 鎗 分新 源一郎 報 刻日本 4 日 Far ストン 編 嶽繒 山本山岳 第二〇〇号 集) 中 会 圖 0 村 清 太郎

ナン ア 白先山山 ル 頭 跳 タ ピニ 者 Ш コッ スト 京都帝國大學白頭山 八島売吉 の手記 登 攀 竹節 遠征 作 烏水

澤に逝け 水無 |藏旅 洲 岳 マ + I美觀 ・ラヤ 案内 Ш 水奇 行 る 記 野 勝 吉江 中至 4 全 全二 喬松 東 7 島 木員 京帝 鳥 卷 卷 水 1 水 大 п ヘ學山 島北 魅 海 0

2 岳 狩 艸 多 Ш 紀行 酉 百 賀嶽 鎗 品 掌記 誌 嶽 六 再 種(私家版 他 松浦武 全 緣 = 五 起 記 種 卷 隆上人 隆上 交晁 浦

武

29

石 信迦 名

図説百科 山岳の世界

A.バウムガルトナー・H.ビーベルリーター・ N.ディーレンファース 他著 西堀栄三郎・宮下啓三 監訳

600枚におよぶ美術的かつ科学的に貴重な写真・ 図版類をもとに、自然として、文化としての山岳 のすべてを体系的にまとめた「山学」の基本図書。 B4変型判・310頁 定価18.540円

遙かなり エヴェレスト

マロリー追想

島田 巽 著 エヴェレスト初挑戦の英国隊員として頂上を目ざ したまま還らぬ人となった、若きアルビニストマ ロリーの素顔を、人々との出会いを通して描く。 四六判・294頁 定価1,545円

・定価はすべて消費税込みです。 〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)3294-2221(大代表)

大修館書店

■内容見本呈

1º 2 な テント 卜

テ

東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03(3939)6481 〒175

報社の山と旅の本

岩手 早池 H

本の雪と氷 峰山 わたる撮影の成果をカラーで。雪と氷が形づくる美しい姿に魅せられた著者が半世紀に雪と氷が形づくる美しい姿に魅せられた著者が半世紀に

造形や高山植物を鮮烈なカラーで。 日の四季

円

早池峰山に五百回も登った山男の自然讃歌。 四季 名、200円(〒310 写真·文 高橋亭夫 氷雪による

2、200円(〒310円)写真·文 高橋喜平

最高齢の登山記録を更新した配歳の著者が心のよりどろ

ろ岩手山の全容を写真と文で紹介。

,四季

2、200円(〒310円)写真·文 高橋喜平

湿原の美しい花々、冬の雄大な樹氷など八幡平の素晴ら

い自然をとらえた写真集。

岩手の20名水

秘湯をカラーで紹介。

温泉博士。の異名をもつ著者が、岩手の代表的な名湯

1、34D円(〒310 佐藤 彰著

北東北のアウトドア『第日報社編 名水をオールカラーでガイド。 湧水、滝、溪流。清らかに、時には激しい表情を見せる 1、000円(〒310 Ě Ĕ

岩手 岩手 の30名湯 録したオールカラーの登山ガイド。 登山コース、所要時間、 20名 山

見どころ、伝説・民話などを収 1、340円(〒310 裏岩手山岳会·監修 M

〒020 盛岡市内丸3-7 FAX 0196-23-3712 岩手日報社 出版部 TEL 0196-53-4111代

3、000円(〒380 写真·文 高橋喜平

Й

ラー写真、地図入りでガイド。岩手、青森、秋田のレジャースポット四百八十ヵ所をカ



流行師図付き

最新グルメガイ

部署に常備しておきたいこれ一冊でアナタも名幹事。 を年会 彩年会から接待まで

※料理別・目的別マークつきだから、検索も簡単です。

一厳選20店!オトナは「静かなバー」に一覧20

うなぎ、てんぶら・天丼、洋食・すき焼き・しゃぶしゃぶ・カレー・ステーキ・焼き肉、韓国料理・台湾料理・中国料理・フランス料理・イタリア料理・世界の伝統料理鋼料理・和食・懐石・割烹、魚介料理・ぶく・・・・ 料理・郷土料理・ビアホール・飲み処・味処・おでん・焼き鳥・ラーメン・ギョーザ、どんぶり、寿司・そは・うどん、

講談社MOOK)

ルミナリンをTC ■B5判/オールカラー

アステ米

お湯を注いで15分、 ホカホカのご飯ができあがり

姉妹品 アルファ赤飯

装備を へらせ

> 時間を かせげ

お求めは全国有名スポーツ用品店で……

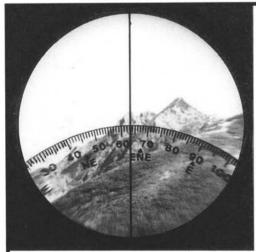




大阪

尾西食品株式会社

東京都港区三田4-15-36 メゾン・ド・聖坂内 TEL 03-3452-4020 FAX 03-3456-3783 大阪市淀川区新高1-15-41 TEL 06-391-5995 FAX 06-396-6156



海上での遺離、酷使と高空 | 万mの低圧に耐えるプロ用です。 その信頼と精度を山の行動と安全にお使い下さい。 カタログ代無料、電話 FAX 葉書でどうぞ。 東京都練馬区上石神井 | 丁目37番|3号

株式会社 石神井計器製作所

電話03-3928-5411 FAX03-3928-5411

手のひらサイズの高精度方位鏡 ハイアイポイント コンパスグラス HB-3

自信を持って山に行こう! 山座同定 迷走脱出に力強い味方です。

広視界10⁻高倍率の明るい視界内に見える目標がそのまま正しい磁気方位です。完全水密 耐圧水深50m 耐高度 1万m 耐寒-25⁻ 軽量78g水面浮上 フォーカスフリー 方位自動追尾

つや消し黒 ¥17,000 LED照明付 ¥19.800 黄橙色メタリック ¥18.000 (消費税別) 送料 ¥600



コンパスグラスは狙った目標を絶対に逃がしません。

旅するあなためサポート隊

パッケージツアー・グループ・トレッキングは心臓がなが、格安航空 券・個人旅行は、デマラパンデスタが、皆様のお手伝いをいたします。

秘境の地へ 世界の山々へ





- 地球の果てまでお手伝い ~ ディスカウント航空券の専門相談室

キャラバンテスタ 東京203-3237-8384代 大阪☎06-362-6060代



お所力 世のト

トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREK -KING が、一般観光部門は SAIYU・TRAVEL がそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。 スタッフは日本語も話せますので、お気軽 にご利用下さい。



シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のパイオニア



ロイヤルネパール航空 旅客代理店

株式

社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5F

☎ 03 (3237) 1391代 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル4F ☎ 03 (3237) 8384 Hb

(格安航空券専門デスク)

〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎ 06 (367) 1391(ft)

キャラバンデスク大阪 ☎ 06 (362) 6060代

(住所間ト) カトマンズ連絡事務所 P.O.BOX 3017, Durbar Marg Kathmandu Nepal.

☎ 221707. 224248

信頼されて60年

山とスキー用品専門店



四谷本店 〒160 四谷 1 - 20 相田ビル TEL (3351)7432·1912



山と山スキ_の専門店

クレッターザック キスリング 夏冬用テント イギリス、オーストリア・ オリジナルセーター



東京都文京区湯島 3 - 38-9 (全) 113 片桐理一郎 Tel 03(3831) 1794 FAX 03(3831) 6680

信濃毎日新聞社 出版部

0262 • 36 • 3377 TEL FAX 0262 • 36 • 3370

日本の屋根』の全域をルポ

、各巻(菊四変)●三、五〇〇円

定価

の豊かな自然と多様な民俗を、

岐阜、

富山、

られた山系(船窪岳ほか)▼高瀬溪谷▼ 峰▼槍ケ岳▼飛驒の山々▼山上の別天 高地周辺の山々▼乗鞍岳初夏▼穂高連 ▼日本の屋根(槍・穂高のパノラマ)▼ト 〈主な内容〉 常念山系▼梓川溪谷▼越年登山▼シー 地(雲ノ平ほか)▼裏銀座を行く▼忘れ ◎上巻=二一二頁、カラー一七六枚 人ンを待つ(高山祭り、涸沢ほか)

-L▼冬の黒部峡谷▼白馬スキー事情 の山々(薬師岳ほか)▼冬のアルベンル 山々(朝日岳ほか)▼剣岳▼立山▼西部 下ノ館下ほか)▼後立山連峰▼北端の ▼開山祭▼雪形▼黒部峡谷(黒部源流、 ◎下巻=二○八頁、カラー一八四枚 北アを守れ・座談会ほか

中央アルプスと

伊那谷の自

新潟の四県にまたがる広大な北アルプス 新聞記者がペンとカメラで紹介

税込み〉



編集して贈る。

自然を総合的に

点のカラー写真で紹介。山れる南アルプスの現在を60160 とらえた新聞連載企画を再 民俗、

AB判/一七六頁/定価二、八〇〇円

本州最後の秘境。を紹介

●A5判/二二七頁/定価二、六〇〇円伊那谷自然教育研究会 著 中アと伊那谷の自然ガイド

いの伊那盆地にかけて、 中アの高山帯から天竜川沿 様な地形、 気象、 植物相 多

を総合的に解説

白水社

101東京神田小川町3-24 電話 03-3291-7811 (価格税込)

ヒマラヤ文献目録

Revised & enlarged

Catalogue of the Himalayan Literature



薬師義美 [編]

▲ヒマラヤ、チベット、中央アジアの登山と探検を 中心にした, 世界的に定評ある文献目録の大増補改 訂の新版、欧文図書7601点、邦文1797点に、代表的 ロシア語文献も加え、内容は10年で倍増、図書名一 索引など、さらに工夫をこらし、ほとんどの文 献に英文概要を付す、30年におよぶ集大成、

発刊特別記念定価▶55,000円 (特別定価提供期限'95年4月末日まで)

- ▶B5判 1320頁
- ▶定価58,000円

240

イザベラ・バード、高梨健吉訳

・平凡社・山と旅の本・

461

542 543 555 544 472 550

ットの報告

《全3巻》 (全2巻) 庄田元男訳 アーネスト・サトウ

沙出。 ●定価1-2、781円・2-2、884円(税込)サトウの残した膨大な日記から、日本旅行にかかわる部分を たオーストリア人地理学者の記録。®定価3、090円(税込)一九世紀後半、中国・日本など東アジア各地を観察・踏査し 小谷裕幸はが沢 大林太良監修

日本エッセイス 戦前、台湾にとS 、台湾にとりつ

(れた学問的足跡を遺した男の波瀾万丈。)

台湾に魅せられた

Ш 崎

柄 根

ナチュラリスト

(全2卷) フィリッポ・デ・フィリッピ編

温泉紀年 泉町の様子をいきいきと描く。 ②定価2、369円(税込)江戸後期の有馬・熱海・箱根・草津、今はなき湯倉などの温 板坂耀子編 イッポリット・デシデリ

ワンダーフォーゲルぶりを翻刻。 ◉定価2、266円(税込)おもしろ人間江漢の残した、江戸後期の日本旅行記。愉快な 司馬江漢/芳賀徹・太田理恵子校注

遊

派した記録。 。●定価1=Q、472円・2=1、854円(《全2巻》 橘南谿

248

249

の克明な記録。本邦初訳。 ・定価Q、BB4円(税込)明治初期の日本を、東京から北海道まで旅したイギリス女性 宗政五十緒校注

186 記行』自叙伝『夜職草』を収録。『北越雪譜』の著者による信越 夜 °秋山 ●定価2、884円(税込)網探訪記。併せて『苗場山 木牧之/宮栄二校注

《東洋文庫》

東京都目黒区碑文谷5-16-19/203-5721-1234/振替00180-0-29639

全国各地の美味・珍味を満載。

取り寄せて味わうもよし、

贈り物にもよしの、

便利な産直ガイド。

北海道から 沖縄まで、代表的 沖縄まで、代表的 が名産と珍味を都道所県 な名産と珍味をおいしいも 別に紹介のを取り寄せたいとき、用の力 のを取り寄せたい間舎の問 元、お親馨などの贈答用の力 元、が先てのして、 かけとして、旅先でして、 おみやげのカイトとして、 おみやげのカイトとしる いろいろに活用できる いろいろに活用できる

全国の歌うまいもの

¥1,500

●全国のうまいもの180を厳選して紹介/

北海道=天然貝柱・新巻鮭/青森=八戸するめ/秋田=きりたんぽ/岩手=卵めん/宮城=白石温麺/山形=牛肉さくらんぽ漬/福島=天然なめこ/新潟=献上鮑/富山=鱒ずし/石川=ごり佃煮/福井=小鯛ささ漬/栃木=揚巻湯波/群馬=水沢うどん/茨城=だるま納豆/千葉=鮒すずめ焼/埼玉=岩茸/東京=くさや/神奈川=梅花はんべん/山梨=ブドウ酒/長野=馬さし/静岡=マスクメロン/愛知=八丁味噌/岐阜=筏ばえ/滋賀=鮒ずし/京都=西京味噌/大阪=塩昆布/奈良=三輪そうめん/和歌山=ほろほろ鳥くんせい/兵庫=いかなご佃煮/広島=広島かき/鳥取=松葉がに/島根=出雲そば/山口=ふく一夜干/香川=さぬき手打うどん/徳島=すだち/高知=酒盗/愛媛=五色そうめん/福岡=明太子/佐賀=わらすぼ/長崎=からすみ/大分=かぽす/熊本=辛子れんこん/宮崎=焼やまめ/鹿児島=さつま揚/沖縄=パパイヤ漬 他多数

富士書店 東京都文京区本郷 4 丁目 1 -14 電話03-3814-0498

頂

「広島 和 山の会」を舞台 成著 7 1 部 初の 0 K 丰 E 定価250 メント。伯耆大山 0

からの自力生還と心優し 抜けてきたトップ・クラ 1 き勇者たち との 交遊 各2500 録 いをも 収

80

る。

凍り 4 登 論 批

登山を通して極限状況の人間を鮮やかに活写世界の高峰を舞台に描く山岳風雲録。自らの ざる者たち 底 出 小 щ チー 順応力と直 ム論、 極限にきらめく生と死 シェ 感力ル など、 打 事 所件 登 ШК 法

傷

(定価は全て税込)

価6500 幼前

大な日記と記録でつづる。ルワに逝く。探検への想いレベレスト登項、北極点踏破。

と葛

◎藤を、

初少期から

円のヤ

南

極行

直

西 知

堀

榮三

郎選 る山

集第2巻

定

O

Ř

な

知

な

3 価350

書房刊)に

の論客による辛口

I

.,

セイ。

編旧

| を増に版(容

補

(筑

摩

版

生と死のあるところ

1.黒澤明

今西

錦

司

論等17

高

無

宏遺

集 〒162 東京都新宿区神楽坂6-58 佐藤ビル2F 成判 TEL 03-5261-0052 FAX 03-5261-0054

よきテントの最高 **ビすヨシダテン**

1978年 植村直己北極点単独旅行

1978年 日本大学北極点遠征隊

植村直己冬期エベレスト登山隊 1981年

1981年 明治大学エベレスト登山隊

1981年 早稲田大学K2登山隊

1984年 第26次南極観測隊

1985年 和泉雅子北極点遠征隊

1985年 第27次南極観測隊

1987年 風間深志北極点遠征隊

日本テレビ、チョモランマ、報道隊 1988年

1989年 和泉雅子北極点遠征隊

1989年 大韓民国北極点遠征隊



小さな店の大きな自信!

株式会社

〒167 東京都杉並区桃井1-3-3 ☎03 (3399) 2548•FAX03 (3395) 4655

大谷定雄

北アルプス白馬讃歌-◎蘇岛甲

オレル・フュスリ社

編/岡沢祐吉 訳

定価1957円

イスの山々

一〇〇山案内人の体験記

定価2472円

越山岳協会

カール・M・ヘルリッヒコッファー

ıE

著/譚佐強・田川常雄

共訳 定価2266円

中国登山史話

山案内人の手帳より

定価といるの円

写

選田

ナンガ・パルバ

I

ト回想一般いと勝利

定価1957円

著/岡沢祐吉 訳

定価1957円

実際のドラマチックな体験をもとに、世界屈指のアルビ トたちが綴った感動の物語。 〈各巻A5判〉

ジェームス・アルマン マックス・アイゼリン I 著/横川文雄 著/丹部節雄 ソ登頂 ト登頂記 訳

定価1545円

ールーシルクロードの城塞 訳 定価2575円

村俊介

編著

定価2575円

A・アルダン・セミョーノフ 著/田村俊介 訳 遙かなる天 畄 探検家セミョーノフ伝ー天山に魅せられた

定価2575円

不朽の名著、復刻なる

3 巻

定価心の口口円 小島六郎

監修

"遠い頂"ヌプツェ ―北西峰初登頂の記録 定価2575円

登步渓流会

モ・リー世界で最も美しい山ー ムネマチン初登頂 著/織方郁映、 橋本 定価2575円 信 #

ルハルト・レンザー

* 北 大 0 根

豪華写真集

Ш

A4判変型上製/定価7107円ベースボール・マガジン社 訳 ベースボール・マガジン社中国新疆人民出版社 編

アムネマチン

アラスカからニューメキシコ州 までうねる分水界 大自然と野生動物の秘境 -山脈の魅力を探る写真集。

ガルト B4判上製厂定価6.000円

録。

よって、

湖底に沈んだ銀山への鎮魂となす!



北魚沼郡長の発金による銀山探検隊が組織され 背三つ目綴り (225×1531) マット入り A4変型判上製カバー装 (287×210 %) それぞれの専門家32名、案内人と人夫を含

た。

世界の山岳 登山教本 自然科学 料

山岳研究会

登山ハンドブック・シリーズ

各巻A5半

定価1009円 定価100の円

定価1009円

定価ーロロの円

定価100の円

山登りのための体力トレ 国登山 編/中国人民体育出版社 監修 ハンドブック

上越山岳協会 中

新書判/定価855円 ĺ

定価~854円 A5判 定価4944円 越山岳協会

体育・スポーツ総合出版 禁払ベースボール・マガジン社

〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(3238)0181※宅配も可(送料380円)

A5判上製 串 曲 孫 定価2800円

高に騒がしく叫ぶのではない、静かに低く響く声の中に人間登らない山だからこそ、自然の真の姿が見えることがある。 自然の調和を願い、 山を愛する人の確かな想いが秘められている。

高原の花物

A5判上製/定価2800円 手塚宗求

局原の野鳥物品 手塚宗求著 むつみあいを淡々と綴った珠玉のエッセイ集!のくしみ、花を見ては想起する四季おりおりの自然と人間との霧ヶ峰高原で山小屋を経営する筆者が、高原に咲く野の花をい霧ヶ峰高原で山小屋を経営する筆者が、高原に咲く野の花をい

切ない思い出を語った山住みの精神の記録。 しの日常の中に、出会った人や遭遇した出来事と、懐かしくも にの日常の中に、出会った人や遭遇した出来事と、懐かしくも 北原節子

がしい自然との共生を端正に謳い上げる。 『俗を訪ねる著者のあゆみは、大地に深く根を下ろし、すめない息子と共に高原の風に吹かれて歩き、移り住んだ土 が地 すの

A5判上製/定価2800円

新編

A5判上製/定価2800円 手塚宗求

形は山 成史が見事に展開し 幕らしのよろこびと悲哀、自 山の生活者として幾星霜を過して来た一人の山男の精神 、抒情の山並が果てなくつづく。 然の表情と驚異を描いた本書に 0

女め、 出岳 峰 紅葉と雪の組み合せ、 写真における雲の重要な役目を面白く描いた表題作をはじ 印象記 味っ 槍や穂高の登攀、さらにモン きない話題と写真を満

三宅 A5判上製/定価2800円 修

大冊『山と詩人』

- 等、ゆかりの詩人たちの山と自然の詩を紹介解説。 立原道造、尾崎喜八、串田孫一、八木重吉、鳥見迅彦、辻まン冊『山と詩人』の著者が、自らの山体験を織り込みながら、

辻まこ

Ł

A5判上製/定価2800円 秋

じ、詩誌『地球』を主宰するかたわら山登りをつづけてきた抒れオ・ロマンチシズムを提唱して戦後現代詩に新たな一石を投 情詩人による。詩と山の五十年。 山の詩16篇を収録。

が、「食」にこだわりつつ自然とともに生きることの素晴らしさ、牧師にしてエッセイストクラブ賞受賞エッセイストである著者 A5判上製/定価2800円 太田愛人

農への回帰、野に生きる人々を語る最新随想集。

北の人地から二十分物語 定価2800円 本の人地から 川と水をめぐる 竹田津 宝 実

動物写真家である著者が、川と水を中心とする環境の劣悪化北の大地、北海道に移り住んで30年。獣医でありキタキツネ すすむ日本へ発信する、環境保全に向けた熱い提言。 手塚宗求 劣悪化が

四

価1800円

山 に

高原の音楽譜 小屋の主人が綴ったもうひとつの山小屋物語。すにし、触れたメロディーや音楽の思い出に寄せて、高原のかつての古き良き山小屋の青春時代から現在まで、四季折々 六判上製/定

私のヒマラヤ紀丁茂市久美子著 文化を、 ネパール、パキスタン、チベットなど、ヒマラヤ各地 「ひろすけ童話賞」受賞の新進の童話作家がたどった、 新鮮な語り口で描いたトレッキング紀行。 おたしの 記華集 田中清 光 編

四六判上製/定価1800円 インド、 の風習や

〒101東京都千代田区三崎町3-10-10本03(3238)0181※宅配も可(送料380円)

害



SINCE 1975

mont-bell

FUNCTION IS BEAUTY

苛酷な自然状況においてこそ、 最大限に能力を発揮する モンベル アルパインクロージング。

本 社 ● 大阪市西区立売堀 | 丁目6-17 💋 06-53|-476|+世 〒550 東京営業所 ● 東京都渋谷区恵比寿南 | -18-6 💋 03-3760-213|+世 〒150



×15センチ)で空から撮影。 日・英・米・独・印・台・韓との共同出版 前書=クリス・ボニントン 解説=小野有五 郎

AYAS FROM THE AL

☎03(3436)4055<営業部>

パール・ヒマラヤの著名峰を、小型飛行機を駆使し、 ライマーのクリス・ボニントンが前書を寄せています。 いるので迫力に満ちています。 エヴェレスト、ローツェ、マカルーなどの八○○○メートル峰をはじめ、 心いがけないアングルから写された姿には新鮮な驚きを覚えます。 ャチュン・カン/チョー・オユー/ 写真は全て左右56センチの見開きで収録されて また日頃見慣れた地上からの写真と異なり、 自作のワイドカメラ(6

ジェ・ラクバ/ガネッシュ/マナスル/ヒマルチュリノ リサンカール/シシャパンマ マカルー/エヴェレスト/ローツェ/アマダブラム/ギ 収録した主な山》カンチェンジュンガ/ジャヌー ンナブルナノ ノマチャフチャレノ /ランタン・リルン/ドル /タウラギリほか ノメンルンツェ/ガウ

定価4200円(税込) サイズ-240×280ミリ/カラー96頁(写真45点) 好評発売中!

山の絵はがき	1		
さわのひとし		坂本直行の本	
山の便り(カラー6枚)	1 000円	わたしの草と木の絵本	
エッチング(モノクロ8枚)	The second secon	1,800P	
センチメンタル(モノクロ8枚		雪原の足あと	
	/1,20013	3,914F	
足立源一郎	4 000TF	原野から見た山	
山 の 絵(カラー12枚)	1,200円	4,300F	
\$ Contribution - 28,527		山・原野・牧場	
島田 巽		1,800F	
山稜の読書家	4,017円	淡彩絵はがき	
山・人・本	2,472円	1集(再版)カラー8枚 800F	
三田幸夫		2、3、4集 カラー6枚 各 600F	
わが登高行 上	3,914円	Marian et al.	
下	4,635円	渡辺兵力 山旅の足音 1,442F	
小谷隆一		H/100 - 100	
山なみ帖	3,296円	自然流スキー考 1,600F 川崎精雄ほか	
山崎安治			
登山史の発掘	2,575円	静かなる山 正 1,751F 続 1,854F	
登山史の周辺	3,914円	SANGER REPORTS AND SANGE	
織内信彦	THE PERSON IN	望月・岡田 共著 藪山辿歴 1,545F	
快晴の山	2,575円	山田・横山 共著	
加藤泰安		青空と輝く残雪の山々 1,339日	
森林・草原・氷河	2,575円	木南金太郎	
藤島敏男	-4-1-1-1	日本の山登り記 1,545	
山に忘れたパイプ	3,296円	小方全弘	
望月達夫	0,23013	続ブータン感傷旅行 1,545	
A The second sec	1.957円		
折々の山	1,957円	グリンデルヴァルトの山案内人	
忘れえぬ山の人々	1,957	ブラーヴァン 3,914	
渡辺公平	0.000	カンチェンジュンガ縦走	
山は満員	2,266円	カンチ登山隊 5,150	
初見一雄		遥かなる未踏の尾根	
すこし昔の話	1,236円	東海支部隊 4,944	
伊藤秀五郎		ナンダ・デヴイ縦走1976	
北の山 続篇	2,781円	デヴィ登山隊 4,017	
山の風物詩	1,442円		
仙の本 茗江	奚堂	■101 東京都千代田区神田駿河台2の電話03-3291-9442 FAX03-3295-204振替 ロ座00180-2-24723	



記

付いた(二〇五頁下段中央)。校正には万全を期したつもりであるが、チェックしたところ、「観劇なさった」とあり、初めて誤植に気が何人かが目を通した後に、ある人が何となく違和感を覚えて原稿を である。 まだ漏れがあるかも知れない。その節はただただお許しを乞うのみ 激なさったのと同じ所で、それを見た」とあった。読み合わせもし、 うになった。時には読み合わせをしても気付かないようなものがあ 口同様の変換ミスが多く、とんでもない文字が打ち出されてくるよ なった。しかし、それに伴い誤植の性格も以前とは異なり、 に活字を一字一字拾うという場面はない。電算写植により、 口と同じように文字の差し替え、 頭が痛い。本号での例をあげれば、ゲラには「ハムレットを感 近の印刷技術の発達は目覚ましいものがあり、 追加、 削除の迅速な処理が可能に ワープ

感謝申し上げます。 にわたって培われてきた本誌の重みに耐え、何とか責を果たすこと の利く場所に到達するまで、今少し時間が欲しい」と書いたのだが、 自分の現在位置すら分かっていないような状態とあっては、見通し 最初の仕事となった第八十六年の当欄に「ひたすら藪を漕いできて、 てしまった。どんな『山岳』とすべきかについて、編集子にとって 終わることになる。この間は超多忙のままにあったという間に過ぎ いまだ藪の中の彷徨から抜け出せない思いでいる。創刊以来九十年 できたのは、 ・この号をもって四冊目の編集となり、担当理事としての仕事は 執筆いただいた皆さんのご協力の賜であり、

委員をお願いし、また、校正には春山政衛、 編集に当たり、 高遠宏、 関塚貞亭、林栄二、中條昌子の各氏に 田村典子両氏のご助力

> 山岳 第八十九年 九九四年十二月三日発行 (通巻 四七号)

法社 人団 H 本山 岳 会

五〇〇円

発行所

東京都千代田区四番町 Ŧi 四

振替口座 サンビューハイツ四番町 東京三二六一 東京三一 局四四三二番 四八二九番

発行人 藤 平 IE. 夫

編集人 南 Ш 金

技

印刷所

株式会社

報

発売所 振替口座 電話 東京三二九一局九四四二番 東京都千代田区神田駿河台二一 株式会社 東京八一二四七二三番

を禁じます。 写真および地図の無断転載



大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

TLAS TREK



ビギナーのための冒険旅行から、未知の魅力を 秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、 それぞれのニーズにお応えし、新しいユニーク な手づくりの旅をコーディネイトします。

Manaslu



Sagalmatha

Oomolangma



Nanda Devi



Kangchenjunga

Namcha Barwa

☆世界各地、日本の名峰へのトレックツアー、各種手配旅行、国内外航空券を取扱っております。

※まことに残念ですが、全ての情報はここに載せられませんので、ご要望は直接お問い合わせ下さい。 詳細パンフレットをご請求下さい。ご氏名、ご住所、お電話番号を明記し、お申込み下さい。お電話でも結構です。

数アトラストレック なんでも相談 ☎03-3341-0030

〒160 東京都新宿区三栄町23番地

東京海上火災保険株式会社代理店 (社)日本旅行業協会正会員 運輸大臣登録一般旅行業第1167号

The Journal of
The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 89

1994